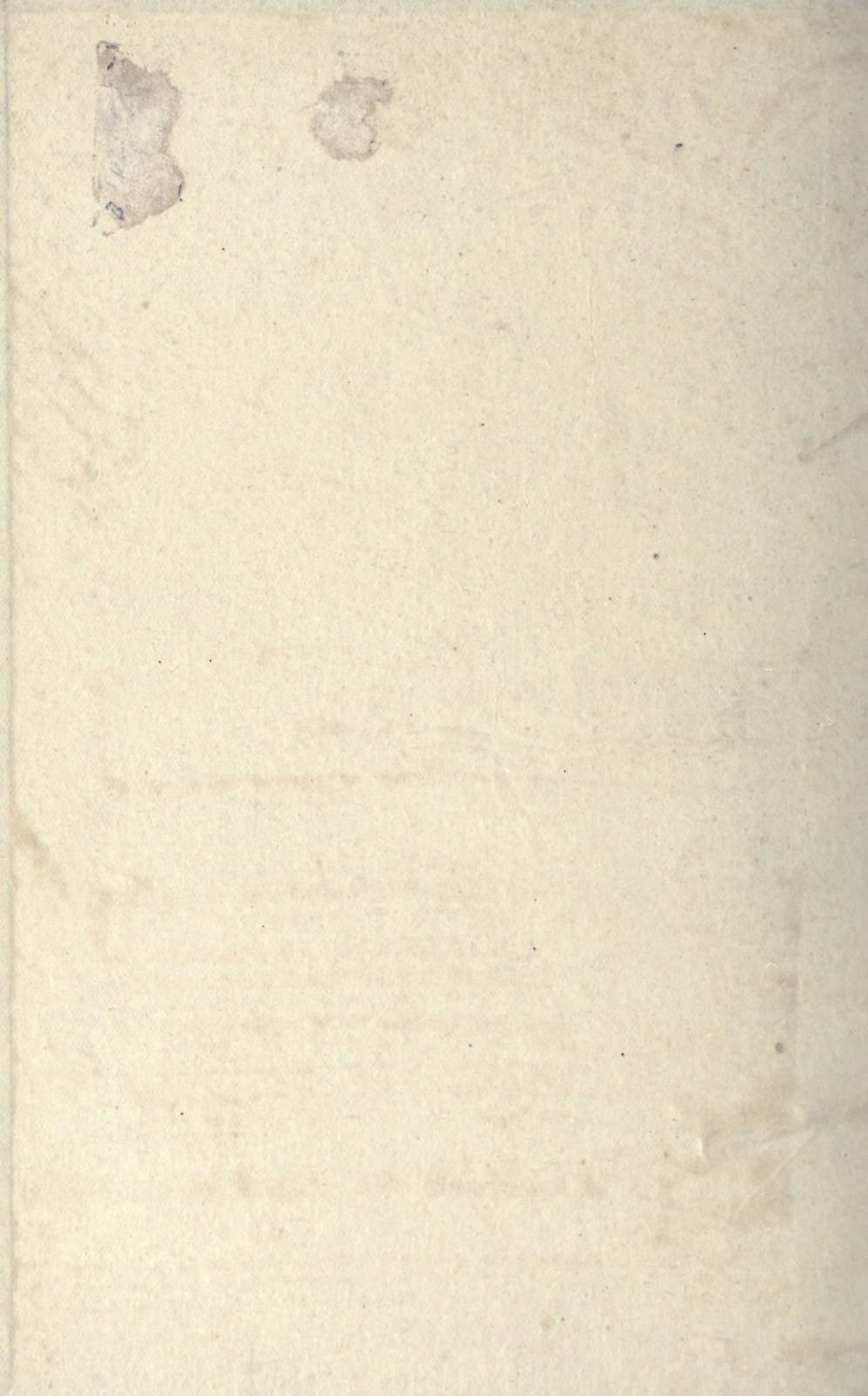


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02989 8707



10

10

10

發行所

一丁目十二番地
東京市京橋區南船場

會館
合資 吉川亞文館

印刷所

内長田 廣澤大造 印刷所

東京市京橋區南船場一丁目三番地

印刷所

本 間 幸 民

東京市京橋區南船場一丁目三番地

發行所

吉 川 半 子

合資會館吉川亞文館九本

東京市京橋區南船場一丁目三番地



明治三十一年十二月八日發行
東京市京橋區南船場一丁目三番地

吉川亞文館印

明治三十九年十二月五日印刷
明治三十九年十二月八日發行

百家說林續編下二

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

合資會社吉川弘文館代表者

編輯
發行者

吉川半七

印刷者

本間季男
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所

內外印刷株式會社分工場
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

發行所

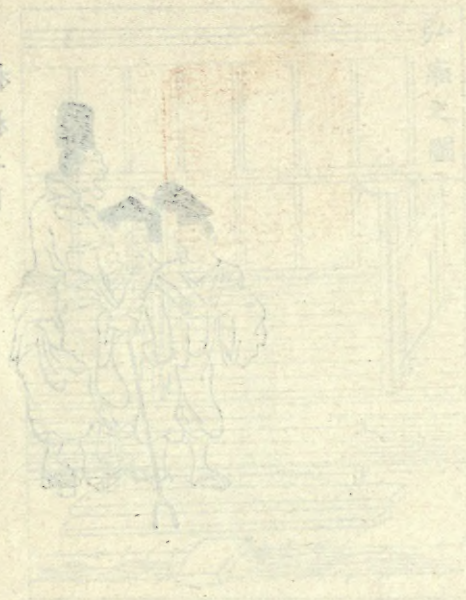
東京市京橋區南傳馬町
一丁目十二番地

合資會社
吉川弘文館



梅窓筆記後付

梅窓筆記



百家說林續編下卷之二畢

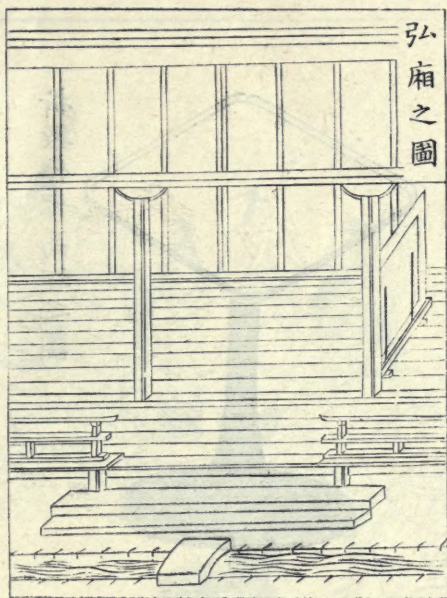
百卷集林辭賦下卷之二

拐杖之圖

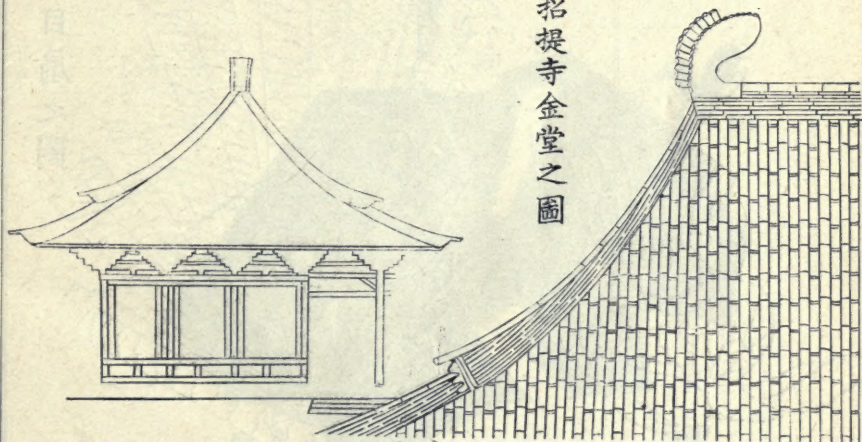


梅窓筆記後付終

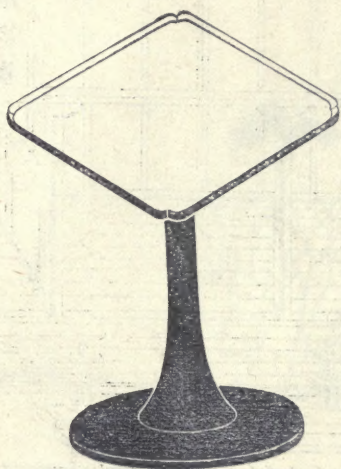
弘廂之圖



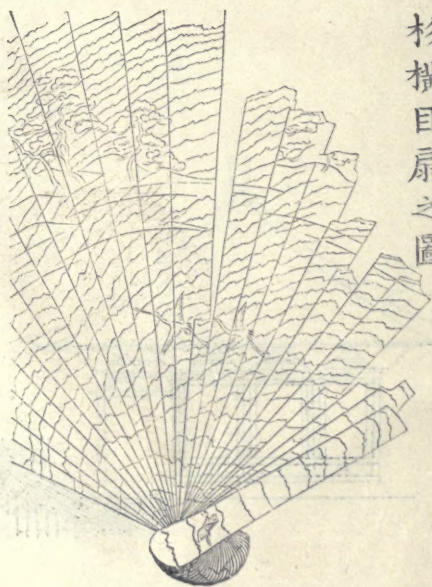
唐招提寺金堂之圖



折數作付高坏之圖



杉横目扇之圖



鉢額之圖



拍拵之圖



鎌倉右大臣真影



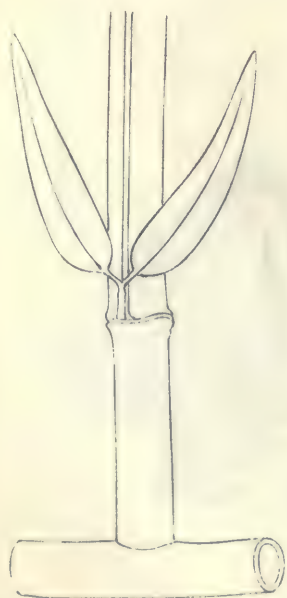
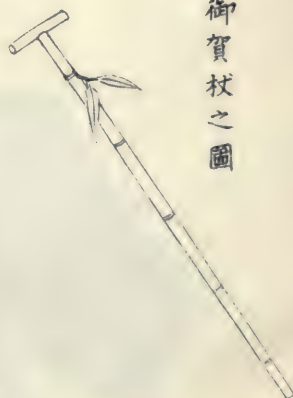
褐衣蠻繪之圖



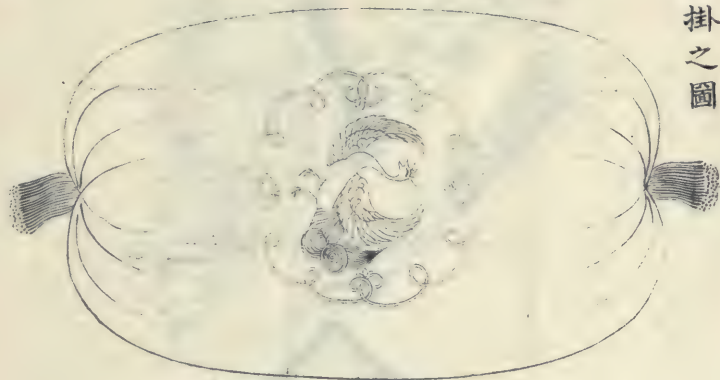
繡蠻繪之圖



御賀杖之圖



御寄掛之圖



古画馬腹帶之圖

平調板之圖

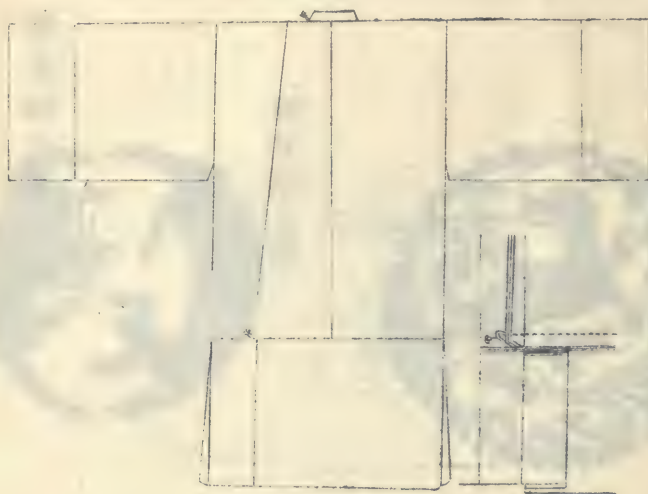


品鐘本

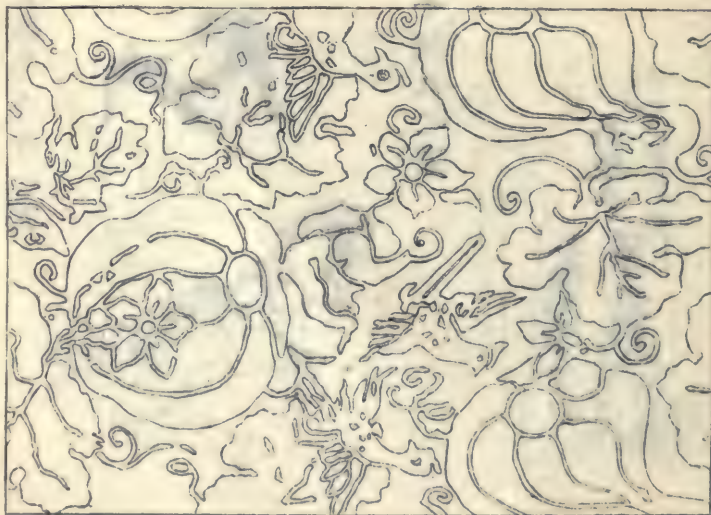
調子平調

享徳元年中
日影
竹山院
持齋

同後



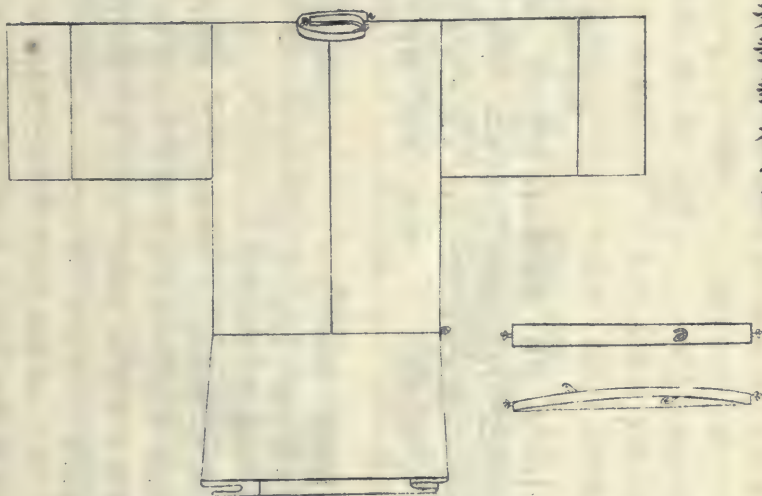
同紋



箏柱裏之圖



新鞆鞆袍之圖



たひに波をたゝみかせ杖のふたまたなるにすかつて出来給へりトアリ伴大納言書卷物ニ老人カセ杖ニスカリタル圖卷尾ニアリ

服中トイヘドモ神號ヲ書コト宣胤卿記文龜二年二月

十一日甲寅天晴侍從三位兼俱所望之三社託宣兼天

神名號中三社託宣服中不可苦之由兼俱卿演說

任彼商量同月十七日三社託宣一幅兼永朝臣所望

書之トアリ重遠甲乙錄第八ニ垂加曰世所謂三社

託宣非託宣也贊也天照太神嵯峨天皇宸作八幡弘法

大師春日ト部兼延之作ト云リ是非ヲシラズ託宣ニ

ハアルヤジケレトモ贊ナリト云モ甚シキコトナリ

予世尊寺家ノ三社託宣ノ書法ヲミタリシカ天照太

神宮八幡大菩薩春日大明神トナラベテ横物ノ表粧

ニスルヤウニカケリ神號ヲ三神トモ平頭ニシテ託

宣ト云詞ヲ一字低書シテ二行ニカケリ當時ノ持明

院家入木ノ託宣書法ノ傳ハコレニ違ヘリ武家ノ具

足櫃ニ入ル、モノナリト云リ

色紙ニハ名ヲカ、スモノトミユ小右記長徳五年十月

廿八日取右大辨行成書屏風色紙形花山法皇主人
相府右大將右衛門督宰相中將源宰相和歌書色紙

形皆書名後代已失面目但法皇御製不知讀人左府歌書左大臣件事奇怪事也トアリ

親長卿記文明十二年十月廿一日晴今日日本紀御談儀

御讀書也此事此間以民部卿被仰兼俱卿御侍讀

可遣勅裁之由被仰元長去十三日書遣之トアル

民部卿ハ白川忠富王ナレバ吉田家白川家此比ハ

穩ナルコト、ミエタリ又忠富王ハ雅兼王ノ次男ニ

テ若年ノトキ後土御門院ニ近習シ兼俱卿ヨリ十八

神道ヲ傳受セラレシトモ云リ元長ハ親長卿ノ子ナ

リ當時ノ亂舞ノ謠曲ニ祝言ナドノトキウタハザル禁句

或ハウタヒ替コトアリ古代モノノ類アリ中右記嘉

承二年十一月廿三日取神樂薦枕之中阿美於呂之ト

云所ハ阿美於所之ト歌也於御前於呂之ト云詞

可避之故也

ヤ

河海抄ニ日本見在書目六藤原佐世撰トアリ書目ハ世ニ全篇ノナカリシモノトオモヒシカ大和寶生寺ノ印アル古本粘葉一冊書肆カ買得セシヲミルニ五六百年前ノ古本

日本國見在書目錄

正五位下行陸奥守兼上野權介藤原佐世奉

勅撰

トアリテ部門ヲ立テ書目アリ佐世ハ藤氏儒士ニテ宇多醍醐ノ朝ノ人ナリ希代ノ書ナリ得テミルベシ予寫シオカサリシハ遺恨ナリ

太平記

卷

渡邊氏ノ家ハ破風ナシニ東屋ナリトアリ四

阿ハ破風ナシ兩下ハ破風ツクリナリ唐招提寺ノ金堂四阿ツクリナリ卷末ニ圖アリ

河海抄

藤の葉

昌泰元年十月競埒記

取要

典藥頭阿保朝臣

常世着ニ故弊青白椽衣隨ニ御藥辛櫃云々コノ辛櫃イカナリシヤ可考

舟橋家天神七代神號事ヲカケル書ニ云

奥書天文十年十月朔日環翠軒宗

尤アリ

一天神七代神號事

吉田說ニハ天地自然ノ御名ニテ神號ノ義理ヲ不付之事實ノ習也後成恩寺殿御說ニハ神號ノ義理ヲ付ラル暫其義ヲシルシ進スルモノ也トアリ此吉田家ノ說ハ實ニ古傳ナルヘシ又谷重遠甲乙錄第七ニ有レ形神有レ社無レ形神無社或有社後世所爲也此經晃之說ナリトアリ經晃ハ內宮中川荒木田經晃神主ナレハ此コトモ神宮ニ古傳アルコトナルベシ當時ノ書家ニ御家様ト云コトアリ蹇驢嘶餘云一世尊寺清水谷ハ能書ノ家也是ヲ家様ト云也舊院様ヨリ後圓融院家様ヲアソバシ改テ勅筆ガクヲイカニモ風流ニアソバシ出シ諸家ニ學之トアリ勅筆ト云ハ宸筆ト云コト、ミエタリ後世コレラニヨリテ勅額ト宸筆ノ額ト同事ノヤウニナリタレドモ差別アルベキコト也名物六帖通鑑周紀世宗勅天下寺院非勅額者悉廢之註胡三省曰勅額者勅賜寺額一如慈恩安國興唐之類按勅許建寺則賜額謂之勅額非宸筆扁額也トアリ分明ナリ

平家物語第三リうのこん清盛高野へのほり大たうををかみおくのゐんへ參られけるにいつくより來る共なく老僧のはくはつなるかまゆには霜をたれひ

護百邪遂去急急如律令勅

右如此朱ニテ書テ産ノ月ニ入ヨリ産所ノ北ノコカ

ヘニオスベシ香ヲ焼テ三返コレヲ誦ス

白禿ノ藥鍼博士丹波康賴醫心方第四裏書云

白禿

大黃

一硫黃藥
坏大

又方

同味噌同麻油同酒同酢同

貓頭灰

元者鳥
頭灰

竹虫屎此二味等分合テ男ニハ雌鶏女

ニハ雄鶏ノ冠ノ血ヲ入テ攪合テ受テホロ／＼トシ

テスリヌルヘシ但先髪ヲヌキステ後桃木ヲ煎テ瘡

ノフタヲ洗ステ、此藥ヲヌルヘシ度々スヘシ

諸神有位無位ノ差別ナク正六位上ト云コト文德實錄

仁壽元年正月甲戌朔庚子詔天下諸神不レ論有位

無位ニ叙ニ正六位上ニ類聚三代格嘉祥四年正月廿七

日大政官符ニモアリ則仁壽元年ナリ

伊呂波字類抄ニ吉田社

永延元年山陰中納言奉鎮之春日
大原野奉崇之以爲正體

アリ今モ神ヲ祭ニ此定ニテ神ヲ正體トシテ崇奉ハ

穩ナルベシ

至尊ノ有馬ノ湯召シ御湯治ノコト百練抄正元元年十

月五日乙亥自今日主上御湯治被レ召ニ有馬溫泉湯

トアリ

拾芥抄ニ淨衣色アリ青黃赤白黑ソノ修法ニヨレリ山

槐記治承二年十月廿九日

取

酉剎座主宮著黃淨衣令
懸五帖御製

給參給トアリ

禁秘御抄ニ清涼殿ノ條弘廂板九枚トアルハ孫庇ノ幅

一丈ノトコロヲ兩方ノ長押ヲ五寸ツ、ニシテ一尺

ノ板九枚ニテ張シヲ云ナリ卷末ニ圖アリ

世俗ニ渡唐ノ天神ト云モノ臥雲日件錄文安三年四月

十五日

取

翌日眞智客來訪曰我多天神挿ニ梅一枝肘

懸ニ小袋トアリ

銀柳宮アリ權記長保二年十一月十六日己丑詣左府

奉ニ檜扇卅枚

以銀楊
宮入レ之

賀茂ノ姓ヲ慶滋トスルコト權記長保六年九月廿五日

取改ニ加茂ニ爲ニ慶滋トアリ

十三回忌ノコト東鑑寛喜元年十二月廿五日

取

故右大臣

家十三年御追善也行西奉ニ行之正日雖爲明年正

月廿七日有沙汰被ニ引上レ之トアリ

山科言繼卿記天文十四年六月二日暮々衣紋予束帶藤

黃門エ罷向ウシロ直シ參内トアリ藤黃門ハ高倉殿

ナリコノ比ハ衣紋ヲ搔ニ兩家ノ差別ナカリシニ

吸物ト云コト吉田社家鈴鹿家記應永六年六月十六日

嘉定^{中略}吸物^{ウツラ}六島^{トアリ}又中山親綱卿記文祿四年極月

三日丑晴早天醍醐^令登山^{中略}其後理僧正江行向

了從三門主二献有^レ之其後飯被^レ出於^レ理スイ物

同一献其後飯有^レ之其後水本江行着了門主理第子

來儀スイ物有^レ之飯相伴トアリ

産婦ノ産ニ臨メルトキ腰抱ト云コト室町殿御産所日

記永享六年二月十三日^{取要}御腰懷ト云コトアリ

産屋ニ借地ノ文ヲ押コト山槐記治承二年十二月一日

辛卯天晴中宮御産御祈^{中略}典藥頭和氣定成朝臣參入

押^レ借地文於御産所母屋^二無^三其所^一仍北庇北上長押

押^レ之件文先書年號大歲次書中宮職次書^二借地文^一

當月朔日押^レ之也コノトキノ文ハ知ラテドモ借地

文續添鴻寶秘要鈔卷之六

續添鴻寶秘要鈔卷之六

婦人門

産婦借地法

坐月

體玄子借地法咒曰

東借拾步 西借拾步 南借拾步 北借拾步

卑聊

多	未	上	下	日	金
申					
庚					
酉					
辛					
戌					
乾	亥	壬	子	癸	丑

坎北

震東

上借拾步 下借拾步 壁方之中四十餘步安産借

地恐有穢汚或有東海神王或有西海神王或有南海神

王或有北海神王或有日遊將軍白虎夫人遠去十丈軒

轅招搖舉高十丈天符地軸入地十丈令此地空閑産婦

其^{産所該}錄作某氏安産^{産所該}錄作某氏無所妨礙^{産所該}錄作某氏無所畏忌諸神擁

社人ハ幼少ニテ元服ヲ加コトヨキニヤ康富記寶德元年十一月十九日甲子大原野祭娶神主未加首服着淨衣勤祝師役云々十二三才之童形也云々不可說次第歟トアルニ春日社司師盛卿記應永十年十一月十四日昨日故若宮神主祐深次男令元服實名祐富生年五才云々トアリ大原野社上古無神主故臨期ト定其人ト江次第ノ頭書ニアリシガ此比ハ神主ノ出來シトミユ

官家ニ隨フ者ヲ長袖ト云コト伊勢山田福島家ニ藏スル古文書云

汝事長袖之條自然非分之儀申試候輩雖有之不可承引間北畠中將任一札候間鍋次郎福嶋家可相續永代不可有相違者也

天正五六月廿四日

信長御朱印

大神宮北監物大夫とのへ

樂譜ノ唱歌ノコト愚問記抄物云成佐云ク唱歌ノ詞ハ百濟國ノ語ナリ我朝ノ音樂濫觴ハ百濟國ヨリ渡ルナリタリチリ如此ノ詞ナリ皆彼國ノ語ナリ神樂ニもろ歌を仰すト云ハ庭火ノ歌ノ末句ヲウタヘト仰ラルコト也近比ニハキカザリシガ柳原紀光

朝臣ノ神樂奉行ノ時イツカ此事アリシトキケリ綾小路俊宗卿ソノ時ウタハレシカド秘説ニヤキコエザリシトゾ當時ハ舞樂ノトキ詠アルモノヲウタフトキモキコエズソノ所謂ヲシラズ

蹴鞠ノトキ昔ハ僧クツヲハカザルコト内外三時抄書云僧は昔沓はく事なし尻切に疊紙をあて、結てき始て着沓事は保元四年五月三日實尋自院賜沓襪着之しより今は沓なりトアリ

舞樂競馬ナドノ時ニ末額ト云モノハ今ノ鉢卷ナリソノ引ヤウ古代ハ冠ノ下ニ引タリソノ圖卷末ニアリ

山城ノ賀茂下上ノ社ハ一宮ニテ地主ナレバ祭ニモ國祭アリソノ故ニカ昔ハ宅カヘナドニモマツ此社ニ申セシコトニヤ梁塵秘抄口傳集第十二仁安四年二月七八日ころおほ雪ふりたりし日さとをかへむいとま申に賀茂へまわりきたアリ

内裏ノ六町町トテ當時モ掃除ノ役ヲ勤ムル町々アリ中山親綱卿記文祿四年十月廿五日子晴就六町々一新在家普請之儀ニ付爲ニ安宅言申入候也就其民法折紙遣し候也トアリ

承和十一年六月戊寅主水司言司家之政觸類繁多而本自無印只用白紙事涉輕疎未免嫌疑望請准內膳采女司被給件印者勅宣充之トアリシニ分明ナリ

檜扇ニ横目正目アリ杉横目ノ扇モアリ皆木理ノコトナリマサメニ對シテノ横目ナリ後光嚴院詞土佐經隆畫職人歌合八番右ひもの

おしき、のすきのまさいたふしえけみ

よこめおもはであふよしもかな

ト云ニ分明ナリ正目ノ木理ハ人ヨク知レドモ横目ノ木理ノ紛ハシキ故ニ古物ノ杉横目扇ノ小片二三枚ミシヲ卷末ニ圖ス

婚禮聲取ニハ横目扇ヲ忌コトナリ長秋記元永二年十月五日早旦依招引向伊豫守許執聲間事略下同月廿一日取要帶野劔持笏扇給件屬下官調進施略泥給不用横目忌名儀也トアリ

姓氏ノ不分明ノ人ハ不知姓某トカケルコト、ミエテ中右記大治五年十一月廿三日取常陸清原近宗安房不知姓實信トアリ

古代ハ都テ鬚ヲ除ザルコトノヤウニイヘド源氏物語

かし御ひけなどもとりつくろひ給はねばえげりては木御のけうよりもけにやつれ玉へりトアルヲミレハ此比ハ既ニヒケヲソリ給ヒシニヤ

我朝ノ禮ニ女ハ酒ヲ不飲ト云コトアリソノ來由ハ知

ラ子ドモ玉葉治承四年七月十九日己巳天晴此日姫君着袴也略中御前物葉六本依姫君不供酒盞也玉

葉承元三年三月廿三日取此日故攝政前太政大臣長女有入宮事略中次供薛芳織物打敷有伏組裏蘇芳打也葉六本不供如何但我朝禮女必不飲酒朱臺也用銀器中盤居銀酒盞供之不供不更催三位下居向羹食之トアリコレヲノ記文ヲ據

ニテ婚禮ニモ女ノ前ニハ酒盞ニ酒ヲ入ザルヲ故實トス

繪馬ト云コト朝野群載卷二獻供物於北野廟敬白獻上取色紙繪馬二匹略中寛弘九年六月廿五日トアリ又

宣胤卿記永正十七年十一月九日明日多武峯社遷宮關白御使衛門佐宣綱中宣秀相伴下繪馬二枚進云々トアリ

三十六人歌仙ヲ拜殿ニカクコト親長卿記文明三年五月廿二日次悲田院彼寺邊北野天神勸請或仁三十六人歌人可書進拜殿寸法所望之由令申之間罷向見廻了相伴菅相公云々

ナトヨミシヲシリ玉ハザリシニヤ又クデラトヨミ
テモ何モオツロシキコトハアルマシキニヤ

年男ト云コト南都春日社記應永卅五年戊申正月日社頭

之詣日記若宮常任神殿守春雄一應永卅五年正月一日曉御奉行

祐富殿年男下番神殿守宗時ノ代官宗繁一面一瓶持

參ス時ニ神主鏡ヨリ鏡一面ツミクタモノニテ御酒

三献祝了但下部ニハ小餅一前給ナリトアリ

明神ト云ハ公式令ニ明神御宇日本天皇詔旨トアリテ

現在ノ天皇ヲサシテ申スコトニテ神ヲサスニハ名

神ト云コトナリシガ名ト明ハ字音ノ同ジキ故ニ通

テモ用ヒタリサレド差別ハアルベシ續日本後紀承

和十年夏四月丁丑山崎神預ニ之名神トアルヲ同紀

承和十五年春三月壬申勅奉充山城國乙訓郡山崎

明神御戸代田二町トアリ同神ニテ名神ヲ明神ト

カケル證明ヲ出スノミ仁和三年三月十四日賀茂明

神春日明神トアリ此外ニ又台記久安三年二月廿二

日取春日祭大名神四座トモカケリ後世ニナリテハ

大明神ナドヲ被授シコトモアリシ也宣胤卿記永正

七年十二月十二日

近江國神崎郡小幡社可奉號惣社大明神之

由被聞食訖者依

天氣執達如件

永正十七年十一月十二日

左中辨判

小幡山神官中

同記ニ大織冠鎌足公ニ被奉授大明神號コトモ
アレト今時ノ如ク私ニ大明神ト云コトハナカリシ
ナリ

貴人ナラテドモ建廟設像コト續日本後記承和三年

十二月辛丑安房國言安房郡人伴直家主立性肅然

常守孝道父母沒後口絶滋味建廟設像四時供

養事死如生未嘗懈倦トアリ滋味ヲ絶廟ハ建

ストモ如在禮カクアリタキモノナリ

禁秘御抄ニ有藝者依其事近召事近代多如寛平遣

誠不可然況如猿樂參庭上可止事也トカ、

セ玉ヒシ猿樂ヲ今俗ニ云能亂舞ノコト、オモフベ

カラズ建曆ノ比今ノ亂舞ト云モノハナカリシナリ

三寶院滿濟准后記應永卅四年正月十三日卷簾覽

猿樂トアルハ今ノ亂舞ニテ此記ニテミレバ貴尊

モ簾ヲタレスミ玉ヒシナリ

昔シ白紙ト云ハ印ヲオサヌ文書ヲ云シナリ續日本紀

荷本社ノ社法モ多ク此人ヨリ改シコトアリト云リ
予稻荷中社祝正五位下某ニ彼社ノ社參以下ノ次第
ヲ借テ一覽セシニ拍手ノ條ニイタリテ拍手小或大
ナドシルセリコレト部家ノ遺風ヲ傳シナリ拍手ニ
トカ或ハ拍手段ニトアルヘシ後ヲ以テ古風ニセント
スルトキハ皆コノ失アリ學者ノコハロヲ附ベキコ
トナリ

住吉ノ鹽干ノコト和長卿記延德四年三月二日壬申晴今
朝藤中入道室家依誘引詣住吉社爲可見物鹽干
也トアリ

扇ヲヒロケテ送ルコト愚昧記仁安四年二月十三日取
藏人治部少輔兼光勅使參入中略兼光持御扇柳篋敷紅
薄様其上
置赤色御扇一
枚乍披置之トアリ

後愚昧記應安二年十二月廿二日消息云取寸大臣ハ
號ニ沓取官人ニ召具條勿論トアリ寸大臣ト云ハ大將
ナドノ兼官ナキヲ寸大臣ト云ナリ

大國主ヲ大黒トスルコトモ久シキコト、ミエタリ親
長卿記長享二年十一月八日取夢中歌件湯山明神三
輪明神也始來臨影向之時御姿爲大黒云々
塗籠ト云モノヲヤ、モスレハ土藏ノコトニ思フ人ア

レドシカラズ塗籠ハ今俗ノ納戸ト云所トオナジモ
ノニテ寢殿ノ中ニアルモノナリうつは物語くらひら
野中のやうにて人の家もみえずさる所にむかしの
玄んてんひとつめくりあらはにてぬりこめのかき
きりみゆまた西北のすみにおほきにかめしきく
らありト云ニ分明ナリ

戲コト、云ヘトモ大臣ノ名乗ヲ用ルコトヲ好ザルコ
ト明月記建曆二年十二月廿八日取可レ候連歌座
由被レ仰云々依甚雨二先相三儲馬場殿一小時出御如
例儀一始賦二木人名一人名トハ當世人名字隱題用也
不可レ嫌三尊卑一云々此中有三隆忠名一雖二戲事一丞相
名如何太不便トアリ

千五百番歌合ニ俊成卿判詞ニ中古の歌は萬葉の心に
及びがたかるべしトイハレシハ諸ナルコトニテ詞
ハ萬葉集ノ詞ニヨミイタシヌレド心ハ及ブベカラ
ズ心ノ古ニ及ブヤウニ有ベキコト也

同卿ノ六百番ノ歌合ノ判ニ顯昭ノくちらとるかしこ
き海トヨメルヲ萬葉にそあるやうに覺侍れどさや
うの狂歌體の歌どもおほく侍る中に侍にやいと
おそろしくきこゆトイハレタリシハ鯨ヲ萬葉ニイサ

族ニ不^レ可^レ假^{但可ニ}トアリ今ハ養方ノ族ニ喪セス本

生實方ノ族ノミニ喪セ^{心喪ニ}レトモ元祿ノ服忌ノ定ト云

モノニハ養方ノ族ニ喪スルコトミエタリ古代モ此

定ノ行レシコト百練抄寛治三年十月四日諸卿定申

中凡爲^中ニ人養子^略之者本生傍親服不^レ可^レ着之由僉議

了トアリ又助無智秘抄^{時臨}有^中ニ心喪^略人あをにひの表

袴柳色の下重を^中きる^略平行親藏人たりし時伯耆守

道行朝臣卒去の時この装束さる件道行朝臣は行親

伯父也^中か^略るを惟仲卿やうしたるにより着服せず

心喪の装束をもち^中ゐる^略かトアリコレ北山抄ノ文ニ

叶ヘリ養子ノ義父ニ對シテハサモアルベキ理ナリ

神道者流ノ忌ト云論ニカ、ハラズ恩義ノ輕重ニア

ルヘシ

高坏ノ上ノ四角ナルハ折敷作付高坏ト云モノ也小右

記寛仁二年六月廿八日^{要取}御前物^{朱漆折敷作付高坏四本}トアリ松

尾社及春日社ニアリ卷末ニ圖アリ

僧ニ祓ヲ負スルコト左經記長元四年九月十七日^{要取}中

納言奉^{本ノマ、}勅召^{陰陽寮}令^{本ノマ、}勘可^{本ノマ、}負^{本ノマ、}祇園僧祓^{本ノマ、}々日

時は僧於祇園日主内葬送仍其祟出^{本ノマ、}御ト^{本ノマ、}因^{本ノマ、}之之所^{本ノマ、}

被^{本ノマ、}レ行也云々

被^{本ノマ、}レ行也云々

當時云寫生ノ似貌ナト云コトモフルキコト、ミエテ

古今著聞集ニ後堀川御時似繪を御好ありけるに北

面下庸御隨身などの影を左京大夫信實朝臣をめし

てか、せられけるトアリ

經文ヲ題ニシテ歌ヲヨメルトキ懷紙ニ經ヲ料紙トス

ルコトナリ薩戒記永享六年十月一日^{要取}押件一品和

歌予當^中勸持品^略先日詠^中送之^略了懷紙爲^中經料紙^略ト

アリ南都一乘院宮御藏經文題歌西行寂蓮ソノ外當

時人十二枚ノ懷紙ミナ經文ノ裏ニカケリソノ外古

筆ニ多ク經文ノ題ノ歌ヲ經ノ裏ニカケルアリ予家

ニモ日野左大臣勝光公經文題懷紙ヲ藏セリ經ノ裏

ナリ

開帳ノ名目モフルク聞エタリ二水記永正十八年二月

八日早旦詣^中木屋藥師堂^略丸從^中去月^略開帳也聖德太

子御作云々古物御面貌不^中懣^略八百年許無^中開帳^略云々ト

アリ

突^中鼻ト云コト康富記應永廿七年十月十三日^{要取}突^中

鼻之輩數十人御免トアリ

學ハ天下ノモノニテ我家ノモノトオモフベカラスト

荷田春滿ノイハレタリシハ見識ノ博シト云ヘシ稻

荷田春滿ノイハレタリシハ見識ノ博シト云ヘシ稻

荷田春滿ノイハレタリシハ見識ノ博シト云ヘシ稻

會ニ法事ニ參内常事也者今夜參内トアレト吉槐記元
 德三年九月廿日大判事明清入來予相尋云所ノ載ニ神
 祇式ニ三七日法事者其身雖レ不レ穢當日不レ令ニ參内
 云々此三七日トハ如何明清申云此事秘事也三七日
 トハ三十ケロ已後事也五七日六七日七々日トハ三
 十ケロ已後之間其身雖レ不レ穢不レ令ニ參内ト載之
 也トアルニ分明ナリ

愚昧記承安三年三月十四日

取柏挿挿木塗黒云々
或不塗

トアリ

柏夾ト云ル名義ハ詳ナラチトモ柏夾トテ冠ノ纓ヲ
 卷テ木ニテ夾ミトムルコトハ火災或ハ旅行ナト道
 ノ間纓ノ風ナトニ飛揚セザル料ナリソノ仕ヤウ説
 説アレドモ是非ヲシラス橘直幹草紙詞書ハ慶運畫
 シレズ火災ノ所ニ柏夾シタル騎馬畫卷末ニアリ

抱朴子曰辰日雨師者龍也トアリ文德實錄嘉祥三年七

月丙子朔

要取

進ニ大和國丹生川上雨師神階ニ授ニ正四

位下トアリ雨師ハ龍ナルコト參考シテ知ベシ

萬葉集ヲ唱ル者流ニ鎌倉右府ヲ殊ニ稱スル故ニソノ
 眞影ヲ大臣卷物ヨリ摸シテ卷尾ニ圖スソノ卷物ハ
 大臣八十人ノ眞影ニテ豪信法印ノ畫ナリ

和歌ノ撰集ニ古歌ノ句ヲ聊ツ、改テ撰ハレシコト多

シ歌ニ限ルベカラズ河海抄葵四條大納言公任の和
 漢朗詠におほく古章句を二三字を改て入たる事あ
 り獲落危牖壞宇秋有ニ秋風とあるを有ニ秋聲とあ
 り又樂天の詩に可是禪房無熱到とあるをも不是禪
 房と改たり是等ノ例ナラン

明月記建久十年八月四日

取

出京參ニ日吉

中

於ニ大宮

寶前ニ被レ行ニ御神樂

俗稱ニ人長神樂
有ニ和琴等

トアルハ今内侍

所賜八幡ナドニアル神樂ノコトナリ里神樂ニ對テ
 神樂歌ヲウタフ神樂ヲ人長神樂ト云ナルベシ

忌日ニ神事ニ預ラザルコトハ常ナレドモ玉海承安五

年二月九日

取

明日當ニ遠忌ニ故人曰忌日不レ從ニ神

事不レ從ニ佛事トアルヲミレバ佛事ニモ預ラザル

コトナルヘシ忌日ハ終身喪ナレハサモアルヘシ神

事佛事ニハ限ラス他事ニモ預カラズ謹慎シテアル

ベシ

中陰ノ四十九日ヲ薨日ヨリ計ルコト中右記永久二年

四月三日京極大北政所

右大臣師
房公女

薨同月廿二日葬禮五

月廿二日故北政所四十九日也コレハ薨日ヨリ七々

日ヲ計レリ

北山抄傍親就養父母之族可有ニ其假ニ至ニ于本生之

ノ音頭ト云モノニ千世ノ松坂トイヘルハ山城ノ粟田ノ東ナリ應永卅一年極月十四日室町殿御參宮私日記ニ

我も又けふは都に入日かけ

うれしくむかふあふ坂の山

松坂にもつきぬ年々歳々の御參宮にことさら此所しも千とせの坂の名をあらはしてたひことの祝詞にあひかなひぬるも神慮のしからまむる所なり

君はなほ千代の花さく松坂を

いく十廻りかこえてみるへき

小解除手祓ト云コト日次記ニアルハ假初ニハラヒヲ

スルコトナルベシ左經記長元九年五月十九日取

以ニ御骨一升奉レ納ニ茶碗壺中事畢關白相府以下

歸路云々於ニ鴨河許乍レ車手祓以草人形又无縁葬作

法記云民部卿記云人々歸ル時取ニ近邊草祭物カキワケ

テ懷レ之渡ニ河水之時面ヲ以ニ草カキ撫テ流レ之是

ヲ名ニ手祓ニ弃畢白杖同弃畢或記云於ニ水使所ニ少解

除以ニ人形ニ撫レ之弃ニ川畢トアリ小祓トアルモ少解

除ト同シコトナルベシ

七月七日乞巧奠ニかしつる糸ナト歌ニヨメルカスト

云コトヲ歌學者流ニカスハ手向ト云コトナリト云
說アレド然ラズ乞巧奠ニハ人料ノ物ヲ星ニカスコ
トナレハ故モナクタ、カスト云コトナルベシ人車
記仁安三年七月七日丙寅内裏御遊具於ニ清涼殿東
庇ニ佳例被ニ涼於ニ東庭ニ乞巧奠藏人基光奉行於ニ桂
芳坊ニ御服犬頭糸奉レ借ニ織女トアルニ借ト云コト
分明ナリ犬頭糸ノ犬頭ノコトハコ、ニ用ナケレハ
別ニシルセリ

當時モ吉田村松尾村ト云ベキヲ俗ニ吉田地下松尾ノ

地下ト云リタ、吉田地松尾地ト云コトニテ下ノ

字ニコ、ロナカルベシ康富記寶徳元年八月廿四日

壬申是日松尾祭去四月依ニ神領違亂令ニ延引廿五日者社

家祭云地也トアリ廿四日ハ公家ヨリノ祭ニテ廿五

日ハ地ノマツリト云コトナリ

延喜神祇式會ニ三七日法事當日不レ得ニ參内トアリ

長秋記天永二年二月廿日法事取參ニ左府尋申云會ニ三

七日法事當日不レ得ニ參内云々而謂ニ三七日四十

九日間何ヲ可レ申哉仰云件事無ニ傳聞ニ宇治殿雖

令レ尋ニ道者等ニ申旨不分明但近來所ニ習來ニ者亡者

在ニ家時訪人雖ニ不ニ身穢ニ不ニ參内ニ又觸穢了後雖

味スル人コヽニ心ヲトメテミルベキコト也精撰
ノモノニハ却テ嫌疑ヲ用捨スルコトアレドモ物語
草子ニハ用捨ナク當時ヲアクマデニカクモノナレ
ハ時世ノヤウスヨク考ラルベシ後世トテモ草子ニ
ハ當時ノコトヲ書リサレハ物語草子ノ作者ノ名ヲ
アナカチニ穿鑿ニ至ルベカラズ

新米ノ代ニ米ヲ青ク染テ用ルコトアリ大和國春日社
年中行事記云八月諸式如_二平月_一但旬神酒從_二今日_一
用_二濁酒_一散米用_二新米_一若年穀未_レ就則以_レ米染_二青
トアリ

棟上ノトキ大工ノ衣冠スルコトモフルキコト也玉葉
承安二年二月三日_{建春門院新}御堂上棟上棟大工束帶自取_レ麻
昇_二屋上_一トアリ

食膳ニ梅干ヲ置コトハ毒ケシナリ世俗立要集ニ承久
以後武家ノ肴ノ様ヲミルニ如此梅干ハ僧家ノ肴也
而テ俗家ニ用ラル事如何若漢土ノ作法歟漢土ニ鳩
ト云鳥アリ其鳥ノ羽ヲ抔入ツル酒ヲ鳩酒ト云此酒
ヲ飯ツレハ必ス死スト云々其變ニ梅干ヲ用ル而ヲ
若敵アリテ鳩酒モヤス、ムルトハシノ臺ニ梅干ヲ
一置ト云々アリ

直衣ハ官服ニアラス藝服ナリ藝ハケハレノケニテ私
ノ服ナリ故ニユリサレハ公ニ直衣ヲ着テ參ラレズ
又女房ニモ直衣アリ江次第一_{御藥}條着_二尋常唐衣裳_一
稱_二之直衣女房_一同第十九_{殿上}條女房四人扈從_{命婦二人}
直衣トアリ女房ノ直衣ト云ハ裳唐衣バカリニテ表
衣ヲキヌヲ直衣ト云トミエタリ中世ヨリ女房ノ表
衣ノ沙汰ハナケレドモ上古ハ唐衣ノ上ニ表衣アル
ベシサテ花鳥餘情_{句兵部卿}殿上童束帶ノ時總角スコレ
ヲミツラトイフトノキスカタ直衣ヲ云ソノ時ハミ
ツラユハストキカクルナリトアルヲ准據ニテ女房
モ直衣ノトキハカミヲアゲズ額許ヲ上テトキカク
ルナルベシ都テ女房ト童ハ同シ定ノモノナリトキ
カクルトハ今ノスベラカシノコト也俗ニスベラカ
カシサゲカミヲ禮ナリトオモヘトシカラズスベラ
カシサゲカミハ藝ノコトナリ髪ヲ上テ笄シスルカ
女ノ禮ナリ髪ヲ上ルコトモ古ヨリ沙汰ナケレト
モ禁秘御抄_{御膳事條}女房上_レ髻三位已上釵子許也暑氣
比凡聽_レ不_レ上_レ髪トアルニテ知ベシ此比ステニウ
ルハシク髪ヲ上ルヤウサタカナラサリシニヤ
伊勢街道ノ伊勢ニ松坂ト云所アレド今ノ俗ノオトリ

大和國法隆寺ニ善光寺如來ノ文ト云モノアリ密封シ

テミルコトナラザレドモ堪囊抄卷十七三十一ニ善光

寺如來ト聖德太子ト往來ノ消息ノ文出タリミテ知
ベシ

百練抄天福元年五月二十九日普賢寺入道攝政年七十四

終焉之時各不レ可ニ面謁ニ中陰不レ可レ修ニ佛事之由

息被ニ相定トアリ普賢寺殿ハ基通公ナリ息トハ猪

熊攝政家實公ナリ本邦ノ中世以來中陰ニ佛事ヲ不

修ハ實ニ希ナリ當時ノ神道者流ノ賞歎スベキコト

トオモフナリ

拾芥抄ニ出タル和琴ノ名器ノ河霧ハ官物ニテ御神樂

ノ時ハ被レ用シガ萬治四年焼失セシ後ハ官物ノ新

絃ヲ用ラル由安陪季尙編輯セシ樂家錄ノ和琴祕錄

ニミエタリ惜ヘキコトナリ琵琶ノ巖ハ今ニ傳テ今

出川殿ニアリメテタキコトナリ

神ニ茶ヲ奉ルコト日吉社神道密記禰宜正四位下
大藏卿行丸撰每歲卯

月末日ニ宮八王子十禪師三宮以ニ淨水ニ煮レ茶奉ニ調

進ニ非ニ古法トアリ便ニ云江次第佛名ノ時ニ引茶

トアルヲ茶道者流ニ挽茶ノコト、オモヘルアリ誤

ナリ引茶ハ茶ヲヒクトヨミテ茶ヲ配リアツルコト

ナリ行茶トカキテ行^{ヒク}茶トヨムヘキ行ノ訓ノ假借

ニ引ノ字ヲ用タルナリ

柳宮ハヤナイハコト云ズヤナイバトノミ云ヘシ明月

記元久二年十二月十五日元服記ニ柳葉トアリ宮ノ

字ノ假借ニ葉ノ字ヲ用タルヲ以テ知ベシ

焼亡ニ太郎次郎ト云コト清癡眼抄後清錄記云治承二

年戊戌四月二十四日戊子夜半許七條北東洞院東中

許洞院面焼亡略世人號ニ次郎焼亡ニ也太郎ハ去年四

月二十八日至ニ于大極殿ニ焼亡云々

源氏物語はた神代より世にあることをあるしおきけ

るな、り日本紀などはた、かたそはをかしこれら

にこそみち／＼しくはしきことはあらめとてわ

らひ給ト云ヲ花鳥餘情ニ日本紀三十卷始ニ神代

至ニ持統天皇御宇ニ品舍人親王安麿等撰レ之今案

神代ヨリ世ニアルコトヲシルシオケルハ日本紀ノ

事也コレラニコソトハ惣シテ物語草子別テハ住吉

物語ヲノ玉フ吾國ノ書ニハ上モナキ日本紀ヲオシ

サゲテソレハ大カイヲコソシルシオキタレマコト

ニカンナサウシナトニコソマサシクミチ／＼シキ

事ハ有ヘケレトカ、セ玉フハ都テ物語草子類ヲ觀

フルキコトナリ侍中群要^{第八}御書使事賜^二御書之後

暫置^二日記辛櫃上^一以^レ扇敷^下殿上^二無人令^レ主殿司守^一トアリコノ外ニモ

日次記ニアリトオホエケレト忘却セリ

佛事ニ百味ヲ供スルコト人車記嘉應元年九月廿六日

己卯天晴^取依^二故殿御月忌^一中略百種供物御供養如^レ

例

狐ヲ神トスルコト續古事談云いにしへ野干を神の體

となしたる社の邊にてきつねを射たるものあり又

璫囊抄第二狐ヲ祝フ社女神ニテマシマセバ女官ニ

准テ命婦ト云フ吳音ニミヤウプト申セルニヤトア

リ今モ山城伏見ノ稻荷ニ命婦社ハコレナルベシ

昔シ怠狀ト云ハ今ノ過證文ナリ失錯アルトキ怠狀ヲ

奉ルコトアリ又カヘシ玉フコトモアリ

傳宣草

宣旨 返^二給怠狀於外記^一狀

權右中弁光繼朝臣進^二怠狀^一事

仰^レ宜^下徵^二將來^一返賜^上

右宣旨可^レ被^二下知^一之狀如^レ件

文保二年十月六日 春宮大夫判

トアリ今時モ過去ヲ許シテ過狀ヲ返シ未來ヲ徵コ

トアリ

姉小路北堀川東橘逸勢家ノ蚊松殿蚊字ヲハヒトヨム

コトヲ疑フ人アリ水左記承暦四年八月廿八日壬午

晴今日寢殿御方於^二蚊松^一被^レ供^二養佛經^一トアリ蚊

ハ蚊ト同字ナリ姉小路北西洞院東高明親王家高松

殿モ西ノ蚊松ニ對セシ名ニテモヤアリケン

今ノ曆ニ神よしト云日ハアレドモほとけよしト云日

ハシルサズ予ガ藏スル後堀川院貞應二年癸未年ノ

假名コヨミノ小片ほとけよし又神ほとけよしナト

ノ日ヲシルセリ後世ニ除タリトミユ神吉日三寶吉

日トモニ拾芥抄及陰陽家書ニ分明ナリ

表衣ヲヌヒチ、メテ着コトアリ明月記建仁三年十二

月廿七日^取中將殿御拜賀戌時許自九條殿令^二參入^一

給御裝束^要連々今夜着^二殿下御袍^一給^二縫^一トアリ

正月ノ御修法ニ用ラル曼多羅ヲ俗中ニハ弘法大師ヨ

リノモノ、ヤウ云ヘドモ駕輿丁舟木氏記元祿六年

十一月十八日於^二仁和寺^一宮中御修法本尊兩界曼多

羅新畫間眼供養トアリ

大江俊冬記當時大床子御膳ハ享保十八年丑年御再興

トアリ

梅窓筆記 卷下

橘 梅窓 著

掛物ノ上下ヲ卷テ掛コト左經記長元八年正月十四日
己亥治部省廳去年大風顛倒仍太元御修法可行處
有議於大膳職北屋修之略中件屋短狹佛像高廣仍
上下各卷之奉懸云々トアリ茶家者流ニモ此ニ似
タル掛物ノ掛ヤウアリ

當時モ饗膳ノ前ニ假初ニ小漬飯ヲ出スヲ點心ト云リ
輟畊錄十七八葉今以早飯及飯後午前午後晡前小食
爲點心トアリ園大曆康永三年九月十六日壬寅晴
今日上皇可臨幸天龍寺略中於南面客廳殿先供湯
次供點心次茶也トアリ此外ニモアルベシ又禪家
ニ點心ト云コト多アリ

經史トモ論義ノ音聲ノコト台記久安二年六月二日庚
子依例講尙書講師直講師元問者余及敦任皆二重
引音如僧同年八月廿一日有家堅義事略中今夜堅者
探題皆無失可謂有勒但堅者音聲頗中略其題唐聲讀
自余事不異于僧トアレハ音聲僧ノ經論義ニ同
シカリシニヤ

旅行ノ以前ニ門出ト云コトヲ俗ニスルコト台記久安
四年二月十日要取入夜向宗俊阿闍梨房是出門也
十二日爲道虛日之故也即行祓十二日可參八
幡仍自今日神齊トアリコノ例ニ據セハ今モ上
道ノ日アシクレバ已前吉日ニ門出ヲセハ便宜ナル
ベシ

佛事ニ祓ヲスルコト江次第ニモミエタレドモ左經記
長元七年八月十五日壬申天晴午後着八省東廊
行ニ大祓是明日爲祓行仁王會所被祓清也
トアルニ佛事ヲ行フトテ先祓ヲスルコト分明ナリ
續後撰賀部建保三年和歌所にて釋阿九十賀たまはせ
ける時銀の枝の竹の葉にかき付べき歌めされける
に

大藏卿有家

も、とせにちかづく道につさそめて

今行末もか、れとぞ思ふ

玉海建仁三年十一月廿三日要取置鳩杖以銀作之
件杖竹形也其上居鳩也有二枝二葉件葉書和歌
有家朝臣詠之トアリソノ杖ノ寸法ハ知レテドモ
近世ニ賀ニ調セラレタリシヲ卷末ニ圖ス
物ヲ假ソメニセヌ料ニ扇ヲ敷テソノ上ニオケルモ

云コトアリ今時ノ神ヲ拜スルニ二ツ手ヲ拍ハ短手
 ニテ延喜式ノ假名ニシノヒテアルモノニテ拍聲
 ノ音ナキヤウニ拍ヲ云ナリ玉海治承四年二月四日
 丙戌天晴此日祈年祭也^{略中}祝師進^{略中}庭中坐^{略中}申^{略中}祝詞^{略中}
^{十段別}即拍^{略中}手上卿以下從^{略中}之^{略中}上卿拍手法不^{略中}令^{略中}有^{略中}聲手ノ
^{稱唯}也一條禪閣兼良公江次第抄^{祈年祭條}今案上卿拍手作法
 不^{略中}令^{略中}有^{略中}聲手のさきをあはせてやをらくと打
 合也トシルサセ玉フニテモ不^{略中}有^{略中}聲コト知ベシ
 年回ヲ引上スルコトヲ取越ト云名目モフルキコト也
 二水記永正十六年十二月十四日金譽十七回忌也
^{明年正月也雖然年}
^{始依不辨取越了}
 平家ヲ語ルコト臥雲日件錄文安五年八月十九日最
 一檢校來^{略中}予又問座頭話平家^{略中}之由最^{略中}一曰昔爲
 長卿者作^{略中}此書^{略中}十二卷留在^{略中}播州^{略中}其後曰^{略中}性佛^{略中}者
 上^{略中}之於音曲^{略中}而歌詠耳性佛之後曰^{略中}如一檢校^{略中}者
 有^{略中}二弟子^{略中}一曰覺^{略中}一曰城^{略中}一々々々弟子城元居^{略中}八
 坂^{略中}城元次曰^{略中}城意^{略中}々々次曰^{略中}城存^{略中}存尙在焉覺^{略中}一
 弟子有^{略中}四檢校^{略中}一曰^{略中}通^{略中}一曰^{略中}靈^{略中}一曰^{略中}景^{略中}一曰^{略中}清
 一^{略中}某乃靈^{略中}一弟子也最^{略中}一又曰^{略中}今夏居^{略中}奈良^{略中}秋初歸
 洛トアリ平家ヲ語ル濫觴アキラカナリ

ニモ多カレト略セリ

今昔物語廿四今昔小野篁といふ人ありけり事ありて
隱岐國に被流ける時船に乗て出たつとて京に知た
る人の許にかく讀て遣ける

和田の原八十島かけてこき出ぬと

人には告よあまのつり船

と明石といふ所にて其様を宣て九月許りの事なり
ければ明髭不_レ被_レ寐して詠むたるに船の行か島か
くれするをみて哀とおもひてかくなんよみける
ほのく_とあかしの浦の朝霧に

島かくれ行船をしそおもふ

と云て泣ける是は篁か歸りて語るを聞てつたへ侍
るとなりトアルヲミレバほのく_との歌人丸ニアラ
ス疑フヘキコト也歌ノ體ハ篁ニアルヘカシクミ
ユ

水か_ミ仁承和六年正月にそたかむらおきへまかり

しに_{略中}同七年六月に小野篁めしかへされていまた

位もなかりしかはきなるうへのきぬをきてぞ京へ
いれりしトアルハ無位ノ袍ハ黃袍ナレバナリコレ
叙位スベキ人ノ叙位セサル中ノ無位ノ袍ナリ庶人

ノ無位ノモノ、袍ニハアルベカラズ無品親王ノ黃
袍トアルニ准據シテ知ベシ

西園寺實遠公所傳無撰者一冊教訓抄ニ大臣殿の坐に
は好文のへりのた、みにこ、にしきのまねをし
き云々仙源抄の一説にとうきやうにしき日本錦な
りからのといへる覺束なしトアルナトヲ以テ東京
錦ハヤマト錦ノコト、スレト非ナリ唐ノ東京錦ヲ
コ、ニテ模シ織タルナレハ唐ノ東京錦ト云ベシ
婚禮ノ時ノ被ヲ鴛鴦被トモ合歡被トモ云ヘリ河海抄

癸註ニ鴛鴦衾者鴛鴦文錦被也ト云又潜確類書ニ合
歡被古詩客從_ニ遠方_ニ來遺_ニ我_ニ一端綺_ニ文彩_ニ雙鴛鴦_ニ裁
爲_ニ合歡被_ニ着_ニ以_ニ常相思_ニ緣_ニ以_ニ結不解_ニ注被中着
綿綿之意トア
リ又鴛鴦褥ト云モノモアリ同類書ニ鴛鴦褥西京雜
記趙昭儀上皇后遂三十五條有_ニ鴛鴦褥_ニ

皇朝ノ古禮バ四拜拍手スルコトナリシカ日本紀畧延
曆十八年正月朔皇帝御_ニ大極殿_ニ受_ニ朝_ニ略中減_ニ三_ニ拜_ニ
爲_ニ再拜_ニ不_レ拍_レ手トアリ此比ヨリオノツカラ四拜
拍手ハ止テ北山抄本朝風四度拜_レ神謂_ニ之_ニ兩段再
拜_ニト云ヤウニナリテ神ヲ拜スルニ_ミ古禮ノコ
レリサテ又拍手ニモ八開手長ク拍_レ手短拍_レ手ナド

手筈ノ蓋ニ菓子ヲモルコト人事記仁安三年十一月廿

一日取要註云交菓子三積ニ盛薄様蒔繪手筈蓋トア

リ

褐衣ニ蠻繪ノ摺ヤウ玉藥建暦元年十月廿八日蠻繪袍

師子形以墨摺
之目程聊添朱

トアリ東寺ニ藏スル褐衣ニコノ定ニ

セシヲ存セリソノ獅子ノ圖卷末ニアリ又熊ノ蠻繪

ノヤウ南都東大寺若宮八幡ニ存セリコレハ繡ナリ

其圖モ卷尾ニアリ

七月七日二星ノ影ヲウツストテ手洗ヲ設カ普通ノナ

ラヒニテ夫木集ノ歌ニモ

聞はやなふたつのほしの物語

たらひの水にうつらましかは

トアレト知信記天承二年七月七日夜有ニ乞功奠事

下官依レ爲ニ行事ニ着ニ束帶ニ參宮供ニ奉奠物中東机

未申角居ニ御鏡一面蓋開トアリテ鏡ヲモテ手洗ニカ

ヘタリ今モ手洗ヨリ鏡ヲ用ユルガシカラシ

堀川ヲ大宮川トモ云ベシ詞花集ニ

みなかみはさだめてければ君か代に

ふたゝひすめる堀川の水

トアルニ夫木集廿四

のとかなる大宮川のなかれにて

ふたゝひすめるかけはみえけり

トアルハ堀川ヲ大宮川トヨメリ

荒井筑後守軍器考ニ鎌倉殿ノ比スデニ平胡籙ニ矢サ

サムヤウ丸緒ツケシヤウナド東國ノ武士ハシラザ

リシニ云々東鑑ニアリトハカリ本文ヲ出サ、リシ

カ東鑑文治五年正月十九日庚戌若君御方結構風流

模ニ大臣大饗儀ニ藤判官邦通爲ニ有識ニ營ニ此事ニ而近

衛司相交平胡籙差様丸緒付様不分明之處ニ浦介預

四人武藤小次郎資頼平氏家人監物
太郎頼方弟

由發言義澄求ニ伺御氣色ニ内々雖可召ニ仰之ニ若君

御吉事也爲ニ四人一爭役レ之哉云々仰曰早所ニ厚免ニ也

可レ令ニ沙汰之ニ者資頼開ニ愁眉ニ調ニ進之ニ

猪熊關白家實公記正治三年正月□日天晴取早旦着

直衣ニ見レ鏡トアルハ今俗ノ鏡餅ニ居ルコトニテ齒

固ノ祝ナリ夫木集ニ

千代までも影をならへてあひみんと

いはふ鏡のもちひさらめや

源氏物語初音の巻にもはかためしてもちひかゝみ
をとりよせて千とせのかけのゑるきナドアリ此外

怪祭^一由明日吉由領狀同十二日^取在友朝臣以三次

男^一令^レ修^レ祭相逢謝^レ之屋四面打^レ簡

典藥寮ニ頭取允屬ノ現任ノアリシコトハツネナレド

モ人車記仁安三年正月十一日^取典藥頭丹波重長助

藤頼時少允和氣安信大屬清原宗友同爲近醫師清原

友重トヨクソロヒテミエタリ

五色ト云ハ瓜ノコト管見記嘉吉元年六月廿四日己丑

自^レ朝降雨五色甘籠進上トアリ此外ニモ多ミエタ

リ餅ヲ十字ト云類ナルベシ

湯アミスルコトヲ風爐ニ入ト云コトモ久シキコト、

ミエタリ管見記嘉吉元年七月卅日甲子霽殘暑甚

入^ニ風爐^トアリ

尼ノ和歌懷紙ノコト後深心院關白記永和元年九月十

三日庚午今夜和歌御會也^中獻^ニ懷紙^ニ一品禪尼重^ニ

懷紙^{書白}薄樣^トアレハニノ懷紙ハ白薄樣ヲ用ユルコ

トナルベシ

七夕ニ七遊ヲスルコト親長卿記文明五年七月七日今

日有^ニ七種事^一一鞠一楊弓一樂一郢曲^{依^ニ人々故障^ニ無^レ}

一和漢^{五十一}一和歌^{兼日七首}一七盃飲^{之^レ仍改^ニ圖基^ニ了^レ}

當時ノ戲ニ火廻ト云コトアリ昔ハ脂燭ノ詩ト云コト

アリ玉海壽永二年正月廿五日辛卯天晴召^ニ中將於
前^一脂燭詩兩度令^レ作一度二寸^{開山花}一度五寸^{竹間鶯}
又續世繼^{春^ノ歌をこのませたまひあさゆふさふ}
らふ人々にかくしたいよませぬそくの歌かなまり
うちてひらきのうちによめなどさへおほせられて
トアリ

女房ノ灸治ヲスルトキハ暇ヲ玉ハリテ里ニ下ラル今

ハ灸下ト云灸治暇ナルベシ山槐記仁平二年九月六

日參^ニ關白殿^ニ申^ニ實長朝臣灸治暇事^トアリ

今ノ世ニ髮切ノ尼ト云ハサケニナリサテ又ノチニ髮

ヲオロシテ尼ニナリシコトモアルベシ續世繼^{月^ノも^チ}

長曆三年五月七日御くしおろさせたまふあきとも

の入道中納言

世を捨て宿を出にし身なれとも

猶戀しきはむかし成けり

とよみてこの女院へたてまつり玉へる御返事に

つかのまも戀しきことのなくさまは

二たび世をもをむかさまし

とよませたまへるは、じめは御くしそかせたまひ

てのちみなおろさせたまふ心なるべし

萬葉第十九ノ卷ノ長歌ヲ宣命書ニセルトコロモアリ享保三年九月神田道伴ノ極ハ筆者時代不同ナリ又本ヲミルニ同時代ノモノトミユレハ道伴ノ極疑ベシソノウヘ第二十卷ノ奥ニ元暦元年六月九日以_二或人本_一校合了右近權少將花押アルニモ極ノ不正ナルコト明ナリ享保十三年戊申八月御蘭意齋ヲ以テ梅谷殿ヨリ内々觀覽アリソノ時三卷ヲトメオカセ玉フト云リ

親元日記寛正六年七月二十二日松梅院ヨリ天神御筆涌出品一卷_{金紙}私迄請取置_レ之若君様御誕生之時

ハ必御産所ニ被_レ召_二置之_一由申_レ之卅ケ日之間_{云々}

コノ經今ニアラハ尋テ拜見スベキモノナリサテ經文ノ本意ハ解セザレトモ涌出品ハ寶塔涌出品ニテ寶塔ノ涌出スルト云ヨリ誕生ノトキ置ルハヤコレ

ニ習テ後世神道者流大祓ノ詞イマイフ中臣祓ヲ段ヲ別テ祈禱ニ唱ルトテ第二段神孫降臨ノ詞ヲ降誕ノ段又平産段トス涌出品ヲ置レシニ似カヨヒタルコトナリ

二孟ノ句ソノ外初旬新所句ナト云コトハアレト中旬ト云コトハマレナリ續日本後紀天長三年三月庚戌

是中旬之初也天皇御_二紫宸殿_一賜_二侍臣酒_一トアリ朔庚子ナレハ庚戌ハ十一日ニアタレリ

上北面下北面トモ所ノ名ナリ爲經卿記寛元四年二月二十一日天晴院上北面始也上北面以_二殿上北面_一二ケ間_一爲_二其所_一下北面副_二北築地_一有五間屋以_二三件屋_一爲_二其所_一トアルニテ知ベシ

禁國ト云コトハコンコクトムベシ新任辨官抄位祿

定結讀讀樣事結詞殿上分可_レ給國々禁國可_レ給_{云々}
禁國_二涉_一禁獄音故也或說禁國禁字去聲也
予不_レ用_二此說_一コシ此字吳音也宜_レ用_二之_一

今ノ世ニ一向宗ノ徒佛前ニ向フトテ肩衣バカリヲ着テ袴ヲキス古代モンノ類アリ十訓抄ニ_{第二}大原の聖達四五人云々河内國石川郡にとまりにけり家主は紺の直垂はかりきて袴はきすことの外に經營してよきむしろ疊など取出してまきけり

物ノ枝ニ鳥ヲ付ルニ小鳥ハ數羽ツクレドモ雉鴨ノ類ハ二羽ヨリハツケザルニ數羽ツケタルコトモアリ
明月記元仁二年二月八日取_要剪_二紅梅大枝_一雄雉雌雉各十羽_{如_二小鳥_一付也}大瓶入_二酒送_一之トアリ

守札ヲハルコト明月記文曆二年五月十一日取_要以_二賢舜_一令_二問_一在友朝臣口舌病事不_レ輕由占可_レ修_二百

三年正月二日取

要

主上喉疳御惱之時醫道之輩篇直卿

繁成朝臣典藥頭雖被召之不_レ能_二其驗_一令_レ及_二難

儀給仍雖爲沙汰外者士佛法師被召之間以針

治令屬御減給了舊院文和年中御腫物之時小松

房悲阿彌卜號法師參御療治御平愈了彼度被行

勸賞被叙法印了

後愚昧記應安二年三月廿八日取

要

又聞山門事今夕武家

付傳奏藤中納言

武家使者攝津掃部頭云々

トアリ又御厨子預廷

響錄ニ明應五年六月三日勸修寺大納言教秀武家傳

奏辭退ト親長卿記ニアリトカケリ

正月八日ヨリ被行シ御修法眞言院中絶ノ、チハ小御

所ニテモアリ御湯殿記天文三年正月八日ヨリ紫宸

殿ニテ行ル、トアリ

京都ノ西千本通ハ朱雀大路ノ東傍ナリソレヲ千本ト

云シモ久シキコト也後愚昧記應安二年四月一日入

夜千本邊有_二炎上_一トアリ

假名日本紀ト云モノハ假名ニテカキタルモノトオモ

フベカラズ假名ヲツケシモノナリ釋日本紀十八任

那日本府日本紀私記曰案假名日本紀作_二任那之倭

寧_一トアルニテ知ベシ寧ノ字ハ宰ノ字ノ誤ナルベ

シ

萬葉集ノ有職抄ニ右ノ外御本ニハ貫之カ書ル古今

集御子左ノ後撰道風カ萬葉ナド圓融院ヨリ一條院

ヘワタリタルヨシ見エタリ源氏物語_梅カ嵯峨_えの御

門ノ古萬葉集をえらひか、せ給ふ四卷權記長保三

年五月廿八日己亥故民部卿在世日被送續色紙一卷

請_レ書_二古萬葉集_一仍書_二之東鑑建曆三年十一月廿

三日己丑天晴京極侍從三位

卿定家

獻_二相傳私本萬葉集

一部於將軍家_コノ外諸書ニ萬葉ノコトミエタリ

コレヲノ本イカナリシヤシラ子ト古筆手鑑ニ存ス

ル處ノ彼是ノ萬葉ノ小片數枚ヲミルニ皆長歌ハヨ

ミトカズ短歌ハ別行ニ假名ニカキテヨミ解タリ又

伊勢國伊澤富山與惣右衛門所藏古筆萬葉全部アリ

寄合書ナリ今攝津國河邊俵屋久左衛門所持セルヲ

懸望シテミシニ第一卷行成卿ノ真跡ニ違ベカラズ

サテ又短歌ノミヲヨミ解テ長歌ヲヨミトカズサル

ウヘ世ニムツカシク解ナセシ莫囂圓隣ノ歌ヨミト

カズ又今板本第一十四丁裏ニ河上乃云々ノ短歌常

丹毛翼名ト云句ヨリ間ニ二三行モ白紙ノ行アリテ

常處女煮手トカケリ疑フベキコト也又コノ古筆ノ

聲トアリ既ニ絶ントスルノ端也

纓綱ハ錦バカリノ名トオモフヘカラズ染タルモアリ

續日本紀和銅六年六月辛亥要取染ニ作量綱色トアリ

バウヅウトハ今ノ雜煮餅ノコトナリ烹雜トカケリ御

厨子所預紀宗國記明應六年十二月七日要取三獻公家

衆ボウヅウトアリ

今ノ三方ト云モノハ衝重ナリ八寸臺ハ足付ナリ宣胤

卿記云永正十四年十月五日要取公卿衝重殿上人前足付

トアリ足付ハ足打ニテ折敷ニ足打タルト云コトナ

ルヘシ

今人ノ入湯ノ湯ハ水湯ト云モノナリ水風呂ト云名ア

ルモ遺風ナリ台記久安三年二月十六日要取自今日

始潮湯正法須ニ水湯ニ七日後始之同月廿七日辛酉復

浴ニ水湯トアリ潮湯ニ對シテ水湯ト云ナリ

台記久安四年四月廿三日季房朝臣來話ニ大日本紀事

トアリ昔ハ大ノ字ヲモ加テ呼タリケン

和歌ニ半臂ノ句ト云ハ腰ノ五文字ノコト也無名抄ニ

月といはんとて久かたとおき山といはんとてあし

ひきといふはつねの事なりされとはしめの五文字

にてはさせる興なしこの句によくつ、けたること

葉のやすめに置たるはいみしう歌の品もいてきふ
るまへるけはひととなるなりふるき人これをは半
臂句とをいひ侍けるはんひはさせる用なきものな
れとえやうそくの中にかさりとなるものなり歌の
三十一文字いく程もなきうちにおもふことをいひ
きはめんにはむなしきことはをはひともしなりと
もますへくあらねと此はんひの句は必えなとなり
て姿をかさるものなり

半臂今ハ装束ノ衣紋家ニ着セヤウノ傳アリテ大緒ヲ

ハ忘緒ト云テコシニハサミ別ニ小緒ニテ結フコト

ニナリタレトモ台記康治二年四月廿五日要取半臂伊

通曰正儀只以大緒結之何可具ニ小緒哉余曰諾

自今以後不_レ可_レ具ニ小緒トアリ

年始ノ試筆ノ吉書ニハ天筆和合樂云々トカクヨシ教

長卿口傳筆法才葉ニミエタレドモ和歌ヲカクコト

モアリニ水記永正十七年正月一日要取書ニ吉書ニ和歌

一首任筆畢トアリ

小漬飯ト云コトモフルキコト也ニ水記永正十六年十

一月五日要取於御所各有御小漬御相伴也

法師ノ醫ノ御療治ニテ勸賞アリシコト後愚昧記永和

謂之中酒_二古註云不_レ醉不_レ醒謂_三之中_一トアリ

酒ヲ九獻ト云コトモ我邦ノ俗ニアラズ潜確類書云九獻宗廟之祭具九獻之禮ト云コトアリ

鞠ノトキ扇ノ指ヤウ親長卿記延德三年四月十九日陰

晴飛鳥井中納言入道許明日之儀治定_{云々中略}次予示_レ

之今度扇指度之由命_レ之尤可然又予指樣有_二種々

趣_一答之誠有種々說指樣三樣指所三ヶ所也先刀指

トテ如_レ刀指也一故錄指トテ矢ヲフタル樣ニ指モ

一笏指トテ如_レ指_レ笏指所之事於_二座邊_一指_レ之一進

立送々指_レ之一立_二定樹下_一指_レ之一於_二同輩之所_一者

道々指_レ之

御徳日ト云コトヤコトナキワタリニハアリ年々ソノ

日ニハ何事モ憚玉フハ衰日ノコトニテ誰ニテモ年

年衰日ハアルモノナリソノ日ハ拾芥抄八卦部ニテ

ミルベシ續古事談堀川院御時_要其日主上殿上にて

人々に連句いはせ給ひけるに國賢末句いへと仰ら

れければ今日わたくしの衰日也は_レかりありと申

ければ主上殿上の曆を召て御覽するに巳日衰日

またなき事なりいかでか君をあさむき申連句いは

ぬほどのものいかで博士に成べきと仰られけるト

アリ巳午亥ハ衰日ナシ

入道ノ後魚食ノコト親長卿記明應二年八月廿七日_{要取}

今日予落髮同四年二月六日_取竹内僧正尋申云着_二

袈裟_一之後不_レ可_二魚食_一歟但_二或仁云後成恩寺殿令_レ

懸_二袈裟_一給即有_二御魚食_一云々御返答云雖_レ被_レ懸_二袈

裟_一魚食不_レ可_二苦_一云々

曆面ノ土用ハ土王ナリ王ノ字ヲ避テ土用トスルコト

故實ナリト谷重遠秦山集ニミエタリ

門生土佐人秀金問云秦山集曰我朝律學極精近時淺利

檢校尤妙達東寺寶藏有_二唐製十二律及平調板_一トア

リ今ニアリヤ答云重遠ノ傳ヘ誤リナリ平調板東

寺ニハナシ大通寺_{俗ニ東寺ノ尼寺ト云}ニアリ然テ唐製ニアラ

ズ圖卷末ニアリ十二律ノ竹ハ尋常ノモノナレハシ

ルサズ

タバ一日昇殿ヲユルサル、コトアリ平戸記仁治三年

十一月十一日_{要取}今夜五節參入_{中略}受領長門_{國司大内記}

_{被_レ聽昇殿}

上世ノ遺風ニテ隼人ノ犬聲セシコトアリシカ絶タル

モヒサシキコト也小右記長和元年十一月廿二日

大會隼人不_レ發_二吠聲_一諸卿一兩相催纔吠不_レ似_二例

京都小川本法寺ニ本阿彌光悅ヨリ寄進道風眞跡法
花經アリ行尹卿ノ傳ニ符合セリ二行ヲ摹テ左ニシ
ルスソノ傳ハ入木ニ専門ノ人ノ妨ナレハコ、ニモ
ラセリ

出テ世間猶如大雲充潤一切枯槁衆生
以來復過是數元量无邊百千万億阿僧祇

同抄ニ色紙形ノ寸法事堅サマ寸法ヲ取テ其ヲ十六分
ニワリテ今二分ツ、メテ十四分ニヨコサマノ廣サ
ヲ可切也是カ吉様ニテ有也

茶并茶具ヲ打枝ニ付ルコト北山抄佛名天曆九年十二

月廿二日取茶并茶具二器付五

七夕ノ歌棍ニ書コト管見記嘉吉元年七月七日辛丑晴

七種詠書梶葉一手向二星了

入木奥儀抄ニ額ニハ火ノ字堅忌之仍丙丁ノ日ハ不

書也トアレド權記寛弘六年八月四日丙戌奉書北

野宮額トアリ行成卿ハ忌レザルトミユ

平家物語九字治手綱を馬のゆかみにすて左右のあふ

みをふみすかしはるひをとひてそゑめたりける

盛衰記二十五河字治馬ヲ留鑑踏張立舉弓ノ絃ヲ口ニ

噉腹帶ヲ解テ引結々々シメケル云々桃花葉葉ニ腹

帶由木トアルニテ上腹帶ヲ鞍ノ居木ノ間ヨリ通テ

前輪ニテシメルナリ古畫ニミユル腹帶ミナ此定ニ

ミエタリ圖卷尾ニアリ

攝關ニナリ玉ハヌ已前ニ政所ト申コト玉葉治承三年

十二月十日兵部卿入道實連來數刻談話御一家皆大

臣後雖攝錄以前以三皇家稱北政所延久元永例

也

家屋ノ隔ニ立ル障子ヲ今ハ襖ト云ヘト障子ナリ古ヘ

ハ絹張ナリシヲ後ニハ唐紙ヲ以テ張シ故ニ唐紙ト

云名モ起レリ台記別記久安六年正月七日取寢殿簾

中調度未立上達部座障子可張絹今日猶爲唐

紙不可然九日張絹トアレハ唐紙ハ略トミエタ

リ今俗ニ障子ト云モノハ明障子也障子ニモ種々ノ

名目アリ通障子鳥居障子絹障子唐紙障子紙障子小

障子ナド也

食時ノ中ニ酒ヲ飲ヲ中酒ト云コト酒茶論云又飯後飲

十日庚申晴天當屋鈴鹿勝昌^略始テ神事ヲ勤之トアリ今モ諸社ノ祭禮ニ產神ノ祭ニ町家村々ナドニモ當屋トテ勤ルコトアリ

留主所ト云コトヲカケル文書アリ未詳或說ニ守介ナト常ニ國衙ニ在テ政ヲ行サル故ニ守介ヨリ國衙ヲサシテ留主所ト稱スルト云リ是非ヲシラス留主所古文書吉田ノ社神供所司家ノ所藏ヲミタリ又鴨社ニモ留主所ト書ル古文書オホシ所司家藏左ニシルス

花押

應宣

留守所

可早任先例停止吉田社領造伊勢大神宮

役夫工米國衙催促事

右彼社司訴狀備件役當社領承安文治被免除畢而建永京濟今度可依其例者可爲京濟之處國衙使相具神部亂入社領依致狼藉有限之神事多以闕怠^{云々}早任先例停止國衙使等亂入催促宜令京濟之狀所宜如件以宣

寛元三年十二月

介源朝臣

伊勢講春日講稻荷講ナド云テ會集スルコトモ近年ノコトナラズ吉田鈴鹿家記永享二年八月來ル廿八日伊勢講私所ニテ仕候^{云々}同月春日講中皆大和へ參^{云々}同記應仁元年十二月聖護院村田中村吉田村^略春ノ稻荷講ニ三ヶ村衆寄合被申候

古今著聞集仁安三年四月廿一日吉田祭にて侍けるに伊豫守信隆朝臣氏人ながら神事もせて仁王經を行けるに御あかしの火障子にもえ付て我家焼にけり其隣は民部卿光忠卿の家なりける神事にて侍ける故に火移らざりけり氏神ノ神事ヲセザル祟ナルベシ

蚊屋ト云モノ古代ニミエシハ皇大神宮儀式帳ニアリ春日權現驗記ノ書ニ白ノ蚊帳ヲ掛タル書アリ又吉田鈴鹿家記寶徳元年四月九日花園殿ヨリ御葛籠一荷ニ蚊帳一張ヘリトリ一枚小夜着一ツ御本所^{江參}コノヘリトリト云ハ今云寢ガザナルベシ

新作ノ硯ニ筆ヲ試コト中右記長承三年三月廿三日左兵衛督被^レ及^ニ新作硯筆試^ニ之處誠一物也誠爲悅仍書^レ之佳辰令月歡無極萬歲千秋樂未央

入木奥儀抄ニ世尊寺行尹卿ノ野跡ノ經ヲミル傳アリ

實ナリト云ヘルハ是ナリ論語ニカギラス何ノ書ニ
テモ此ノ准據ニテ稱呼スヘシ又永菴カ云後ノ人ト
シテ先ノ人ノアヤマリヲ議論スルコトハヤスシ其
時ニ生レテ其人ノ事業ヲ任セハ中々及フヘカラス
ト云ヘリ

萬葉集ニ左右ヲマテトヨムコト石山寺緣起第二卷の

詞書に康保のころ廣幡の御息所の申させ給けるに
よりて源順勅をうけたまはりて萬葉集をやはらげ
て點し侍けるによみとかれぬ所／＼おほくて當寺
にいのり申さむとてまゐりにけり左右といふもし
のよみをさとらずして下向の道すがらあむじもて
ゆく程に大津の浦にて物おほせたる馬に行あひた
りけるか口付のおきな左右の手にておほせたる
ものをおしなほすとておのかとちまてよりといふ
ことをいひけるにはしめてこのころをさとり侍
けるとぞ又萬葉仙覺註釋第一下源順石山に參籠し
て此歌を和する才智をえるべき示現を蒙るべき
の由觀音に祈請せしめて七ヶ日夜をへてまかうし
て敢て示現なしまかる間退心をおこして京宅に歸
らんと欲す其夜大津の邊に旅宿す曉天におよびて

隣家の旅人出たつをみれば旅客の主人とおぼしき
もの馬荷を付る一の卑夫あり片手をもつてこれを
抑ゆ主人の云までをもつて抑ゆべしと云々爰にお
いて順その意をえていくよまてにかとこれを和す
さて此集の中にまてといふ事には或は左右とかき
或は二手とかけるは皆此義也ト云リ石山緣起ト大
同小異ニシテ註釋ノ文ノ方ハ義分明ニキコエタリ
仙覺抄ハ奥書ニ文永六年二月廿四日記之訖仙覺在
判トアリ石山緣起ノ詞仙覺抄ヲ以テカケルカ又カ
カルイヒ傳アリシニヤ緣起ノ詞ハ萬葉ノ釋ノ爲ニ
カ、ヌモノナレハ義クハシカラス

南都東大寺三藏寶物圖ニ御寄掛ト云モノアリ三國志
曹公作ニ欽案ニ臥視レ書ハ朝人作ニ隱囊ニ柔軟可レ倚ト
アリ此隱囊ニテヤアリケン圖卷尾ニアリ

世俗ニ御出祭ト云コトアリ長秋記長承三年六月七日

乙酉大雨祇園依ニ出給ニ主上行幸事此曉トアリコ

レヲヨリ御出ト云ナルベシ本儀ハ御興迎祇園社及

吉田木瓜大明神ノ祭舊記御出ノ日ヲ御興迎ト記セ

リ

神事ニ當屋ト云コトアリ吉田鈴鹿家記應永六年六月

白河法皇百年忌の御追善のためなりことし十七年
なり世上うちつゞき兵亂によりいま、で延引トア
リ

誤字ヲ容易ニ改ムヘカラサルコト臥雲日件錄寶德二
年四月十七日大光明寺來話次及ニ内外書中不レ可
輕ニ改誤錯文字之事般若理趣分中有ニ若地方所流
行此經之文或改レ地作他不可乎此品於ニ欲界頂他
化自在天ニ所說故指ニ下方ニ爲ニ地方ニ耳況大般若一
部中又有ニ地方字今現流布理趣板行本已改レ他畢
云々

三島曆ト云コト古來アリ日用工夫集空華老師應安七年三

月四日浴ニ于熱海蓋三島曆以ニ是日ニ爲ニ上巳節故
作レ詩記レ之

儒學ニ新舊ノ二義アルコト日用工夫集空華老師康曆三年

九月廿二日要取昨日儒學者講ニ孟子書ニ其義各不同如

何余曰所見不レ同也近世儒書有ニ新舊二義程朱等

新義也同月廿五日要取問ニ新舊二學不同如何曰漢以

來及唐儒者皆拘ニ章句ニ者也宋儒乃理性達故釋義太

高トアリ此比ニ近世トアレハ章句學理學ト二義ニ

ナリシコトモ久シキコトナリ藤惺窩ニ始ルニアラ

ス

施藥院ヲ藥院トハカリ云施藥院ノヨミノ死藥ニ同シ

キ故ナリ康富記文安五年正月一日要取藥院保家朝臣

トアリソノ外藥院使ナトモカケリ

毳代ヲハセン代トハ云ヘカラス宣胤卿記永正十三年

十二月十八日要取不レ敷毳代事はハ當時無候哉此

毳代東山左府述作名目抄ニセン代ト被點候及數ヶ

所歟センノ音不審候其上セン代ト云物公物不承

及ニ候玉篇他教切毳又靴セン同被用此候靴氈韻府分

明候トアレハ名目抄モ強ニハ採用セラレス

醫經ヲ講スルコト類聚國史天長七年十二月壬寅准明

經博士賜下講ニ醫經博士料第百七上典藥寮

小出永菴論語序說抄云題號之事鄭玄カ註ニハ種々ノ

說アレドモ今用キス用ユル所ハ吳氏程カ註ナリ其

說ニ曰論ハ撰也次也孔子及弟子ノ語ヲ撰次ス故

ニ論語ト云今按スルニ此說ノ時ハ倫ノ音ナリ語ヲ

撰ヒ次ツルトカヘリタル心ナリ書ニ對シテ讀ム時

ハリンギヨト云ベシソラニテ唱フル時ハロンゴト

云ベシ此レ一ツノ故實ナリトアリ題號ノ論ノ是非

ハシラ子ドモソラニテ唱ルトキハロンゴト云ハ故

障子ニ御本尊ヲ懸ルト云ナリ二間ヲ夜居僧ノ候所トセシハ後ノコトニテ元ハ中宮ノ上御局ナリ河海抄ニミエタリ

今時モ節會ニ預ル人ハ裝束ヲ刷コトナレト昔ハ節會袍トテアリトミエテ古今著聞集第三道^政昔は人の裝束もなへくとしてぞ有ける齋院大納言の消息に先代の時節會袍借獻などか、れたんなるは節會の袍としてほのくくと有物の人にかすなどか有けるとぞトアリ

笏ニ一位ノ木ヲ用ルコト八雲御抄山部くらゐ^いやたか^の峯六位^之山なり又三玉集飛彈の國司にて基綱卿位山の一位

の木を笏の料にのぼせられし時御こたへに位山みねちかきまで我こえし道をば君が手にとりてみよトアリ一位ノ木今飛彈ノ國ヨリ箸ナトニ作リテ都ニ來ル木ヲイチキト云ヘト櫟ニアラスアラキナリ物產者流ノ説ニ廣東新語ニアル水松ト云モノニ形似タリ位山ニ生スルヨリイチキノ名アルナリト云リ又櫟モイチキノアラストンクリノ類ナリト云ヘトコレハ後世ニ物產ノ精シクナリシヨリノ論ニテ既ニ和名抄ニ櫟ヲイチヒト訓シ松尾ノ攝

社櫟谷ヲモイチヒタニトヨムカラハ往昔ヨリ櫟ヲイチヒト云カ俗ナルヘシ今更ニアラタムヘキニアラスイチヒノ假名昔ハイチヒ中比ヨリイチキトカケリ

嶋臺ハモト洲濱ナリソレヲ後ニハ嶋臺ト云リ永享九年十月朔日行幸日記^{後花園院義教亭}嶋御盃の臺トアリ

松茸狩ト云コトモフルキコト也愚昧記安元三年九月

廿六日取^要向^要光明寺^要爲^要狩^要松茸^要也山上候^要假屋^要竹柱^要菅^要於^要此所^要盃酌^要トアリ狩ト云コトハ求ト云コト也紅葉狩櫻狩ミナ同シ

鼻捻ト云捧ノコトキモノ古代モアリトミエテ人車記

仁安二年十月廿一日取^要左右居飼廿人^要裝束如常但大烏帽子蒲扇鼻捻已

長柄橋文臺ノコト明月記元久元年七月十六日取^要な

らの橋ノ橋柱ノ所^{云々}朽殘^{云々}木作文臺^{是院御物今日始被^レ出^レ和歌所}トアリ

後深草院宸記永仁二年六月廿五日甲辰天晴風靜此

日皇太子御書始也^{中略}黑漆文臺云々アリシハ和歌ノ

トキノ文臺トハ製造タガヘリ

年忌ノ法事ヲ引上ノ例ハ多カレト延引ノコト南方紀傳云貞治六年三月十三日北帝長講堂ヘ行幸これ後

梅窓筆記 卷上

橘 梅窓著

神樂ノ庭火ノ歌ノ末句ヲウタハズ神樂ノ譜ニモ末句

ニハ曲ナシ所謂ハシレチドモ古今著聞集六管絃歌

云鳥羽院八幡に御幸有て御神樂行はれけるに中備

後前司季兼朝臣庭火の本歌をとなへけるに秦兼弘

人長にてもろ歌を仰すとして外山なるうたふ時おほ

せるにも末句をうたはて季兼朝臣まゐりそきける其

説をまらぬこそと世人いひけり櫛のふりに末句を

うたはざるは故實にて侍となん下トアレバ末句ヲ

ウタハザルモフルキコトナリ

長秋記大治五年九月五日要取琴柱褻薄様狹レ絃而臨期

博陸召資信返給琴仰云立柱可レ進也トアリ石

山寺縁起ニ柱ヲ褻タル繪アリ其圖卷末ニアリ

江次第内弁細記ノ繕綿ヲツクロヒワタトハ訓ベカラ

ズムシリワタトヨムヘシ

同條ニ殺禮ト云ハ爲ベキ禮ヲ略テセヌヲ云ナリ禮ヲ

殺ト云コヽロナリ故ニサイレイトヨムベシサツト

イヘハコロスニテ義タガヘリ左經記萬壽三年四月

二日取奏要宣命見參等之時外記内記等上卿雖過

前聲折不居又叙位除目時取宮文之外記又不居

准此等儀不可居歟者仍不居也仰云彼文等參

奏之間祭禮ハト不居歟アリ殺禮ノ假借ニ祭禮トカケリ

同條表衣欄放レ紐トアルハ古今ハ帖歌ニ

草枕結ぶとせしによひくはとけさりきやは下の

入紐トアル下紐ノコトナリ入紐トハ今ノ表衣狩衣

ナト頸紙ニ着タル男蜻蛉女蜻蛉ノコトヲ入紐ト云

ナリ同心結トモ云ヘシ入紐ノ欄ニ着タルヲ下ノ入

紐ト云當時ノ表衣ニハナケレトモ昔ハアルヘシ南

都東大寺若宮八幡宮所藏舞樂ノ新靱鞆ノ袍ニ下ノ

入紐アリ其圖卷尾ニアリ

江次第云元日拜天顏物吉ト云ヒ又執婢條物吉女

年正月十一日入内御衾事略中及晩持來使左衛門督

置帳中一件人殊夫婦之間最吉之故也トアルニテ知

ヘシ

禁祕御抄二間懸御本尊寄障子也ト點セルハアシ

シ懸御本尊寄障子也トヨムヘシ左近ノ陣ノ西内

衙門ニモ寄障子アリ寄障子ト云モノヲ立テソノ寄

不知姓

五三二

有馬御湯治

五三五

鬚ヲソル事

五三二

淨衣ノ色目

五三五

女ハ酒ヲ不飲ト云コト

五三二

御殿ノ弘廂

五三五

繪馬

五三二

渡唐天神

五三五

卅六歌仙ヲ拜殿ニ掲ル事

五三二

銀柳篁

五三五

社人幼年ニテ元服ノ事

五三三

慶滋

五三五

長袖

五三三

十三回忌

五三五

樂譜ノ唱歌

五三三

山科高倉兩家ノ衣紋

五三五

神樂ノモロウタ

五三三

日本見在書目錄

五三六

蹴鞠ノ時僧沓ヲハカザル

五三三

東屋

五三六

コト

五三三

御藥辛櫃

五三六

末額

五三三

天神七代ノ神號

五三六

宅替ノ時加茂ヘ社參ノ事

五三三

御家様ト云コト 井勅筆勅

五三六

六町町

五三三

額ノコト

五三六

吸物

五三四

カセ杖

五三六

腰抱

五三四

服中ニ神號ヲ書事

五三六

産屋借地ノ文

五三四

色紙形ニ名ヲカ、ザルコト

五三七

白禿藥

五三五

白川吉田兩家ノ神道

五三七

神階

五三五

謠曲ニ禁句ヲウタヒ替ル

五三七

神ヲ神體トスル事

五三五

コト
以上九十八條

梅窓筆記目錄終

五三七

御修法ノ曼多羅

五二四

トヨメルコト

五二七

カラザルコト

五二九

大床子ノ御膳

五二四

地下祭

五二七

住吉鹽干

五三〇

善光寺如來ノ文書

五二四

三七日法事

五二七

扇ヲヒロゲテ送ル事

五三〇

中陰ニ佛事ヲ修セザルコト

五二五

柏樺

五二八

寸大臣

五三〇

ト

琵琶和琴ノ名器

五二五

鎌倉右府眞影

五二八

塗籠

五三〇

神ニ茶ヲ奉ルコト

五二五

撰集ニ古歌ノ句ヲ改ラレ

五二八

戲ニモ大臣名ヲ忌嫌フベ

五三〇

柳宮

五二五

シコト

五二八

キコト

五三〇

焼亡ニ太郎次郎ト云シコト

五二五

人長神樂

五二八

中古ノ歌ハ萬葉ノ心ニ及

五三〇

ト

物語草紙ノ類ヲ見ルベキ

五二五

忌日ニ...事佛事トモニ從

五二八

くらとるトヨメル歌ノ

五三〇

心得ノコト

五二五

ザルコト

五二八

コト

五三〇

米ヲ染ル事

五二六

養父母ノ族假ノ事

五二八

年男

五三一

大工ノ衣冠

五二六

折敷作付高杯

五二九

明神

五三一

食膳ニ梅干ヲ置クコト

五二六

僧ニ祓ヲ負スル事

五二九

貴人ナラネドモ建廟設像

五三一

男女ノ直衣 井女房上髪ノ

五二六

寫生ノ似貌

五二九

ノコト

五三一

コト

千世ノ松坂

五二六

開帳

五二九

猿樂

五三一

小解除手祓

五二七

突鼻

五二九

白紙

五三一

乞巧奠ノ歌ニかしつる糸

五二七

學ハ我家ノモノト思フベ

五二九

婚禮聲取ニ横目扇ヲ忌事

五三一

半臂ノ句	五二六	風爐ニ入ルト云コト	五二九	四拜拍手	五二一
半臂ノ着様	五二六	尼ノ和歌懷紙	五二九	年忌ノ取越	五二二
年始ノ試筆	五二六	七夕七遊	五二九	平家ヲ語ル濫觴	五二二
小漬飯	五二六	脂燭ノ詩	五二九	以上九十條	
法師ノ醫ニ勸賞アリシコト		灸治ノ暇	五二九	卷之下	
	五二六	サゲ尼	五二九	掛物ノ上下ヲ卷テ掛ルコト	五二三
武家傳奏	五二七	手筈ノ蓋ニ菓子ヲ盛ルコト			五二三
御修法	五二七		五二〇	點心	五二三
千本通	五二七	蠻繪ノ袍	五二〇	儒書ヲ講ズルトキ僧ノ音聲ト同ジキコト	五二三
假名日本紀	五二七	二星ノ影ヲタラヒニウツスコト	五二〇	門出	五二三
萬葉集古本	五二七		五二〇	佛事ニ祓ラスルコト	五二三
菅公書寫涌出品	五二八	大宮川	五二〇	賀ノ杖	五二三
中旬	五二八	平胡籙ノ差様并丸緒ノ付様	五二〇	扇ノ上ヘニ物ヲ置クコト	五二三
北面	五二八		五二〇	百種ノ供物	五二四
禁國	五二八	鏡餅	五二〇	狐ヲ神トスルコト	五二四
肩衣バカリヲ着ルコト	五二八	ほの／＼と明石の浦云々		怠狀	五二四
物ノ枝ニ鳥ヲ付ルコト	五二八	歌作者ノコト	五二二	蚊松殿	五二四
守札	五二八	無位ノ袍	五二二	ほとけよし	五二四
典藥寮ノ現任	五二九	東京錦	五二二	表衣ヲ縫縮メテ着ルコト	五二四
五色	五二九	婚禮ノ時ノ被ノコト	五二二		

梅窓筆記目錄

卷之上

神樂庭火ノ末句ウタハザ

ル事

琴柱裏

繕綿

殺禮

入襦袍

物吉

寄障子

節會袍

笏ニ一位ノ木ヲ用ル事

島臺

松茸狩

鼻捻

長柄橋柱文臺

年忌法事延引ノ事

誤字ヲ容易ニ改ベカラザ

ル事

三島曆

儒學ニ新舊ノ二義アル事

藥院

篋代

醫經ヲ講ズル事

論語ノ題號讀クセ

左右ヲマテトヨム事

御寄掛

御出祭

當屋

留主所

伊勢講

氏神ノ神事ヲセザル祟ノ

コト

蚊屋

新作ノ硯試筆ノ事

野跡ノ寫經

色紙形寸法

茶并茶具ヲ打枝ニ付ルコ

ト

七夕歌槐葉ニ書事

額ヲ書クニ禁忌アル事

馬腹帶

大臣ノ室家ヲ北政所ト申

コト

障子

中酒

九獻

鞠ノ時扇ノ指ヤウ

御徳目

入道ノ後魚食ノ事

土用

平調板

一日昇殿ヲ聽ルコト

隼人ノ犬吠

縋綱

バウヅウ

三方

水湯

大日本紀

梅窓筆記序

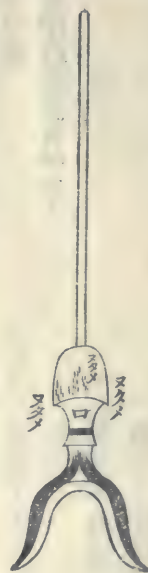
梅窓筆記。吾友梅宮祠官。香菓橘君所著也。君好古嗜學。最精本邦典故。上自正史。下至稗志猥說。無不通曉。於是朝廷儀適。民間瑣務。苟有所疑。則公卿大夫。聘价而問焉。農工商賈。執贄而聽焉。君隨問大小。答之如響。君之答問也。必取徵于古。鑿々乎有據焉。未嘗鹵莽辨而滅裂斷也。今斯編也。卽其所以答問者。手自修定。以具後案焉。君在日。嘗徵余弁言。余也懶。唯而不果。今茲六月。君已溘焉。頃日書肆急謀上梓。以君遺命。責余一言。義不可辭。因綴數語。以擬挂劒云。昔在

垂仁帝。命田道間守。遣常世國。求非時香菓。艱辛十年。僅獲而還。則帝旣崩矣。哭泣悲哀。遂向陵墓而死。今也序成。而君不在矣。余於香菓二字。不能無感。

文化乙丑冬十一月

平安丘思純識

にて操て三方にぬたをのこすべし



此書據黒川眞頼氏所藏本令寫之畢

柳菴隨筆奴字篇第十終

御堂あの石とつて齒のぬけた庭、普に「歌仙額裏式」。

甲州八代郡二宮村小石和筋美和大明神前歌仙裏書當國

第二宮大明神奉納歌仙三拾六枚之處源朝臣晴信大旦

那御武運長久子孫繁昌之處也時之神主勝義筆者沼津

與忠久時于永祿六年癸未林鐘二十八日書之左方裏書當國第

二宮、み處大壇那源朝臣義信御武運長久御子孫繁

昌之處時之神主勝義筆者沼津與太郎時于永祿六年癸未

林鐘二十八日書之右方裏書十七將圖、沼津壽昌寫之十七未

八歲 又寛永三年四月十七日沼津氏乘昌行年六十六

歲筆此二圖はかつて眞蹟をす

○布の價 嘉祿三山口祭記、御杣初一番食付机勤

行國々下行云々白布一端但以別代錢二百文也○信充云、嘉祿三年は後堀河院御宇にして、安貞

と改元のとしなり、錢は乾元大寶及びいゆる渡唐錢にして、開元元寶大觀等の錢なるべし醍醐寺雜事記、

延長元年の條云々 次男源氏八所調布三百段五所各五

十段准女八親王弟女源氏用三代錢五十文信充云、延喜通寶五十文なり

るべ續日本紀、和銅五年十二月辛丑制諸國所送調庸

等物以錢換宜下以三錢五文二准布一常上信充云、常は二丈六尺なり、一端は

五丈二尺なり、五丈二尺は十六文二天平元年四月庚午諸國兵

衛資物其輪法云々庸布四段米一石并充銀一兩一兩云々信充

云、養老六年より銀一兩に銅錢四百文交易なれば、庸布一段百文に當るとしるべし、但一段は二丈八尺なれば一端は百八十五文餘に當る、和銅の直法に比す法曹類林、天曆三年八月八日官符云調れば十倍に及ぶ

布一端直百三十文云々應和三年四月七日官符云調布

一端直六十文云々關市令、假令一句沽價上布一端或

錢三百或三百五十或四百即依中沽三百五十立沽

價法義解治部式。絹三疋調布十端或以唐綿五絹二

疋調布六端或以唐綿三調布二端或以唐綿商布一端或以唐綿

代之 又陸奥出羽調布五十太宰及管内調布四十束

伊賀伊勢志摩相模三十束、畿内十五束、畿内庸布一段

九束、伊賀伊勢志摩相模庸布二十束、陸奥出羽太宰

及管内庸布三十束主計式に、凡諸國輪庸一丁布一丈四尺二丁成

一端は四丈二尺なるべし

○ぬため 弓矢細工の書、かぶらは鹿の角にて作

るぬため三方にあるべし、大抵しかの角の太さ三寸

回りばかりの處をけづりて作るなり」弓馬聞書武田

一流、かぶらの長さの事三つふせなり目八目なり鹿

角にてくりて三方にぬたを残すべし、是は當流のか

ぶらの本なり、根本は八目其後五目四目にもくりた

るなり、今は二目を本とするなり云々上田次大夫一雲細工書。かぶらの長さ三ふさなり目は二目なり鹿角

乃極其家所_レ有恣情、耗蕩凡數年家業盡破、蟲出疾愈乃叩頭蟲也、晉傳咸叩頭蟲賦曰、蓋齒以剛克而盡、舌存以其能柔、強梁者不_レ得其死、執雌者物莫_レ之讎、無咎生_レ於惕厲、悔吝來亦有_レ由、仲尼唯_レ諾於陽貨、所以解紛而免_レ尤、韓信非_レ爲懦兒、出_レ胯下而不羞、何茲蟲之多畏人纔觸而叩頭、犯而不_レ校誰與爲讎、人不_レ我害、我亦無_レ憂、彼螳螂之舉有豈患禍之能禦此謙卑以自牧、乃無_レ害之可_レ賈、將斯文之爲貴、貴不遠而取_レ譬、雖_レ不_レ能_レ觸_レ類是長且書紳以自示旨、一日而三省、恒跼蹐以祗畏、然後可以蒙自_レ天祐之吉無_レ不利

○糠價 東鑑、建長五年十月十一日丙辰被_レ定_レ利賣直法、其上押買事同被制、小野澤左近大夫入道内島左近將監盛經入道等爲_レ奉行、薪馬菑直法事、

炭一駄代百文 薪三十束_{三把別} 萱木一駄八束代五十

文 藁一駄八束代五十文 糠一駄_{徒一文}代五十文

件雜物近年高直過_レ法可_レ下_三知商人_一者云々

同六年十月十七日丙戌雜物等依_レ有_三高直之間_一被_レ定_三其法_一、今日所_レ被_レ施行_一也、炭 薪 萱 藁 糠事高直過_レ法之間依_レ爲_三諸人之煩_一、先日雖_レ已定_三下直_一

於_三自今以後_一者不_レ可_レ有_三其儀_一、如_レ元可_レ被_レ免_三交易_一、但至_三押買并迎買_一者可_レ令_三停止_一者也、以此旨_一可_レ被_レ相_三觸相模國如然之物交易所_一也、依_レ仰執達如件

建長六年十月十七日

相模守
陸奥守

筑前前司殿

相模守は時頼、陸奥守は重時なり、○糠一徒一文といひ、炭一駄百文と比授して今日に考合するに、今炭一駄は銀凡三十匁に當る、然る時は建長の百文は今の三十匁と比すべし、五十文は今の十五匁なり、糠の價今升六升を百文に代として十五匁には一石〇五升に當る、又延喜式に一駄の米一石五斗なり、但此一石五斗は今の一石四斗ばかりに當るときは、建長の一駄も今の一石四斗と大異なるべからず

○拔鉞の神

延喜式神名帳、上野國甘樂郡貫前神

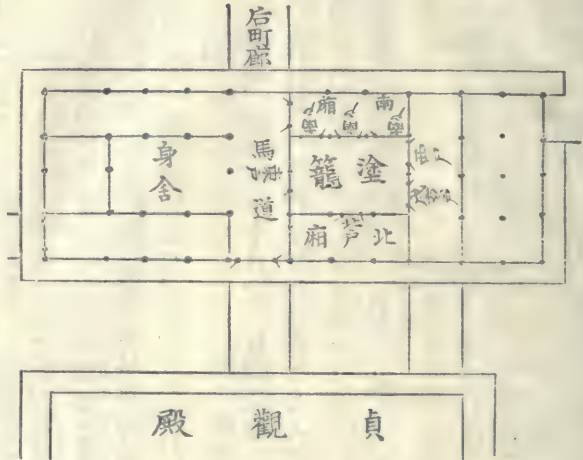
代_{名神}「上野志略、甘樂郡貫前神社_{名神}大_ス菖蒲庄一ノ宮と云、俗説に昔儀部に貫前社あり今略して前の宮と云

小社殘れり、安閑天皇二年當國に現じ賜ふ、經津主神貞觀元年正月二十七日授_三正五位_一下勳八等貫前神

從四位下十八年四月十日授_三從四位下_一貫前神正四位下元慶三年閏十月四日授_三正四位下_一勳八等貫前神

四位上四年四月二十五日授_三正四位上_一勳八等貫前神從三位、延喜十六年正月二十八日上野貫前名神授_三

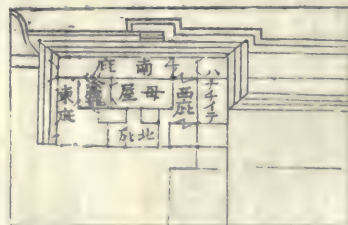
常寧殿圖



身舎塗籠^{西二} 南面東戸 南面西戸 北面東戸 北面西戸
 西戸 西面北戸 西面南戸 身舎塗籠^{東二} 南面戸
 蘭林舎身舎御藏^{即身舎塗籠} 常寧殿身舎塗籠^{西面戸} 東戸
 西戸 南戸 北戸 飛香舎身舎^{西二} 塗籠 職御曹
 司母舎塗籠 校書殿塗籠

東三條殿圖

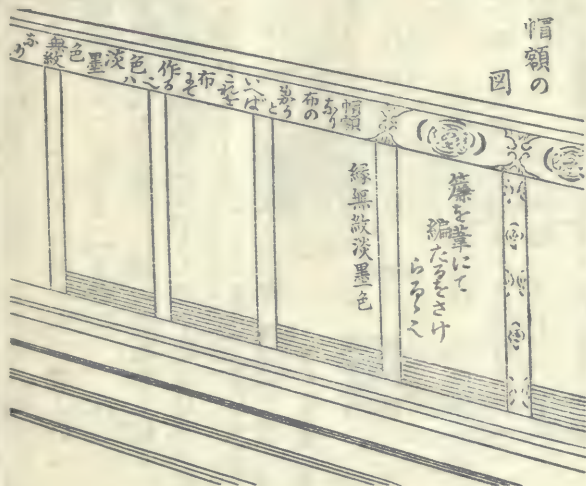
東三條殿は重明親王の家なりしが、法興院攝政關白兼家公に傳はり、その御女藤原詮子は圓融院の后にて後に東三條院と申す一院は此御所にて降誕ありしなり
 占地南北二町
 西二條の南、三條坊門の北、東西一町、西洞院の東、町口の西帳臺におなじからざることは辨をまたずして明かなり



○ぬかつき虫 枕草紙。むしはひぐらしぬかつき虫またあはれなり、さる心に道心おこしてつきありくらん、又おもひがけすくらき所などにほとめきたる聞つけたるおかしけれ」和名抄、叩頭蟲、虫細微者觸之輒叩頭云々本草化生類に叩頭蟲を出す俗名コメツキ虫とも 淵鑑類函、異苑曰有小蟲形色如大豆、呪令叩頭、又呪吐血、皆從所教如似稽顙、故俗呼爲叩頭蟲、墨客揮犀曰、叩頭蟲亦能入耳爲患、有入爲蟲入耳自謂必死、

染直垂ニ大帷子ヲ重、袴ニ大口ヲ重ネ、直垂ノ色并
 地褐布ニ紋ヲ書ク布に紋をかくとあれば今の大紋に相違なし又云。調度懸の
 事、折烏帽子に小よりの小結に赤皮のゑぼしかけ、
 褐布直垂に赤革のひもなり、袴も括を入れて高く上、矢
 を負ひ弓を持つことあり布衣記は永仁三年に書たる書なり天保十二年より五百四十七年前なり
 或云、布直垂といふもの鹿苑院將軍家の時にはじま

帽額の
圖



源平盛衰記に賞布の直
 垂ス・モカウあれば此説信じ難し

○布帽額 徒然草、諒闇の年ばかり哀なることはあ
 らじ、倚廬の御所のさまなど板敷をさけ蘆の御簾を
 かけて布のもかうあらしく御調度どもおろそか
 に云々類聚雜要抄、面額モカウの幅は常絹弘一尺五寸許也、
 中折ニシテ折目ヲ下ニスこれは御帳の料なり、下に圖す五丈四尺八寸
 面額料續額 枕草紙、なまめかしきもの云々夏のもか
 うのあざやかなるすの外の高欄のわたり云々又、
 もかうのすはましてこはきものうちをかるゝいと
 しるし

○ぬりごめ 枕草紙、五月の御精進のほど職りお
 はしますにぬりごめの前ふたまなる所をことにしつ
 かひしたればいさまなぬもおかし 同抄、稱名
 院云塗籠は帳臺のやうにしてをく所なり、文庫など
 やうなる躰なり 源氏物語櫛、御なやみにおどろき
 て人々ちかうまゐりてしげうまがへばわれにもあら
 でぬりごめに押しいれられておはす云々、きみはぬりご
 めの戸のはそめにあきたるをやをらしめて御屏
 風のはざまにつたひいり給ぬ云々 大内裏圖考證、神
 嘉殿身舎塗籠間三 南面戸 北面戸 東面戸 西面戸

四九七



牆、飛々片々入ニ昭陽、多情尙有ニ池邊柳、留ニ得啼鶯、
伴レ日長、

○隆達節

恨の介

慶長十四年に書たるなり考證はう字篇にいふ

當世流行け

るりうたつぶしとおぼしくて云々」小歌奥書、依ニ御所

望節付進候併揜御嘲笑耳候也

文祿三曆二月日奥九右様參自年九月日自菴隆達としるして花押ありといふ、此本國花萬葉記、

隆幸とあり隆達とは別人か、隆幸のは百首あり

高三隆達もとは日蓮宗の僧、當律顯本寺の内に住す、

還俗して高三氏の家に往て藥種を商ふ、年を経て小

歌の節を一流うたひ出すより世俗隆達流とて諷ひ賞

翫す

柳菴隨筆利字篇第九終

柳菴隨筆奴字篇第十

○ぬえ

字鏡。鵲^{メエ}鵲^{メエ}拾芥抄。鵲鳴時歌、ヨミチ

鳥我垣下ニ鳴ツナリ人マテ聞ツエリ魂モアラジ」異

名分類。

八雲

よみつ鳥、よみつ鳥とは徒然草に云眞言の

書に鵲のなく時招魂の法を行ふ次第ありといへり、

招魂の法は死者の復生を祈ることにて鵲のなく時行

ふといへば冥途の鳥などいはんが如くよみつ鳥とは

いふか万葉に黄泉をヨミとよめり

黄泉をヨミと訓る萬葉を引んより神代卷

の黄泉平坂を引べきなり

字典廣韻、鵲羊謝切」集韻、黃謝切竝音夜

鳥名似^レ雉」山海經、單張山有鳥如^レ雉、文音白翼黃足

名曰^ニ白鵲^一、食^レ之已^ニ噓^一痛」廣韻、鵲苦紅切、怪鳥出^ニ

字統^一藥名備考。

又工漢名未詳、和名抄作^レ鵲未^レ穩

源平盛衰記、南殿ニ鵲ノ音シテ一ノ鳥ヒメキ渡タリ、

殿上ヨリ人ヤ候罷出テ搦メヨト仰ス、左衛門佐平清盛

音ニ付テ宣旨ゾト申テ跳掛ル處ニ此鳥騷テ袖ノ内ニ

飛入テケリ則取テ進ラセタリ、觀覽アレバ老タル毛

シユウナリ云々

ぬえの鳴音あつみに似たるものと聞ゆ」又云、平治二年五月

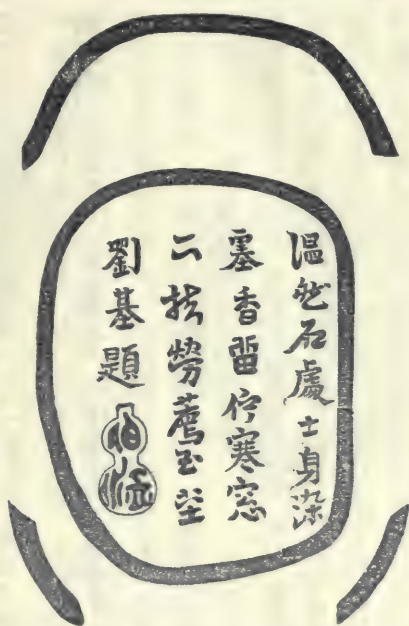
東三條ノ森ヨリ黒雲一叢御殿ノ上ニ引キ覆フ、鵲ノ
音ヲ鳴ル時必フルヒタマギラセ給フ云々」國花万葉記

寒窓下、扶勞薦玉堂、劉基題伯溫真蹟、余家藏

劉伯溫硯、其背有詩因追和之、古珍溫潤硯、千歲美名

香、鈍靜知其壽、傳來在草堂、咸休前稿有忠古

拾遺



硯相傳曰、漢劉熙物或曰明劉基、皆莫可考按、基也
近矣若熙則年代遠甚、雖然硯壽世計亦安知不近
之、非而遠之是哉、均之不得不以人重之、是硯也
有三絕焉、形狀溫雅一也、適用快利二也、出係名
士三也、頃命上依式爲之者二三輩、使廉爲之銘
銘曰、爾愛在形、匪矩匪規、爾貴以人、或熙或基、

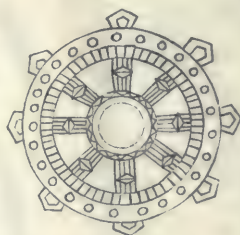
玄津一滴、雲行雨施、琢工纔畢、乃重周彝、篠本廉

今按に硯背銘に劉基伯溫とあれば劉熙に非ること
明なるに篠本のかくいふは怪しむべし

王世貞名卿蹟記、劉基字伯溫卒年六十五遺命焚屍揚
灰無得葬漢書計林姓氏、劉基字伯溫青田人御史中
丞誠意伯諡文成夏日雜興、劉基 曾樓迢遞俯清
郊、天際群山檻外交、日暖水禽鳴哺子、風輕沙燕語尋
巢、綠荷雨洗藏龜葉、翠竹煙寒集鳳梢、可嘆仲宣
歸未得、苦終日倚衡茅、菱葉荷花漸滿地、紅榴
綠條正相宜、天邊日出園葵覺、地底雲生柱礎知、長夏
未應炎暑過、薄寒恰似晚秋時、朝來苦怪雙青鬢、輒
向風前一學素絲唐明詩發安仁驛、鷄鳴發山驛、
人黑路彌險、煙樹出猿聲、風枝落螢點、江秋氣轉尖、
嶂濕雲難歛、佇立山雨來、客愁紛冉々、夜泊桐江
驛、伯夷清節大公公、出處非邪豈必同、不是雲臺
興帝業、桐江無用一絲風、過閩關、建溪激箭向
西流、石齒如鋒閉客舟、篙子踏歌渾不畏、行人遙望
替生愁、晨詣祥符寺、上馬雞初鳴、入寺鐘未歇、
草際起微風、林端澹斜月、僧房湛幽寂、假寐待明
發、松聲斷無人、經聲在清樾、宮怨、何處春風拂苑

醍醐方佛具圖

輪徑三寸三分減金

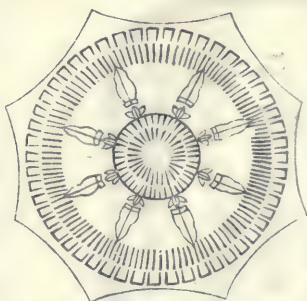


天福元年十月十一日
運智院僧正調之トアル
法具ナレバ今ヨリ六百
九年上ノ物ナリ

梅尾高山寺寶物

十無盡院藏輪

大如圖眞鍮厚一分半許



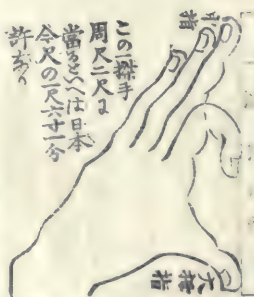
○律衣尺

四分律行事鈔唐僧道宣著

震旦國法尺寸從

俗不同、而用律歷一定勘、則以二姬周尺斗爲定、通

古共遵百王不_レ易、故隋煬帝立_二斗尺秤_一准_レ古立_レ樣、
余親見_レ之云々、佛一_レ探手准_二姬周尺二尺_一集韻。探手
度_レ物也_一行事鈔、探手者謂_下展大_レ拇指與_二中指_一相去_レ
今此說によつて圖をつくる



この探手
周尺二尺は
當_レ今_レの尺六寸一
今尺の尺六寸一
許あり

日本	四尺	一尺	六寸	一分
佛	一	探	手	
周尺	一尺	一	周尺	一尺
唐尺	一尺	六寸	七分	實一尺六寸六分 六六不盡ナリ
西域	一	肘	半	肘

○劉基硯

背銘、溫然石處士、身染墨痕香、留佇

一肘を二十四指と云、一指とは日本四尺の四分四釐七毫二二不盡
なり、これを三つにして一つを一指節と云、日本曲尺の一分四釐
九毫餘に當る、猶肘尺の條に委細にす、日本曲尺の八
寸〇五釐を周尺として其二尺が律衣尺の一探手なり

人爲貴人、位次貴嬪、於是六劉之寵傾一作後宮、

立左貴嬪劉氏一起一作鸚鵡儀樓殿、於後庭、廷尉陳元達

諫、聰大怒將出斬之、時在逍遙園李中堂、抱堂下

樹、曰、臣所言者社稷之計也、聰怒甚、劉氏時在後

堂、聞之密遣中常侍私勅左右停刑、於是乎手

疏切諫聰乃解、引元達而謝之、易逍遙園爲納賢

園、李中堂爲愧賢堂、聰子粲立、斬準爲大將軍祿

尚書事、準執粲數而殺之、劉氏男女無少長皆斬

于東市、發堀元海聰墓焚燒其宗廟

○哩々囉々 護國院開基生順真跡。天安囉々地平

哩々北斗七星如在影向一心三觀自在無礙不生一念自

受法樂「法の種心のまゝにつけなん年のはじめの

字賀の神塀、天地開闢の砌も今日の朝哉、正保五之

曆正月大吉辰餘上御歲德神

靈山一會儼然未散北斗七星如在影向天安

羅 地平哩々天海大僧正被染毫「鳥かへる山はかす


みのあなたにてのこすやあとを形見なるらん、咄々



東叡覺成
院所藏

澤庵真跡。

囉々哩禪子訝中眉垂 澤庵老拙宗「悉曇體文、哩々

囉々囉  句雙紙、三言囉囉九 囉囉哩」字

典正字通、哩語餘聲元人詞曲借爲助語、廣韻囉歌詞、

集韻囉歌助聲

○輪寶紋 春日系圖。春日兵庫助行高入道は春日

八郎行宗の長子なり、小栗合戦に功あり鎌倉持氏朝

臣より感狀を賜はる

去年五月廿八日武州府發向以來令供奉在々所々

陣就中同八月二日常州小栗城合戦之時致忠節之

由安房四郎憲實所注申也尤以神妙向後彌可抽

戰功之狀如件

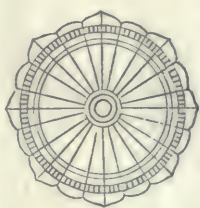
應永二十一年甲辰年五月廿一日 持氏判

春日兵庫助入道殿

此時輪寶紋之指物を添て賜はりしなり」見聞諸家紋

帳天文八年卯月十九日 佐々木秀勝判原本

輪法 三宅



も其真蹟の何方にありといふことも定かならず、近年或諸侯の藏に、明の宣宗の書に柳枝貫魚一軸あり其形様大體相似て只柳枝と竹條のかはりのみなり、仍て此圖を案するに宣和畫譜に竹貫魚竹穿魚柳穿魚の三圖なり、筆者は五代の袁義順德謙昌祐又北宋の徐崇嗣等なり然ば徽宗以前より此圖あり、因て思ふに徽廟の魚を畫かれしこと諸書に見えず、但名畫の事なれば鳥獸の外に魚介も自在なるべきなれどもいかにも見當らず、宣宗また花卉翎毛等をよくせらるゝ所より前年も徽宗と云傳へし宣徳の筆あらむ事二三度見及しゆゑ疑くは其畫よく似寄り共に帝王たる所より宣和と宣宗を相混じて此貫魚圖を宣和と申誤りしにや

宣徳五年

御筆時寫柳枝貫魚

賜學士楊偉

武英
殿
印
方



信充云宣徳五年は皇朝後花園院永享二年に當る、柳枝貫魚は立志官御の隱語にや

○劉聰 眞跡、劉主聰駕儀之營敵元達力諫、犯毒龍之鱗、徧猛虎之鬚、亦爰々乎其殆矣、世咸謂元達之生賴劉娥手疏而免、余竊以爲非、娥六劉之壹非有淑德可稱也、盖色足下以盡聰之心、悅聰之目、言聽計行無乎不可、豈徒一手疏之空言而矣乎、惟聰之所重者色、娥之所恃者色、元達之所籍以生者亦以色、孔子曰吾未見好德如好色者也、其斯謂乎、嗚呼使聰之重者果以疏而不、以色則任顓等之言已先之矣、嗚呼幸而全元達之生、使娥得名於後世、不幸元達之生不籍枝任顓等而籍於娥之色也、逮夫斬準之謀遂弑聰子繁、發聰陵、戮聰屍而焚其廟、劉氏亦爲之赤族矣、嗚呼兇暴之德孤媚之客千歲而下若草木飄風兮而煥然載青史、與朱雲輩相頡頏垂名於無窮也、元達之爲口亦賢矣哉、至正十四年三月二十有二日虎林李華在草閣上書、文化中此視せしが今その在所を知らず劉淵、晋惠帝永興中僭稱趙改元光熙、永鳳河瑞淵子聰字玄明淵第四子、晋書、聰拜大保劉殷二女爲左右貴嬪、位在昭儀上、又納殷女孫四

類聚國史、延暦十八年正月壬子豐樂院未_ニ功成、大極殿前龍尾道上構_ニ作借殿_ニ葺_ニ以_ニ彩帛_ニ天皇臨御_ニ續日本後紀、承和十二年正月乙卯外從五位下尾張連演主於_ニ龍尾道上_ニ舞_ニ和風長壽樂_ニ拾芥抄、大極殿云々蒼龍樓_{東謂之龍尾道東樓上多_ニ小閣_ニ八間}白虎樓_{西謂之龍尾道西樓上多_ニ小閣_ニ八間}大嘗會御禊記、大嘗宮は大極殿の龍尾道の前に是を造立す、又其に三丈許を去て廻立殿を立_ニ夫木集_ニとねりめす豐の明に月さえて宮人わたるたつの尾のみち法性寺入道關白

○梁年 百練抄、久安四年閏六月十五日、諸卿於_ニ殿上_ニ定申諸道勘申、當地梁年可_レ有_ニ造營_ニ哉否云々(延久元年己酉二月十日依_レ爲_ニ梁年_ニ今年不_レ可_レ作_ニ內裏_ニ之由諸道勘申)後漢禮儀志、梁神名能食_ニ鬼_ニ五行大義、日月會_ニ於大梁之次_ニ大梁西也、斗建在_ニ辰故辰與_ニ酉合_ニ此によつて辰酉年を梁年といふならん

○了然詩 眞跡、少年頃歲事難論、歷_ニ却塵中_ニ發興多、只任悟迷壽端的、壽作_ニ十方諸佛不如何、大休庵了然書_ニ墓所一覽、了然禪師名元總泰雲二世正德元年九月十八日化葬_ニ於落合泰雲寺_ニ傳記、葛山十郎義久の子長二郎某女_{長次郎はじめは駿河國富士大宮司たりしが、後京にして畫鑒の長原と稱す、又茶事に堪能}

なり幼にして大内に入て名を寄生といふ、延寶六年正月十五日東福門院崩御の後に大内を出て松田晚翠といふ者に嫁し男女三子を生む、終に世塵を厭ひ禪林に入る天和元年冬江戸に下り白翁道泰和尚に見え法を傳ふ_{かゝる世に捨て繞身やう}同二年七月三日白翁和尚遷化の菴室なり

了然花印

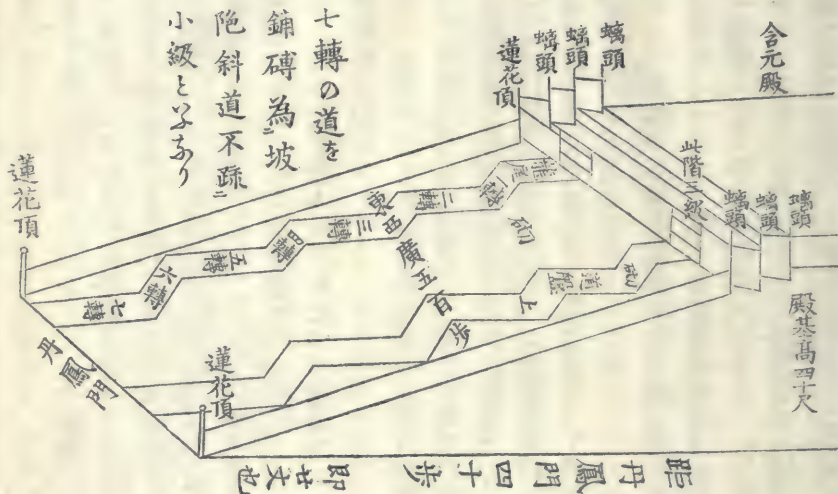


若むらさき_{元祿四年立春日本}了然尼記_レ之_ニ君があたりさらぬ心を殘しを_レく筆の跡まで形見とも見よ_{井上正利、齋藤三}

垣重治、菅沼正氏、松平昭重、田中定賢、清水宗川、岡本宗好、板くらかの茂睡、武藤安清、青木泰隆、中山道軒、吉益豐澤、有馬重廣、山名光豐、原安適、小玉某、田付圓方、よつりん風也、松定延、中山信久、城親昌、鈴木重親、伊達秀孝、小山朝三、源久通室、内藤義樞、磯田正隆、秋田俊季、光政娘、日光新門主、田村宗永、本多正昭、跡部良隆、鈴木重榮、中定格、田付直平、本田重世、やつ友益、土屋國枝直信、狩野常信、くめ、奥山良和、新庄直賢、自閑、菅沼正氏、平塚長重、後藤常廣、柳原政房、中山信治、福野綱道、山田教重、宇都宮隆綱、渡邊正、毛利玄橘母、山名矩、淺野住江菴、林直秀、最恩法師、日永可教、石原泰忠、奥山長矩、淺野長治、(天方俱通、并齊後益)等の歌なり

○柳枝貫魚圖 檜山成德記、此圖安永天明の頃多

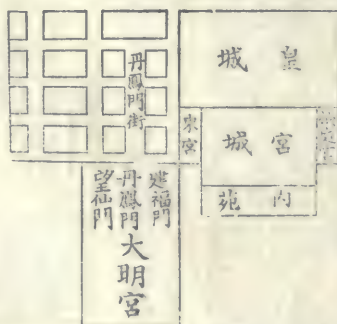
く増寫し元來宋の徽宗の圖なりと傳へたり、然れど



唐長安宮城圖

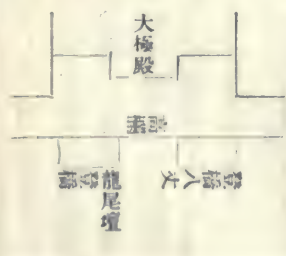
石欄、石欄柱之頂止刻蓮花、不刻蟠頭矣。泊宅篇に引と長安志求大明宮云々、丹鳳門内當中正殿曰金元殿、即龍首山之東麓也云々、殿左右有砌道、盤上謂之龍尾道。今按に砌は階也と説文に見ゆ、又は階と通ずと云、砌は階とあれば今いふきざはしのことなり

唐長安圖



拾芥抄、太極殿龍尾道圖

今按に皇朝の大極殿は殿基四丈に及ばず、依之七曲の龍尾道を作るによしなし、故にたいその石をうつけしのみ、眞の龍尾道はなきなり、登橋を龍尾道なりといふ人あれども誤なり、全く雍錄を解ざる故なり



龍、至_レ今時々有_二龍燈奇瑞_一者其此謂乎云々」江戸名所記、木下川淨光寺、いにしへより毎月八日ならびに元三の朝にはかならず本尊の御前に龍燈のあがるをはいする人少なからず云々」富岡八幡社記、寛永五年の夏弘法大師の靈示あるにより高野山の兩門主碩學の外東國一派の衲僧此永代島に集會し一夏九旬の間法談あり、別に弘法大師の御影堂を建て眞言三密の秘願を講ず、それより以後神前に龍燈のあがる事ありと云々」慈眼大師傳、寛永二十年十一月二日黃昏於_二仙波喜多院_一特修_二法事_一云々于_レ時自_二明星水_一龍燈捧_二於客殿南面杉之枝頭_一、道俗驚見各作_二禮拜_一、即時以_二走疾步卒_一注_二進此旨於日光山_一諸人感激不止云云」遠西名物考補遺_{卷八}湖澤沼池曠原山寺墳墓等ノ鬼燐龍燈ヲ現ズルハ動物植物ノ腐敗質ヨリ水素瓦斯_{ツァートルストフ、ガス}迸逸シ凝聚ノ浮游セル者ナリ、濕蒸ノ穀類糞草ノ堆積ヨリ燐光發スルモ亦同ジ

○龍尾道 龍尾道者含元殿正南升_レ殿之道也、賈黃中談錄曰、含玄殿前龍尾道自_二平地_一凡詰曲七轉、由_二丹鳳_一北望宛如_二龍尾下_一垂於地、兩垣欄悉以_二青石_一爲_レ之、至_レ今石柱猶有_二存者_一、南京新記曰、含玄殿左右

雍錄_{宋程大昌}唐含元殿龍尾道圖



有_二砌道_一盤上謂_二之龍尾道_一、按此即龍尾之形像石實皆昭然矣、康駢劇談錄曰、含元殿左右立_二栖鳳翔鸞二閣_一、龍尾道出_二於閣前_一殿門去_二南門_一二里元會來朝者仰觀_二玉座_一如_レ在_二霄漢_一含元殿南流階升_レ殿凡爲_二三大層_一自_レ下而上、其下兩層皆培_レ土鋪_レ磚爲_二坡陁斜道_一不_レ疏_二小級_一其鋪_レ磚處逶迤屈曲凡七其轉故自_二丹鳳門_一北望則如_二龍行而垂_一其尾_一是以命爲_二龍尾道_一也、龍尾云者亦附_二並龍首山_一爲_レ義而至爲_レ之名也比_二之龍尾_一也者其培_レ土處合爲_二一階_一階上所_レ鋪磚道則分爲_二兩可_一以列_レ班對上、故仁祐曰階兩面龍尾道凡六七十步也、龍尾道者其兩畔亦有_二

國、王勃春日孫學士宅宴序且傾鵲之杯、聊舉麒麟之筆、李嶠咏筆詩、握管門庭側、含毫山水隈、霜輝簡上發、錦字夢中開、鸚鵡擒文至、麒麟絕句來、何當遇良吏、左右振奇才、

○龍鱗月硯 陶穀清異錄、開元二年賜宰相張文蔚揚涉薛貽實相使各二百龍鱗月硯各一、鱗石紋似之月硯形似之、歛產也

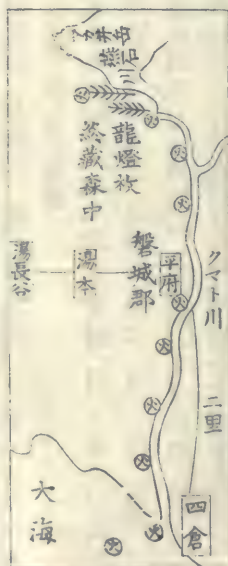
○龍尾硯 王氏彙苑、鮑鯨畜龍尾硯、友人欲之而不言、鯨心許之、友人不告而去、乃徒步追及送之

曹繼善歛硯說、按龍尾山在婺源縣長城里、亦名羅紋山下名芙蓉溪、石坑最多延曼百餘里取之不絕、山堂肆考、宋張仲幾有龍尾紫石硯、東坡以銅劍易之、蘇易簡硯譜、歐陽修云歛石出龍尾溪以金星爲貴在三端溪上云々、青州紅絲石爲第一、斧柯山第二、龍尾石第三云々

○龍燈 水戸赤濱 長玄珠著 府城之西二十里有

阿伽井嶽、每夜有如燈者來、俗謂之龍燈、余嘗親觀之、初昏戴星時四倉海上火光浮出、泝竈川及溪水至此山麓、飛懸大杉梢、又飛入森中不見、又續來者亦然自海至、杉火點累々相追自昏至曉不知其

數幾許、凡月夜則光微、暗夜則如螢或如炬、蓋陰火也、但此火坐此山岬燕石上而觀之、從他處觀之無一點光影亦奇也、如夫時珍所載蕭丘澤中寒炎肇



湖所謂洱海陰火或蜀川廬山神燈、其事雖相類、至於每夜不變猶星辰運行不知果同否、可謂陰火中之尤奇者矣云々、木下川樂師緣起嘉曆二年淨光寺覺大師東方行化之時暫留淺草寺、一日有白髮翁來曰、東北有靈地、吾安置靈像、彼像傳教大師所造也、言已形隱、慈覺大師使出臨東北、忽然起瑞雲、青龍現雲中、覺大師潛出寺尋青龍、到庵所一拜佛像、而青龍猶現在、覺大師向瑞雲告青龍曰、吾有一言、神龍聞之、吾欲建寺於此、神龍能加護之、莫令不祥、自今以後神龍爲護伽藍神、青龍不動垂頭而聞、言已龍形隱、覺大師爲吉徵、即名山以青



右龍膽立涌古綾

龍膽
蠻繪



窠
唐花
云
ベキカ



日野俊光卿狩衣織紋龍膽鹿



久我家

高倉 六條 庭田等家



中院家



堀川千種等家にて用之歟



○鱗角筆

拾遺記、張華造「博物志」奏於武帝「帝賜ニ鱗角筆」以ニ鱗角「爲ニ筆管」遼西國所「獻也」淵鑑類

○畫三 チウサン

寶曆四吉原細見、

クルワ

曲輪品定、太夫八十二

夕

江戸町一丁目 花紫、濃紫云々

●●

印さんちや、ちう

や金三分

江戸町一丁目 あげまき、よしまき、玉芝、染

衣、はた巻 同天滿 かつ岡、かよひち、小式部、同巴

豐浦、あふさと、そのはら、とみすみ、同ふ 巻絹、

しゆん山、まさ芝、同松葉 瀬川、初浦、はつ浪、その

梅、同萬字 吉十郎、やくも、同二丁目 きくぞの、大わ

やわかな、つる 若紫、丁子 てう山、ひなづる、みな

とち、そめづる、かほる、しげ浦、ときはづ、しら

玉、平野 てう山、今紫、住町 右京、中萬字 れん山、た

ち花、山口 ふた巻、みつ花、京町一丁目 よしの、かなこ

しきぶ、なを波、さくら人、なみ江、小紫、しまの

介、同二丁目 加すがの、勝山、二の江、中近 すみのえ、

半太夫、龜づる、あふみ、みやこち、若くさ、くれ

なぬ、にのまち ○すべて畫三五十七人あり盛なりといふべし

柳菴隨筆利字篇第九

○りんだう

徒然草、家にありたき草は云々 かる

かや、りんだう、きくきやく

古今集、りうたんの 龍膽

はな、

ともりの「我宿の花ふみしだくとりうたんの

ばなければやく、にしもくる、」枕草紙、草のはなは

かるかやりんだうは枝さしなどもむづかしげなれど

こと花みな霜がれはてたるにいと花やかなる色あい

してさし出たるいとおかし」春曙抄、りんだう龍膽

也、古今の物の名に云々、基俊の悦目抄にりんだうの

花を手むくるきほうしの經よむ聲はたふとかりけり

と俳諧歌により

拾遺和歌集 名 りうたん「川上

にいまよりうたん網代にはまづ紅葉ばやらんとす

らん、藥草略譜、龍膽和名クタニ又リントウ花九月

開碧白二種アリ云々

本草綱目 三 山草 龍膽 本經釋名

志曰葉如龍葵味苦如膽因以爲名 陵游云々

雲上名鑑 村上 久我家 紋龍膽車葉五枚花五

中ノ院 龍膽車花 六條龍

久世、岩倉、千種、梅溪、愛

宕、東久世、植松、

宇多 庭田 龍 綾小路、五辻、大

原、慈光寺、

清和 竹内 龍 或家記 龍膽 は利刀の音にか

よふが故に武勇の家に紋とすと云

柳菴隨筆知字篇第八之下終

一 本頼胤

宗胤

介

胤貞

大隅守
宮方

胤高

金澤瀬戸神主
胤義

胤祐

中山三世
日祐

胤宗

介

貞胤

介

尊氏方

氏胤

介

滿胤

介

増上寺開山
西譽

入道常輝
馬加陸奥守
康胤

胤持

自秀
七郎
初石濱二住

兼胤

介

胤直

介

中務少輔
賢胤
入道了心

實胤
康正元市
川籠城

自胤

胤將
新介
胤宣

○千葉寺

檀林巡路記、千葉寺觀世音坂東札所也、此寺は増上寺開山西譽上人眞言宗に剃髮し給ひし古跡なり、坂上まで二町此村を千葉寺村といふ

○ちはや

服飾備考、禪チハヤ巫ノキルモノナリ

○ちぎり

或説、男女の間に交連するちぎりといふに比して石にもあれ木にもあれつなぐもの、間に

の如きものをちぎりといふ

○搏風

神武紀、搏風延喜祝詞式、皇神能敷坐

下都磐根宮柱太知高天原爾千木高知氏云々眞淵、チ

カヘ木ヲ略ナルベシ

○乳付の旗

畠山譜。政長義就家督爭論により合戦

に及びし時政長はじめて乳付の旗をさへせける云々

○ちりめん

華夷通商考、南京土産云々縐紗云々

浙江土産白糸縐紗 福建土産白糸綾子縐紗 廣東土産縐紗 東京交趾土産縐紗 前漢書江充傳。充衣二紗

穀禪衣註師古曰紗穀紡絲而織之也、輕者爲紗縐者爲穀增韻。縐紗爲穀紡絲而織之、釋名。穀粟也其文足々而跟々視之如粟諸布重實記。縮緬六丈物

大廣貳幅物金尺二尺中廣尺幅唐西庄縮緬同屋形常幅一

尺六 狹十丈物同 唐縮緬 上州縮緬 丹後縮緬

京縮緬 同紋縮緬 美濃濱より出せ 山藪縮緬 濱縮緬

江州長濱より出、丹後の極上に准 美濃縮緬

らざりしを云々」東鑑、文治廿二年三月十七日陸奥

國白河領元信頼卿知行、後小松内府領事此處不輸知行候但未辨本

家二若爲三院御領歟可濟三年貢一候歟云々

○中宮 職員令、中宮職謂皇后宮、其太皇太后皇太后宮亦自中宮也扶桑略

○千葉系圖 増上寺本。常胤

記、長保二年二月二十五日癸酉皇后宮藤原遵子爲皇

太后一世謂之四條宮同日中宮定子改爲皇后宮同

日彰子爲中宮一條院二人の后を立られ、一を皇后宮と云、一を中宮と云なり

○陳德澤 畫題、福清陳德澤筆

時胤 頼胤 胤宗 宗胤 貞胤 氏胤千葉介

滿胤 介 實胤 守胤 惟胤 正胤

胤明 兼胤 胤直 自秀千葉介 自胤中務少輔隅田川三跨城主

母新田左中將 義貞女 幼名德壽丸 後出家大蓮 社西警上人 聖聰大和尚 増上寺開山

本 葛原親王 高見王 高望 良文 忠頼

忠常 上總介 常家 上總介 常隆 上總介 廣常 上總介

千葉次郎 常永イ長 常兼 常重千葉下總介 常胤 下總介 胤正

たる成綱が所務にしてまた其内より百姓に與ふるなりたとへば麻埴保水田白田合四拾餘町 但一町獲稻上中下平均四百束

獲稻一萬二千餘束 此粟今京升二千四百餘石あるべし

五分之一稻二千四百餘束 内藏寮運上分 此粟今京升四百八十餘石 三斗五升

俵として千三百七十餘俵に當る 保司職進退分

殘九千六百束餘 全地頭分

内 農民所得四千八百束餘 成綱所得四千八百束餘

如是なるべきを成綱内藏寮運上分地子を抑留して運上せざるによりて康賴歎狀を捧げし也、よりて關東の下知として運上分を除きて成綱が所務の分を中分せしめたるなり

二千四百束 内藏寮濟物

二千四百束 康賴得分 成綱抑留過怠

二千四百束 成綱得分

四千八百束 農民得分

二千四百束抑留したるにより四千八百束過怠を請たるなり、賴朝卿の頃は如此なりしを延應の時には本年貢の三分一を新地頭の所務とせし也

二千四百束餘 本年貢

八百束餘 新補地頭分

百三十三束餘 守護給

八千六百六十束餘 地主分 農民分

是は前の麻埴保の勘定なり猶別に租稅考に云べし

○地藏菩薩 地藏佛感應畫贊、詞書筆者兼好法師

繪土佐光康足水軒所藏「地藏菩薩祕記」元祿三年沙門淨慧刻本地藏

尊秘中深祕在蓮華三昧經蓮華三昧經今我朝相傳由

來者予養父西園寺入道前太政大臣爲孫竹園院禪師

齋三千五百兩金投異朝雲欲覓天台聖教甚深祕

密妙旨之意也時清涼山大聖竹林寺長老澄湛和尚爲

五臺修造替五百兩金開不思議童子寶藏送此蓮

華三昧經云々地藏以諸地獄爲藏地獄本來常寂光

淨土云々

○糶汰瓶 字典、糶釋滓也「徒然草、糶汰瓶一つ

も持まじき物なり」或書、我家の庖下よりは隣の糶

汰瓶

○塵取興 春日記錄、至德二年三月二十七日の條

取興あり

○知行 正徹書記ナグサメ草、近江の小野の庄播

磨の細川庄は和歌所の知行にて五條の三品よりかは

十四世 行豐
十五世 行康
十六世 行季

竹内 入木道相承
良恕法親王

權中納言
基孝

實基育子

權大納言正二位
基定

入木道中興大祖

基久 左中將
侍從從五位下
基征
元和元五七横死

基時 入木道鄧曲相承

基輔

基雄

家胤

宗時

基武

基敦

從四位下 下野守
下總守

基延

大澤下野守
基貫 侍從

基清

基業

基年

基靖

左京大夫
基隆

修理大夫
基休

○地頭得分

東鑑纂補、延應二年六月十一日於前
武州御亭有臨時評定三ヶ條事、一新補地頭得分田
畠加徵物事於本年貢一斗所者可爲參分一者東
鑑、文治四年三月十四前廷尉康賴入道捧歎狀是去
年拜領阿波國麻埴保保司職、仍雖遣使者、地頭野
三刑部承成綱不能許容之間乃貢空手由載之當保
者內藏寮濟物運上地也成綱固抑留之間度々被下院

宣訖然者除三件所濟、而康賴可中分、之旨被下御
書云云

此條を熟讀するに阿波國麻埴保は内藏寮の領地に
して康賴入道その地の保司職たるなり、次に野三
刑部承成綱は麻埴保の地主たるなり、さては年貢
は麻埴保の田畠より出す處を按りて租税の法に依
て内藏寮に運上す 此内藏寮運上の内にて 其殘りは地主
保司職の分を取なり

ハシ車ノ紋ノ御旗錦母衣ヲ贈リ給ヒ其軍勞ヲ賞美セ
ラレ甲斐ノシクモ御生害アリ

○持明院家 知譜拙記。 大織冠鎌足

不比等

房前

眞楯

内廩

冬嗣

良房

基經

忠平

師輔

兼家

道長

賴宗

宗俊

嗜弓馬好鷹犬

號持明院

馬藝鷹弓等爲家業

俊家

基賴

通基

基家

中務大輔
鎮守府將軍
正五位以下
武畧達人辭而
不昇殿保安三
五二七卒八十三

大藏卿
正四位下
久安四十
十卒五十

權中納言正二位 元長基
建保二二二六薨八十三

女

後堀川院

基宗

家行

家定

基盛

基世

基兼

基清

二男

基長

四世孫 領丹波大澤稱大澤

七世 基宥 基定實父

入木道祖
△行成卿
十三世

○行俊

爲行俊弟子
基親
學入木道

基繁

從三位
基信

參議
爲行季弟子
基春
學入木道

權中納言
基規
忍軒

於防州山口討死

愛寺にまたがれり故に此井を稱して千代の井と云

應永宗脈。圓覺開山祖元景愛尼如大○按に無學祖元禪師入寂なれば此禪師に剃髪を受たらんには如大は尊氏卿未生以前に出家せしなり

○兒の髪 文晁所傳兒髮圖

○兒の髪



○ちから革

延喜左馬寮式、牛革四條各長四尺已

下二尺四寸已上廣三寸已下一寸已上鐙鞞并力革料

長三尺廣三寸鐙鞞料 長三尺廣一寸五分力革料

鐙鞞料

長 三尺

力革料

長 二 尺

おれを裁り如圖され鐙鞞二条とかる

長 三 尺

長 三 尺

又力革の料の皮を以て二川お裁まれ、如圖

一 尺 五 寸 一 尺 五 寸

力革

此二尺五寸に一寸五分の皮にうかりと證とをうふ



此古代の鐙鞞刀革の制

○知久家旗

寛永系圖、室町將軍の君達より錦の

ほろならびに車の輪の紋を賜はるその書狀今猶家に

藏す云々」知久家譜、享保七年三月二十一日知久監物

頼久家傳の錦母衣并車輪の旗を上覽に備奉る」浪合

記、應永三十一年三月二十四日尹良親王後醍醐天皇ニハ御孫宗良親

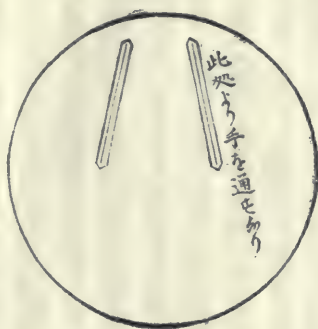
王ニハ下野入道政滿ヲ召テ其方ハ下野國落合ニ行此

由ヲ良王君尹良親王ヘ語り再新田世良田宮方ノ一族ヲ集

メ合戰可レ然被ニ仰付、又使ヲ知久四郎入道祐超ニ遣

城氏家譜、城和泉守昌茂はじめ武田大膳大夫晴信に仕ふ云々晴信着する處の陣羽織を與へてその軍事を勇しむ、その羽織今猶その家に傳ふ

明智譜、明智左馬助、永徳が書たる雲龍の陣羽織着て三山の甲にて湖水をわたり坂本に入と云、九鬼家傳、九鬼家の陣羽織とて或家に傳へたる物を見しに圖の如し



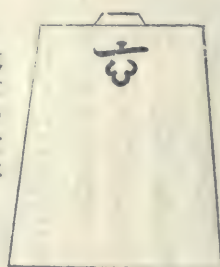
○中和節 唐書李泌傳、德宗以三上巳九日、皆有宴樂、而寒食上巳同時欲下以二月一名節泌請以三二月朔日爲中和節、貞元間中書門下中和節初賜金銀給百官宰相以下、於曲江合宴云々二月朔日民間以三

青囊盛百穀瓜菓種、相問遺號爲獻生子、閭里釀宜春酒、以祭句芒神、祈豐年、百官進農書、以示務本、乃著令與三上巳九日爲三令節、

○ちよのふ 夢窓年譜、康永元云々正脉菴者尼如大爲佛光所建也、佛光與如大長老、手書并手染牌額等諸大字收在本菴、其書略云汝受吾衣法道風大行老懷懽喜骨髮少許分留與汝汝爲安奉別置一小禪刹、代吾分化須當竭力不得違吾之志、今寺之興莫是祖翁冥有所待也、國花萬葉、山城、千代野井洛北日蓮宗本隆寺にあり、古金澤越後守顯時が女足利讚岐守貞氏の後妻尊氏卿の異母に夫人千代野と云ふ女剃髮して如大禪師無着尼と號す東西の諸禪に參し日夜坐禪勤行す美濃國松見寺の老尼に仕へ賤婢となり諸尼のために薪をとり水をくみて仕ふ時かつぎし桶の底ぬけて水ことくつきければ忽然として大悟し則和歌を詠す「とにかくに頼みし桶の底ぬけて水たまらねば月もやとらず、鎌倉に歸り佛光國師の許にて剃髮し諸寺を経て京師に入り高族の財施を得て洛北の松木島に一字を建立し景愛寺と號す是尼寺五山の甲に位す本隆寺の地松木島の内にして景

間稱_下非_ニ兼盛之子_一由_上深稱_ニ時用_ニ云々、兼盛可_レ合_レ血之由_ニ申_ニ云々其藝能尤可_レ謂_ニ兼盛子_一歟_レ類書纂要、陳業兄渡_レ海傾_レ命時依止者五六十人骨肉消_口不_レ可_ニ辨別_一業仰_レ天誓后土曰間親戚旨必有_レ異焉因割_レ臂流_レ血以洒_ニ骨上_一應時飲_ニ血餘皆流去_レ群國志、陝西安府同官人孟姜適_ニ范植_一僅三日植赴_ニ役長城_一姜送_ニ寒衣_一至_ニ城下_一植已死姜尋_ニ夫骨_一無_レ辨嚙_レ指血驗_ニ之得_ニ云々_一內訓_{明太宗}秦范杞梁妻孟姜嫁三日夫赴_ニ役長城_一久不_レ還節已寒冷姜送_ニ綿衣_一得_レ信赴_ニ夫死_一姜哭泣_ニ之_一長城_ニ尋收_ニ夫骨_一骸骨盈_レ野無_レ辨別_一嚙_レ指流血洒_ニ骨驗_ニ之累々枯骨中得_ニ血漚拭_ニ之不_レ流者_一收_ニ得_ニ之首載還_ニ鄉至_一潼關_ニ身疲力盡困死土人哀_ニ之葬_一之造_ニ像立_ニ廟_一云々文化丁卯。永代橋の變にあたりて死せしもの、屍たゞれて見わきがたかりしものも多かりしに身よりのもの出來りし時にその屍より鼻血したゝりしといへり」又近き比子が許へしたしく來れる大工の弟子いかなる事にや井に入て死しけるが日數へてとりあげつれどもたゞれて誰とも見わけがたかりしにその師匠の大工ゆきしかば屍よりはな血ほとばしり出たりと云り

○陣羽織



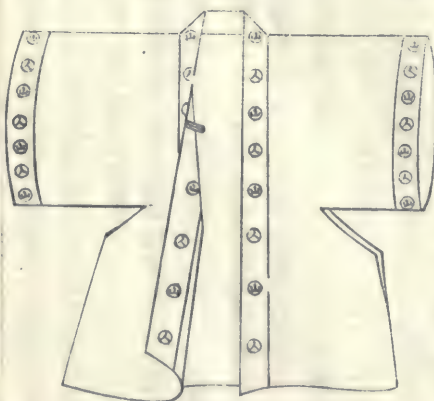
信玄の玄字
あらんり



城氏の城字
あらへ

紋羅紗切入

鈴木氏家藏豐
臣右大臣秀賴
公陣羽織
地黒天鷲絨裏ナシ
寸三尺ユキ一尺六
襟幅四寸四分エリ
黒襦子紋金ノスミ
出シ文字スミ
袖長一尺六寸五分
幅一寸八分
同紋表裏ニアリ袖口



唱へ給ふ此等も俗に習ふことにやされど後成恩寺關白の公事根源抄にも此事書れたればいかさま昔より世俗に有けることゝ見えたり云々輪二つを越て御うしろさまに出おはします此後此輪を女御以下みな越ことなかいせ給へり次第に入はてゝ後輪を東の簀子に差出て簾皆たる六位の藏人參りて輪の本に候す内々の男衆次第に入終りて藏人退く又とり入て下々へくだす采女女官女嬬お物に局々の官女に至迄みな入終りぬ服者月のさはりの人はいらす同抄、みな月の輪ちかやにて造る輪ふたつをまげて如此つくるなり茅の下の輪に御膝をかけてふみて入給ふ上の輪を御冠の上よりかけてくらしめ御もどりに二つ共にふみて出給ふ也すべて三度なり堂上など所勞の時は裝束をくらしめ給ふ

○注千字文 濫觴抄、李遷注千字文云々注千字文、序梁大夫内司馬李遷云々梁書に大夫内司馬と云官名見えず天地玄黃注、玄黃本作三元黃避御諱以元代之也宋真宗元の名は元侃と云官名見えず宋真宗元の名は元侃

○ちば 瓢簞町之記寛文年中昨日者契ニ比翼連理一親、今日者變天地雲泥一交晝獨居閑局一身云三千話慕眞夫云々

○地子錢 古文書。定 京中地子錢永代令ニ赦免

畢、若從公家寺社方、地子錢内收納有來分者相計替地以可致沙汰事、諸役免許事、續募孤獨之者見計扶持方可令下行事、天下一號取者何道ニテモ大切ナル事也但京中諸名人トシテ内評義有テ可相定事、儒道ノ學ニ心ヲ碎キ國家ヲ正サント深ク志ヲ勵ス者或忠孝烈之者尤大切ナルコトニ候條下行等于他異可相計之其器之廣狹能尋問可告知之事右條々相計可申付者也

元龜四年七月七日

信長判

村井長門守

信長譜、天正元即元龜四年信長命所司代村井長門守一赦

京中地子錢云々天正十年六月光秀置所司代一免洛

中地子一醍醐寺雜事記。越智四至内事但粉油合陸町

賀郡布里二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七所當地子段別粉三并油三合也延喜主稅式、凡公田

穫稻上田五百束中田四百束下田三百束下々田一百五十束地子各依田品令輪輸五分之一

○血を合す 江記、赤染時用女也、依歷右衛門

志尉等一號ニ赤染衛門一實兼盛女也云々離別彼母一後

稱有女子、欲尋取之處母惜而稱不之由、相論

之間爲道檢非違使時用沙汰之間與彼母一密通相住之

下故漢兵善用者巧ニ於戎人此器などの轉

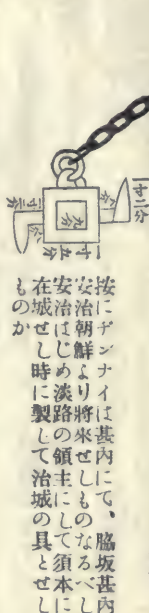
徑一寸 長七尺四寸



藤卷三寸二分

クサリ廿五長一尺五寸

石突 二寸二分



按ニザンナイは甚内にて、脇坂甚内
安治朝鮮より將來せしものなるべし
安治はじめ淡路の領主にして須本に
在城せし時に製して治城の具とせし
ものが



○茶式部

音無川

寛永五年の書

聚樂の茶亭の女常に歌を

好み折にふれたる事など三十一字についで口ずさ
び人にも語り慰みしを誰いふとなく多くは他の詠る
歌なりといひふれしを聞傳へ口をしくやおもひけん
或時人の袖を引とめて是非に題をと請ければ古の
小式部がふるまひに似たりさらば我等が身の上火事
たる人をよめといへばしばし案じて「古郷は焼野とな
りし人と聞ばさぞ早蕨の名をも厭はむ」と書したる

手跡もいつくしく仰そむかぬ迄に候覺させ給ふなど
いふ是より世に傳へて茶式部といひける

○茶神

全唐詩話

陸鴻漸始創ニ煎茶法至レ今嚮

茶之家陶ニ爲其像ニ置ニ於湯器之間ニ云宜茶足利云々今
爲ニ鴻漸形ニ因目爲ニ茶神ニ有レ售則祭レ之無則以ニ釜
湯沃之國花萬葉、山城、通圓茶屋、宇治橋の東
に古へ通圓法師と云者宇治川の傍に茶屋をかまへ往
來の諸人に茶を施して結縁とす、近世又人有て其跡
に茶店を構へ棚を設け古の通圓像をかけ往來の人に
茶を賣て便宜をなす

○茅の輪

法性寺關白御集

藤原忠通公近衛九條兩家大祖

六月秋ノ詩

世上久爲流列態、林鐘晦日禊除衆、詠無他詠千年
頌、期有ニ定期六月風、苔地燎幽迎レ夜處、石湍水冷
欲ニ秋中、未レ知何物號ニ菅菰、結レ草如輪令ニ首蒙此詩の意
にては茅の輪を首に戴きしなるべし後水尾院年中行事、六月晦日云々御
藏みな月の輪を調進す云々中臈臺盤の本によりて輪
をとる麻の葉さしたる竹をぬきて麻の葉ばかりを輪
にとり添て御前にもて參る云々上臈輪のはしをもた
ぐ先左の御足をふみ入賜ふ次に御右みな月の名越の
はらへする人の千とせの命のふと云歌を御口の内に

候は中間より下り馬屋の者より上候、公家には中間を雜色と被仰候」奇異雜談、足輕一人朝飯いせんに隔子の紋の帷子に蒔黄のもしの十徳にかたな脇指にてやどをいづ、中間はかた衣よの袴にて主の笠を頭にかけて手やりをかたげて跡にゆく云々

○近松門左衛門 或書、相國寺宗長老の弟を杉森

門左衛門と云長州萩人なり其弟を岡本一抱子と云其妹を錦江と云俳諧師たり」音曲道智篇、爰に天和の頃近松門左衛門と云人出て新作を書たり京都の産にて姓は杉森氏なり、始は堂上方に仕官して其後近江國近松寺に遊ぶ故に是を苗字に呼けり、都萬大夫が歌舞伎狂言を書たり竹本座の新作を百餘番作りけり義太夫が妙音に移し聞人感通す、文體拙からず儒佛神に能わたり譬ごとに故事を引き貴人高位の御耳にふれさせ賜ひしよりお初徳兵衛が道行の文に智識も耳をそば立給ふ事舉て算がたし、終には天下に名を發にはやる事數十年爰に詞書の讃す

堪能の人言しはふしにはふしなし言葉にふしは詞にふしなし節に語て節に語なと言ことあり、此六の者は得安きさまにて得がたきに能得たる人はた

きや

前筑後掾藤原博教
一ふしを語り殘してうつし繪に今も聲ある竹の面かけ

近松門左衛門平安堂

花林子讀之

此讀大和掾有隣子が繪絹に染て末弟泉舍松主に譲り置れ江府狩野梅笑筑後並竹本二代目播磨翁大和掾がたしかなる年に似せて物しけるを此道の家實にして藏す近松作右大將鎌倉實記を筆の名殘として享保九年甲辰十二月二十二日七十餘歳にして泉客となりける世辭「去程にさても其後のちのこる櫻ははなし花は匂はし、法名阿禰院穆矣具足居士」本化正宗靈簿。阿禰院穆矣日一具足近松門左衛門享保九年十一月二十一日 ○肖像は人知

○ぢんない 阿波少將齊昌朝臣手書、先比のぢん

ないの出處何にもみえ候にはなく先比進じ候圖の品いにしへより城内に有之候が古來よりぢんないと唱へ來り候事に候

三才圖會、鐵鏈來棒本出「西戎」馬上用之之以敵漢歩兵「其狀如」農家打麥之枷「以鐵節」之利「於自」上擊

玩貨名物記萬治庚子 歲板本 御物御茶釜 すち 織部、圖 前ニ見ユ のみ

そ そうせん即宗善ナ 大あられ圖前ニ見ユ しなのかま

たいかうたう 口なし口ナシナレバ是ヲ云フ へんたん

ふろ釜織部瓢箪 ナルベシ めうもんあられふろ釜 圖前ニ見ユ

○地火爐 大内裏圖考證。後涼殿云々右近陣南廂

下板地火爐 別板敷侍從所南廂北面西第一間壁西面

壁地火爐南面脱履後三年合戰記、地火爐ついでに按

ついでに築てなり、今も遺をつくと云ふ語あり、思合すべし

○中間 布衣記永仁年中中間事折烏帽子小結常なり

染直垂に大帷子を重ね袴に大口をかさね云々是中間の 服飾をい

へ東鑑、弘長三年八月八日云々御中間信濃判官明清

源平盛衰記。宮高ヲ女房ノ形ニシタテ參ラセテ亮ノ

大夫宗信ニケシカル直衣小袴キセ奉リ黒丸ト云御中

間ニウハ差シタル袋モタセテ御所ヲ出シ參ラスル

驢驢斷餘、寺家年頭ニ武家御所へ時云々若黨中間ア

リ云々海人藻芥宣守僧正、長門跡人數上下事出世者

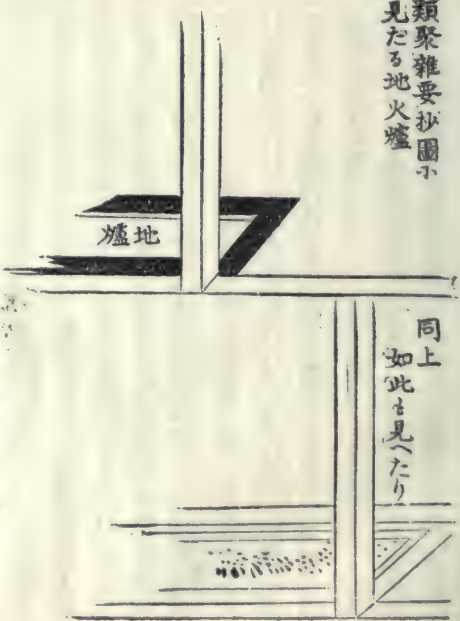
大臣の息より殿禪侶 自諸大夫子至北坊官自大臣息至

上人の子稱之是在家法師也、限貴侍法師勤三中童子中間法師

所門跡被召仕之云々武雜記、天正二年七月六日首注文中彦六苗字宗

五大草紙、公方様御中間とてはなく武家に雜色と申

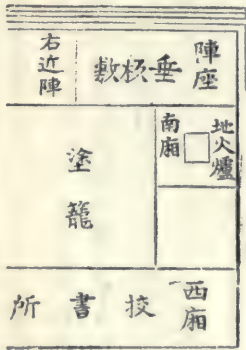
類聚雜要抄圖小
見たる地火爐



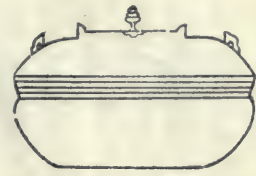
同上
如此も見へたり

大内裏圖

春日御驗記圖
に見へたる地火
爐なり

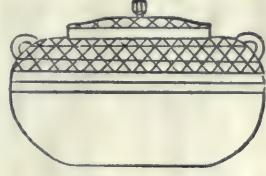


大面取



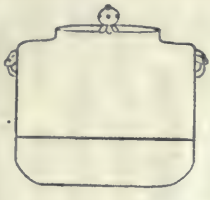
口三寸六分
腹九寸三分
高五寸四分

籠目



口五寸六分
腹九寸二分
高五寸
天明八年正月御修之復之節寫

車軸



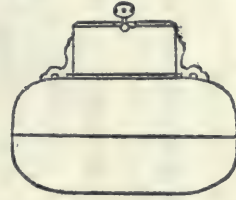
釣御釜

九雪



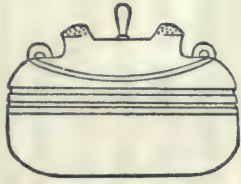
口四寸五分
腹九寸
高五寸
銀付栗形

梶ノ御釜



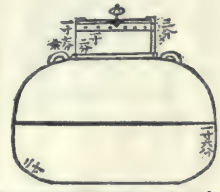
口三寸九分
腹九寸
高六寸六分
銀付梶

織部筋



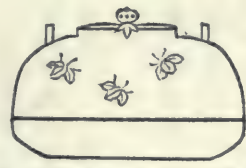
口四寸二分
腹九寸一分
高五寸六分
銀付栗形

宗善



火請五寸三分
口三寸二分
腹八寸四分
底八寸五分
甲高四寸五分
銀付長一寸四分

上張



口三寸八分
腹九寸五分
高五寸五分
銀付上弦

織部瓢箪



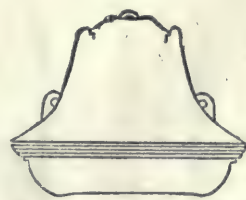
口三寸三分
腹七寸三分
高八寸三分
火請四寸
總地貼
(鉢方)膚

九輪釜



口四寸九分
腹四寸六分
高七寸九分

御釜



口大三寸
腹九寸三分
高六寸八分
天明七年十一月

大儀釣



口三寸四分
羽先八寸
腹七寸六分
甲高四寸
六分
鋪付遠山
鶴首網地
共蓋紐節

漣仍銀鎗子獸炭須臾炎氣盛盆浮沸浪花起鞏縣坑商家

盤吳鹽和_レ味味更美物性由來是幽深深_深岩石髓不_レ勝

此煎能餘香處々薰飲_レ之無事臥_二白雲_一應_レ知_二仙氣日

氣氤_レ惟靈集_{弘仁五年閏七月八日}獻_二梵字并雜文_一表云茶湯坐

來乍閑_二振旦之書_一云々_{文華秀麗}夏_二日左大將軍藤原

朝臣閑院納涼探_二得閑字_一應_レ制_二令_一制_二此院由來

人事少_レ況乎水竹每成_レ閑_レ送_レ春薔棘珊瑚瑤色_レ迎_レ夏岩

苔玳瑁斑_レ避_レ暑追_レ風長松下_レ提_レ琴搗_レ茗老梧間_レ知

貪_二鸞駕_一忘_二羈處_一日落_二西山_一不_レ解_レ還_二題_二光上人山

院_一一首錦彥公_{梵宇深峯裡}高僧住_レ不_レ還_レ經行金策

振_二安坐草衣閑_一寒竹留_二殘雪_一春蔬採_二舊山_一相談酌_二

綠茗_一煙火暮雲間_{田氏家集}乞_二滋十三_一摘茶_{不勞}

外出_二好_二居家_一大抵閑人只愛_レ茶_{見我}銚中魚失眼_聞

君園裡茗爲_レ芽_{詩行}許摘何妨_レ決_レ使_レ及盈筐可_レ得_レ

誇_二庭樹近來春欲_一暮_{莫教_二下_二空腹_一猶看_二花_一}都氏文

集_{銚子廻文銘}多煮_二茶茗_一飲來如何和調體內散_{悶除}

不_レ輕_{本朝續文粹}茶讚宗孝言蜀山所_レ產自有_二昌明_一

煙液塵細雲漿沫生煎來虎眼慰沃人情散_{悶之計}乃切

復臂_{囊人}摧_二茶弓弦青雲上_一鼠矢恐成_二龍焙春_一重陽

茶黃茶_{按文明四年壬辰也}薄福住_二山纔過_一旬_{有_二茶無_一酒遇_二佳}

辰_茶茶黃重九菖蒲五_一一_二椀中藏萬斛春_一東遊續集

橫川_{雲脚碾殘天一方}曉傾_二北斗_一酌_二銀漢_一茶星爭

似_二酒星好_一春入_二帝觴_一餘瀝香茶星_{翰林胡蘆集}紅

雨斑々日脚斜_一一_二甌桃夢小僧家_一春風燕麥色蔡外

亂後無_二花有_一草茶_{桃花}

茶詩歌此に限るべからず後日又補ふべきなり

○茶にする 或家由緒書「光秀が持し熊毛の茶笥

やり人を茶にしてつゝたてゝやれと云御うたを東照

大權現の御自筆に遊ばして賜はりしなり_{此こと又富士の煙にも見え}

りた

○茶笥賣 下學集「茶笥」國花萬葉記山城、高山

茶笥所蛸藥師御幸西へ入町ニアリ、大扇や、三條釜

座、竹屋、四條御旅町、大和名物△高山茶笥_{大和國圖}

に、高山と云は添下郡の内にて、河内國と山城國に境たる處にして、

傍に平尾、中村、蒔田、高山と五村を云とあり、田原と云處も高山の

近處なり、宇治より程遠からぬ處なり、こゝの茶笥師_{ハタチ}茶具備

討集、茶箋 奈良茶箋 幅枝沫切_{尾張并加賀_{昔_{ハ用}}}和訓栞、空也の流をくむもの茶笥を賣も竹簾より起

りたるにや_{カネウチ}高崎志、磬打ト云ハ遊行上人ノ門徒ナ

リ茶笥ヲ作ルヲ業トス

淵嘉廣習傳削竹茶杓一亦人之寶物也此に鐵牛禪師自牧稿、

大原休意行年八十素嗜茶善製茶杓有_レ名云々山

岡明阿説、禪聰慈照院殿時人、惠比須堂紹興時代人、

養仙坊同法華坊主、宗易尼川養仙坊一阿彌佐目井寺人、

御朱印を賜ひ、天下一と云、珠和漢諸道具見知抄、茶杓

光寺に住する故に珠光一阿と云し將軍公方家に相阿彌茶杓真

之次第能阿彌真能と稱す仕て童坊たり相阿彌茶杓真

相と稱す能阿彌が孫なり珠光茶杓南都光明院住

持宗珠茶杓珠光が一男也紹興茶杓後奈良院御宇弘

治元年十一月二十九日死去せる人也、茶杓に節な

し又象牙あり利休茶杓天正十九年二月二十八日死

去す茶杓貝先すこし長し筒にけら判あり、古田織部

茶杓小堀遠江守殿茶杓すぐなる物なり筒に名あり

或は歌あり又は銘あり道庵茶杓宗旦茶杓道安が子

也茶杓小ぶりなり筒の前後けづりである也又大ぶり

なる茶杓もあり少庵茶杓利休女房の弟なり向井

將監殿茶杓多賀左近殿茶杓桑山左近殿茶杓金森

宗和茶杓片桐石見殿茶杓船越伊豫殿茶杓堺甫竹

茶杓北向道陳茶杓瀬田掃部茶杓利休之弟子大德

寺江月和尙茶杓國花分明集和泉圖、甫竹茶杓本は利

休より傳受す、古田織部正また是を恩寵し賜へり、

或時台德院殿へも召出されて御茶杓を獻す、今に子

孫甫竹と稱してこれあり△山城國茶杓并自在竹師數

寄屋一齋寺町二條上ル田中元齋綾小路覺清萬竹細工

○茶の歌一條禪閣藤河記、野上の茶屋にこしを

たてゝまたざれ歌を「旅人にめまし草をすゝめす

は野上のさにとひるねをやせん」醒睡笑、茶是釣睡

鉤とありまた食を消するともいへり「わが門にめさ

まし草の有なべにこひしき人は夢にだに見ず、など

いふて人々ほめはやしのむ末座に百姓の候てそれな

らば我々は一期茶をたち申さん終日骨をりても夕と

くと眠り候て辛身をもわするれ又たまふとぼしく

て喰ふめしの消ては何の益かあらんあらいやの茶や

と頭をふりたれば云々春雨抄、茶の歌として「くもる

なり雨ふらぬまにつみてたけ柵尾山の春のわか草、

日重上人聞書、めさまし草といふは茶の事なり

○茶の詩經國集。與海公飲茶送歸山一首

太上天皇道俗相分經數年、今秋晤語亦良緣、香茶

酌罷日言暮、稽首傷離望雲煙、雜言和出雲巨大

守茶歌一首惟氏山中茗早春枝萌芽採擷爲茶時

山傍老愛爲寶獨對金爐炙令燥空林下清流水沙中

るの類何ぞ雅といふことを得ん、此四字を知ざる茶人は更に言にたらず、春臺獨語に茶碗は古くむさきを喜ぶと書たるは茶をしらぬ茶人の所業を見ていふなり、既に利休は古物を貴ばず茶碗は長祐常慶に焼せ茶釜は與次郎彌右衛門藤左衛門等に鑄させ、形まで時の好に應じ古きを摸すを要とせず、花入茶杓は自身に作り更に難得を貴ばず墨蹟も當時の人を用ひたり、然るを未練不學の人誤て作意を旨と覺しより大にその道を亂したり、古織の圓悟禪師の墨蹟を截斷して二幅となしたるは深意あり、まづその掛物のことをきくに

別想念處 總想念處

如此の二行なるを二つに切て二幅となしたりとかやもし然らば深く甘心すべし、語は別想念處總想念處と天台の想念觀心を書したるなれ共茶室に掛るには別想念處は甚よし總想念處は茶室の外の事になりて

甚わるし、よりて斷截せしならん、古織はよく此語意を解して切たるは和にもなり雅にもなり中々普通の人の及ぶ處にあらすと、人掛物の語意を解さずして徒にその名印を賞するは眞の茶人に非ず

○茶書 茶器備討集一溫軒宗全 利休百首 長闌堂天文甲寅書

之記 北野大茶湯記 君臺觀左右帳記 茶道祕錄承應四年

村家傳道治釜之圖錄 名越家系 千家寸法記 京都岡本休意

大阪數寄屋圍差圖 千家起シ繪圖 石州流寸法記

數寄屋置合記 道具圖 茶入棗之圖 名物類聚 手

前寸法圖 茶人系圖此外板行の書數部あるべし

○茶杓 續茶器備討集端錄、茶杓細工人 珠德

羽淵 紹鷗 利休 掃部瀧田 三齋 慶首座、千家

は道廉 少庵 宗旦 江岑 隨流 原更 如心、同

裏にては仙更 常更 泰更 笠更、武者小路は一翁

文叔、久田は宗全 其外は桑山宗仙 片桐石州宗關

松浦鎮信德祐 佐久間將監 小堀遠州宗里 蓬雪小堀權十

耶 舟越豫州 金森宗和 貞置 庸軒藤村氏宗旦門人 山田

宗偏 杉木普齋 其外諸流の作夥數あり略之 茶器

備討集、茶杓茶匙 象牙茶杓昔數寄者周德所作之竹茶杓當世數之爲名物、捺竹有習羽

備討集、茶杓茶匙 象牙茶杓昔數寄者周德所作之竹茶杓當世數之爲名物、捺竹有習羽

同前むかしは袋一ツづ、二十匁入申により十袋が一
斤也、今宇治より參る袋は半といふなり、茶のこし
らへ様大昔 後昔 初昔 白鷹の爪 大鷹 小鷹
大白 小白 むし茶 青茶はより外に茶のこしらへ
様はなし當代宇治より參る袋の書付に有之珍敷書付
共參り候へ共是は私の名蘭あざ名にて候 承應四年正月
攝州住人岡本
休意

○茶の徳 源流茶話、茶をすける人も是に同じ指
て我心より面白しとも思はね共世上に交りて拙く思
はれんも心うき事とおもひてすく人あり」又先祖よ
り所持の道具もあり他人は無之てさへ求めてもすき侍
るになど思ひよりてすく人もあり」又他の藝に勝り
清淨禮和の所作なりとてすく人もあり」願はくは樂
天が水竹を翫びしに習ひ此道を以て心の師友とし身
を修め道を行ふのたすけとせば眞の花の徳と可申な
り云々」喫茶養生記序、茶亦養生之仙藥也延齡之妙術
也山谷生^レ之其地神靈也人倫探^レ之其人長命也天竺唐
土同貴^ニ重之^一我朝日本曾嗜愛矣古今奇時之仙藥也不
^レ可^レ不^レ摘乎云々養生之術可安^ニ五臟^一五臟中心^ヲ爲^レ主
乎建立心臟之方喫茶是妙術也厥心臟弱則五臟皆生

病云々」織田右府消息、箕裘におこたり朝夕露地に出
て塵を拾ひすきやに入て堅柔を評しいくばくの月日
を空しくする事無^ニ勿體^一事也、去ながら淺々すきな
ば士たるもの氣味清らに其品尤佳なるべし 與佐久間
不干齋
極壺茶說、茶は近世の藝なれども頗る神妙に通ずる
所あり、まづ第一に和、和は種々に分別すべし貴人
として賤卑をいはずその徳を尙ぶに至ては一室に入
て自ら飲食を供す 經書を貴人の前に講ずる人、あるひは末座に
見臺を設鋪する人あり、道をさくの際、猶貴
賤の分を忘るゝこと能はざるは、己欲せざる處ありとも主
人能く和せざるがゆるなるべし
人のために賞美し上客のために甘心す、みな是上己
を立てず衆と共にすること猶湯と茶と混和してあわ
たつにたとふ、第二に清、清また細かに分別すべし
あにたい露地の塵を拾ふのみならんや門前の塵まで
拾はんことを希ふ、門前の塵なきのみならんや不淨
處迄清からんことを欲す、然もたゞ作事の新造をい
ふにあらず主人の心中の清からんをむねとす、第三
に閑、閑また熟思すべし家僕あり共右仕ことなく自
身に給仕し炉邊に環座す、第四に雅、雅は正なり万
事に不正のことなからんことを欲す、古墓の藏を得
て庭内を莊飾し漁樵の具を態々求めて室内の器とす

廣集茶人系圖。天明中好茶 閑人所修其統系家々によりて同じか
らねば暫く予が聞る處をしるす、後人よくこれを訂
正せば大幸なりとしかいふ

柳菴隨筆知字篇第八之下

○茶の價 御茶目錄價附、御濃茶一文字初鷹半袋

掛目十匁を半袋と 老まつ代同 蓬萊昔代六 梅代同 初

むかし代五錢四分 後むかし代同上又代 祝の白代三錢

初鷹爪代三錢 火いわひ代同 花の白代同 浮ぶね代同

いノむかし代同 御薄茶極昔一斤に付代 別儀昔代五拾

一枚代代四拾 好極揃代三十三 三十匁代代三 極掛代

十六 二十匁代代二 吟茶代十 御煎茶壽一斤に付 白

折代二十 清折代十 折鷹代十 雁がね代十 右五品御

濃茶薄茶より出申候莖也 玉簾代十 霜の花代十

華園代十 花橘代十 上喜撰代五匁 山富喜代八匁 池の尾

五分 一森代六 喜撰代五匁 龍門代四錢 朝日代三匁

莖茶上 薄山吹 粉茶共代 上飛出し代二匁 右之外

御濃茶并薄茶直段に應じ詰上申候以上山上善大夫」

信充云、茶の一斤は二百匁をいふ、故に一斤七十八匁の極昔 茶道

は百匁に付三十九匁なり、十匁は三匁九分なりと知べし 一極上一斤に付代六十匁

祕錄宇治茶の花并直段之事 一極上但二百匁一斤なり

一別儀一斤に付 一極揃一斤に付 一別儀揃一斤に付

上揃代四十匁 昔より直段如此寛永十二年より割の
上り右一斤と云は十袋の事なり一ツニツ拾と云迄も

山上宗二

古田織部

台德院將軍家

雲龍院門主

大久保相模守忠隣 小田原城主

大野修理

大久保藤十郎石見守子

佐久間將監眞勝山隱宗可大德寺寸松菴

多賀左近

金森宗和

金森出雲守

可重

瀨川左馬

小堀遠江守

政一 初宗次 作助 宗甫
正保四年二月六日卒六十九

孤蓬菴

船越伊豫守私云、諱永景藤原氏

永井信齋 諱尙政從五位下信濃守爲三山城淀城主

加々爪甲斐守私云、諱直澄、民部少輔忠澄子、祿一萬三千石

本阿彌持德齋

駿河笑雲

山本道句

紹高

筑前博多人
紙屋宗旦

千道安宗安少庵

道官 十郎左衛門

實宮主大夫子
母後嫁利休

桑山左近

片桐石見守真昌

天方備前守

洞雲宗仙

參玉室和尚
法名三叔宗關

藤堂主馬

平信長公

休ノ實子

千宗淳

宗旦

宗珠仕高松

太閤秀吉公

織田有樂

織田常真

宗左仕紀州

蒲生氏鄉

宗室仕金澤

細川三齋

淺野采女

勢多掃部

芝山監物

高山右近

荒木攝津守

牧村兵部

有馬玄蕃頭

山岡宗無

萬代屋宗貫

宗悟

宗陳

●武野紹鷗 初名仲村 號新五郎 任因幡守 稱一閑居士 即武田伊豆守信光之後也、

世家東國 幼而上京 洛就陳悟之二居士 傳茶傳、又謁西三條道遙公 習學和歌、後移左海津 構宅於四條夷堂之隣、因扁所居曰大黑菴、飯依普通國師、為俗弟子、永祿元年十月晦日卒葬堺南宗寺後林、珠光之後以紹鷗為茶家之祖

堺人

●北向道陳 其祖先居油松北向家、故以北向為氏、與紹鷗齊名、

隅之沒後茶家稱宗匠、曾參普通國師、而為南宗外護

●津田宗達 世稱富商 號大通

達之嗣子

●同宗吸 號天信 與利休同名、仕豐臣太閤 領三千石 擢法眼和尚位、服大通養于本府、為父之菩提所、請春屋國師為第一代、天正二十年卒世曰受世法眼、紫野江月和尚乃吸之子也

●佐久間不干 織田信長公之臣右衛門尉信盛之子號甚九郎、就紫野石溪玉甫二和尚參學、而以茶事有名某年卒、神主表曰不干齋松泉宗品居士 紫野松泉院是其功德所也、按不干有茶名一者即利休已前也、然若干年就休謂益

紹鷗嗣子 方寸齋 宗瓦壻 仕尾州

武野宗瓦 瀧新右衛門

長基子長輝孫、諱之康

三好實休

左海人

辻玄哉

同

棕宗理

山本助五郎

堺人 鷗之壻

今井宗久 仕太閤 領三千石 任大藏卿法印

左海人 與四郎、法名宗易、拋筌齋

千利休 天正十九年二月十九日自殺、行年七十餘

○茶人系圖

茶道統傳和泉堺津茶人隱岐氏潛齋宗物撰元祿三年壬午書

南都稱名寺僧年二十五而來於北京一結屋於三條街始啓茶

席又曰能阿彌爲華之弟子

●南都珠光

宗珠珠光之子

南都人

天王寺引拙珠光沒後茶家稱宗匠壽七十茶人佗助所持之人也後伊達忠宗爲遺物獻上寛文四年保科肥後守正之卿拜受

下京人

藤田宗理引拙之後爲宗匠

泉堺人

竹藏屋紹滴與引拙宗理齊名

松本珠報

志野道甘

栗田口善法

古市播磨爲興福寺之代官有茶書一卷行于世

石黒道提京師千本街有宅子孫仕東都今紫野正受院有所持之茶具皆南蠻之製也

興福寺塔頭

西福寺一作西福院

同上

尊光院一作尊教院

大富善好

堺人

譽田屋宗宅

有茶約德隣

珠德宅之後也以茶事仕東照宮其母德泉乃錢屋之女也乃南宗寺德泉菴者是其功德所

平三帖大目

給仕口

床

4 5 6

カツテロ

杉本普齋差圖

三帖敷

三帖半

中
二重

勝手口

二帖敷

ク
ハ
リ

床

菜口

板小

後藤縫殿允別業

勝手口

屋 水

二重ツリ棚下吹貫 中マド

中々下

●利家柱

ヌリカ
マデ大
紋ベリ

御太座閣

御刀持

シフ 大松板

中

ク
ハ
リ

豐太閤ヲ藝内紹智請
待ノ時ノ座敷ト云

一此下地窓 立一尺五寸横一尺三寸五分掛障子敷居計

二同窓 立一尺八寸横一尺六寸五分
高右同所ヨリ二尺二寸五分

三此竹れんじ窓 立一尺横四尺三寸

四此下地窓 立一尺九寸七分横二尺高右同
所ヨリ一寸六分東柱へ立付

五同窓 立一尺一寸四分横九寸八分内カケ障子

六同窓 立一尺一寸四分横一尺四寸七分天井廻
リ縁ヨリ三寸四分塗出シ内ニカケ障子

七此柱栗皮付 一尺三寸廻リ桁縁上端迄四尺八寸

八クハリロ 高二尺六寸横二尺四寸石ヨリ
敷居迄一尺四寸七分上ハ迄

九此棚一重 長一尺一寸七分幅一尺厚
三分半高上端迄一尺四分

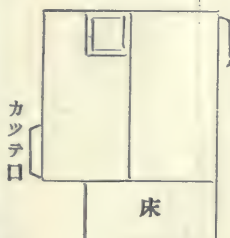
十此棚以上三重下二重 長九寸三分横七寸九分、二重棚
ノ間ハ五寸五分高、疊ヨリ下棚
迄一尺八寸但下端迄上丸メ下棚
六分廣ク長ク床四分一迄下端サ
ン二本

十一此上竹タルキ四本ヤネ裏

十二此處天井幅一尺七寸

十三此處天井高五尺九寸幅二尺四寸

二帖



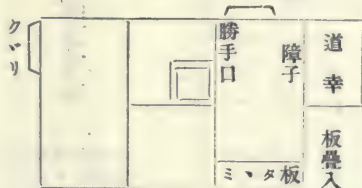
大目三帖九帖一帖

クハリ

通口

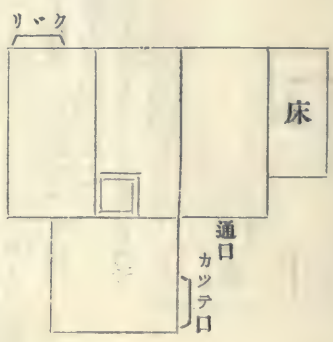


三帖敷道具
ミノ先ニ一尺
九寸九寸三分

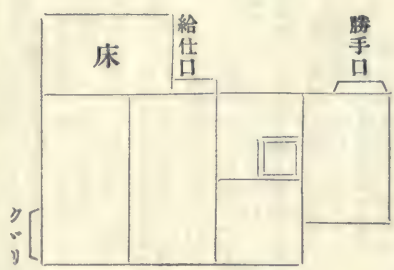


中柱二尺二寸上ニ横竹
ノ落シカケ板疊ノ先ノ
壁マデ押通シ入ル然バ
落懸ノ下ハ間半ノ間押
通シ明ルナリ

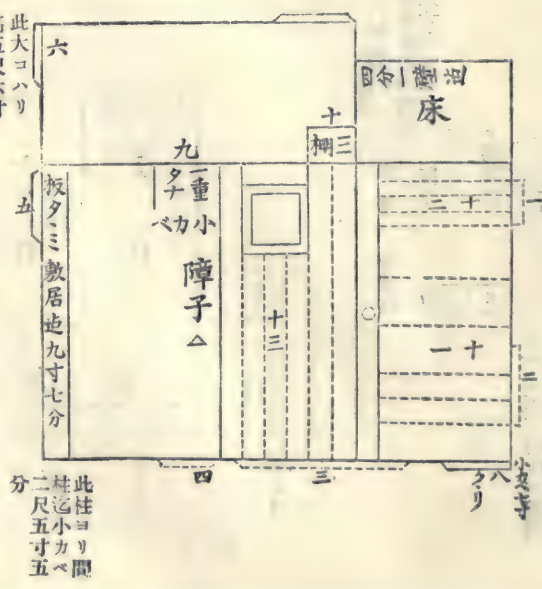
三帖大目



平三帖大目

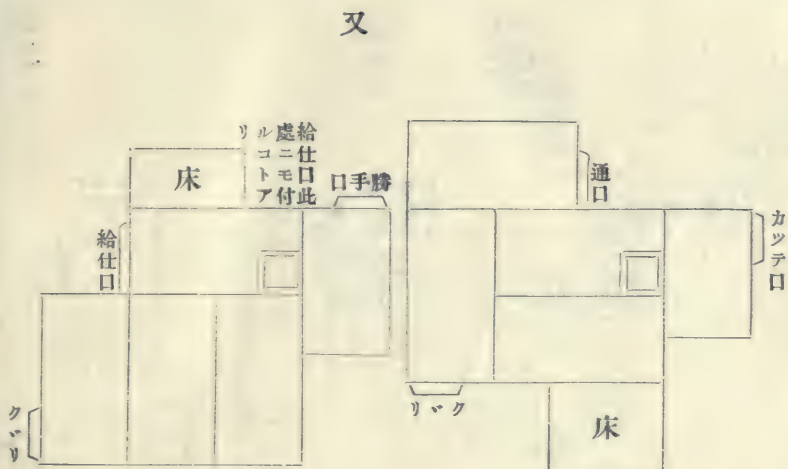


物數寄之圍諸方寸法

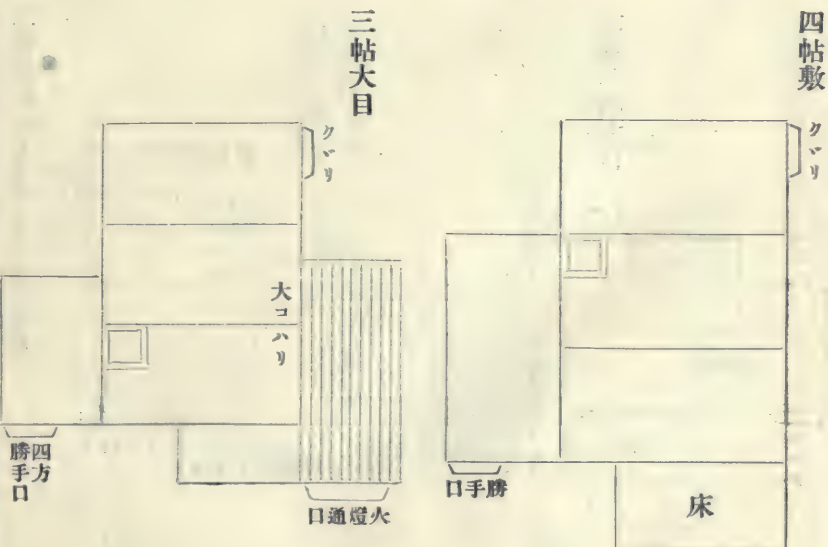


○此落カケ上端へ小壁一尺六寸
△此二枚鴨居内ノリ五尺横四寸七分
鴨居厚六分半ホウ立モ同ク大コハ

四帖大目

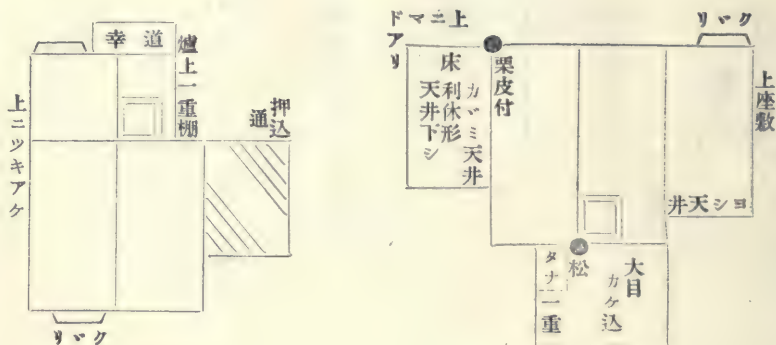


四帖敷



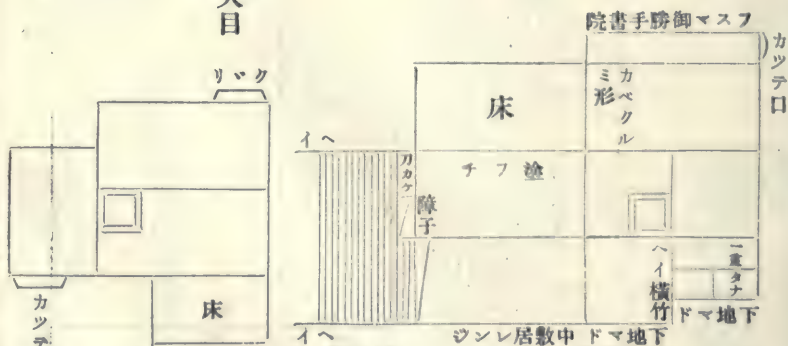
山中了信

森道伴



三齋公御好肥後國有田一澤云相傳

宗易二帖大目



南
ク
リ
カ

刀掛二重

吉田織部
殿好也

サグハル子ヨリ高クハリ
サグハル子ヨリ高クハリ

鏡天井
床ヒキ
花生釘
三尺七寸
上ニウツ
赤松

躰上り上疊
 計落カケ、
 ヤネ裏二帖
 ト大目ハ色
 付蒲天井
 床折廻（イ
 本出）出シ
 ツメ細キ竹
 ナ入ル

四聖坊

皆天井コモ
一間カケコモ 入口

カベ
掛刀

ドマサカ

込々力

シウコ組下

床

茶屋宗吉

ツキアケ
カケヨミ

十

ミ、カ床

一帖迄ノ
子坂天井

杉丸太障子

三帖毛掛込

明障子

森道伴富小路
古勝手一關一疊
大目今ハ少違フ

南

子障ンヲクンゲ

ロクブト
ミイタ板

掛燈灯
道幸

北 障子 ア障子 障子

掛物カケ釘
掛花生釘

月

福島屋九兵衛大目ハ織部殿ニ同ジ

西 クバリ

御座敷高島
藤衛門エ取
玄關二枚障
子床壁

刀掛
二重棚

カケ込
ヌルシ

此上カケ込ヤ
ネヌルシ

白ロモ天井

床カミ天井

床四分一

天王寺村乗命
院杜野

子障

ナタ
二刀掛
重

クバリ

南

障子

フスマ

上オトシカケ
レンジ

上オトシカケ
中ホドヨシマド

安達養奔

南

牆上り障子

床

マスフ

藤林宗深
田野村
穂奔
泉州横
山左小

ナタ重二掛刀

板床

勝手口

マスフ

天野屋利兵衛
大坂東堀東側

天井板
天井

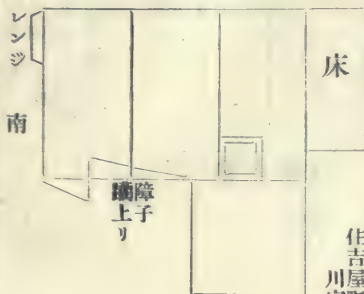
上レマジンド

クハリ上レマジン

住吉屋藤衛門

大坂久寶寺橋松
屋町筋南側角

レマジンドア



住吉屋町
川宗興御好

尼崎友佐座敷今門人
專齋先祖

大坂樂町
堀河久角
木宗伯
寺屋大
衛材九
坂内木
町筋南
錦屋又
又兵衛

天井
色付紫竹

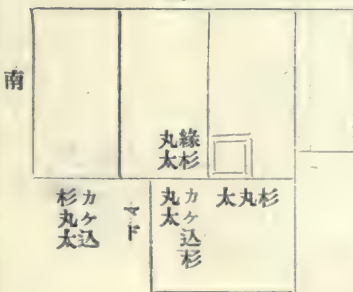
フロ先マド

ア脇明

レマジン重實

海部屋甚右衛門

紙トナミリハシコ

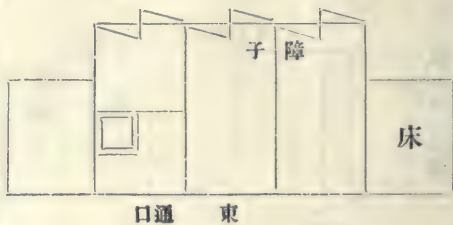
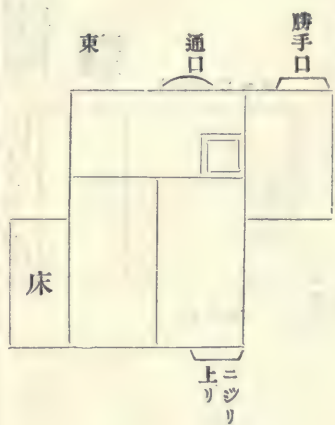


床

上障子
上レマジン

山中了信

河内屋宗珠座鋪

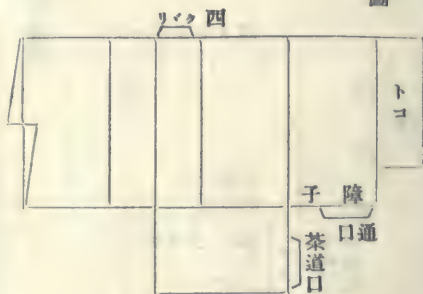
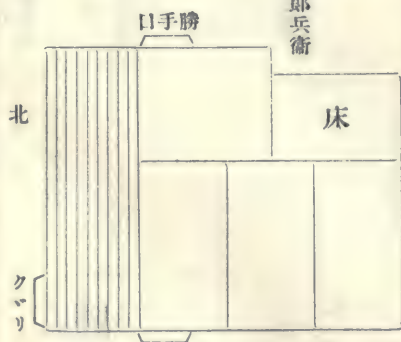


山中善七

小堀之圖

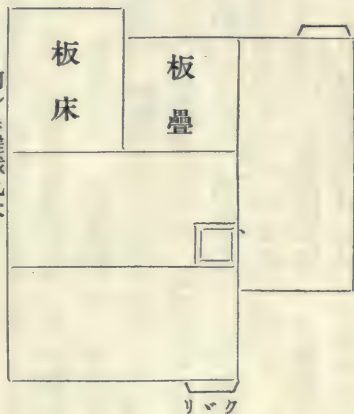
大坂高麗橋

坂口氏小橋屋座敷
有樂三帖大目寫
同人榮口三郎兵衛



柳馬場
榮屋

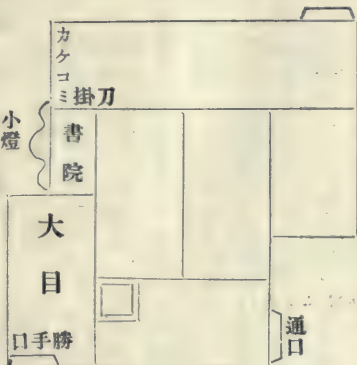
丸三帖大目



森如風木元町屋鋪(惣松柱)

何レモ嵯峨丸太

北

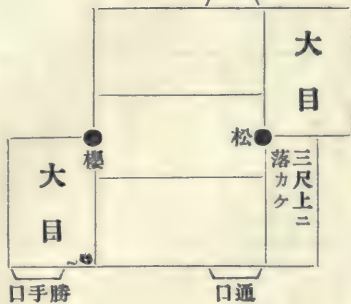


山中善右衛門座鋪

大坂平野町後八幡へ行

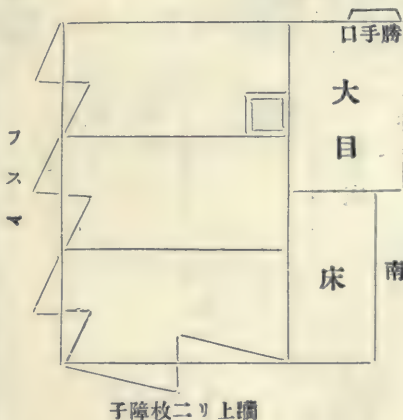
リバック

川崎屋源右衛門山中
新七トモ同圖ト云



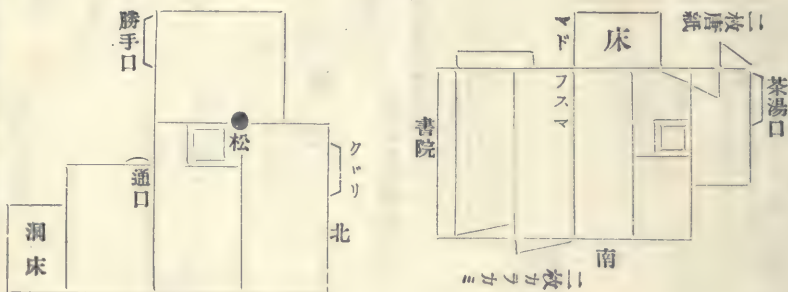
天定休座鋪

南



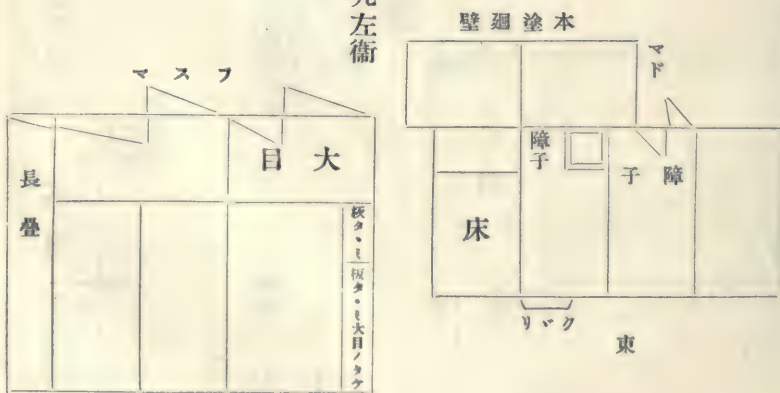
北野興善院

升屋好齋



生玉櫻本坊 宗和弟子

平野屋九左衛門 宗好



茶席七十通圖。市川松齋座敷^{三帖} 京北野興善院^{二帖}

二帖勝 升屋好齋^{二帖} 生玉櫻本坊 平野屋九左

手附 四帖大目板床 柳馬場京鶴屋榮屋^{九三帖} 森如

衛門 板帖長帖入 目板帖入 天定休 山中了信 川内屋宗珠

風 山中善右衛門 大坂高麗橋坂口氏 天野屋利兵衛^{三帖}

三帖 山中善七 肥前屋了牧 油屋新右

大目 住吉屋藤右衛門 尼崎友佐 海部屋甚左衛門

海部屋平右衛門 海部屋某 天王寺村乘命院 安達養庵

衛門 福島屋九兵衛 茶屋宗吉 安樂院

藤林宗深 松屋源之丞 四聖坊 森道伴 南部尊口院

策傳 森道伴 山中了信^{二帖} 三齋公御好 宗易二帖大目 三帖敷板疊入 四帖大

目 二帖大目板帖入 二帖半大目 三帖敷 道安園

宗貞座敷 四帖大目座敷 四帖敷 有樂京二條之園

織部二帖二大目 四帖大目^{板疊} 有樂園座敷床脇

カキ 金森宗和好 紹鷗四帖半 又 三帖大目^付

三帖大目桁椽付 四帖半後ヲカキ 四帖大目後床

三帖大目 平三帖大目 四帖敷 長四帖^{板帖} 三帖大

目^洞 常真二帖大目 二帖大目^{下座} 利休三帖大目

南部師性坊 物數寄之園 二帖 又洞床ヤリ違へ

大目三帖九帖一疊 三帖敷^{道幸} 一帖大目 平三帖

大目上座床 信充云、此七十通圖の中、京都大坂南部茶室圖に出

す、又彼にありて是になきもの十三、いはゆる古三帖敷(三齋好)

目三帖敷(上座床) 二帖半 宗易好三帖大目 四帖半大目 三帖大

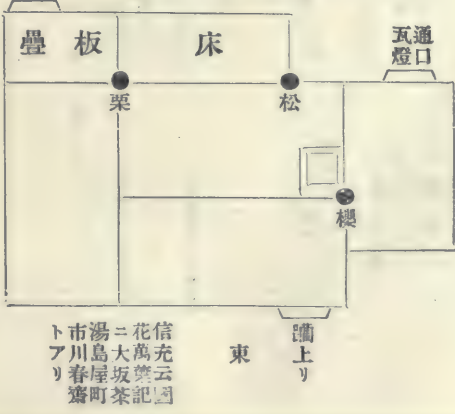
目 有樂天端之園 石州好大目 二帖九帖一疊 又原叟好三帖半

泰更 好一帖大目 三帖敷板疊入 二帖大目なり、都合二部合せて八

十三

市川松齋座敷

有樂翁御流大坂島
屋町谷町エ出ル南
側作(木月限)有息
新右衛門折屋町北
松住居都麻布一本
浪華御城座堂肥後
守被御勤之節茶事
申入一松齋ト云茶
杓被ト送

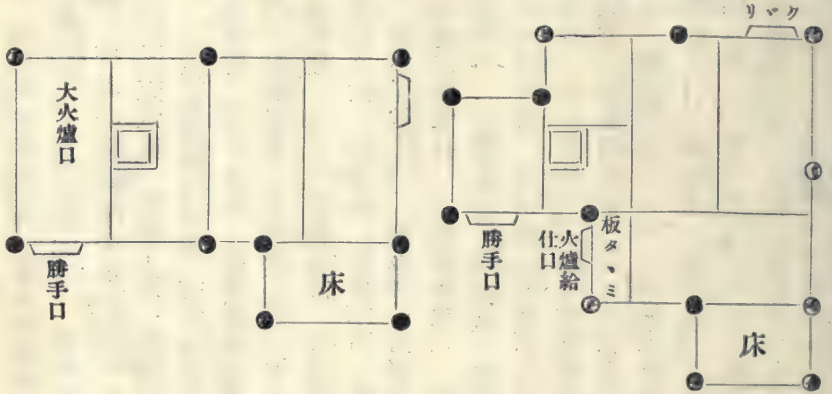


四帖大目

板タミ入たる座敷

板帖杉板
目色付テ
焼杉モ目

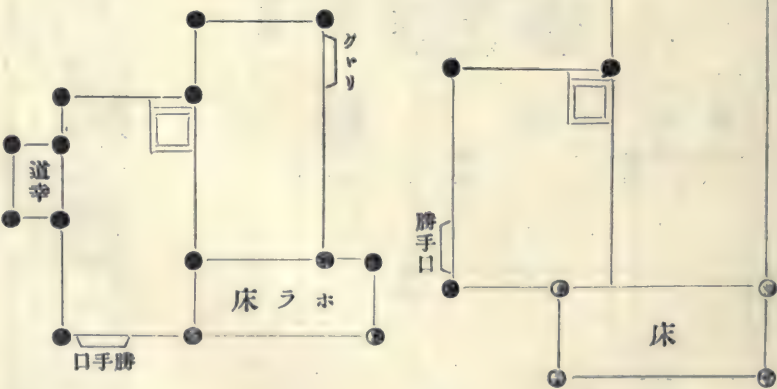
長四帖
板入大
爐口を
付たる
座敷



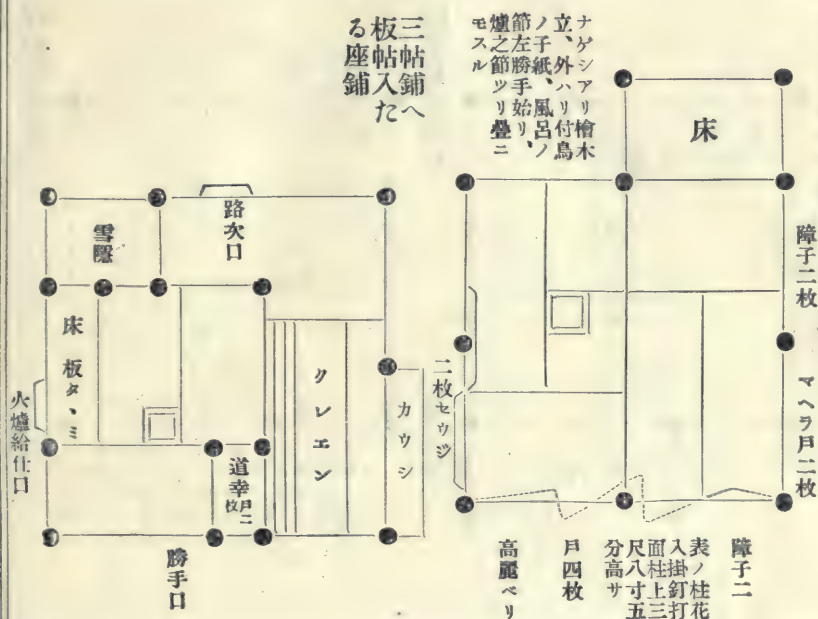
一帖大目

爐先松マサノ一寸七分中

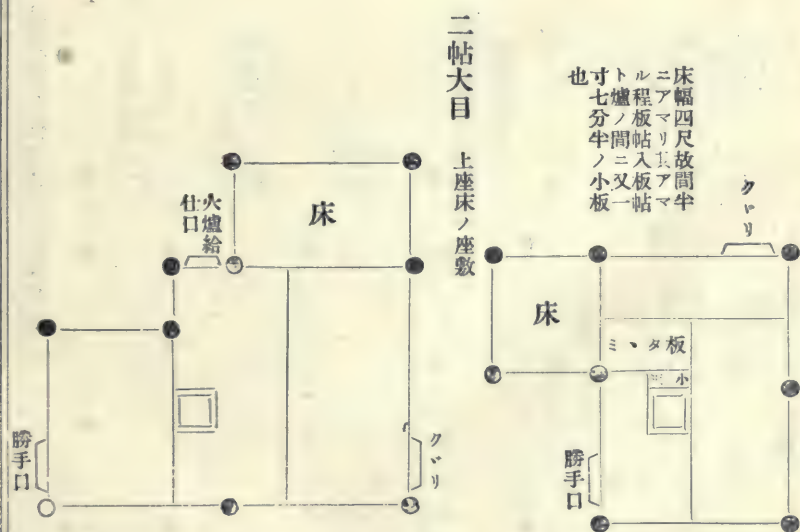
二帖違ナ
リホヘソヤ
ホホドニ
イタシ小
板



南都興福寺尊敎院宗珠座敷

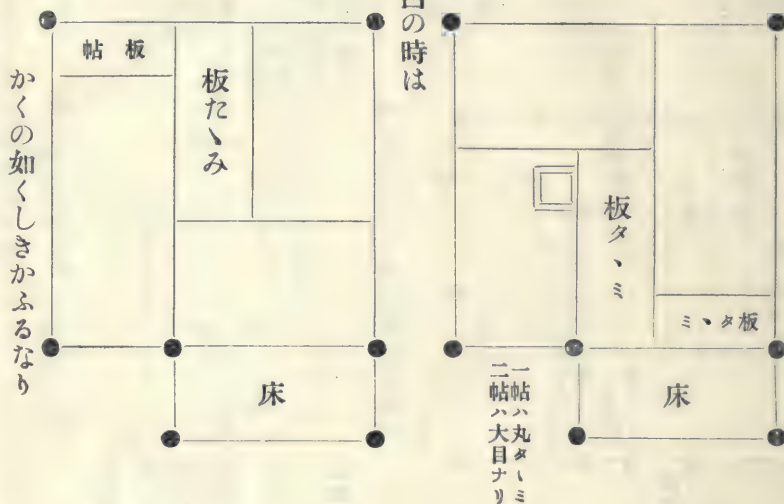


三帖敷の内へ板帖入たる座敷



石州好座敷

同風呂の時は



かくの如くしきかふるなり

遠里彦兵衛智恩院袋町屋鋪

原叟好ノ圖

此床ワキノ
處ニ高サ二
尺餘カベ下
チアケ

窓地下大

大宮菱屋三四郎宅

泰叟宗安好



一間小間四方ニ
板ハ何レモ一ノ小
間ナリ、妙喜菴
ノ松本板ナリ、
此松板有之故ノ
好ナリ

二帖大目

常ノ床ノ廣サ
ホド板帖入
ル座敷ナリ

二枚障子

床

板タ、ミ

勝手口

二帖半大目

一枚ハ太鼓
ナリノ障子
シナガクイ
障子ハ常ニ
通リニテス

床

道幸

勝手口

給仕ノ時
ハ此大キ
ナレ障子
ナ左ヘ引
通ヒイタ
シ候ナリ

宗易三帖大目不審菴の圖

勝手口

寸六ミ、タ板

給仕口

床

金森宗和好座敷

勝手口ヒラキ戸ナリ大目ニ六寸ノ板タミ入申ス

クハリ

リマク

床

△二尺二寸許
上ニ高サ一尺
五寸許リ大下
地窓アリ外ヨ
庭ハ植込ナリ

○此上三尺八寸
ノオトシカケ

給仕口

勝手口

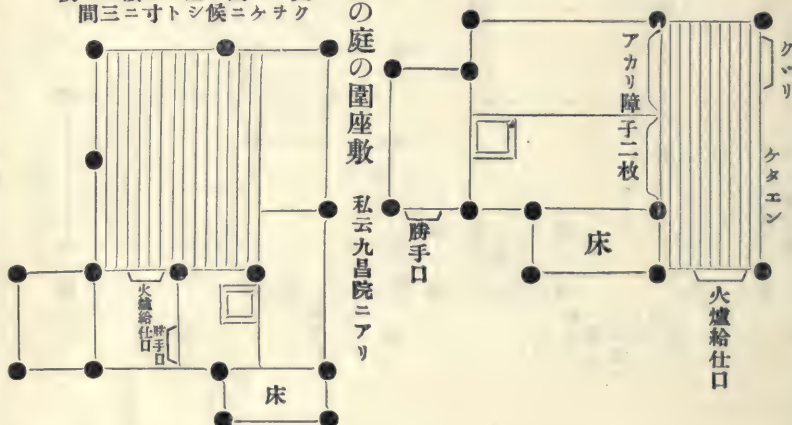
有樂京都二條の屋鋪の座敷

常ノ二帖大目ノ座敷ニ杉ケタエン付
シテ座敷トエ
ントノ間ニアカ
リ障子二枚イ
貴高人御出ノ時
ハ障子ヲハヅシ
エンニヘリトリ
チシキ御相伴ノ
衆ヲ置申ス

有樂大坂天満の庭の圍座敷

私云九昌院ニアリ

丸タ、ミ二帖チ長ク
シキ杉ノケタエン付
付タルモノナリ、ケ
タエント帖トノ間ニ
メシキキチ入申候
爐先間、中ヲシ通シ
高二尺二寸許ニガト
シカケ入、二尺二寸
ノアカタル間ニ横ニ
ヨキコナル竹ヲ三
本入外ケタエンノ間
ニスダレヲ掛申候



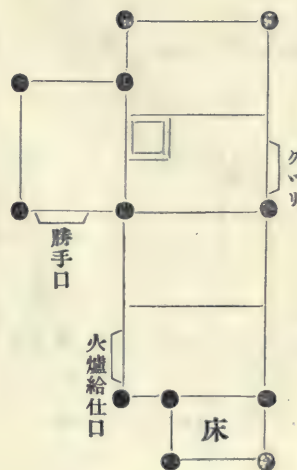
三帖大目 杉ケタエン付

私云有樂差圖ニヤ

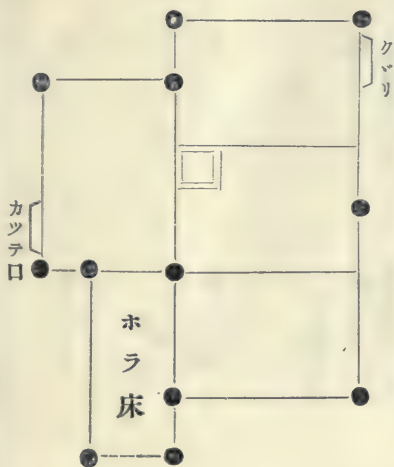
常眞二帖大目に杉桁椽付亭主の後に床付たる座敷



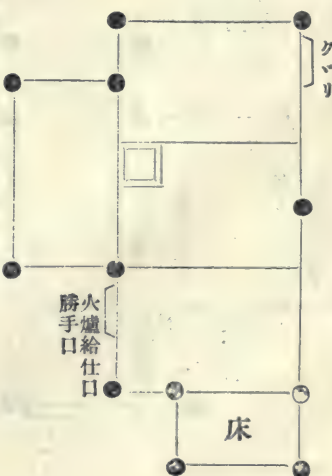
長四帖大目の座敷



三帖大目の後にほら床を付たる座敷



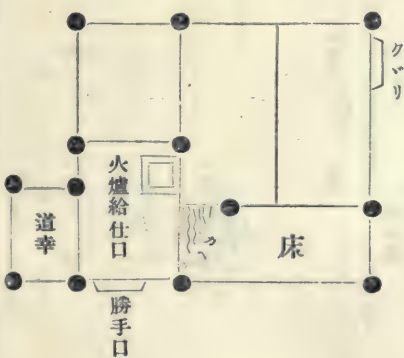
三帖大目



有樂園

建仁寺塔頭正傳院ニアリ

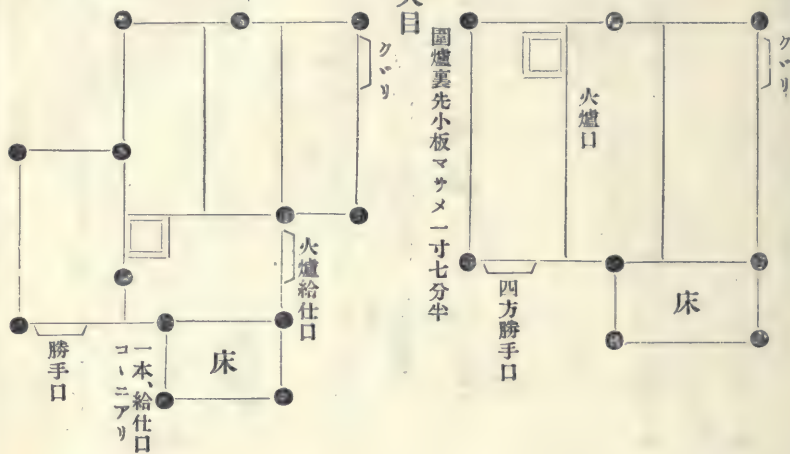
床脇カキノ所板
帖ナリ、床柱ヨ
リ道具帖ノハヅ
レ、イロリノ先
中柱、壁ノ間
ニ板、タイレ、
ニ火爐口、切也
爐ノ先、板松マ
半サ、幅一寸七分



宗貞座敷

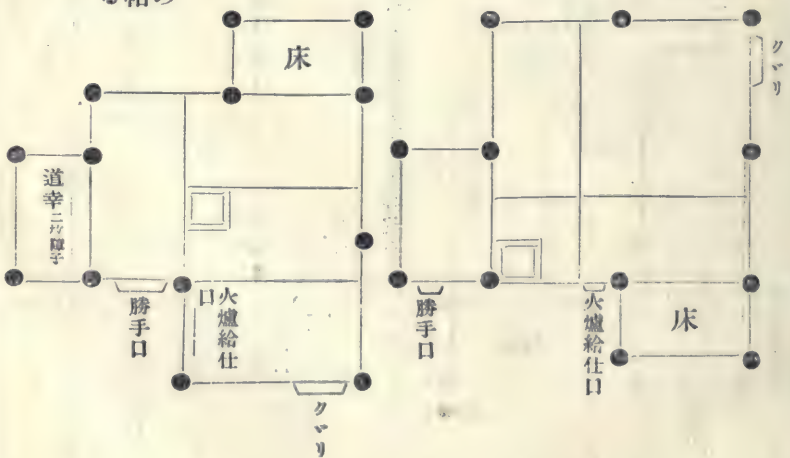
四帖大目

圖爐裏先小板マサメ一寸七分半

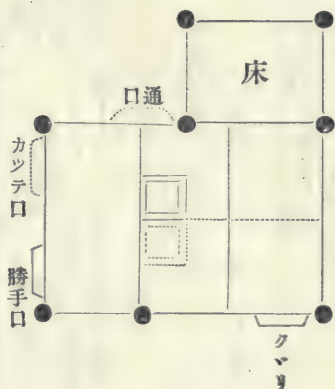


四帖半大目

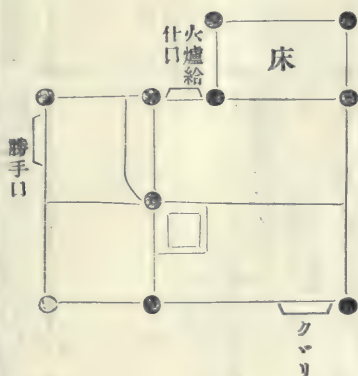
四帖半の
後を半帖
かきたる
座敷



平三帖敷

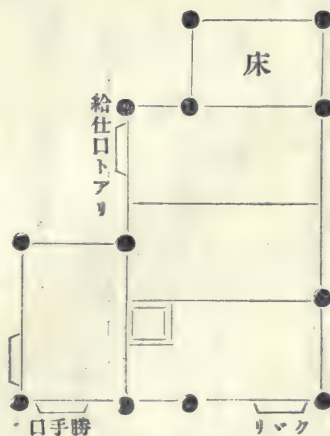


二帖半敷ノ座敷



宗口帖大目

宗易好トアリ

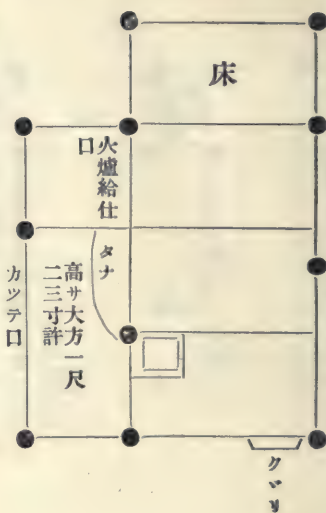


道安園座敷



四帖敷座敷

風爐ノ時ハ古三帖敷ノ如ク疊敷直シ
風爐ハ丸ノ處ヘ引出スナリ

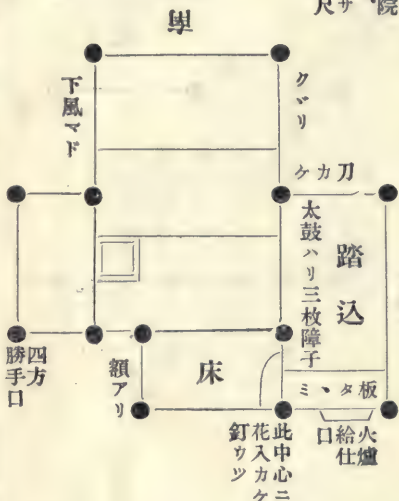


古田織部正好

三帖大目座敷一帖之踏込付之

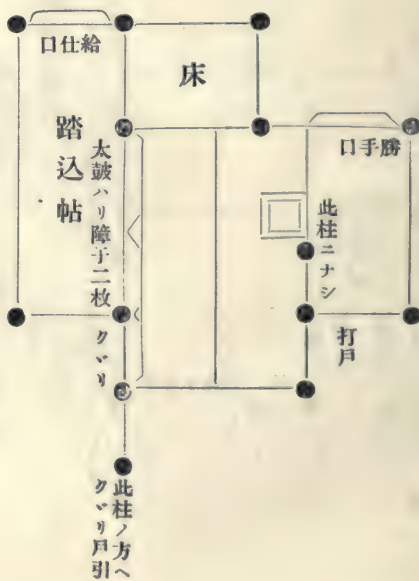
下風マド

誓願寺安樂院
策傳傷女堂
建家地形高サ
平地ヨリ二尺
餘



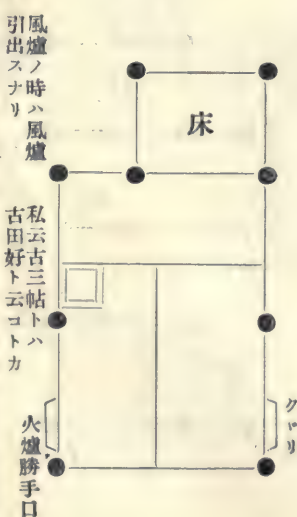
二帖大目座敷

一ニ織部好トアリ



古三帖敷

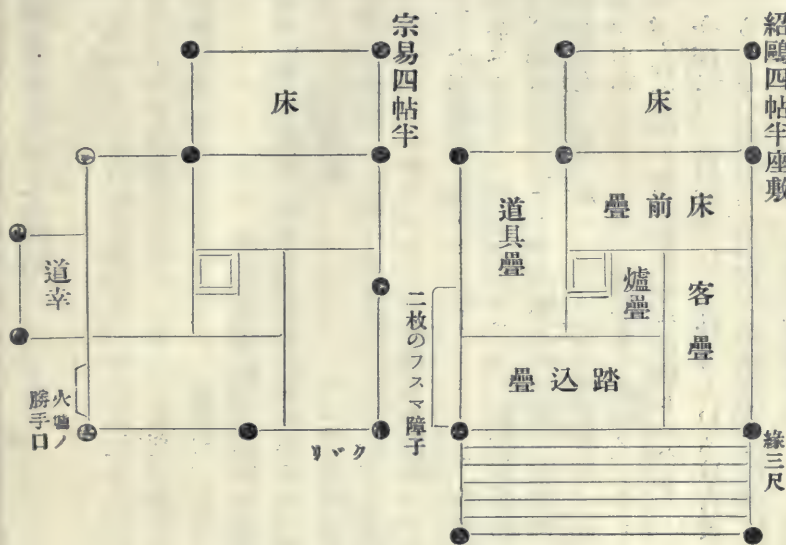
一本、源三齋好トアリ



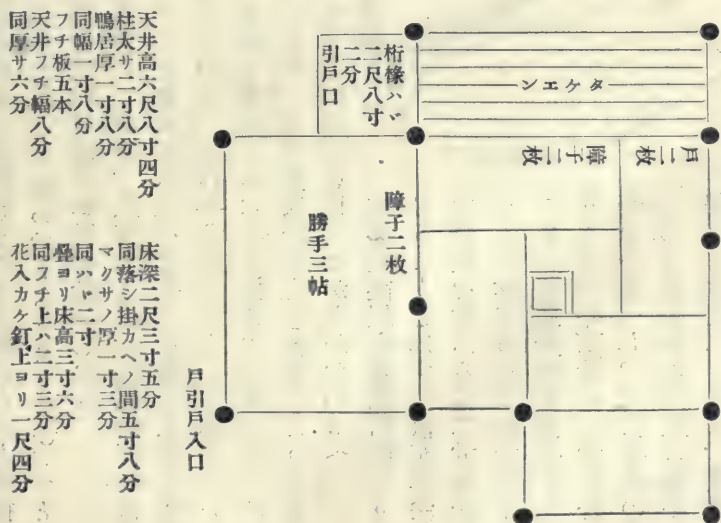
○茶室

京都大坂南都茶室圖

紹鷗四帖半座敷



南都東大寺内師性坊座敷利休好四帖半



柳菴隨筆知字篇第八之上

○乳付ちつぷ

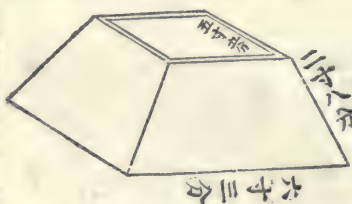
中宮御産部類記、中右記元永二年正月九日壬子中宮細帶云々五月二十八日未刻御誕生御乳付并臍緒奉_レ切事中宮自_レ令_レ給_レ云々_上源禮記、元永二年五月二十八日中宮令_レ誕生皇子_上給_レ云々傳聞母后御乳付并令_レ切_二御臍緒_一給_レ今日以下右兵衛佐忠隆室_上爲_二御乳母_一云々同秀記、二十八日云々今日酉尅御乳付并奉_レ切_二御臍緒_一云々源平盛衰記_上卷頭中將重衡朝臣其時ハ中宮亮ニテ御坐シケルガ簾中ヨリ出給ヒテ御産平安皇子御誕生ト高ラカニ申サレタリ云々即御臍緒ヲ切奉テ圍基手ニ錢出サレタリ云々故建春門院ノ御妹アノ御方抱キ上奉ル平大納言時忠卿ノ北方帥ノ典侍殿御乳付ニ參リ給ヘリ云々右大將宗盛卿ノ北方御帶參ラセ給ヒタリシカバ御乳母ト成給フベカリシカドモ云々時宗卿ノ北方即乳母ニ成給ヒニケリ

今按に二十四時めに乳を付るといふは古實ならざるにや、崇徳院は未刻に降誕ありて酉尅に乳を付奉る僅に三時をへたり、安徳天皇もまた降誕の日直に乳付奉れり」紫式部日記、寛弘五年九月十一

日午時後一條院むまれさせ給ひたりし時御ちつけは橘三位つな子御めのともとより侍ひ云々とあるも御誕生の日直に御乳付給ひしなり

○茶升 或書、此茶升もとは尾州熱田神宮寺の藏なりしを如何なる故にや今は尾州の人某の所藏となりしといふ、八百年前のものといひ傳ふ、いにしへは本邦も漢土とおなじく抹茶のみ用ひてこれをはかりしにや、今の煎茶のごとく精庵によりて葉の大小のあらんには升を以てはかりがたかるべし

茶升圖



或云名護屋齋藤氏所藏なりと其詳なることを知す、信充算法を以て此分積を考ふるに二寸八分は深さなるか傘なるかしれず暫く傘として求れば此升積九萬七千九百十六分あり、今京升の一升五合一勺有奇をいるべし、八百年前のものにあれば後朱雀後冷泉の御宇に當り趙宋の仁宗にあたる、景祐三年に阮逸が校定せし嘉量と大概おなじくおもはるればもしくは趙宗の一斗升にてもあるべきか、猶考ふべし

九	省 _{母江州} 仕 _{加藤織部正}	二十五		
十		二十六		
十一	十月致仕	二十七	熊澤伯繼仕 _{備前}	
十二	通 _{靈儀}	二十八		
十三		二十九	小川覺從 _{豫州} 來學	
十四		三十		
十五	著 _{持敬圖說原人}	三十一	中川貞長、吉田氏來學	
十六		三十二	山田權來學 中川熊來學	
十七	每月一日齋 _{祀太乙神} 著 _{翁問答}	三十三		
十八	詣 _{太神宮}	三十四	熊澤伯繼入門	二十三
十九	冬十一月嗣子虎生	三十五		中村叔 實來學
二十	翁問答刻成、撰 _{小醫南針}	三十六		中西市 來學
正保	撰 _{神方奇術} 得 _{陽明全書}	三十七		加世五 來學
二		三十八	再仕 _{備前}	二十七
三	正月十五日次男鑑生、 見 _{分部伊賀守嘉治} 四月晦妻高橋氏歿年 二十六	三十九		二十八
四	破 _{翁問答板} 秋鑑草刻成	四十		二十九
慶安	八月二十五日沒 葬 _{江西}	四十一		三十

柳菴隨筆止字篇第七終

忍_ニ爲_レ祿所_レ廢以_レ曠_ニ定省_ニ哉、乃爲_ニ一書_ニ具述_ニ其不_レ容_レ與_下母索居之意、留_レ之潛遯遂歸_ニ隱于小川_ニ以獲_ニ母悅_ニ時年二十有八寬永某年月也、事詳_レ中而以爲_ニ二十七歲時事_ニ當_ニ以_レ講爲_レ正、藤樹寓_ニ居于京師一條葭屋町_ニ其_口尙有、嘗自_ニ江州_ニ乘_レ轎至_レ京、道謂_ニ轎夫_ニ以_ニ惟善良知良能事_ニ轎夫感悟至_ニ垂_レ淚、其實德如此世人目曰_ニ近江聖人_ニ、講逸_ニ其事_ニ故附_ニ于此_ニ、江戸大田覃識

先生諱は厚字は惟命、姓は中江氏俗名は與右衛門、江西高島郡小川村の人なり、考諱は某字は吉次同郡北川氏の女を娶て先生を藤樹の下に生り、先生幼より出て豫州に仕へ後致仕して藤樹の下に學を講ず、門人從て藤樹先生と稱す

慶長 十三	三月七日誕生	
十四	二	
十五	三	
十六	四	
十七	五	
十八	六	

十九	七	
元和	八	
二	九	養 _ニ 祖父於伯書 _ニ 學 _ニ 書文字 _ニ 九
三	十	移 _ニ 豫州大洲 _ニ 居 _ニ 風早郡 _ニ
四	十一	
五	十二	初思 _ニ 食恩 _ニ
六	十三	祖父吉長殺 _ニ 賊賴卜 _ニ 先
七	十四	入 _レ 寺學 _ニ 詩
八	十五	八月七日祖母卒六十三
九	十六	父吉長卒七十五
寬永	十七	聽 _ニ 論語講 _ニ 求 _ニ 四書大全 _ニ
二	十八	正月四日父吉次没 _ニ 五十
三	十九	
四	二十	講 _ニ 大學 _ニ 以 _レ 儒祭 _ニ 祖父 _ニ 二十
五	二十一	著 _ニ 大學啓蒙 _ニ 後破 _レ 之 _ニ 二十一
六	二十二	省 _ニ 母於江州 _ニ
七	二十三	
八	二十四	

二十五日春日詣條々事上棟正月二十九日之由在宣朝

臣勘_ニ申之_ニ而件日八神不入吉日又正月十三日上棟吉

後鳥羽

日之由在宣勘申而件日相_ニ當公家御衰日_ニ畢云々公家

後鳥羽

所_レ被_レ行之公事皆避_ニ持政御衰日_ニ四年庚子降誕、文治

三年は八歳にならせ給ひ離卦を遊年當卦とし寅申日を以て德日とす然るに爰に衰日とあるは本名（不明力）なり雲上

明鑑、禁裏御所御寶算三十五仙洞御所御寶算六十四大宮御

所御寶算五十五女御御方御寶算二十四御德日寅申

德日一覽一歳十六歳みな離卦を遊年當卦とし、寅申日を德日とす、その外みな歳と卦と引合て考知べし

○藤樹先生 年譜、序藤樹年譜一卷、蓋門人所_レ錄

而闕_ニ其名_ニ覃獲_ニ諸友人山田君忠所、按懶齋藤井氏孝

子傳曰、中江氏姓藤諱厚字惟命、江州高島郡小川人

也、自_レ少讀_レ書頗有_レ所_ニ發明_ニ、其學宗_ニ王伯安_ニ、凡本朝

諸州之王學惟命倡_レ之、有_レ母事_レ之而孝、嘗仕_ニ加藤某

侯於豫州大洲城、欲_ニ迎_ニ母以就養_ニ、母曰吾聞婦人不

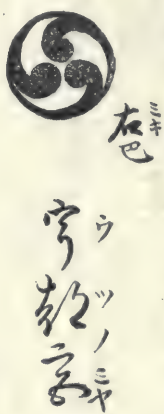
越_レ疆矣願守_レ之、惟命不_レ遂即請還_ニ職以歸_ニ田里_ニ、主

客_ニ其才_ニ不_ニ敢許可_ニ、惟命勃然曰我雖_ニ不孝_ニ豈一日能

巽 戊辰	震 酉卯	艮 未丑	坎 未丑	乾 戌辰	兌 午子	坤 酉卯	離 申寅
	七	六	五	四	三	二	一歲八十六
十五	十四	十三	十二	十二	十	九	二十四
二十三	二十二	二十一	二十	十九	十八	十七	三十二
三十一	三十	二十九	二十八	二十七	二十六	二十五	四十一
三十九	三十八	三十七	三十六	三十五	三十四	三十三	四十八
	四十七	四十六	四十五	四十四	四十二	四十一	五十六
五十五	五十四	五十三	五十二	五十一	五十	四十九	六十四
六十三	六十二	六十一	六十	五十九	五十八	五十七	七十二
七十一	七十	六十九	六十八	六十七	六十六	六十五	八十
七十九	七十八	七十七	七十六	七十五	七十四	七十三	八十一

龍敵「龍王謝」之賜三種々珍寶「當家相傳二巴之紋旗其第一也」云々（御詠に永巴ノ字をなすは初三日とあり、諸家紋帳、天文八年卯月十九日佐々木秀勝所記、一番奉公衆曾我立派に三巴具平源氏赤松兵部少輔政則右三巴宇都宮右三巴小山結城左近將監左三巴一番衆土肥右馬助清平山下孫三郎秀忠沼田孫太郎上三番杉原角左三巴右京大夫勝元披官香河五郎次郎和景越後之長尾左三巴二番山田道祖千代丸右三巴の鱗形九ツ丸豐前七郎朝連右三巴二番芝山參河守持嗣右三巴の堅山下左京亮角折敷左三巴一文字に右並大野溫料左三巴土佐之太平左三小早河左三巴

秀勝自筆左の如し、宇都宮の紋右巴ならば小山のは左巴なる説をまたず、當時巴の紋を付る人



々は雲上明鑑、西園寺家左三小倉家左三橋本家左三四園寺の別なれ梅園家左三大宮家左三樋口家左三武家にては松平大和守に、結城家相續によれば左三巴ならん有馬中務大輔左三松平右近將監左三越岡部美濃守左三板倉一家左三九鬼左三土方左三三宅左三木下左三板倉一家左三丸内左三萬石以下にては中條左三岡左三皆川左三朝岡左三朝比奈左三村垣左三河尻左三巴寛、高山、太田吉五郎左三船越、柘植、山本左三吉江左三六角内左三村瀬左三伊奈左三矢部左三芦野左三巴小濱、久貝、水谷、平井左三曾根左三大森左三石坂左三丸内に塩谷左三宇都野左三酒井市郎右衛門左三石左三青屋左三守山左三境野左三新村、山川左三辻、その外汎々たる諸家殆ど算盡すべきにあらず

○軛袋 延喜式、軛一枚功一人熊革一條長九寸 廣五寸牛革一條軛午料長五寸 廣二寸軛袋紫表緋裏長二尺三寸 廣一尺一寸軛緒紫組二尺五寸

○德日 拾芥記五條大納言 爲學卿記 永正七年正月九日晴陰、室町殿毎度十日雖御參内去年冬之負御手御平愈以後初御參之條十日就禁裏御德日今日御參内也」
後柏原天皇は甲申の御誕生、此年寶算四十七卯西御德日なり

吉部祕訓抄、文治三年十月

二月朔日松平左近將監乘邑 延享二年閏十二月朔日

酒井雅樂頭忠知 寛延二年十二月朔日堀田相摸守正

亮 寶曆十二年十一月十一日酒井左衛門尉忠寄 明

和元年十二月十五日松平右近將監武元 安永八年十

二月朔日松平右京大夫輝高 天明元年十二月朔日松

平河内守康福 天明八年十二月朔日牧野越中守定長

寛政二年十二月十一日鳥井丹波守忠意 寛政五年

十二月七日日本多彈正大弼忠籌 寛政十年十二月七日

太田備中守資愛 享和元年十二月三日安藤對馬守信

成 享和二年十二月三日戸田采女正氏敦 文化三年

十二月五日土井大炊頭利厚文政五年十二月三日水野

出羽守忠成 御留守居御奥の煤納御年男被仰付候者

寛永十七年十二月二十日酒井紀伊守忠吉初て被仰

付 此忠吉は酒井備後守忠利次男にて忠勝少將の弟當時酒井紀伊守家七千石なり 寛文二年十二月二

十六日本多美作守忠相被仰付 同十年九月十二日御

免そののち 貞享元年十二月二十六日奥方御規式役

杉浦内藏允 御留 被仰付 寶永五年十二月朔日大久保

淡路守教福に御年男被仰付候以來之通之由

○富 寐覺譚、安永六年芝神明に百兩取の富興行

はじまる札金百疋づゝ夫より所々に富時行札銀三匁

位その外所々に御免富無之分數多有之候處天明八年

の頃博奕嚴敷御制禁に相成小富の分また取扱無盡ま

た棒びき紋附等相止申候、谷中感應寺の富は前々よ

り有之候故今もそ

のまゝ興行と云、

一ツ目辨天の富は

芝の富よりは後に

始る」越前の富、

文化中かと覺えた

り越前の國元にて

興行のよしにて人

の見せたる木契め

づらしければうつし置たり」代は七匁五分なり木契を二つ

して箱に入日次記事、正月七日箕面、富 參詣の人の名を箱

てつくなり 人其年 或書、札一枚百疋を千枚賣ばその價

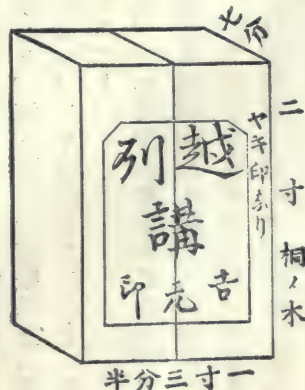
運吉といふことなり 金二百五十兩あり、其内百兩一の富として渡りその

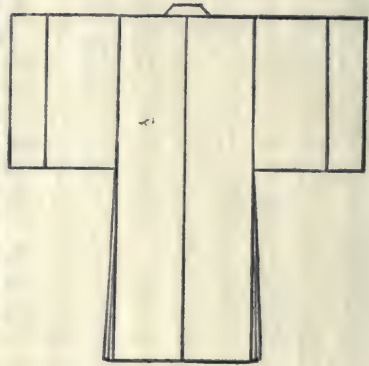
外百疋づつ若干枚の分をわたし残り百兩もあるべし

さすれば千人の内四百人は急度はづるゝものを、争

て買人のこゝろこそおかしけれ

○巴の紋 小山系圖、秀郷依請龍神入海中一射ニ





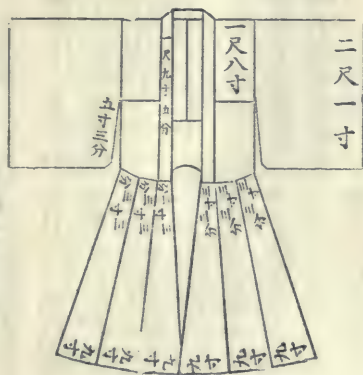
此三種の道服は大塚嘉樹著燕服小圖に見えたり」太平記四將軍ハ矢矧ノ合戰ノ事ヲ聞召候ヒシヨリ建長寺へ御入候テ御出家候ハント仰候ヒシヲ面々様々申止テ置參ラセテ候、御元結ハ切セ給ヒテ候へ共未御法體ニハ成ラセ給ハズ云々一門ノ浮沈此時ニテ候ケル更バ力ナシ尊氏モ旁ト共ニ弓矢ノ義ヲ專ニシテ義貞ト死ヲ共ニスベシトテ忽ニ胸服ヲヌキ給ヒテ錦ノ直垂ヲゾ召レケル云々伊勢貞順記、胸服ハ長短クテ胸バカリヲ掩フモノ故ニ胸服ト云、上帶ヲセズニハフリテ着ルトキハフリトモ云」塩囊記、道服ハ乗馬スルニ上ニ打着テ帶セヌモノナリ、灰ホコリノ立

テ衣裳ヲ垢スヲ防グ心ナリ」甲陽軍艦八此以後功山山兩人山皮剝の道服袖廣帷にも牛と馬と兩方に中には訴以後小草履を付てかならず着てありくべし云々それより後は道服帷のかたにてしるゝ様に甲州信濃上野までも定あるは今福淨閑工夫の故なり」海人藻芥、道服は俗隱者用下之云々俗隱居とは何某入道殿下などいふ方々をいふなるべし、平民の事にはあるまじきなり今按に尊氏將軍のめさせられし胸服は胸ばかりの物と聞ゆればかの半臂松浦の如きもの歟、皮はきの道服は塩囊抄の道服と同じく馬にのり旅行などに着せしものとしらる、海人藻芥の道服は上に圖を出せし道服の事なり、かゝればドウフクといふものすべて三種あるなり

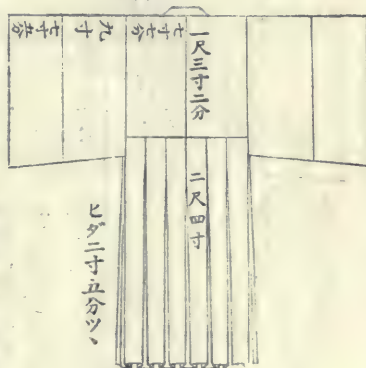
○年男 役人系圖、御年男酒井雅樂頭忠清此前貞享元年十二月九日御年男御祝御規式役大久保加賀守忠朝 元祿十一年十二月五日御年男阿部豐後守正武 寶永元年十二月九日御年男土屋相摸守政直 寶永六年十一月十八日御年男小笠原佐渡守長重 寶永七年十二月四日土屋相摸守政直 享保三年十二月朔日井上河内守正岑 同七年十二月九日戸田山城守忠眞 同十四年十二月朔日水野和泉守忠之 同十五年十

水戸中納言光圀卿道服

正親町從一位公通卿
道服是ト同ジ



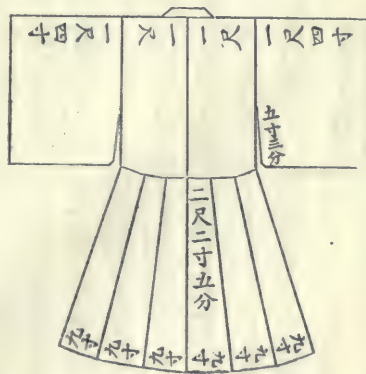
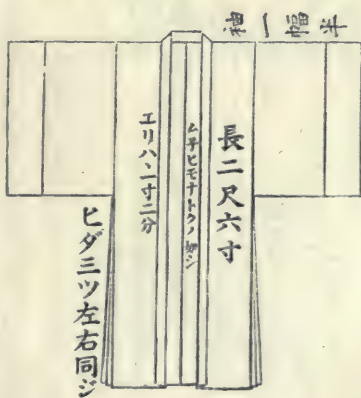
組内ニアリ



折返シ八分

普通道服

えりは
一寸六分
半内
重なり
へ折入れ
二



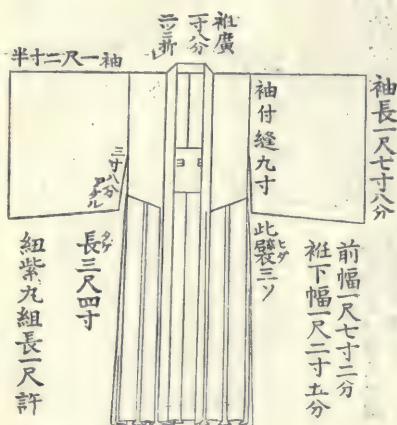
向上庵中天已分 別源禪師新羅 竺禪子善法屬と天童雲外雲岫の序に見えたり宗派に就て考ふれば左のごとし

●天童直 建仁別源
 德舉 慧日 建仁圓旨

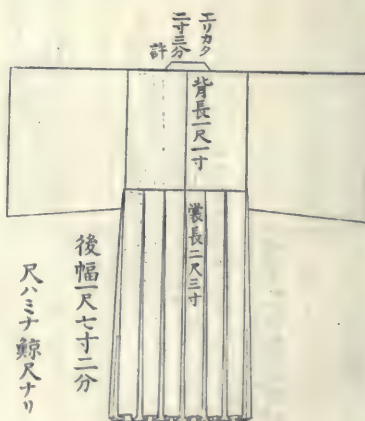
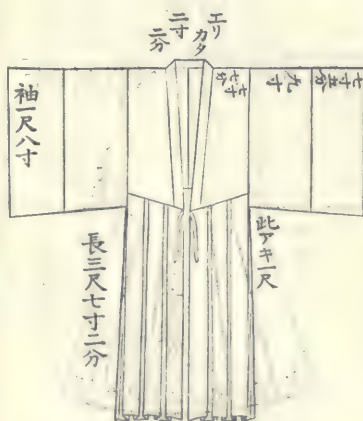
天童雲外雲岫

△唐人なれどもち建仁寺の歴代なれば都府樓も太宰府の都府樓にや

○道服 深窓秘抄、道服ハ大臣ノ平服也」近衛豫樂院殿下道服、豫樂院殿下家熙 享保十年十二月二十一日准三宮宣下ノ後關□ヨリ調進アリシ由ナリ地濃淺黃色唐純子紋中形唐草



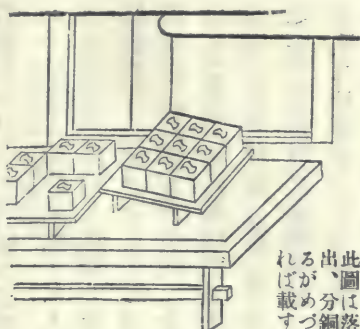
高倉家道服



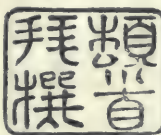
の喧嘩てかすて負一町の衆をおひやりしぬる哉、といへる歌をのせたり

此圖は落首咄に出、分銅を付たるがめづらしければ載す

好色二代男にのする處



○頓首といふ字の印 集古十種印章部、小栗宗丹印として載せしを見るに左の如く頓首の字なり、また歴史綱鑑の序に萬曆庚戌年仲夏月之吉歸安門人韓敬百拜謹撰とありて、その傍にある印をみれば



○土中より魚を獲しこと

板谷慶舟、文化十年の

頃にや兼て拜領せし植木鉢の土を翻してみけるにいさゝか動くものあり、何なるらんとおもひ水鉢に入て土を洗去ば鮒なり、凡兩三年も水を離れて土中に蟄せしこと奇といふべし」松宮俊仍日新錄、享保十年二月十七日の條に増上寺御靈屋御普請の時三丈許も土を堀ければ河豚を得たり、奇異なりとして海にはなちけるとなり」五行記、土中獲魚唐杭州富陽縣韓珣莊鑿井纔深五六尺土中得魚數千頭土有微潤云々」上野志、利根郡沼田領硯田村農夫喜右衛門持野地を堀て田となせしに土中より泥魚、鰻數尾を得たり、けだし古池沼の草地となりしなれば自然に潤濕ありて魚卵化せしものならんか

○とうれんば 色音論寛永二十年刻本 この町なみのなら

ひにて人に異名をつくるなり、あとに見えけるさぶらひの異名をとへばとうれんば、あれに見えける上ろうは小路の君とぞ申ける」或草記、とうれんばといふは當戀慕といふことにて侍衆は花にたとへて戀慕べしとなり私言、今の武家のことな

○都府樓 別源禪師東歸集、次韻酬三衛侍者一消

息誰言絶三所聞、一心千里去從君、鐘聲都府樓頭月、

けば吉原にて何とかいへる女郎なりしが、吉原にゐた内は本の十把一からげ左して目に立事もなし、廊外へ押出せば掃溜の鶴、砂中の金、飛た茶釜のほり出し者と大評判に及し也云々後見草、この比笠森おせん欠落して茶みせに老翁出て居るととんだ茶釜が薬罐とばけたといひし云々此三節みな同時の人の筆記なれ共その區々なることかくの如し

○豆腐

下學集

文安元年

飲食門

豆腐

堺鑑

天和三年印本

何國ニ

モ豆腐ハアレドモ別シテ當津ノヲ勝タリト古人ヨリ

云傳リ、紅葉ト云名ヲ加タルコトハ堺ノ櫻鯛ニモ不

劣味ナレバトテ角云トゾ花ニ對スル紅葉ノ縁成ベ

シ、又或人云此豆腐ヲ人ノ能カフヤウニト祝テ付タ

ル名共云リ買様ト紅葉ト音便成故歟、今豆腐ノ上ニ

紅葉ヲ印ス詞ニ就形ヲ顯ス成ベシ買用モ通テヨシ

堅瓠集、何仲默景明少能文善於破胃見者疑之、有

出其郷諺爲題曰張豆腐李豆腐一夜思量千百計明

朝依舊賣豆腐破云雖姓異而業則同心無窮而分

有^レ限正親町公通卿眞蹟、それ豆腐は我形^其四角四面

にして威儀をたしく生れ付和らかにして貴賤の交

にきはれず、その身は精進潔齋なれども和光同塵

の花鯉に交はり、諸社の神前にては田樂を奏し神慮

をすゝしめ奉り、まづ春は櫻どふふに祇園林の花に

いさませ二軒茶屋にかんばしき匂ひをこめ、曙の臍

豆腐に歌人の心を諫め、妻戀の雉子焼は珍客の舌鼓

にはろくをうたせ、雪月花に心をよする詩歌連俳

の席に興を催し、其上六彌太といへる武士も岡部と

名乗風味にやはらぎ、寒夜には饅飩豆腐瓢箪酒に一

座を動かし、唐土にては曹子建まめからを焚、豆を煮

たる間に四句の詩をつくらせ兄弟の不和を直し、朝

夕貴家高僧の列に連り經文讀誦の聲を布目の耳に聽

聞し、身を油になして齋非時の馳走を催し、南禪寺

に參ては禪學をなし葛たまりの衣を着し旅人を教化

し佛縁に引導して豆腐のいたらぬ所なし、嗚呼哀哉

世くだり時移りかゝる重寶の知識を還俗させて奴豆

腐とはさて無氣なる浮世かな隱元禪師贊「世

中は豆で四角で柔らかで又老弱に憎まれもせず、明

史^{百六十六}王信字君實歷仕五十七年所處皆膏肥地而自奉

簡淡日食止豆腐時因以爲號麓の花^{好問著}主人著俳諧當世

男卷上^{延寶四年印本}紅葉といへる題にて重秀「朝風や紅葉

をさそふ豆腐箱」と見えたるにて延寶の比すでに江

戸にあるを見るべし、諸國落首咄卷四に「豆腐やの豆

○燈明油 東鑑補延應元年七月十五日壬午今日前

武州以三田地爲三不斷念佛所限未來際令寄附於信濃國善光寺云々田六段は佛餉灯油の料田なり云々夫灯油三斗六升佛餉三斗六升なり云々

一日一合づゝと勘て一年三百六十日にて三斗六升と定めたるものなるべし前武州とは北條武藏守泰時朝臣の事なり

○木賊 延喜木工式年料木賊大二斤磨床案源平盛

衰記、播磨ヨネハ木賊力掠ノ葉カ人ノ綺羅ラツクルハ云々木賊にて物をみがくも既に延喜式に出たり

○ところてん 訓蒙圖會、石花今按にこゝろふと

俗云ところてん石花菜也或云大凝菜倭名類聚鈔本朝式云凝海藻古留毛波俗用ニ心太二字云古々呂布止延喜式、主計云々調大凝菜丁ニト卅斤、中男作物上總凝海藻、安房凝海藻大寶賦役令、凡調絹絶フシキム云々若輸ニ雜物ニ者鐵十斤鐵三口鹽三斗云々凝海藻一百三十斤云々

今按に大寶令に一百三十斤といふは今の二十二貫二百六十四匁三分二厘なり此貫目を以て鹽三斗鐵十斤絹絶八尺五寸と交通するを以て考ふるに今絹

絶八尺五寸は銀十錢許にも當るべければ大凝菜一斤は銀七釐六毫九絲二三許にあたるべし

職人盡歌合、心太賣コウツクリ「我ながら及ばぬ戀としりながら思ひよりぬるこゝろふとさよ、

○となめき 異名分類となめき引歌木の部李の下祕藏隣

にあり、李祕藏むめつさを花となめきのさきさかまきの白妙の梅つさをはなまさかりに見ゆ、

今按にとなめきは門並樹トナメキなり、さきさかまきは既開將開ハクハクなり梅つさを花は梅牡丹なり梅の如くにて花頗る豊牡に幹もまた強大なるを以てしかよべるなるべし然る時はとなめきは隣にあらず

○常盤草 莫傳抄、河すかきたちつる宿のときは草風も夏なき時にこそあれ「藏玉同じ」江戸志、松の御門と稱しけるは即今常盤橋御門と申なり

○とんだ茶釜 稱覺譚、安永六酉年笠森稻荷境内水茶屋の娘を笠もりおせんとして評判たりし、また其のち淺草觀音堂のうしろ楊枝店の女を銀杏娘と呼て名高し、また後に山下水茶屋の娘をとんだ茶釜といひふらす云々里のおた卷評安永三年甲午の秋近き證據は山下にてとんだ茶釜と聞えしはひと比の大評判、能々き

覺

書面虎の子商人共買請候共九州限り尤其場所々々に差支も難計候間領主地頭へ懸合の上取計其餘の國々へは無用に可致候事

傳聞する處は當歳の虎子對州人釜山浦の倭館にて獲たりしを商人金十兩に買請しを又々陪從して大坂の商人は七十金に買入しとぞ一人前二十四錢の積りにて一萬八千四百八十人に見せざればまづ七十金を聚むるに足ず其餘の雜費を加へては十餘萬人に見せずは購ひがたからん後いかにせしや更に聞ことなし

○銅升 東寺文書大山庄地頭請所御年貢支配事

合貳佰斛內銅升定

柒石二斗 灌頂院西院御佛供

四斗五升 西院長日供養法御佛供

四石八斗 金堂常燈料油米安井僧正御房寺務之時被宛

三石六斗 灌頂院常燈料油米同御時被宛行

六石 講堂修正饗料但二十四石內三石樂人酒肴處追加之云々

十石 安居終饗料

捌拾二石九斗四升八合 貫首御分但半分は現米半分は以色代可進辦なり

二十石 執行分

十石 下行事給物

三石五斗五升一合 灌頂院預食上乘院前大僧正御房御時被宛行

十一石二斗四升 職掌等給物真乘院時正嘉年中被宛行之

十二石 綱亭等裝束料新熊野僧正御房御時被宛行之

二十八石二斗一升一合 恒例庄立用

已上二百石

右注進如件

永仁元年十二月 日

按に此銅升と云もの如何なるものにや未レ考、但東寺文書の内に堅二寸横四寸の升云々年貢可渡進者也と云文あり此升即銅升到にや堅二寸横四寸の積三萬二千分なり寸法にて三十二寸なり即今京升の四合九夕五撮九有奇にあたる然る時は二百斛は今の九十九石一斗八升餘に同じ三斗五升俵二百八十三俵一斗四升なり貫首御分八十二石九斗四升八合は京升の四十一石一斗三升三合九撮一三二となる、俵にして百十七俵一斗八升餘に當る是東寺貫首の料なり

享和癸亥夏月

藤憲顯

天保四年冬御倉雨もりの由にて御開封あり

○とし玉

世鏡抄師弟法儀の條

二季彼岸朔日毎之音信、

納涼薄絹、寒天吳服初稻八木節酒初尾、七月送物臘

月歲末正月年玉年貢最華

○登蓮法師

登蓮法師集、刑部卿忠盛身まがひて

後長月のはつか頃にかのあたりの人のもとへ申遣ける「なげくらんすがたはみねど身をつめばいかく露けき秋のゆふぐれ」徒然草、人のあまたありける中にてあるものますはのすゝきまそほのすゝきなどいふことありわたのべの聖此事を傳しりたりと語けるを登蓮法師其座に侍りけるが聞て雨のふりけるに簀かさやあるかし給へ彼すゝきの事ならひにわたのべの聖のがり尋まがらんといひけるをあまりに物さわがし雨やみてこそと人のいひければ無下の事をも仰らるゝものかな人の命ははれまをも待ものかは我もしに聖もうせなばたづね聞てんやとしてはしり出て行つゝ習侍りにけりと云々詞花集。登蓮法師「世間の人の心のうき雲に空かくれする有明の月、

詞華集は天養元年に撰進し忠盛卿は仁平三年正月

十五日卒去なり」群書一覽、登蓮は西行同時代の人なり

○虎 文政十年丁亥、今度朝鮮國より差渡商人共買請申候虎の子自然御内上覽被遊候御儀も可被爲有者商人共より取上げ御當地え差廻し申段奉伺御内慮候處上覽被遊間敷候間御當地え差越候に不及との御事被仰達候就夫商人共折角買入候儀と申追々諸難費等も有之甚難澁仕罷在候間元來異獸には御座候へ共人家へ相育人害を成候程の獸子にも無之旁九州上方筋可相成は御當地迄も差出し一通り諸人見物致度旨願出申候依之最早御不用の獸故買請候商人共願望の通差免一通り見物爲致候上は早々對州へ取歸候段申付度奉存候處日本に無之獸子□□を差免申候儀如何に付各樣迄無急度申上候不苦候儀に御座候はば願の通り申付候樣仕度御序の刻御内慮御同被下候樣致度候乍然右様の儀御内慮を得却て御差圖も難被成下一通り無急度入御耳候迄にて可然思召候は書面御下被下樣致度何れ共宜敷御勘考奉希候以上

宗對馬守内

閏六月

仁郡右衛門

○東大寺寶物 家忠日記、慶長十七年十一月南都

ノ三倉ニ盜賊入テ寶物ヲ盜ム後日賊露顯ス勅封ノ時
寶物ヲ改ル奉行トシテ永井彌右衛門白元南都ニ至ル
云々東大寺寶物圖跋、右東大寺勅封三倉寶物繪圖一
卷者元祿六癸酉年五月十六日御開封御寶物御改之時
所ニ圖畫ニ也仍今亦令ニ清書ニ了、于時元祿六年癸酉九
月日執行都維那祐想判御寶物橫銘、

天平寶字二年六月一日

紫微內相從二位兼行中衛大將近江守藤原朝臣

天平勝寶八載六月二十一日

從二位行大納言兼紫微令中衛大將近江守藤原朝臣

仲九

從三位行左京大夫兼侍從大倭守藤原朝臣永手

從四位紫微少弼兼中衛少將山背守萬朝臣福信

紫微大忠正五位下兼行左兵衛率左馬監加茂朝臣角

覺

從五位上行紫微少忠葛水連戶主

右之通御寶物橫每合誌有之

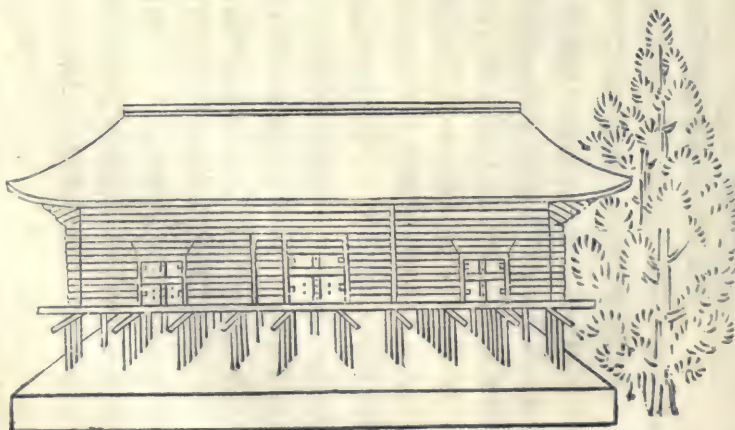
一本校合

以三南都東大寺東南院本一矣

當時勅封倉、名正
倉院、本願感神皇
帝御遺財也、當皇
帝崩後七々御諱
辰、孝謙天皇并光
明皇后有旨悉被
施入毘盧舍那佛
之寶倉、帝王御代
々勅封也

御倉天平中所建
稱正倉院今垣無
七間圓檼、南北十
徑二尺二寸凡四十
板鋪下高九尺
板鋪ヨリ軒マテ二
丈一尺

貞幹誌



出し酒を以て煎すること四五沸二三杯をのむなり云
嵯峨天皇年中にはじまる

○鳥羽僧正覺融 天台座主記、天台座主第四十七

前大僧正覺融法輪院號鳥羽僧正 歷三二日一宇治大納言隆國卿

息智證門徒覺圓僧正弟子賴豪灌頂、保延四年戊午十

月二十七日宣命八十 同二十九日辭退同六年庚申九月

十五日入滅八十 尊卑分脈四、醍醐天皇御子西宮左大臣

高明公子孫

克明親王—博雅—信明

醍醐天皇

道濟 能賢 覺融號法輪院僧正

又號鳥羽僧正畫工

高宮左大臣 高明 俊賢 顯基

號宇治大納言

隆國治曆三年二月六日權大納言
承保元年正二十七辭同四七九薨

△是によれば隆國卿の養子か

今按に鳥羽僧正の戲畫中に山法師を調謔せしなるべしと見ゆる一段ありその何の意といふことを知ざりしに僧正智證門人たるを以て山僧と常に不快なるが故としられたり、よつてその一段を抄寫す

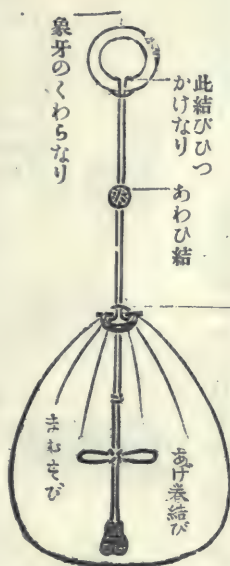


猿は山王の使者也といふにより山僧に比したるものなるべし

朱傘かゝりやきわたり人の目を驚せり是も一入興に入らせ給ひて即諸役御免を被下云々茶湯書。ノ貫と云人は伊勢國の者なり常に牝馬に乗て何方へも行なり牝馬はしづかなるものとてすきたり然るにその牝馬死たりノ貫云おのれ生てゐるうちばかり我に奉公さすることにてはなし死ても奉公させしとて皮をはぎなめしにして袋に拵へて内に入様の道具を入て一生の内何方へも持あるきしなりむかしよりへちといふ字はなきを林道春この字に被書たるなり

○へち馬の皮の牝の袋 茶湯書。袋の法は馬の皮一枚を切まはしてかゝりを付丸袋に仕たると云なり今は色々のきれをあつめてつぎ合せて袋にも仕る又一色の袋にも仕る縫やうはず、袋のことし袋の緒を

わなにして錠のおろし様あり口傳



とはして錠のおろし様に口傳あり

○平家蟹 藥名備考和訓抄。ヘイケガニ鬼面蟹野記

後藤黎春隨觀寫眞。鬼蟹和訓平家蟹一名長門蟹一名武文蟹一名島村蟹一名長田蟹一名姥蟹一名一念蟹

今案に此蟹長門國門司關の邊にては平家の軍兵の一念の化せし處と稱して平家蟹と云、また兵庫の近邊にては秦武文が松浦五郎に主君の御息所を奪はれしを怒て自殺せし處と見ゆ怨念の化する處と云又享祿四年六月四日島村彈正攝州野里川へ飛入り



討死せし一念

の化する處と

稱して島村蟹

といふといへ

どもその實は

鬼面蟹とて異

國にもあるも

のなれば怨念

の化せしには非るなり

柳菴隨筆邊字篇第六終

石清水
神主一
御豐

神主二
良範

神主四
春實

別當七
定禪

別當十三
聖清

別當十八
定清

兼清

神主三
枝眞

別當七
俗別當始

神主六
安遠

神主七
兼輔

兼任

別當七
延晟

神主五
良常

別當十五
朝鑑

源平盛衰記二十中ニモ義盛和田小太郎ニハ日本國ノ侍ノ別

當ヲ賜リ候へ上總介忠清ガ平家ヨリハケ國ノ侍ノ奉

行ヲ給テモテナシカシヅカレテ氣色セシガアマリニ

浦山シカリシカバ兼テ申入ルナリ云々」東鑑。治承

四年十一月十七日和田小太郎義盛補ニ侍所別當、是去

八月石橋合戰之後令レ赴ニ安房國ニ給之時、御安否未定

之處義盛望ニ申此職ニ之間有ニ御許諾、仍今聞ニ上首ニ被

レ仰云々

○瓶笙 元謝宗可詩。瓶笙云々とあるは釜の沸た

つ音なりと北窓瑣語に出たり

○平等院 扶桑畧記。永承六年三月二十八日癸酉

左大臣捨ニ宇治別業ニ爲レ寺安置佛像ニ初修ニ法華三

昧ニ號ニ平等院ニ拾芥抄。諸寺部平等院宇治」百鍊抄。

承安三年十一月七日大衆南部大衆也昨日到ニ宇治ニ以ニ平等

院堂舍人屋等ニ爲ニ彼宿所ニ吉野大衆同心相從公家遣ニ

武士於宇治ニ爲レ防ニ大衆入洛ニ也引ニ宇治橋ニ以ニ橋東

岸結陣云々」東鑑。治承四年五月二十六日宇治合戰

三位入道自殺云々」京繪圖。京三條橋ヨリ宇治へ四里

ナリ宇治橋八十三間五尺幅四間平等院ハ後冷泉院永承

六年建立供養、御堂關白賴道公鳳凰堂扇芝駒繫松樓

門跡釣殿

○ノ觀 老人雜話。茶の會にノ觀流といふあり是

は上京に坂本屋とて茶の會を好むものありおどけた

る茶の會をなす初は號を如夢觀といふ後に改てノ觀

といふ一溪故道三の姪塔なりノの字偏ばかりなりイ

に及ばぬといふ心なりとぞ、宗易よりすこしのちな

り」長閑堂記。天正十五年十月北野大茶湯の時云々、經

堂の東の方原に京の衆の末に當りてへち貫といひし

もの一間半の大傘を朱ぬりにし柄を七尺許にして二

尺ほど間をかきにしてよし垣にてかこひし照日に彼

院大納言家厚卿^{正二位} 院別當葉室頭辨顯孝朝臣^{正四位上坊}
城大納言俊明卿^{從二位} 櫛笥右中將隆起朝臣^{正四位下} 六條左
中將有言朝臣^{正四位下} 庭田大納言重能卿^{正二位} 拾芥抄。綱
所部寺務檢校別當坐主長者等依寺不同院司部別當
執事年預判官代^{五位或四位} 召次所仕所別納所御服所別當御
厩別當、關白家大臣家大署同攝關但辨別當、文藏事、年預、
殿藏人所等無之、近衛大將同之、職事御厩主舍人居飼
辨別當、文殿別當、藏人所、侍所別當、主舍人、居飼
御隨身所^{別當、內舍人、番長、近衛} 云々、家司、下家司、政所^{別當、家司}

下家司宮城部所々內豎所^{以大臣中將口位爲進物所}
將爲御厨子所^{四位殿上人} 畫所^{有別當五位藏} 作物所^{有別當} 樂
所^{有五位六位藏} 藏人所^{有別當左酒殿當預} 贊殿^{有別當} 神
泉苑^{以近衛次將} 勸學院^{以藤氏辨} 穀倉院^{有公卿及四位五}
學館院^{橘氏諸生別當氏} 獎學院^{王氏諸生} 弘文院^{生別當} 施藥
院^{以辨及外記} 乳牛院^{有別當乳牛師預等} 北野^{有別當} 園池^{有別當}
熊野別當系圖。長保元年己亥歲一條院以泰救爲別當從是重代職止奈留

●實方

中將 長保元二三
補別當 泰救

別當 快真

同 長快

同 長範

同 行範

同 範譽

別當 義豪

別當 湛快

文治二別當 湛增

別當 湛真

同 祐豪

同 湛順

同 定湛

同 範快

同 範增

別當 快尊

同 辨快

同 定快

紀氏系圖

●紀御園●

石清水 別當三 運真
安宗 別當一

別當二 幡朗
會俗 別當四

別當六 總祐
清鑑 別當八
清昭 別當九

別當十二 光譽
貞芳 別當十一

別當十六 摩雅

みれば臨兵闘者九字なり禹歩の法をみれば即旗縫口傳のふみやうなり然れば反閉は護身の咒にして足ぶふは禹歩なり宇篇に云べし

○別當 枕草紙。つくも所の別當する比たれがもとにやりけるにかあらん物の繪様やるとてこれかやうに仕るべしとかきたるまんなのやうもゝのの世にしらずあやしきを見つけて云々」春曙抄。細流云金銀細工の所なるべし拾芥抄作物所在ニ進物所西一有ニ別當ニ預ニ熟食ニ勤物云時柄康保五年正月二十八日美濃守長保二年五月三日藏人兵部丞被補ニ作物所別當ニ鹿島文書。將軍家政所下ニ平朝秀一

可令早領ニ知常陸國德宿郷内畑田富田大和田生江澤已上四箇村頭職ニ事
右人任ニ親父秀幹去年十月二十一日讓狀四至載之可領知ニ之狀所仰如件以下

文曆二年閏六月十五日 案主左近將曹菅野判
令左衛門少尉藤原判 知家事内舍人清原判
別當相摸守平朝臣判時房
武藏守平朝臣判泰時

將軍執權次第。文曆二年の條に將軍賴經權中納言執權泰時

武藏守時房相摸とあり、將軍家令の外に別に事を執行ふ職たるを以て別當と云なるべし

新田正文書。左衛門督家政所下 上野國新田御庄官等補任下司職源義重

右人依爲地主補任下司職一如件御庄官等宜承知依件用之敢不違失故下

保元二年三月八日 案主宮内錄菅野判

令前中務錄山判

別當散位三善朝臣判

散位紀朝臣判以下畧之

又將軍家政所下 上野國新田庄内岩松下今庄田中參

箇郷住人 可令早任ニ夫義兼讓狀ニ以後家爲中

地頭職ニ事

右人任ニ彼讓狀ニ補任件職ニ於有限之年貢課役一者

任ニ先例ニ可致沙汰ニ之狀可仰如件以下

建保三年三月二十二日 案主菅野判

令圖書允清原判 知家事惟宗判

別當相摸守平朝臣判義時

民部權輔兼遠江守源朝臣判以下畧之

雲上明鑑。院執事二條左大臣齊信公從一位院執權花山

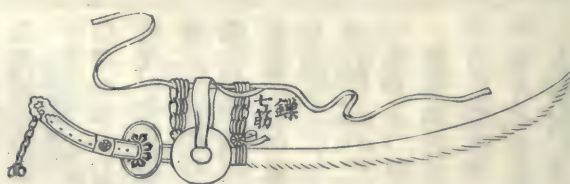
武平眼のあしとも名付云々」伊勢貞丈云。右長秀記の文言とるにたらずと云ども閉配といふことはあしのふみやうなりといふことをばしるべし、閉配は反閉なり天武博亡烈と五足ふむことゝみえたり、拙家傳來の書の中旗縫口傳といふ書あり流傳の書といふにもあらざれどもふるくより傳たり、その書に云へんハイふむ儀式ごへいをもち九字の文唱へ如此たるべし、唱か別めぐるあし的事

前左足九
在左足八列右足七皆右足五
陣左足六者左足四關右足三
兵左足二臨右足一右足
左足左のごとく相見候文を唱へながら足をふむ故反閉をふむといふなるべし、九足の反閉五足の反閉七足の反閉などといふことあるよしある翁の申傳りしを、其聞し頃は何の心もなくておし返しても尋ねざりし今くやめどかひなし、五足半閉といふは長秀記にいへる物なるべし陰陽家に尋べし、東鑑卷五十一、弘長三年十二月二十四日庚午天晴入夜雨降、今日評定衆等參相易亭、御産所并御方違等事有_二其沙汰召_二陰陽師等_一被_レ尋_二面々異見_一云々、晴茂申云當_二閉坏八座方_一有_二其憚_一云々、貞丈推量閉坏反閉同一か、閉坏八座と云はあしき方角なる故其方を踏破る咒禁の方術

を行ふ事を反閉をふむと云ふにはあらざるや、將軍出行の先には必反閉をふむと古記に見ゆ是惡方を破る儀か閉坏八座の方の事陰陽家に尋べし右山岡明阿の問に依て貞丈答之、明和八年六月二十日右一記常政拜受寫之多賀常政云。牧野氏正胤曰曾_レ有_二永以先語_一曰九字反閉則所_レ稱_二世俗_一九字也、臨兵闘者皆陣列在_レ前七字反閉貪巨祿文廉武破五字反閉天武博暴烈云々政按反閉之一事者出陰陽家故難辨其委者有我家事也予時明和八年尚呈其道之博士則可得明辨者也辛卯七月十三日記之常政聖濟總錄百五十五護身法以下并出千金翼曰諾々聖々左帶三星右帶三牢天翻地覆九道皆塞使_レ汝失_レ心從_レ此迷惑以_レ東爲_レ西以_レ南爲_レ北人追_レ我者終不_レ可_レ得明星北斗却閉千里六甲反張不_レ避_二禍殃_一乘_レ車追_レ我折_二其轅軸_一乘_レ馬追_レ我掩_二其兩目_一步行追_レ我腫_二其兩足_一揚_レ兵追_レ我刀反自仗明星北斗却敵萬里追_レ我者亡竟_レ我者死牽牛織女化爲_二江海_一急々如律令反閉の義は六甲反張却閉千里の字に取れるならん

抱朴子。住_二山林中_一云々禹步而行三咒曰諾皇太陰將軍獨開云々とあり」字彙補。諾皇神名西陽雜俎有_二諾皇記_一と云諾皇神ならんには聖濟總錄の諾々畢々は諾皇諾皇と連唱するを右の如く書誤りしなるべし、又抱朴子に六甲秘祝と云ものを載たるを

陰ニ獅子ノ戯レテ前後左右ニ追合タルヲ草摺長ニ召
 レ兵庫鑢ノ丸ザヤノ太刀ニ虎ノ皮ノ尻サヤカケタル
 ヲ太刀掛ノ半ニ結テサゲ云々、又土岐存孝ソバヲキ
 ヲト見テアハレ愚息ニテ候惡源太云々將軍シバシト
 テイツモハキ副ニシ給ヒケル御所作兵庫鑢ノ御太刀
 ヲ引出物ニゾセラレケル隆資卿從入
 幡被寄條劔卷。建久四年
 五月二十八日夜相摸國會我十郎祐成同五郎時致ガ親
 ノ敵祐經ヲ討ケル時、箱根ノ別當行實ガ手ヨリ兵庫
 鑢ノ太刀ヲ得タリケレバ思フ様ニ親ノ敵ヲ討タリケ
 ル曾我物語
 太刀かた
 何の條何を以てかたかたの門いでい
 らんとてさや卷一こしとりいだし十郎にひかれけ
 り云云 五郎にはひやうごくさりの太刀を一ふりと
 りいだしひかれけり」今川大草紙。いかもの作りと
 いふをば今の人はず虎の皮の尻さやをかけて足
 は兵庫鑢に七足なり云々或説、兵庫鑢といふは兵庫
 寮の工人の作れる形を以て作りいだせしより名とせ
 しものにてその鑢を太刀の帶取に用ひしを兵庫鑢の
 太刀と呼此説信じ
 がたし鑢倉志。鶴岡寶物ニ兵庫鑢ノ太刀
 二振アリ共ニ二尺餘無銘、兵庫鑢トハ云ドモ古法ト
 ハ異ナリ



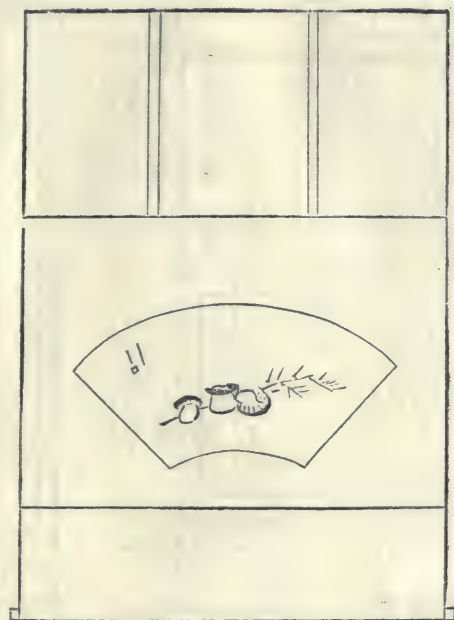
鎌倉八幡宮
寶物

源賴朝卿の
御太刀兵庫
鑢の太刀也
是常の太刀
のあしは革
にて縫立
あるひは銅
具にて作る
を、鑢にて
別とす

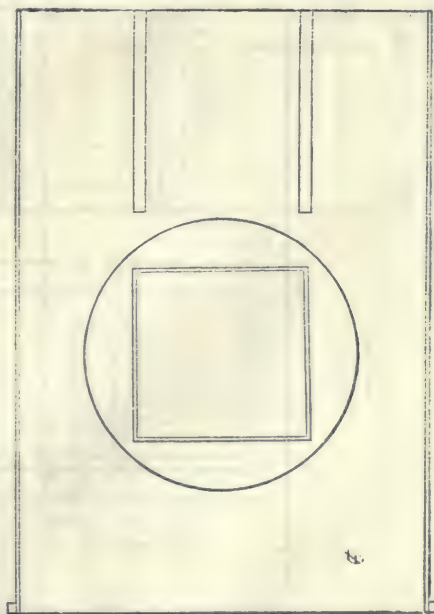
○反閉（はんぱい） 東鑑。建保六年

六月二十七日丁卯晴、將軍
 家任ニ大將ニ御之間、爲ニ御拜
 賀ニ參ニ鶴岡ニ給畢云々、先
 出ニ御南面、文章博士仲章朝
 臣東帶 上ニ御簾、陰陽少允親
 職東帶 參ニ車寄間ニ候ニ反閉、
 陰陽權助忠尙東帶 入ニ廊良
 妻戸勤ニ御祓ニ小笠原長秀
 記三議一統 人の起居動靜に
 五字の閉配とてあるべく候
 是則弓法の本意なり、かの
 濫觴といふは黃帝蚩尤氏を
 ほろぼし給といへども彼眼
 ひとみをつらねいきて人をにらむるやうによつて人
 民惱亂す、鞠と號して蹴といへどもやぶれず、しか
 るに天のあたへにかの閉配を授給ふゆゑ二人此足に
 て射けるときの眼つぶれて天下安全なり、五字と
 いふは天武博亡烈なり陰のかよひは右のあしより二
 のあしをふみ陽のかよひとは左よりふむべし是を天

中切連臺へうぐ一文字なし



四方一文字上下切連臺へうぐ



○兵庫鐐の太刀

太平記異本大塔宮至吉野

ハ不遁攸ナリト思召切テ赤地ノ錦ノ直垂ニ緋絨ノ

鎧マダ巳ノ刻ナルヲ草摺長ニ透モナク召レ龍頭ノ冑

ノ鍬形大ニ打テツケ白檀ミガキノ髓當ニ兵庫鐐ノ太

刀ハキ三尺五寸ノ長刀ヲ脇ニ挟ミ不劣兵士二十餘人

前後左右ニ立云々」庭訓往來六月十太刀者兵庫鐐鳥

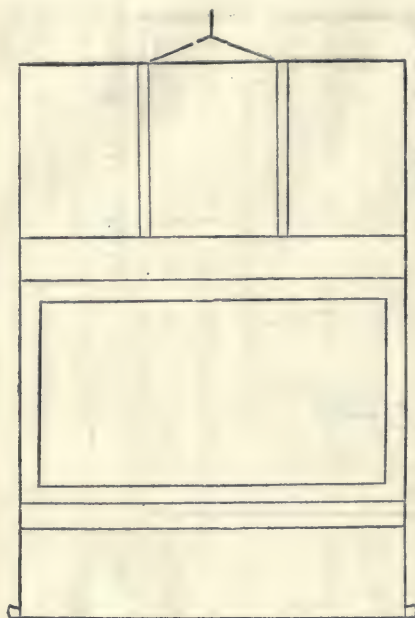
頸皆彫物袿鏑并金作左右卷云々」太平記公家一統大

塔宮ハ赤地錦ノ鎧直垂ニ緋絨ノ鎧ノ裾金物ニ牡丹ノ

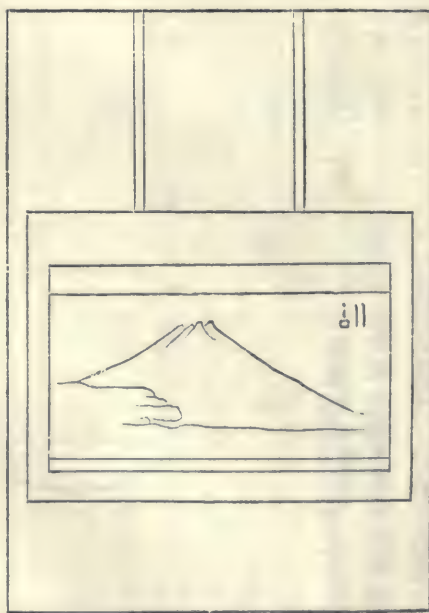
ふくろへうぐにかくのごとくすることは去宮方の御好なり



中風帯一文字輪補

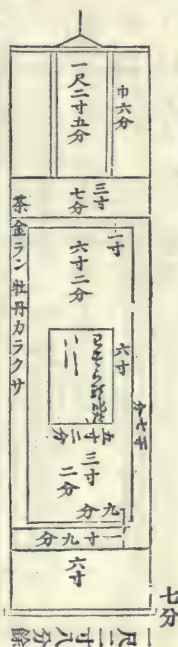


中上下まはしへうぐ

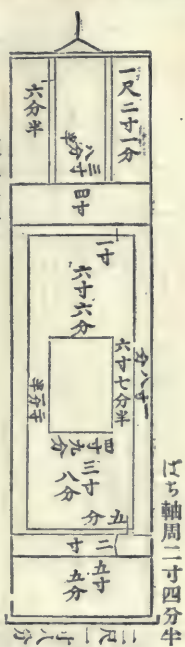


上下古印金地紫紋長春からくさ地さやがた

風帶一文字くろく金紋
雲形裏絹あさぎ



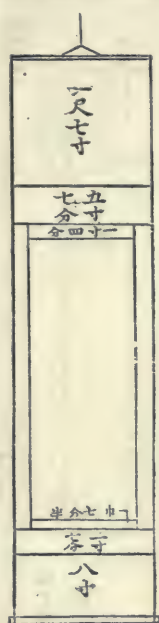
片桐貞昌好 だいへうぐす法



紐長三尺

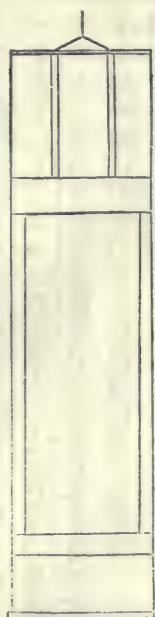
東山殿御好 寸法 或は云横物は、三尺一寸あり、

へり二寸二分と

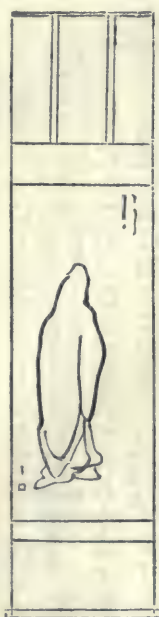


勝田上貞傳

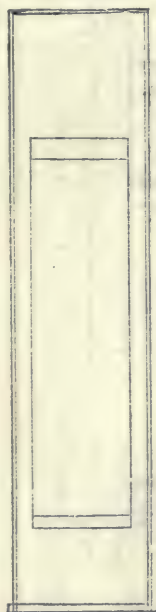
志中一文字なし輪補



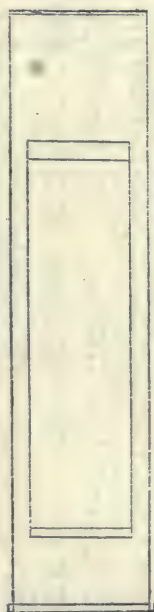
一文字風帶上下ばかり縁なし



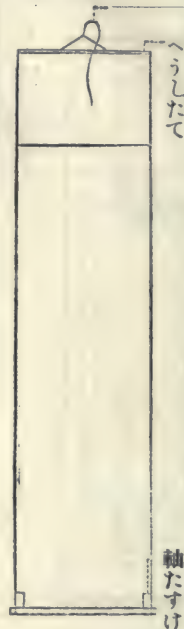
ふと一文字の變式



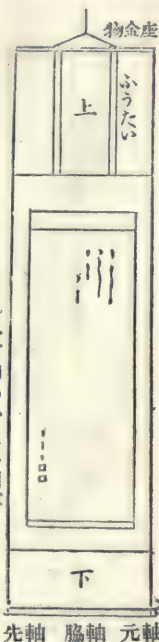
ふくろへうぐの異體かくの如きもあり



かけを
へうしたて

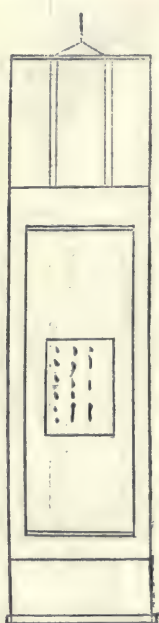


へうぐの名ところ



まきをなば印のかたへ引べし

これをだいへうぐといふ



まきひも左右へわけて印あるかたより巻いだし被申候へば自然左右わかり申候、座金物より三つにとり

一つをはいにして表紙竹の際にて切三つ一つに折て風帯にはさみ申候、外題の切やう押やうとて師傳あり、かけもの一尺二寸迄ははゞ三つにとり、そのひとつを長さにして、はゞは右のひとつを六つにわり申候



二尺に及は三つにとりそのひとつをすて、六寸六分餘をすつるなりのこるところを一尺三寸五分餘をいふなり三つにとり四寸五分餘なりその一つを長さにして右のひとつを六つにわりはいにするなり、三尺に及は四つにおり一つ七寸五分なりをすて、のこる所二尺二寸五分ありまた四つにおり五寸六分二厘五毛づいなりそのひとつを長さにしてはゞは右同前六つとりなり、外題押やう上一分あけわき表紙たけにつかぬやうに仕候たし相阿彌はかくの如し能阿彌は廣さ少々つよし

鹿苑院殿御好題表具、寸方左の如し紙中小倉色紙なり

○^{へんさん}偏衫

格致鏡原。原始秘書唐武后幸僧懷義衣

帽皆用朝扮衣用大袖如朝服制曰直綴曰

一曰寬衣加以錦繡訓蒙圖會直綴今按古僧

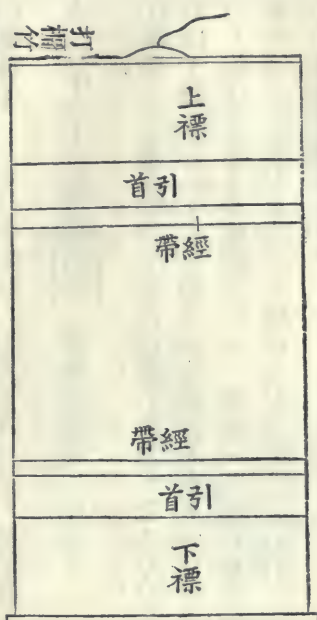
服偏衫裙子後世連上下爲直綴下學集。編綴、

編衫、裳、以上三種律家所用也

○へうぐ

下學集。表補繪^{ウホエ}、表襟^{ウホイ}、幘補繪^{窓猪}、輪補繪^{孟反}

宋周密思陵書畫記掛軸式



櫻井清九郎傳へうぐいろゝあるが中にこれは
だうは



これはへうほ



これはりんほ

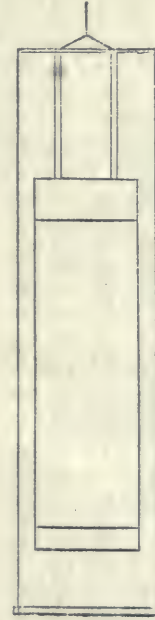


此へりは二分

これは見きり



これはふくろへうぐといふなり



○偏無爲居士 墓所一覽。雜家依田貞鎮號ニ偏無爲

居士ニ稱ニ伊織ニ明和元年三月十七日府中善明寺ニ聞人

小史。依田伊織貞鎮ハ天和元年ニ生レ明和元年ニ歿

ス行年八十四歲潮音ノ舊事大成經ヲ四天王寺ニテ講

釋セシ時聽衆日々千餘人ニ及ビシト云々

○偏易子 朗詠卷軸跋 偏易子書以送ニ於淡齋老

人一時年七十二歲

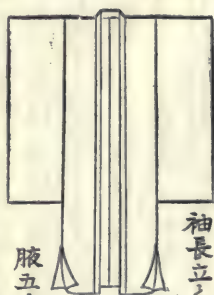
○編綴 産業袋。十徳は直綴のとなへそこなひさ

れば十徳のごとくして袖ながく四すそを五寸ばかり

づゝ綻ばせだるを編綴といふ」或書「入道は麻の狹

衣たゞ一つ春がきたとて編綴はなし下學集に編綴は律家の服とあり

編綴の圖



袖長立膝まで

腋五寸余なくうひあり

○平絹 驥驢嘶餘。宿直裝束トハ云々、侍法師御承

仕ハ平絹ヲ青ク染テ差異ニスルナリ」深窓秘抄。赤大

口人ニ依リ差アリ束帶ニハ生絹ヲ用ヒ又平絹精好ヲ

モ用ユルナリ、御機、諸臣モ用レ之差アリ錦練貫平絹

等ナリ、平絹直衣、宿老着レ之多直衣ヲ夏用フルコト

老人用レ之」撰塵裝束抄。素服見後愚冠卷纏袍平絹狩衣

平絹鼠色冬練夏生共凶服見類袍黒染平絹諒闇服見類冠卷纏直

衣純色平絹同束帶無文位袍、本儀綾也平絹略儀也云々白褐

平絹、心喪裝束橡袍ツルハハウ以レ橡染也裏同平絹練張、薄鼠

色平絹直衣」裝束圖抄。袍、地は冬表綾裏同じ色の

平絹、下襲、冬は表白平絹裏黒平絹、表袴、表白平

絹裏紅平絹、赤大口、紅生平絹、襪、平絹または夏

は生平絹、奴袴、侍從以上經紫緯白の織物裏平絹ま

たは表平絹染色裏同色平絹、四品は淺黃平絹を用ふ

べきを經淺黃緯白の織物を用らる○裝束に用ふる平

絹は羽二重の極上品なり」絹布重寶記。羽二重大白

眞白御召地極上品の絹の惣名なり、加賀絹の上品を

諸加賀といふが如し、元來唐糸の太白にて織し故の

名なり別の子細なし、三四十年来天明八年より和産

の糸格別に勝れ舶來の糸にもまさるゆゑ日本糸はか

りにてをるなり、然れども名ばかりは故實を失はず

六波羅行幸繪 詞世尊寺行俊卿、繪土佐光顯

平治元年十二月右
衛門督信賴卿左馬
頭義朝以下謀反の
ときに主上は太宰
大貳清盛朝臣の六
波羅の亭に行幸あ
り、十二月二十五
日の夜の事なり、
此繪は行幸により
て諸將士卒敬服し
たる跡なり、前に
座したるは主人に
して後に座したる
は郎從なるべし、
主人はへりぬりを
着して郎從は折ふ
ばうしをきたる所
にて隨兵日記に符
合せり、古人甲冑
の時はみなへんぬ
りを着せしといふ
にはあらざること
をしるべし



○へらこ 藥名備考和訓抄、へらこ蛭蝶本綱四十、
秋田品種甚多シ菜蟲ノ化スル處ナリ

四國にていふへらこ

秋田にて
いふ所の
へらこ



しろく
ろく
ろく
あり



色黄にし
て點なし

○へちま 寛文五東海道紀行。袋井にとまり行水

しけるにむさきへちまをいたしければ「こゝろなく

むさきへちまをいだす哉おんふくろ井の宿のおか、

は、農業全書。へちまその上皮をさりその筋あらき

布の如きをもみ洗ひ乾かし是にて器物を洗へばたと

へぬりたるものにも引めもつかず物のあかをよく

とり又湯手に用ひて甚よし云々」南宋僧斷崖。不成

蔬菜不成瓜沿レ牆傍レ壁也開レ花只與ニ諸人一除ニ垢穢ニ

不レ知ニ自己一團萍ニ本草綱目。絲瓜集解時珍曰、絲瓜

唐宋以前無レ聞、今南北皆有レ之、以爲ニ常蔬ニ云々、嫩

時去レ皮可レ烹可レ曝點ニ茶充レ蔬、老則大如レ杵、筋絡纏

紐如ニ織成、經レ霜乃枯、惟可下籍ニ韓履ニ滌ニ釜器、故村

人呼爲ニ洗鍋羅瓜ニ

遍昭集。かはらにいでて御ぶくぬく所にあやしのほ
うししてつかはし、云々かくていづこともなくあり
き侍てはつせの御寺にさむらふほどにさてまた世に
ありとも聞えぬをの、小町こもれりけるかたはらに
經よむをたれならんとてつれなく人してみせければ
みのひとつきたるほうしのさすがにあてやかなんす
みのかたに居てはべりといひければ耳をたてゝきく
にいとたうとくあはれなりたゞ人にはあらじ中將の
大徳にやあらんとおもひていかゞいふとて此みく
らになんはべるいとさむきを御聲をきゝてはべれば
いとたのもしくなん御衣ひとつかし給へとて云々と
いへるたゞ少將なりとおもひてたゞにもかたらひし
なかなれば物もいはんとて尋いきたりけれどふとう
せにけりと聞いて五條の後宮より内舍人を御使にて

野山を尋させ給ひけり云々

五條后宮とは閑院大臣冬嗣公の御女、仁明天皇の後宮藤原順子の御母におはしますなり

和漢合運。元慶三年遍昭爲僧正

〇へりぬり 義貞記。鎧可着次第事、一番浴衣、二

番小袖、三番大口精好、四番髪亂縁塗、五番以下略之「伊勢貞丈鎧着用次第。へりぬり又へんぬりとも云一名引立ゑぼうしと云、うしろのかどのひらきたちたる

なりやはらかなるものなりかぶりて後えぼうしのう
しろの方を内へおしこむ。



隨兵日記。へりぬりは出陣の時大將またはたさしな
どきべしおなじくはちまきをすべき也云々の衆は、小

結のなきふぼしをきて、てうつかけをすべ

源平盛衰記。那須與一マコトニト思ヒ胃ヲバ脱テ童

ニモタセモミ烏帽子引立テ薄紅梅ノ鉢卷シテ手綱カ

ヒクリ扇ノ方ヘゾ向ヒケル云々平家ノ侍ニ伊賀平内

左衛門尉ガ弟二十郎兵衛尉家員ト云モノアリ黒革オ

ドシノ甲ニ胃ヲバ着ズ引立烏帽子ニ長刀ヲ以テ扇ノ
散タル所ニテ水車ヲ廻シ一時舞テゾ立タリケル云々

○平人 築田文書。覺

一知行分不入之事 付相定外非分之傳馬押立、雜色祿者餌指以下慮外之事

一秋務取納平町人以下可移事

一利根川舟路并古河へ通商人船不_レ可有_二横合_一

但、於_二關宿_一目前之沙汰致船役之義者可被仰付事

一築田知行之内并於_二古河_一船役可_二申付_一儀尤被_レ伺_二

前々筋目_一事

一御料所方諸奉公人之知行築田成敗平人召仕間敷事

附、百姓等迄も致_二他奉公_一者知行之内に不_レ可_二

指置_一事

以上

義氏
弘治四年六月十九日

朱印

晴助なり

築田中務大輔殿

成田家中法度。一平人衣服絹紬布木綿以下隨分麁相

候共者侈不可仕候事、但少分たり共役有之者は沙汰

の外之事

○へうたん町

瓢箪町記得菴作
寛文中

攝之大坂有_二傾城_一

町、號曰_二瓢箪町_一、其名因_レ何云_レ爾、入非_二山椒_一出非_二

胡馬、祇立見時分依_レ望_二夕顔_一爲_二町之名_一、彼町雖_二狹

少_二一莫_一關、若求_二歌人_一有_二定家_一有_二家隆_一、參禪有_二丹

霞 曹洞宗の祖に丹需淳あるを以ていふなり 歌書有_二古今_一、或寄_二身於鹽竈_一、或

嘯_二意於山歌_一、朝乘_レ馬而戻_二上屋_一暮連_二袖立_一家門、契

堅牢比_二石竹_一壽延長關_二龜介_一、昨日誓_二比翼連理親_一、今

日變_二天地雲泥交_一、晝獨居_二閑局_一、身云_二千話_一慕_二真夫_一、

夜集_二格子裏_一挽_二蛇三線_一待_二買人_一、悲_二葛城夜契薄_一

祈_二出雲神利生_一立思_二得_一採采女土器_一醉_二玉水宴_一終

夜語_二淨瑠璃_一不_レ知_二東天白_一乎、浮世五十年一寸前

闇、人更無_二少時_一光陰如_二箭弓_一不_レ招人群不_レ畜銀集、

何人不_レ畜_二財不_レ買_一桃顏_一施無止蒙_二桶必矣_一

○遍昭 紹運錄。桓武天皇第十六子正三位大納言良

峯安世男頭左少將左中辨正四位下良峯宗貞出家遍昭

五十代 平城天皇 阿保親王 在原業平

嵯峨天皇 仁明天皇 嘉祥三三三十一崩

淳和天皇 藏人頭左少將歌人 住良因院

良峯安世 宗貞 藏人頭左少將歌人 住良因院

宗貞弘仁七年に生る嘉祥三年 出家僧正遍昭是

三十五歳にて出家なり由性は也、號_二良僧正_一又_二由性_一

素性の兄にして延喜十四年七 花山僧正、慈覺

宗貞二十六歳の時に生れし人 寛平二正十九入 昭は天台宗

なり 減七十五 昭は天台宗

ふたなり、武藏國金澤といふ浦にありしを所のものはへなたりと申侍るとぞいひし」抄一本に、ばへとありばいといふにやおぼつかなし、今金澤にてたづぬればよいといひまたつぶともいへり、兼好が時にはへなたりといひけるにや、ばいに似てすこし大にして口の細ながき貝ありそれをへなたりといふか」
 藥名備考和訓抄。へナタリ紀州和歌浦ニアリ穀ナガニシノ如シ、大ナル者ハ長五六寸小ナル者ハ二三寸、卷タル處ニ刺多ク段々並着色赤黒シ、又一種白色ニシテ疣高キアリ此蓋ノ形赤蟬ノ羽ノ如ク薄褐色ナリ甲香ニ用ヒテ上品ナリ、和邦訛テバイノ蓋ヲ用ルハ非也、又サバイ田螺等ヲ用ユ皆非ナリ本草香螺ニ充解海羸集又へナタレト云

○へそくり錢 日待草寛永四年の春予が里の云々といふ語あれば、その頃に書しものなるべし幽靈のはよそへゆけばあとしたふてゆくなになりへそくり錢にて經よみもらへども云々」老人物語小野意全慶安中人三十四年むかしまでは麻にてよりたる細引のはそきほどのものに錢を三百も四百もさし連ねてもち歩行、殊に道中する人は一貫ばかりつゝもかたげあるさしが、近頃は胴卷といふ物を仕出し人々錢をそれに入てはら

に結付置、所用ある時は懷よりかぞへいだしてつかへば、へそくりの名をさへ蒙らしめて云々

○平家物語作者 醍醐雜抄隆勝私勅書之達幸記平家物語作者

事或平家双紙與書云、當時命世之盲法師了義坊實名如一

之說云、平家物語中山中納言顯時子息左衛門佐盛隆

其子民部權少輔時長作之、又將門保元平治々々四部

同人作云々、此時長前作平家二十四卷之本籠ニ伊勢

太神宮是也訖、是佐渡院之御時也順德帝後嵯峨院御在位

之時吉大貳入道輔常作之、平家物語民部少輔時長

書之、合戰之事依無才學源光行誂之十二卷平家

資經卿書之之日工集。文安五年八月十五日最一檢校

來予又問座頭語平家之由、最一云昔爲長卿者作

此書十二卷一留在播州、其後曰性佛者上之於音

曲而歌詠耳、性佛之後曰如一檢校云々」徒然草九

後鳥羽院の御時信濃前司行長稽古のはまれ有ける

が、樂府の御論義の番にめされて七徳の舞をふたつ

忘れたりければ、五徳冠者と異名を付にけるを心う

きことにして學問をすて、遁世したりけるを、慈鎮

和尚藝あるものをば下部までも召置て不便にせさ

せ給ければ、此信濃入道を扶持し給けり、この行長

菩提佛道名也、薩埵秦言「大心」衆生有「大心」又佛道名「菩提薩埵」無「正名譯」也「大論。問曰何等名「菩提」何等名「薩埵」、答曰菩提名「諸佛道」薩埵名「成衆生或大心、是人諸佛道功德盡欲得、其心不_レ可_レ斷不_レ可_レ破如_ニ金剛山_一是言「大心」、如_ニ偈說_一一切諸佛法智慧及戒定能利_ニ益_一一切_一是名爲_ニ菩提_一、其心不_レ可_レ動能思_ニ成道事_一、不_レ斷亦不_レ破是心名_ニ薩埵_一、復次稱_ニ讚好法_一名爲_ニ薩、好法體相名爲_ニ埵_一、云々

大論維摩經の義によれば信心に佛門に入りし人といふことを菩薩と稱するなれば菩薩といふも入道といふもさしてかはることなきにや、然らば菊塙菩薩と號せしも敢てとがむべきほどの事にはあらかじかし

柳菴隨筆保字篇第五終

柳菴隨筆邊字篇第六

○へなたり 徒然草^三甲^{かいかう}香はほら貝のやうなるがちいさくて口のほどのほそながに_レして出たるかいの

癸巳仲秋於_ニ金澤_一獲_ニ之_一寫_ニ眞信_一充

小なるもの

紀州和歌浦邊にてへなたる貝をいふしとろくしあて細き筋あり

ばいなりこの種をばいふなり見えていふならん

伊豫今治邊ていふへなたり



小なるもの

此二種は金澤の産といへる所あり合せ見たりるべし

新集。關東諸役人布衣御右筆の中に日記役正月惣儀烏帽子
右上り風折紙縁かけ緒内衣のしめ布衣地熨斗目さしぬき平絹小サ刀糸
小柄蝙蝠

○ほた 安房。保田妙本寺トテ富士日興上人ノ遺

跡アリ」新撰字鏡。燼又燐煨ホタ谷川士清。新撰字
 鏡のほたは火立杭の義なるべし材木のきれをほたと
 いふ櫛拙也といへり、歳華紀麗に歲除夜燒骨髄とい
 いるも同じ、もと山里にゐるりにくべる木をいへば
 火立の義なるべし、歌にも山がつのたきすすみたる
 ほたの火などよめり、尾張出雲にきりかぶ伊勢に根
 こじ安房にねつか總州に木下武藏にねつたまた根本
 といふ、また沉のほたはたくひなど云り、八瀬大原
 の里は同姓婚姻して他郷に求めずといふ其意をよめ
 るとか「親のをや子の子まで山賤のほたの火け
 たをかたみとぞする、美國の朱陳村と同じそのはじ
 め亂を避しより起れるも相似たり云々」是等の説に
 よれば安房國に保田といふ所も木杭などの多かる山
 際によりて名を得しか、あるひは戸令に凡戸皆五家
 相保、一人爲長以相檢察、勿造非違云々、保内
 之人有レ所ニ行詣ニ並語ニ同保ニ知とある保にして保内

の人の相互に助新する田ゆゑに保田ノ田といふ義よ
 り畧して保田とよべるにや

○菩薩 文化の末にやありけん墨田川の東寺島に

菊塙といふ者あり、大窪天民が詩佛と稱せるを學び
 菊塙菩薩と稱しけるを高田與清松屋叢話に書載た
 り、然るを或人菊塙にいへらく菩薩といふことは勅
 號ならでは稱しがたかりそれを私にさる名乗せばい
 かなる譴責を得んもはかりがたしよく心せよと告し
 かば菊塙大に驚き與清にこの菩薩といふ字をけづり
 てたい菊塙とのみ記してよとあつらへたりしを聞ぬ
 ふりにて過しけるにより鳥海松亭といふものを頼み
 てひたすら與清にこの二字削り給候へと汗を流して
 手のひらすりける事ありてそのころはなし草となり
 にけるが「遠江方言。米を菩薩と號するは何の帝の
 勅許にや更におぼつかなし」雜林類事。白米曰漢菩
 薩粟曰由菩薩云々 ○大和國友田の菩薩石をよ
 び能登國鳳至郡菩薩谷菩薩石は色黄に僧の形なりと
 いへり、是等また勅許のことおぼつかなし、類聚國
 史。行基云々時人號曰行基菩薩北史。宇文頴二子
 導字菩薩云々」維摩經一肇曰菩薩正音云菩提薩埵

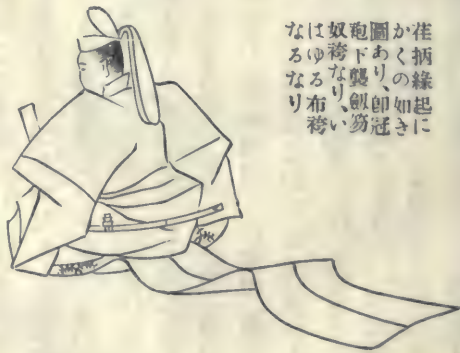
寛文十年六十二歳とあれば慶長十四年己酉の誕生にて寛永十四年島原一揆亂の歳は二十九の時なり山鹿甚五左衛門素行の氏長主に従ひ學びしも寛永十四年にして素行十六の時とかや、同十九年素行を擧て氏長主の高弟とし賜ひしは群弟子其上に出者無りし故とぞ、氏長主の師範たる小幡景憲此時壽既に高し何ぞ其師を措て其弟子に従遊するや今に於て頗る疑ふべし

谷川士清曰、北條氏長は武田家の傳を小幡景憲に得て和漢文武の事理に精通し加へ之紅毛國の戰法大術は其蘊奥を極む

○布袴 西宮記。布袴舊例上下着之近年諸宮人着之云「桃華莖葉。常袍着ニ下襲指貫」是布袴云飾抄。とのゐ裝束にしりつけたるは布袴とも催束帶とも云ふなり或云、直衣布袴は下襲さし貫を着するを云なり、増とり四方拜公事にはあらね共止事なき時に着なり「衣服知新集。冠、袍、單、奴袴、を衣冠といふ、衣冠に下襲、劍、笏、を布袴といふ、直衣に下襲、劍、笏、を着、是を直衣布袴といふ」

○衣布 西三條家裝束鈔。布衣狩衣者色不定、若

年ノ時ハ紅梅萌木ノ浮紋織物、盛年ハ堅織物ノ遠文、十五未滿ノ時ハ袖拔毛拔形、若キ人ハウスヒラノ組萌木紫紅等ノ打交次ハ紫白次ハ薄色等也、次ハ淺黄裏ハ表色ヲ可用也源平盛衰記。布衣ニ立烏帽子ハ覺束ナシ太宰府ノ近クハ京家ノ人共思フベキニ云々、タトヒ下臈成共嬢ガ見スル面倒也、イハンヤ布衣ニ立烏帽子定メテ帷人ニハアラジ云々、又兵衛佐ハ布衣ニ軟袴ヲ着セリ云々和訓栞。當時布衣のよみくせなりほういとも見ゆ、倭名鈔にかりきぬと訓す裁縫もとよりかはることなし、さて院中に布衣始と申は御讓位の後上皇はじめて御狩衣着御の規式をいへり、たゞ上下を分たんがために今は青侍のきるを布衣の音をよぶなるべし」衣服知



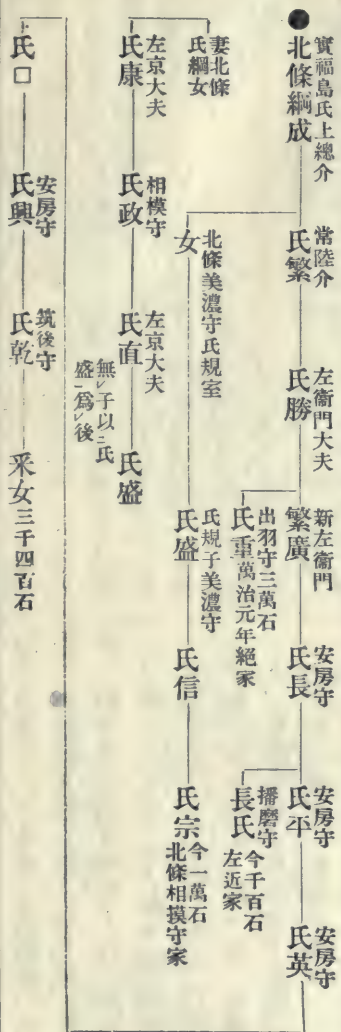
荏柄縁起にかくの如き圖あり即冠袍下襲劍笏奴袴なり、いはゆる布袴なるなり

萬葉集には保興と見ゆ諸木にあり、花鳥餘情に寢蓐をもよめり石葦に似たる小草なりといへるは別物なり上野に柴をいへり、倭名鈔に老海鼠をも訓せり、延喜式に三河國保夜一斛と見えたり、今章魚枕に似て色赤く大きなものをいへり、海産錄に朱噉と見えたり土佐日記にはやのつまのいすし云々、季吟は交をつまとよみたり麵のつま吸ものゝつまなどの意にや、又五雜俎に海鼠一名海男子云々、余皇日疏に文嚙似ニ女陰と見ゆ文嚙も淡菜なりいがひをいふ、また東海婦人の名あり、海錯錄に誰謂ニ之東海婦人耶、當レ謂ニ西施不潔といへり、されば陰陽の形に似たるを以て妻とは戯れいへるなるべし、多識篇には石砌

をよめり蝦夷にて數の子をよべり、相馬百官に梅干をよめるは梅ぼしのしはみていろの赤きが老海鼠に似たる故なるべし

○奉書紙 文房品考種積 奉書紙大中小の名あり越前、出雲能義備後三好筑後、伊豫、加賀、備中、丹後、但馬引田土佐、播磨、安藝よりいだす、五色染紙墨流は越前よりいだす

○北條安房守氏長 武家補任。初新藏、新左衛門繁廣子承應二年三月晦日任官明暦元年九月口日大目付寛文十年五月二十九日卒年六十二歳」系圖。北條上總介氏綱増也



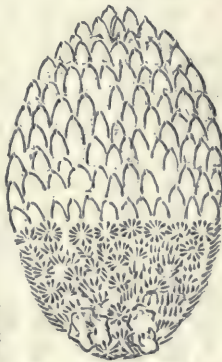
海底にしづみ
たる篠竹にや
とりてむらが
りあつまりた
るの圖

後藤黎春隨觀寫眞

此疣の如きもの赤紫色にして黄を帶ぶ



甫夜



これより下緑色

老海鼠ノ字ヲ用ヒ又梅干ノ字ヲ用フ、此物東奥ニ多
出テ中國西海稀ナリ鹽藏シテ四方ニ送ル、其形如
白梅^{ハナボシ}ニ色紫蘇葉色ナリ故ニ梅干ノ字ヲ用フ、本草綱目
介部蚌蛤類ニ載ル處ノ石砌コレカ、和名鈔老海鼠ヲ

以テ魚部ニ入ル今按ニ貝類也、肉味海鼠腸ニ似タリ
香モ亦海鼠ノ如シ蒂ノ如キ處ノ性饒ノ耳ノ如シ形粟
粒ノ如キ毛ノ如キ物綴リ茂テ此貝ヲ包ム、此貝或ハ
二ツ或ハ三ツ又花ノ如キ物形海鼠ノ疣アルニ似タ
リ、色赤シ刀ヲ以テ是ヲ截レバ水ヲ出ス、亦海鼠ノ赤
皮ヲ剥バ中ニ肉アリ醋ニ浸シ生薑蕃椒ヲ以テ是ヲ食
フト、形味香コノ貝ノ肉ト全同ジキナリ貝肉者差少
ニシテ食ニ堪ズ、此物ヲ知ズシテ赤皮ヲ食フ者アリ
甚硬シ、野必大ハ石砌ヲ以テ甫夜トス今按ニ石砌ハ
春花發クノ諸説アリ貝肉ノ精液春吐出シテ此物ヲ凝
成ト謂ベシ、タトヘバ鹽膚子生ニ五倍子及ビ諸樹ニ
贅瘤ヲ生ズルノ理カ

今按に阿波の保夜と陸奥の保夜と同物にして少く
形状同じからざるなり

和訓栞。歌に信濃なる保屋のすゝきなどいふは穂屋
也、諏訪明神の御射山^{ミサ}祭に長官五官領家等の造る假
屋なりと云り、今小縣郡に穂屋の地名あり云々、火屋
と云は香爐團爐などに蔽ふ物にて金銀銅を以て作れ
りとも又御射山の神事の行宮に象るともいへり、倭
名鈔に寄生を訓せり今も美濃信濃にてはしかいへり

利ニ小便止ニ婦人帶下、この説ホヤと石勃卒との二種なることも形をも知ずして書るなりければ取にも足す文中二種を混じて見ゆ、初の色紫赤といへる迄は保夜をいふに似たり、又石勃卒といふ迄はせいの中に古者といふより以下は保夜の事をいへり、野必大いまだ保夜をも石勃をもきさ貝に見ずして書るなりけり、東遊雜記云土人保屋と稱するものあり、大小ありといへども大概長四五寸横二寸位、總身朱の如くなる赤さにて目もなく口もなし、甲には生海鼠の疣の太き如くに數々あり、此其至て深き海底にありて岩にそふて居るゆる取得がたきものと云、味至て上品の魚なりと浦人の物語なり、日本の地にては目なれぬ魚にて奥州裏海の漁人は稀に取といへり、或人水虫といふものなりといへり、其もまた形をいへること委しきに似たれども浦人の語るまゝを記せしなればあげつらふにたらず、和名抄龜貝類云漢語抄云老海鼠保夜俗用此二字とあれども老海鼠てふ名は漢藉に見えず五雜俎に海鼠一名海男子其狀如男子勢一然淡菜之對也と見えたり、されど保夜のかたちは沙噀に似ず、この老てなれると云にもあらず自一種の

物なり、保夜の漢名は雨航雜錄といへる漢藉に在に當れるよし蘭山翁いへり、其文は石礪卒形短圓三寸長四寸、身赤服泡急甚形勃卒故名、一名來魚、或云石屑入水所化と見ゆ、當れるやいなやをしらず、おのれが得たる物は圓三寸長四寸と云に合はず又東遊雜記の長四五寸横二寸と云にもかなはず、更に思に保夜の大きさは大きな梅干ほどなるが數多むらがり集れるを見て、さいひけるにやあらんかし

保夜の圖



大小あれどもかくの如くなる大きに過ず(徑一寸許)

二つにきりて内の肉を見るの圖



もとも大きな肉の中に小貝を含みたるありされどことんにあるにあらず



キ色

にて生るものなれば老木にあらざれば生出ぬものに
て形はくさくあり、其木によりて葉のかたちもや
やたがへり、こは何處にもありて皆人のよくしれる
ものなればつばらにはこにいはす、又茯苓をも保
夜と云、そは松根のくされたるが土中にあるにつき
て其蒸氣にてなりいづるものなればそれもおなじ、
土佐日記正月十三日條に云、保夜のつまのいすし云
々、北村季吟注して云穗屋の妻の蝙蝠鮓なり和名抄
に貝類蝙蝠和名爲其貌以、蜎而大者也うみ邊なる芦の穗
にてふけるやのはしつかたにあるものどもをいふな
りと、此説いたくたがへるよし先輩はやくいへり、
眞淵は保屋は延喜式に參河國保夜一斛とあるにて明
らかなり穗屋とはなにともしこえすいすしは蝙蝠
にあらず、和名抄に、貽貝、爾雅云貽貝一名黒貝和名
伊加比延喜式貽貝保夜交鮓とありて蝙蝠ならぬことし
るしと、此説の如く交は物に物を交へるをつまにす
るといへり、いすしは貽貝鮓にて保夜を交へつけた
る貽貝鮓なるべしといへり、宣長が玉勝間云、肥前佐
伯の海にはやといふ物ありけり紫色にて海鼠の如く
なる形したるものなりと佐伯の人かたれり、然らば

土佐日記に保屋のいすしとあるはそれを飯鮓にした
るなるべしと或人いへり、小野蘭山は延喜式若狹國
の貢物に保屋交鮓といふ物を載たり是保夜といふも
のを交へつけたるすしなり、保夜は奥州仙臺の名物
なり海中に産す外は肉塊りたるごとき物硬て薄しこ
れをきれば内に肉あり此肉を食用にす、京に來るは
鹽藏なり生の時は磯くさし此臭きを費するなり、筑
前にも糟漬とし献上とす奥州にては春夏の間にあり
筑前にては冬多しといへり、今我取出たるものは此
蘭山翁の説と全くおなじものなり、眞淵翁は書の上
をのみ見ていひ、宣長翁は書および傳聞の説をもて
いひ、蘭山翁は書及び淹藏のものを見ていへれど共
にいまだ生物見ざれば其形をとくこといまだし、本
朝食鑑云、老海鼠保夜狀如言海鼠老變、而一箇肉片
色紫赤、外雖有如蟹鼈之殻者、而粘石脫去、肉味
類海鼠而硬、或似鮫魚水母、極堅、應節而生、花如
披人之指掌也、江淹郭璞同言石勃卒今芝品川間有
之、相豆總之海濱亦希來、海西最多醃而送傳之、古
者若狹國作交鮓貢之、而不_レ知造法、內膳部有參
河國保夜一斛、今未_レ聽國貢、氣味鹹冷無毒、主治

○ほや　ほや考、ふるき書に保屋といへる物ありて見えけり、古四方の國より貢物とし奉りければ高きみじかき人の常よくしれるものにて其狀いかなる物ともつばらにいへる書のあらざれば、後の今になりてはこれなんそれと思ひ定むべきものもなく、諸書の注者も得しられぬものから、それかこれかと定めかねてをさなき説どもの多かるを、いかで考得てしがなと年頃心にかゝりしを、文政四とせ五月のはじめつきた、ものへ行けるついでに泉郎の網曳の業見んと、小松島の浦回に出立てしばしながめ居けるに、海原はるかに打はへし蟹の拷繩磯邊ちかく引よせ來れば、種々の魚に貝に集ひよりて見るめもかひある計り、それが中に一尺ばかりなる篠の小枝にあやしきものゝまとひつきたるありけり、取てみれば貝にもあらず虫にもあらず、さて海士どもにこはいかなるものにて名は何といふものにやと問へばたゞ磯物也と答て名は得しらず、さて携歸りてつら／＼おもふに古き世に保夜といへるやこれならん、さればおもはぬけふのさちかなと雑々の書等とり出てかうがへ見るにいと能く書どもにかなへれば、是かな

らずそれなりかしとよろこばしさに其圖かきといめつ、さて其物水もてあらひさゝやかにきりて酢にひたし喰試るに、味水母に似て少しなまくさければ人々にもくはせなどしていたう興じたりき、文政八年二月卯の日平安尙しるす

阿波人

萬葉集の歌に「足曳の山の木ぬれの保與とりてかざしつらくは千とせほやとぞ、」又新撰字鏡に、蔦都交反寄生和名保與と見えて古は保與ともいひしと見ゆ、又順和名抄には寄生一名寓生和名夜止里岐一名保夜とあり、されば保夜はもと寄生の類を云の名なるを貝にまれ虫にまれものによりてやどるものにもうつし名づけて保夜とよぶと見えたり、貝にはや貝ありのりに保夜のりあり、土左日記延喜式等に保夜といへるは水底に沈める木石のたぐひによりて生出ける梅ぼしの形したるものにて其形恰も梅干に似たり一種の活物なるべし、梅干をほやとよぶも彼物に梅干の似たるによれるか、彼保夜に梅干の似たるゆゑに梅干を保夜とよべるか、そは何れしるべからず、寄生を保夜とよぶも皆物によりて生出るものをいふなるべし、寄生は何れの木にもあなれども木の餘氣

予恣々忝_レ貪_ニ愛_ニ之_一負笈來到今所傳良有_ニ所以_一、論_ニ定
宗旨_ニ不_レ可_ニ異_ニ途_ニ目_ニ恣_ニ聖_ニ旨_ニ待_ニ冥_ニ可_ニ否_ニ夢_ニ感_ニ遍_ニ吉_ニ稱_ニ
可_レ深_ニ會_ニ佛_ニ旨_ニ其_ニ爲_ニ釋_ニ義_ニ與_ニ至_ニ開_ニ朦_ニ義_ニ學_ニ伏_ニ膺_ニ捨_ニ舊_ニ
本_ニ概_ニ新_ニ文_ニ覆_ニ勘_ニ再_ニ授_ニ今_ニ講_ニ肆_ニ次_ニ畧_ニ記_ニ由_ニ來_ニ冀_ニ通_ニ方_ニ之_一
後賢不_レ咎_ニ其_ニ差_ニ違_ニ流_ニ行_ニ之_ニ處_ニ必_ニ有_ニ感_ニ應_ニ矣_一

○北條家代々肖像 壬辰_{天保三年}仲夏中秋の際予數日

鎌倉に遊び一舊刹に客として日々古簿蠹簡を探るを
以て消景の態となす、不_レ測北條家累世の像を得た
り、是集古十種以下諸人いまだ模傳ふる者なき處な
り

北條遠江守時政從五位下

元久二年閏七月二十日
出家六十八、建保三年
正月六日卒七十八



北條武藏守泰時朝臣

仁治四年六月十五日
行年六十



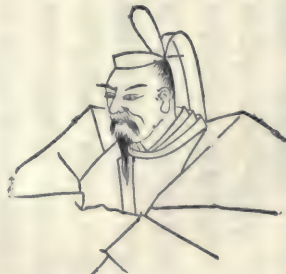
北條修理亮時氏泰時一男
安貞元年六月二十二日下_二尚
關東_一寛喜二年六月十八日卒
二十八

貞時



宣時

北條相摸守時頼時氏二男
建長五年正四位下、康元年
十一月二十二日出家、法名道崇
弘長三年十一月二十二日卒
三十七



以上六人みな全身なり今省畧す

子、件御衣宮塗ニ銀泥ニ其上付ニ銀洲濱、同鶴龜小松折立用ニ龜甲白織物、下机花足面押ニ龜甲織物ニ以ニ銀泥ニ塗レ之付ニ貝小鳥、鷺足案二脚同以ニ銀泥ニ塗レ之、皆有ニ白銅金物ニ四角付ニ白組總ニ同面敷ニ白大文薄物ニ有ニ一繪ニ以ニ白絲ニ縫ニ小鳥等、宮一合納ニ織物御衣一襲三重葵文重小一合納ニ綾御襪襪二條平絹襪襪一帖各二幅長五尺有ニ入帷一合色目同前、已上各裘ニ白織物、裏在伏組案一脚置ニ二合ニ各在ニ靶薄物單三幅ニ長一丈三尺以ニ白絲ニ縫ニ小鳥折枝等、帶一筋長一丈餘近習受領各一人令ニ調進、花飾之美敢非ニ俗眼之所レ及也

鳥羽院

崇德院
待賢門院

元永二年五月二十八日降誕

○細太刀の平緒
枕草紙。なまめかしきもの云々

はそたちのひら緒つけてきよげなるおのこのもてわ
たるもいとなまめかし」物具装束抄。劔事、螺鈿細
劔木地公卿行幸日、若列見定考之、蒔繪細劔或有銀樋義人用之、
日用之劔殿上人節會日用之、時繪樋者殿上老人、
用之、公卿並殿上人常用之、黒漆細劔諫闇之時用之、
金作細劔大臣之外不用之、装束
知新集。小隨身、冠細纒、襦袢、袴、石帶、細劔、弓、壺胡
六、右節會次將召具の隨身如此、其外八幡放生會參

向の隨身レ此、加茂祭近衛使の小隨身も細劔、大中の如き者あり衛府長と云俗に奪取 狩衣に細劔 三木以上召三具之、如來雜色も細劔

○法華經新譯舊譯の異
法華傳三卷僧肇法華翻經後

記云弘始八年夏
後秦文桓帝姚興の即位
の八十二年に當り、弘始
八年は反正天皇元年

年に當なりなり天竺沙門三藏法師者婆鳩摩羅什秦言ニ於長安大

寺草堂之中與生肇融叡等八百餘人四方義學英秀二

千餘人俱再譯斯經與衆詳究、什自執梵本口譯

秦語、姚興自執舊經以相讐校、定新文、文義俱通妙理。

再中矣、興諮_レ什曰君觀_二所譯二十八品、文義美明宗體

自彰、乍觀護經以三序品一稱爲三光瑞品、藥草喻品末益

具半品化城喻品題、往古品富樓那及法師初增數紙文

闕三客普門偈、屬累還結三其終未測三旨歸三其事如何

什曰善哉明至三續法登長炎饒一暗夜迷景自非發疑

誰明深旨、勸三舊梵文、宛若斯、予昔在三竺國一時、

遍遊五竺尋討大乘從大師須剎耶蘇摩訶食稟理

朱愷勸付屬就本、言佛曰西人遣擢將及東西、茲典

有緣於東北。女真專以、皆婆毖槃豆論師製、作憂婆

提舍、是_二其正本_一莫_レ取_二捨其句偈_一、莫_レ取_二捨其眞文_一、

士像。隆慶庚午余從_ニ燕市得_ニ十八學士眞像摹本、沈
存中跋即筆口所_レ紀積易_ニ前敎語_ニ耳、都人傳_レ卷藏_ニ大
內、永樂中仁廟與_ニ漢邸競_ニ相取玩、成祖乃收_ニ行兵科_ニ
時兵科官侍直也、以_レ故卷至_レ今置_ニ兵科_ニ云、已持卷
就_ニ兵科都給事三原溫君純_ニ質_レ之云卷誠有_レ之云々、
萬曆元年三月朔日也、吳郡周天球

○細立烏帽子

新井白石像

水干に細立烏帽子
なり、下に抄出す

物具裝束抄。

雜色事、平禮、白張_上、衣、單、下袴、沓、襪、或
平禮上は千亂緒、或細烏帽子上結、山藁沓或風流之
時着_ニ當色_ニ也、以上依_レ時可_レ隨_レ事也

白石像

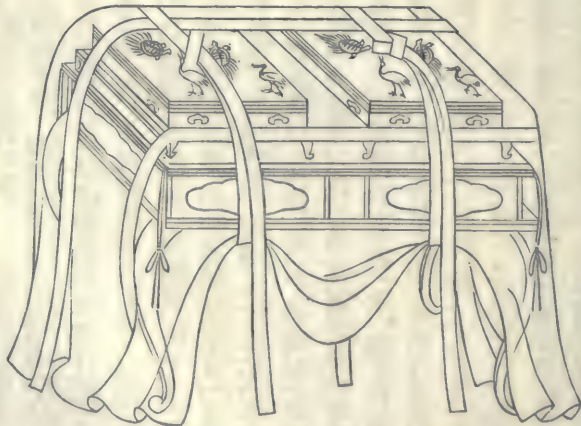
荏柄縁起 雜色



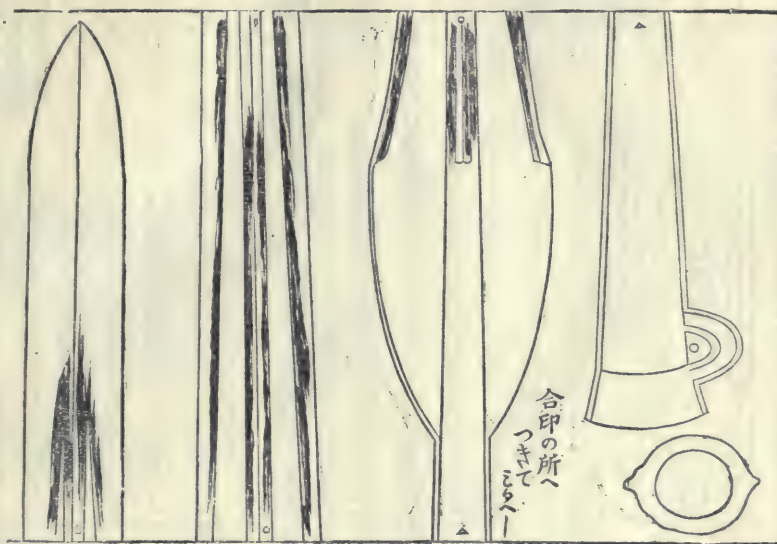
細立烏帽子

○細長宮

當時所用の物かくの如し
源禮記と引合せて考べし

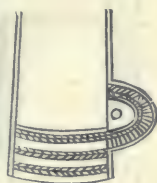


源禮記。元永二年五月二十八日癸酉天霽、申時中宮令
誕_{崇徳}生皇子_ニ給、六月二日丁丑天晴、今日第五夜也、自
_レ院有_ニ御養產事_ニ云々、次御衣案_ニ脚宰相四人昇_レ之、
經_ニ東臺南弘廂并西臺子透渡殿等_ニ立_ニ寢殿階隱間簀



合印の所へ
つきて
こたへ

又一本の圖
にはかくの
ごとくふく
るの所に筋
あり繩目を
刻したり



或云、これ神代の器なり、惣長二尺五寸を四つ合せて一丈なり、即いはゆる一尋の鈴にてありしなるべしといへり、たゞしいまだたしかなる據をしらすとかや

○幘頭 事文類聚。増類說牛僧儒自誇服。鐘乳千

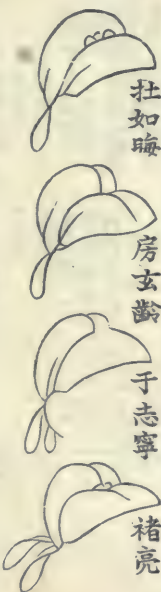
金、樂天獻曰乳鐘三十行金釵十二行云々、幘頭古以皂羅三尺、裹頭巾、後周爲三四脚、炙穀子云、上古披髮服、皮三代卽有衣冠、皆列品命、無敢惑貽首之服、以三尺皂絹、裹髮名折上中、後周武帝裁爲四脚、名服頭、但空裹髻而已、隋大業巾着巾子、以桐木爲之、内外皆漆、又賜百僚絲葛巾子、呼爲高頭樣、自後有華昭樣、僕牀樣、馬周上議裝頭、左右各三摺象三三方、重繫前脚法二儀、詔從之、閻立本十八學

杜如晦

房玄齡

于志寧

褚亮



即いはゆる幘頭なり

●高力新三郎
平安長

與左衛門
河内守從五位下
清長

權左衛門
土佐守
正長

左近大夫
攝津守
忠房

左近大夫
攝津守
高長

伊豫守
忠弘

永祿八年三月七日日本
多重次高力清長天野
康景爲三州三奉行
天正十四年任官同
八年八月賜岩槻城二
萬石、慶長十三年正
月二十六日卒

慶長四年
三月任官
四月二十
二日卒
十二歳

慶長十年七月
左近大夫、元
和六年改攝
津守、明暦元
十二年卒

元和九年
年任官
兵部少輔
長房

寛文八年二
月配流、收
四萬五千石

河内守
長次
慶長十四、五、同十
九、三、四、卒二十二

○鉾 東大寺寶物圖。聖武天皇御鉾三枝あり

此圖精粗數本あり一定せず

柄三枝共に竹千檀卷

鉾又晋と云、
いしつきなり

刃長凡一尺余

鉤三寸許

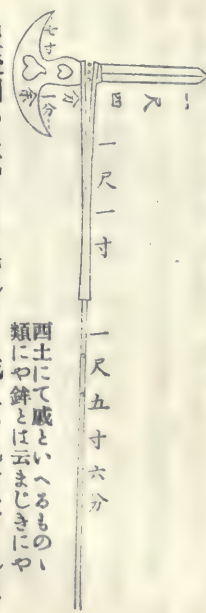
刃凡九寸許

刃凡八寸許

考工記に
内處、受に
柁と戈の
條にある
すなはち
ふくろな
り

是によりて考ふればふくろ鉾といふ物も古きことなり

安藤治右衛門家藏ほうてん鉾圖

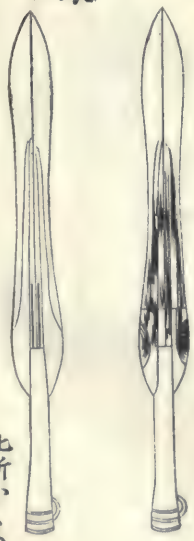


豊後國の土中より出しとて或人の見せたりしはこ

西土にて威といへるもの、
類にや鉾とは云まじきにや

表

裏



此所ふくろこ

大坂戰記別本。慶長五年八月二十三日圍津城東西二十四日毛利勢廻城西破南口亂入二三九云々秀元先登、中川清左衛門紫母衣ヲカケ討死ス云々、同十九年十一月二十六日佐竹小將瀝江内膳^{鳥丸}率^{母衣}士卒進先登忽當鐵炮死、云々

○堀川館 源平盛衰記。伊豫守義經ノ六條堀河ノ宿所ニ押寄テ時ノ聲ヲ發ス館ノ内ニハ計ラザルコトナレバ義經ヲ初トシテ僅ニ七騎ゾアリケル^{文治元年十月十七日堀川夜討抄}。義經の宿所の跡今藪となりて泉水の跡あり本國寺の東也東鑑。文治元年十月十七日丙寅土左房昌俊先日依^レ含^ニ關東嚴命^一相^ニ具水尾谷十郎已下六十餘騎軍士^ニ襲^ニ伊豫大夫判官義經六條室町亭^一○佛高力鬼作左 甲陽軍鑑十四。扱家口は義元討死

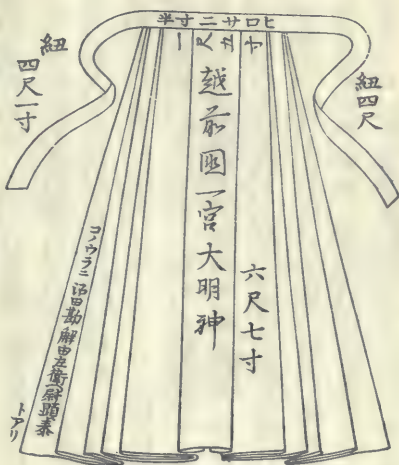
より以降十年の内外の^{永祿十二年より元龜元年迄なり}國持なるが云々何のわかき家口申付る三人の奉行に三様の形義をいひつけたると見えて佛高力鬼作左とちへんなしの天野三兵と濱松にて落書にたてたと云々^{家忠日記}。慶長十三年正月廿六日高力河内守清長卒^{七十九歳、永祿元年は二十九歳なれば十二年は四十歳なり}系圖。高力新三郎安長男、天正十四年叙爵河内守豐臣秀吉公賜^ニ豐臣姓^一御家入任官の始也



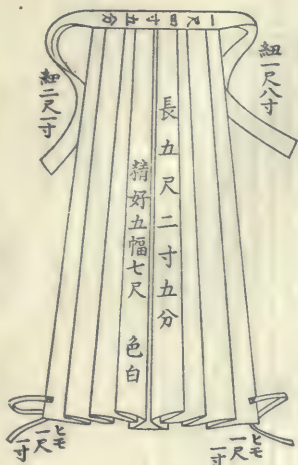
古京圖



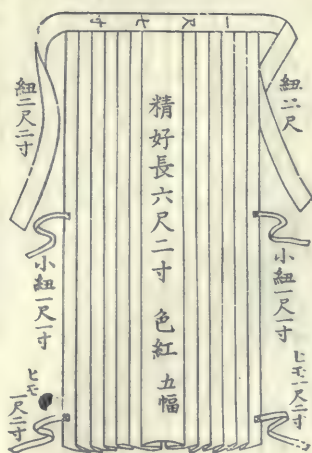
沼田勘解由左衛門尉母衣



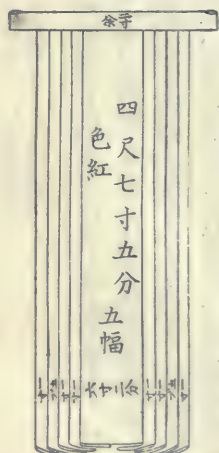
秋庭備中守母衣



赤松彈正少弼母衣



那須余一母衣



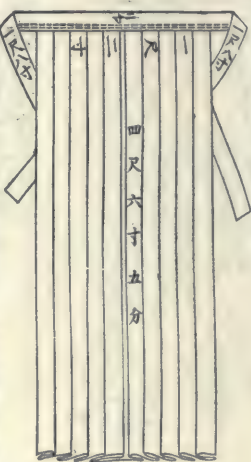
武士

武充

武政

武朝

大草三郎左衛門尉公經保侶



家世所藏保侶衣一副、乃曩祖三郎左衛門諱公經軍裝之物也、公經從足利尊氏、貞和五年正月死于和州四條之戰、事具前史、子孫遂仕足利氏、歷數世、至三河守公政時、遭室町氏之季、天下分崩舊臣多散、公政乃謁我列祖、而其子治左衛門公繼慶長十五年始祿仕焉、實公弼七世之祖也、家舊多藏古物、今皆亡失、僅存三四面衣係其一、以今考之製作甚古、絹力殆盡色亦減褪、固非近代之物也、因閱源君美所摸大塔王護良保侶圖製與此稍同、而曩祖又與王同于時世、則是其爲所用者無疑矣、或以其無據也有疑焉者、然軍旅之具自非刀劍旌旗矢筈之屬不悉

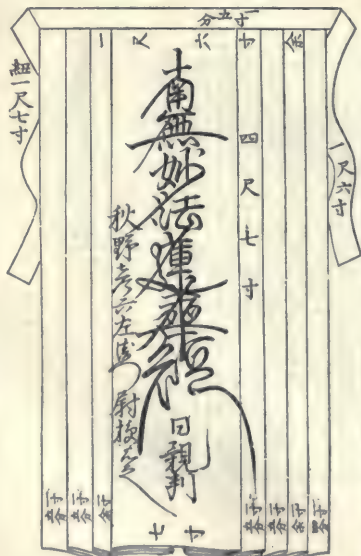
肥後守 兼朝

肥後守 持朝

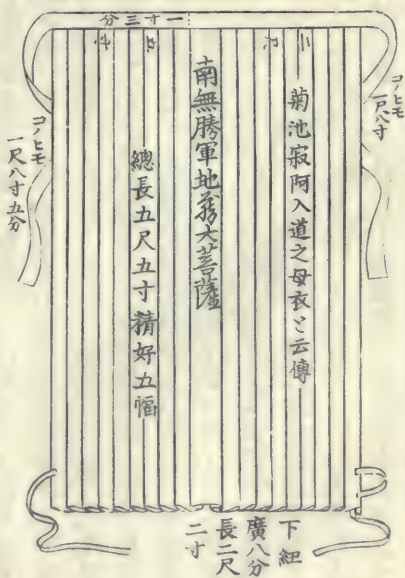
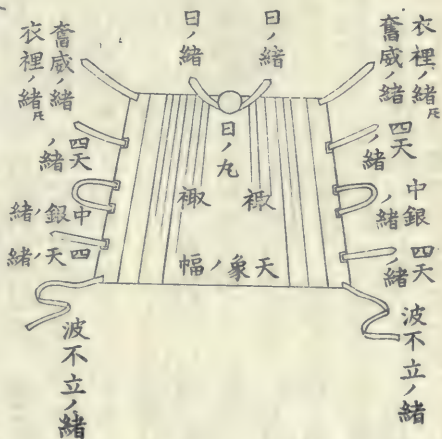
題刻姓名、且戰陣之法不唯尚首級并獲其所佩以爲功、則雖或非自所負亦安知非其獲于敵也、要之皆曩祖之物也亦奚疑焉、顧衣距于今五百有餘年、質非金石何以堪久、乃懼力之弗支并製俱失、爰命良工一依其製裁以新絹、於是乎復五百有餘年、庶幾有繼而弗失焉、子孫其保藏之、文

秋野彦六左衛門尉母衣

化八年辛未十月 大草公弼謹識



私云これ當時のほろなるべし



菊地武時入道寂阿は後醍醐天皇の宣旨を奉じて旗を舉し人なり、九州宮方の隨一、その系圖を考ふるに

中關白
道隆

太宰帥
隆家

政則

延久二下向
則隆

菊池三郎
經隆

山鹿大夫
經政

鳥羽院
武者所
經宗

菊地太郎
經直

儀同三司
伊周

菊地九郎
隆直
鷹羽紋此代ヨリ始

承久京方
隆定

隆繼

綱次郎
能隆

隆泰

武房

隆盛

肥後守
武時
寂阿入道

武澄

武重

二引兩ノ母衣ヲカケテ目精毛ノ馬ニコソ乗タリケレ
云々、熊谷ハ褐布ノ鎧直垂ニ家ノ紋ナレバ鳩ニ寓生

ヲゾ縫タリケル黒糸威ノ甲ニ同毛ノ五枚冑大中黒ノ

征矢ニ二所簾ノ弓ヲ持、紅ノ母衣カケテ權太栗毛ニ

乗タリケリ云々、小次郎ハ練貫ノ面高スリタル直垂

ニ伏繩目ノ甲着テ爪黒ノ征矢重簾ノ弓モチテ是モ紅

ノ母衣カケテ白浪ト云馬ニ乗タリケリ」保侶推考勢伊

貞丈保侶考清水平三郎時亮著保侶邪說辨貞丈著保侶

難清水平三郎著貞丈口授、清水氏保侶考解種致返上候

緩々一覽辱奉存候先年拙者儀清水氏の説一應は難じ

見候へ共清水氏と拙者元來主意大きに違候見識にて

候間何程相互に相論候ても油水和せざるが如く清

水氏は拙者が主意をば善とせらるまじく候拙者は清

水氏の主意を善とせず候畢竟の處は相互に何の益を

得ことも無之候間唯各其好處を主張するが能御座候

依之辨難の書再論するに不及候貞丈主意小野春風起

請云介冑雖薄助以保侶薄助の二塩囊抄云武士臨

戰場一時被纒以防敵矢被防の二字下學集云戴纒以

向敵戴向二字拙者の主意右の通に候古書にも未見こ

とを臆度妄作するにては無之候此明文を捨て他の理

をもとめ迂遠なる説を作るに不及候

平 藏

源太郎様（新井邦存也）

三谷自休物語。母羅又母衣口傳云五幅五尺七幅七尺八

幅八尺也、近代六幅七尺ニ調へ奮威ノ緒指通ニシテ

中銀ノ緒波不立ノ緒ヲ付ル也、凡所々ノ緒寸尺流義

區々ナリ、中銀ノ緒ハ上ヨリ三尺置テ付ル也、長一尺

二寸或二尺八寸幅ハ六分也、旋風ハ上ヨリ五寸置テ

明ル也但其明五寸纈纈アリ奮威ノ緒通一寸二分緒ハ

含幅六分也長六幅ノ西方へ一尺五寸ヅ、餘ルベシ、

波不立ノ緒長九尺圍六分打緒也兩端小串アルベシ、

極ノ寄様兩方ノ二幅ヲ除、中ノ四幅ヲ八幅ニスル也、

縫様ハ片糸ニテ針返シヲセズ芝打ヲ外へ捲リ出シテ

ヌフ也、色ハ上古赤白ノ二色ヲ用フ近代ハ五色間色

又ハ罽交等定ル法ナシ、昔纒ト云シモノハ當代ノ羽

織ノ如クニシテ單ニ襟裾ラビヲ付タリト云纒ノ上ニ着タ

リシガ今ハ廢タリトスハ籠ハ骨三十本鎮護番神ヲ表

ス十二本ハ十二天ニ准スト云習アリ今ハ大概三十二

本串三處ニ穴アル也、母羅臺ハ高サ一尺九寸上ニテ

八寸四方疊摺二尺五寸四方請筒入ノ仕様品々アリ

枕草紙。あはれなるもの云々、日ごろこもりたるにひるはすこしのどかにそはやうはありし法師の坊もしおのこともわらはべなどゆきてつれづれなるにたゝかたはらにかひをいとたかく俄にふき出したるこそおどろかるれ云々」春曙抄。むかしは十二時に貝をふきしなり、千載集の赤染衛門「けふもまた午の貝こそ吹つなれひつじのあゆみちかづきぬらし、」徒然草。かい香はほら貝の様なるが少さくて口のほどの細ながにして出たる貝の蓋」

○ほろ 扶桑略記。小野春風起請云々、介冑雖薄助以保侶云々」瑤囊抄。武士臨戰場一時、被幌以防敵矢」下學集。纈作母衣、言孩兒在母胎一時、頭戴胞衣以防諸毒也、今武士臨戰場一時、戴纈以向敵、盖喻胞衣防毒也」小笠原宗信弓馬之書。纈之事、纈ト云ハ陰陽和合ノ胞衣ニ表スル也、帝釋ト修羅ト戰時、修羅眷屬ヲ集メ帝釋ノ座マス須彌ハ燒上ル、雖レ然帝釋王神武羅ヲ着シ勢上給フ故火繩則滅スルニ依テ惡方ヨリ向フ時武羅ノ勢ヒ上ル也、努々聊爾ニ武羅ノ勢ヲ上ル事不可有也、惣テ纈ハ法報應ノ三身之如來十萬億土ニ御座時遍身隱給袈裟也、兵軍

場へ出ル事ハ討死ノ門出也雖レ然此纈ヲ着セン武士ハ貴僧高僧ト同事也、纈討死スル時雖引導無之到本來ノ住處者纈ノ德タルベシ、赤白ニスル事ハ自神功皇后始也、金剛界胎藏界ノ兩界ニ秘シテ作り出ス事也、纈^{張良流}母衣^{樊噲流}武羅^{蘇武流}母羅^同保衣、保呂、倍羅、風縷、襃、鉞、益、襌籠、又作母衣、言孩兒在胎內一時、頭戴胞衣防毒、今武士臨戰場一時、戴母衣向敵、譬胞衣防毒、母胎與戰場生死二也」太平記^{三十}京軍紺糸ノ甲ニ紫ノホロカケテ黑瓦毛ノ馬ニアツフサ懸テ乗タル武者云々、此首トホロトヲ持テ云々、其ホロヲ取寄テミ給フニゲニモ越中國住人二宮兵庫助戸ヲ戰場ニ曬シ名ヲ末代ニ止ムトゾ書タリケル云々^{文和四年二月八日合戰ノ時ナリ}又那須五郎云々、是ハ元暦ノ古ヘ曩祖那須與一資高ガ八島ノ合戰ノ時扇ヲ射テ名ヲ上タリシ時ノ母衣ナリトテ薄紅ノホロヲ錦ノ袋ニ入テゾ送リタリケル云々、又鹽谷伊勢守コキ紅ノホロカケテ云々、又芳賀禪可圓覺寺ノ長老ノ袈裟ヲ子息公賴ニ與テ是ヲホロニカケテ後世ノ惡業ヲ助カレトテ七條ノ袈裟ヲ取出シテ云々」源平盛衰記^{七冊}平山ソノ日ノ裝束ニハ重目結ノ直垂ニ赤威ノ甲キテ

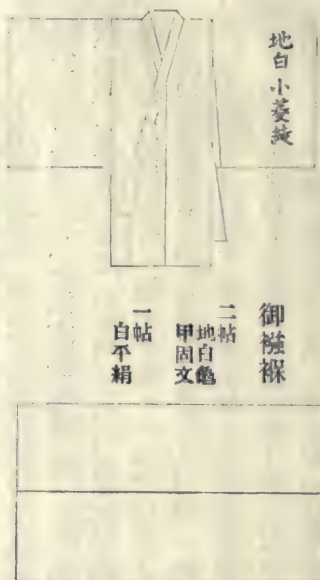
御單

地白小菱紋

御襦袢

二帖
地白龜
甲固文

一帖
白平絹



伊勢貞丈説。細長宮ノ縁ニ千鳥ノ形ヲ散シアル故ニ御祝物ノ筐ニ千鳥ノ紋アルコトヲ常政^{多賀氏}貞丈ニ尋ケレバ左ノ一首ヲ書テ賜フ是ニテ分明ヲ得タルモノナリ、古今集賀に、よみ人しらず「しほの山さしての磯に住千鳥君が御代をば八千代とぞ鳴、又同人書細長着用の體。たゞし圖大さく此わくに納まらざるにより信充縮圖なり(下欄掲出)

○法螺貝 法華經。序品雨ニ大法雨ニ吹ニ大法螺^{注云}法蓋者、惟昔擊^レ鼓吹^ニ角貝^一、^{注云通典云、貝者大蓋也、可容數}四衆見^レ瑞歡喜擊^レ鼓吹^ニ角貝^一、^{升並吹之以節樂、亦出三南蠻}三谷自休語。螺ノ大ナル男貝ヲ用フ、吹口ヲ銀ニテ張、上ニ眞紅ノ網ヲカケ緒ヲ付ルナリ、勿論生貝トテ

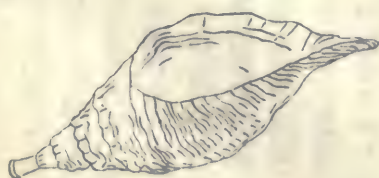
紅美色ノ善貝ヲ用フ、但元曆ノ頃マデハ無リシガ建武ノ亂世ヨリ始レリトゾ、異國ニハ周武王ノ時ニ起レリト云^{ハウラ}佛像圖案。法螺梵貝海中梭尾螺也、訓蒙圖會。寶牒、法螺、梵貝並同、今按海中梭尾螺也」



鎌倉安國寺寶物

熊王丸所持の貝

長一尺八分
周一尺一寸



關東へ禁裏より御細長の下ることあり、別に記あればこゝにのせず

○反故 和名抄。北齊書韓軋曰安作三刀筆吏一披反

故紙に徒然草。文の詞などはむかしの反古どもはい

みじき、たゞいふ詞も口おしうこそなりもてゆくな

れ

○反故染 心中大全寶永元年刻本紺屋平助傳、をぼろ染は

やり出しはむかしに成て、遠山あけぼの反故染、次第

に物ずきかはる人ごころ云々親和染にはじまるに

○本田善光 新撰和漢合運圖。舒明天皇六年阿彌

陀信濃下向、本田善光供奉、皇極天皇二年善光寺立

文安寫本平家物語。信濃國ノ住人オウミノ本太善光

ト云モノ云々真片假名活字平家物語、大海ノ本太善

光ト云モノ云々大海は麻績の假名なるべし

○細長 衣服知新集。細長表白龜甲裏平絹白二領内一領ハ裏表共二白

單表に菱裏無二重 襷袢表龜甲裏平絹二帖内一帖表裏共平絹帶織二筋入

帷子表小菱堅紋裏平絹四菱裏右同二帖 衣宮 案覆敷織御繪有花足

角みに銀の右王子御誕生の時調進、將軍家若君御誕生

の時は公家より進せらる、内藏寮調進なり「文政年中

御細長、御細長御地龜甲固文白地御裏平絹白御長四尺

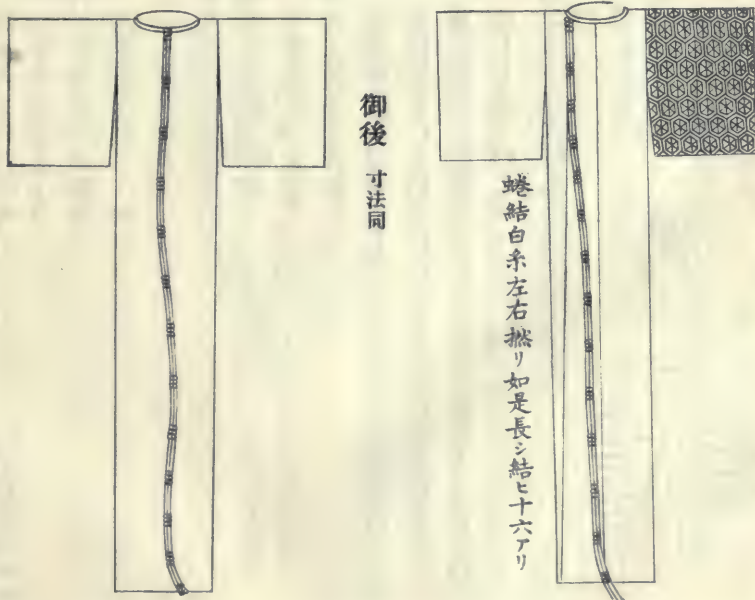
五寸餘御幅六寸五分餘御袖一尺七寸

御幅七寸

細長表

蜷結白糸左右捻り如是長シ結ヒ十六アリ

御後 寸法圖



比		師	
上六	二月反徵	上六	三月角
九五	四月	得陰	正月
得陰	角六月	六五	商十一月
六四	南八月變	失陰	宮九月
六三	宮十月	六四	宮七月
六二	宮十二月	得陰	反五月
得陰	徵	六三	羽
初六		失陰	
		初六	
		失陰	

元利元就三月の生なるを以て師上六に當ると云なり、大永元年は明應六年より二十四年後にして辛巳年なれば豐旅兩卦の歲也、享祿三年庚寅は小畜履の兩卦、天文三年甲午は隨蠱兩卦、天文十一年壬寅十二月は大壯上六陰得位徴に當る

撰著圖法。人ノ本卦ヲ取時ハ先曆圖ヲ今茲慶長十六
辛亥年ヨリ跡ヘクリ戻シテ其人ノイクツニナルト云
處ニテ數ヘ留テ、サテ曆圖ノ何月ト云處ヲ見テ節ノ
入タル處ヲ考テ卦ノ當ル處ヲ命期經ヲ見テシルナ
リ、本卦ノ口ノシタ、メ様ノ事

謹考周易之本卦

誕生天正十五亥丁年六月十二午庚日辰庚時屋上土姓男此卦ハ節

二ノ當ル

タトヘバ作庵御本卦ナラバ

謹考周易之本卦

誕生天正十八庚寅年六月廿二日壬辰巳刻松柏木姓男
大人本卦ヲシタ、ムル時ハ

欽奉勘周易之御本卦

御誕生天正十八云々

天子ノ御本卦ヲトル時ハ

欽奉考周易之御本卦

御誕生元龜二年十二月十五日卯時路傍土姓男

正當三二大過九二陽得羽

九三ノ詞カラ次第ニ書スル也

本卦は生年の卦にして一代に涉り、當卦はその年々に變り行ものなれば本卦當卦の占判斷を考て日々の所作吉凶悔吝を知べき時は此道もまた其利少なしと云べからず命期經よく熟讀すべきなり

○本多中務大輔忠勝朝臣佩刀の鏢

厚一分五厘
鋼鐵にて作
る四寸六分



○本卦 陰德太平記。毛利元就明應六年誕生吉侍者ヲ以テ實名并ニ本卦ノコトヲ申入タリ云々、本卦ハ師ノ卦上六ニ當リ云々」甲陽軍鑑。大永元年辛巳歲源信玄晴信公誕生、是は甲州武田信玄の事也本卦豐、享祿三年庚寅上杉謙信輝虎公誕生云々本卦履、天文三年甲午平信長公誕生本卦蠱、天文十一年德川家口公誕生本卦大壯」命期經。推御軌積年法釋氏英命期經積卦術曰、置伏犧命起天元甲寅以來、至始受命卽位之年、數以三十二除之、餘不足除者位乾坤爲始、算盡之上卽主歲之軌也、知主歲之軌卽知御軌之數、以詳陰陽命曆短長、云々
勘申白川御文云

周易 御命期運數事

白河院 御降誕減一定 天喜元年歲次癸巳六月二十日戊子卦

遇謙豫 世屬陰爻

推易緯積年術

自三元甲寅至子天喜元年積年二百七十六萬一千四百八十、以紀法除之得四萬六千零二十四周、不盡四千卽當癸巳年

推御軌數術

置天元甲寅以來積年、以元法三十二除之得八萬六千二百九十六、不盡八卽入謙豫軌、軌數六百八十八降誕生六月既配豫上六爻陰得正位推御命限術

置御軌數以陰得位六乘之得四千一百二十八、豫上六律當徵數五十四以爲法除之得七十六爲御命限云々、明年戊申御行年七十六當御命期限之運數也、謹檢本條曰、君德積善卽得其壽限云々、重案推帝王興衰篇曰、若有道之君雖遇其災々卽免矣、更得延期而乘運數云々、是則積善之家有餘慶之故而巳、右依經說勘申如件

大治二年三月二十五日 散位安倍兼時勘申

大治四年己酉七月六日俄御不豫七日崩御

命期經の説によりて考ふるに明應六年は丁巳の歲にして天元甲寅より二百七十六萬一千九百二十四年に當り三十二年づゝ八萬六千三百十周の餘不盡たゞ四あり卽八萬六千三百十一周に入て四年め丁巳歲師比當卦なり

柳菴隨筆保字篇第五

○本命 太政官式。凡内外諸司所_レ申庶務辨官總勘

申_二太政官_一其史讀申皆依_二司次_一若申_二數事_一各先_二神

事_一申_二神事_一史不_レ申_二凶事_一御本命日_{中宮東宮亦同}及朔日重

日復日亦不_レ申_二凶事_一隋書。獨孤皇后崩、文帝令蕭吉

擇_二地及_レ將_一葬帝欲_二自臨_一、吉奏云至尊本命辛酉今歲

斗魁及天罔臨卯酉、謹案_二陰陽書_一不_レ宜_二臨_一葬_{文帝大辛酉歲に誕生なり、然らば蕭吉は誕生の歳を本命成と知る}

太_二上廣慧修心保命超却經_一呂書全書

闡明心迹章第四、日生三百六十七週乃一周天、其三百六十之數即有_二三萬六千之度數_一、日行_二一度_一即有_二一

日之神、隨之日行_二一晝夜_一即有_二數十日神_一、爲之人

生出作_二入息如_二日出沒_一即命_二九天日夜遊奕天王_一分

巡令_二三萬六千甲子太歲_一司_二人間自行_中暗昧善惡_一即

命_二人身三尸神_一合_二一刻之太歲_一一刻太歲合_二一時之

太歲_一一時太歲合_二一日之太歲_一一日太歲合_二一月之太

歲_一二月太歲合_二六十日花甲子之太歲_一於_二庚申日_一乃

人心出神之期、是生身本命轉換之日各具_二善惡_一家

語。本命解、孔子對曰、分_二於道_一謂_二之命_一形_二於一_一謂_二之

惟_二化_一於陰陽象形_一而發謂_二之生_一化窮數盡謂_二之

之

死_二持明院基春卿鷹書_一。本命午日行年は未の日なり

別て慎べし、私云戊午乙未癸酉此日也、或秘抄にあり

といへ共注し付者也_{又名を貴鷹似鳩抄といふ、基春卿は享徳二年癸酉に生れ、天文四年濃洲にて薨八十}

曲用舊聞。崇寧初范致虛上言、十二宮神狗居_二戌

位_一爲_二陛下本命_一、今京師有_二以_二屠狗_一爲_二業者_一直行禁

止、因降_二指揮_一禁_二天下殺狗_一、賞錢至_二一萬_一拾芥抄。

本命屬星、子年人貪狼星、丑亥年人巨門星、寅戌年人

祿存星、卯酉年人文曲星、辰申年人廉貞星、己未年

人武曲星、午年人破軍星云々、本命日二種或以_二生年_一

板本中一年_{と有は誤也}爲_二本命_一或以_二生日_一爲_二本命_一、光支干相隔可

爲_二本命_一、檢_二國史_一只以支内法本命寅年降誕以_二寅

爲_二本命_一也、保憲說也

五行大義_{四卷}黃帝斗圖云、一名貪狼_二子生人所屬_一、

二名巨門_二丑亥生人所屬_一、三名祿存_二寅戌生人所屬_一、

四名文曲_二卯酉生人所屬_一、五名廉貞_二辰申生人所

屬_一、六名武曲_二己未生人所屬_一、七名破軍_二午生人所

屬_一又_二卷_一納音數者謂_二人本命所屬之音_一也、音即宮商

角徵羽也、納者取_二此音_一以調_二姓所屬_一也云々九

條殿遺誠。先起稱_二屬星名字_一七遍_音次取_二鏡見_一面

見_二曆知_一吉凶、次取_二楊枝_一向_二西洗_一手、云々

真松
日閑 元祿二年二月十七日化
一源院

真間
日立

真間
日晴

真間
日祐

真間
日祐

池上廿一
日玄

池上廿二
日潤

池上廿四
日等

比企谷常住院

日宣

真間
日貞

日眞

日柳

日眞

日海

池上廿五
日顚

日行

日永

日靜

池上
日章

池上廿八
日侃

日進

日健

日利

日昌

日好

日近

飯高、玉澤

飯高、玉澤

飯高、玉澤

飯高、玉澤

飯高、玉澤

飯高、玉澤

飯高、玉澤

飯高、玉澤

飯高、玉澤

飯高、玉澤

飯高、玉澤

柳菴隨筆仁字篇第四終

身延廿一
小四七
後爲日遠弟子
本滿寺十三
鷹峯二
身延廿六

日乾
寂照院
智見院

身延
日祝
山科開山
飯高十五
池上廿
身延卅八

本園寺求法院祖

飯高三
身延廿二
池上十六世
大野開山

●日重

一如院

心性院
西谷開山
本滿寺十四
妙傳寺八

飯高七
池上十五
日友中正院

飯高
玉澤
日達

中山十九
西谷五
飯高九

頂妙寺六
水戸開山

日忠
日豐

中村七
西谷六
妙顯寺十四
池上十九

深草祖
日政

池上
日東

本滿寺十七世
日明 圓照院飯高十一大野貞松

飯高十二
池上

日耀

深草二
日燈
瑞輪寺十
小湊廿六
飯高五十二
身延卅六
日潮

飯高卅一
西谷十五
日孝

身延
日通
日耳

谷中 中山末 妙法寺 駒込 玉澤末 浩妙寺 淺草 平賀末 蓮城寺

谷中 平賀末 本光寺 同 常立寺 同 原町 同 經王寺

市谷 同 修行寺 成子 平賀末 常圓寺 宮村 同 安全寺

西久保 同 眞淨寺 實相寺 淺草 蓮永寺末 本久寺

淺草 妙顯寺末 本藏寺 谷中 同 延命院 淺草 同末 妙音寺

小石川 眞松末 蓮華寺 大塚 同末 本傳寺 白山 同末 妙傳寺

谷中 本法末 妙福寺 同 安立寺 同 佛心寺

同 妙圓寺 下谷 德大寺

○水戸久昌寺

三昧
臺檀
林出
世寺

駒込 久昌寺末頭 △大乘寺 谷中 身延末 領玄寺 押上 身延末 最教寺

丸山 大野末 興善寺

已上はみな一致の教刹なり、然して飯高檀林開山は池上比企谷十三世蓮成院日尊上人と云、講釋の祖をば教藏院日生上人と云、次を心性院日遠上人と云、本満寺十三世一如院日重上人の弟子にして學業功德世みなこれをしればこゝにいふに及ばず、その法脉にて相續する寺院大むね左のごとし

小西 檀林 出世 寺

淺草

本園末頭
△幸龍寺 御朱印百七十石
本園末頭
繼目御禮

本所

△法恩寺

本所

本法寺

同

大法寺

深川

淨心寺

淺草

平賀末
本法寺

橋場

小湊末
妙高寺

淺草

池上末
法養寺

池端

大野末
覺正寺

四谷

平賀末
本性寺

池端

妙覺寺末
大正寺

丸山

法恩寺末
淨心寺

谷川

法恩寺末
大行寺

谷中

藻原末
一乘寺

谷中

大圓寺

○京本園寺

可糺身延末
○京妙覺寺

身延末
○京妙顯寺

可糺中山
○京頂妙寺

中山

○京本法寺

身延末
○平賀本土寺

○中山法華經寺

身延末
○玉澤法華寺

身延末
○貞松蓮永寺

谷中

本園末頭

△宗林寺

同
長明寺

谷中

同
本壽寺

淺草

同
本覺寺

谷中

玉澤末
大雄寺

市谷

玉澤末
惠光寺

牛込

玉澤末
久成寺

市谷

同
蓮秀寺

高田

同
本松寺

高田

同
妙泉寺

谷中

同
養泉寺

雜司谷

同
寶城寺

谷中

同
上聖寺

赤坂

同
圓通寺

牛込

同
長明寺

寺 檀林 中村 出世

池上

御猿島 法性寺

松葉谷 安國寺

宿屋 光則寺

南谷

辻 本興寺

亂橋 妙長寺

笛田 佛行寺

檀林

大磯 妙輪寺

同 妙昌寺

同 妙大寺

曾谷 長源寺

瀬谷 妙光寺

片瀬

三輪 妙福寺

藤澤 妙善寺

南川原 本瑞寺

金澤 安立寺

大町 常榮寺

身延

西谷
檀林

本園
寺求
法院
檀林

身延末 紀伊殿ヨリ住職被仰付

○大野本遠寺 御朱印四百石餘

本園末

○小室妙法寺

身延末

○藻原妙光寺

林 檀 高 飯

善性寺

○小湊身延末誕生寺

○村田身延末妙法寺

○佐野身延末妙顯寺

○身延久遠寺

中臺松和田ヨリ代ルゝ出世ナリ

松和田出世寺

○身延久遠寺

○瀧谷身延末妙成寺

△下谷身延末頭宗延寺

淺草身延末妙福寺

蓮光寺

玉泉寺身

本所 本佛寺

三田 長運寺

中目黒 正覺寺

雜司谷 法明寺

本立寺

谷中 長久寺

本清寺

日慶寺

眞養寺

長昌寺

谷中 妙揚寺

堀内 妙法寺

市谷 藥王寺小湊末

谷中 妙善寺小湊末

長光寺小湊末

實相寺

四谷 日宗寺同

關口 蓮光寺同

鳥越

同 正法寺

砂村 妙久寺

比企谷

池上末 本行院

同 常住院

小町 大巧寺

上線行川△妙泉寺

池上末頭

同大野

池上末頭

伊豆

池上末頭

△清雲寺

泉州堺

中山末

妙國寺

長崎

本例寺末

本蓮寺

三田

同末

長久寺

中臺出世寺大概

身延末頭

△瑞輪寺

金杉

身延末

延壽寺

白銀

同末

妙圓寺

谷中

同末

妙教寺

日夕窪

同末

長養寺

白銀

同末

妙圓寺

麻布

同末

妙教寺

日夕窪

同末

長養寺

白銀

同末

妙圓寺

白銀

同末

本妙寺

白銀

小湊末

覺林寺

牛込

同末

幸國寺

麻布

小湊末

妙像寺

本迹寺

同

常泉寺

牛込

同

一乘寺

同

妙圓寺

同

同

常泉寺

同

同

圓真寺

同

大法寺

同

同

長幸寺

同

同

妙祝寺

同

法典寺

同

同

清德寺

同

同

圓通寺

千駄谷

同

立法寺

牛込

同

大法寺

高田

同

感通寺

金杉

同

要傳寺

長坂

村田末

大法寺

櫻田

藝州國前寺末

法雲寺

本所

佐野末

妙源寺

白銀

身延末

玄照寺

四谷

身延末

戒行寺

四谷

身延末

妙行寺

同

同

正覺寺

同

同

榮林寺

高田

身延末

亮朝院

谷中

同末

延壽寺

同

同

養傳寺

谷中

身延末

常在寺

谷中

同末

妙運寺

同

同

經王寺

十七 相州長福寺
日恩 日弁ノ弟天目ノ叔父

十八 常陸妙光寺
日門 常陸公一條阿闍梨 以上中老十八人也

城下谷出世寺大概 ○ハ本寺 △ハ末頭

○池上本門寺兼比企谷妙本寺 ○真間弘法寺

○新曾 妙顯寺 ○感應寺

△池上末頭 朗惺寺 中延 法蓮寺

二本榎 承教寺 大崎 本立寺

同 淨林寺 淺草 經王寺

牛込 長遠寺 同 蓮妙寺

淺草 正覺寺 同 善慶寺

同 法泉寺 同 善立寺

柳島 法性寺 押上 春慶寺

谷中 神田感應寺 同 妙情寺

川越 行傳寺 根岸 妙像寺

高井戸 覺藏寺 蒲田 妙典寺

谷中 修性院

大久保 法善寺

牛込 善國寺

同 實相寺

同 大仙寺

駒込 蓮久寺

一本松 本善寺

品川 蓮長寺

小山 摩耶寺

牟禮 眞福寺

谷中 龍谷寺

四 岡宮光長寺
日法 信州佐野氏

五 小室妙法寺
日傳 眞言山伏

六 駿州池田本覺寺
日位 駿州人

七 庭谷妙福寺
日秀 墨田次郎時忠次男

八 品川妙國寺
天目 三浦氏

九 佐州妙宣寺
日得 遠藤左衛門尉入道爲盛也阿佛房

十 野呂妙興寺
日合 工藤吉隆ノ弟筑前阿闍梨

十一 村松海上寺
日賢 淡路阿闍梨雜司谷二世

十二 中山三世
日高 大田乘明子

十三 上總興津妙覺寺
日保 痢公美作阿闍梨

十四 沼津妙海寺
日實 但馬阿闍梨

十五 曾谷法蓮寺
日禮 曾谷次郎敦信

十六 日祐 大輔公

四 身延 佐渡公民部阿闍梨 身延二世 三善 四世 日進 日善 日臺 是ヨリ相承シテ今ニ至ル

五 眞間弘法寺 伊豫房 日揚 日樹 日宗 日滿

六 眞松山蓮永寺 日持 德治元年入唐 中山日常上人ノ代リ 日念 二六老僧ノ列ニ入ル 弘安七年日常上人ノ勘當チウク、正安元年四月三日行末モナク成ラセ給フ滅日チシラズ

六老僧外 中山ノ祖、居二世 日常

中山三世 日高 中山四世 日祐

中山五世 日尊

中山六世 日暹

▲本行院 日親

淺草長昌寺祖 中山法宣院 日寂 日眞

中山安世院 日慧 中山淨光寺 日經

▲妙滿寺開山 日什

▲頂妙寺開山 日薩 日祝 日沾 日言 日珙 日珙 油屋日珙 コレナリ

一 小湊誕生寺 日家 佐久間兵庫重吉三男

二 碑文谷法華寺、谷中感應寺、雜司谷法明寺、駿州正法寺 日源 岩本實相寺學頭

三 鷲栖鸞仙寺 日辨 熱原甚四郎國重子天日上人ノ叔父也

▲下總國匝瑳郡野手村印東氏ノ家ニ生

▲本門寺妙本寺妙顯寺等用之

▲下總國葛飾郡平賀庄平賀氏家生

▲本國寺一派印門徒用之

寬元三年四月八日誕生

建長六年入室

文應元年得度日朗十六歲

文永八年九月四宿屋牢

文永十年五月廿八日出牢

文永十一年妙本寺付屬

弘安五年本門寺付屬

文保二年隱池上寺窪

元應二年正廿一化名越火葬、猿島

山ニ塔ス

今富士派ノ祖 伯耆公白蓮阿闍梨

三 日興

安房保田妙本寺、富士大石寺、富士北山本門寺、鎌倉本興寺、元弘三年二月七日化

妙顯寺

日像

本國寺越後本成寺

日印

平賀本土寺

日傳

比企谷大巧寺、小田原蓬昌寺、尾州熱田本遠寺、上總妙隆寺

日澄

上野安中大法寺

日善

佐渡本光寺

日行

丹州常照寺、豆州本教寺、相州圓教寺、越後妙福寺

日範

猿島山法性寺、中延法蓮寺、小田原妙福寺

朗慶

蓮華阿闍梨 元弘三年十一月十五日寂

久成院

日尊

京上行寺開

山

大石寺

日道

上行寺

日尹

住本寺

日大

雲州處々富土門徒ノ祖

日圓

日賴

日元

日從

日源

日長

日禪

日廣

延山ノ門徒也云々。波木井殿ノ謗法振舞ニ依テ聖人

ハ御座不_レ可_レ有_トテ御同心ニ身延山ヲ捨サセ給ヒ

キ、日頂ハ日常聖人ヲ六老僧ノ別數ト仰ラレシ時ニ

伊豫坊頂ヲ代官ニ可_レ被_レ遊由被_ニ望申_一云々、日什門

日蓮宗派の根

源たる高祖の

遺跡正統の寺

院を知らんに

は下の部わけ

にてみるべし

高祖大菩薩

祖師チサス

徒ハ中山日尊聖人ニ歸依被_レ申タリシガ、在所ヲ真

間ニトラレキ、或時ニ真間ノ能化トモ稱シキ日興

執筆番帳、六老僧、日昭日朗日興日向日頂日持、中隋

若輩十二人

誕生寺は中老日家聖人の開基也日家聖人は高祖入涅槃の時廿五歳也

生處

小湊 房州

得道

清澄

轉法輪

鎌倉比企谷

文永十一年五月妙本寺開堂

退藏

身延 輪番

文永十一年六月久遠寺開堂あり

入涅槃

池上

弘安五年九月本門寺開堂

付屬

日朗

高祖開堂の兩寺、付屬の本意所弘の妙法派布の最初たる比企谷妙本寺、能弘の日蓮終焉の本門寺、合せて始終一致全備の謂なり

辨阿闍梨 印東次郎左衛門尉

日昭

祐昭二男

元享三年三月廿六日化

筑後公大國阿闍梨

二 日朗

鎌倉濱法華寺

越後村田妙法寺

豆州玉澤妙法寺

兩山相續、宇都宮妙正寺、上總光妙寺、房州榮泉寺
日輪 大儀妙輪寺

ノ爲ニ永享十年後花園院ヨリ追討綸旨ト錦御旗ヲ上杉持房ニ賜ハリシ事アリ其旗ニ、デハヤルヤドツクモハナ禪振海中雲之幡之手仁東之座於拂不秋風テアツマンチリヲハラフアキカセト云御製ヲ書サセラレシカバ山内ノ上杉家ニ天子ノ御旗ト云傳フルト也南朝紀傳永享記等に、このこと
を載、皆同意也

○西陣 一書、京の西陣と云處は東は堀川をかざり西は朱雀通りにいたり南は一條の大路より北を云すべて方内百五十町なり武家記、又堀川以東ヲ東陣ト云出ニ應仁記、西陣トハ千本北野西ノ京、マタ東陣モ上ハ犬ノ馬場西藏口下ハ小川一條マデト云、今東陣ノ稱號ナシ、重編應仁記、應仁元年五月十日勝元方十六萬千五百餘人東ニ陣ス、宗全方十一萬六千人西ニ陣ス、西陣ハ千本北野西ノ京マデ、東陣ハ犬ノ馬場西藏口下ハ小川一條マデ云々

○如意寶珠 四教儀集解、十二部經者此約大乘也、若約小乘只有九部、法華云、我此九部法隨順衆生說、入大乘爲本、以小乘中無如意珠身、故無三方廣部也云々月令廣義廿如意珠統志、日本國阿蘇山石火起接天、俗異而禱之、有如意寶珠大如鷄卵、色青夜有光、永樂功身對爲壽安鎮國山妙法蓮華品

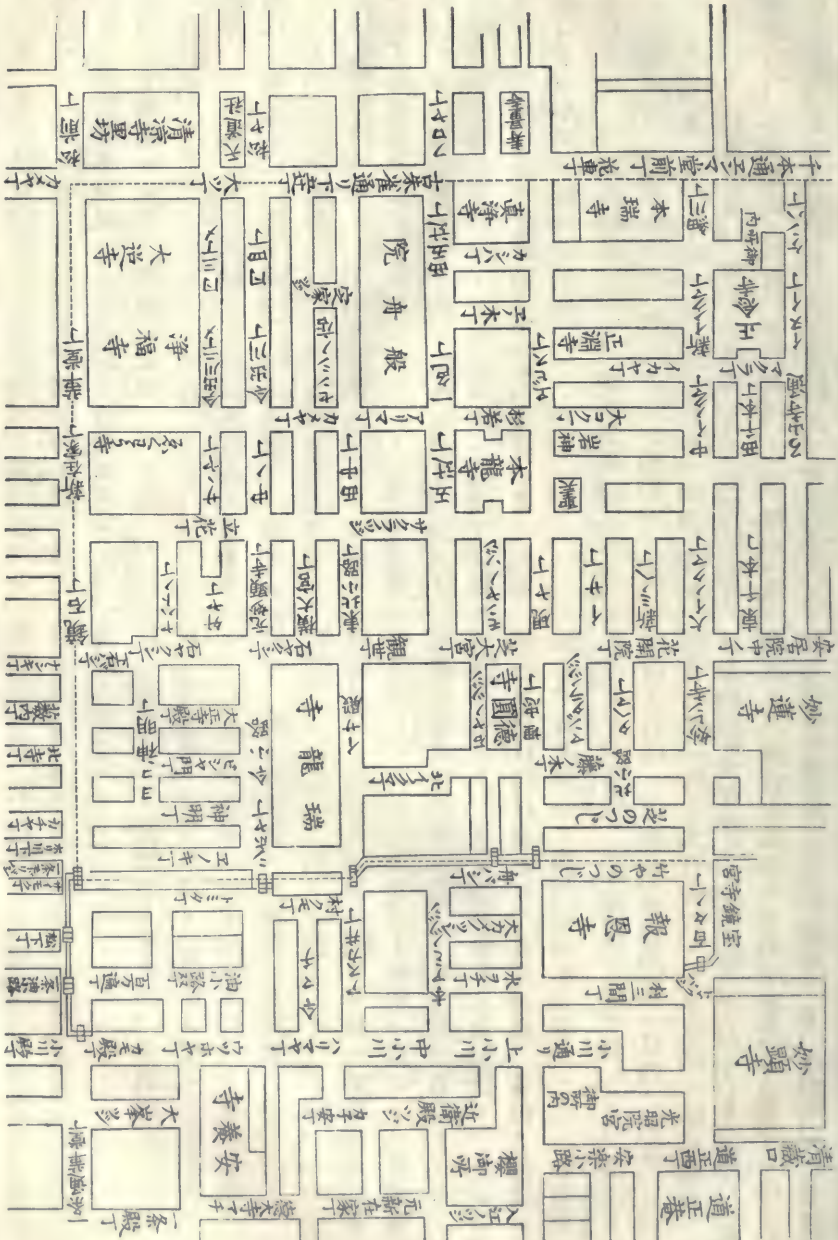
分別功德品、於虛空中天鼓自鳴、妙聲深遠、又雨三千種天衣垂諸瓔珞眞珠瓔珞摩尼珠瓔珞如意珠瓔珞編於九方、

○日蓮宗派

日觀上人傳燈抄、日昭門家ノ法式ノ

コトハ都鄙トモニシカト法華宗ノ様ニハ諸門徒ノ人々不存歟、其根本ハ叡山戒壇ヲ踏メル故歟ト覺タリ云々、然ル間花洛ニモ柳營ニモ眞實ノ法華宗トハ不_レ思沙汰ノ限リ也、但シ日觀ガ三十三ノ時、今ハ相模律師日授ト云シ人越後ノ國ヨリ來テ關東鎌倉法華寺ノ貫首トナリキ、其後二十餘年中絶シテ已後安樂阿闍梨日傳後ニハ號ニ常樂坊、此人又貫首トナリキ、日朗門家ノコト、比企谷ハ日朗ノ古跡云々、比企谷眞俗ハ日朗日輪日山云々、日朗遺跡ノ日山ノ付屬ニテ云々、日朗聖人ノ御門徒種々二分タリ今ハ廿派計モ有ルラム、其中ニ先三門徒ヲ以テ爲ニ長者比企谷所謂日輪日像ト日印ノ三派也、六條門徒ハ日印ノ派也、日興門徒事ハ源ハ富士大石寺ナレドモ近來ハ派々數多二分レタリ、富士大石寺ノ外ニ西山トヤラン一派アル也、關東ニハ鎌倉本光寺トテ小所有之シガ今ハ絶テ無之、安州ニ磯村保田トテ兩所アリ、日向門家甲斐國身

今の京繪圖に載る所西陣の圖なり



●高望

常陸大掾 鎮守將軍 肥前守 上總介
 良望 貞盛 維將 維時

上野介 直方

上野介 惟方

北條 四郎大夫 時方

四郎大夫 時家

從五下 遠江守 時政

二位尼 女

葛原親王十二世孫に二位尼あり安徳天皇の外祖母たりまた同く十三世孫に二位尼ありて天下の成敗を專にす奇と云へり

○錦の價 孫子算經、今有錦一匹直錢一萬八千

間丈尺寸各直幾何、答曰丈四千五百錢、尺四百五十錢、寸四十五錢、術曰置錢一萬八千以四除之得一丈之直退再退得三尺寸之直

今按に算經は唐李淳風の注なれば此一萬八千は開元錢と見べし、又算經に黃金一斤直錢一十萬一兩六千二百五十錢とあり然れば一萬八千錢は金二兩半と二百五十錢也但此金一兩は十錢也ジラモンイナレば金二十八錢八分に當る也今時の金に直せば八兩也小判壹兩參錢六分の積今小判金八兩を曲尺四丈にわれば一丈は金二兩にして一尺は十二匁に當り一寸は一匁三分也幅は一尺八寸也一寸四方は六釐六毛有奇にあたる今と云とも大抵相同じき也

延喜織部式、錦長四丈

長副錦絲十一斤十一兩主計式に上

絲貳兩は正丁一人の庸錢百廿五文に比する由なれば十一斤拾壹兩は百八拾七兩にして九十三人半の庸に比す即錢壹萬壹千六百八拾七錢半に當り銀に直して拾壹兩貳分四錢有奇也金にては參兩參分參朱餘なれば廿八匁餘にして織手一人共今金の拾兩餘にあたるべきなり

作一人長功一尺八寸中功一尺九寸短功一尺二寸長功

三日中功二十八日短功廿三日餘に當れば此織料正丁一人留役者滿三百文に當るべし是に正丁一人の租調各二百五十文として五百文に當るべし是によれば織手の食料を除き絲直と工料とにて壹萬貳千八百八拾七錢餘にあたり銀拾貳兩四朱半餘となれば金にては四兩壹朱半餘也今金に直之織手一人共今金の拾兩餘に當り金參兩參錢參分今九兩餘 織手共作各一人長功一尺九寸中功一尺六寸短功一尺三寸廿一日廿五日 卅日餘に當る

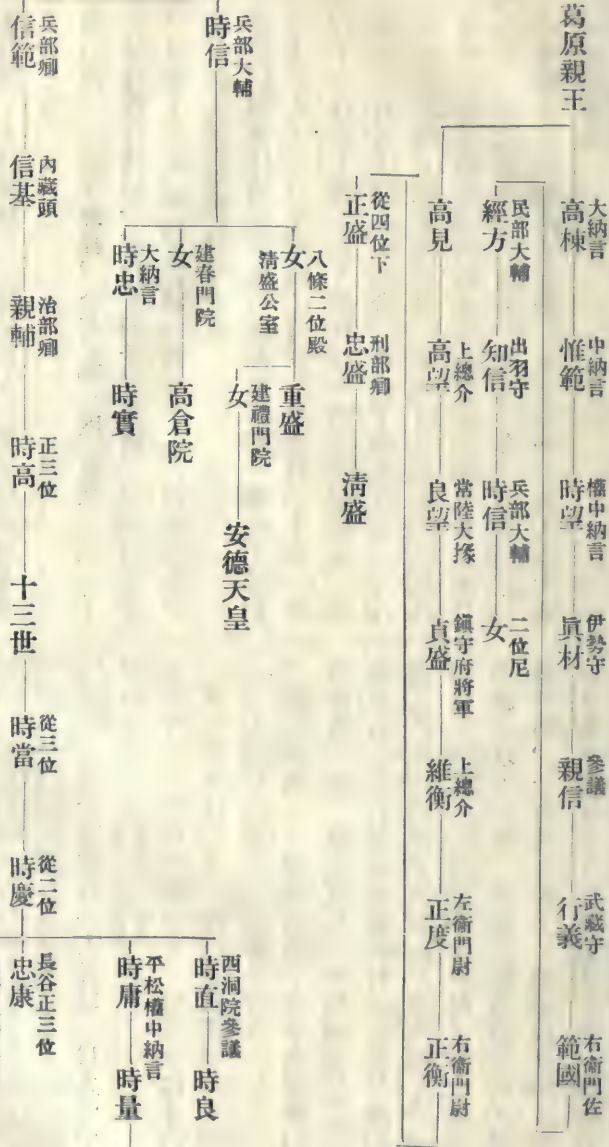
此外に十餘種の錦あり、絲重きは十六斤十四兩に至り輕きは六斤一兩一分に至る、其價大槩推量すべし故に今悉くこれをあげず

○錦の御旗 原田系圖、太宰大監種村天下無雙弓

馬達者、後一條院寛仁三年異賊襲來九州上可亂入之由有_三其告、其時大藏種村蒙_三宣旨馳向令_レ退_三治西戎_二蒙_三征西將軍之宣旨_一管_二領九州_一依_三祖父例_レ賜_三錦御旗_二也_一純友追討の費なり太平記、村上義光大塔宮ノ錦御旗ヲ取セシ事、備後三郎高德ガ宮ノ錦御旗ヲ持テ

落シ事、一宮尊良親王ノ錦御旗是等ミナ日月ヲ金銀ニテ打テ付トアリ」鎌倉大草紙、鎌倉持氏朝臣追討

●葛原親王



當時現存堂上の平氏は二位尼と同じ派の家筋なり
將軍執權次第、平政子^{遠江守平時政女}建保六年四月十四日
叙從三位、同十一月十三日叙從二位、賴家實朝母儀
也但不蒙將軍宣旨、賴經卿年少之間爲彼代官所

成敗也、嘉祿二年五月廿九日受病七月十一日卒六十
九東鏡脫漏、嘉祿元年トアリ平氏系圖、平政子從二
位尼將軍是也、九年居將軍職

南無釋迦牟尼佛 同日越岩本和泉守

南無金剛王 子息能化十三歲

純師六十七歲大坊役日現

天文十七年戊申十月五日 大工由木内匠助

裏書云

右金剛王再興發願之願主上田周防守後室

其外貴賤以助成奉造之也佛所鎌倉住但馬守師第三

人

于時天正十五丁亥曆仲夏吉日 大坊

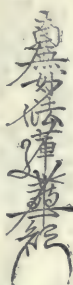
日統

左ノ方畔

密迹王造立施主松山居住正覺坊

日恩佛所鎌倉住人但馬守作者也

南無多寶如來



如來秘密神通之力

南無釋迦牟尼佛

天正十五丁亥五月吉日

本門寺

日統判

池上三門掛札、此仁王尊和銅三年庚戌行基菩薩作、
此和銅三年庚戌作といふは、古川藥師にて云傳し
處、池上に移し奉りしは、天文十七年のことなり身延三門仁王、

金澤の六浦上行寺の仁王尊にして佛師覺増が作る處
なり、然るに此二王身延に行んと聲を出え、かば六
浦の妙法房みづから荷負して身延山に至れりと云は
金澤稱名寺の仁王尊なりとも云、たゞ金石華編百
し稱名寺の仁王は今に古物現在せり、南門樓三重
通三道^{廿丈}去^地形製似^今端門圖、以^三雲氣、畫彩^三仙靈、綺
錢青瑱赫麗華拱夾門有^三四力士四獅子、飾以^三金銀、
加^三之珠玉、^{北朝魏の時なり}

○人聞菩薩 豐後人田邊文三話、豐後國國崎郡二

子寺開基人聞菩薩といふ養老年中の人、也同郡西叡山

圓力寺も養老中同開基なり西叡山もとは六郷山とい

ひしと也

○二宮氏 親綱卿記、文祿四年十一月十五日毛利

諸大夫兩人御札申入了、二宮受領信濃守豐臣就辰書

出中御門上卿勸大勅許^{文祿四十六日}

○にぎはひ草 著述目六、佐野紹益著天和二年板本

佐野系

佐野紹由

大虛庵光悦妻

女

紹益準人 聖護院宮候人

此紹益はよし野大夫を請出
したる人なり其ことは別に
くばしく記せし書あり

○二位の尼 平家系圖、出羽前司知信の男兵部權

大輔時信の女太政大臣清盛公室二位尼御前

作法畢退去、次、神輿新宮拜殿渡御一山衆徒着坐、伶社司人等出勤、七五三御膳、獻之

十七日御旅館從、御門跡、杉重被_レ進_レ之御使御本坊御辰

刻御門跡於三淨土院、整一行粧、乘輿行列到_二於新宮前_一

御招請作法有之、次於三佛堂前延年舞畢而退去但淨土門之時御目付

將軍家御三家御對顏畢而御棧敷_二入御長_一

祭禮上_一覽御祭禮行列之兵士 御次之間御三家三之間井伊

掃部頭以下伺公、御門跡於三淨土院假棧敷、御祭禮拜

覽一山衆徒詰、右次之間 已上刻御祭禮如何例 御祭禮奉行本多豊前守松平玄蕃頭

衣冠、目代右衛門素襖供奉、神輿御旅所、渡御三本立御

供獻_レ之、伶人舞樂東遊八乙女神樂神輿還座先衆徒社司伶

人等之諸役人參宮次啓_二案內_一御門跡昇宮御供_三本_二獻_一

_レ之御社參、付臨時也 還御之砌將軍家御裝束供奉行列御三家裝束、案內

內啓_二御目付_一御供_三本_二獻_一畢衆徒西方瑞籬內庭上退下

御門跡伴僧坊官御宮役僧此處列居社司伶人東方瑞籬內庭上列居社司前側伶人後側

御三家御拜殿、豫參束帶迎_二台駕_一唐門外石階下西方列居

御先立井伊掃部頭銅鳥居御轅束帶銅鳥居內下、輿御轅御

簾松平右京太夫○階下御裾水野壹岐守、御太刀高家、

御刀御小性、御沓御小納戸、隨身御使番二人兩番四人

束帶、陽明門入御、時爲_二御祈禱_一於_二護摩堂_一三檀修法

衆徒三人出勤_二於_二御本地堂_一藥師經讀誦勤之於_二神樂堂_一八

乙女神樂於_二庭上_一伶人奏樂唐門外御三家御會釋、御門跡

御拜殿階下御出迎御會釋畢而御先進御幣殿西方着座

學頭兩執當兼至三石之間 御拜殿入御御幣殿水野 御幣殿入御御

身、次御三家御拜殿入而右方南西着座、御進獻御

太刀目録左近將監廣前持參大樂院請取之、於石之間修學院權僧

之間神馬銅鳥居前牽_レ之正渡之西方詰修學院御太刀目録御幣殿御机之上獻之石

拜禮、御門跡持_二御幣_一御頂戴御復座御三家方同御幣御頂戴有之 奥院

御靈屋御參詣略

十八日還御御道中始終御馬上十九日尾紀兩卿發途、廿日

水戸御發途

○仁王 長榮山志。三門の仁王は行基菩薩の作に

してもと古川藥師にありしを日純上人の時當山にう

つせし也和銅年中の作なり日顓上人過去帳。池上三

解脱門密迹金剛神右の方御首、中、古札之扣

發起旦那上田左近大夫朝直

南無密迹王 並大河原侍從律師

南無多寶如來 日顓曰中首題斗純

師、脇書八現師也

日純判

南無妙法蓮華經

日光御社參ニ付自然火事之節御旅館ニ參上之面々

水野和泉守 松平左近將監 大久保佐渡守

水野壹岐守 有馬兵庫頭 加納遠江守

戶田肥前守 土屋兵部少輔 澁谷隱岐守

興津能登守 上田周防守 御目付

以上

日光御在山中自然火事等之節ハ御旅館ニ可參上候

今度御道中曇候テ降可申被存候程之節ハ御供中馬

上歩行共ニ不目立候様ニ桐油腰附ニ可致候、尤晴

天之時ハ附ニ不及候且又雨具致罷出中途ニテ晴候

ハ見合腰付ニ可仕候事

但下々迄合羽腰付右同斷之事

右之通日光御供之面々ニ可被相觸候

條々

一今度御留守中平日之事戶田山城守含候間可相計

之若異變出來候時者大納言殿可有三下知候條可

存其旨候事

一於城外何篇之義雖有之城中番之輩不可出可

相待差圖一事

一喧嘩口論猶又可相慎若無據義ハ可爲後日之沙

汰事

附、於城中萬一喧嘩口論有之時ハ其近所之輩

可鎮之猥不可出合事

一城中并所々勤番之面々兼而定置候法度之趣堅可

相守一事

一火事用心別而可念入自然城中火事於出來者殿

中番之輩者山城守伊豫守并番頭差圖可伺事

右之條々可相守此旨者也

四月

日光御社參留書、享保十三年四月五日御門跡公寬法親王東山院

第三皇子一品御發與准后天台坐主 十二日將軍家御首途 十四日從

老中奉書到來是昨十三日御發駕之由被戴之也 十五日宇都宮御旅館

從御門跡爲伺御機嫌御使修學院權僧正 十六日

卯下刻例幣使御規式如例 將軍家御着、學頭兩執當

兩別當一山衆徒目代社家療病院假橋之内並居御目見、

一坊樂人假橋之外並居御目見、御着御歡御使執當

御門跡御使高家某上使御請執當也 御三家兼而大桑村御機嫌能御登到

着今日着御前各入來宿坊、依而宿坊上使御機嫌能御登御

祭禮可有拜覽之由也 酉刻夜宮御神事先神與三社銅鳥居之内石

階之下出御、次御門跡參向一山衆徒銅鳥居之内左右列居 御招請御

ニ准可_レ爲_ニ無用_一候尤寺院等モ同前ニ相心得一切
見廻等仕間敷事

右之通可_レ被_ニ申達_一候

江戸御發駕三ヶ所御旅館日光還御共御供揃卯中刻

右之通於_ニ當地_一可_レ被_ニ相觸_一候

御晝休ニテ御供中食事モ大概相濟候時分御供揃拍子

木打揃候筈ニ被_ニ仰渡_一候間拍子木打早速御先御跡之

御供之分無_ニ遅々_一御行列之通立可_レ申候事

下乗之事

一三ヶ所御泊ニテハ追手ヨリ内者御先手番所之外ニ

テ下乗候事

但古河ニテハ御持番所之外ニテ下乗事

一日光御供ニ付テ勤番之假養子願書可_レ被_レ出事

一當日御供之面々假養子願書差出ニ不_レ及事

右無急度可_レ有_ニ通達_一候

日光御供之面々休之義來十日ヨリ相休還御以後者廿

三日ヨリ罷出可_ニ相勤_一候向々エ通達可_レ被_レ致候

一日光御供之内御先番之面々ハ勝手次第來十二日之

晚戌刻迄之内不_レ殘立拂候様可_レ仕候事

一御道中御泊々ヨリ御先エ罷出候面々者子刻ヨリ段

々罷立寅刻迄ニ立拂候様ニ可_レ仕候事

一御跡ヨリ立候面々ハ松平玄蕃頭人數ヨリ先エ不

レ參候様可_レ被_ニ相心得_一候事

一御泊三ヶ所日光共御道中御通り道旅宿者通御之御

幕絞リアゲ町々者見世之内明置候様可_レ被_ニ相心

得_一候事

一岩槻ニテ追手門ヨリ内侍壹人草履取壹人可_レ被_ニ召

連_一候事但番頭布衣以上之分ハ狭箱一ツ爲_レ持可

レ申候事

右之通可_ニ相心得_一候事

四月

稻垣求馬

本田彌八郎

御橋之内ニテ可召具供者覺

一侍三人ニ過ベカラズ但四品以上者四人可_ニ召列_一

一狭箱持壹人タルベシ但四品以上者貳人可_ニ召列_一

一草履取貳人内一人ハ雨具持

一鍵持壹人タルベシ

一乗物カキ四人タルベシ

一火之番之面々ニハ牽馬壹疋タルベシ

一御用有之テ人多ク不_ニ召列_一シテ不叶者可爲_ニ各別_一事

大棟梁、御馬乘、表坊主組頭

金五兩ツ、御賄方、御納戸同心、御腰物同心、御細工所同心、御作事勘定役、小役之者奥坊主御數寄屋共

銀五枚ツ、表坊主、御小人組頭、御仲間組頭

金三兩諸組同心、小間遣組頭

銀三枚ツ、御簀笥同心、御弓矢奉行同心、御具足御幕御書物御疊奉行同心、御手大工

金貳兩ツ、小間遣平之者、御小人、御仲、間御駕籠之者、御膳所六尺組頭、御馬口附之者

銀二枚ツ、千人同心 黑鍬表奥六尺新組 御數寄屋御

路次之者、御大工頭支配定普請同心、御馬飼中間

金三枚ツ、奧外科寄合外科、小普請外科、寄合針醫、

同眼科、同齒醫

金五枚ツ、奥醫師、寄合醫師

日光御社參御發駕之日

晝御休川口町錫枝寺御賄伊奈牛左衛門 御泊岩槻城永

井伊豆守御賄伊奈牛左衛門

二日晝御休幸手町聖福寺御賄同人 御泊古河城本多中

務大輔御賄同人

三日晝御休小金井町慈眼寺 御賄山田次右衛門 中島内藏之介 御泊宇都

宮城戸田山城守 御賄池田喜八郎 鈴木平十郎

四日晝御休大澤町龍藏寺 御賄後藤庄左衛門 池田新兵衛 日光御本坊

御賄長谷川庄五郎 小宮山奎之進

此度日光山御供之面々於御山下宿之外エ家來等無用之者不_レ可_レ出_レ之若無_レ據用事有之テ於_ニ差出_一者主人以_ニ證文_一御番所エ可_レ通_レ之候此旨寄々可_レ被_ニ相達_一候但主人召連候テ通_リ候分者斷次第可_レ爲事

一日光御山中并泊々城々大手門内馬上停止事

一日光御旅館迄_レ切之木戸々々下乗之タメニ候得者

_レ切之内者當地下乗之内之通可_ニ相心得_一事

一御山口々暮六時閉_レ之明エ六時可_レ開_レ之事

一日光御供之面々下々迄晴天雨天共ニ一同管笠可用_レ申旨面々エ可_レ被_ニ相達_一候

一此度日光御成道中筋領分有之面々又ハ近邊ヨリ老

中若年寄其外エ爲_ニ見廻_一使者飛札使等被_ニ差越_一候

者不_レ及_レ申用事之タメ家來等差出候儀モ堅可_レ爲_ニ

無用_一候事

一御代官道筋エ罷出逢候儀且又手代等差出候事モ右

千石ヨリ千九百九十石迄鍵二本馬二疋人數廿人可召連事

未八月

一日光御社參御留守中川筋御船手ヨリ船改之儀大名之舟ハ兼而留守居ヨリ判鑑取置斷次第ニ手形ニ引合相改候事

一手貢繩付并武具之類不相通事

一出家并女前髪有之者其支配ヨリ手形取通候事

右之通萬石以上者大目付ヨリ相達候間可被得_レ其意ニ候若年寄支配エモ爲_二心得_一右之趣寄々可_レ被_二相達_一候以上

申正月

日光御社參之節供奉之面々エ金銀被_レ下之

金百兩宛高家 金三拾枚御側衆 金廿枚巨勢大和守

金十枚有馬六左衛門 金百兩宛御小性 金十枚御小

納戸 銀三百枚ツ、御書院番頭 金廿枚ツ、大目付

金十枚ツ、中奥御小性 金五枚 林大學頭

銀二百枚ツ、御勘定奉行、御作事奉行、御普請奉行、

百人組之頭、御鍵奉行、新番頭、御持弓筒頭、火

消役、御先手頭、御目付、御使番、兩番組頭、御

徒頭、小十人頭

銀百枚ツ、御殿地方御納戸頭 金五拾兩ツ、新番組頭 銀五拾

枚ツ、表御右筆組頭、御膳奉行、中奥御番、兩番、

御納戸組頭、御簞笥、御弓矢鍵御具足、御幕、御

書物等奉行、御賄頭、小十人組頭

銀三十枚ツ、識訪部文右衛門新御番 銀卅枚御腰物方御納戸

表御右筆御細工頭、御臺所頭、御疊奉行、小十人、

御同朋頭

銀廿枚ツ、御作事下奉行、御同朋、御徒目付組頭、

火之番組、頭諸組與力、河合久圓

金卅兩ツ、奥御右筆、御勘定組頭

金廿兩ツ、御馬方、御勘定、馬醫、御數寄屋頭、千

人頭

金三枚御大工頭

金十兩ツ、御徒組頭、御具御太鼓役、御徒目付、御

徒押、御臺所組頭、奥坊主組頭、同組頭並、御數

寄屋坊主組頭

銀十枚ツ、火之番御挑灯奉行、御仲間頭、御小人頭、

御駕籠頭、黑鍬頭、御賄組頭、御披官、御徒、御

休息_レ戸番、小間遣頭、奥御臺所人、御疊大工、

猪飼源次郎 内田惣左衛門 中村傳左衛門

澤 彌二郎 芝山作十郎 田中金兵衛

小山金五郎 淺利文七郎 杉原佐一郎

鹽 藤右衛門 柴山七右衛門 駒井勘十郎

小田切源左衛門大瀧平七齋藤幸助

野澤惠左衛門 下山權三郎 米岡大助

服部源五郎 藤井利八 本多治部介

風祭甚三郎 土屋藤右衛門 杉浦彦五郎

高場三右衛門
村山金右衛門
上野奥右衛門

山口磯右衛門 鈴木牛之介 神尾 佐仲

服部喜兵衛
印見松下喜平次
長谷部安五郎

竹内源右衛門
湊五右衛門
小澤太右衛門

山田佐左衛門 水谷 又助 恩田九左衛門

服部平九郎 大岡源右衛門

御小人頭
伴六左衛門
荒井岡右衛門
從駕籠頭
安藤源助

山崎八右衛門 常葉源七 栗田吉太夫

村田兵右衛門

一御供被_二仰付_一候面々_二先規之通被_レ下物可_レ有_レ之

候此儀ハ至_レ春被_二仰出_一可_レ有_レ之候間寄々可_レ被_二通候

此度日光御社參二付御旗本之面々工申通覺

衣類紗綾縮緬ヨリ上之品無用并徒若黨小者仲間衣類等常々御定之通り猶以カロク可仕事

但袴地純子繻綸繻子之類無用事

鞍覆馬氍毹覆羅紗天鵲絨毛革無用尤羅紗押掛縮手
網無用事

附緝木綿之外無用事

一乘掛馬蒲團等彌結構成儀無用事

一騎馬御供之面々者桐油可用之其外供ニ召連候下人

一同紙合羽可用事

右書面之通相心得尤結構成儀美々敷事堅仕間敷候

日光御供之面々人數積リ覺

一三百石方五
一百九十石迄
鑪壹本人數十人
一六
百九十石迄
鑪一本人

數十二人

一
千石
方千五
百六十石
迄

鐘壹本
鐵砲壹挺
馬一疋

人數十三人

一
千六百石
方千九百九十石
迄

鏈壹本鐵砲壹挺
馬二疋
人數廿人

一二千石以上ハ可_レ爲_二半役_一事

一布衣以上之御役人五百石以上者鍵貳本人數十五人

御使番還御迄假御目付

本田彌八郎 松前 主馬 高田平八郎

稻葉式部 服部 仲堀 三六郎

大岡彌太郎 松平 隼人 高林市左衛門

福島左兵衛 朽木 修理 三宅平九郎

高城新右衛門 內藤傳十郎 堀八郎右衛門

長坂市郎右衛門 大久保彌三郎 菅沼次郎右衛門

黑澤奎之助 吉田小右衛門 白井 兵庫

石川庄五郎 河勝 主稅 佐々又四郎

藤掛伊織 堀 求馬 小笠原縫殿之助

蜂谷民部 赤井 圖書 大久保甚右衛門

山岡源右衛門 池田 數馬 岡野權次郎

熊勢甚四郎 渡邊左衛門 武島 左門

國領彌次兵衛 武川孫七郎 小笠原久左衛門

蜷川八右衛門 青野庄太夫 大草彌五右衛門

小川長左衛門 中奧御番 前田忠次郎

村越彌十郎 美濃部一學 加藤 求馬

矢代 要人 本田權右衛門 江間平左衛門

本庄五右衛門 海野新左衛門 諸郡與一郎

御馬方

御書物奉行

典御右筆

諏方部文右衛門松村左兵衛 遠山吉十郎

堀內善次郎 坂原作左衛門 大橋藤九郎

長野善太夫 長谷川平太夫 飯高宇右衛門

松井久左衛門 加藤傳右衛門 三橋兵右衛門

村松 四平 坂本新左衛門 石原半右衛門

八木清五郎 古郡孫太夫 平賀甚右衛門

小林定右衛門 西村 平吉 岡山市郎右衛門

大田十五郎 奧谷半四郎 平田順阿彌

野村久清 石川觀阿彌 今大路道三

數原通玄 岡本 玄治 岡 甫庵

栗崎 道有 增田 壽得 島田 幸祝

長嶋 安清 本康 壽仙

右來年四月日光山御社參之節御供可相勸旨御老中被

仰渡候私云、萬石以上以下凡二百七人、御書院番御小性組八組四

荒川 權六 早川庄次郎 宮田平四郎

高木金左衛門 鈴木彌五郎 大野權之丞

上遠田磯右衛門兒玉喜兵衛 川勝江茂八

武島源太夫 岡田源七郎 堺權左衛門

龍圓坊坂 板倉伊豫守

御老中御先御供 御側衆

戶田山城守 戶田肥前守 土屋兵部少輔

大目付 御勘定奉行

奧津能登守 稻生下野守 稻葉多宮

御作事奉行 御目付

間部隱岐守 稻垣求馬 岩本内膳正房

磯野若狹守政助 小出土佐守仍有 山本新五右衛門

土岐左兵衛 喜多村大之丞正矩 矢部庄左衛門

山本 織部 小笠原石見守正登 岡村丹後守純直

田沼主殿頭意行 目賀田幸介守威 中野竹右衛門

小出十右衛門 長田庄九郎 能勢河内守賴忠

中山三左衛門 菅沼主膳正定 田屋仙右衛門

矢部半左衛門 土岐八左衛門 神田數馬

飯塚勘解由 大島雲平 橋本覺左衛門

中山茂右衛門 竹本九八郎 鈴木忠左衛門

稻垣清右衛門 佐野新藏 中島久右衛門

黑田源右衛門 松下專助 長谷川吉右衛門

桑島三郎左衛門 山本八郎右衛門 井宮内

浦上彌五左衛門 松平小膳 山本四郎五郎

佐野吉左衛門 巨勢伊豆守 巨勢大和守

有馬六左衛門

御留守居被仰付候御小納戸九人河井利部
岩田平十郎 小笠原三右衛門 山本攝津

守中條平助 山本十太夫 伊丹三郎
右衛門 芝田才右衛門 落合郷八郎

羽目之間高家 山吹之間より 菊之間かけて

中條大和守 長澤壹岐守 仁木周防守守豐

阿部出雲守正興 酒井紀伊守 内藤越前守

大久保豐前守 阿部大學 水谷出羽守

御小性組番頭 大目付 大野伯耆守

澁谷隱岐守 上田主殿 水野伯耆守

百人組之頭 堀田孫太郎 久貝忠左衛門 舟越五郎左衛門

藤掛民部 建部志摩守 朽木大和守

御番頭 御鑑奉行 大岡忠四郎 小菅猪右衛門 三枝左兵衛

御持頭 小野次郎右衛門 渡邊下總守 青山藤藏

松田善右衛門 蔭山數馬 松平外記

朽木主膳儒者 大學頭中典御小性 柴田但馬守

青山丹波守 松平宮内 逸見源兵衛

建部甚右衛門 日根野備中守 朝倉甚十郎

近藤十兵衛 山川安左衛門 鳥井權之助

細井彌次右衛門 杉浦八郎五郎 田村主馬

桑原權左衛門 松平孫左衛門 高田忠右衛門

御目付 佐々木五郎右衛門 長谷川與左衛門 松平一學

をまかせつるかな、うつば物語藤原宮仕のはじめに
はべるに名つきにも奉らしめんと云々

○二字同字の重りたる書法 金石萃編、漢石經論

語の鳳兮鳳兮、曰是是知津史晨孔子奏銘の頓首頓
首死罪死罪」衛尉卿衡の碑の峨峨我君、競競業業、
閭閻侃侃建寧元年沛相楊統碑の明明楊君」是等の重
文を全く録したり、相摸國筑井縣碑に北條氏に康々
と書たるは誤なるべし板行本はみな重文を全く録せ共、書家はとかく略して書人多し考べし

○日光御社參 柳營譜略、元和三年四月、同八年

四月還御宇都宮有故還御後大納言家御社參、同九年四月右

大將家御社參、寛永二年七月十三日將軍家御社參、同

五年四月御社參、十七日大御所御登山、廿五日將軍家

御登山、同六年四月將軍家御社參、同九年四月十六

日將軍家御登山今日今市御着御服襪如來寺御滯留御

名代掃部頭、同十三年四月廿一回將軍家御社參新廟

壯觀道春作レ記、公今市如來寺御滯留御名代、同十七

年四月廿五回將軍家御社參、同十九年四月將軍家御

社參、御寶塔去年自赤柳山一切出大石二作石屋又藏奉之

賜祿二慶安元年四月廿三回將軍家御社參、同二年四

月大納言家御社參、寛文三年四月大猷院殿十將軍家御

社參、正徳二年正月十五日來年百回御忌御社參被レ仰
出「其十月薨御、享保十三年四月十三日御社參御發駕

廿一日還御、安永五年四月十三日御社參御發駕廿一

日還御、「享保御社參記、享保十二年七月十七日總出

仕來申四月日光御社參被レ仰出候ニ付御用懸レ御老

中松平左近將監若年寄大久保佐渡守寺社奉行太田備

中守大目付與津能登守御勘定奉行稻生下野守御作事

奉行間部隱岐守御目付稻垣主馬本多彌八郎、

來四月日光御社參之節御供之萬石以上

尾張中納言殿 紀伊中納言殿 水戸宰相殿

井伊掃部頭御老中 水野和泉守 松平左近將監

若年寄 松平右京大夫 大久保佐渡守 水野壹岐守

御側衆 有馬兵庫頭 加納遠江守 御奏者 秋元但馬守

御祭禮奉行衆 本多豐前守 松平玄蕃頭 寺社奉行 松平左衛門佐

太田備中守

御在山中勤番

今市入口 松平隱岐守 今市ヨリ日光エ出口 町之内ニ有之奥州道 井上河内守

新町入口 牧野越中守 瀨尾地藏堂前行者堂 前入口外山遠見共 松平丹波守

寂光口足尾口 松平周防守 善知坊坂 内藤大和守

干なれども供奉の先へ走るものゝ着するよりしていへるなり

○羽織 大内家壁書。夜中往來禁制條云々笛、ハフ
リ十トク 但是ははふり十徳と云て、宗五大草紙にはなち十徳は御禁制の内也、とあるとおなじことなるべし、是文明十九年書り

大岡春トが繪本
手鑑に出たる土
佐草の圖中にあ
り、これいばゆ
るはなち十徳な
り、またはふり
十徳ともいひし
なるべし



風流曲三線。職人の弟子ども節供正月御影供祭物日の休に櫃くさき布子を着し至り、大臣の仕出しを見習ひ西陣をりの木綿の小倉羽織の胸紐しめたはきうかつさふに見えてをかし 羽織の胸紐とよべること、寶永の頃迄しかりと知べし

柳菴隨筆仁字篇第四

○二字 密嚴上人行狀記、保延五年ノ夏六條廷尉爲義二字ヲ擎テ上人ニ進テ云

正六位上 廷尉源朝臣爲義

保延五年己未六月十日

古事談、六條修理大夫顯季與ニ刑部亟義光相ニ論所領
白河法皇無レ何無ニ御成敗ニ匠作心中奉レ愁之間或日只
一人祇ニ候御前ニ云々爰匠作及ニ零涙ニ畏申テ退出之後
招ニ義光ニ給レ謁曰彼庄事情思給ニ某又庄モ少々侍國モ侍
貴殿ハ一所被レ憑云々、不便ニ侍レバ欲レ奉レ避也トテ不日ニ
書ニ避文ニ取ニ具券契與ニ義光有ニ喜悅之色ニ起座移ニ居
侍所忽書ニ二字献レ之退出畢、後三年合戰記、家衡が
乳母千任と云ものやぐらの上に立て聲を放て將軍 義家
にいふやう、汝が父賴義、貞任宗任を打得ずして名
簿 二字のこと也 をさゝげて故清將軍をかたらひ奉り偏にそ
の力にてたまゝ貞任等を討得たり云々、汝既に相傳
の家人として辱なくも重恩の君をせめ奉る云々源
重之集、故右大臣 實賴 殿になつき 名簿 に弓そへ奉る
とて、みちのくの安達のみ弓ひくやとて君にわが身

ホリ物ナリ鞘ハ墨スリナリ梅ノマキ繪アリ、筭一本
後藤祐乘ガ彫物梅ナリ長九寸五分」或家藏。建武元
年正月吉日正宗ト銘アリテ長一尺一寸一分廣一寸八
分平作リノ刀アリ、字ヲ庖丁正宗ト云此在柄ノ正宗
ト尤相似タルモノ也、或ハ庖丁ニハ非ズ北條ナリト
何レカ是ナルヲシラズ

古文書。去年者以使者申候砌馳走故盛氏御入魂本望
此事候重而愚意之旨令附與櫻田大隅上禰宜御取成簡
要候次庖丁刀五枚進之候猶期來信候

三月三日

信 玄

佐瀬大學助殿

盛氏は會津芦名修理大夫盛氏にして遠江守盛舜の子
なり、庖丁刀とは此正宗などの如きものを云にや

○白田 晉書。傳玄傳白田收至三十餘斛。水田至三數
十斛。今之收穫最多亦不及此。此白田の字合して
畠となりしならん

古文書。謹解申賣進地事

合壹佰貳拾町本近江國愛智郡大國郷高野村

野地五十七町

畠地三町

山六十町西限愛智河北限岸壇上
東南限黒山

右件地以錢壹佰貫文充價直賣進无品俊子内親王家
既畢仍錄事狀以解

天長元年十月十一日

散位正七位下紀朝臣鷹守

相沾散位正六位下紀朝臣鷹成

俊子内親王は嵯峨天皇の皇女、一代要記帝王編年記には俊子とあ
り橘皇后の所生とす、日本紀略は緩子とあり天長三年六月甲辰薨
御と云

皆川文書。淡路國國領庄園田畠地頭注進

賀茂郷田廿五町六段廿步下略

貞應二年四月 日 散位藤原朝臣下略

醍醐寺雜事記。越智四至内事但粉油畠定

合陸町賀祁布里廿二廿三廿四廿五廿六廿七

所當地子段別三升油三合也云々下略 天承元年辛亥以

前の記なり、類聚國史。鎮祭高畠陵漢語抄。火田野

老傳云、横截山作レ畠謂之截幡、其先燒後耕謂之燒

幡延喜大學式。山城國父世郡畠町永爲菜園園地

○はしり水干 或記。牛飼舍人ナドノ着ル水干ヲ

走水干トモ申ナリ、常ノ水干ノ下ヲカラゲタルナリ

野當卿說。はしり水干として別にあるにあらず常の水

り」俳諧五節句内田順也作
貞享五年本吾妻のかたの子ども細繩を
まろめて玉となし打ときにはま參ると聲かけうつ、
はま矢にて左右に立わかれ玉を射て當るを勝とす、
都にもむかしは射たるとなり、大路の禮者の足もと
へ矢を射あつるゆゑ玉は木なり棒竹はふき乳切木ふ
りくやうのものを持とむるなり、當時破魔ありて
玉を射す毬打も玉をこむるなり

寛文七年印

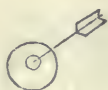
木あと追の

巻五その

圖ありはま

をいる圖な

り



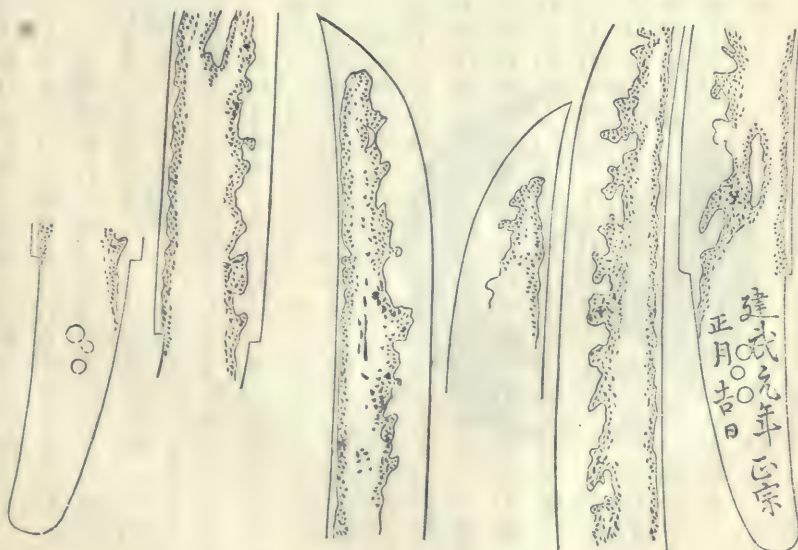
大和の國にて
いふはまころ
をいるも是也

○庖丁正宗

鎌倉佐柄社寶物。正宗作と云無銘長

一尺三寸五分廣三寸五分今の世に小刀と云製なり、

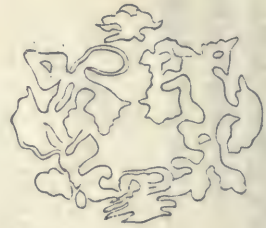
指表梅裏ニ天蓋不動ノ梵字俱利伽羅ヲホル大進坊ガ



建永元年正月吉日
正宗

春日驗記繪
所載

隨身



これらみなおし
なべて變繪と稱
するなり

東大寺寶物

唐櫃の螺鈿

これも變繪

といふべし

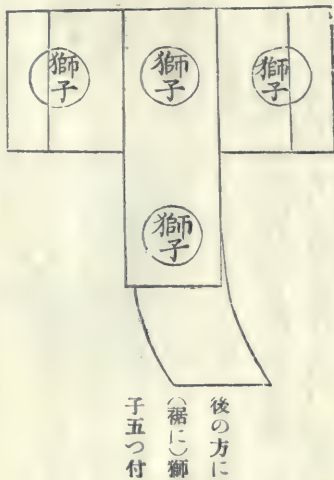


○はまなげ 上野國志。利根郡勢多郡山田郡等の
小兒七八人あるひは十四五人にても集りはまなげと
云戲をして遊ぶことあり、その法まづ左右の列を定
め東西に並びたり西陣の間に地^{東記カ}に筋引て堺となす、

筋より東は東の陣とし筋より西は西の陣とす、次に
濱といふものは人家戸足に付る木車を用ひたり、然
してこの車を投れば轉び走りてその筋をも越べくな
りたるを竹木をもちてうちとめその筋より内へ入
ざるを勝とす、さて打といめたるかたよりまたこな
たへ投返すをこなたにてうちとめむることまた前の
如し、たゞし車をとりてなぐるものをはま主と稱し
大將たり、こなたにてはうちとめしものをはま主と
す、もし投ること高くして筋を越してはこしはま
といひ敵の陣のうしろまでまろびはしりたるを親はま
と稱す、その外其時々小兒の意巧によりて勝敗のさ
だめかはるといへども大かたこの定めなり」安齋隨
筆。大和國吉野郡の人話^{かた}れる者、正月小兒の戲に破
魔弓をいるといふことあり、的は繩を巻て輪となし
徑一尺許も有べくすこれをはまと稱して投ればくる
くまとまろびゆくを弓にて射てその輪の穴へあたり
たるをかちとす、たゞし左右かたわけてはまのころ
び來りしかたよりまた打かへしてこれを射ることは
じめのごとしこれをはまころをいるといふ、はまこ
ろとははまをころばすといふことなるべしと記しあ

蠻繪袍

領袍の
如し



獅子かくの如し

紅葉山方伶人
の相傳かくの
ことし



天王寺方伶人某家に傳ふる處舞樂裝束の蠻繪



賀茂祭繪詞所載勅使隨身の蠻繪

法隆寺



男木樹ぶり
葉つきのづ



女木樹ぶり
葉つきの圖



栽土地 混地わろし、木かげあしく眞土實入極てよし、河砂舞込地實入中の下、黑砂地實入中、山附の段々島の岸上に植てよろし、
此説によれば鎌倉の山々などかならずよろしかるべし

野地は芝を打はりて栽べし、尤木の根一坪ふかく掘り手ごろの石を多く入元の如く地をならしをき、一雨後枝多くかたを北へわけて栽べし、風の吹通す處よし山かげわろし、
此説によれば難山の上などしかるべし、下品荒畑には一反に二十五六本より三十本迄植べし、一本に五十斤なる時は千五百斤より千二百五十斤あり、此を銀三百匁より二百五十匁迄迄なり、延喜縫殿式雜染用度黃櫨綾櫨十四斤云々赤白橡綾黃櫨大九十斤云々

○蠻繪 玉蕊。建暦元年十月廿八日云々蠻繪袍獅子形

以墨摺之日程聊添朱衣服知新集。冠細纒褙衣蠻繪左近獅子右近熊或鴛鴦ナドヲカク、袴或白綾、糸鞋、藁脛中、細劍、弓、壺胡六、右加茂祭近衛使の小隨身着用なり、又舞人蠻繪色紫色地紗嚙呼の獅子を色糸にて縫、下襲生絹裏無色□□尻繪に同じ、袴白平絹指貫の如し

蠻繪にて舞ものは甘洌なりされども略儀には鳥急萬歳樂などにも用ふる歟

四千四百兩、米
八百廿五俵なり
上野にては法心院殿遍淨空覺大姉と稱す

○はじの木 農家益。櫨の蠟を制する初、本朝に於

ては延寶の頃薩州櫻島の小川村に清土舶來の櫨の實を種て蠟を制せしより次第に九州に弘まり元文の頃

より隆に弘まりしとなり、木の善惡により生實多少なり、たとへば櫨木百本の内^{手入をよく}致候得ば 十五本二百斤

より三百斤迄生、四十五本百斤餘、三十本五十斤餘、十本三十斤餘、平均一万斤餘、

大坂櫨實直段一斤に付二分より二分五釐位、または二分八九釐の積りにては一万斤二貫錢より二貫

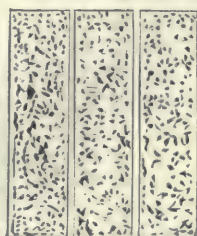
五百錢二貫八百錢餘にあたる
種子植の辨 春彼岸より十日以前櫨子を白にてつき

ふるひ肉をさり實をとり桶に入水にひたし置、廿日程すぎて取出し齒にてかみ試るに和らかになりて種子の口を開くころ筑器にあげ水をたらし圖の如く蒔

置かば追々に芽を生ず、其時に上覆のわらををとりのけ凡五六寸になる頃木の葉と芽にかゝらぬやうに小便をうすく水を加へ懸べし、もし芽にかゝれば木か

るゝゆゑ五六月より先見合かくべし、餘りに肥しす

乾地の上畠（砂地よし）に地をならし芥の焼灰か小便をかけ置よく乾かし



蒔て土は薄くかくべし、又まばらにわらをひろげ置べし、雨にて地かたまらざる用意也

ぐれば却て木の病と成ば心を用べし、種子にいろいろわちあり丸實、安富、猪の爪、小川、田中、松上、松山等の七種なり、筑前筑後豊前豊後にて栽る處なり、松山種を最上とす、

筑後國生葉郡龜王村^{ナメシ}官吏^{高千石餘持たる人なり、年々櫨の實の實徳川銀三十貫餘收納有よし}持の山にて字松山といふ處あり、其處に生長したる樹の種を松山といふとなり、

雄木は苗の芽先并に葉の裏表に白赤き毛ありて木の白肌なるものなり、此は接木の臺木にすべし、

雌木は延方遅く葉くろく勢よく少し葉小さく長く葉茂く木は横にはびこり木はだは虎斑にして芽先

ふとく葉厚きものなり、種子にて見わくるには水にひたしてはやく芽の出るは男木にして、おそき

は女木なりとしるべし

○放免

江談抄。賀茂祭放免着綾羅事被命云放

免賀茂祭着綾羅事被知哉如何、答云由緒雖尋未辨被命云賀茂祭日於綾敷隆家卿問齊信卿云放免着用綾羅錦繡服爲檢非違使共人何敢乎戶部、答云非人之敢不憚禁忌也、公任卿云然者雖致放火殺害不可加禁過歟、齊信卿云臧物所出來物染摺成文衣袴等件日揭然之處所令着用歟、四條大納言願被甘心云々徒然草、建治弘安の頃は祭の日の放免のつけものにことやうなる紺の布四五端にて馬を作りて尾髪にはとうしみをして蜘蛛のゐかきたる水干につけて歌の心などいひてわたりしこと常に見給ひはべりしなんども興ありてしたる心地にてこそ侍しかと老たる道者どもの今日もかたり侍るなり、此ごろはつけもの年を送りて過差もの外になりて萬のおもき物をおほくつけて左右の袖を人にもたせて自は鉾をだにもたす息つき苦しむさまいと見ぐるし源平盛衰記十八。此僧文覺伊豆國へ流罪の由にて云々院より廳の下部二人付られたり云々廳の下部放免二人も下向すべきにてありければ文覺に語りけるは廳の下部の慣かゝることに付てこそ自酒をも一度飲こと

も候へ云々下部悦て云々こゝに下部とありて下に放免とも悪き僧の

詞哉奴原とは何事ぞ云々然れば放免の

中に刑部亟縣明澄と云ける男は生年卅三歳に成ける

が、文覺が弟子となり文明とぞ付たりける

○はす糸袈裟 池上寶物帳。蓮糸緞高祖御袈裟一

條裏書云地白に金糸にて

南無玄號如常 賜紫沙門日芳判

志所

文昭院殿贈正一位大相國公

天英院殿從一位光譽和貞大禪尼

智幻院殿露月涼華大童子

右三尊儀爲成等正覺數年來躬延蓮糸以

織成之今宗祖靈像之袈裟奉之者也

寛保二年壬戌 初春良日 法心院日誦

此法心院日誦といふは太田内記政資の妹にて文昭院

殿に仕奉り、はじめはおこんどのと稱しのちに右近

局といふ、家千代君智幻院露月涼華大童子傳通院御母なる御所に後

れ奉りてのち櫻田に住居したま濱にうつり住し、明

和三年六月二日八十六歳にてうせ給ひ東叡山林光院

にをくりて供養料三百兩給りしなり享保のはじめ、法心院殿の御給年に、金

年十二月十二日台徳公武州稻毛ニ御放鷹御庖瘡ヲ煩
 ヒ給フ伏見ニ告ラル、十七日脚力伏見ニ至ル道中五日也
 神祖永井彌右衛門白元後監ヲ東國ニ赴セ給フ、廿日
 白元稻毛ニ至リ十七日より四日め也公ニ拜謁シ即日暇ヲ贈フ袖小
 領す二十五日伏見ニ至ル六日也神祖其疾足ヲ賞セラル
 今三千卅石、永井天正十七年六月六日大坂御出立神十日
 駿府ニ歸御大坂より駿府迄行程九十一里廿二町也、一日十八里十一町ならし也

○幡隨意上人 年譜。智譽上人幡隨意白道、相摸國
 藤澤善行寺村川島氏子上野國川島氏なりと云天文十一年十月十五
 日誕生、廿一歳の時に玉繩二傳寺義頂上人に隨ひ剃
 髮す永錄五年也天正三年三月より一向專一修念佛のため
 諸國を遊歴し、慶長七年六十一歳にして京都智恩院
 卅三世の法燈をかゝげ給ひ、同九年百萬遍に移りそ
 の、ち關東に下向ありて江戸神田台に寺建立あり昌今
 平橋内紅梅坂の邊 同十三年熊谷寺再興ありて同十七年勢州山
 田入門寺建立、元和元年正月五日七十四歳にて入寂
 あり神田臺に建立ありしは、即今神田山幡隨意院也檀林順路記。智譽上人王譽妙
 龍龍譽高天といふ大龍神を利益しきりしたん對治の
 命にて九州へ下向あり私云、寛永島原の時後紀州萬松寺
 にて遷化にあるべからざる也

○幡隨意長兵衛墓 源空寺境内記。下谷源空寺境
 内に幡隨意長兵衛の墓といふ石地藏をほり付たる碑
 二基有、山脇惣右衛門といひしものゝ立てし山彫
 付けてあり

此の通りの地藏二軀あり年號法名等全く同じくて
 たい左右に書付しばかりなり

高凡五尺許



千時慶安三癸亥今月日

幡隨意長兵衛

為善寺道散善喜寺散

朝屋町
 地主山形惣右衛門

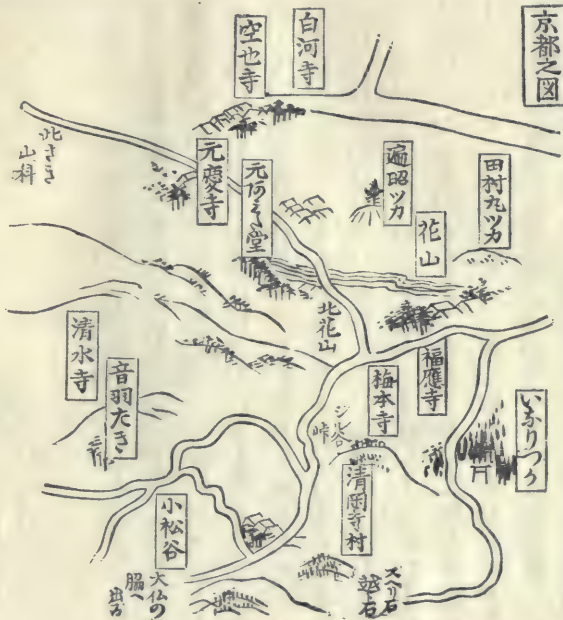
地藏の古色實に奇古のものなり

翌日は四月十三日と
 いへり、傳馬町村田
 長兵衛鏡師といふも
 の今の施主なり

芝居年代記。寛保四年甲申春中村座サレイン磯末廣源氏江戸
 男立の親分ばんすい長兵衛大谷廣治小性梅之亟に
 玉澤才次ばんすい長兵衛梅之亟にむたいに衆道をい
 ひかけ戀塚の門兵衛と出入立合の所大評判大當り

今按るにしるたに峠の東に花山北花山といふ處ありそこに遷昭塚といふあり山城國宇治郡の内なり

京都之圖



○はやあし 續世繼。堀川おほきおとい公宗輔 はやあしにて供人追付申さず菊牡丹を作る事と蜂を飼給ふとは やあしとな三の藝にかぞへたり

系圖

賴宗 堀川右大臣

後朱雀院
麗景殿女御
女 正子内親王
かものいつき

後三條院未
春宮御息所
女
中右記は此公
の記也中御門
又中御門とも云
當時の松木家の祖

中納言
兼賴
前左衛門佐
基俊
宗忠
宗能

大宮
右大臣
中御門
大納言
應保二年八十六歳薨
堀川太政大臣從一位又號京極

俊家
宗俊
宗輔

東鑑。寛元四年閏四月一日入道正五位下行武藏守平朝臣經時卒法名安樂 被申京都行程可爲三二箇日、八日六波羅以下御訪使者參向彼卒去之事云四日申尅飛脚京着之間披露洛中

今考ふるに京都より鎌倉迄百十五里廿一町也、是を三日にわれば一日卅八里十九町づつにあたる、ただし富士川大井川は渡れども荒居は濱名橋あり宮をば渡らず洲股にかゝりて往來せしなり

鎌倉話。六浦上行寺の妙法房は金澤六浦より下總の中山妙法華經寺日祐上人の説法聽聞に朝飯後足駄はきて出立れ説法はてゝ六浦に歸り給へりとなり」澤金合せて十八里也、奇異のはや足と云べし 家忠日記。慶長二

高倉
東洞院

[illegible]

○方丈

剪燈新話
二卷

牡丹燈話注云、長老所居曰

方丈、伽耶城有_二維摩居士石室、以_二手板_一縱橫量_レ之

皆十笏、故曰「方丈」
鴨長明「方丈記」
 その家のありさまよ

のつねにも似すひろさはわづかに方丈高さは七尺の

内なり、所をおもひ定めざるがゆゑに地をしめてつ

くらず土居をくみうちおほひをふきてつぎめぐとに

かけがねをかけたなり、もし心になはぬことあらば

安く外にうつさんがためなり、其改つくる時いくば

くの煩ひがある、つむところわづかに二輛なり車の

ちからをむくふるほかには更に他の用途いらす云々

大原山閑居の體なり
字典。釋氏所居曰ニ方丈ニ杜工部集卷八岳

麓山道林二寺行、蓮花交響共命鳥、金榜雙廻三足鳥、

方丈涉レ海費二時節一、元圃尋レ河知有無、云々

○はな山

僧正遍昭の舊跡なり、古今集春下、は

な山にて、僧正遍昭「よそに見て歸らん人に藤のはな

はひまづはれよ枝は折とも、同集別、人の花山にま

うできてゆふさりつかた歸なんとしけるときによめ

る、僧正遍昭「夕暮の籬は山と見えな、んよるは越え

じと宿り取べく、後撰集春中、花山にて道俗酒たう

べける折に、素性法師「山守はいはいはなむ高砂

の尾上の櫻折りてかざさん、拾遺集雜上、花山にま

かりて侍けるに駒牽の御馬を遣はしたりければ、素

性法師、「望月の駒より遅く出つればたどるゝに山

は越ける、續古今哀傷、花山にまかりたるに僧正

遍昭の室の跡の櫻ちりけるをみて、津守くにもと「あ

るじなきすみかに残る山櫻哀むかしの春や戀しき、

○はな見 百練抄。天治元年閏二月十二日兩院河白

鳥臨下幸法勝寺上覽春花太政大臣實攝政忠以下騎馬

前驅内裏中宮子女房連車追從男女裝束裁錦繡金銀

於白河南殿被講和歌内大臣有仁献序帝王編年

記。天治元年閏二月十二日有花見御幸兩院御同車

隨身各裁錦繡一月卿雲客着狩裝束待賢門院璋子同

御幸出車十兩打出於金銀珠玉今日被講和歌序

者華園内大臣有仁徒然草三人あまたつれて花見あり

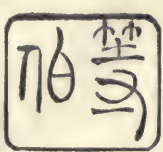
しに最勝光院の邊にてをの子の馬をはらしむるを

見て今一度馬をはするものならば馬倒れ落べしとば

し見給へとて立とまりたるに云々公任卿集。帥の宮

親王花見に白河におはして云々

○長谷川等伯 天正慶長記。慶長十四年正月十九



日ノ條長谷川等伯七十餘去冬從高墮右手不遂云々
書家系圖。長谷川五六郎後ニ等伯任ニ法眼ニ其弟子ニ

大藏信春宗也等作等悅等宅等林小野等歲九州ナド餘
多アリ印譜。長谷川等伯叙法眼

○長谷川等胤 松島夜話。瑞巖寺書院從ニ元和六

年ニ至三八年ニ而成左甚五郎長谷川等胤狩野左京吉岡

幸益云々此夜話は元文中瑞巖寺
住僧天嶺和尚の著也

○長谷川光芳 巡見記。河内國平野村天源山大念

佛寺什寶、片袖の緣起詞書大覺寺宮御筆、畫長谷川

左近衛光芳、住吉の社人山上松太夫といふもの、妻

の幽靈元和三年六月三日箱根山の地獄に墮たりとて

奥州某村巡禮に託して命終の時に衣たる小袖の片袖

と香合を送りけるよしの緣起なり

○長谷川五左衛門宗哲 日允上人本尊。長谷川五

左衛門宗哲授與なり

○方忠 吉部秘訓抄。文治三年十二月廿七日今日

祇園社遷宮也、讃岐國司神殿外不_レ及_レ造畢、然而自

明年_ニ爲_ニ塞方之上_一、二ヶ年不可_レ御假殿之由執行

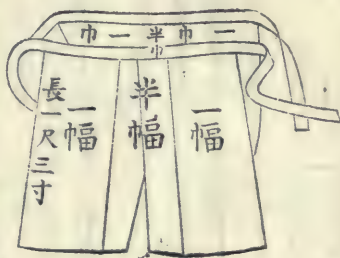
良圖談_レ之、神社方忌沙汰尤以不審云々文治四年は戊

申歲なり、大將軍申歲午の方に徙り西戌の歲を終る

まで午の方にあり、讃岐國は京より南の方午にあた

るなり

細布ハ幅一尺八寸アレバマヅ幅四寸長七尺ヲ殺テ紐
ノ料トシ殘リヲ一尺三寸ヅツ五幅トナシ圖ノ如ク仕

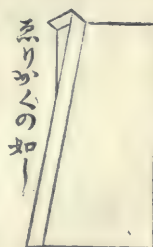


立レバ猶幅五寸廣一尺四寸ノ餘アリコレヲマチニ用
フルナリ、袴長一尺三寸ナレバ僅ニ脛ニカ、ルベシ
故ニ俗ニ脛切ノ袴ト云シヲ後ニ絆切ト云シナルベ
シ

松浦家藏。はんひはんきりト稱シテ金襴ニテ裁縫
セシモノアリ普廣院將軍ヨリ拜領セシ所トカヤ
山野邊家藏。肥前ノ名護屋ヨリ山形へ法被數不足
センホドニ急ニ染仕立ベキヨシニテ手本ニ越シタ
ル物トテ山野邊家ニアリ

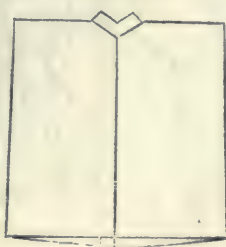
さんひ

此より下縫



をくひ

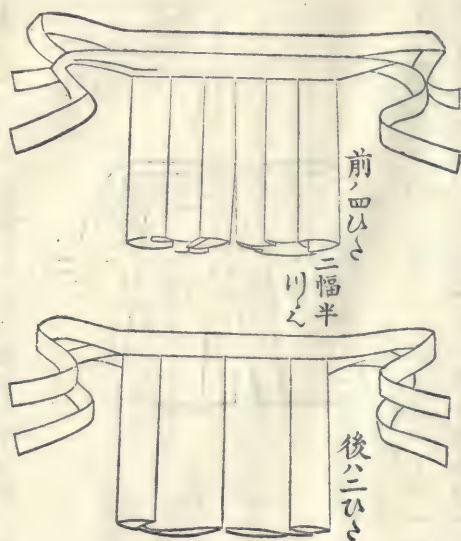
裏



淺黄木綿なり
紋は白く染ぬ
く

臂絹二丈袴^{細布}トアリ闕腋ノ下ニ五位以上着スル^正
 式半臂トコ、ノ半臂ハ同名異物也、二丈ニテ裁縫セ
 ンハマヅ長三尺一寸二分五釐トシテ片身六尺二寸五
 分ナリ兩幅ニテ一丈二尺五寸ヲ用フ、殘七尺五寸ア
 リコレ襟トオクビノ料ナルベシ

はんざり



徒然草の繪は下に見えたる山野邊家藏のはんひの
 如く脊に紋あり、盛衰記の繪は織物を用ひしもの
 もありしやと見えたり

徒然草繪

源平盛衰記繪



滋野井公澄卿は實高倉永敦卿男也

右中將

權大納言

權中納言

權大納言

右中將

正二位
大納言

實光

公澄

實全

公麗

實吉

公敬

爲圖

享保十六五八父
道長寛(イ)徳(イ)實
曆六七十五癸八
十六

連阿口傳。袍ノ長ヲ五ニ折テ三分也胸ノ折メヨリ也、
此外ニ襦アリ上下年少同事廣サハ袍ノ身ニ一寸廣シ
袖ナシ襦ノ高サハ袍ノ襦ニ五分オトルベシ左右ノ脇
ニ十二宛後ニ大タ、ミ置間長サ一丈二尺是半臂カチ
アラレト云大クビノ事六寸アルベシ上サマ次第ニセ
バシ、忘緒事廣三寸五分長一丈二尺年少又可_二簡_一
帶ノ長サ可_レ依_レ腰是ヲ引帶ト云、忘緒ノタ、ミヤウ
アリニニ折テワナノ片ヲ三分一ホドニ折テ又ソノ中
ヲ引帶ニテ結ブ、胸ノ折目ノ事袍ノハ頭帟ノ下ヨリ
サス也是ハ襟ヨリサス間頭紙ノ厚ヲ三寸バカリ宛テ
袍ノ胸ノ折目ヨリ三寸ニテモ二寸五分ニテモ寸法ニ
ヨリテ長サ可_レ定_レ物具裝束抄。半臂公卿夏三倍タスキ
薄物黒染襦同、冬面小葵綾黒染打之、裏平絹水色張之
襦羅單但折_レ端、非職殿上人夏無文薄物色同_レ前、冬平
絹黒染打_レ之、襦同上「雅亮裝束抄。雛かしらをととりて

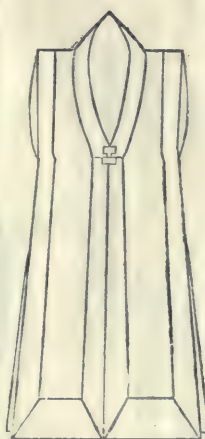
太刀の帶取の中より引通してさきはたけとひとしく
さぐべし、かく引通さん折ははんひの緒をくして通
して此_キさとりたらん尻の上にさぐべし、これはわす
るゝことなり、半臂はらんをよくあらしたるがよき
なりいたくさがりたるもおめてわろし、はたぬひめ
のかく二三寸ばかりみゆるほどにをあつべきなり、
冬のは打半臂也上達部、内の藏人などは羅の半臂也、
夏は上達部内の藏人黒半臂也、殿上人以下はうすも
の下襲のやうに二藍なり、冬は上達部は常にはんひ
きる事なし諸社の行幸に片舞といふことありそれに
は必きることなり、半臂の緒をば小緒と云物にてく
びを結て此頃の人は上にせられたればよし、た_いう
るはしくはゆふやうある本をみるべし習ふべし裝束
の秘する事なり

○半臂の句 無名抄。遍昭僧正歌にはんひの句と
いふことあり「たらちねはかゝれとてしもむは玉の
我黒髪をなですや有けん、長明言此歌とてしもと云
てむばたまのとやすめたるほどにて殊にめで度はべ
れと云月といはんとて久かたと置、山といはんとて
あし引といふは常のことなり、始五文字にてはさせ

懸帶、狩衣如帶又結腰モノ也

三才圖會

半臂



なよたけ物語



さんひのうん



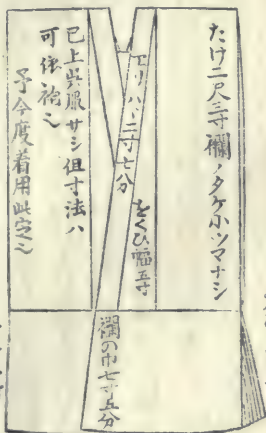
忘緒なり

さんひの襦あ

滋野井公澄卿半臂

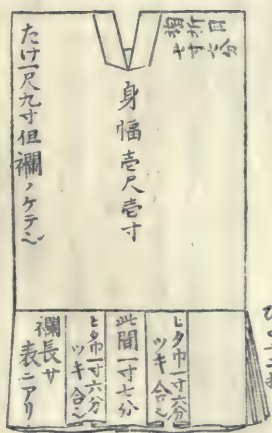
元禄十年四月廿日公澄賀茂
祭参向の時再興着用之

左ひ十二折



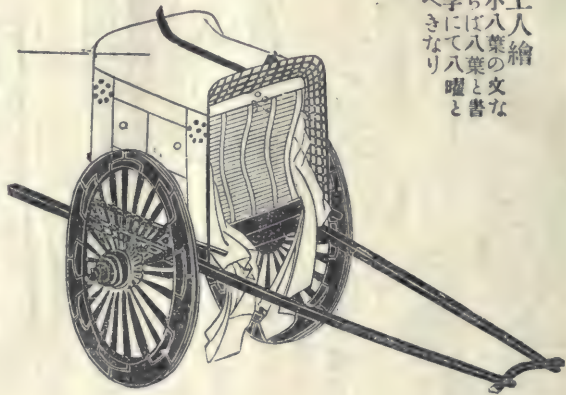
右十二折

おなじく裏



ひ十二折

一 遍上人繪
これ小八葉の文なり
然らば八葉と書
は假字にて八曜と
かくべきなり



—此處は大にて八曜を畫き
しもあり大八曜の文なり—

可用_二下襲_一當時年中行事。王卿并侍臣聽禁色之
輩、著_二蘇芳下襲_一即用_二黑半臂_一、今件黑半臂已是黑紫
色云々_一和名類聚鈔。半臂蔣訪切韻云□□_{此間名如字}
色也云々_一事物紀原。隋大業中內宮多服_二半臂_一除却長
袖也、唐高祖減_二其袖_一謂_二之半臂_一今背子也、江淮之

間或曰_二綽子士人競服、隋始制_レ之云々_一西宮記。滅紫色
綾半臂雖冬晴時欄必用_二羅類_一云々_一桃華蔬葉。冬は綾
をふしかねに染て板引にして著也滅紫色の半臂と名
く裏あり夏はすゝしの穀文三重たすきなり又ふしか
ねにて染るなりいづれも欄忘緒はうすものなり云々
飾抄。半臂久聽禁色一人欄忘緒羅身濃打文小葵、夏大
文黑半臂不聽禁色一人冬濃打夏二藍大塚嘉樹云、
濃打と云は濃紅の黒みたるを打たるなり_{古に打と云}
も今は名のみにして其ものは五倍子かねにて染て板
引にするなり續世繼。大二條殿_{太政大臣}いつの事には
べりけるとかやおほみ遊に冬の裝束に半臂を著さ
せ給へりけるを肩ぬかせ給ふ時宇治殿_{關白賴通なり}より
始下襲の身しろくみへけるに此大臣ひとり半臂
を着給へりければ御日記にはへなるは予ひとり半臂
の衣を着たり衆人はちたる色あり云々飾抄。半臂冬
常不_レ着_レ之、祖湯之時若騎馬時晴着_レ之_{教通公は承保二}
御し、飾抄は其より遙の後なるに、冬常に着_{年八十歳にて薨}
せすとあれば、既に久しく冬は用ひざるなり宸翰裝束抄。半臂
春冬尋常時近代不_レ着_レ之定也、如_二五節_一可用_二之_一
着_レ之、調様以下委細見_二裝束抄_一仍略_レ之、夏秋用_レ之
大丈綾色如_レ袍欄及忘緒半臂文同物ヲタ、ミテ用、如

て新發意に一錢あたへとほるとき笠にてこれをうけ
とむればいかに新發意はなからを笠にうけとめ給ふ
ことはいかなること、いひければ云々西行撰集抄、
はなからのこと見ゆ

○蓮葉に食をもること

北史藝術傳

李順興寒食、嘗

家爲齋方_レ食器用不_レ周、順興言昆明池中有_二大荷葉_一、
可_三取盛_二餅食_一

○はなの露

來伯人傳、

薔薇花露水

豆のもやし

十六錢

酒石のこがしたるあぶら八錢

朝夕顔にぬるべし

夜半ことによし」化粧傳。此香藥水は化粧して後は
けにて少しばかり面へぬれば光澤を出し香ひをよく

此處水を入
て湯となれ
ばとりかへ
る也
此處へ水
となす



此處へ花を入れて下の湯にてむし
ゆげ上のそらへたまり露となり
落る也

しきめを細かにし顔の腫物をいやす、花の露とりや
う、いばらの花此花をつみとりらん引にかくる
上圖の如き器なり、中に湯を入れてわかし、その上へか
の花をいれその湯氣上の器にたまるにより露出るを
茶碗にうけてとるなり扱この露を除け、丁子、りふ
のふ白檀をらん引にかけ此香具の香をとりいばらの
花の露に少し入て用ふるなり

○八葉の車

鹿苑院殿御直衣初記。康曆二年正月

廿日巳刻准后二條殿御入_二御幕下御第上北小路御鳥帽子直

衣也御直衣指貫者志也、長徒御出立爲_レ被_二御覽訪_一也、八葉

御車番頭六人御牛飼五人於_二四足門前_一御下車、其後
御車自_二閑門_一被_二南入_一、海藻芥、大八葉車は洛中大臣

以下公卿僧中は僧正以下僧綱用_レ之、小八葉は四位五
位雲客僧中有職非職等用_レ之東鑑、建久元年十一月

九日己未天霽、二品令_レ參_二院內_一給御家人警_二固辻々_一
云々申尅自_二六波羅_一御出、先御_二參仙洞_一六條殿不追前直衣網

代車大八葉文

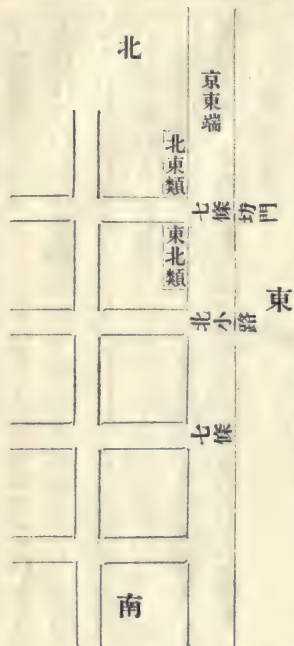
○半臂

延喜彈正式。五位以上聽着半臂云々政事

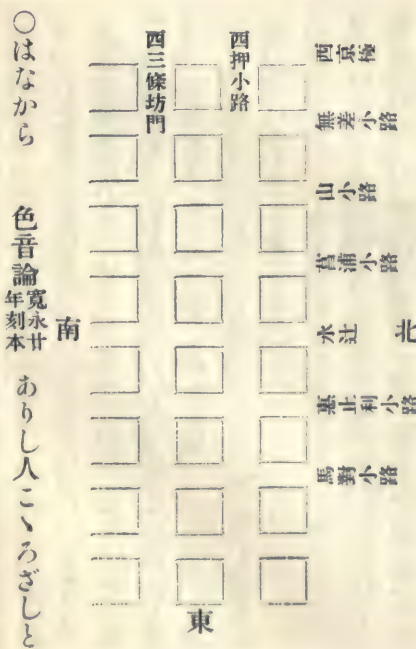
要略。彈正式、凡滅紫色參議以上聽_二通用_一、五位以上聽
著_二半臂_一、滅紫雖_二讀音_一古老稱_二黑紫_一、至_二參議以上_一

繫仕打渡、柴田外記蜂屋六左衛門儀九時分御相談の上にて被遣何も東御門より出る御門下迄關善兵衛岡忠右衛門罷出る此方より御足輕も付不參候大内志摩九時分表御門より罷出る」伊達譜。綱宗萬治三年七月十八日より逼塞綱宗逼塞より十年めの亂なり

○坊門 京圖。三條坊門小路、四條坊門小路、五條坊門小路、六條坊門小路、一條坊門小路、八條坊門小路、九條坊門小路」大内裏考證。讓與七條坊門町地事合壹所七條坊門町東北類口肆丈陸尺壹所歟同坊門町北東類口肆丈壹尺右件地者眞聖重代相傳の私領也相副證文等所讓與甥三郎貞綱實也雖未來際「更不可有他妨」應安元年八月十八日眞聖判此讓狀によつて圖すれば左の如し



人相傳地壹處事全壹戸 主餘二丈玖尺陸寸南北伍丈肆尺陸寸東西六條坊門以南猪隈以東猪隈南副渡本券等、右件地傳領年尙而依有安用限「直上品八丈絹貳拾足肆丈所相傳女房藤口氏」也爲「後日沙汰」勒「新券」如例、壽永元年十月十八日散位中原朝臣判「三代實錄。貞觀十六年八月廿四日大風雨折「樹發」屋云々 朱雀大路豐財坊門倒覆、抱關兵士并妻子四人壓死」豐財坊は西三條坊門小路の通也、抱關兵士なるべし古券文。私領田事合貳段者在右京馬對大路、西面字德大寺四至限西は他領、限北は押小路、右件の由者源氏女先祖相傳の私領なり云々、弘安七年六月十九日云々



○はなから 色音論寛永廿年刻本 ありし人こゝろざしと

し八頭など
の類ならん

○八角井

長安志。景公寺前街中舊有巨井、俗呼

爲八角井、元和^{唐年}中有公主夏中過見百姓方汲、令

從婢以銀稜碗就井取水、誤墜碗經二月餘不出、於

渭河^{井筒を八角にせしなるべきか、唐書に折々見}

○八丈絹 東鑑。相摸國吉田御庄御年貢送文事云々

上品八丈絹六疋代百廿文^{各廿文の建久三年十二月の條也}延喜主計式。

小堅質布^{長八丈爲薄質布長八丈爲廣一尺九寸}望陲質布^{長八丈爲廣一尺}

類聚雜要抄。惟八帖内云々四帖各五幅^{四面料長各九尺定}料八

丈絹四疋四丈内面額額十八丈^{長九尺物廿乃八丈絹定二疋二丈}裏同前也

長九尺^{物廿乃}面額額十四丈四尺^{長九尺物十六乃八丈絹建一疋六丈四尺}

九尺物十六乃^{長九尺物十六乃八丈絹建一疋六丈四尺}は十四丈四尺なり内六丈四尺引、さ

れば殘八丈あり即一疋なり

九尺物廿乃^{長九尺物十六乃八丈絹建一疋六丈四尺}は十八丈なり内二丈引、されば殘十六

丈あり是を二疋とすれば一疋は八丈なり

右に依て考れば八丈絹と云は一疋八丈のものなり、

寛文の御定は絹細共に大工曲尺に三丈四尺を一端と

し、六丈八尺を一疋といふ^{鯨尺の五丈四尺四寸也}たゞし所謂八丈

絹は大工曲尺の八丈なれば鯨尺にて六丈四尺なり

絹布重寶記。羽二重本直理幅鯨尺一尺二寸五分長六

丈五尺より七丈迄なり、中幅直理幅一尺二寸より一

尺一寸五分迄長は六丈五尺位、常幅と云は九寸長五

丈四尺より六丈くらゐ、縮緬六丈物十丈物七丈四五

尺もあり、絹六丈物廣八丈物狹、これらみないはゆ

る八丈絹の遺制とも云べきか

○原田甲斐 酒井家日記。寛文十一亥三月廿七日

四ッ時御登城被成同半過御老中御同道にて表御門よ

り御歸大書院え御通り松平陸奥守殿家來出入之儀御

穿鑿被遊候則伊達安藝柴田外記原田甲斐大内志摩蜂

屋六左衛門伺公仕候暫く御前え罷出委細の儀申上る

其後御客之間え何れも罷出其座にて喧嘩仕出し原田

甲斐伊達安藝を二太刀にて打留め其より御廣間奥之

間え切出る柴田外記^{右の面一ヶ所、同肩一ヶ所、首二ヶ所、左の手甲一ヶ所}原田甲斐^{頭三ヶ所、あご二ヶ所、首二ヶ所、左の手甲一ヶ所}

甲斐儀ははたらき御老中様御前へも可能出

様子相見申に付太田伊兵衛^{袖下}石田彌右衛門^{所手負也}

秋生六郎左衛門川田金左衛門野尻甚五兵衛高須善太

夫井田茂左衛門討留、大内志摩は手も負不申、伊達安

藝原田甲斐死骸夜の四半過に上田五太夫三淵新左衛

門大鹽定右衛門源五左衛門安太夫立合、右家來共穿

て沛艾の馬をこのみしかば此相をおほせはべり云々」
 字典。沛艾姿容俊偉貌、司馬相如大人賦沛艾赳赳

○針の身に立てぬけかねるをぬく藥 松井氏傳
御徒士、俗稱多田助 古き竹の中にあるむしの粉を取、そくい

てねつてぬり付るなり、しばらくありてぬくる事は
 なはだ妙なりといへり

○八條殿 武藏大河戸領志。八條村ニ八條殿ノ墓
 ト云アリ古碑ノ表ニ梵字アリ下ニ弘安七年ノ年號ア

リ傍ニ又□□□十萬衆生ノ字モミュ」上杉系圖。上
 杉修理亮重顯ノ男ヲ彈正少弼朝定ト云其子中務少輔
 朝顯武藏國八條ニ住ス依テ八條中務少輔ト稱ス朝顯
 ノ長子滿朝修理亮 次男房藤中務少輔 房藤ノ子ヲ房繁近江守
 云是八條流馬墓ノ祖ナリ
 ○八里半 心中大鑑寶永元年印本 八里半といふ芋、くり
 に似たる風味ありとて四國にありとかやこれは薩摩芋とは別なるべ

●上杉頼重

修理亮 重顯 中務少輔 朝顯 八條
 中務少輔 修理亮 滿朝 中務少輔 改加々爪
 朝定 朝顯 滿朝 政定

兵庫助扇谷祖 憲房 大懸祖 朝宗 氏憲 教朝 定政 朝良 朝典

山内祖 憲顯 朝房 氏憲 持房 房朝 房定 房能

安房守 憲方 房方 朝方 房朝 房實 定實
 安房守 憲定 憲基 憲實 憲忠 兵部少輔 顯定
 應永廿三 十八日害 大 右京亮 兵部少輔 顯定 右馬頭 憲房

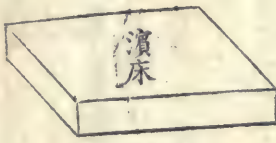
此系圖によりて考ふれば弘安
 七年の碑は上杉の八條にはあ
 らざるなり

事矯飾至也」和名類聚鈔。黒齒ハク。塏囊抄。齒ニ付
ルカネトハ何ナル字ゾ、渾ノ字ヲカネトヨム也」紫
式部日記。寛弘五年十二月云々つごもりの夜ついな
はいとくはてぬればはくろめつけなどはかなきつ
くろひどもすとて打とけゐたる云々、取かへばや。か
しらあらはせなどして髪もかきたれなどして見れば
あてのほどぞふさ／＼とかゝりたる、眉ぬきかねつ
けなどして女びさせたれば云々枕草子。きゝにくき
物はくろめつけて物いふ聲、こゝろゆくものはくろ
めのよく付たる」源平盛衰記。薩摩守忠度は生年四
十一色白クシテ鬚黒ク生玉へり云々敵カ味方カ名乗
レト云、是ハ源氏ノ軍兵ゾト答テイトハ駒ヲ早メテ
落玉フ味方ニハ立烏帽子ニカネツケタル人ハナキモ
ノヲ是ハ一定平家ノ大將軍ニコソ云々、無官太夫敦
盛云々既ニ首ヲカ、ントテ御胃ヲミケレバ十五六許
ノ若上臈薄化粧ニカネクロ也、右兵衛佐頼朝其時十
三ト承ハリキ、カネ付タル小男ノ生絹ノ直垂ニ小袴
キテ侍シヲ云々平治元年なり、天保五年
より六百七十六年になる建内記年同永享
三年十二月云々九予女有祝事二齒久呂美三筆予付ニ
初之、眉毛ヌク事母是ヲヌク次ニ二献云々私云萬里小路
内大臣時房公

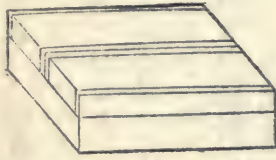
法名建聖院と云、故に建内記と稱する
なり、時房公永享三年は卅八歳なり
○花胡籙 盛衰記卅七梶原景ハ心ノ剛モ人ニスグレ、
スキタル道モ優ナリケリ、咲亂レタル梅枝ヲ胡籙ニ
ソヘテゾサシタリケル、カ、リケレバ梅ノ花ハ散ケ
レドモ匂ハ袖ニゾ殘リケル「吹風ヲナニ厭ケム梅花
散クル時ゾ香ハ勝ケル、ト云古キ言葉マデモ思出ケ
レバ平家ノ公達ハ花胡籙トテ優ナリヤサシト口々ニ
ゾ感シ玉ヒケル」太平記。梶原彈正忠討死ノ條ニモ
見ユ
○はいがいの馬 盛衰記卅七梶原景少用アリテ方
々ニ下居タリケルガ御供ニサガリスト一鞭アテ、打
ホドニ此河マリノ河中ニテ馳付奉タリケルニ沛艾ノ
馬ニテ鎌倉殿ニ水ヲザプト蹴カケ奉リ云々四十二卷那須與一
云々ソコシモ遠淺ナリ鞍爪鎧ノ菱縫ノ板ノ浸ルマデ
打入タレドモ沛艾ノ馬ナレバ海ノ中ニテハヤリケ
リ、手綱ヲユリスエ／＼靜ムレドモヨスル小浪ニ物
恐シテ足モ止メズクルヒケリ」徒然草。御隨身秦重
躬北面の下野入道信願を落馬の相ある人なりよくよ
く慎給へといひけるをいと實しからずおもひけるに
信願馬より落て死にけり云々きはめてもいしりにし

なの橋もやう／＼ちかく成しかば「けふは又めにか
 けてのみにそぐかな濱名の橋の遠き渡りを、廿四日
 橋下の御とまりを立はべり」橋下、橋本、互に通用せしとみゆ太平記^{第二}俊
 基朝臣は先年土岐十郎頼貞ガ討レシ後召トラレテ鎌
 倉マデ下リ玉ヒシカドモ云々又六波羅へ召トラレテ
 關東へオクラレ玉フ云々アツタノ八剱フシヲガミ、鹽
 干ニ今ヤナルミ潟、カタブク月ニ道見テ、明ヌ暮スト
 行路ノ、末ハ何處ト遠江、濱名ノ橋ノ夕汐ニ、引人
 モナキ捨小舟云々

帳臺圖



板にて作
りし臺な
り



たいみの
下しき也

○はまゆか 徒然草。徳大寺右大臣殿檢非違使の
 別當の時中門にて使廳の評定おこなはれける程に官
 人章兼が牛はなれて廳のうちへ入て大裡の座のはま

ゆかのうへにのぼりて云々 臥たりけるたゝみをばか
 へられにけり

○白蓮の交 徒然草^百寸陰おしむ人なし云々 謝靈

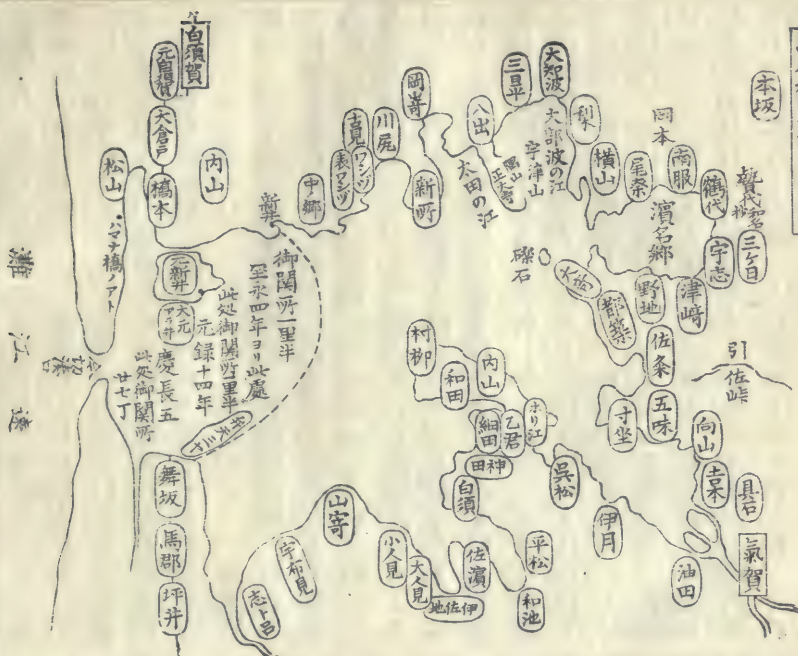
運は法華の筆受なりしかども心常に風雲の思を觀せ
 しかば惠遠白蓮の交をゆるさゞりき云々 東林蓮社十
 八高賢傳。慧遠法師 西林法師^{永慧} 慧持 道生 曇
 順 僧叡 曇恒 道昞 曇說 道敬 佛駄邪舍尊者
 佛駄跋陀羅尊者 劉程之 張野 周續之 張詮

宗炳 雷次宗^{白蓮社の十賢と云}

○はしらなしの土藏 長州萩某造營書。土藏は大

かた柱の朽腐より土にゆがみ出來てのちには大に破
 損するなり、然るをこの土藏はその患なし尤調寶と
 いふべし、その造りやうは長三尺幅一尺高二尺の箱
 に埴^なをつめて杵にてよく築かため日にはし石垣を造
 るごとくかさねて屋根をば材にて作り瓦をふくべ
 し、裏めり裏板表塗腰瓦の仕やう巧拙あり^{圖式等長けれは是を尊す}
 扶桑略記。寛平八年善家秘記、備中賀陽郡賀陽良藤
 傳、其藏無^レ柱唯石上居^レ桁、桁下去^レ地纔四五寸
 ○はくろめ 海人藻芥。凡彼御代以前は男眉の毛
 をぬき鬚をはさみ金を付る事一切無^レ之、及^三末代^一毎

濱名橋及遠江湖圖



八年六月十日地大震、北山鳴而暴螺迸出畧、既而自荒井至舞坂湯々海路凡一里有半、俗呼謂三今切者是也畧、元祿中再有地震洪波之災畧、寶永二年乙丑更有東鑑、而命精水利一士、測其淺深東鑑。建久元年十月三日甲午令進發給云々、十八日於三橋本驛遊女等群參有藥多贈物云々、先之有御連歌、はしもとの君にはなにか渡すべき、平景時「たいそまかはのくれてつきはや、十二月十四日前右大將家令下向關東給云々十九日己亥入夜令宿宮路山中給、廿日庚子橋下廿一日辛丑池田、寛元四年七月十一日入道大納言家頼御歸洛云々、十八日甲戌池田十九日乙亥橋本帝王編年記。仁和元年九月遠江湖濱名橋長五十六丈廣一丈三尺三代實錄に高一丈六尺被損仍給造料」去年造られ富士紀行、永享第四のとし長月十五日遠江湖鹽見坂にて云々十六日橋本の御とまりを夜をこめて立はべりしかば濱名橋をうちわたして忘めや濱名のはしもほのく」と明わたるより末の川浪はま名川よる満汐のあとなれやなぎさにみゆる海士の小舟は、云々橋本の宿は、橋より西に廿三日はま

夕越くれば麓なる濱名の橋に月をみる哉」また「高師山松に夕いる鵲のはし本かけて月わたるみゆ」是らにておもひやるべし、其海中のなり出し道は舞坂より續きたる也、東福寺の虎關が紀行に左海右湖同一碧、長虹并飲雨波瀾とも作れり其さま古書にてみしに丹波の天のはし立駿河の三穗に似たり、文德實錄にてよく思へば濱名郡角避比古社の前湖一口ありて開塞し塞れば民の口となれるよし見えたるも其濱名橋の下のきれとの塞れば北の湖水あふれて田をそこなふ故なるべし、今の驛の荒井は濱松庄にてふち郡なり、近江湖は京近き故にちかきあはうみと云に對して此湖は都遠ければとはつあはうみといふを音便にてとほたふみとは名付し如く濱海によりて此處をば淵郡とも云べし、荒井も古は今の庄とはかはりて濱名の郡にてや有しも知べからず其濱名川の末にかけたるなれば濱名のはしともいへる歟、三代實錄に云々その後土人の傳説には應永三年八月十日波あれて橋かけたりし所打やぶられしを又永正七年八月廿日地震にてその残りし松原をもゆり崩しぬ、それより西海北湖の隔うせて一つに成てむかしの跡もな

しそれよりして此所を今切の渡しといふ由聞及ぬ、是等のこと人のいへると又はしるしをさし紀行の類と考合せてしるし付ぬ、猶土俗に問て究め正すべし、土御門殿東行話説。嘗聞土御門帝明應四年乙卯、有山廬成、海變、以來荒井舞坂之間、析地爲三、滄海、是舊志所誌矣、今幸問其說於村人田叟、聞昔明應

濱名橋全圖



柳菴隨筆波字篇第三

○八月十五夜 本朝文粹。八月十五夜侍亭子院

同賦_三月影滿_三秋池_二應_三太上法皇製_三菅淳茂_{云々}高廳半暮之秋、漢月正圓之夕、云々我后偏命斯遊既而其屬事者千萬種、其應製者八九人」賈浪仙集。千岩一尺壁、八月十五夕、清露墮_三桂花_二、白鳥辨_三虛碧_二」三代實錄。

仁和元年八月十九日丁卯行_三幸神泉苑_二、先御釣臺下_レ

網所_レ獲魚數百隻、御馬場殿閣_二覽信濃國貢駒_一、喚_三文人_二賦詩預_レ席者卅三人、木工寮左右京職各獻_レ物、日

暮鸞輿還_レ宮_{見月の事}田氏家集。八月十五夜惜月 八月十五夜宴月」本朝文粹。陪_三管師匠_二望月亭同賦_三桂

生三五夕_二紀納言_一 元慶元年後漢書竟宴詩序、管師匠

善承_三祖宗之後_二爲_三儒林之宗_一 後漢書竟宴管相公貞

觀六年八月十五日

○濱名橋 三代實錄。元慶八年九月朔日云々遠江國

濱名橋長五十六丈三尺高一丈六尺、貞觀四年修造歷_三

二十餘年_二既以破壞_一、勅_三於彼國_二正稅稻_一一萬二千六百

二十束改作焉_{長五十六丈三尺は今の五十三間五尺に當る、六尺五十間にては八十六間四尺也、幅は何ほどとも無}

れども高一丈六尺と考れば、幅も大低其位より廣くは有とも狭くはあるまじき也、さて稻一萬二千六百束は六百三十一石五斗也、た

いし是は元慶の時の升法なれば、今升に示しては現米二百五十二石六斗に當る、一人五合づつと定めて五萬〇五百廿八人の食料にあたれり濱名橋略記_{爲賀}源重之が家集に橋の燒し事みゆ、僧

基法師の、遠江道記に橋の崩れたるを見たる事記す、

更級日記に濱名の橋下りし時は黒木をわたしたるが

此たびはあとだにみえねば船にてわたるもあり、又

阿佛の紀行にも此橋の事みえたり、土人傳記に應永

三年八月十日波あれて橋かけたりし所打破れしとあ

り、又云永正七年八月廿日橋打破れるを地震にて

その殘たる松原をもゆり崩しぬとありし、歷代備考

云後柏原院永正七年庚午八月廿七日大洪水高浪にて

遠州今切崩る此時濱名驛馬共口退轉海中入と云々」

親行東關紀行。此橋及び橋今宿と云ことあり」類聚

名物考。古の濱名の橋の跡は、にしのかたは今の荒

井の宿の西南に續たる所を橋本村といふ、是すなは

ち古の橋のありし處にて驛路なるべし、猶此所より

おし出たる洲崎のありしなるべし、東方は舞坂の松

原一筋さし出たる是にて海と湖とをせきわけし堤の

如くあり其間松原今はし木の驛との少し切たるに橋

をかけて有しなるべし、高師山も則濱名郡にて白須

賀と荒井の間海近より北の方に有り、歌に「高師山

紫宸殿北ノ中ノ

年中行事繪

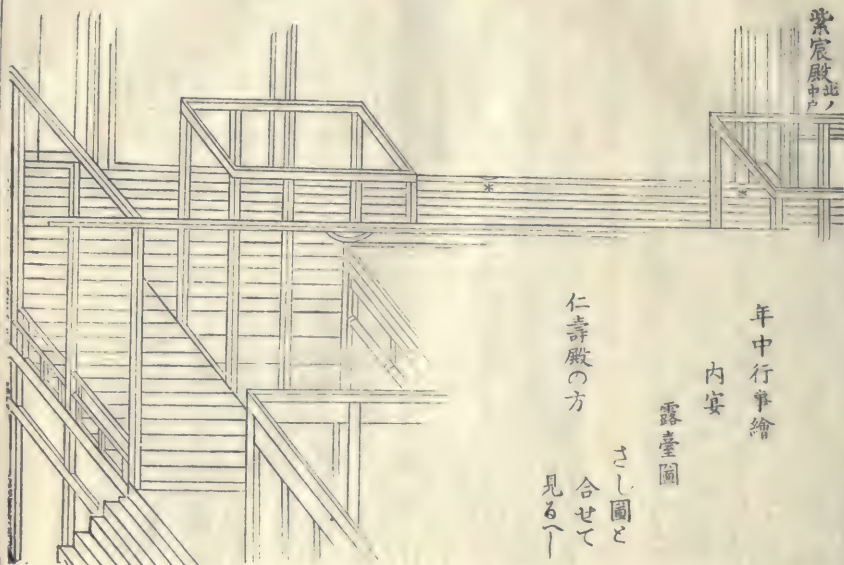
内宴

露臺圖

さし圖と

仁壽殿の方

合せて
見る一



○論語の選述

搜采異聞錄、論語所記孔子與人

語及門弟子拜辭其人問答、皆斥其名、未有稱字

者、雖顔冉高弟亦曰回曰雍、唯至閔子獨云子

騫、終此書無指名者、昔賢謂論語出於曾子之門

人、予意亦出於閔氏、觀下所言閔子侍側之辭與冉

有子貢子路不同則可見矣、論語古訓外傳、前十篇

子張所記牢曰

十篇原憲所記憲問

爲證

柳菴隨筆呂字篇第二終

者閏也廿九萬千八百四十歲に常月三百五十萬二千八十月あり、殘十萬七千五百廿月を以て閏月となすなり

卽三百八十四爻除之得九千四百周此謂二爻當月一

命期經、明應八年自三元甲寅二百七十六萬千九

百廿六年と云に依て推せば天保五年は天元より二

百七十六萬二千二百六十一年に當る乾鑿度に、今入

萬九千二百八十歲と云に付て考ふれば、今より二千九百八十一歲前に書しものと知らる又廿九萬千八

百四十歲づつ引て九の廿九萬千八百四十歲を引去

て殘十三萬九千七百〇一年あり千五百廿歲づつ八

十九引ば殘四百廿一年あり八十九部の餘五紀を殘四十一一年あり

八十九部の積月百六十七萬三千二百月

五紀の積月四千七百月

二章年の積月四百七十月

三年の積月三十七

都合百六十七萬八千四百〇七月これを三百八十四爻

二十七あり、是乾坤屯蒙と數へ豐の卦の九三にて引去ば不盡三百

の十月全く畢り、十一月に至て豐の九四を得、十二月六五、正

月上六、二月旅の初六、三月

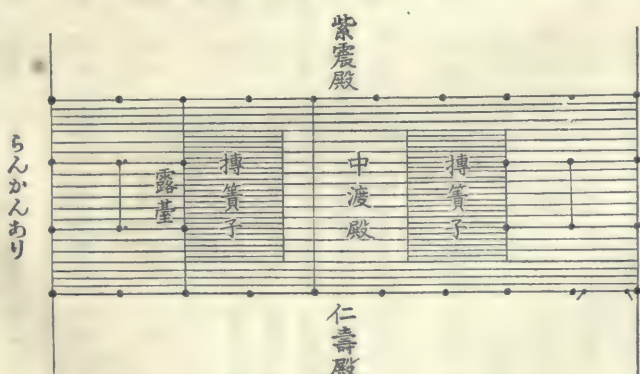
六二、四月九三と分配する也

陽折九陰折六、陰陽之折各百九十二、以三四時乘之

也、故卦當歲爻當月折當日
卅二年に六十四卦一周す故卦當歲といふ

卅二年に常月三百八十四なり故に月當爻といふ
卅二年に常日萬千五百廿なり一年二百六十日也故に折當日
云

大内裏考證圖、露臺圖



○露臺 徒然草、
おとろへたる末の世
とはいへど猶九重の
かみさびたる有さま
こそよつかずめでた
き物なれ、露臺朝か
れり何殿何門などは
いみじとも聞ゆべ
し」江次第、後三條
院仰云仁壽殿露臺下
有「小櫃子」云々」日
中行事、露臺燈籠」

古曆便覽、凡以三六十四卦、毎年配當之說、未_レ考_レ所_レ由來、然_レ不_レ加_ニ自己妄意、只隨_ニ舊例_一而已、とあるは乾鑿度に出ることを知ざる也、たゞし慶長元年丙申_{同人}に當り、今天保三年甲子は損益卦に當ると云ことをば此便覽に付て推知るべし

又曰、卽置_二歲積日法二十九日與八十一分日四十
_二除_レ之得_一命_二日月_一得_二積月十二與十九分月之
 七_一歲以_二七十六_一乘_レ之得_二積月九百四十一_一
七十六年に
九百四十月
 たり_二積日二萬七千七百五十九此一紀也、以_二廿乘_レ之
 得_二積歲千五百二十積月萬八千八百積日五十五萬五
 千一百八十一_一此一部首、更置_二一紀_一以_二三十六_一乘_レ之
 得_二積日百七十七萬六千五百七十六_一

未濟	既濟	小過	中孚	渙	節	巽	兌	旅	豐
乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子
丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申
己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰
辛酉	庚申	己未	戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子
癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申
乙丑	甲子	癸亥	壬戌	辛酉	庚申	己未	戊午	丁巳	丙辰
丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子
己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子	癸亥	壬戌	辛酉	庚申
元天 辛丑	九庚 子	八己 亥	七戊 戌	六丁 酉	五丙 申	四乙 未	三甲 午	二癸 巳	一壬 辰
十癸 酉	九壬 申	八辛 未	七庚 午	六己 巳	五戊 辰	四丁 卯	三丙 寅	二乙 丑	一甲 子
乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申
丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰
己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子
辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申
癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰

一紀積日二萬七千七百五十九
也、即七十六年
 乘三六四一七七七萬六千五百七十六日
也、即七十六年
 六十四年

又以^三六十^レ乘^レ之得^二積部首百九十二^一得^二積紀三千八百四十一^一得^二積歲廿九萬千八百四十一^一

廿九萬千八百四十歳を千五百廿歳づつ引ば百九十二の千五百廿歳也又廿九萬千八百四十を七十六年づつ引ば三千八百四十の七十六歳也

以三十二除之得九千百廿周此謂卦當歲

廿九萬千八百四十歳を卅二年づつ引ば九千百廿の
卅二年あり卅二を周らすは一年兩卦づつ也本ノマはなり
得三積月三百六十萬九千六百月一其十萬七千五百廿月

飯妹	漸	艮	震	鼎	革	井	困	升	萃	垢	夬	益	損	解	蹇	睽	家人	明夷	晉	大壯	遁	恒	咸
庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子	癸亥	壬戌	辛酉	庚申	己未	戊午	丁巳
壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑
甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子	癸亥	壬戌	辛酉
丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳
戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑
庚申	己未	戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉
壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	庚午	己巳
甲子	癸亥	壬戌	辛酉	庚申	己未	戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑
五丙申	四乙未	三甲午	二癸巳	元壬辰	安永	八辛卯	七庚寅	六己丑	五戊子	四丁亥	三丙戌	二乙酉	一甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙寅	乙丑	一甲子
五戊辰	四丁卯	三甲寅	二乙丑	元甲子	文化	三癸亥	二壬戌	元辛酉	享和	十二庚申	十一己未	十戊午	九丁巳	八丙辰	七乙卯	六甲寅	五癸丑	四壬子	三辛亥	二庚戌	一己酉	十戊申	九丁未
庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑
壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子	癸亥	壬戌	辛酉	庚申	己未	戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉
甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳
丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子	癸亥	壬戌	辛酉	庚申	己未	戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑
戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉

離坎	大過頤	無妄大畜	復剝	賁賁噬嗑	觀臨	蠱隨	豫謙	大有同人	否泰	履	小畜	比師
戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子	癸亥	壬戌	辛酉	庚申	己未	戊午	丁巳	
庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	
壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子	癸亥	壬戌	辛酉	
甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	
丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	
戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	
庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	庚午	己巳	
壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	
元甲申	明和	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉
八丙辰	七乙卯	六甲寅	五癸丑	四壬子	三辛亥	二庚戌	元己酉	寬政	八戊申	七丁未	六丙午	五乙巳
十一戊子	十丁亥	九丙戌	八乙酉	七甲申	六癸未	五壬午	四辛巳	三庚辰	二己卯	元戊寅	文政	十四丁丑
庚申	己未	戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉	
壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	
甲子	癸亥	壬戌	辛酉	庚申	己未	戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	
丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	

日廿六	日廿七	日廿八	日廿九	日卅
六五 六五 六五 六五 九五 九五 九五 九上 九五 九二 九五 六五 六五	上六 上六 上六 上六 上六 上九 上九 上九 上九 上九 上九 上九 上六	屯初九 小過初六 需初六 豫初六 旅初六 大有初九 鼎初六 恒初六 巽初六 歸妹初九 艮初六 未濟初六	六二 六二 九二 六二 六二 九二 九二 九二 九二 九二 六二 九二	六三 九三 九三 六三 九三 九三 九三 九三 九三 六三 九三 六三

かくの如く一年廿四氣へ六十卦を配當し置、風雨寒溫を變爻として占ふなり、たとへば天保五年十一月朔日は十月中先月廿一日也より十一日めに當れば坤六五に當る日なり、然るに此日寒風頗る強し六五を變じて陽爻とすれば水地比となる坤五六は陰失位の商比九五に陽得位の角陰位を失ひ陽位を得て金商木角相制し木既に得位なり晩來雨降の兆と爲にたる、大抵此理にて占ふなるべし、たゞし此六十四卦を日に直ることも京房に始まりしには非ず、乾鑿度、卦主歲術曰、常以三太歲紀歲七十六爲一紀二十紀爲一部首一千五百二十年也以三十二除之餘不足者以三乾坤始二數三卦而得三歲末算即主歲之卦是は六十四卦を歲に直る算法なり

乾	坤	屯	蒙	需	訟
甲寅 丙戌 戊午 庚寅 壬戌 甲午 丙寅 戊戌 庚午 壬寅 甲辰 丙子 戊申 庚辰 壬子 甲申	乙卯 丁亥 己未 辛卯 癸亥 乙未 丁卯 己亥 辛未 癸卯 乙亥 丁未 己卯 辛亥 癸未	甲寅 丙戌 戊午 庚寅 壬戌 甲午 丙寅 戊戌 庚午 壬寅 甲辰 丙子 戊申 庚辰 壬子 甲申	乙卯 丁亥 己未 辛卯 癸亥 乙未 丁卯 己亥 辛未 癸卯 乙亥 丁未 己卯 辛亥 癸未	甲寅 丙戌 戊午 庚寅 壬戌 甲午 丙寅 戊戌 庚午 壬寅 甲辰 丙子 戊申 庚辰 壬子 甲申	乙卯 丁亥 己未 辛卯 癸亥 乙未 丁卯 己亥 辛未 癸卯 乙亥 丁未 己卯 辛亥 癸未

日五十	日四十	日三十	日二十	日一廿	日廿	日九十	日八十	日七十	日六十	日五十	日四十
六 四	六 五	六 二	復初九	上 六	九 五	六 四	六 三	九 二	中 冬 學 初 九	上 九	六 五
六 四	六 五	九 二	臨初九	上 六	九 五	六 四	九 三	九 二	至 大 寒	上 九	六 五
六 四	九 五	九 二	泰初九	上 九	九 五	六 四	九 三	六 二	雨 正 月 中	上 九	九 五
九 四	六 五	九 二	大壯初九	上 六	六 五	九 四	六 二	九 二	春 二 月 中	上 九	六 五
九 四	六 五	九 二	夬初五	上 六	九 五	九 四	九 三	六 二	谷 三 月 中	上 九	六 五
九 四	九 五	九 二	乾初九	上 九	九 五	六 四	九 三	九 二	小 四 月 中	上 六	九 五
九 四	九 五	九 二	姤初六	上 六	九 五	九 四	九 三	六 二	夏 五 月 中	上 六	九 五
九 四	九 五	六 二	遯初六	上 九	九 五	九 四	六 三	九 二	大 六 月 中	上 九	九 五
九 四	九 五	六 二	否初六	上 九	六 五	六 四	六 三	九 二	處 七 月 中	上 九	九 五
六 四	六 五	六 二	觀初六	上 九	六 五	六 四	九 三	六 二	秋 八 月 中	上 九	六 五
六 四	六 五	六 二	剝初六	上 六	九 五	九 四	六 三	九 二	霜 九 月 中	上 六	六 五
六 四	六 五	六 二	坤初六	上 六	九 五	九 四	九 三	九 二	小 十 月 中	上 九	六 五

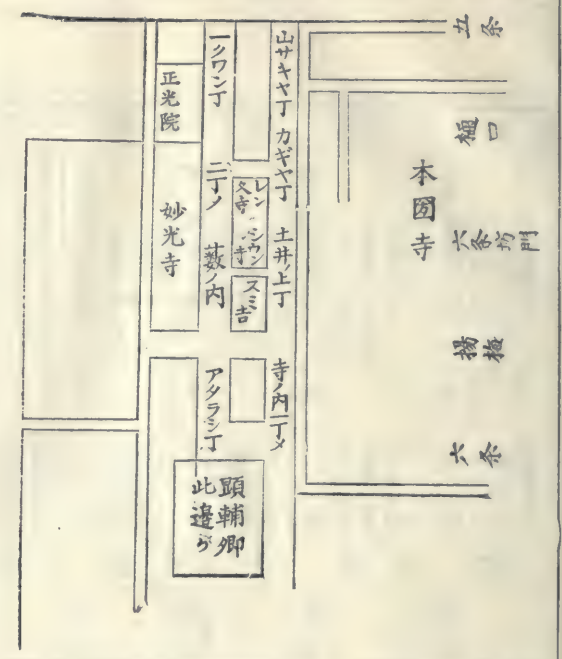
日三十	日二十	日一十	日十	日九	日八	日七	日六	日五	日四	日三	日二
六四	六三	六二	顧初九	上六	九五	六四	九三	六二	蹇初六	上九	六五
九四	六三	九二	睽初九	上六	六五	六四	九三	六二	謙初六	上六	九五
六四	六三	六二	益初九	上九	六五	六四	六三	九二	蒙初六	上六	六五
九四	六三	六二	晉初六	上六	九五	九四	六三	六二	隨初九	上六	九五
六四	九三	九二	蠱初六	上九	九五	九四	六三	九二	訟初六	上六	六五
六四	六三	六二	比初六	上六	六五	六四	六三	九二	師初六	上九	六五
九四	六三	九二	井初六	上九	九五	六四	九三	九二	家人初九	上九	六五
六四	六三	九二	渙初六	上六	六五	九四	九三	六三	豐初九	上九	六五
九四	九三	六二	同人初九	上六	九五	六四	六三	九一	節初九	上六	六五
六四	九三	九二	大畜初九	上六	九五	九四	六二	六二	萃初六	上九	九五
六四	九三	六二	明夷初九	上九	九五	九四	六三	六二	無妄初九	上六	六五
九四	六三	六二	噬嗑初九	上六	九五	六四	九三	六二	既濟初九	上九	六五

六	過大		困		賁		損	
	至十月 廿一日	震遊魂從小雪	至九月 廿一日	兌一世從霜降	至六月 廿一日	艮一世從秋分	至七月 廿一日	艮三世從處暑
日	坤		剝		觀		否	
	至從 廿七日	至從 廿二日	至從 廿七日	乾五世	至從 廿七日	乾四世	至從 廿七日	乾三世
七	濟未		艮		妹		巽	
	至十一 月三日	離三世從廿八日	至十月 三日	兌歸魂從廿八日	至九月 三日	兌歸魂從廿八日	至八月 三日	兌歸魂從廿八日
分	蹇		濟		既		萃	
	至從 九日	兌四世	至從 九日	坎三世	至從 九日	巽四世	至從 九日	兌二世
圖	頤		噬		夷		畜	
	至從 十五日	巽遊魂	至從 十五日	巽五世	至從 十五日	坎遊魂	至從 十五日	艮二世

已上六十卦以配三百六十日、离坎震兌四卦主四方、仍除之、正義第五復卦注云易緯稽覽圖云、卦氣起三
 孚、故離坎震兌各主一方、餘六十卦、卦有六爻、爻別主一日、凡主三百六十日、餘有五日四分日之一者、
 每日分爲三十分、五日爲四百分、四分日之一又爲三十分、是四百廿分、六十卦、卦分之六七四十二卦別各得
 七分、是每卦得三六日七分、也已上正義

日一	十一月	十二月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月
未齊九四	大雪	小雪	立春	啓蟄	清明	立夏	芒種	小暑	立秋	白露	寒露	立冬
屯六四	小過九四	需六四	豫九四	旅九四	大有九四	鼎九四	恒九四	巽六四	歸妹九四	艮六四		

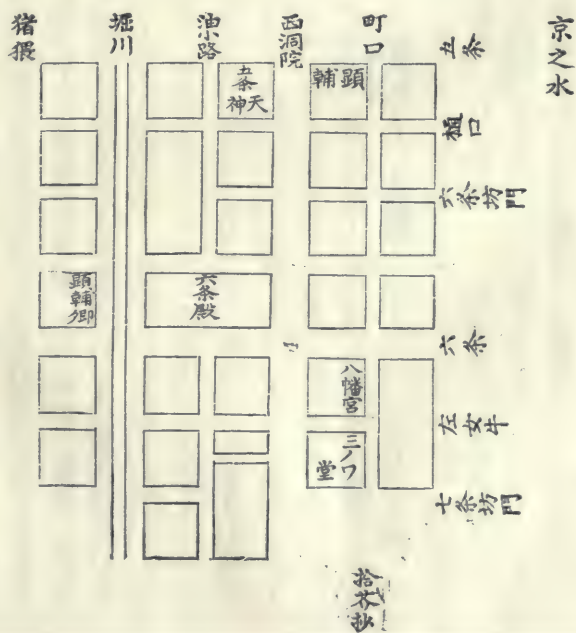
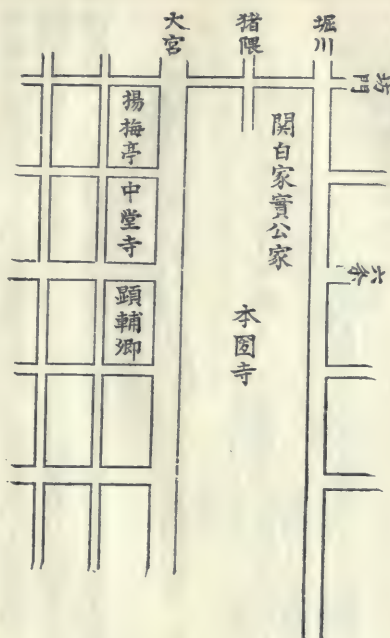
履		咸		畜小		革		解		漸		外	
艮五世從大暑 至廿二日	六月 中	巽二世從夏至 至廿一日	五月中	巽一世從小滿 至廿一日	四月中	坎四世從谷雨 至廿一日	三月中	震二世從春分 至廿一日	二月中	艮宮歸魂從雨水 至廿一日	正月 中	震宮四世從大寒 至廿一日	十二月中
遯		姤		乾		夬		壯大		泰		臨	
乾 二世 至廿二日	從廿二日 至廿七日	乾 一世 至廿二日	從廿二日 至廿七日	坤 六世 至廿二日	從廿二日 至廿七日	坤 五世 至廿二日	從廿二日 至廿七日	坤 四世 至廿二日	從廿二日 至廿七日	坤 三世 至廿二日	從廿二日 至廿七日	坤宮二世 至廿二日	從廿二日 至廿七日
恒		鼎		有大		旅		豫		需		過小	
震三世從廿八日 至立秋	七月三日	離二世從廿八日 至小暑	五月三日	乾歸魂從廿八日 至芒種	五月三日	離一世從廿八日 至立春	四月三日	震一世從廿八日 至清明	三月三日	坤遊魂從廿八日 至驚蟄	二月三日	兌遊魂從廿八日 至立春	正月三日
節		豐		人		師		訟		隨		蒙	
坎 一世 至九日	從九日 至四日	坎 五世 至九日	從九日 至四日	巽 二世 至九日	從九日 至四日	坎 歸魂 至九日	從九日 至四日	離 歸魂 至九日	從九日 至四日	震 歸魂 至九日	從九日 至四日	離 四世 至九日	從九日 至四日
同人		渙		井		比		蠱		晉		益	
離 歸魂 至十五日	從十五日 至十日	離 五世 至十五日	從十五日 至十日	震 五世 至十五日	從十五日 至十日	坤 歸魂 至十五日	從十五日 至十日	巽 歸魂 至十五日	從十五日 至十日	乾 遊魂 至十五日	從十五日 至十日	巽 三世 至十五日	從十五日 至十日



○六十四卦を日に當ること 京房傳、其說長ニ於災
變ニ分ニ六十四卦ニ更直レ日用ノ事以ニ風雨寒溫ニ爲レ候
孟康注、分レ卦直レ日之注一爻主ニ一日ニ爲ニ三百六十
日、餘四卦震離兌坎爲ニ方伯監司之官、所以用ニ震離兌
坎ニ者是ニ至二分用事之日又是四時各專王之氣各卦
主レ時、其占法各以ニ其日ニ觀ニ其善惡ニ也
命期略秘傳 文安年中に書きたる書
と見ゆ、予藏古寫本也

公		辟		候		大夫		卿	
中	長宮遊魂冬至	坤一世從十一月	坎二世從廿八日	兌五世從十二月	巽四世	孚	十一月 中 至廿一日	復	廿二日 至廿七日
屯	小寒至	謙	九日至	睽	從十日 至十五日	屯	十二月 三日至	謙	九日至

應永京圖



鱗ありて六條河原にて安樂を斬、法名如願

○蘆花被 歸田詩話、丘彦能藏蘆花被圖、蓋摸寫

酸齋梁山濩故事、貢泰甫首題律詩一首

○六波羅 平治物語、重盛ハ虎口ヲ通レテ六波羅

迄ゾ落ラレケル云々義朝ハ六波羅ノハタ板ノ際マデ

懸寄テ云々大將軍清盛ハ中門ノ廊ニ引寄テ清盛の亭なり

古今の圖を照し合せて見れば今の六波羅蜜寺は古

の六波羅清盛公亭の地と見え今の西福寺の邊古の

宗盛公とみゆ、其外今ろうの谷などいふあたり小

松内府の亭の地としらる、六道珍皇寺愛宕寺等は

古今沿革なきにや考べし

○六地藏 源平盛記、西光ソノカミ有難キ願ヲ起

セリ、七道ノ辻ゴトニ六體ノ地藏菩薩ヲ造リ奉リ卒

都婆ノ上ニ道場ヲ構テ大悲ノ尊像ヲ居奉リ、回リ地

藏ト名付テ七ヶ所ニ安置シ云々四宮河原、木幡里、造

リ道、西七條、蓮臺野、ミソロ池、西坂本コレ也」

百鍊抄、承安三年三月十日西光法師供養木幡堂、月

卿雲客向レ訪有ニ舞樂ニ世稱過差木幡の地藏堂なるべし江戶砂

子、慈濟庵空無上人勸化の助力を以て金銅立像八尺

の地藏六軀を造立し江戶六ヶ所に安置す、元祿四年

開眼供養を執行しこれをはじめの六地藏といふ、一

番駒込瑞泰寺淨土宗二番千駄木專念寺淨土宗三番日暮里

淨光寺眞言宗四番池端心行寺淨土宗五番東叡山慈濟庵天台宗

六番淺草寺境内正智院」六地藏緣由、瑞泰寺桂芳山檀

陀地藏と云中根氏の女性腰拔本復せしことかや、專

念寺一心山寶珠地藏と云、淨光寺寶林山寶印地藏子だて

なき人眼病の人祈念すべし、心行寺影向山持地藏兩乳

のいたみすべて乳房の願をかなへ給はんと也、慈濟

庵上野大佛の側除蓋地藏と云安産守護也、正智院日光地藏

と云」江戶六地藏建立略緣起、抑々予十二歳の頃古郷

を出十六歳にして剃髮受戒す、其口口秋のころより

重病をうけ二十五歳の春の末に至て醫術も叶難く死

既に極れり云々、一心に地藏菩薩に誓願すらく我も

し菩薩の慈恩を蒙て父母存生の内命を延ることを得

ば盡未來際に至まで衆生の爲に菩薩の御利益を勧め

多く尊像を造立して衆生に歸依せしめ共に安樂を得

せしめんと誓ふ、其夜不思議の靈驗を得て重病速に

本復す云々、諸人を勸め帝都の六地藏に同く御當地

の入口ごとに一鉢づつ金銅一丈六尺の地藏菩薩を六

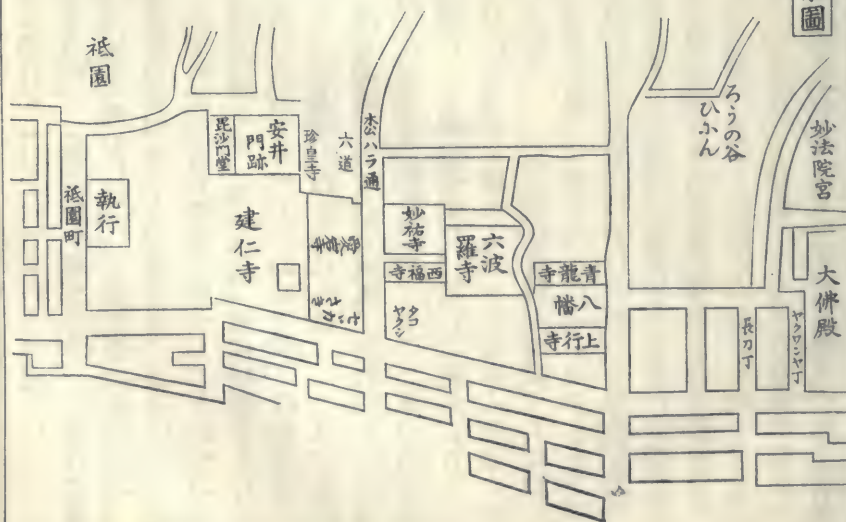
所に都合六體造立して天下安全武運長久御城下繁榮

古圖

京都相國寺
宝蔵



今の京圖



磯五郎といふ者腰元女はつと深く言かはしけるに二人共に勞症を煩ひ女は宿へ下るべきになりければ互に世をはかなみ終に傳通院門前にて相對死して寶永二年八月廿日の曉の露と消にき、しかるにその傍に書置及び金若干ありければ速に長田氏の許へ知らせ彼是立あひて傳通院に葬り塚を並てしるしを立たり、男をば本空信士女をば本理信女と法名を塔の表に記し側面に俗名年號詳に記す、さて此兩人勞症によりて非業に死せしにより末代此病にかゝりて難義せん人を救護し得さすべしと誓し由誰となく語り傳ふるをき、御先手山本原八郎組與力鈴木丈兵衛といふもの、妻勞症を煩ひけるが此塚に祈りて速に驗を蒙りしとて常に參詣しけるをまた同じ病の人き、傳てひとしく祈りけるに是も揭焉そのしるしを蒙りしとなり、これうきたることにあらず懇に信じてその利益をうべき也

○囉齋 尺素往來、近日於私宅爲祈禱奉請僧衆可修觀音懺法一座之由相存候云々米錢以下用意仕候聽聞囉齋被相兼臨期光降所仰候下學集、態藝門囉齋食眞草二行節用集、言語囉齋廣韻、囉歌

詞按に集韻、歌助聲又は囉囉多言など見たり、囉齋未考

○六時禮讚 徒然草、六時禮讚は法然上人の弟子

安樂と云ける僧、經文を集めてつくりてつとめにし

けり、其後太秦善觀房といふ僧、ふしはかせを定め

て聲明になせり、一念の念佛の最初也日本往生極

樂記、聖德太子傳云々山背大兄王子六時禮拜太子前世所持の法

也華經借四上人云、六時和讃は惠心の六時の和讃して

最多き物にてはべるを當門徒に言をつまやかに

して晝夜に歌歎するは即五門の中の讃嘆門の心な

り、是を書寫するものや、もすれば禮讚の次第に准

ずるが故に次第をあやまれり、禮讚は日没を初とし

日中の禮文を終とす、是は經論釋と次第し給ふ、殊

に日中は觀經によるといへども善導自身の禮文とし

給ふ故に終にこれを置也云々晨朝日中日没初夜中夜後夜これを六時といふ徒然

草抄、晋の惠遠法師蓮社を結ひて蓮花漏を刻み六時

を禮せしを六時念佛の權輿とす、唐の善導六時禮讚

掲を撰び集て日夜の勤行とす安樂が作也と云は異説

也にやと淨土宗の人申き、安樂は法然の弟子也後鳥

羽院の特別時念佛をはじめ六時禮讚を唱て聽聞の貴

賤群衆せしに宮女發心して出家せしかば後鳥羽院逆

城暑漏且自今年冬至起算至來年冬至日止、所謂周天正數也、一日一夜通計一百刻、每八刻三十分爲一時、唯寅申己亥有九刻、皆以子午定其晝夜、今者所_レ在壺漏異常不_レ遵古法、務在_二機巧_一各肆_レ警術、工匠一時冒臆之見、制度既無、軌則時刻宜乎差誤有_レ過與不及之失、今輒撰成滴漏循環之法、積年而成、不_レ勞_二人力_一不_レ費_二工財_一妙通_二玄微_一至簡且捷、雖出_二五里之外_一簾笥皆可_レ附行_二于几案之隅_一○造_レ孟法、銅孟二隻大一小一、大者貯_レ水初無定制、但寬大過_二于小者_一足矣、如無以_二磁孟_一代之、小者重五兩高三寸四分面底並濶四寸七分、上下四直造_レ之、思_二度量差殊_一當_レ以_二大平錢五十文_一准_中其輕重、造畢於孟底微鑽_二一竅如_二針眼大_一、浮_二水盆上_一令_二水顛倒自_レ穴外逆通主入_二于孟中_一、用_レ籌探_レ之水至_レ子則子時至_レ午則午時至_二一更_一則一更_一○下_レ漏法、每日天曉日將_レ出時、將_二小孟_一浮_二于大盆水面上_一至_二日入時_一自然水漏小孟沈_二于水底_一爲_レ度、却取_二出小孟_一去_レ水再浮_二水面上_一至_二來日天曉_一仍_レ舊沈_二于水底_一、昏曉二時俱以_二水滿爲_レ度定_二其晝夜_一、其日渟水時切須濾出極淨毋_レ使_二塵滓陰_中其水穴_一、庶幾永無_二緩迫之失_一大清會典。欽天監謹按、

隋志云、黃帝創觀_二漏水_一制_レ器、取_レ則以分_二晝夜_一、其後因以命_レ官、周禮挈壺氏則其職也、宋志、有_二求壺複壺_一廢壺建壺及平水壺之制、本朝因_二前明舊制_一、播水壺三形方承以_レ木架上名_二日天壺_一、即宋之求壺水欲_二常滿_一、上濶一尺九寸下濶一尺三寸高一尺七寸、次名_二夜天壺_一即宋之複壺、次名_二平水壺_一、高濶皆遞_二減一寸_一、分水壺一如_二平水壺之度_一、置_二於平水壺後稍下_一、即宋之廢壺受水壺一形圖徑一尺四寸高三尺一寸置_二於架前地平上_一名_二萬水壺_一即宋之建壺、播水三壺前面近下皆有_二龍口_一、以_レ次漏_二於萬水壺_一、平水壺後面近上開_二孔_一、洩_二於分水壺_一以_二平_一其水而均_二其漏_一、萬水壺蓋安_二銅人_一、抱_二時刻漏箭_一下安_二箭舟_一浮_二於水面_一、水長則箭上出周口水盈、箭盡則啓_二其下口_一洩_二之於池_一、而時刻復起_二午正_一、壺安_二室內_一各設_二水蓋_一、龍口小管以_レ玉爲_レ之



○ろうしやう祈願夫婦塚 小石川傳通院境内にあり、寶永年中長田六左衛門と云し人の厄介に大志場

上左近將監典藥助丹波頼永小森、正六位上右近將監皇太后宮權少進院判官代大江俊矩、正六位上右兵衛少尉源常保細川「枕草子、靱負佐のやがら狩衣姿もいと卑しげ也又人に怖らるゝ上の衣はたおどろ／＼しく立さまよふも人みつけはあなづらはし嫌疑の者やあると戯にもとがむ六位藏人上の判官とうちいひて世になくきらくしき物におぼえ里人下司などは此世の人とだに思ひたらず」春曙抄、六位藏人とは靱負尉などの六位藏人を兼たる也 左兵衛大尉後常、右兵衛少尉常保などの類也 彼水尾盡卷に、右近のせうもゆけいになりて 右近將監兼帶し こと／＼しき隨身具したる 右近衛府の隨身を具したる也 藏人なりといへる此類也、うへの判官とは彼藏人の衛門尉の檢非違使のせうになりたるをいふ也、上の上とは殿上せしこと也檢非違使の尉の昇殿はまれなる事なれどこれは藏人なれば昇殿勿論なるべし「源平盛衰記、小松大臣中宮の御方へ申サルベキコト有テ云々仁壽殿ニ候ハレテ云々左ノ手ニテ蛇ノ頭ヲ押ヘ右ノ手ニテ尾ヲ押ヘテ六位參レト召スレバ伊豆守イマダ藏人所ニ候ケルガ云々御倉町ノ前ニ出テ 是も六位藏人なりし時のこと」

○婁宿 徒然草、八月十五日九月十三日は婁宿な

り此宿清明なる故に月をもてあそぶに良夜とす」宿曜經、八月一日角二日九三月底四日房五日心六日尾七日箕八日斗九日女十日虛十一日危十二日室十三日壁十四日奎十五日宿 九月一日氏二日房三日心四日尾五日箕六日斗七日女八日虛九日危十日室十一日壁十二日奎十三日 婁宿蓋 徒然草抄、近代もろこしよりきたる曆には廿八宿を次第して日數に配す、日本には吉備公の相傳なりとて別に前後まじはること中比大内回祿する日牛宿なりとて牛を除て廿七宿とせり、今考みれば八月十五九月十三婁宿に當るほどに兼好も牛宿を除きたる義を用ひたる成べし 牛宿を除くわけは宿曜經にくはしく見えたり、内裏回祿のわけに

○ロクロ袴 馳驢嘶餘、寺家年頭ニ武家御所へ參ル時ハ云々小者伴ニ中方裡衣ロクロ袴ノ衆多シ

○漏刻 朝野群載、漏刻銘并序 藤原敦光 嘉保二年孟詵之月夢中案術覺後絕巧、其器圓也象圓蓋之逢轉基方也類方與之不搖、禽獸居中隨三十二時而形現、童子立上向三方角位而指點、一動行三刻二八動成三時、每有動轉必有音韻云々、永久四年太歲丙申一沙門亦作漏刻銘云々「漏刻經、嘗觀天文皆接宜洞陽

○六代御前 源平盛衰記、故三位中將惟盛ノ子ニ

六代ト云人アリ、是ハ平家都ヲ落シ時云々遍照寺ノ

奥小倉山ノ麓菖蒲谷ノ地ニ大覺寺ト申候侍リ、カシ

コニヨリ此二三ケ年權佐三位中將ノ北方ト若君姫君

二人相共ニ忍テ住給ヘド云々今年文治元年也十二ニ成給

ヘドモ年ノ程ヨリハ長シク云々故中將ノ息故中御門

大納言女成親腹六代ト云重ハ平家ノ正統也云々駿河

國千本ノ松原ト云處ニ下居テ北條齋藤五齋藤六ヲ招

テ云ケルハ今ハ鎌倉モ近ク成侍リヌ云々日モ既ニ暮

ナントシケレバサテモ有ベキニアラズト云々東方

ヨリ墨染ノ衣キタル僧ノ文袋首ニカケテ鵝毛ノ馬ニ

乗テ馳來ル云々二位殿ノ御許文取出シタリ云々正月

五日文治二年也文覺上人ノ二條猪隈ノ里坊ニ落付給ヒテ

云々東鑑、文治元年十二月十七日丙寅於ニ遍照寺

與大覺寺北菖蒲澤ノ虜ニ權亮三位中將惟盛卿嫡男字六

令ノ乗レ與被レ向ニ野地之處ニ神護寺ノ文學上人稱有ニ師

弟之昵申請北條殿云頂啓ニ子細於鎌倉待ニ其左右ニ之

程可レ被ニ宥置ニ云々、廿四日癸酉文學上人弟子某之

記には上人直爲ニ上人飛脚ニ參申云故維盛卿嫡男六代公

者爲ニ門弟之處已ニ欲レ被ニ梟罪ニ彼黨類悉被ニ追討ニ畢

如此少生者縱雖被ニ赦置ニ有ニ何事哉就中祖父内

府於ニ貴邊ニ被ニ盡ニ芳心ニ且慕ニ彼功ニ且被優ニ文學可ニ

預給ニ歟云々彼者爲ニ平將軍正統也雖ニ少年ニ爭無ニ

成人之期ニ哉尤難ニ測ニ其心ニ但上人申狀又以非レ可ニ

默止ニ進退谷之由被レ仰云々使者僧懇望及ニ再三之間

暫可レ奉ニ預上人ニ之旨被レ遣ニ御書於北條殿ハ平家物

語、六代御前は高雄の奥に行ひ澄して有けるが終に

關東に下され岡部權守泰綱に仰て相摸國田越河のは

たにて斬られにけり歳三十文治元年十二歳なれば、三十歳は建仁三年にして、北條時政の

金吾頼家將軍を伊豆に押籠し歳也鎌倉志、多古江田越河ハ久野谷村ノ東

南多古江濱ヘ落ル川也此川上久野谷村ヨリ落テ多古

江ニ入ル所ヲ御最後川ト云相傳フ六代御前ノ御最後

ノ處ナリ故ニ名ク里俗誤テコサイ川ト云、六代御前

塚ハ多古江川ノ東ニアリ

○ろくろくび 北窓瑣語、元陣口安南に使して鼻

飲如ニ飯滴ニ頭飛似ニ轆轤ロク本草人傀ノ條、飛頭蠻

○魯般尺 營造宅組、開門尺法古言寧去ニ人家造ニ

百墳莫去ニ人家造中一門上、門最利害一家禍福率由レ

之、周尺分節一財二病三離四義五官六劫七害八吉、財

與吉爲レ上官義次之餘無レ取、財吉公私内外通用官可

●泰安日	正七	月ハ朔日也	二日	連流	三日	吉	四日	赤	五日	周	六日	虛	七日	泰	とくる也
○流連日	八	月ハ朔日也	二日	則吉	三日	赤	四日	吉	五日	虛	六日	泰	七日	連流	とくる也
○則吉日	九	月ハ朔日也	二日	赤	三日	吉	四日	虛	五日	泰	六日	連流	七日	則吉	とくる也
●赤口日	十四	月ハ朔日也	二日	吉	三日	虛	四日	泰	五日	連流	六日	則吉	七日	赤	とくる也

日蓮大菩薩御書説、此くりやうはその月の星を朔日として月の順にくるゝとくるべし、半月半日重月重日吉日なり釋尊祖師佛誕佛滅其日にあたるを以て信すべし

天地威勢日	○	正七	六	五	四	三	二
福報變日	●	二	二八	六	五	四	三
輕重吉日	○	三	二	三九	六	五	四
佛滅日	●	四	五十三	二	三	四	五
佛誕生日	○	五	四	三	八二	五	六
法滅日	●	六	五	四	三	二	六

三好家説、軍中日用毎月善惡ノ日ヲ知傳ハ大江匡房卿ヨリ八幡殿ニ傳授アリケルヲ新羅三郎殿御相傳アリテ終ニ當家ニ傳來スル處ナリ可秘云々

○帝	正七ノ朔	二	三	四	五	六	六
①絶	二	三	四	五	六	六	六

●生	三	四	五	六	五	二
●死	四	五	六	十	四	三
●臣	五	六	九	二	三	四
●驚	六	八	二	三	四	五

○六具 運歩色葉。母衣、胡籙、挾拾、弓矢、旗、扇、或書、弦卷、繡袋、燧袋、扇、箭立硯、帖昏、或除氣、和漢名數。鎧六具、甲、冑、頰當、鐔、佩、脚當、一説。甲、冑、鐔、半首、臙當、佩、身堅、六具、鉢卷、忍緒、上帶、繰紋緒、扣緒、腰當緒、大將の六具は、鎧、太刀、采幣、鞭、團扇、扇、備の六具は、幕、旗、牀几、楯、具、太鼓、隨兵次第。よろひ直垂、よろひ、刀、上帶、太刀、胡籙、またはよろひ直垂、よろひ、刀太刀、弓箭、鞭、つなぬき、あるひは、敷皮、はり替弓、太刀持、甲持、床几持、弓袋さし

○六十賀
拾遺和歌集、延長四年八月十四日民部

卿清貫が六十賀中納言恒佐が妻しはべりける時の屏風にかくらす所のうた、つらゆき、あし引の山のさかき葉ときはなるかげにさかゆる神のきねかな」

於內殿^一以賀^二滿六十之齡^一有^二衣被寶物之贈^一每色叶^二

於六數一と諡す、染殿ノ大臣なり、諱は良房忠仁公、清和天皇の外祖父也。

○六曜日どり
賀茂家青表帟云、黃石公ヨリ張良

ニ傳フル處軍配目取口傳トアリ

○正七 大安	○二八 立連	○三九 即吉	○四十 勝吉	○五十二 虛妄	○六十二 勝テ再度マケズ
朔	朔	朔	朔	朔	
二●立連	二●即吉	二●赤口	二●勝吉	二●虛妄	朝負テタニ勝
三○即吉	三●赤口	三●勝吉	三●虛妄	三○大安	夜中マテ大吉
四●赤口	四●勝吉	四●虛妄	四●大安	四●立連	來テ待ツ吉シ掛ル凶

○周吉日	十一月八朔日也	二日 虛妄	三日 安泰	四日 連流
○虛妄日	十二月八朔日也	二日 安泰	三日 連流	四日 吉則

六	○ 虛妄	五	○ 勝吉
六	○ 大安	五	● 虛妄
六	● 立連	五	○ 大安
六	○ 卽吉	五	● 立連
六	● 赤日	五	○ 卽吉
六	○ 勝吉	五	● 赤日
	守ル吉進ハ凶		進討ニ吉

七日十三日十九日廿五日ハ皆朔日ノ日取ヘ立歸ル也
晴明流秘傳旅立日取、此ノ日撰法ハ安倍晴明朝臣之秘
傳千金莫_レ傳萬代不易良法也可_レ嚴秘

○當寶日	正	七	朔	六	五	四	三	二	大上吉日
●相孤日	二	八	二	朔	六	五	四	三	終日凶禍
○金動日	三	九	三	二	朔	六	五	四	終日安平
○春陽日	四	十	四	三	二	朔	六	五	朝暮大安
○寶相日	五	十一	五	四	三	二	朔	六	萬事無凝
●動虛日	六	十二	六	五	四	三	二	朔	動靜虛妄

白井家傳赤松家臣永祿年中の人なり 白井豊後入道相傳六曜の日撰
は張子房より淮陰侯韓信に傳はり韓信より皇朝の勇士に夢中に相傳せし秘訣なり

五日吉	五日則吉
六日吉	六日赤口
七日妄	七日周吉
とくる也	とくる也

臨濟子孫不知得
狂雲面前誰說禪
三十年來肩重
一人荷擔松源禪

禪玄開基宗辯

禪人國系陋質

需積語書以塞其

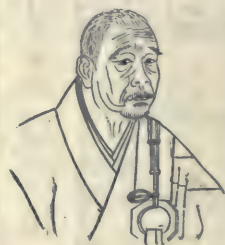
請云

前紫野大德禪

寺



天下老和尚



右壽像自贊は和尙の眞蹟たり
詞はそのまゝに摸寫す

長元年は三十五歳の時なり、
和尙は大德寺四十七世に當れ
ば正長の頃はいまだ所化の時
なり、かつ後小松院の皇子な
れば稱光院より七歳の兄君に
おはします

但像は全身なるを紙中狹
き故に面描のみ書寫す 贊

柳菴隨筆以字篇第一終

ノ界ナル舟坂山ノ峠ニ隠レ伏シ今ヤノト待タリケル臨幸餘リニ遅カリケレバ人ヲ走ラカシテ是ヲ見スルニ警固ノ武士山陽道ヲ經ズ播磨ノ今宿ヨリ山陰道ニカ、リ遷幸ヲナシ奉リケル間高德ガ支度相違シテ



ケリサラバ美作ノ杉坂コソ究竟ノ深山ナレ爰ニテ待奉ン三石ノ山ヨリ筋違ニ道モナキ山ノ雲ヲ凌テ杉坂へ着タリケレバ主上ハヤ院ノ庄ヘ入ラセ給ヒヌト申ケル間力ナク是ヨリ散々ニ成ケルガセメテモ此所存ヲ上聞ニ達セバヤト思ケル間君ノ御座アル宿ノ庭ニ

大キナル櫻ノ木有ケルヲ押削テ大文字ニ一句ノ詩ヲヅ書付タリケル天莫^レ空^レ勾踐^レ時非^レ無^レ范蠡^レ云々
○一休和尚の歌「天の澤東の海をわたりきてのちの小松の梢とぞなる」天の澤は徑山虚堂智愚和尚の事にて一休は虚堂の後身といふなり

●道場運菴普岩——虚堂——建長寺南浦紹明——大徳寺宗峯妙超——

「徹翁義亭——言外宗忠——華叟宗曇——一休宗純

後の小松とは後小松院の御子たる意なり、南朝紀傳、正長元年秋七月二十日帝崩御^{稱光}御とし^{後小松}一説には太子おはしまさずこれにより公卿僉儀あり院の仰には大徳寺にまします一休和尚に問はしめ緯を極むべしとなり、此人は世に並びなき名僧なりことには仙洞の皇子なりといへども賤しき腹に生れさせ給ふにより人臣の養子として僧となし給ふとなり、此旨を一休に院宣ありけるに和尚、「ときは木や木守の梢つきすてよ世をつぐ竹の末はふしみに、と一首の歌を詠じて奉り賜ふ、仙洞これを覧ありて此歌の心にまかせ伏見どの、御子十にならせたまふを御養君として入内あり、今考に一休和尚は應永元年に誕生なれば正

○伊勢の濱萩 伊豆志稿、「草の名も處によりてかはりけり伊勢の生芽は伊豆のはじかみ」と白濱明神の神主よりよみて北條早雲へはじかみを奉りしとなり或は早雲入道の歌共又東浦の手に入りしとき早雲入道、神風や伊勢の濱萩あふぎ來て今の手にとる伊豆のはじかみ

○井中の流水 長安志、景公寺前街中舊有「巨井」俗呼爲「八角井」、元和中公有公主夏中過、見「百姓方汲」令「從婢」以「銀稜梳」就「井」取水、誤墜「梳」經「月餘」出「於渭河」今聞東叡山中何の院の井とか流水なりときけり、何處にもあることか

○衣装法度 百練抄、保延六年四月十八日於「別當宗能門前」檢非違使等破「裂關白隨身左近府生武正衣裳」、御祓日忘「制法」着「美服」之故也「元史」、至元三年定「服色器皿與馬之制」時習師上下無「別帝初禁」民間服「麒麟鳳白兔靈芝對角五爪龍八龍九龍萬壽字錦黃等服」至是復認定「制」宗五大草紙、總じて無紋の小袖は殿中へは着候はず候入道はくるしからず候、白き絹のあはせ本なり、但公方様めされ候間斟酌あるべしと申候、紫のあはせは御禁制にてなく候へ其奉公の人は斟酌のやうに候、紫裏の小袖同前、公方様御服はいづれも

紫の御裏付候間その憚にて候、またかうまきひやうもんは御禁制なり是は一段はれのときせられべきためなり、八月朔日よりあつきすはうにて候當時すきは御免の御禮など申入られて年中めし候事珍しき由伊勢貞宗金仙寺宣ひ候し又もちきゆみはかりそめにも殿中へは着候はず候、はなち十徳は御禁制の内なり「伊勢貞順豹文書、ひやうもんを不斷は御禁制なり、帶の事さのみ廣きをば御沙汰候まじく候昔は六つわりの帶を被用候つる慈照院殿様の御代より被相留候間人によらざる義歟、紫裏の事御禁制の御沙汰はな候但下々の人は斟酌にて可然候、織物の小袖の事唯の人は着まじく候、公方様より拜領仕候へば勿論着申候りうんに着候事いかゞ三管領其外の大名等へは御免にて御用候」元和元七月、白綾小袖、紫袷、紫裏、練、無紋小袖、無「御免」無「用」

○院ノ庄碑 貞享五年秋七月己亥作陽執事長尾隼人源勝明石を立て備後三郎高德の舊跡を標識せしとなり「太平記、其頃備前國ニ兒島備後三郎高德ト云者アリ主上隱岐國へ移サレサセ給フト聞テイザヤ臨幸ノ路次ニ參リ會ヒ君ヲ奪取奉テ云々備後ト播磨ト

二	三十五		
三	三十六		
寶曆	三十七		
二	三十八		
三	三十九		
四	四十		
五	四十一		
六	四十二		
七	十三養貞 敦爲子 四十三	貞敦竹中周防守定矩(二千 三百三十石三男也俗稱登	
八	四十四		
九	三貞敦 受病 四十五		
十	四十六		
十一	四十七		
十二	四十八		
十三	四十九		
明和	五十	二月十一日結記を按す	
二	五十一		
三	五十二		

四	五十三		
五	二十五貞敦 病身辭病 五十四		
六	五十五		
七	五十六		
八	五十七		
安永	五十八		
二	五十九	保侶説辨の餘説一帖	
三	六十	二月二十七日新井邦孝藏本後三 年軍の繪を安藤定熙に寫さしむ	
四	六十一		
五	六十二	板谷慶舟藏本後三年 軍の繪を借て校合す	
六	六十三		
七	六十四		
八	六十五	八月十六日種蒔の繪の記を述	
九	六十六	鐙着用次第の奥に安永九年庚子五 月六日伊勢平藏貞丈書す時六十四歳	
天明	七十四 貞敦歿	七月院號を辭するの狀	
二	六十八	八月多賀氏の爲に蛇欄陀縁 起を述 平藏寺安高和尚書	
三	六十九		
四	七十	六月五日没 實年六十八歳	

伊勢貞丈年表 同時の諸家を下に駢列して著述の書の考勘に備ふ

正徳 五	生	官年は幼名萬助 月日誕生	新井筑後 守五十九	荻生茂卿 なるべし 二習に書あり 太宰純 一冊
享保元		二		五十一
二	實は此年誕生なり	三		五十二
三		四		五十三
四		五		五十四
五		六		五十五
六		七		五十六
七		八		五十七
八		九		五十八
九		十		五十九
十	父貞益没 兄貞陳繼 兄貞陳繼 新賜三百石	十一 五月十九日卒		六十
十一				六十一
十二				六十二
十三				六十三
十四				六十四
十五				六十五
十六				六十六
十七				六十七
十八				六十八
十九				六十九
二十				七十
二十一				七十一
二十二				七十二
二十三				七十三
二十四				七十四
二十五				七十五
二十六				七十六
二十七				七十七
二十八				七十八
二十九				七十九
三十				八十
三十一				八十一
三十二				八十二
三十三				八十三
三十四				八十四
三十五				八十五
三十六				八十六
三十七				八十七
三十八				八十八
三十九				八十九
四十				九十
四十一				九十一
四十二				九十二
四十三				九十三
四十四				九十四
四十五				九十五
四十六				九十六
四十七				九十七
四十八				九十八
四十九				九十九
五十				百

十六	十七	十八	十九	二十	元文	二	三	四	五	寛保	二	三	延享	二	三	三十一	三十二	三十三	三十四	寛延
十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七
五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二

伊勢貞丈肖像



伊勢貞春肖像



著述目錄。伊勢貞丈號安齋 肖像辨冊一 愚得隨筆附考

三冊 武器考證二冊 軍器考頭書 同標疑 同補正評

同考餘評 同圖式補 馭馬故實評 武林原始頭書

源家八領鑑考 古鎧色目 鎧具足辨 鎧直垂色目

甲冑威毛色目 甲冑名考 柁檀鳩尾問答 寶劍寶鑑

記 刀劍問答 諸鞍日記考證 鞍鐙工記 鞍具鏡類

記 五六掛鑑考 鎧類聚 烏帽子考 古代折烏帽子

圖 保侶衣推考 調度懸問答 空穗考 尻籠考 源

平盛衰記聞書 松嶋日記註 鳴弦墓目攷鐘三種神器

考 位記口宣記 齋宮齋院記 禁色考 姓氏辨附說

驛路鈴攷 新甲問答 今昔物語聞書 赤鳥記 額額

漫錄 三木三鳥考 長烏帽子 洗革 葵作 後院

位袍 舳艫訓 日蔭之鬘 武藏鑑△印爲三隨筆十四卷一 ましな

れ 田樂考 二見浦 幼學問答 輶考 鳥柴攷 春

草 夏草 秋草 冬草 革類考 綾文考 細長考

環甲圖說 女齋隨草十五冊 神道獨語 平藏器談二冊 要

訓 射法妄說集 武門故實百ケ條評五冊 解嘲百ケ條

評 舊事記剝偽 神代卷獨見 五武器談 鎧色談

武備根元冊一 三儀一統考 烏帽子折問答 安閑記錯

簡考冊一 尉士五篇解 比那問答 源氏物語ひとりご

ち 狩衣考 平禮攷 引剝考 脇指攷 飭劔木也攷

矢羽文考 直垂折附錄 鎧着用次第 正三記 和字

衆說 俗說辨 母衣說辨 蝦夷鍬先攷 呵說 軍職

志 軍神問答 飭馬書問答 笠懸墓目問答 押字攷

三社託宣攷 道風像攷 逆頰簾攷 辨慶七道具攷

乘物攷 煙草集說 錢儀兵的辨 鐘鞍記 求身抄

和歌三神考 二上峯 小車錦 火打袋 非參儀四位

難說問答 同後篇 諸篇拔萃 考說 漫筆 安高問

答 あるまし 百敷草拾遺 五代圖略 大祓詞解

勢語臆斷別勘 世繼物語考 徒然草大意 今川壁書

解 武具要說解 見聞私記辨偽 南嶺子評 南嶺遺

稿評 秋齋閑語評 結ノ記 成氏年中行事頭書 飭

抄頭書 座右書冊七 犬追物土代 騎射三物考

伊勢貞丈先生菩提所大養寺え被指越候一通

拙者死去候節追號の事院號居士號等長き稱號堅御無
用に候唯何と成共二字名御付可被成候殊に寺號院號
は攝政關白將軍家等其寺院を建立被成候に依て其寺
院の號を稱し候事に候假令寺院建立せられずとも其
寺院建立せらるべき程の高貴の人には寺院の號を稱
し候是故實にて候我等如きの賤き武士の身として院
號稱し候事かたはらいたく候依之右之段申入置候
高からぬ身には恥かし人並に我無跡の長き名のり
は

天明元年七月十九日 伊勢平藏貞丈自書

あ

右は此度貞丈養子心齋病死にて西久保淨土宗大養寺
へ送葬て貞丈嫡孫家祖萬助貞春度々寺詣有之序に此
一通を萬助持參せしめて大養寺和尚へ呈せられしと
なり寔に理りせめたること共貞丈の趣意感慨のあま
りこゝに寫して賞翫することしかり

天明元_{丑辛}年七月二十七日 多賀中原常政誌

無名氏筆記、伊勢家春日局に由縁あることは

齋藤龍興女

五 伊勢貞良妻

伊勢貞爲

六

岸和泉守章憲妻

女春日局

岸は近江岸村
城主堅田近處也

女貞衡

貞保元、四、二十八
春日局依願被召出

または

明智光秀

女貞良妻

利光佐渡守伊豆守立本

光秀妹なり

女利三妻

女春日局

女

齋藤利三

三存

女貞爲妻 貞衡

柳營婦女傳、春日局之傳

齋藤兵衛尉伊豆守

内藏助

佐渡守

某伊織

某

利三

立本入道

某市正

利光

幸宣町野臺岐守

稻葉佐渡

女

守正成妻

正勝

春日局

正利

助右衛門

三友

某角右衛門

飛禪守

伊勢兵庫貞爲妻

貞衡伊勢兵庫

此系圖によれば伊勢貞
衡は齋藤内藏助利三の甥
外孫にして春日局の甥
に當り稻葉丹後守正勝
と從弟の續たり

仕候京都武者小路梅屋町屋敷跡少々所持仕候旨言
上仕候處太刀并甲上覽被遊蒙御感之上意候右御用
掛り大久保長門守殿にて御座候享保十_巳年十一月
十三日病死仕候
有徳院様御代

一 生國武藏 父伊勢兵庫貞益惣領伊勢政之丞貞陣

有徳院様御代享保十_巳年十二月二十三日父兵庫跡
式無相違被下置寄合に被仰付候繼目の御禮不仕候
同十一_丙年六月十五日幼少にて病死仕候

右之通相違無御座候

安永三_甲年十月 伊勢平藏貞丈判

淺野備前守殿

植村隼人殿

今般伊勢貞丈雅丈卒あり有故伊勢家先祖書文言草案
之儀伊勢貞春の頼に依て大久保忠寄被整之刻予密か
に書面を寫置處如此 于時天明四_甲辰年六月十八日
多賀常政誌

通人の説、いにしへ久米の仙人常に雲にのりて飛行
したりしに一日美女の川の流に臨て衣を洗ふに其脛
の白く清らかなるを見て情を動し忽に通を失ひ雲中

より轉落てかの女に告情^{クドキ}て遂に夫婦になれり、仙人
かの失ふ處の通を尋ね求めども行方を知らずせんか
たなく其儘にさし置しが彼通久しく深山に隠れ留り
其精凝結て化て惡鬼となる名付て通鬼といふ、此通
鬼近年世に走り出て少年に魅托て病しむその病症心
魂狂亂して人事を顧みず好色淫亂を專として花奢風
流を事とす高慢甚しくして人を人とも思はず頭髮衣
服言語に至迄常人に大に異なり是皆彼通鬼の所爲な
り此病を受たる人を名付て通人と云其尤甚しき物を
大通と云此病を治せんとするに醫藥も益なく祈禱も
驗なし病人遂に逐電し化して雲助となる好色に依て
身を落すことは彼仙人空より落し因なり又雲助とな
ることも彼仙人の雲にのりし縁なるぞ嗚呼おそるべ
し

かの通鬼を防ぐまじなひの歌

道樂の遊びに通を得たれども世の營に不通人かな

また 前大通人雲助の朝臣

久堅の雲助となり思ひしる兼ての通は不通なりき
と

天明二年寅正月はつ春の日戲草に記之銀郷散人

伊勢氏先祖書

平姓 伊勢氏 本國伊勢
家紋向蝶

御小性祖淺
野備前守組 伊勢平藏貞丈

大猷院樣
嚴有院樣
常憲院樣 御代

一高祖父 生國相知不申候

桓武天皇六代鎮守府將
軍平貞盛二十五代之孫 伊勢兵庫貞衡

先祖代々京都將軍え奉公仕候光源院義輝將軍沒落
以後右貞衡父伊勢兵庫頭貞爲より浪人にて罷在候
所右貞衡儀大猷院樣御代伯母春日局依願被召出寄
合被仰付御藏米千俵被下置候年月相知不申候

同御代千代姫君樣御入興之節御規式御用被仰付家
流を以て相勤申候

常憲院樣御代鶴姫樣御入興之節御規式御用被仰付
以家流相勤申候其後家傳之書籍御用に付百餘卷寫
之差上申候年月等は相知不申候元祿二己巳年十一月
七日病死仕候

常憲院樣御代

一曾祖父 生國武藏

父伊勢兵
庫貞衡 伊勢兵庫貞守

常憲院樣御代元祿三庚午年父兵庫跡式無相違被下置
寄合に被仰付候月日相知不申候元祿十一戊寅年七月

九日御藏米千俵を地方に直し被下置候寶永二乙酉年
閏四月十二日病死仕候

常憲院樣
文昭院樣 御代

一祖父 生國武藏 父伊勢兵庫貞守 伊勢兵庫貞長

常憲院樣御代寶永二酉乙酉年七月十二日父兵庫跡式無
相違被下置寄合に被仰付同年三月二十八日繼目御
禮仕候寶永七庚寅年三月二十三日病死仕候

文昭院樣
有章院樣
有德院樣 御代

一父 生國武藏 實父伊勢兵庫貞守二男
養父伊勢兵庫貞長 伊勢兵庫貞益

文昭院樣御代寶永七庚寅年六月二十三日養父兵庫跡
式無相違被下置寄合に被仰付候同年七月十一日繼
目御禮仕候

有德院樣御代享保二丁酉年同三戊戌年家流の書籍上覽
被遊同四己亥年家流の書籍二十七卷御用に付書寫之

大久保長門守殿を以指上之爲御褒美時服頂戴仕候
同六辛亥年同七寅寅年武家故實の儀共度々御尋被遊候
に付以家流之儀言上仕候且又私家に付驗有之物御

尋被遊候に付先祖貞盛より傳來仕候小烏丸の太刀
并將軍義輝より賜候甲且又京都將軍時代先祖居住

一本、貞衡自筆の本と云

上署

貞宗

賴俊

盛經

俊經

教經

盛久

盛秀

盛信

俊繼

賴繼

宗貞

盛繼

貞繼

貞冬

貞信

伊勢守
貞行

伊勢守
貞長

貞國

貞經

勢元

貞知

貞親

貞宗

女今川義
元室

新九郎
貞辰

早雲

貞隆

貞遠

貞滿

貞俊

貞藤

貞職

女武田勝頼妻

女武田五郎妻

貞仍

貞運
仕小田原

貞明

貞忠

貞孝

貞良

貞爲

貞衡

貞守

三郎
貞興

薩州有川雅樂助
貞眞

貞昌

貞高

貞時

又一本、傍流は上に同じきものみな省く

上署

貞行

貞國

貞親

貞宗

貞陸

貞忠

貞孝

貞長

備中守入
耶左衛門
盛經

肥前守
教經

心光因幡守
經久

備中守
盛經

野宮彌八郎
盛景
兵庫助彌太郎
景俊

遠江守太
郎左衛門

經秀

左衛門尉
盛行

盛信 平三
平九郎左衛門
盛長
信濃守

下總守左衛門

伊勢守
貞行

伊勢守
貞經

伊勢守
貞宗

伊勢守
貞陸
貞忠

伊勢守
貞孝

伊勢守
貞良

貞爲

伊勢守
貞國
伊勢守
貞親

女今川義元室
新九郎
貞辰

貞遠
貞助
貞俊

仁木兵部少
貞知

貞藤

女武田勝賴妻
女武田五郎妻
貞仍北小路山城守

勘解由左衛門
七郎因幡守
貞長
鞍作家祖

因幡守
貞直

因幡守
貞仲

因幡守
貞誠

因幡守
貞泰

六郎左衛門
貞順

下總守
貞房

貞牧

宗五六郎左衛門
貞賴收仍

貞重

貞隆

駿河守
貞雅

貞彌

貞熙

貞遠

十郎左衛門
貞清

上野介
貞安

彌九郎
貞祐

與一
貞弘

貞則

貞末

禪慶
貞信三男

與左衛門

貞忠

貞高

貞均

東鑑、寛元四年十一月十四日御演出犬追物事今年可ニ延引之由被_ニ仰出_一 此外ニモア 太平記、島津安藝前司云云多年稽古ノ犬笠掛今ノ用ニ立ズバ何ヲカ期スベシ云々島津元ヨリ物ナレタル馬上ノ達者矢ツギ早ノ手キ、ナレバ少モ騷ガズ、田中進デカ、レバ相ノ鞭ヲ打テ押モシリニハタト射ル、田中馬手へ回レバ弓手ヲコシテ丁ト射ル」軍陣聞書、馬上にて弓を持やうのこと、犬笠を射ときの如く可持、たいし弦を内へなして持事もあり」伊勢貞泰記、物射の鞍として木とおのづから定りあり、それも前武州泰時の定させられし寸法として先師道禪入道の傳へられし處なれば前

代の物に、是に逢たるかねのもの間々あるなり」江府名跡志、犬追物の地城官寺の邊と云奉行は朽木民部少輔殿種綱のよし、その時寄附の石燈籠として明神に有、紫一本、正保四丁亥十一月十三日松平薩摩守光久朝臣犬追物を上覽に傳られし所有、その馬場東西四十三間南北四十間也四尺五寸の竹にて埒をゆひ傍に大繩小繩狗塚口などいひてさま／＼作法あること也とぞ、御日記、正保三年四月七日松平薩摩守宅にて犬追物興行爲見物老中酒井讃岐守堀田加賀守被相越候○伊勢氏系圖 數本あり何れも出入互にありて是非を不可知者多し今伊勢貞爲自筆の本によれば如左

平將軍

●貞盛

維衡

正度

下總守
季衡

右京少進
盛光

右兵衛尉
盛行

正衡—正盛—忠盛—清盛

兵庫頭
盛長

兵庫頭伊勢守
賴宗

兵庫頭
賴俊

肥前守
俊經

伊勢守
俊繼

八郎左衛門
盛繼

仕足利義兼

自是稱伊勢氏

禪勝

彈正少弼
賴繼

伊勢守
貞繼

從五位上侍從 政所 御所奉行
廣禪寺友峯照禪

照本

貞繼

伊勢守
貞信

太郎左衛門

宗貞

孫七郎
貞冬

大坪道禪者鎌倉之人也、能作馬鞍人呼良工、此時貞繼自道禪傳妙工、亦能作鞍以鳴世

如此七返射テ終ケレバ中ノ射手下ノ射手前ニ同ジ唯
是兩介ガ那須ノ狩ノ行粧モ今此時カトユ、シカリシ
形勢也」齋藤親基日記、寛正六年八月二十二日右京
兆馬場御成在之日野殿御參、御臺様同御成也、有ニ犬
追物、當御代犬御成始也御棧敷計儀也、御相伴大名大
路參侯、一色左京兆義直不參、但犬日記次第依有不定
俄作病云々

犬追者射手組事

粟毛 管領 七正 政長

畠山左衛門佐 六正 義就

一色兵部少輔 七正 義直

青毛 山名彈正少弼 十二正 政豐

細川淡路守 五正 成春

鹿毛 右京大夫 十正 勝元

檢見

小笠原備前守 持清

寛正六年八月二十二日

管領 四正

山名彈正少弼 十四正

鹿毛 治部大輔 九正 義廉

土岐美濃守 四正 成賴

伊勢守 八正 貞親

伊勢備前守 十六正 貞藤

伊勢兵庫助 八正

細川讚岐守 九正

喚次

鹿毛持清息 小笠原民部少輔 政清

細川讚岐守 六正

伊勢守 六正

細川下野入道 四正 常忻 伊勢備中守 十一正
土岐美濃守 八正 伊勢兵庫助 十正

小笠原民部少輔 十正 小笠原美濃入道 十正 宗元

山名右衛門督入道 八正 宗全 畠山左衛門佐 十三正

檢見

右京大夫

寛正六年八月二十二日

粟毛 喚次 小笠原備前守

宗五大草紙、常徳院殿御代に犬追物さいく御座候
つる花御所七間御厩の前のせばき御庭に繩をひかせ
られて御稽古候ひし内々御人數藤中納言殿金仙寺貞
宗同故勢州貞陸 小笠原民部少輔殿伊勢因幡守殿 其後
亮 小笠原刑部少輔殿 八郎某子時次郎 堀和右京次郎 其後
金仙寺御所にて千疋など御座候つる其時は大名御供
衆以下御手輕に被參候つる人の内衆には細川殿御内
衆秋庭備中守元重 奈良備前守多賀豐後守高忠めして
はらべれ候し、豊後は度々檢見などを仕候つる弓馬
の冥加面目たぐひなき事候又御千疋の時に布施下野
守めしくはへられ申候」
犬追物屏風 土佐刑部大輔光茂筆

彼三國ハ日本ヨリ成ノ方ニ當リヌレバ彼國ノ敵ヲバ皆犬ト呼ナセリ是由緒ナキニモ非ズ、亦皇后新羅ニ討入り給ヒ弓筈ヲ以テ新羅國ノ大王ハ日本ノ犬ナリト書給ヘバ其字破レモ未^レ盡^レ是以武家弓馬ノ政ヲ犬追物ト云ヘリ、其後久壽元年ニ當テ近衛院ノ御惱云々^{玉藻前の一節全く簾篋の妙なり、今省く}永祿三年三月三日桃源ノ祝詞畢テ後大樹犬追物ヲ興行シ給ヒケル、先御所内東西四十二間南北四十間ノ屯ニ南十二間ヲ馬場トシ竹ヲ以テ埒ヲ結ヒ其高四尺五寸也埒ノ中央四方十八間ニ五色ノ眞砂ヲ蒔散シ是ヲ馬ヲ立ル榜示トス其中央ニ長十八尋ノ繩ヲ以テ方五間ノ圍ヲナス是ヲ大繩ト云リ亦圍ノ中ニ五尋ノ繩ヲ以圍ヲ作ヲ小繩トシ坤ノ方ニ犬塚ノ戸ヲ開キ異ニハ物懸ノ口ナリ艮角ニ日記ノ役所ヲ構ヘ種々ノ器物ヲ數置五色ノ餅ヲ備金銀ノ作華ヲ飾リ弓箭ノ七德ヲ被^レ祭タリ大樹ノ御座間ニハ近衛准后^{輔家}日野大納言晴光卿^{以下六人名畧ス}上野民部大輔信孝馬場ヲ警衛シ烏帽子素袍太刀帶テ埒ノ外ニ蹲ル次ニ喚次渡邊宮内少輔繼檢見役小笠原彈正少弼埒外ニ下馬シテ巽門戸ヨリ立入榜示ノ際ニ跪キ大將軍ニ向テ禮ヲナス、次ニ墨頭ノ童十二人肩作リ金付矢對

ノ役トシ才配取テ立並、次ニ犬懸ノ者八人埒内四隅ニ立チ竹杖撞テゾ侍リケル其後上中下ノ射手三十六騎埒外ニ下馬シ主殿ヲ拜禮巽坤ノ二方立分レテ十八騎相對ス、其裝束皆鬘ノ馬ニ乘烏帽子素袍ヲ着シ細刀ヲ差一樣ノ弓籠手シテ左ヲ袒總角高ク結ビ夏鹿ノ行騰ニ思々ノ沓ヲハキ滋藤ノ弓ニ墓目ヲ取添テゾ出ニケル、檢見喚次進出ヤ否、上手ノ射手十二人戮^{カケ}出タリ其人々ハ結城左近將監、飯川能登守、小林五郎、安東平次郎、伊勢備中守、能勢彌太郎、三淵掃部頭、彦部雅樂頭、多羅尾與五郎、高和泉守、蜷川式部少輔、伊勢伊勢守貞孝、其外矢取籠各同裝束シテ魏々トス、角^{カク}テ檢見馬ヲ進シカバ此時十二騎ノ射手一番ニ乗出タルハ二番ヲ相手トシ大繩ノ北ニ馬ヲ立、三番ハ四番ヲ相手トシ是亦大繩ノ南ニ轡ヲ扣テ列ス、是陰陽ヲ分ル例式也于時檢見役人馬ヨリ下立北面シテ弓箭ノ咒文ヲ唱軍政ノ儀式ヲナス、射手亦下馬シ敬禮シ乘馬發歸ス、檢見馬上ニテ策ヲ以テ差テ御犬ヤ有ト呼ケレバ犬放チ是ニ候トテ犬一疋小繩ノ中ヘ追入タリ、射手馬ノ頭ヲ立直^テ直^シ追廻リ馳達テ是ヲ射、矢對ノ童子幣ヲ振上中ル所ノ矢數記錄所ニテ記^レ之、

康勝三人共任官年月しれず、

眞蹟

柳教おとよ上うへ書身別

印の大一寸五分

海うみのなみだるる為ため跡あと

金子かねこ十じゅう數すう 鑄な二に當あたのの印いん

頂たか裁ざいははちちりり 妙めう妙めう

柔な花はな抄しやう提てい振しん

ケミ

柔な花はな二に抄しやう提てい振しんハ實じつニ
寛永三年丙寅えいへい三年みづのえ

かきとり

ほものりれ
なよ



○板花檢校 板花譜、板花檢校喜津一は寶永六年

十月十五日はじめて御目見、十一月朔日御針醫奥醫

師格、享保元年十二月十六日二百俵被下、同六年六月

十九日没行年七十歳麻布本光寺に葬る、其子友之進

昌教義子なり御奉行して終に御勘定吟味役になさる、其

子友之進は大御番其の子安次郎は小十人その子はま

た大御番その子松三郎昌同アツなり」福田譜、武田信虎

に仕へし福田左衛門、のちに北條に従ひ上野國板鼻

に住す、その子左門某その子左衛門後に左門と云喜

津一が父なり

○岩松檢校 高橋譜、大御番高橋勘左衛門高二百石

岩船檢校城仙が子なり云々相番と喧嘩して家斷」檢

校記録、岩船檢校城仙は山川城官が弟子寛永十四年

五月檢校、貞享四年七月京にて没

○茨木檢校 御日記、寛文十年七月二十七日日本多

内記家來内記政勝ななるるし 檢校被爲召之西後刻御黒書院出御

平家被仰付之一月見信つら 右平家被仰付戌後刻

終、八月二日及暮於御座之間いばらき檢校、平家

文覺荒行勸進帳被仰付之、十一日及暮於御座の間

いばらき檢校平家二段土佐房す、き被仰付事畢て退

去、以後於三大納戸前銀拾枚時服二領被下之松平民

部少輔致之

○犬追物 後太平記、前大樹慈照院義政稱殿東山殿寛正

六年八月興行御座テヨリ以來打絶犬追物ノ御沙汰モ

無リシカバ武器弓馬ノ政意リス、今戰世ノ代ニ當テ

ハ其太平ノ政ナルベシトテ今年新ニ是ヲ被レ行ケル、

抑此犬追物ト申ハ昔時神功皇后三韓征伐ノ御時彼三

國軍打負終ニ日本ニ降伏ス、去死連々反覆ノ謀不レ怠

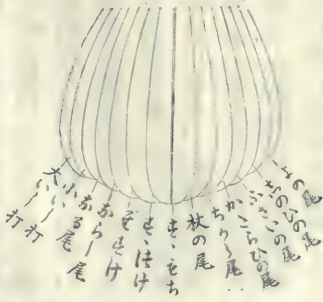
バ吾朝ニモ亦武備ヲ設テ弓馬ノ技馭斷ル間ナシ、凡

八指タル石打ノ征箭負テ云々、古郷へハ錦ヲキテ歸ルト云フコトニ侍レバ、今度生國ノ下向ニ錦ノ直垂ニ石打ノ征箭御免ヲ蒙リ候ハン云々、初ハ許シ給ハザリケルガ内大臣ノ我料ニトテ秘藏セラレタリケルヲ取出テ下シ給ヘリ」石打の征箭、たやすく侍鷹の尾十二枚とあるは常なり、十三枚あるをやかた尾といふ

此圖によれば、石打と稱する尾は一羽の内に二枚より外なしといふべし、鷹にても何にてもその名はかばるべからず、たゞしすつ鈴もちなどいふは鷹にかぎれる名なり、すつつけは脇尾と云、すつもちは尾翹またはびさこばなどいふ

○いかもの作りの太刀

平治物語、信頼大ニ悦テイカ物作リノ太刀一腰ミヅカラ取出シ且ハ悦ノ初トテヒカレタリ」平家物語、紺糸威ノ腹巻ヲキ立烏帽子ニ



嘯物作ノ太刀脇ニハサンデ云々唐綾威ノ鎧キテイカ物ノ太刀ヲ帶、二十四差タルタカウスヘウノ矢負、滋藤ノ弓云々」今川大草紙、太刀にいかもの作りといふをば今の人はいらず、虎の革の尻さやをかけて足

は兵庫くさりに七足なり柄のかふと金も餘の太刀よりもこうたかなり武士の時はいくなり」樋口殿之記、元服ノ時ナド芋ノ高盛コノ如キヲ怒物ト云、飾難又ハ煮難ノコトナリ、今怒物作ノ太刀ト云ハ鞘ニ鮫ナドヲカケテ此芋ノフツツシタル體、ビヤウ又ハヅク打タヤウナル故ニイカメシキ作リト云也」梅村載筆、豹虎ノ皮ニテ鞘ヲ縫ツ、ミタルヲ怒物作ノ太刀云、駿河御所御物語ト羅山イハレシ」愚得隨筆、大ノ字ヲ古言ニイカト訓ズレバ大物作ト書ベキナリ、多キコトヲイカイコト、大キナルモノヲイカイモノト今モ云コトナリ」伊勢貞丈説、又嘯物作トモ書也云々イカモノ作ト云ハイカメシク見ユル故也、太平記劔ノ卷山法師ノ狂歌ニ、奈良法師栗葉粉山マデシブリキテイカ物ノ具ヲムキヅ取ル、此イカモノノグト云モイカメシゲナル物具ト云コトナリ、イカ物作リノイカモ右ノイカ物具ノイカト同意ナリ、大ノ字ヲイカトヨムコト、古書ニカツテ見ザルコトナリ」古事記、殿イカシ

○石川玄蕃頭康長 石川譜、石川安藝守清兼の孫に伯耆守康正後出雲守、その子玄蕃頭康長、その弟肥後守

安置、凡厥體像髣髴丈夫、頭上加冠鬢邊垂纓、以丹塗身成緋袵色、起居不同遞各異貌、或所作女形、對丈夫而立、臍下腰底刻綸陰陽、搆几案於其前、置坏器於其上、兒童猥雜拜禮慇懃、捧幣帛或供香花、號曰岐神、又稱御靈、未知何祥、時人奇之、伊呂波字類抄。溫泉三和社攝津國有馬郡坐造陰形、置社邊事、古老云參詣之輩先造件物形、置社頭是定習也、溫明神令受婦女姿給云々、近則故入道太政大臣雅口被參詣時、造置件形之條尤不得止事也、隨見取棄畢、其後令有夢告、如元被造畢、按入道太政大臣雅實公なるべし、六條右大臣顯房公の御子也、大治二年二月十五日六十九歳にて薨金川瑣記、李心衡撰夷號湘帆地多喇嘛寺、塑釋迦像、一如中士、多至千百、皆青面藍身作男女交媾狀、機振隨手展動不穿寸縷、或立或坐醜態萬端云々耳袋、出羽國に金精大明神として石にて陰形を作りて祭る處あり云々出羽ばかりにありす、金精大明神處

○いなか間

九院佛閣抄、延曆寺在近江國志賀郡

比叡峯、寺大界地三十六町周山四方各六里、示云此一里一町、以六町爲一里也、已上王城山門田舍三十六丈爲一町也、

按に京の町は一町三十六丈、路幅四丈を加へて四十丈を一町とし、田舎は路は四丈を加へざるなり

○いりあや 散木奇歌集、ほとゝぎす二村山を尋ねみん入綾の聲やけふはまさると源氏物語紅葉入綾のほどそゝろさむく此世のこと、も覺えず河海抄、舞有取綾手、故云入綾、舞人の樂屋へ入時にする○一寸先はやみ 瓢簞町記寛文甲辰終夜語淨瑠璃不知東天白乎、浮世五十年一寸前開、人更無少時、光陰如箭文、不招人群、不畜銀集、隆達節、一寸さきはやみぬめろやれやんぬめろやれかはひのものと

○板ひき

紳書、三宅近江守清原直道が説うるし

ぬりの板に糊をひきてはるなり衣服知新集、天子御禮服云々御表袴表裏綴、(クワニアラレ)御束帶御柏小葵、堅紋、紅板引、四位以下平絹紅板引

○いりすみ 枕草紙、名おそろしきものいりづみ、こゝろもとなきもの、とみにいりすみおこすいと心もとなし一本いとひさしとあり春曙抄、煎炭、しめりを煎取し炭にや、急に炭をおこすにおこりかぬるほどの久し

く心もとなきなり

○石打の征箭

盛衰記、武藏國住人長井ノ齋藤別

當實盛ハ、赤地ノ錦ノ冑直垂ニ黒絲威ノ冑ヲキ、十

二廿、建治元七廿、華實年浪草、鞍馬寺由岐社後宇

多院延慶元五十七前左大辨宰相宣房朝臣爲奉行

被仰下云、伴神本位不詳、五條天神正治二四廿五

被奉授授正五位下一時本位不詳、以嘉祥二韓神位

記一被授授之按に當時盛衰記、百鍊抄を讀人なかりしが遺恨の事なり、盛衰記百鍊抄によれば嘉祥四年正六位上に敘せし神にても、天慶三從五位下、永保元從五位上、永治元正五位上、治承四正五位上、元暦二從四位下、建仁元從四位上、弘長元正四位下、建治元正四位上なれば、天慶元は從四位に陞り給ふべきなり

○いけばな 東華先生雜筆集 伊丹直溫字は虎卿、別號と稱し狸窟先生と云 水草の花を花入にさすに先きりて其莖に入

たるもとの水をみなしぼり出して、さて汲たての水

に花のくびきり其前々より付置翌日花入にさす如此

なれば久に堪るとなり、川骨のまき葉はみじかき其

葉先を少しつまみ切て如此にすると□□公仰られ

し」或書、梅、水仙は鹽水又は湯にてもよし芙蓉、竹、金鳳花湯沸

葵、秋葵、芍藥、萱草枝をやき、冬は海堂、折處をつみ、

薄荷水にくちなし折處をたいて、牡丹折處の皮をやき、蜜蓮泥

て生る、瓶に入てのち水なれる」翰林葫蘆集云、綉谷菴文阿彌

肖像贊、云々文阿有天然藝、凡草木之有花者有葉

者、挿之於大小瓶中、若從地而生者、無慶賀之席

無哀傷之場、各入其様、以故王侯貴戚愛重而不

已、一時ノ奇觀也

○犬のほし 愚管抄附錄、すべて末代には犬のほ

しをまもるなんどいふやうなることにて元心得ぬ妙

なり云々

○鑄物師 直繼能登守家藏藏人所判頼朝卿

藏人所 御藏民部大丞紀高弘

朝恩之事諸國鑄物師鍋釜鐵打鐵鋤等上司以下

役錢之事彌以可被全知行者也兼又於鑄物

師一者關渡悉以諸役御免除之筋目不可有相

違之由 鎌倉殿所仰候也仍執達如件

文治五年卯月十九日 時正承

或書、坊間鑄還と稱して破鑑子などを補ふ工人あり、

その職人何國へ行とても關所手形もいらす更にせわ

なき事なり、それは頼朝卿より以來右之通なりとか

や、此事を免許ありし御教書今に京都に所持の家あ

りとなり 御教書といふは右の時正の狀なるべし 著聞集、鑄物師の話一節

あり

○陰形を神社の傍に置こと 扶桑略記云、天慶二

年或記曰、近日東西兩京大小路衢、刻木作神相對

言これ一家の言「と云根源也」本草一家言は、松岡玄達作

○板文庫

勸解由小路家記、詔光卿の御好とかや、

長八寸七分幅七寸厚四分、極上島桐はしばみ入、四

方眞黒ぬり金高蒔繪菊からくさ詔光卿は烏丸光廣卿の末子、參議資忠卿の養子、寛文三年癸卯誕生、官權大納言正二位、享保十四年五月朔日薨行年六十七歳、此器實に此卿に出たるや

○稻荷の正一位 阿部家舊記。

阿部備中守正右朝臣寺社奉行の頃

藤森社司え正一位稻荷大明神と申

事天下統一統の事に候然處天慶三年

八月二十八日從一位に昇進し給ふ

事は古書に相見候正一位之事未相

見す候何年より左様申候哉と相尋被申候處社司より

追々日延願出其内一萬日の日延願に相成「經濟錄、吾

國ニテモ古ハ諸國諸祠ノ名神ニ皇朝ヨリ爵位ヲ賜ハ

ルコト三位ヨリ上ナルハ稀也、爵ヲ重シ給フ故也、

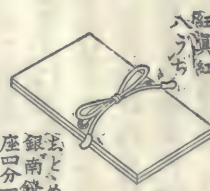
今世ハ在々所々ノ小祠或ハ都下ノ市中ニアル稻荷ノ

社ナド數ニモ不足ホドノ賤シキ神ヲ正一位ニ叙シ、

白河吉田ノ兩家ヨリ宣旨ヲ申下シテ巫祝ノ輩ニ與フ

ルコト多シ是大ニ謂レ無コトナリ、縱ヒ淫祀ニ非ル

正數神ナリトモ三品以上ノ爵ヲバ輒ク賜ハルマジキ



八寸七分
銀南鐙
座四分一

義ナリ、況ヤ狐ヲ祭り蛇ヲ祭ル類ノ淫祀ニ正一位ヲ賜ハルベシヤ、日本ノ古禮ハ三公モ生前ニ正一位ニ

陞レル人ハ稀ナリ、然ヲ今小々ノ賤シキ神ヲ正一位

ニ叙シテ大祠ノ尊キ神ヲバ如何ナル爵位ニ陞スベキ

ヤ、是國家ニ古ヲ考ル人ナキ故也、爵ヲケガストハ

此類ノコトナリ」二十二社註式、天慶三年八月二十

八日授ニ山城國稻荷神從一位頭書永治元年八月二十五日

天下諸神可レ増ニ一階ニ由宣下稻荷の正一位は永治元年よりのことなり源

平盛衰記四十元曆二年三月三日平家追討ノ御祈ニ、諸

國ノ明神ニ一階ヲ授ケ奉ラル、ノ由宣下セラレケ

リ、凡兵革ノ祈禱天下安穩ノ爲ニ諸國ノ神明ニ一階

ヲ増セラルルコト代々ノ例也、仁明天皇ノ嘉祥四年

正月ニ天下ノ諸神有位無位ヲ論ゼズ共ニ正六位上ニ

叙スト云官符ヲ下サル、ヨリ以降朱雀院ノ御宇天慶

三年正月諸國諸神一階ヲ増奉ル、白河院ノ御宇永保

元年二月同ジク一階ヲ増奉ル、崇徳院ノ御宇永治元

年七月同ジク一階ヲ増奉ル、高倉院ノ御宇治承四年

十二月同ジク一階ヲ増奉ル、依テ今度モカヤウニ被

レ行ケリ」百鍊抄、永保元を載せず、永治元八廿五、治

承四を載せず、元曆二三四、建仁元二十三、弘長元

●戸田清元——伊藤影久

一刀流
次郎右衛門
小野忠明

溝口新五左衛門

杉浦與三兵衛
溝口源三郎
森間清

正備月吏

唯心一刀流
古藤田唯心
勘解由左衛門
仁右衛門
古藤田俊重
卜齋

古藤田俊定
仁右衛門
杉浦半左衛門正景

杉浦三右衛門
正備月吏

杉浦三右衛門
松本茂雅
松本茂清
傳兵衛
中村三太左衛門
北爪仁兵衛

伊藤孫兵衛

吉田與右衛門
深井正墨五郎次郎無藏

深井藤助

中山八左衛門正方

中山八左衛門正元
榊原七郎兵衛
長瀬市郎兵衛

○一遍上人緣起

熊野山所藏、嘉元四年六月朔

日畫工掃部助入道心性并子息藤原有重筆、奥州三春所藏十三卷、土佐將監光興筆
藤澤清淨光寺之勅賜緣起、六條道場之緣起、江戸日輪寺にある殘闕の緣起

○一里がね 事蹟合考、増上寺の鐘一度つきたるあとのうなり凡三町ほどするなり、此かねつく内に行人一里を行くとて一里がねとはいふなり」

○一家言 史記太史公自叙、拾遺補、執成一家之

習ひしといへり」あまの子のすさび、天和三年春

惟中天和元年十二月二十八日妻柴田氏順女歿道頓堀

に葬り釋尼智貞と稱す二年ありて惟中也歿す、子は長子敬吉次は

女子にて琴、次は男子夭死、その次も男子これも夭

死、その次も夭死す

○一場姫 寛永十年日記、二月二十三日夜前、い

ちば殿逝去權現様御妹也三月朔日於御座間尾張殿紀伊殿

水戸殿御禮、去頃いちば殿逝去其後初て御對顔也、

則御鷹の鶴一羽宛被遣之大猷院様に大叔母に當らせ給ふ、御

なれば二十日の御忌あるに、鶴視聽日録、二月二十三日い

ちば様御遠行贈大納言廣忠卿女、家康公御二十五日いちば

様爲御香奠尾州殿紀州殿より白銀五十枚、水戸殿

より白銀三十枚御使を以被差上之」紀州日記、二月

二十二日其日市場様御遠行、二十四日午刻爲上使松

平伊豆守被來市場様御遠行ゆる御忌とて御禁足也、

去間御目見にも御出仕なし御禮に彦兵衛上る、二十

九日此間は市場様御忌にて御登城なし、然ば明朔日

御出仕有て可然由御年寄衆より被仰由松平右衛門大

夫參被申御忌御免の御江城年録、二月二十三日市場様

御果十八是は權現様御妹荒川甲斐守殿御室なり」荒川

半左衛門賴豐家譜持高千二百石大荒川甲斐守義弘次男平

右衛門源家儀、父甲斐守義弘儀今川義元戰死之後權

現様へ奉仕西尾の城を差上岡崎に住居仕候に付權現

様其意を御歡有之御妹を甲斐守義弘妻に被下置右御

妹は平右衛門家義母上文義に御座候權現様被召出千五百

石被下置忠吉卿へ御附屬被仰付相勤申候慶長五年

五月四日三十三歳にて病死酒井修理大夫家譜、讃岐

守忠勝妻は松平金彌親能法名女にていちば様御外孫

なり、はじめいちば姫様荒川甲斐守賴持或はに御嫁

有之三郎四郎某次郎九郎義儀と女子御儲有之、女子

を木崎と申これはいちば様御化粧料七百石之内五百

五十石大和百五十石上野國と有之候、百五十石木崎の方

を此御女子御領知被成候故也、此木崎は松平金彌妻

也金彌はじめ加藤左馬助嘉明に仕、後浪入深川本誓寺説、いちば様御

法號光源院殿松譽貞月大禪定尼、當寺馬喰町に御座

候節御葬送

○一刀流 武藝談松原唯心寛一刀流の元祖戸田清元

といふものは武州八王寺の者にて北條氏政に仕へし

者なり」武藝傳系、一刀流當時兩派あるか

般若アリ、此皆信充親視セシ處ナリ

○一溪道三 江城年錄、寛永三年九月九日一溪道

三於箱根病死御臺様御病氣に付京より急ぎ下り息を切て死す五十歳云々」一書、京都柳原に産、十歳

の時天正十四年相國寺藏集軒の喝食となり等伯といふ、

二十歳の時慶長元年關東に下り足利學校文伯に従學し導

道三喜の弟子となり京都に歸り光源院殿に仕光源院義輝公

は、永祿八年松永久秀等に試せられ給ふ、道三とは時代相違せり

半井譜、從五位下刑部少輔利長之住、以故以利長爲傳道之正統法名道三醫書諸抄多、

永正四年正月五日卒入一休和尚室參宗夷冑絶之說、春六脈

禪と云道三は光源院殿より先輩なり

弦而按之則絶、夏六脈洪而按之則絶、秋六脈浮而

按之則絶、冬六脈沈而按之則絶、右胷中之穀氣絶敗

而不營三於五臟六腑者也、于時天文第七戊戌年重陽日

記之、所以使三師翁口傳一敢不三失墜耳、日東洛下

雖知苦廬道三半井道三にもあらず、一溪道三にもあるべからず、

十歳とみて、足利學校由來記、第五世東井和尚大永中

第九歳也、第六世文伯和尚不詳人事、七月十六日寂第七世九華和尚在座三十

戊寅歲寂とあれば、文伯の學校なりしは天文十七年より前なるべし、彼是通し考ふるに、漢道三寛永三年五十歳と云ふは誤ならん

○一華堂 戴恩記、その座に一華堂宗務法橋居られし、伊勢物語集註、そのかみ西三條内府實澄公よ

り老師一華堂乘阿へ傳はりし奥義をむねとし、かねて諸抄を見わたしてしるしあつむるよしの序あり、

慶安元年戊子一華堂切臨叟の作なり」源氏綱目、萬治己亥のとし三月吉辰洛下一華堂接傳野衲切臨叟こ

れを輯録す」類聚名物考、七條道場號金光寺、遊行上人回國の折は久しく此寺に留りて日中ことに躍念

佛あり、此寺内の乘阿號一華堂和歌人にて古今和歌集を傳授し源氏物語を講讀する聞えありて、後陽成院の

帝にめされて源氏を講說仕れり、その弟子切臨源氏辨引抄を作る」藤川百首抄、一華堂切臨著

○一時軒 一時隨筆、一時軒岡西惟仲者、因州鳥取之産、而敏捷超衆、辨利拔群、可謂豪英之人物也、頻年寓居浪華、人衆瞻仰云々」類聚名物考、梅翁

を主とせしとは西山の梅翁にて宗因が事なり、此宗因はもとは連歌師にて有しが、後には檀林風の俳諧師となれり、一時軒も連歌もし俳諧もしたり、連歌

は昌縁その子昌程に習ひしと見ゆ、祖白宗春にも聞しよしみゆ、歌は鳥丸資慶卿に御點削を受しこと續無名抄に書り、又雅章卿にも御添削うけしことあり、

源氏物語は細川玄旨法印の扈從宮木善左衛門孝庸に

三宅島に流罪御船手逸見八左衛門方え渡す本石町四丁目茂左衛門店佛師民部、本銀町三丁目次郎左衛門店之者村田半兵衛、元祿六年酉八月十五日入是者潮湖一卷之者にて、御詮義有之間、右之者は元祿十一年寅十二月二日八丈島え流罪御船手逸見八左衛門方え渡す寶永六年九月大赦の節御免にて參上」秋輿圖與書、元祿己正月吉祥日狩林散人朝湖壺藤信香謹書湖朝氏深川宜雲寺傳説、宜雲寺開山卓禪和尚に參禪して島より歸りてのちは當時裏門脇の小菴に住居せしとなり客殿の障子の裏に書たる松は島にて常に見馴し松なりとなり

○一絲和尚 或書、一絲耕閑和尚は岩倉大納言具起卿の弟なり今按に具起卿は、久我權大納言晴通卿の次男、櫻井木工頭具堯の長子にて、權中納言從二位にて大納言に進み給はず、慶長五年庚子に生れ給へり、母は宗派心妙關藏人頭基繼朝臣女なり、また耕閑は別號なるべし關山慧玄授翁宗弼一五世雪江宗深東陽英明

六世一愚堂東寔源一一絲文守佛頂國師

○一文毎日倍まし 或書、凡錢一文至三十一日一倍

一百七十四萬三千九百六十八文 通算一日一文 二日二文 三日四文 四日八文 五日十六文 六日三十文 七日六十文 八日百二十文 九日二百五十文 十日五百十文 十一日一貫二文 十二日一貫四文

十二日二貫四十八文 十三日四貫九十六文 十四日八貫百九十二文 十五日十六貫三百一十六文 十六日三十二貫三百六十八文 十七日六十四貫三百六十八文 十八日一百二十八貫三百六十八文 十九日二百五十六貫三百六十八文 二十日五百一十二貫三百六十八文 二十一日一千零二十四貫三百六十八文 二十二日二千零四十八貫三百六十八文 二十三日四千零九十六貫三百六十八文 二十四日八千一百九十二貫三百六十八文 二十五日一萬六千三百八十四貫三百六十八文 二十六日三萬二千七百六十八貫三百六十八文 二十七日六千五百三十六貫三百六十八文 二十八日一萬三千一百三十六貫三百六十八文 二十九日二萬六千三百三十六貫三百六十八文 三十日五萬二千七百六十八貫三百六十八文 三十一日一萬零二百四十八貫三百六十八文 三十二日二萬零四百九十六貫三百六十八文 三十三日四萬零九百九十二貫三百六十八文 三十四日八萬零九百九十二貫三百六十八文 三十五日一十六萬零九百九十二貫三百六十八文 三十六日三十二萬零九百九十二貫三百六十八文 三十七日六十四萬零九百九十二貫三百六十八文 三十八日一百二十八萬零九百九十二貫三百六十八文 三十九日二百五十六萬零九百九十二貫三百六十八文 四十日五百一十二萬零九百九十二貫三百六十八文 四十一日一千零二十四萬零九百九十二貫三百六十八文 四十二日二千零四十八萬零九百九十二貫三百六十八文 四十三日四千零九十六萬零九百九十二貫三百六十八文 四十四日八千一百九十二萬零九百九十二貫三百六十八文 四十五日一十六萬零九百九十二貫三百六十八文 四十六日三十二萬零九百九十二貫三百六十八文 四十七日六十四萬零九百九十二貫三百六十八文 四十八日一百二十八萬零九百九十二貫三百六十八文 四十九日二百五十六萬零九百九十二貫三百六十八文 五十日五千零九十六萬零九百九十二貫三百六十八文

○一筆書寫大般若 中臣系圖云、中臣清俊長男信高齋宮長一筆書寫大般若若上野國志、小水麿ノ大般若經ヲ多胡郡ノ羊大夫ガ書シモノト云傳ヘタリ、去

ドモ其跋ニ無シ災殃ニ而不消無シ福樂ニ而不成者、般若之金言眞空妙典、被稱諸佛之文母聖賢之師範也、所以至誠奉寫大般若經一部六百卷三世大覺

十方賢聖咸共證明我現當之勝願必定成熟、貞觀十三年歲次辛卯三月三日檀主前上野國權大目從六位下安倍朝臣小水麿トアレバ羊大夫ニハ非ズ、○上野吾妻郡山

田村人町田十五郎清興モ一筆般若ヲ書ス清興字子孝號延隆○武藏久良岐郡金澤引越村昇天山金龍院主默翁モ一筆

段分錢十貫三百文木部 一三段半分錢一貫五十文づ

つ太郎次郎入道 一一町分錢二貫七百文江田御坊云

云同新島分 一八段分錢一貫六百文木部 一八段分

錢一貫五百文江田御坊云々明徳五年^{甲戌}八月二十七日

國政判^{四町五反の分錢十貫三百文と云に付て算すれば、一段は二}

^{百二十八文餘に當り、三段半に一貫五十文は一段は五百}

^{七十二文餘に當り、三段半に一貫五十文は一段は三百文づつに當り、}

^{一町二貫七百文は一段二百七十七文に當り、八段一貫六百文は一段二}

^{百文八段一貫五百文は百八十七文五分に當る、されば新田郡の一貫}

^{文は四段百三十八歩より一段二百六十九歩三段百二十歩三段二百五}

^{十歩許に當り}

^{一同ならず}

○一蝶 江戸眞砂^{和泉屋某作}云、本石町三丁目村田

半兵衛繪師和應、佛師、式部とて此三人は其頃の至

り牽頭也、其節六角越前とて新地一萬石賜はり屋敷

小川町にあり、此越前殿は桂昌院樣甥のよし^{姪婿}京

●北小路太郎兵衛藤原宗正

道芳^{北小路宮内少輔}

女桂昌院一位夫人

宗資^{本庄次郎左衛門}

^{松平因幡守}
^{從四位侍從}

り紋鶴の丸なり、大かた六角殿と知人申合ぬ、是に

よつて傳法院御吟味の上遠慮して引籠る、六角殿も

申譯立がたく知行めし上られ外の大名へ遠く御預に

被成し、其頃百人女臈と申書物一冊本屋摺出しぬ、

是は大名がたの御本妻の器量善惡をはじめ食物の好

不好その品々を明白に仕たり、上より御答ありて本

屋牢舎に成て何者の作り出せるとの詮儀になり、村

田半兵衛繪師和應佛師式部の作なりと訴る、右三人

めし捕れ牢舎して伊豆の大島へ流罪十七八年めに歸

參して和應は英一蝶と名を替て暫く暮しぬ、半兵衛

も式部も程なく病死す

^{珍説反古文庫第四にも此説あり、文}

^{體全く同じ、反古文庫は享保元文の}

^{作な}二本榎承教寺過去帳云、英一蝶名信香字君受號

資俊伯書守

女六角越前守室

北窓翁^{顯乘院}享保九年正月十三日歿^{持也}七十三歳

云、吳服町一丁目新道勘右衛門店の者多賀潮湖^{四十}

元祿六年酉八月十五日入^{北條安房}御詮義之儀有之に付

安房守宅より揚り屋へ入、元祿十一年寅十二月二日

べき者也仍所定置如件元和二年五月十一日「寛永十三年六月朔日御定書云、寛永の新錢并古錢共に金子一兩に四貫文勿論一分に可爲一貫文也云々」寛文五年御觸云、買取申新錢の事、金子何兩相渡新錢何貫文請取申處實正也但一兩に付四貫文の直段也寛文五年巳五月誰組知行高誰印判延喜式計式云、諸國輸調銀一分錢二百五十文四分を一兩と云によれば、一書云、慶長元和の際日本にて鑄たる錢四文に永樂一錢をかへたるよしなり然るに論爭絶ることなきよしにて日本橋に定書をかけられて元和二年五月十一日より永樂錢停止ありしとなり續日本紀、和銅二年三月甲申制曰、交關雜物其物價銀錢四文以上即用銀錢一其三文以下皆用銅錢此割合にては銅一貫文の銀二百五十文にあたる、たゞし此際銅錢の定、金一兩に銀三兩銅九兩と三倍の定なるが此時より四倍六十二文五分なるべし

○一貫文の田地 東鑑、文應元年十二月二十九日

京上所役事有其沙汰云々、自今以後改三段別錢三百文此上五町別官駄一疋人夫一人可被催之云々段二に三百文とすれば、一貫神鳳抄云、相摸國大庭御府内宮上分糶四十石白布十三段長紙五百帖百五十町十三郷權五郎景政寄進、家田船橋家知行之三然上分計當三十貫

文沙汰堤郷各別本神領也、出口室田知行口上分十貫沙汰上分糶四十石が十貫文に當ると云俗説贅辨續編云、今按に我友人古證を以て決していはく、土佐國幡多郡中村郷不破村八幡宮寶藏に一條家の古文書あり曰、於本郷中村八幡宮新に御寄進田之事

中前田有間之内 光任小作 彌五郎 一所一貫文 目黒之内 泉

一所七百五十分 藏橋分 一所二百五十分 立石分

合せて三貫分歟

永祿二年己未三月吉日 康政○

右の文書を按するに田千分を一貫とす今の三段三畝十歩也是錢千文を一貫とするがごとし」明源寺文書云、永代賣渡申下地之事、合田一反者五百五十文目、右彼下地名之内え徳分を以て永代五貫五百文に平岩彌太左方へ賣渡申候處實正也、此之内より年貢五十文宛毎年本名えなつ所あるべく候云々、永正十三年十二月日一段の年貢五十文にては、一町又、田地二反末代寄進申云々年貢六拾四文宛毎年可有御沙汰候云々大永七年七月六日」正木文書、新田庄江田郷内得河方目錄 一四町五段分錢十貫三百文又三郎 一四町八

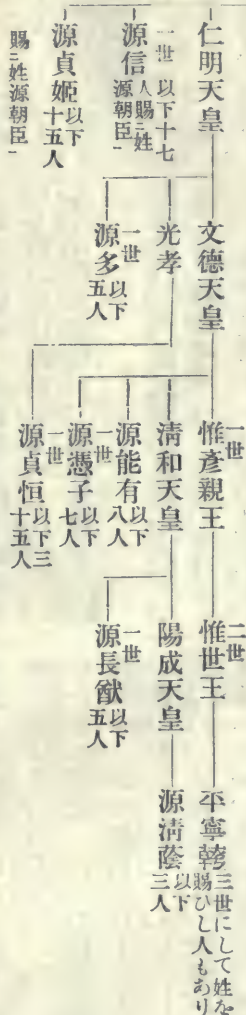
△父御門

時の御門

△后

女一の御子父御門よりこの女一の御子を源氏とさせ給へり

紹運錄云、嵯峨天皇



天子の御子の人臣に降らせ給ふ初祖をば一世王と云、次を二世の王三世の王四世の王五世の王と云、然に第一世にはや姓を賜はり給ふな一世の源氏と云なり

○一櫟手半

善光寺縁起云、件像者元是釋尊在世之時、毗沙離國月蓋長者隨釋尊教、正向西方遙致禮拜云々設身於一櫟手半、僧祇律云、如來櫟手長二尺四寸、五分律云、櫟手者方二尺、佛門衣服正儀編餘云、諸部論櫟不定今依五分佛一櫟手長二尺准唐尺者則一尺六寸六分七釐強又、引簡王記云、姬周一尺二寸爲唐一尺、更將周七寸二分爲唐六寸、又將周七分二釐爲唐六分、更有釐在、總計唐一尺六寸六分更有周八釐即唐家七釐弱、全是弱字鈔多作

強字者鈔寫錯耳亦不合作強解

○一處懸命

古事談云、六條修理大夫顯季與刑部丞義光相論所領云々被仰云、汝惟無件庄一處全不可事闕、彼只一所懸命之由聞食之云々

○一兩に四貫文
元和二年町觸云、定一大かけ、一われ錢、一かたなし、一ころ錢、一新惡錢、一なまり錢、右六錢の外は御藏へる納候間えらぶべからず、金子一分に一貫文に賣買あるべし、若彼六錢の外撰者并押てつかふ者有之者、糺明の上其面に□□

外撰者并押てつかふ者有之者、糺明の上其面に□□

行基菩薩計程所ニ建置也今按に、檀生泊は室津のことなる尻は江口の上を云、此行程三十里餘あり、此を四日行とすれば一日行七里餘に當る、今の室より和田岬迄は十八里餘あり、是を三日とすれば一日に諸門跡譜云、良助法親王曾住三和州多武

峯、其墓在ニ冬野ニ距ニ多武峯ニ可三二里六町爲三二里の良皇子青蓮院常壽院文保二拾芥抄云、三十六町爲三二里此六年八月十八日入滅と云、此三十六町を一里とすと云は行程の事にはあら里爲一條信充云、此三十六町を一里とすと云は行程の事にはあらす、六十間四方を一町といひ六町を一角として、六六三十六町を一里とせし田地を按る法を云なれば事異也、されども六町一里と云ことは是より起れるなり

○一日はれ 詹々言云、一日ハント云俗ニ一日晴

ト書ハ非也續日本紀ニ一日法例トアリ、其官ニ非ル人ニ權ニ其事ヲ行ハシム、衣服車馬等ヲ其日一日許サル、ヲ云也」宗五大草紙云、火打袋は四十以後さぐる、たゞしそれも晴の時は斟酌あるべし法則の時

しても聞ゆれども、一體はれ役人系圖云、酒井雅樂頭御年男の事也忠清御祝

○一弦琴 類聚國史百九十九云、桓武天皇延暦十八年七

月有ニ一人乗ニ小船ニ漂ニ着參河國ニ以布覆肩自謂ニ

天笠人常彈ニ一〇〇板琴知要云、一弦琴、在黃門在攝州須磨之日取廢琴僅遺ニ一弦而將絶者、綴緝之鼓詠歌以爲閑中之玩遂傳而到今焉、玉海云、唐高祖用隋制九部樂清樂也有三獨弦琴樂部小錄

云、獨弦匏琴、孔帖云〇〇〇〇以斑竹爲之不加絃、刻木爲三虺首、張絃無軫、以絃擊頂、有三四柱如龜茲琵琶

○一字かなから 政賴十卷書又持明院家鷹十卷書と云、根津家鷹應永頃に集めたる書なり、

書とも云云、一字かなからといふは錢の文字の一が事も、たとへば錢の半分が一也錢一文は一匁の事なり、これなり

○一角 訓蒙圖會云、獬豸カイチ一角玉海云、雍熙二年

閏九月己亥坊州獻ニ〇〇獸、左右皆曰麟也云々、唐興平二十年三月有ニ角獸、識者以爲ニ獬豸魚譜云、一角魚と云は東洋にあり顛上に角あり長三尺許、これ樂に用ふる一角なり

○一世の源氏 うつば物語藤原君卷云、むかし藤原君と

聞ゆる一世の源氏おはしましける云々、又としが云一世の源氏の心たましひ人にすぐれ給へりけるを、又、そ卷云御妻には一世源氏かたちきよなる名と

り給へるか、又、藤原君卷云時の御門の御妹、女一の御子

と聞ゆる后腹におはします、父御門母后に宣ふ、この源氏たい今のみる目よりも行さきなり出ぬべき人なり此宣官に就て圖を作

向ニ蓮場ニ而鳴變汾水之龍驤泛ニ香海ニ而留影、遂披ニ不測之了義ニ永證ニ彌高之法身、遠暨ニ存口ニ傍周ニ動植ニ因ニ此景福ニ共沐ニ禪流ニ或變ニ桑田ニ敢作レ頌曰、非レ有ニ能仁ニ誰明ニ正法ニ惟朕仰止給ニ修慧業ニ權門利廣子拔苦知力用妙子登岸敢對ニ不居之歲月ニ式垂ニ圖極之頌輪神護景雲は、稱徳天皇重祚の年號なり、二年五月は長曆に尙書大傳に、橋木高而仰、梓木晉而俯、以喻父子、とあるを以て文に喻之、汾水之龍驤は冷水に作るべし、詩に文王初載、天作之合、在ニ治之陽、遂に謂ニ生ニ太姒ニとあるによれるならん、能仁は釋迦牟尼佛の事也乃字篇に詳なり、さて此弟子は稱徳天皇の御事なり新和歌集、鹿島社にて唐本一切經供養しはべりける時ひごろは雨やますはべりけるがけふしも空はれてこ

とゆるなく供養とげぬる事とて導師權僧正隆辨東鑑に、若宮別當大納言法印隆辨權僧正とありて、今よりや心のやみ北條政村が女の邪氣を祈りたる人なりに、今よりや心のやみははれぬらむ神代の月の影をうつして返し、藤原時朝、ちはやふる神代の月の現れて心の闇は今ぞ晴ぬる信充云、藤原時朝は宇都宮朝綱の孫なり、東鑑に傳くはしを子細に考ふれば、この藤原の時朝の歿あり、云奉渡唐本一切經内建長七年己卯十一月九日於鹿島社遂ニ供養ニ常州笠岡前長門守從五位上行藤原朝臣時朝とあり美麗の宋本なり

○一里 大寶令云、凡度地五尺爲レ步三百步爲レ里信充云、此五尺は大尺五尺なれば即今の曲尺也、三百歩は百五十丈也、百五十丈は今の二百五十間也、六十間を一町とすれば四町十間なりと延喜式云、以ニ六尺ニ爲レ步以外如レ令信充云、六尺を一里ととし三百歩を一里と

することは令と同じと云なり、六尺を一步として三百歩は百八十丈也、百八十丈は今の三百間にして即五町に當れり、令の一里と式の間、一里とは五十町刑部式、伊豆去レ京七百七十里○今京より伊豆の間の相違なり遠州氣賀通リ濃洲洲股通リなり、百六里半は三千八百二十四町にして、五町にてわれば七百六十六里四町なれば、式と僅に十六町の相違なり越前千五百八十四町なり、式に三百六十六里四町なり、公式令、行程馬日七十里今二百九十一町四十間なり步五十里今二百八十八町二十間なり本朝文粹、三善清行十二條云、六里半十町二十間なり、衛府舍人云々或在ニ千里卸驛之外百日行程之境はこれ日十里宛なり重請修ニ復播磨國魚住泊一里、右、臣伏見ニ山陽西海南海三道舟船海行之程、自ニ檉生泊一里至ニ韓泊一里

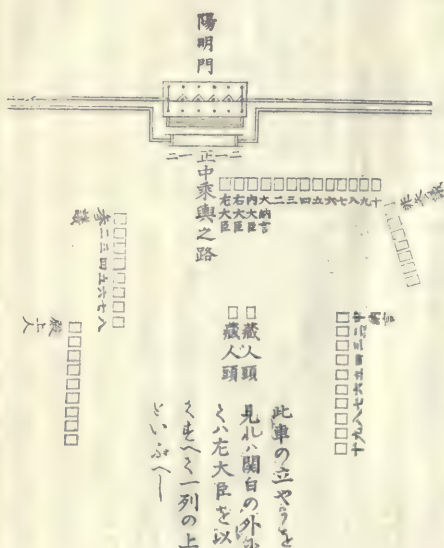
三	一	二	三	四	五	六
七	八	九	十	十一	十二	
十三	十四	十五	十六	十七	十八	
十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	
二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	
三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	

一里には三十六町の田地ありと云ことあり
一里の角は六町づつなり

日行、自ニ韓泊一里至ニ魚住泊一里、自ニ魚住泊一里至ニ大輪田泊一里、自ニ大輪田泊一里至ニ河尻一里、此皆

濃の岐蘇山にも同じ石の産する處あり全く三穗の産と同じ

○一の上 徒然草云、竹林院入道左大臣公衛殿、太政大臣にあがり給はんには何の滞かおはさんなれども珍しげなし一の上にてやみなんとて出家し給ひにけり、信充按に、竹林院左大臣殿は、後西園寺太政大臣實兼の長子にして、今出川太政大臣公相の孫、常盤井太政大臣實氏の子孫なり、西園寺太政大臣公經の玄孫なり、貞慶元年公經公相國に任じ給ひしより元亨三年實兼公の薨せられし迄百一年が間に、太政大臣四代七十一人相續有しかば、珍らしげなしと宣ひしなり 抄云、一の上は左大臣の事也左大臣關白なれば右大臣一の上なり、中山口傳云、陽明



柳菴隨筆以字篇第一

門前に車を立るに執柄牛車を聽されざる間は右の一門を通行云々

○一の所 枕冊子云、くるしげなる物、一の所に時めく人もえやすくはあらねどそれはよかめり」春曙云、一の所は攝關を申也執柄とも云也職原抄に執柄必蒙一坐之宣旨故稱一人又云一の所

○一生不犯 源平盛衰記云、金剛左衛門尉俊行力士右兵衛尉俊宗が母ニテ侍シモノハ夕霧ノ板トテ山上熊野無雙ノ巫、一生不犯ノ女ニテ候シ程ニ知ラザルモノ夜々通フコトアリテ設タル子共トゾ申侍リシ、又右衛門佐ト申タル女房ノ法皇後白河院ノ御母儀待賢門院ノ御妹上西門院ニモ侍ハレケルガ品イミジキ人ニハ無リケル共心様サガシキ上、一生不犯ノ女房ニテオハシケレバ清キモノ也トテ法皇モ幼稚ノ御時ヨリ近ク召仕ハセマシケレバ臣下モ君ノ御氣色ニ依テ尼御前ト冊キ呼レケルヲ法皇ハ惟アマゼトゾ仰ラル

○一切經 古寫本跋、維神護景雲二年歲在戊申五月十三日景申弟子、謹奉下爲二先聖二敬中寫一切經一部工夫之莊嚴畢、法師之轉讀盡矣、伏願橋山之風輅

柳菴隨筆以字篇第一

栗原信充手錄

○一里塚

信長記云、天文九年冬將軍

私云、此年は都におはしまさず、去年より八瀬里に住し賜へて諸國へ仰り、しかる時は細川晴元、三好長慶等がせしことか

ありて四十町を一里とし里塚の上に松と榎を植ゑらる」本朝世事談綺云、天正年中信長公三十六町に

一里塚をつき榎木を植られし、家忠日記云、慶長九年二月台徳公諸士に命じて東海東山北陸ノ三道ニ一

里塚ヲ築シメ給フ、天正ニ織田信長分國ノ中ニ一里塚ヲ築シメ地ノ三十六禽ヲ表シ一里ヲ三十六町ニ究

メ塚上ニハ榎ヲ植ケルニ此度モ准ゼラルベキ旨有司ニ命ゼラル中夏諸國其功終ハル

武徳大成記、武徳編年集迄僅に四ヶ月の間に三道共に其功終はりしとは神速なること云べし塩尻云、慶長九年二月四

日台徳大相國東海道越後路奥州路等に命じて各一里ごとに兩塚を築しめ樹を植しめ給ふ、同年五月下旬

にことごとく成就せし今に残て行人里程を辨ずみな公の賜ものなり」上野國高崎問屋舊記云、慶長三年

戊四月中山道開之高札掛云々、同九年辰二月諸國路道可仕由にて廣五間一里塚三十六町に築云々、蓑輪

軍記云長野業政は子息業盛をめし遺言いたされける云々我死せば一里塚同様につきこめ

信充云、蓑輪軍記は、永祿年中に書たる物然るを永祿の書と思ふ人も有を以て辨す和漢三才圖會云、封塚、里堡音俗云二里塚、五里有二塚云々、按一里堡、每二里一壘小山、樹以松或榎、古道五十町今道三

十六有異如中夏五里一塚則三十町其五里不足於和之

一里白河燕談云、客問、一里塚町石應有漢土哉、

答曰事文續集二曰、韋孝寬爲雍州刺史、先是路側一

里置一土塚、經雨頽毀每領修之、自孝寬臨州乃

勒部内當塚處植槐木代之、既免修復一行旅又

得庇陰周文後見恠問知之曰豈得一州獨爾、當天

下同之、於是分諸州道路一里植一木二十里植二

木百里植五木北史、又云魏文帝迎薛靈芝木道之傍一里置一銅表五尺以志里數日本町石事物記原云、

道路之記以里塚一起軒轅時也

○一文字石

駿河國□□郡三穗松原の中に一文字

石として石面に自然一文字の斑を

生せし小石の産する處あり、其

書體おのづから篆真草八分の體



を備へたり造化の不思議いふべからず、しかるに信

一 注千字文
 一 ちは
 一 地子錢
 一 血を合す
 一 陣羽織
 一 中和節
 一 ちよのふ
 一 兒の髪
 一 ちから草
 一 知久家旗
 一 持明院家
 一 地頭得分
 一 地藏菩薩
 一 糶汰瓶
 一 塵取輿
 一 知行
 一 中宮
 一 陣德澤
 一 千葉系圖
 一 千葉寺

四七六
 四七六
 四七六
 四七六
 四七七
 四七八
 四七八
 四七九
 四七九
 四七九
 四八〇
 四八一
 四八二
 四八二
 四八二
 四八二
 四八三
 四八三
 四八三
 四八四

一 ちはや
 一 ちぎり
 一 搏風
 一 乳付の旗
 一 ちりめん
 一 晝三
 第九卷
 一 りんだう
 一 鱗角筆
 一 龍鱗月硯
 一 龍尾硯
 一 龍燈
 一 龍尾道
 一 梁年
 一 了然詩
 一 柳枝貫魚圖
 一 劉聰
 一 哩々囉々
 一 輪寶紋
 一 律衣尺

四八四
 四八四
 四八四
 四八四
 四八四
 四八五
 四八五
 四八五
 四八六
 四八七
 四八七
 四八七
 四八七
 四八八
 四九〇
 四九〇
 四九〇
 四九一
 四九二
 四九二
 四九三

一 劉基硯
 一 隆達節
 第十卷
 一 鶴
 一 布直垂
 一 布帽額
 一 めりごめ
 一 めかつき蟲
 一 糠の價
 一 貫銚の神
 一 沼津繪
 一 布の價
 一 めため
 一 めた筈

四九三
 四九五
 四九五
 四九五
 四九七
 四九八
 四九八
 四九九
 五〇〇
 五〇〇
 五〇一
 五〇二
 五〇二

柳菴隨筆目錄終

一編綴	四二一	一燈明油	四二八	一茶舛	四三九
一平絹	四二一	一木賊	四二八	一茶室	四四〇
一偏衫	四二二	一ところてん	四二八	一茶人系圖	四六二
一へうぐ	四二二	一となめき	四二八	第八下卷	
一兵庫鑲太刀	四二六	一常盤草	四二八	一茶の價	四六六
一反閉	四二七	一とんた茶釜	四二八	一茶の徳	四六七
一別當八幡、熊野別當系圖	四二九	一豆腐	四二九	一茶書	四六八
一瓶笙	四二一	一頓首といふ字の印	四三〇	一茶杓	四六八
一平等院	四二一	一土中より魚を得しこと	四三〇	一茶の歌	四六九
一ノ觀	四二一	一とうれんぼ	四三〇	一茶の詩	四六九
一へち馬皮袋	四二二	一都府樓	四三〇	一茶にする	四七〇
一平家蟹	四二二	一道服	四三一	一茶筥賣	四七〇
第七卷		一とし男	四三三	一茶釜	四七一
一屠蘇	四二三	一富	四三四	一地火爐	四七三
一鳥羽僧正覺融	四二四	一巴の紋	四三五	一中間	四七三
一東大寺寶物	四二五	一鞆袋	四三五	一近松門左衛門	四七四
一とし玉	四二六	一徳日	四三五	一ちんない	四七四
一登蓮法師	四二六	一藤樹先生	四三六	一茶式部	四七五
一虎	四二六	第八上卷		一茶神	四七五
一銅升	四二七	一乳付	四三九	一茅の輪	四七五

一はす糸袈裟

三四七

一はじの木

三四八

一蠻繪

三四九

一はまなげ

三五一

一庖丁正宗

三五二

一白田島

三五三

一はしり水干

三五三

一羽織

三五四

第四卷

一二字

三五四

一二字同字重りたる書法

三五五

一日光御社參

三五五

一仁王

三六三

一人聞菩薩

三六四

一二宮氏

三六四

一にぎはひ草

三六四

一二位の尼

三六四

一錦の價

三六六

一錦の御旗

三六六

一西陣

三六八

一如意寶珠

三六八

一日蓮宗派

三六八

第五卷

一本命

三八一

一本卦

三八二

一本多中務大輔刀の鏝

三八三

一反故

三八四

一反故染

三八四

一本田善光

三八四

一細長

三八四

一はらの貝

三八五

一ほろ

三八六

一堀川館

三九二

一佛高力鬼作左

三九二

一鉾

三九三

一ほく頭

三九四

一細立烏帽子

三九五

一細長筥

三九五

一細太刀

三九六

一法華經新舊

三九六

一北條家代々肖像

三九六

一ほや

三九八

一奉書紙

四〇二

一北條氏長

四〇二

一布袴

四〇三

一布衣

四〇三

一はた

四〇四

一菩薩

四〇四

第六卷

一へなたり

四〇五

一へそくり錢

四〇六

一平家物語作者

四〇六

一平人

四〇八

一へうたん町

四〇八

一遍昭

四〇八

一へりぬり

四〇九

一へらご

四一〇

一へちま

四一〇

一偏無爲居士

四一一

一偏易子

四一一

六十賀

三〇四

第三卷

八葉の車

三三四

六曜日どり

三〇四

八月十五夜

三二六

一八葉の車

三三四

六具

三〇五

濱名橋

三二六

一半臂の句

三三七

六代御前

三〇六

はまゆか

三二九

一八處諱處

三三八

ろくろくび

三〇六

白蓮の交

三二九

一八處御靈

三三八

魯般尺

三〇六

柱なしの土藏

三二九

はつひ絆切

三三八

六位藏人

三〇七

はくろめ

三二九

はな見

三四一

婁宿

三〇八

花胡錄

三三〇

一長谷川等伯

三四一

ろくろ袴

三〇八

はいかいの馬

三三〇

一長谷川等胤

三四一

漏刻

三〇八

針の身に立てぬけかぬる

三三一

一長谷川光芳

三四一

勞症祈願夫婦塚

三〇九

をぬく藥

三三一

一長谷川五左衛門宗哲

三四一

囉齋

三一一

八條殿 八條殿系圖

三三一

一方忌

三四一

六時禮讃

三二〇

八里半

三三一

一方丈

三四三

芦花被

三二二

八角井

三三二

はな山

三四三

六波羅

三二二

八丈絹

三三二

はやあし

三四四

六地藏

三二二

原田甲斐

三三二

一幡隨意上人

三四五

六條修理太夫顯季

三二三

坊門

三三三

一幡隨意長兵衛墓

三四五

六十四卦を日に當ること

三二五

はなから

三三三

一馬場美濃守信房

三四六

露臺

三二四

蓮葉に食をもらし事

三三四

一原美濃守虎胤

三四六

論語の撰述

三二五

花の露

三三四

一放免

三四七

柳菴隨筆目錄

第一卷

一里塚	二七二	一絲和尚	二七九	一板ひき	二八五
一文字石	二七二	一文毎日倍まし	二七九	一いりすみ	二八五
一の上	二七三	一筆書寫大般若	二七九	一石打の征箭	二八五
一の所	二七三	一溪道三	二八〇	一いか物作りの太刀	二八六
一生不犯	二七三	一華堂	二八〇	一石川玄番頭康長	二八六
一切經	二七三	一時軒	二八〇	一板花檢校	二八七
一里	二七四	一塲姫	二八一	一岩船檢校	二八七
一日はれ	二七五	一刀流	二八一	一茨木檢校	二八七
一弦琴	二七五	一遍上人縁起	二八二	一犬追物	二八七
一字かなから	二七五	一里かね	二八二	一伊勢氏系圖	二九一
一角	二七五	一家言	二八二	一伊勢氏由緒書	二九五
一世の源氏	二七五	一板文庫	二八三	一伊勢貞丈像	二九八
一揲手半	二七六	一稻荷の正一位	二八三	一伊勢貞春像	二九八
一處懸命	二七六	一いけばな	二八四	一伊勢濱萩	三〇一
一兩に四貫文	二七六	一犬のほし	二八四	一井中の流水	三〇一
一貫文の田地	二七七	一鑄物師	二八四	一衣裝法度	三〇一
一蝶	二七八	一陰形を神社の傍に置事	二八四	一院庄碑	三〇一
		一いなか間	二八五	一一休和尚歌	三〇二
		一いりあや	二八五	一一休像	三〇三
		一寸先はやみ	二八五	第二卷	

柳菴隨筆跋

攝門初以爲知己易得。古人謂千歲旦暮何其言之迂也。何則不辨菽麥者。與畫墁毀瓦者。措而不論苟涉獵于文苑者。皆是知己。我言是。彼亦領。安爲用千歲難得哉。然亦以爲有張陳。有呂鄴。有管華。意趣之不同。終爲仇讐。交不可不擇也。友不可容易也。漸深察知己難得者何謂。熟思古人執友之誼。倍疑往來者。相賣而尊沓乎。柳菴居士。我歷世之通家。假令意趣相背。不亦可相棄。而意趣亦粗與余相同。嘗數其所業。書畫與文章。子夫爲政。釋典與閑禪。我似有一日之也。每相言以拍掌。居士德憑余爲緣山志。余誘引居士。爲隨筆。二者同意而爲之。同時而梓之。居士序山志。予題隨筆。二書之周旋。若是相同。則所謂真知己也。而予在南芝。居士居駿東。相去僅挾一江城耳。安爲用千里比肩哉。不亦大快事邪。文政二年歲次己卯。首夏上澣釋攝門書于緣山北溪在心室。



冊。卷末に。于時長享二年臘月日。書之と忘し。奥州天輔置焉とあり。書文公家禮纂互集註。

文公家禮纂互集註。

一冊。卷尾に。武州兒玉黨。吾那式部少輔寄進。永正二年
丙寅八月日。野州足利學校。能化九天誌とあり。史記。

十五冊。豐城洩明大昇校正新增とあり。集解正義索隱の序あり。十四行二十五字。正統本後漢

書。二十冊。首に。此書不_レ許_レ出_二學校闕外_一。上杉五郎憲房寄進とあり。文選李善五臣

註。二十一冊。每冊首に。金澤文庫の墨印あり。又末に。學校
寄進。永祿三年庚申六月七日。平氏政朝臣とある。

虎首。祿壽應權四字印を捺す。又閩州產九華。行年六十一歲之時。欲赴于鄉里。過相州。大守氏康氏政父子聽三略講。後話栖

之次賜_レ之。又請_三再住_二于講堂_一矣。とあり。その後_に。加_ニ朱墨點_一三要と記せり。鈔本補註蒙求。一冊。

卷末。天正十年卯月廿八日。於關東下野國足利。此一部三卷書寫了。沙門管窮とあるせり。又一通。四冊。

鈔本古註蒙求。三冊。鈔本集註千字文。三冊。鈔本

胡曾詩。三冊。十八史略。二冊。
卷末に。大永丙戌小春
日。藤原憲房寄附。藤

公前年乙酉三月薨逝。依_ニ遺命_一今歲秋寄置。東井誌とあり。鈔本七書講義。十冊。卷末に。

借大隅之產九益子。以印板校之。印本講義。從壬生殿令恩借一校畢。瑞俊點檢落丁落字補之。天正四丙子と題し。又後に。借

明後州人。力海老牛入落字。天正四年丙子之秋。雨燈前校とあり。禮部韻略。三冊。卷首に。康正改元。

乙亥。南源寺浦雲置とあるしたり。是みな奇世の典籍にして。四海に募る

に。千金をもつてすとも。また得べしとはおぼえず。

けだし。上杉憲實の關東擾亂の際にあつて。學校

を提擧し。藏書を寄進し。みづから管領の重任をみ

ること。芥蒂のごとく。遂に飄然として大去し。長

く名利の衢を振棄し。遠く西周の深川に隠居し。ま

た世間の交をたちしこと。かの鷗夷子が五湖に遊し

とは事かはり。殊勝にも優しくこそおもひやらるれ
抑永享の亂は。憲實が意より出し事にはあらねど
も。持氏滅びたまひしかば。趙盾弑君の義にあたり。
憲實のがれがたくおもひし故なるべし。

柳菴隨筆 初編終

三卷。是は附釋音本にして。毛詩註疏。三十冊。詩譜序末

洛歲晚夏小盡日。燈下一。春秋左傳註疏。二十五冊。詩と左

看絶句訖。藤昌とあり。附釋音本にして。建安の劉叔剛が刻する所。此謂南宋本なり。且禮

詩左傳。每本の格頂に。足利學校之公用也。々々南宋本學校關外

上杉安房守藤原憲實寄進とありて。標紙に。松南宋本尙書正

竹清風の印あり。即知表背ともに當時の者也。今の汲古

義。八冊。同時の板本なり。卷首に。端拱元年孔維等が上表あ

り。次に永徽四年。長孫無忌の上表あり。其卷首格頂に

閣本には。此二表なし。その後。孔穎達が序あり。其卷首格頂に

此書不計し。出。三。學校關外。憲實押。および松竹清風の印ある事。他の

書とおなじ。卷末に。上杉安房守藤原憲實寄進と書せり。卷末に。正

本周禮。一冊。首に。萬壽山正宗寺公用と志し。卷末に。正

文安六年己巳六月晦。洛陽僧院愚置之と志せ。又首に。下野州足利庄學校常住

王。正宗寺は。即常陸國久慈郡増井村にあり。寫本周易。注。王

五冊。卷末に。易學之徒置之と誌し。永易解義抄。六冊。注。

王注の講義を國字にて書したり。卷末に。文明丁酉十一月廿一日始

之。十一月廿七日終之。滴翠子と志す。蕪萬といふ二葉字の印を捺

す。其講義中に。當時の形勢を卦爻にあて。論ぜり。多く鎌倉持氏

朝臣の事なり。需の上六に。鎌倉ニテ易ヲ聞時。我師ヲ喜禮ト云タ

リ。其師ヲバ義臺ト云タリ。其喜禮ノ語ヲレタルハ。我易ヲ傳ルト

キ。鎌倉持氏ノ亂ニ。ラワソ。ソノ時牒書天下ノ亂ヲ失フ時。需ノ上

六ニ。一。有。不。速。客。三。人。來。云。云。自。爾。以。來。未。見。其。可。否。ソ

はフサ氏。一定ならず。然るにこゝに重氏とあり。斷易。寫本。六冊。

已上二部を。學校に。寫本泰軒周易傳。六冊。卷末に。文明

て秘書といへり。寫本孔安國注尙書。六冊。古文をもつ。又

紫陽大奇置。寫本孔安國注尙書。六冊。古文をもつ。又

通。二冊。寫本。古。又白文訓點本。一冊。寫本書經集

注。六冊。卷末に。近江宗理置之。肥後之天矣とあり。寫本毛

詩。十冊。鄭義。卷末に。下野州足利學校常住。洛之相國ト驛

董南猷子叟榮松野釋。軒主。心甫傳西堂寄附。慶長二十稔乙卯上已後二日驛

瀧派源珠誌とあり。又一通。八冊。南宋本禮記集說。五

冊。延徳二年壬午五月廿二日。建仁寺大龍庵一牛藏主寄。能化肥

後之產天安誌。また學校常住本陳皓本與書云。延徳二年五月

廿二日。建仁寺大龍庵一牛藏主寄。之至徳二年六月十一日。以五條

大原記家本寫點了。永和元年五月二日。以此本一候。禁裏御讀訖

す。この天文以下は。九華老人の筆なるべし。宋板春秋左氏

傳。十冊。卷首に。足利學校正傳院常住と誌し。末に嘉定六年

宋寧宗の時の年號なれば。寫本孔子家語。二冊。永正乙亥仲

此刑板の時なるべし。寫本論語集解。五冊。春日。寄進

藤原憲實押。寫本古文孝經。一冊。寫本論語集解。五冊。

圓珠經と題し。または尺度權衡など。論語の美名を。

五山の僧徒の筆して題したり。因に。論語を圓珠經といふこと。

本朝文粹に。康保三年夏。右親衛源將軍招翰林藤原士。初讀。論

語云々。俗人未。必。覺。知。以。爲。論。語。者。幼。學。之。書。也。不。足。以。於。晚。學。不。

寫本。六冊。

卷末に。文明

九丁酉仲春日。

又

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

寫本

①唐の世に刻本はありときけども。まれ／＼にも世につたはらねば。見んよしなし。五代のものも絶てなし。たゞ天福本覆刻の可洪音義にそ。古き世の遺物とや見まし。夫より後の宋板の書どもさへ。世にはいとすくなき。信充がみしものは。金澤文庫に傳はりし本と。足利學校に傳へたる書等なり。金澤文庫本は前にいへり。足利本は。上杉安房守憲實。その子右京亮憲忠。その子五郎憲房。父子三世心をつくして。愛護寶藏せしものにして。其經史は。或は宋板。或は古鈔本。みな奇世の珍卷秘冊なり。中にも。宋浙江板。周易註疏十三冊。卽陸子適が傳標本なり。憲忠が寄進せしものなり。嘗て此本を見しに。每冊格頂に。足利學校公用と題し。卷末に。上杉右京亮藤原憲忠寄進と書じ。押字あり。其次に。陸子適の題字あり。第一の末に。其月二十一日。陸子適三山東憲傳標。第二端平改元十二月廿三日。陸子適三山東憲傳標。第三。廿四日。子適標。関于三山。寫易東應。第四。甲午歲末盡五日。子適東憲傳標。第五。甲午十二月癸巳。子適三山東憲傳標。第六。端平甲午歲餘日。三山東憲子適傳標。第七。乙未年基節。三山東憲子適傳標。第八。乙未開歲五日。子適三山東憲傳標。第九。端平乙未正月六日。陸子適関且標。三山東憲第十。乙未入日。子適標。三山東憲第十一。乙未正月八日。子適三山東憲傳標。第十三。端平二年正月十日。鏡陽嗣隱。陸子適。先君手標。以乙未點傳。時大雪始晴。謹記とあり。この陸子適は。陸務觀が渭南文集跋に。嘉定十有三年壬寅。幼子承事郎知建康府。漂陽縣主管勸農事子通謹書とあれば。子適は。陸放翁が幼子なり。萬姓統譜に。陸子通。山陰人。嘉定十二年。爲漂陽令。漂陽俗放武健而信。淫祠。巫覡有。白雲宗者。以妖術。誘致良民。轉相憑結。子適至廼興。學校。習禮讓。擇

民之秀者。教之而使。勸化其愚。謂諸愚曰。是不兩立。有。我無者。乃誅。勸其魁者。二人。白雲宗所。據民衆。憑其主。由。是縣境。然習俗頓革。迨以農暇。治。溝瀆。新。宋紹熙刊本。禮記正義。七十卷。三十五冊あり。卷首に。孔穎達序あり。格頂に。此書不許出學校。關外。憲實押と横書せり。其標題は。禮記正義卷第一。國子祭酒。上護軍。曲阜縣開國子。臣孔穎達撰とあり。讓弘等の字。開畫す。また。每卷。足利學校之公用也。といふ字を連書す。第二の末に。上杉安房守藤原憲實寄進とあり。此本開卷副葉の裏面に。卅一冊の内と大書し。左右に。總三十五冊。豐之後州。萬壽寺僧一華書補之と傍注し。又その傍貼簽に。郊特牲。内則。玉藻。正義三篇缺本。經自八至九。正義自三十三至四十。缺と記して。松竹清風の朱印あり。然る時は。此禮記四冊缺本のまゝ寄進し。後僧一華附釋印本を以て。補寫せしなり。其寫本の首に。紫府豐後僧一葉學士。於。武州。勝沼。以。印本。令。書寫寄進。一度校合畢とあり。この本。曲禮曰毋不敬より。禮記。來學。不。往。教。といふ迄を二卷とし。道德仁義非禮不成より。詔之。則掩口而對といふ迄を第二卷とし。此本陸德明音義なし。紹熙の附跋に。六經疏義。自。京。監。蜀。本。皆省正文及註。又編章。散亂。覽者病焉。本司舊刊易書周禮正經註疏萃。見一書。便。於。披。擇。它。經。獨。闕。紹熙辛亥。仲冬。唐。備。員。司。度。遂。取。毛。詩。禮。記。疏。義。如。前。三。經。編。章。補。加。羅。正。文。用。錢。諸。本。庶。廣。前。人。之。所。未。備。乃。義。春。秋。一。經。斷。力。未。暇。姑。以。貼。同。志。云。壬子秋八月。三山黃唐謹識。進士傅伯簡。進士陳克己。應賢良方正直言極諫科莊治。修議郎紹興府會稽縣主簿高似孫。修議郎監紹興府三江錢清曹娥鹽場管場錢李日。勳。功。郎。充。紹。興。府。學。教。授。陳。自。強。文。林。郎。前。臺。州。二。學。教。授。張。澤。從。事。郎。兩。浙。東。路。安。撫。司。幹。辦。公。事。留。驗。校。正。官。宣。教。郎。兩。浙。東。路。提。舉。常。平。司。幹。辦。公。事。李。深。通。直。郎。兩。浙。東。路。提。舉。茶。鹽。司。幹。辦。公。事。王。汾。朝。請。郎。提。舉。兩。浙。東。路。常。平。茶。鹽。公。事。黃。唐。と。あり。黃。唐。宋。史。に。み。え。す。三。山。志。に。淳。熙。四。年。車。駕。幸。大。學。上。舍。釋。褐。黃。唐。字。信。厚。閩。清。人。授。承。務。郎。大。學。錄。と。み。え。たり。又。萬。姓。統。譜。に。は。黃。唐。字。雅。甫。福。州。人。寧。宗。朝。爲。考。功。郎。中。時。韓。億。曾。爲。父。讎。陳。乞。作。謚。唐。爲。覆。議。乃。見。宰。相。京。鑑。言。不。能。奉。承。因。求。去。と。ある。と。同。人。なる。べし。宋板影鈔本禮記。六十

なり。調使麻呂。膳臣。二家の記ありといへども。

補闕記にみえたり。傳はらず。妙安寺に。調使麻呂の傳といふ

假名本あれども。平氏傳によりて譯せしものとおぼ

しければ。證とするにたらず。平氏傳は。平基親が著す所といへども。承安の奥書ある本あれば。基親よりふ

るく出來しものなるべし。その他種々ありといへども。

第一に疑を致すものは。諸傳みな御年五十としるせ

り。繪傳これによりて五十段あり。ゑかるに。書紀。及帝說。補闕記

等の古き書には。甲午に誕生ありて。壬午に薨じ玉

ふとみゆれば。御年四十九にぞならせ玉ふ。紹運錄。皇年代記。みな推古廿九年二月廿二日薨。四十九とみえたり。

膳夫人と同じ日に薨せられしといへるは。殊に大なる誤なり。法隆寺座釋迦銘文

に。法興元世一年。歲次辛巳。十二月鬼。前大后崩。明

年正月廿二日。上宮法王枕病弗念子食。王后仍以

勞疾。並著於床。時王后王子等及與國臣深懷愁毒。

共相發願。仰依三寶。當造釋像尺三寸王身。蒙此

願力。轉病延壽。安住世間。若是定業。以背世者。

往登淨土。早昇妙果。二月廿一日癸酉。王后卽世。翌

日法王登遐。癸未年三月中。如願欲造釋迦尊像。并

使侍及莊嚴具。竟乘斯微福。信道知識。現在安穩。出

生入死。隨奉三主。紹隆三寶。遂共彼岸。普遍六道

法界含識。得脫苦緣。同趣菩提。使司馬鞍首止利

佛師造とあり。帝說に此文を載て。釋曰。今依此

銘文。應言壬午年正月廿二日聖王枕病一也。卽同時

膳大刀自得勞也。大刀自者。二月廿一日卒也。聖王。

廿二日薨也。是以明知。膳夫人先日卒也。聖王後日

薨也。則證歌曰。伊我留我乃。止美能井乃美豆。伊

加奈久爾。多義氏麻之母乃。止美乃井乃美豆。是歌

者。膳夫人。臥病而爲臨沒時。乞水。然聖王不許。

遂夫人卒也。卽聖王誄而詠是歌。卽其證也とみゆ。

吉笠拾遺などに引所は。みな平氏傳の餘毒也。又片岡山にて。飢人に遭たまひ

し事。補闕記にみえたれば。古くよりいふことにや。

されども。其飢人の奉答歌は。太子薨じ給ひしとき。

巨勢御杖がよめる歌にして。帝說に。上宮薨時。巨

勢三杖大夫歌。伊加留我乃。止美能乎何波乃。多叡

波許曾。和何於保支美乃。彌奈和須良叡米。美加彌

乎須。多婆佐美夜麻乃。阿遲加氣爾。比止乃麻乎之志。

和何於保支美波母。伊加留我乃。已能加支夜麻乃。佐

可留木乃。蘇良奈留許等乎。支美爾麻乎佐奈とあり。

かつ科照片岡山の歌は。日本書紀にみえたれども。この問答とは事たがへり。

自寫重刊せし。

明信が本はいまだ見ず。是は正安四年覆刻本に。本印奥記云。校合後漢數本。勘定釋義意趣。文字之有無。次第之上下。并點畫闕行等。取捨是非。若有難辨者。就多本用之。所以恐錯謬於卒爾。其功歷年月。願愚迷於寸心。定以朋友議。因爲弘通證本。勸重刊板印矣。願以此功德。平等施一切。同發菩提心。往生安樂國。建保二年。甲戌二月初八日。畢。此部筆功。大家師誨。敬寫印字。比丘明信とあれば、この本はそれより前になる。

貞應二年。佛子貞榮が慶圓上人の菩提の爲に。大般若第五十三を刻し。云。これ奈良板般若なり。跋生善。影刻當卷。實。彼菩提矣。貞應二年三月廿九日。佛子貞榮と書せり。弘安二年に。秋田城介藤原泰盛が大日經を刻し。跋云。爲續三寶慧命於三會之衆生。是則守大師之遺誡。偷令。遂小臣之心願。謹以開印板矣。弘安二年己卯四月日。從五位上行。秋田城介藤原朝臣泰盛とあり。同六年に。金澤越後守傳心法要を刻し。大休正念が序にみゆ。此本

賢が。御請來目錄を刻し。同年に。沙門知眞が。觀無量壽經を覆刻し。正和癸丑に沙彌宗哲。虛堂新添を刻し。嘉曆戊辰に。尼如淨。佛果老人心要を刻し。同己巳年に。尼道證が慧照語錄を刻し。曆應二年に。高武藏守師直が。首楞嚴義疏注經を刻し。觀應四年に。尊氏卿。大般若經を刻されけるをみるに。縱横

爭戰の際。何の暇ありて。かゝる盛舉におよばれけ

るにや。この外に。曆應の圓悟心要。貞和の雲臥紀談。貞和の雪峰外集。貞和の景德傳燈錄。正平甲辰。浦道祐の圓珠經。文和の勅修清規。延文の楊仲弘集。景德傳燈錄。康安の宗門十規論。貞治の夢想國師語錄。五燈會元。禪林類聚。應安の了菴語錄。應安小參。寧禪師語錄。永和の歷代編年互見。永徳の宗派。至徳の韓文。嘉慶の柳文。冥樞要會。佛光語錄。明徳の氏族大全。應永の三國佛法傳通緣起。佛祖正法直傳。無文關。枯崖漫錄。大毗盧遮那成佛神變加持經。宗派。顯戒論。徹翁語錄。大燈年譜。永享の慧照語錄。嘉吉の大毘盧遮那成佛神變加持經。文明辛丑の聚分韻略。同丙午の聚分韻略。延徳の慧照語錄。明應の三體詩。論語。聚分韻畧。大永の貞永式目。醫書大全。享録の韻鏡。聚分韻略。天文の聚分韻略。難經俗解。曆代序略。永祿の聖分韻略。韻鏡等は。今も稀々に傳はりて。古人再心の切なるを瞻仰するにたれり。余嘗て古板の跋を影抄し。其刻手の轉末を詳考し。古刻書跋四冊を著したり。くはしくはそれにいへば。こゝに略す。

九上宮太子の御傳。最信にして古きものは。法王帝説



二つともに。保元平治の零本成べし。時秋繪詞。爲家卿光長筆。妙安寺太子傳。住吉
 慶恩。日蓮聖人註畫讃。窪田藤兵衛尉統泰天文中文の人。道成寺。一は應永年中の畫。
 廣周筆。將門合戰。承久軍の繪。結城合戰の繪。さゝこ落草紙。小弓御所の軍。餓鬼草紙。光顯か木筆の歌仙。宰府縁起。十二幅の懸物なり。北釋尊繪。三通あり。文安卽位調度圖。惠心僧都繪詞。長門國阿彌陀寺障子繪。報恩寺淨賀筆。親鸞聖人繪。この外猶多かるべし。又詞の傳はりて。繪の散逸するものあり。敬歸繪詞。慕歸繪詞。

拾遺古德傳。賴印僧正繪詞。牛若物語なり。畫の傳はりて。詞の失たるものあり。産屋の繪。病の草紙の殘缺にやといひ。地獄の繪。陸信忠が繪によりて作れるものにやといひ。あるひは。今の人筆にて。古く畫るがごとくせし物あり。栗田真人入唐圖。是は吉備入唐と。信西樂圖とのふ。菅丞相の影。淡海公の像に因て。たつによつて。作りしものなり。雪舟が宋朝風俗の圖。ことにもしろきものなり。

⑧梓刻の古きは。稱徳天皇の百萬塔に籠られし經にすぎたるはなし。走湯山。永延二年三月。沙門延尋か記云。永觀元年未發。唐國本朝摺本寫本經論人師述作。合東八千餘秩納之とあり。永觀は。北宋の太平興國八年にあたれば。こゝに唐本といふは。北宋本なるべく。本朝の摺本もありたるごとく聞ゆれば。寶龜板につぎてのものなるべし。因云。蓋賜抄に。摺本尙然法師が將來せしとみえたるに。こゝに永觀の時。唐本の摺本とあれば。尙然よりも前に來りし成べし。其後摺本の事。台記に見えたれども。宋板の書をいふにや。また本朝の繡板にや。世に傳はらねばさだかならず。今もみる古板は。法然上人選擇集なるべし。是土御門院の御時に刻せし由。平基親の序にいへばなり。是に次では。建保二年に明信比丘が。觀無量壽經を

古かる墨得がたきものは。二行三行づ、截斷して。散逸せしむるなれ。されども今これをいかにかせん。鑒賞家に。黄紙。紺紙。金卦。銀界の格あり。まづ上宮太子の御經に。太秦切といふあり。廣隆寺に傳へたる經を。截斷せし成べし。それは紺紙金泥にして。塔の下繪あるあり。またなきもあり。また雲母地の唐紙に書れしあり。また白地。扇地細字あり。大織冠の經は。赤地金泥書寫の經あり。多武峯切といふ。金唐草雲龍の下繪あり紙にか、れしあり。白紙に金泥にてか、れしあり。紺紙銀泥あり。聖武天皇の御經は。紺紙金泥赤紙に遊されしもあり。淺黃色紙。白地黄紙あり。光明皇后の御經は。紺紙金泥金界の御本。または金界。小草小鳥の泥繪ある紙に遊されしあり。砂子地の紙。白紙。淺黃色紙。茶地に金銀の小切箔を散したるあり。蠟紙あり。吉備大臣の墨跡は。香紙にか、れしものあり。蟲喰切といふ。中將姫は。黄紙に稱讚淨土經をか、れしありといへり。此格によりて尋ねるとめなば。ふた、び完書となるべきなの辰跡も。べしとはおもはれず。その内に水火の災にか、りたらんは。いかにかせん。

④畫の古きもの。法隆寺に傳はれる。太子眞影に過たるはなし。大岡忌す。狛鑿部千廣・僧參微。白加。高麗師磨等の畫師。書紀にみえたり。今に。その名さへしる人まれ。是百濟國阿佐太子の筆なりといひ傳たり。よりておもへば。獨我國にのみ寶とするにあらす。緝熙睿思の殿にも籠らるゝことなく。建業奉華にも藏めしことをさかず。宇宙第一の寶繪といふべくして。金匱百重。緘藏すべき寶蹟にあらずや。嘗て其影鈔本を購求し得たり。縮寫してこゝに出す。冠劍衣服の制。當時の容儀を直視すべし。これにつきては。東大寺鴨毛屏風の繪。塔峯の大織冠像。淡海公像。當麻曼陀羅。みな是千歲以上の古物にして。水火の災をのがれ。今に傳はれる物なり。それより降りては。金岡。相覽。常嗣。飛鳥部。公忠等が筆は。稀々にさへ傳はらで。僅に繪所の人々の筆蹟のみ。これかれつたはれり。さきに藤貞幹。余と同じ癖ありて。畫卷の目を掲鈔し。好古の士に弘めたり。されども。なほもれたる物すくなからず。余が見し所を舉るに。春日社傍馬。三條院の御時に。畫し。ものといひ傳たり。兒觀音緣起。光明眞言。詞。爲重卿畫。住吉豐後法橋。小柴垣。爲家卿。書畫。同異本。後豐橋。光明寺十界曼陀羅。應恩。法眼。六波羅行幸。常盤の卷。

にいへる所は。當時の在さまをみるにたれり。中にも貝原が記ぞ。いと詳なるに似たり。

⑤多賀城碑は。賴朝卿の書つくしてよと詠じ給ひし。

壺碑なりといひ傳へはべりしに。今猶南部に壺村といふがありて。碑明神鎮座ますをきゝては。多賀城

碑は自ら多賀城碑にて。壺碑とは異なるべき。因云。多賀城碑。朝薦が位置。續紀と違へるよし。友人狩谷望之が。故京遺文に辨じ置たり。

多賀城碑は壺碑ぞと。はやくより人のゑりはべりしに。多胡碑はそれより古くありながら。知人もまれにて。

漸く。長崎豫州の東涯にかたりしを。その壺簪錄に記せしより。あまねく人の知處とはなりしなど。山吹日記

に。此碑の事をのす。世人は想ひをれり。然して宗長が東

本文の意とおなじ。六年。はま川。並松別當にして。濱川は。上野國群馬郡にあり。並松は。並松のあやまりなり。同郡の地名なり。法然上人傳にも。並松堅者といふ人みゆ。こゝの人なり。

色かへぬ松はくれ行秋もなし。此別當。俗長野。姓石上也。

並松上野國多胡郡辨官符碑文銘曰。大政官二品穗積親王。左大臣正二位石上尊。此文系圖有布留社あり

とみゆ。おもへば。本朝石碑の古き書にみえたるは。

この多胡碑を魁ともいひつべし。因云。この碑文の中に。給半といふ字あり。藤貞幹が説に。半は半の字ならんといひ。あるは半といふ人ありて。それに玉ひしなり。その半は。正しく小幡氏の祖なりといひ。源興口

は。半養相通じて。給養といふこゝなるべしといへり。されども續紀に此郡分たれしこと。何の故ぞとも記されれば。今辨へがたきことぞかし。就中。此ほとの一給はりてんには。小なることもあらねば。せめて。其ことのほに終りあるさるべきに。何ともみえれば。給半の義も今すこし事たれぬ心地とする。穿ちて説をなさば。貞幹が説のごとく。半の字の點畫を益したるにであるべきにや。何となれば。養養。辛辛。損益することみな唐人の筆にみえたれば。半半の損益も。なかるべしとは定めかれたり。いかに成給半ことよまでは。續紀の意にたがへるに似たり。

⑥平田寺勅書。弘福寺僧綱所務牒。東寺封戸牒。法

隆寺獻物帳のごとき。古墨跡は。佐史の爲せし所なるべけれども。其氣韻高尚にして。愛重すべし。敍

事の規式といひ。捺印の制度。みな唐人の爲せしものと。符を合せしがごとくなるは。彼國に準據せられし一端をみるに足れり。これよりのちの鬱檀の詩

は。何としてか宋朝に傳へたりしに。二王の風ありと稱讚せしをおもへば。是等の墨跡の傳はりたらんには。いかにあらむ。定めて淳化宣和の秘府に重護封

藏せられ。はては金虜の夷庭にちり失なんものなるべきに。或は勅符。あるひは秘藏愛重して。輕率にせ

ざるによりて。今日にいたるまで。嚴然として見存するは。古人の賜もの。瞻仰すべき事どもなり。それ

には事かはり。近世の好事ほど口惜しきことはなし。

續易簡方。

金澤本
の事本。

六卷。太平聖惠方。

宋板。金澤
本の事本。

一百

卷。四十六冊。

續日本紀。

法曹類林。

卷本。

三卷。續本

朝文粹。

卷本。

二十三卷。

清解眼抄。

金澤本。

一冊。東鑑。

應永十一年甲申八月二十五日。

白氏文集。

第九跋に唯寂房書寫
以金澤文庫御本一書之とあり。

云。寛喜三年辛卯二月廿日寂有。同廿

三日點了。右金吾校尉原奉重とあり。

病源候論。

元板。

宋景文

集。文選。

なほあるべきなれども。さのみやは。金

澤文庫も。後には學校のごとくなりぬると見えたり。

抑古毎國に學校ありしと。

七經孟子考文などにいへ

ども。國學の事は。令にも見えねば。

いかにあら

む。讃岐州廟は。菅公の建たまふところ。

尾張の州

廟は。大江匡衡が建立する所と聞ゆ。

江東部集
にみゆ。

是みな

國守の私議にして。公の定とは聞えず。

然も其跡だ

にもなくなりなき。

足利學校のみぞ。今に其國にあ

り。其史書にみえしは。鎌倉大草紙。

桂菴和尚家法

和點などに出たるのみにして。其草創何の時といふ

事定かならず。或は小笠原の家塾といひ。或は上古

國學の遺制といひ。或は足利義兼の建立といふ。共

に明證なし。姑く是を措く。本朝通鑑に。憲實の狀

を引て云。本朝州學存者。僅有數焉。以僧爲之主。

野之學爲最と有て。末に永享十一年己未閏正月初吉。

前房州刺史。藤原憲實と記せりといふ。また學校に。

孔子見歌器圖あり。其裏書に。永享十一年閏正月。

寄進足利學校とみえたるを併考れば。學校の草創

も古き事と聞ゆ。大草紙に。應仁元年長尾景久が沙

汰として。政所より今の所に移し建立しけり。近代

の開山は。快元と申禪僧なりといふによれば。いま

の學校は。古の學校の地に非ることあるべし。同書

に。此足利の學校は。上代承和六年に。小野篁。上

野の國司たりしとき。建立の所。同九年。篁陸奥守

になりて。下向の時。此所に學問所をたてけると見

えたれども。文德實錄を閱すれば。承和六年春正月。

遂擇詔除爲庶人。配流隱岐國とあれば。上野國司

たりといふは誤ならん。九年夏六月。爲陸奥大守

とあれども。此所に學校をたつべき因なし。東海談

に。分類年代記を引て。義兼の建立といひ。尊氏聖

廟に祈念せし事など。續本朝通鑑に。みえたれども。疑べ

し。桂菴和尚が説に。日本總足利處。學校學徒負笈

之地也。と見え。饒阿寺舊記に。學校興隆。左馬頭

基氏奉行之といへば。貞和の頃すでに所見あり。宗

長東路のつと。羅山文集。鵝峯文集。日光名勝志等

もまれ／＼には傳はれり。是實時が子顯時。その子貞顯。父子三世相繼で。學を好みしが故なるべし。抑金澤の文庫の事は。元亨三年。稱名寺住僧湛睿が。結界作法圖をみるに。文庫三つ。經藏一つあり。また古鈔本。法然語燈錄の跋に。建武四年七月。得_二了慧上人_一所集語燈錄草本十八卷。從_二其初冬_一。至_二臘月廿五日_一。與_二同門宿老四五輩_一。治_二定之_一畢。更寫一本。藏_二武州金澤稱名寺文庫_一者也とみえ。空花集に。觀_二金澤藏書_一而作といふ。七言律あり。また鎌倉大草紙に。武州金澤の學校は。北條九代の繁昌のむかし。學問ありし舊跡なり。是をも今度かの文庫を再建して。種々の書籍を入置とみえ。また慕京集に。二月釋菜金澤文庫にて行ふよし云々とみえ。梅花無盡藏には。文明龍集丙午十有八年に春廿有七己亥。進人_二金澤稱名律寺_一といひ。また北條九代記に。越後守顯時。稱名寺ノ内ニ文庫ヲ立テ。和漢ノ群書ヲ集メ云といひ。或は鎌倉志に。貞顯の建る所などみえたれども。古き書には。何の時に建しといふ證はなし。たゞ群書治要に。越後守實時の跋ありて。その首尾に金澤文庫の印あれば。實時が建る所にやといふば

かりなり。群書治要第十五跋に。此書一部。先年於_二京都_一書寫了。而當卷。説_二右京兆茂範_一加點了。爰去文永七年十二月。當卷已下少々焼失了。然間以_二康有之本_一重書寫點校了。康有本者。以予之焼失之本_一所書寫也。于_二時_一建治二年八月廿五日。越州刺史押とあり。評定傳等の書を按するに。此年十月廿三日。於_二六浦別業卒といへば。八月の頃は金澤にありしにや。また同書第十七跋に。建治元年六月二日。以_二勾勘本_一書寫點校終_二功_一。抑此書一部事。先年後藤堂州。爲_二大番_一在洛之日。予依_二令_一説_二所書寫下也_一。而於_二當卷_一者。假_二藤三品茂範之手_一。令_二加點畢_一。爰去文永七年極月。同祿成範。化_二灰燼_一畢。今本者。炎上以前。以_二予本_一勾勘令_二書寫之間_一。還又以件本。重令_二書寫_一者也。越州刺史平とあり。この年五月。依_二所勞_一籠_二居六浦_一と。評定傳にみえたれば。此跋は金澤にて書する所なるべし。然して評定傳。明年また引付衆の内に。越後守平實時と載たれば。又鎌倉にかへり。引付衆たるがごとく聞ゆ。この他の跋はことごとく鎌倉にて記せし處なるに似たれば略す。されども。其文庫元亨の時は三舍ありて。應安の時も廢せず。應永の末に。上杉憲實再興し。文明の頃すでに釋菜を執行したりし事。前にいへるにて知べし。また駿府政事錄。慶長年錄。丙辰紀行。澤菴紀行などにも。文庫の事みえたれども草創荒廢の年紀は定かならず。今に金澤本の傳はれる者。信充が親睹するものと。傳聞の者とを併せてこ、にします。まづ羣書治要四十七卷。卷子。寫本。尙書正義。宋板。二十卷。十七冊。論語正義。宋板。十卷。左傳。集解鈔。本。卷子。三十卷。太平御覽。宋板。百十四冊。世説。宋板。三冊。外臺秘要。宋板。三十四冊。楊氏家藏方。宋板。七冊。

籍。先從壬申年亂離已來。官書或卷軸零落。或部帙欠少。公爰奏請。尋訪民間。寫取滿足。由是官書髣髴得備。とあり。是によつておもへば。是公ありて後。斯道地に墜す。以て今日に至ることを得たり。然るに文學の士。公のかゝる盛徳まします事を。知人稀なるはいかにぞや。泉を飲て源を懷ふの情薄きにや。その後吉備大臣是を修飾して。初て釋奠の儀は定まりき。續日本紀。吉備公の傳にみえたり。今の世に。釋奠圖およそ三通つたはれり。それらを見て大寶の遺軌を想像すべし。菅家文章に。仁和二年正月十六日任讃岐守。四月州廟釋奠に會せられて。一趨一拜意如泥。踴俎肅踈禮用迷と作らせられしとみえ。慕京集に。金澤文庫にて釋菜ありし事みゆれば。上仁和のころより。下文明の末にいたるまで。邊土遠境といへども。文學に携はる所にしては。釋奠釋菜の儀ありしにや。武智鷹公の圖書經籍を檢校せられしをおもへば。古へより藏書の災によりて。亡失ぬる事いくそばくぞや。まづ石上宅嗣卿の芸亭。續日本紀に。捨其舊宅以爲阿闍寺寺内一隅特置外典之院名曰芸亭如有好學之徒欲就閱者悉聽之仍記條式以貽於後其略曰内外兩

門本爲一鉢漸極似異善誘不殊僕捨家爲寺歸心久矣爲助内典加置外書地是伽藍事須禁戒庶以同志入者無滯空有兼忘物我異代來者超出鹿勞歸於覺地其院今見存焉臨終遺教薄葬薨時年五十三時人悼之。經國集に小山賦有。藤原賴長公の宇治の寶藏。蓮華王院の寶藏。宅嗣芸亭。宇治寶藏の本は。一つも傳はらず。蓮花王院の本の事は。群書治要第廿二の跋に。以蓮花王院寶藏御本一校并寫點了。直講清原。第廿五の跋に。文應之曆。仲冬之律。爲進上辛酉歲運勘文。參花之次。申出蓮花王院寶藏御本。校合寫點了。蓋是依越州使君閣教命也。直講清原押とあれば。文應の頃。寶藏いまだ廢せざる。と知べし。其御本典書に長寛二年五月十五日。正五位下行大内記。藤原朝臣敦周點進。または課短材點進之。于時長寛二年之秋也。河内守。從五位上。藤原朝臣敦綱。また長寛二年五月十五日。散位從五位下。藤原朝臣敦經點進。また長寛二年六月三日。點進之。元來無點本之上。文字多闕謬。頗雖刊正。猶有不通。仍加押紙。粗呈其所。助教清原眞人類業と見えたるとあれば。此御本は。長寛元年に蓮花王院造られて。その明の年に。敦周等に點進せしめられし本と聞ゆ。又兼實公記に。蓮花王院寶藏。所納之寶物等散失事。といふことみえ。玉葉集に。位の御時。蓮花王院の寶藏より。芦田鶴といふ筭を出されて云々。正安三年の夏のころ。法皇得させ玉ふと云々とみえ。雍州府志に。寶庫無幾而廢。于今書冊。貼蓮花王院之印者。偶殘とみえたり。武藏守泰時が遺書を求めし。東鑑。貞永元年十二月の條。善信が文庫を構へし。東鑑。承元二年正月の條。或は帳簿の類。或は勞疏の類といへども。愛護の意はおなじかるべきなれども。あるはうせ。或は災にかゝり。片言隻辭も傳はらぬぞ口惜し。さては越後守實時が貯へし書どもぞ。今

に作る。ところなり。此銘の字體尤奇といふべし。まづ邊を邊に

えたれど。邊に作れるは。唐李邕が牡丹詩にはじめて見えたれど。此

銘よりは遙の後なり。因云。李邕が岳麓寺碑に。邊に作り。褚遂良

が哀冊文に。邊に作れるを。異體とおもふは。近き于祿字書を見の故

なり。御を却に作るは。王右軍が辭中令帖と。呂秀麿が景教流行の

國碑に見えたり。然るにこれも。顔元孫は。御上俗下正といへり。

願を願に作るは。鍾繇が維摩經と。右軍が辭中令帖。顏真卿が麻姑

仙壇記に見え。与を與に作るは。于祿。また同じき寺にある。座

字書に。与上俗下正と見えたり。釋迦佛光後銘。この二つの銘は。法王帝就にみえて。古くより

のにして。これが右に出あるひは。隋帝にたまひし勅書。藥

師寺塔擦銘。みなこれ平城の京よりむかしの物にし

て。四海に類ひなき寶なりといへども。源をおもへ

ば。太子の遺教によれるものなるをや。

◎法隆寺寶物に。賢聖瓢といへるあり。孔子と榮啓

期とを彫たれば。かくは名づけたるなり。よつてお

もへば。聖像のもとも古きは。是にすぐべからず。

それ西土に傳るものは。みな唐人の筆を本とす。本

朝につたふる所は。隋の代にあたれば。はるかに先

だつものなり。余かつて聖像考一編著せり。長けれ



公の本傳に詳なるを。續紀に載せざるは何事ぞや。

傳曰。大寶三年七月徙爲大學頭。公屢入學官。聚

集儒生。吟咏詩書。披玩禮易。揄揚學校。訓導子衿。

文學之徒。各勤其業。和銅元年三月。遷圖書頭。兼

侍從。公朝侍。內裏。撫。候。綸言。爰以其間。檢校圖書經

るに。鍾繇本と、羲之本とは。一なるに似たり。然るに趙翼が陔餘叢考に。玉壺清話と南史とを列舉し。所謂鍾繇書者。宋人傳記之誤といひ。又劉公嘉話錄を引て云。千字文。本梁周興嗣所撰。而有王右軍書者。皆當時集字成之也。按。梁時撰千字文者甚多。梁武嘗自製千字文。命沈衆爲之注。見南史沈約傳。又南平王嘗使蕭子範製千字文。命記室蔡遠爲之注。亦見南史。此外千字文の事。說區々あれども。これによれば右軍をも集字せしものとおもひしと見えたり。されども。本朝につたへたる年月を以て推考するに。漢魏の間。千字文世に行はれしことみゆれば。鐘大尉が本僞作ともいひがたし。章帝書といふものは證としがたし。其章帝書を取て。漢時千文ありしといふものは。後山列氏が説なり。文獻通考に。列氏が説を引ていはく。嘗疑千字文。世以爲梁散騎常侍周興嗣所作。然法帖中。漢章帝已嘗書此文。殆非梁人作也。章帝書の説は。黃魯直が跋。章草千字文曰。章草言可以通章奏耳。非章帝書也。日知錄とあるぞよくかなへりといふべし。かつ章草は。漢元帝時。黃門令史游が作る所のよし。張懷瓘が書斷にみえたり。文章の奇古典雅なるは。憲法の右にいづるものあり。

るべからず。是上宮太子卅二歳の御時にして。彼國隋煬帝。大業元年にあたり。漢魏の遺風を追ひ。六朝の文格に準せられし事知べし。憲法の字法。漢魏にその第二章に。何人非貴。是法非字のごとく用ひ。是貴人の格なり。史記陳平世家に。爲相非治事。また賈誼傳に。漢法今非之行也と見ゆ。みな平字の法なり。其第三章に。君則天之。臣則地之。之字を助字のごとく用ひらる。是論語に亡之命矣夫。家語に若性命之形骸之不可易也。金縢に禮亦宜之。文王世子に冬亦知之。史記に以人魚膏爲燭度。不滅者久之とある。みな語助也と注し。其四章に。上不禮而下非齊。下無禮以必有罪。不字を無字のごとく用ひ玉ふ。これまた周秦の法なり。禮記三年間。無易之道也といへる法に。無猶不とあり。是等その大略なり。さては上宮太子は。その詳なることは。別に憲法詳注一巻あり。文字の太祖とは申奉るべき。英道稚耶子太子。よく典籍をよみ。かつ高麗無禮の表を破られしといふ事。書紀にみえたり。文章の傳はられば。學問の祖といふべきのみ。げに文章は不朽の盛事といふことは。よくいひかなへける。今に於て太子の御蹟を考へんもの。憲法をすて、何をかとるべき。走湯權現に籠られし御書。走湯山縁起に鈔出せり。云。吾國佛法弘流之緣地。濟生利物之勝境也。雖然國人舊邪難改。俗情傲慢。就中。國臣守屋。悖逆盈胸。尤可抑擊。神道合力。降邪徒。伏弘俗。遂利生業。吳弘通本誓。云々とみゆ此時勅諭ありて。御諱を東明山廣大圓滿菩薩と號しけるとぞ。是即走湯權現の御事なりといへば。善光寺如來と往復の御書。法隆寺に浮たることにあらじ。善光寺如來と往復の御書。ありときく。書籍に見えしは。存覺報恩記。瑤蘂抄などにみえたれば。ふるくよりいふこといきこゆ。此外に太子の御書といふもの。ありやきかず。法隆寺金堂坐樂師像後光銘。太子にやとおもへども。東宮聖王天命とみえたれば。史官の筆なるべし。これは推古天皇十五年

建紙墨令詳願藉甚母嫡後稽仁連比堅頑神憤恃睦以受伯叔布裕丸疲移舊取字宙玄黃歲盈餘失列宿調陽峨嵋珠劍垂豪瞻身口昆崙胎工指抗故賦真微云密踐活刺畫經丹青漢宮女形端盡景行傳止溫請辭白駒政賢增情性恬精確房悅豫接酒瑞杯侍巾綰御再拜承晉旋璣曜明曉懼懼的歷陳根輪凌雲具象顯熱獲捕蒲柚早異享辱牆續存真寫寫傍啓隱華千盤鉅父牧韓馮高日晝眠老散度呂鐵和同殿嚴使維續彼田墓恒振南家更土號韓馮高日晝眠老散度呂鐵和同殿嚴使維續彼田墓恒利雨疏數享香宴古劬赫澤浴駐殺內府致達疑皆毛簡答於依館彭冠高茲阮天哺騰恩秋地冬馳麗恒惠衣裝水鳥本繁頗勒碑實破確夜封戶壁藍筵短步孤酒嘉猷持物心動輒對極觀擊擊吹笙賦瑟伊尹阿衡匡綽漢寧納駕肥惻惻陰息履薄改環催造大觴規甘棠去唱上奉諸姑始匪虧外隨都邑寸陰終時過所定來簞得燕羊淡師鑄潛湯大位樹寶實與當福空念絲羅染剋日作事是聽福緣因登入廬分投展退歸自肆懷鑄銘翠遼州約曉祚彰吳珍離量鳳若竟右既集如初亦聚于民與兵洛極化無不及充四塞宗廟效靈遑荒竭力明王寶舉八方仰則誅斬非道勳賞黜陟有功必美善可逐伏捷或仙苑隨蓋府身縣修序軍國精志引要文武斯妙五緯星辰下照渭殊流河川交映富貴猶欲紀長從命嚴惡並輕何謙敢能知任運官祿解網遊謁居謝後長饒適富貴猶欲紀長從命嚴惡並輕何謙敢能知任運官祿解網遊謁芥出制體歡鞠養基攝益兒奄弗切滿兩浮淨鑑視張納涼涼頭俯束帶橫扶節翦微且隨何濟合曲宅早澄深忘慮誤廣升趙霜近耻其地果奏志跡繼銀鐸奔安業信起收給資根恩年福嗣早燕錫闔巨木筆懸閭暑往寒重永載成閨人安業信起收給資根恩年福嗣早燕錫闔巨木筆懸閭暑往寒麥馨火寒生飢膳霄摩王英帥才器談誠諸翁譽笑綺綺安處士惶最敦教食帝俊仕會朝審察法刑鳳翔律樂感禽獸兄弟父慈子孝篤訓雅操庶幾肅馬通九部沛減泰羽傳說佐殷洞庭遼遼謂助者焉哉乎也。祕府之飄宋板大明律之疑不知聞帖之首。已有三章草千文。雖未必是漢章帝書。亦可證千文不始於梁人矣。米元章書家中韓豈許可者亦稱。此帖筆力圓熟。定爲右軍書。臨池之工。得不持重。奉爲事範。損庵老人書とみえたり。又江村消夏錄に。此帖を載て曰紙本。高

八寸。長九尺三寸。凡七接。計一百十三行とあり。今體閣倉帖に。一錢。至末尾滅秦及馬哉乎也等字。倍大筆圓遒勁。筆力雄偉。前有雙龍圖。宣和鈐印。祕府鈐印。內教珍玩。晉府書畫之印。希世之寶。黃綰隔水上有御書孤印。晉國奎章。項氏收藏。諸印。張氏珍玩。楊氏家藏。後有明昌寶玩秋堅圖書。鈐記。有宣和政和。小璽。歐陽玄印。楊士奇印。羣紙有羣玉中秘。明昌御覽。平海軍節度使之印。吳俊仲傑小印。鬱閣齋管華之入石。とあれば。高士奇がみるところの本。即この本の原書とみえたり。然るに行數と寸尺。鍾繇が本に。河淡海鹹の字なくして。周興嗣が本にはじめてみえたれしがたかるべし。且今の本と。章草千文とは。全く同じくして。即全篇周興嗣が次韻せし本なり。全篇周興嗣に出たりといふ證は。鍾繇千文に見えたる熟字。悉く位置をかへたるまでにして是を出し。その上嵇琴阮嘯等の句あるにても知べきなり。嵇中散と。阮嗣宗と。共に西晋の始に出たる人なれば。漢人の知べき所にあらずるなり。然れば千字文の世に行はる、事は。遠く漢魏に濫觴すといへども。次韻本と成しは。周興嗣を始とすべし。鍾繇が本のこととは。宋史李至が傳と。玉壺清話にみえたり。玉壺清話。與國中太梁武帝得鍾繇破碑。愛其書。命周興嗣次韻とあり。梁書には王羲之が本とみえたるに。いかに鍾繇が破碑といへるは何の書によられしや。然れども先に載る王羲之が千字文に。雙龍及。彼是を通考す宣和祕府等の印あれば。大宗にも見られしにや。

を奉つりしを。斯傳へあやまりしにや。古事記を撰ばれしことは。千字文傳はりし後の世の事にて有しかば。彼王仁が來りし時。論語并に。小學書一卷を奉りしと聞えしを。今世に行はる、所によりて。その獻りし小學書は。即今の千字文の事なりと心得あやまりて。斯はゑるせるなるべし。同文通考にいへり。といはれ。本居舜庵は。李選が集註千字文の序に。晉武帝時。大夫鐘繇是を造れりといへるによりて。晉武帝といふは。應神天皇と同時に當れば。此時すでに千字文いできはしつとも。末世に弘まらず。其後次第亂損ひて。讀がたかりしを。遙の後梁武帝が時に至りてぞ。韻を次で全くはなりぬれば。世に廣まりて百濟あたりまでも傳はりけんは。又その後のことなるをや。古事記傳とみえたり。此頃。是等を瓦礫雜考に辨じて曰。淳化法帖。漢章帝書。今の千字文の内の語なれば。今の文。與嗣に出たりといふは。誤ならんといへり。信充が管見には。章帝書八十四字。淳化閣帖第一。列張。盈晨。海賦河漢。鸞羽翔。龍師大帝。鳥官人皇。始制文字。乃服衣。遐邇壹體。罔談彼短。無恃已長。尺璧非命。寸陰是競。孝當竭力。忠與溫者思。懷終宜令。學優登仕。攝職從政。都邑二京。背芒面洛。浮渭既集。墳典亦。乃八十四字なり。日知錄に百餘字といふは。何の帖に出たること。猶たつねべし。東觀餘論に。此書非章帝。然亦

前代人作。但錄書者。集成千字中語耳。歐陽公疑以爲。漢時學書者。多爲此語云々といふ。得たりといふべし。歐陽公。漢時學書者。多爲此語といへども。辰宿列張の語は。周興嗣が次韻本にみえて。義之が千字文には見えず。周興嗣が次韻せし事は。南史に。帝以興嗣爲工。擢拜員外散騎侍郎。進直文德壽光省改。武帝以三橋舊宅爲光宅寺。敕興嗣與陸倕各製寺碑。及成俱奏。以興嗣所製。自題銅表。銘柵碑碣。檄魏文。次韻王羲之書千字。並使興嗣爲文。每奏帝稱善。賜金帛云々。南史周興嗣傳と見えて。元王羲之が書する所の千文を次韻せしめて。今の本となしたるなれば。今の本。漢の時より有しとはいひがたし。かつ千字文。周興嗣が作るころにはあらず。其亂たる本ありし事必知すべし。その上に義之が書とあれば。是又義之が作る所にあらずとゑるべし。義之が本は。鬱岡齋帖中に載するところの千文なるべし。鬱岡齋墨妙第四。晉王羲之書。魏鍾繇千文。魏大尉。鍾繇千文。右軍

將軍。王羲之奉勅書。二儀日月雲露嚴霜。夫貞婦潔。君聖臣良。尊卑舊別。禮義於茲。存而相欣。離感悲傷。岫號鸞機。解此勅。豈毀褒飯。研嘆徘徊。側目潔落。葉稷稅稼。穡困唐虞。禪讓率賓。歸德飛龍。在田圖書。見已。邇多世秋毫席飯。瑞誰適委。翳渠荷射。牒施修薪。孔立升堂。填典之盛。李林梧桐。新執表正。學優

柳菴隨筆初編

上 塾 源 信 充 著

○西土の書籍。最先本朝に傳來するものは、古事記に
字文なり。百濟是百濟照古王の貢獻する所なり。古事記に
して。朝鮮金思恭が歷代史略によるに。照古王といふもの百濟に然り。
古古王といへるあり。百濟蓋婁王子。延嘉八年丙午正月立。建
安十九年甲午九月薨。在位四十八年とあり。然る時は。神功皇
四年。本朝成務天皇三十五年に當り。その建安十九年は。神功皇后十
四年にあたり。古事記に所謂應神十六年に先だつことは七十餘年なかり。
又按に。肯古王の母弟に。古爾王といふあり。魏青龍二年甲寅
立。晉大康七年丙午十一月薨。在位五十二年。是應神十六年に
の五十一年にあたり。是によれば。照古王は古爾王のあやまりに
有べき。即我應神天皇十六年にして。晉武帝大康六年に
あたれり。論語十卷と見えなければ。漢石經か。或は
何晏集解本なるべし。その故は。漢書藝文志に。論
語二十篇とありて。卷數を記さず。是前漢の時十卷
本なき事知べし。その十卷本とせしは。後漢石經を
始とす。論語校勘記。所引漢石經十卷。據洪适隸釋
所載石刻殘字一とみゆ。此後何晏集解を作る。又石
經により十卷とす。梁皇侃疏。唐石經みなおなじ。
因云。二十卷となぜせば。校勘記に引所の。十行本を始とす。その本。
元徵宏桓慎微樹巨敦讓貞憲竇恒等字々外並加一墨圈といへば。
是宋板なる事知べし。けだし那今博士家に傳ふる集解本は。陽
詵が疏を作りしよりなるべし。

けだし漢魏の遺傳なるべき時は、珍貴といはざるべけんや。吾嘗て、嘉曆寫本の論語影鈔本を見たり。是禪澄なるもの寫す所にして、その本書は、仁治三年に寫すところの清家本なり。また弘安寫本集解本。建武寫本集解本をみる。みな卷子なり。又吉漢官が所謂卷子古鈔本。舊板大字本。大永鈔本。永錄鈔本。清原宣賢本。國訓本。伊氏本。中に就て卷子本は。大和國より出で。菅丞相の筆なりと傳へたり。されども題跋もなく。聖廟真跋の可否はえらず。たゞ貞和二年の題字あり。これは標榜のときの志語なれば。それよりふるく寫せるもの成べし。梓行の本は。正平板。明應板。天文板あり。正平板は。堺浦道祐といふもの刻す。友人数谷望之が。須原屋茂兵衛に購はせ置たり。近頃市野光彦。校勘して覆刻す。明應板は。周防の平武道といふもの刻す。所収の板式は。予が古鈔書跋に詳か。又按に。清の錢曾が讀書敏求記云。得高麗鈔本何晏論語集解。此書乃遼海道藏公諱應鑒監軍朝鮮一時所得。甲午初夏予以重價購之。子公之仍孫。不肖。行間所注字。中華書有識之者。詢爲書庫奇珍。居然東國寶鈔。一珍珠船也。筆畫奇古。如六朝初唐人隸書碑版。居然東國寶鈔。行間所注字。中華書有識之者。詢爲書庫奇珍。未二行云。堺浦道祐居士。重新命工鐫梓。正平甲辰五月吉日謹誌。末。知正平語の美事にして。錢曾が鑒識もまた奇とすべし。疑以爲く。周興嗣が本。應神の朝に有事をえず。是によつて前筑後守源君美朝臣は。王仁が獻りし一卷と聞えしは。凡將篇。大甲篇。急就章等の小學の書

柳菴隨筆初編目錄

① 論語	千字文	二五〇
② 憲法		二五三
法隆寺金堂藥師像銘		
同釋迦像銘		
③ 聖像		二五四
④ 釋奠		二五四
讚岐學校	尾張學校	
足利學校	金澤文庫	
⑤ 多賀城碑	多胡郡碑	二五八
⑥ 古墨跡		二五八
⑦ 古畫		二五九
⑧ 古刻本		二六〇
⑨ 太子傳		二六一
⑩ 宋板書		二六三

る。松の舎のあるじ與清。

へり。師たらん道。このよつの外にあるべくもおぼえず。ゆめなをこたり玉ひそ。およそこゝろのこまはつなぎがたきものなれば。ようせずばあらぬひだりの道にもまどひいりぬべくなんある。うきたるすぢにおもひほこり。言葉をはなちてかしこ人をそしり。くねくしき心もて物をねたみ。ともがらをたて。ひぢをはりて。ものくるはしき迄あざれあへらんを。あまきこさけの友と頼まずて。たゞあはしき水の清きまじはりをえらびたまへやといふに。げにむべなりとうなづきよろこばひてまかでられき。此ごろひとつのさうしをふところにし來まして。いかでこれがはしに一言そへてよとて。とう出られしを見るに。よくもかうがへ。めでたうもかきなされたり。彼四のみちをこゝろにしめ。夜を日につぎてつとめずば。いかでか斯るわざもしいでたまふべき。かくしつ、年月へもてゆき。學のらうつもれらん日まで。余も齒さちあらば。白髪かきをさめ。ひぎをりふせて。柳菴。吾君に物とはでやはあるべき。かういふはまだよそぢに三とせたらねど。やまひがちに立居ふるまひものうく。おきなめきて世にありふ

柳菴隨筆序

昔者。洪景盧著容齋隨筆。稗官小說。悉皆可以備考證。則隨筆之述。亦不可熄也。而有論經義以疏事理者。詳事物以闕徵古者。或有詭怪隱僻事涉夷堅者。孟浪洋々說屬齊諧者。是皆雖作者之志爲。然亦學問之淺深。識度之雅俗。昭然而不可掩也。夫隨筆之述難矣哉。柳庵源信充。字伯任。其先甲斐國源氏。數世事鈴鏑。信充祖父朋英。字子俊。少好學。長與一時知名之士。周旋往來友善。其學專勉經術。未嘗臻乎唐以下所謂稗官小說。信充幼承祖訓。讀誦日數百千言。其十二歲也。父和恒共來見余。々出蘇陸之文讀之。頗通其義。余奇之。益勉強之。爾後讀誦不懈。十九著上野國史稿七十卷。余聞之於堅田紀公。請祭酒林公。貸昌平學問所御本。大有所證發。今年廿六。述斯隨筆。余披讀之。其辨析事理。蓋似顧炎武趙翼。抑亦論經義以備徵古之類也。未嘗涉夷堅齊諧之比。其論事定理者。後年蓋有改之。今姑亦存一通之誼而已。便斯隨筆。亦不可熄也。而知信充者。莫先於余。是余冠一言於卷端。而不拒之謂也。文政己卯首夏廿

八日伊勢守堀田一知書於金精館東窓

今より三年よとせのむかしにやありけん。柳菴のあ
るじがとぶらはれしをり。何くれの物がたりのついでに。余かたりけらく。吾君は齒まだはたち餘りにて。行すゑの春秋にとみたまへれば。學の道すゝまゝに。其名天の下にとゞろき玉ふべし。余はおろか人なり。まなびあさく心をちなし。吾君に立こゆるは十年あまりの齒のみなりけり。いでやこのやはひたかきをおもておこしにて。翁めかいたるさいまくり言ひ出べし。まげてきゝたまひてんや。そもく學者人の師とあふがれんに四のみちあり。嚴にしてはゝからるゝひとつなり。おきなびまめくしくて人にうちたのまるゝふたつなり。ふるきせちを解明してまのぎ侵すこゝろなきみつなり。あかしを引てものを能ことわるよつなり。博くきゝおほくゑるは是にあづからず。古き語にも。水深ければふちにうづまき。葉落れば根にかへる。教を受けるものことわりをえれば吾師のうつくしみをおもふ。言にかへしせぬはなく。なさけにむくいせぬはなしとい

伏笠をめす大そらを思ひの餘りにうち詠て

別れ路の泪の雨をいとひてやしら菅笠をめす臘月

【伊勢踊】

寛文八年印本
知(イ加)友撰

ふせ笠や逢うてうるさき人時雨

玄達此句よく醒翁の説に合す【牛刀毎々編】寛文三年

三(イ十)酒を賣る市よりも名は立まさり群集の中を

忍ぶ伏笠 忍山々人延寶六年印
本不ト撰【江戸廣小路】元禄三年印
本三千風臥笠

の嵐や梢花のかげ 調和【行脚文集】元禄三年印
本三千風發句

酒田女も下戸時鳥は得ぞとめぬ 玄順脇世をふ

せ笠に青嵐ふく 三千風 是は天和三年の吟なり

因に云近松門左衛門が作の【虎が磨】といふ淨瑠璃

に「足から越て色名所歌詠に見せばやこゝの一趣

向大磯小磯けはひ坂俗も法師も名を捨てつそろば

んすて、町人は戀の相場に手をしめてあすのお首

尾の雲を見る武士は道具をふせ編笠に鎌倉やうの

つかみざし」とあり今もおこなはるゝ道成寺の踊

歌にふせあみ笠といふ事あるは此文にならひてか

けるもの歟

▲焼印編笠 「花街へ通ふ者に茶屋にて貸す編笠

なり目じるしの焼印を押しておく故しかよべり貸シ

編笠といふもおなじ【二休ばなし】貞享五年印本五の巻「過

し頃まで都の西うき世町につとめし鹿戀の女郎かく
れもなきそれしやの色名はいはずとも焼印編笠さる
ほどの人は中略 思ひしるべし【好色伊勢物語】元禄年
間印本
三の巻たにばくち云々といふに註して「丹波口なり
こゝに編笠茶屋といふありやき印編笠をかりて出口
まで人目をつゝむ」

柳亭筆記四の巻終

の頃より玉縁といふ編笠のいできしこと前に見えたりこゝにいふ處を合せ見れば玉縁の笠は寛文中にも

つばらおこなはれしものなるべし【談林十百韻】延寶三年

印前小部屋の別れをしむ妻藏 雪柴 玉縁の笠に

つらぬく泪玄れ ト尺【西鶴大鑑】貞享四年一の巻目

黒不動へ參詣の事をいふ條に「風流なる美少玉縁笠

に淺黄紐の仕出し鬚髪の色ふかく朝顔染の大振袖云々」美少は落字か原本見へし

【異本洞房語園】に見えたるは勝山の條下に引けり前に見えたる【洞房語園】に玉縁一文字

今はまれなりとあれば此笠は熊谷笠よりは前に廢り

しなるべし元祿十六年印本【俳諧桃の實】撰者允峯が

詞に「玉縁の笠きたるは今の世に乞食女ならではなし」元祿に廢し證

▲一文字 【俳諧千代見草】不角撰 波に響のうつる鰯

拍子」無筆さへ知るあみ笠の一文字 夜章」

▲目せき笠 予さきに日ふせき笠のつゝめならん

といひしはわろし醒翁云編目の細密なるを目狹笠と

稱すと此説をとるべし【打網】に目狹と云名あるも是

にて能く聞えたり【正章千句】正保四年印本正章は眞室の眞名也 二階の

月に狂ひやむ袖」破れより露もる着笠目せき笠」正

保の句に見えたれば寛永より此名ありしなるべし

【西鶴一代男】天和二年に「男は本奥島の時花出女郎も衣

装づき玄やれて墨繪に源氏紋所もちひさくならべて

袖口も黒く裾も山路に取るぞかしそれまでは目せき

編笠畦足袋に紅の絆紐今の素足に見合せ笑しき事も

あつて過侍る」とあれば目せき編笠は天和の頃には

や廢れしなるべし【松の葉】元祿十六年印本に、むらさきとい

ふ小唄に「姿をみればきよはらやふかやばなりしお

てきだちうきよをしのぶめせき笠雨はふらねど戀が

ふる云々」ふかやぶをふかやほとりなしたりこれ

も目せき笠のすたりし一證とすべし

▲伏笠 【紫の一本】天和三年浄書に曰「此待乳山の風景

言語に及びがたし彼土手通ひする二丁だちの船は淺

草川より新鳥越橋へ入る汐なき時は橋より手前にて

下り山の麓を歩行にて行を山の茶やから知る人の見

ることもやと熊谷笠をふせてかぶり云々」醒翁此文

を引て前さがりにかつぎて面の見えざるやうにする

をすべて伏編笠といへりといふ説尤よし俳諧には伏

笠と見えたりあみ笠にもあれ菅笠にもあれすべ【ねこと草】

寛文二年印本「西にかたぶく月さへもたれに人目を忍びてや

▲都の富士 【西鶴大鑑】三の巻えい山のちこの事

をいふ條に「都の富士といふ時花ベヤリでの大あみ笠をか
つぎ」とありたれくも知るごとくえい山を都の富
士といへり是等も其形によりての名なるべし

▲臚富士考べし

【色三味線】

寛永イ寶
永正徳カ

其頃のしだし

とて千枚形の肌着黒羽二重に隠し裏同黒羽織に王と
いふ古文字の大紋上繪なしにいたらせ袴高く裾とつ
て大小よしやがかりにぼつこみ臚富士といふ大あみ
笠ゆたかに着て云々 【役者色仕組】享保五
年印本に「十七八
の大振袖紫の絹ちいみに紅の袖べり筋びろうどのは
やり結び臚富士の編笠ふかく大小さしぶりたしかに
女と知られたり」これは女の男に出だちたる條に見
えたり娘形氣「女の身にて我女の姿をきらひ筭曲マ
の髪を切て二ツ折に髷マツ出して若衆めきたるたてかけ
にゆはせ不斷の風俗も裾みじかに裏をふかせ八反掛
の羽織に金ごしらへの中脇指おぼろ富士といふ大あ
み笠きて云々」これはちかきさうしにて當時の風俗
を記しゝにはあらず貞享元祿の頃もつはら編笠のお
こなはれしむかしの事をいへる也さて是等の笠の名
俳諧の句には見えざれと其角【五元集】富士 笠取レよ

富士の霧笠時雨笠」といふ吟あり是は富士の句にて
笠の句にはあらざれど霧や時雨のふりかゝりて富士
の姿のたしかに見えざるを笠をかぶりて顔の見えわ
かぬ人に譬へ笠をとれよといひかけたるにて是も臚
富士、都富士、富士おろし、などいふ笠の名ありし故
に富士の霧を笠におもひよせしならんと書のせてお
きつ

▲玉縁

玉縁といふはさまで深からぬ編笠也笠の

縁を見事に組たるよりの名なりとも又革にて玉ぶち
をとりたるよりの名なりとも聞けり何れが是か【吉
原つれく草失墜】延寶二
年印本三谷通ひする者の事をい

へる條に「くらひ高くやんごとなき人みづからいや
しきふりに玄なして人にあはじとも笠に玄のぼる
ゝこそおもしろからめ云々」同書注、こも笠こもそ
うの笠なり昔はかやうのものまで今とはかはり玉ぶ
ち一もんじとてすぐなるをかぶりこゝみたるはこも
そう笠とてきらへるが此ごろはこれをもつばらにす
るなり」とあり【むかしく物語】に「萬治の頃より
江戸中かつぎ無之女かちにてありく時ふくめんのう
へに玉ぶちといふあみがさをかぶりてありく」萬治

人がましやな御忌參

安昌

【蛇鉢】

延寶七年印
本言水撰

世の

あつさいとふまでこそ熊谷笠

如蛙

【江戸大坂通

し馬】

延寶八
年印本

壽永に沈し尼棚の空

言水

巾着切

熊谷笠に引くんで

梅朝

當世鞘の鯨にらみゆく

言水

【大夫櫻】

延寶八年
遠舟撰

須磨寺奉納

花軍熊谷笠

をしろしかな

正信

熊谷笠停止たるべし花見衆

友干「長刀熊谷笠や江戸櫻

善廣

【江戸辨慶】

延寶年間
言水撰

あらそふや花に進て熊谷笠

松意

【東茶屋

友嫺】

天和頃

「高臺寺前鹿島屋崎なりふりは春風に青柳

のなびくてい女郎花の風にもまれなでしこの露にぬ

れたるよそほひかしまの明神もくまがへ笠にて忍ば

んはぢやうのこと」【天和笑委集】に見えたるは前の

男子の髪の風の條に引り

【四季咄】

貞享年
間印本

に熊谷の中

笠といふ事見えたるは熊谷笠のうちに形のちいさ

き方をいふなるべし【人倫訓蒙圖彙】

元祿三
年印本

六の巻に

「編笠蘭をもつて是をつくるなり當世忍笠熊谷笠あ

り」と記したれば元祿の頃はまれくにはかぶるも

のもありし成べし【飛鳥川當流男】

元祿十
五年

何貴源之助

といふものゝ事をいふ條に「幸今日は十七日觀音さ

まのゑん日宿も首尾よければ清水寺へ御見まひと熊

谷あみ笠ふかゝるときたるも云々」【松の葉】

元祿十六
年印本

に載たるさんやをどりとといふ小唄に「上略うき世しの

ぶのふかあみ笠の姿かたちで若きは見ゆるしのゝす

ゝきでするとげぬよしなの思ひぢやなたれもすいた

るお江戸のふうやいくたこやのゝあつもりさまがく

まがへ笠にはちく杖ニツ紋のちんちりめんのべんべ

をさせて云々」【洞房語園】

元文三

「日本堤謠あるは白

柄ハツバの大小よしや風の擱ざし玉ぶち一文字今は

稀なり熊谷笠は深く八所絨たるは浅しいづれも面を

覆ふ中に額際揉あげの髪自慢に屹として素顔なるも

あり」此さうし元文の印行なれど此文は元祿の頃の

さまを書るにやあらん

▲富士おろし

富士おろしは編笠の名なり其形富

士に似たる故の名なるべし【西鶴大鑑】

貞享四
年印本

「年の頃

廿四五と見えたる人富士おろしといふ大編笠をぬげ

ば紫の手細にて頬かぶりして顔は見せざりき」とあ

り【錦繡綴】

元祿丁巳
甲戌紀行

原回頭 朝霧や空とぶ夢を不

二風】【落花集】

寛文十一
年似仙撰

雪やつれて江戸風になる富

士風

重頼

【鷹筑波集】

寛永十五
年印本

雪ふりの編笠な

れや富士の山

道節

の詞にて編笠にある名を笠におふせし句歟【今様曾我】元祿年問印本といふさうしに野夫編笠をかぶりて吉原

へかよふ事見えたり、按に野夫は假字にて八符なるべし編目の八ッあるをいひ前の【洞房語園】元文三年の本に八所絨は淺しとある是なるべし十符は原來の度なれば理るにおよばずふかきものを十二符といひあさきものを八符前にいふごとく符は編めるといふにて絨といふも同じといふにやあらん

因に云すべて符るものを十符を度とするは編笠にはかざるべがらず十符のすがこもの歌は夫木抄文字ぐさり等にあり【舞のさうしふしみときは】に十符のうらなしありうらなしは草履也あめわかみ子のさうしにとふの枕とあるも菅枕の類にてあめる小枕なるべし

▲熊谷笠 くまがへ笠は深き編笠なり江戸に多し三谷へ通ふ武士の奉公人好みて是を着せり江戸にても町人はさまで着せず上方筋にもまれ／＼にこれを好む者あり六法むきにはさもあるべけれど先姿野卑にして人の目に立事甚し能く取あひたるは普化僧コモツウのみなり必是を着すべし【小あつもり】の淨瑠璃に熊谷の木偶でくが此笠をかぶりしよりの名歟其義不詳此説非也武州くま

がへにて作る名なり【むかし／＼物語】享保年記「何れも編笠さる萬治の頃より玉ぶちといふ編笠其後寛文の頃松坂といふ笠延寶頃熊谷こもそう笠などはやり八分ぞりはやる天和貞享の頃より編笠しだいに止みみな／＼菅笠になる」とあれば熊谷笠は延寶の頃専らをこなはれしなるべし【紫の一本】は前に見えたり【吉原讃嘲記】寛文七年印本に【犬枕】を引て「ふかき物、一夕霧のおなさけ、一くまがへがさ、一あげや清十郎」とならべいだせり熊谷笠の名はふるくよりありておこなはれしはさきにもいふごとく延寶の頃なるべし【奴俳諧】寛文七年和算獨吟昨夢判くまがへかくてづんと見えぬ顔ばせ」たそがれにくまがへかごをひつかぶり」判の詞、日かげものと見えたなしやツつらをむきだせ」

柳亭云、熊谷笠を熊谷籠といふが奴詞なり【花村幸助傳一本草】寛文十二年寫（イ印）本「名もよし原に滑をもぶつかへす輩中畧縦い横い閑思君うき世はいらないこんだ馬長い土手道ぶんのりて是も悟禪の流れとて禿僧笠やこれや此お敵をやすく組伏る熊谷笠をひつちめて」

【紀子大矢數】延寶五年同六年刻「爰ぞうき世のたい中の月」だて者や熊谷笠に雲の帯」【坂東太郎】延寶七年印本才丸撰熊谷笠

を着する事なしおしなべて茶屋編笠を用ふたとひ丹波口迄自分の笠をもたせたとりも茶屋にて着かへべし常の編笠にて郭中へ入たるいと初心なり江戸の三谷も編笠を用ふ大坂は編笠を専らとせずこれ邊土の國風にて景色いやし夫遊郭に入る人はそれかあらぬかのやうに見なしたるこそ風流なるべけれ面むきいだしたるを恥ざるはいたくふつゝかなり都近ければ伏見などの小郭にさへ笠を着ずして入人少し長崎は大坂にひとしけれどつくしのはてなれば是はことわりにこそ【糸瓜草】寛文元年 道甘撰編笠は姿の花のおほひかな 友世【其袋】元禄三 梅咲編笠やよきすゝび頃

仙化【金臺錄】享保十九 來川撰鯨を踏も獵の出立 馳立編笠のちとふるびたるうれしさは 來川

▲焼印編笠 花街へ通ふ者に茶屋にて貸す編笠なり目ざるしの焼印を押しておく故まかよべり貸し編笠といふもおなじ【二休はなし】貞享五年印本五卷「過し頃迄都の西うき世町につとめし鹿戀の女郎かくれもなきそれまやの色名はいはずとも焼印編笠きるほどの人は中略おもひゑるべし【好色伊勢物語】元禄年間印本二の卷「たにばくち云々といふに註して「丹波口なりこ

ゝに編笠茶屋といふありやきゐん編笠をかりて出口まで人目をつゝむ」

▲ぬき編笠 【土佐節淨瑠璃美人揃】「あとに心もぼんのふのぬき編笠ふかゝと身せば小袖を吹かへす」

▲十二符わけの編笠 十二符の編笠符はあむ編目の十二あるをいふ也【舞のさうしたかたち】に鈴木三郎まげ家山伏となりて奥州へくだることをいへる條に「奥州の衣川高館の御所に着にけり鈴木何とか思ひけんおひすゝかけをばかたはらにとりかくしおひのなかよりもうちかけとりいだしてきるまゝに十二ふかけたる編笠をふかゝと引かうて云々」とあり編笠は十符を度とする故に十二符はふかあみ也ふかぶかと引かうてとあるにて知るべし【まひのさうし】は室町家の頃つくりしものなればふるくより十符の編笠の名ありし故に十二符かけたるとは理なるべしさて十符の編笠といふ事さうしにも俳諧の句にてもいまだ見いです【向の岡】延寶八年印本不卜撰おもじとほれおもはくの橋わたらばや 不卜 勘當忍ぶ菅笠の十符 才九 菅笠にも十符の名ありし歟又談林俳諧

局へおるゝことありそれを局をりといへり土佐掾の
 淨瑠璃名古屋山三にかつらきといふ太夫の局おりの
 事見えたり【吉原伊勢物語】寛文二年下の巻、【紙蠶】貞享十
四年貞
 佐 若い人金ゆゑにこそ泪ぐみ 青壚 局へ下りた

晩に鍵裂き 松下 物種集 延寶六
年西鶴 かい出たち

の乙女の姿 咲花の吉野おろしてはし局 元順

【吉原つれづれ】草失墜 延寶二
年印本 時うつり事さり樂みか

なしみ行かへて花やかなる格子も人よらぬのうれ
 んとなり注はしをのうれんづらといふ花をさかせら
 るゝかうしもはしにおりらるゝ數多し本文きんごさ
 かたはちかくまでありしかどさんぬる春の頃きんご
 はおりぬさかたは本店にをるとなん注さかたはお
 めかうしの位よりはしにおりくだるをいふ也 柳亭
 云、坂田金吾は遊女の名なり是等をてらしあはせて
 見るべし

▲鳩部屋 又つばねの事を鳩部屋ともいふなり、

はその住ひ鳩をかふ庭籠に似たる故の名にてかぶき
 の下棧敷の鶉籠の如くなるよりうづらといふにおな
 じ俳諧の句には見えざれど因に書つけておきつ 【吉
 原三茶三幅一對】延寶九
年印本 江戸町二丁目俵屋六兵衛内

清野といふ女郎を評する詞に「此君さりし頃まで江
 戸町にて鳩部屋の御すまひいたはしくおもひしに此
 家にきたり給ひ云々」とある此ことは京都にもあり
 【好色旅日記】貞享四
年印本 大津の條に「柴屋町見物玄たし
 といふ處にをかしくをなたはつひに傾城といふもの
 見たる事があるまひほどにとわるざれしつゝ行けば
 執心ふかき鳩部屋のうちに無常迅速を觀じたるが云
 々」【女重寶記】娘かたきいふべき事

【好色訓蒙圖彙】貞享二
年印本 に北向は北方よこまちにあた

りて鳩のとやのうちに住て云々 北向は局見世より又一段
 下の傾城なり、此圖彙は吉田半兵衛書にて京都の刊行也 【わたし

船】延寶
七年きついをまゐらば吉野新田 宗因 乙女子

が局の内に天降り 益翁 鷹筑波集 寛永十五
年西武撰 たい

傾城に逢坂の山 局まで這かゝりたるさねかづら

利貞

○笠の名稱々

▲編笠 【色道大鑑】延寶六年
淨書 編笠はあたらしき

を制す又念を入て編たるも制すをり返しは英年の外

堅く是を忌籠編にて少し色のかはりたるを用ふ笠の

緒は紙よりをよしとす總じて京の遊廓には自分の笠

して疊二疊敷を先づ定まれる法とす或は三疊敷もあり又四疊敷もあり又四疊半に床棚を付るもあり昔の局は壁に寄て竿を釣る是を衣掛々の竿といふ江戸の局は口の間も廣く奥の間に寐所をかまふ西國の局に端女郎二三人一處に並居て男來れば其好む女一人残りて外は奥に退く是國々の風俗なり

▲けち 【吉原伊勢物語】寛文中「昔男くるひにあまつて友達をかたらひよこ町のつぼねくをなぶりありきけるにあるはし女郎是非と袖引とむるにのがるべきやうなくて局の戸をさしけりいかなぐさみなればとてかゝるけちなんするとてのこりの男玄かられたればはなしぬる男 出ていなばかぎりならんと留しけちなぶりぬるかとなく聲をきけ」又「むかしわ

かき男けちにはあらぬ女郎をかひけり云々」失墜にけちとりとあるは前に見えたり、【梅翁自筆の懷紙】島田氏藏 瘡かきの鼻より雨やもりぬらむ 尾蠅」長田を頼みたまふけちぎり 梅翁」四疊半湯殿の月のかい間見に 宗保」【俳諧破邪顯正返答】延寶八年印本 惟中」されば又來る

長暖簾亂山青くたれこめて 同」柳亭云、前句は何となくいひ

たてたる暖簾をかの局の青暖簾にとりなしけちぎりとつれたり【好色いせ物語】元禄中「むかし田村と申けちおはしますけり注けち一名局一名はし女郎」四の巻長文也

▲端女郎 端女郎といひし事は前に引しさうしにもおほく見えたれくも知ることなればいはず【夢見草】明暦二年 夕立ははし傾城の泪かな 良任」【京三吟】延寶二年 千壽の泪油こぼるゝ 信徳」石佛端女郎と

現じたり 政定」

▲格子おろし 格子にてはかくしからぬ遊女のさんちやになりしをいふ【江戸新道】延寶六年印本 商のない

里は時雨て松淋し 言水」格子おろしの夢ぞはかなき 同」【坂東太郎】延寶七年印本 格子おろし盧橘の

仇なりけり 丸露」柳亭云、かをなつかしみひと

り寐にけりをかくしたる句也【向の岡】延寶八年印本 格子

おろし鴨立澤の秋なりけり 立允」【七百五十韵】延寶九年 裏屋の座頭八重律して 如風」格子おり常陸の

宮をもたせしは 春澄」【吉原つれく草】寶永中 角町の但馬は格子おろしにて座附大やういにしへ

のかた残りてやさしき女郎なり」

柿のうれん足手ふつゝかなる戀ざかりさまぐとす
 るこがしの詞云々」【寫本吉原つれぐ草】寶永年「或
 人本町川岸を通りけるに小袖髪かたちまでいみじき
 女郎柿のうれんの中へぞ入りける云々」

柳亭云、局の見世さきへのれんかけわたし軒を長く
 はりいだしその下を往來するさま本町に似たるゆゑ
 に本町川岸とよべり今は本町といふ事をはぶきて川
 岸とのみ云其證【吉原つれぐ草】に「それより下つ
 かたはほどにゑたがひ我柯^{かし}などへ行くを自らはよし
 とこそおもふらめいとくちをし同書注 かしは江戸中
 の濱の事なりことに本町のかしのうれんかけて軒下
 人の通るやうにいだせり爰のはしつばねの中にもあ
 しき處の家づくり本町がしににたる故にかしといへ
 り、此柿暖簾の句多くは見えず【洛陽集】延寶八年印本青簾
 あはれなる物や柿暖簾 有知」柳亭云、花の染分
 にも青簾のことあり下に見えたるうづらかうしへか
 けおきすだれをいふか、享保十三年吉原細見「江戸
 町かしかきのれん西かし此通り本町かしともいふ」
 【かつらゆひ】享保十九年印本幸化撰局青暖簾あづまに名あり、
 別れては誰に炭火のこがれ居る 伏見桃道「同柿

暖簾同 こあふひや小切に戀の世帯持 京鈴川」

諸國にあれば此ことわり不審なり、此事享保の頃
 は絶たれば押當にかくかけるなるべし【異本洞房語
 園】享保五年記局女郎は云々といふ條に「右局の構へは表
 に長押を付内に三尺の小庭あり局の廣さは九尺に奥
 行二間中園と庭との真中に幅二尺又は一尺五寸ばか
 りの籬あり表のうづら格子と庭との片側に長サ三尺

幅一尺五寸許の腰掛を付三尺の入口に加珍染の暖簾
 を掛る縫留りに紫革にて寄を付る元祿の中頃より局
 といふ事すたり惣じてよし原の古風古實をうしなひ
 し云々」まへに柿暖簾といふは實は此かちん染にて
 ありしなるべし【色道大鑑】延寶六年淨書「端女郎の居る處を
 局といふ局にかくる暖簾昔は華族の御家へ申上御ゆ
 るされを蒙りて掛たり免許なければ掛る事かなはず
 即彼御家より出たる暖簾布を柿染にして長サ四尺は
 い三布なり縫合の二ヶ所に柑子染の寄ありゑかりと
 いへども此儀今は斷絶して彼御家より吟味なし傾城
 屋自分のはからひとして是をかくる當時暖簾の色は
 紺染を用ふされども太夫町一町許には柿色を今に用
 ふる事古例を以てす殊勝の事也此局の内土間は外に

▲三日月變 【水ひらめ】

○けちぎり

けちぎり又けちとりといふもおなじ 局女郎をいふなり假契りと書

くは假字なるべし、あるひはけちとばかりもいへり

又端、青暖簾、柿暖簾かきのれんは多く江戸にのみいへり又のれんづら、

されをとるばくとう、などもいへり

▲青暖簾 【正章千句】正保四年印本 霞むつぼねの内へお

床し」あたゝかな青暖簾のかい間見に」柳亭云、前

句の局は館の局也、それを貫色の局として青暖簾と

つれたり寛永の頃より此名ありしなるべし【望一後

千句】慶安三年吟 似たるが多き傾城の門」訪ひくるに青

のうれんをへつ口」二句貫女、今はせざる體也【蚊柱百韻】延寶二年月

も知れ源氏の流れの女なり」青暖簾の桐壺のうち」

【吉原つれづれ草失墜】延寶六年印本「かたち心ざま大かたな

る女郎もちゐんなくなりぬればくさげなるのうれん

にたちまじりてきれづをいねとたるゝこそはいなきこ

となれ同書注 けちとりのはしぼくとうは見世の前に

青のうれんをかけおくなりゆゑにのれんづらともい

ふ」古くは吉原にても青のうれんをかけし事のあり

しなるべし【江戸咄】に合見るべし【難波鑑】延寶八年印本 二

の巻に「阿波座瓢箪越後三筋の町よはらまで局々の

青暖簾を取りて燈火をかゝげしは萬燈會にことなら

ず云々」大坂新町の事をいへるなり書中にも暖簾を

かけず夜見世には暖簾をとりしなり【都風俗鑑】延寶九年

「やば助はしのぞきの事云々、是ほど笑止なる物はな

しつまつぢあはぬものから心ばかりを知るべとして

あみがさかたぶけて青のふれんのはづれよりのぞき

をくれて心こゝろうかねて」【風流女大名】元禄の末印本 大津柴屋

町の事をいへる條に「是にて見えたる小家に青のう

れんをかけたるは端女郎の住み給ふ局とやらん云

々」【江戸咄】貞享三年印本 六の巻吉原の條に「近き頃より

さん茶といつて太夫格子より下つかたなる女中あり

江戸中の老若爰に來りて大臣なるは揚屋にて參會し

それにおよばざるはさんちやの二階ざしきにてたの

しみ又それよりくだりては青のうれんのかげにたち

よりぶんづさうおうのあちだて云々」

▲柿暖簾 【吉原つねづね草】按に貞享の作也「せんかたな

き柿のうれんが物目のやくそくはぶらなり同書注 は

しつぼねに柿のうれんをかけたるゆゑに此名あり又

【花の染分】元禄五年印本 吉原の事をいふ條に「青すだれに

印 前唐犬の妻こふなどもあはれなり 保友 附

中間の額面影にたつ 千之「額の【事不可徳物語】_{四十}」_{三才}

四十

▲折柳 是は若衆の髪のゆひぶりなり【男色大鑑】

▲大てう

▲せきれいやう

▲合せ鬢 【かづらゆひ】_{享保十九年} 附合幸化撰ぬるみにあまみ

合せ鬢づら 幸化

▲深草流 【八代物語】 少年のよそほひをいふ條に

「髪は深草流にゆるやかに」

▲茶筧髪 【新續犬筑波集】 ふりのよき柳やいはい

茶筧髪 政通 【京日記】_{貞享四年} おほかたは芍薬咲り

茶筧髪 言水 【懷子】_{萬治三年} 「今めきていふ茶筧

髪兵庫わけ」【晴小袖】_{寛文十二年} 大服の茶筧髪かやえぼ

し下 作者不知 【錢龍賦】_{寛永二年} 振りつけの我身は

もとの茶筧髪 沾徳 【色道大鑑】 「髪の結果に立

髪銀杏がしら、ふと元ゆひ是れ六方むき陽氣者の好

む處なり英年の内は元結細きを用ふ男になりて元結

細きは初心めきたり【寶藏】茶筧の條「茶筧髪は無禮

なる物ながら折にふれて取合たる處あり女郎とくる

ひて打みだれたる引さきにて茶筧にゆひたるもよし

【續山の井】_{寛文七年} 湖春撰 茶筧髪やいはい心の花の玄べ

閑節 【物種集】_{延寶六} 西鶴撰 おそろしや幾さき昏も白浪に」

平家の怨靈みな茶筧髪 百切

▲たてかけ 【男色十寸鑑】_{貞享四年} 若衆の事をいふ條

「髪を油にてすきいれぬればおのれと底艶あるもの

なり云々たてかけの大髻つとの大きなるは似合たる

と似あはぬ人あり」【幸葉集】虎かみゆひ「つまに貞

女をたてかけにゆうてなぐさむ事もなく」

▲まきたて 【七百韻】_{延寶四年} 年吟 お扨従の自體は熊野

そだちにて「まきたてもとゐ瀧の白くま 如見」

▲くりびん 【産毛】 「繰鬢にこは髭あつて武士の中

間らしき」

▲おつつがみ 【晴小袖】枝おろす柳が髪やおつつ

かみ 雪吟

▲千松わけ 此名【加増曾我】に見えたり【糸瓜草】

_{寛文初} 道甘撰 枝も葉もせん松わけか藤かづら 台證

▲つとなし髪 【十寸鏡】_{貞保四年} 「つとなし髪に鬢あづ

からず袖ゆき玄やんとしてすそみじかにかすんだ摸

様にして見どころあるてい」

帶、せみをれいてう五たいつけ、たんせん元ゆひ四角まげ長刀ぞりの長刀いきちをみがく長わきざし云々」又【吉原草摺引】元祿七「女郎はいかなる男にも心よくあふとおもひしに色より色にうつるにぞせみをれこうろぎにも髪をゆひあら櫛にてなでまはすも云々」按に【うらみの助のさうし】にこうろぎの墨と云

事あり黒き事を寵馬の色にたとへていふか烏漆の髻などいふ類なるべし又【万金丹】元祿七に男だての事をいふ條に「あるひは立髪、せみをれ、後家ままた、抱鬢、糸びん、手さきさがり、大ばり、小ばり、唐犬び

たひ」といふ事あり又【傾城七堂伽藍】といふ寶永頃のかぶきの狂言本にけいせいおどり歌といふ小唄に「色の山路のわけのよい風のせみ折れ、たてかけ、な

どにお江戸元ゆひまきたてくくるくくるわばおり

のわつば大小つかみざし」【加増曾我】は前に見えたり【新色五卷書】元祿十一の巻「今やうのせみを

れ角ぎはのうつくしきは二ツ毛抜のひまなきからなり」此草子にちよくしむ【歳旦帳】元祿十四年「せみ折れも脇向髪や年の暮」尾陽名義屋山家【いなか鳥】寶永年前薄

墨の怪我に落ても要め符」本ノマ加世「附青葉や腰に蟬

折の髪 雪丸」【熊坂今物語】享保十四年西「前髪ざん切としいかにも月代大ぶりに當世せみをれ碁盤島のきる物」これは角力に【俳諧豊の露】寶曆中前句附前句はんに實にほんにそれく」髪結の蟬折れに鳴髪小言 信州仁科竹子」

▲のんこ 【産毛】元祿年間印「白浮のべつ甲さし櫛

弁にかざりのんこわけの細島田小ぶふしがしらの丸わけ」【後室色ちりめん】享保三に「糸びんづくりののんこあたまた云々」

【杵かつら】享保年間不梅の世はのんこにあって合せ髪露兮」【木曾ざらへ】享保中吹あはす鬢も落葉の神馬哉 北昆」【伊勢音頭二見真砂】おぐし揃「い

つその人氣かのんこかへあとへよる氣の海老をりと

ゑらすおもはず又しては云々」

▲唐犬額 【俠客傳】寶曆甲戌「江戸に唐犬組といふ男達ありし喧嘩と成ては相手に疵つけずといふ事なり

しとて唐犬組と名付たり唐犬組大方男ぶりよく美男なりし額べつして大きくかつかうよろしく今稀なり云々」とありて末に頭の名は唐犬十右衛門と見えたり

今は權兵衛といふいづれかは是、【花洛六百句】延寶八年

俗鑑延寶九年四條川原のかぶきの事をいふ條に「眉目元

は弓張の月にもたとへつべく其口元はまがきのうち
にはころぶる花にたとへても猶物よりすぐれたりさ
る屋の楊枝をけづりたるが如くなる指さきに光りさ
しそふまひ扇をひらめかし云々芝肴延寶似岨の養

齒木枯果る中 夏木春撰作り物恨みにさけぶ猿のつ

ら 似春元祿十七年【山中集】印本支考朝寒き楊枝に猿の姿

かな 里白俳諧毛吹草諸國名産の條河内の部に

玉串楊枝とあり此書寛永十五年の撰にていとふるけ

れど猿屋の事見えざれば末に書きのせておきつ

○男子の髪のゆひぶり名種々并額月代

近松門左衛門が【加増曾我】といへる淨瑠璃節に少將
が男子の髪ゆひにやつし、事を載たり其少將の詞に

「但しおぐしの御用なら、大いちやう、中いちやう、

立かけ、なげかけ、千松わけ、五分一、せみをれ、

かものはし、さてさかやきは、うしろだか、うしろ

さがり、片われ月、そつはう、ゑてゝん、くりびん、

のしびん、ゑやくりびん、額にとつては内ぐり、そ

とぐり、すぐひたい、なりひらかいのすきびたい、

半てうびたい、月びたい、たうけんびたい、角びた
い」とあり是は寶永頃の作にてのちに引し種々のさ
うしよりは近きものなるべけれど百年前よりいひき
たりし髪透額の風はおほかたこゝに盡したりゆゑにまづ
さきに出したり透額は冠の名なれどそれを額の名にかりもちひ
しなるべし、こゝに額といふは額の抜やうの名

▲海老折 形をもつて名づけたるなるべし今海老

尻といひて難波にても専らおこなはるゝは是か【俳

諧皮籠摺】元祿十二年えびをりの襟にかくるゝ紙子か

な 松風印本國友撰【仁世物語】に「おかし男つりがみいば

う組芦や釜ふたとつての助など知る人にてありける

昔の歌に 芦や釜ふたのとつては針もなみつつけお

くれつさゝできにけり、此男なまかはものなりけれ

ばそれをたよりにえびの助どもかゝみあつまりきに

けり此男のかみもえびの助なり」とあり髪も海老の

助とはかの海老折の事をいふかたしかに聞えねどま

づ鈔録しておきつ此さうしは寛永中の作なりといふ

かなにて出たれば上といふ事かもゑるべからず

▲蟬折 是も海老折の類にて形よりいでたる名な

るべし【天和笑委集】天和年記八の巻上野の花見の事をい

へる條に「よしや風俗つかみざし熊谷編笠丸ぐけの

にて他所よりことにやはらかなるやなぎなり此猿屋
 はもと玉の越の里の者とかやそれゆゑかばかりの名
 をとり侍るとかや今は僅になり侍らん」といふ事を
 載たり楊枝にとりつくして玉越の楊は今は僅になり
 しといふ歟又楊枝屋の此所にあまたありしが今は家
 數のわづかになりしといふか分明ならず」【雍州府
 志】天和二年著貞
 享元年印本

七の巻に「楊枝所々これを劉るその
 うち下粟田口猿屋を本とす百本あるひは五十本桐箱
 并に紙袋にいれ遠方に贈る今四條京極の西より祇園
 町に至りて特に多し其木は河内國玉串村より出るも
 のを良とす豊前國立石の楊枝木絶品とす各京師に在
 り立石村は堂上萩原家の領北なり」玉串玉越いづれ
 が是か考べし【男色大鑑】貞享四年印本
 七の巻に「猿に袴
 させて看板出し夷橋筋に根本浮世楊枝とて芝居の若
 衆の定紋をうちつけおきしに云々」【人倫訓蒙圖彙】

元禄三年印本
 「楊枝師粟田口猿屋は玉串村の者なるによつて
 其名高し加賀國越前よりいづるはこぶある木なり猿
 屋楊枝といふいはれは唐の猿は齒あかく顔白し日本
 の猿は齒白きゆゑに楊枝の看板たり」【難波風】延寶三年印本
 當社においていのるはな紙 定俊」かたみとて山

王猿屋が楊枝あり 次末」

まへのさうしえはしな
 實永六年印本【今様廿四孝】
 戸名物
 鹿子の
 句書入
 べし
 天和の比のかける書卷に此圖
 ありふきや町川岸おや橋の
 ほとりのつちうりの圖なり
 今てれふれ町にあるばもし此
 家か



寛文五年印本【京雀】四條川原虎屋
 喜太夫がアヤツリの側に此圖あり

【河内鑑】延寶七年印 若江郷、玉串楊枝名所 彼岸團子
 本浄久著

さす玉串の楊枝哉 野鹿 【坂東太郎】延寶七年印 門
 原本如斯てにはのやに非ず

の柳猿屋木傳ふ詠かな 鐵丸 【雜巾】延寶九年 楊枝
 常短撰

の猿こよひの芋を望みけり 可因 【江戸辨慶】延
 八年言

水撰 楊枝見世猿ぞ友よぶ壬生念佛 心色 【都風
 寶

はやるとな爰はかうより外はつくまい歟」

柳亭云、りうたつが事前に見えたりりうたつは慶長
元和の頃を盛んにしたり此句のおもむきにては小六
は慶長より前の人歟【二番船】延寶八年印本 前句 一村雨
難波の宗圓撰
の通る尺八 宗因」附句 忍び音にほとゝぎすくる

なう小六

同「柳亭云、是は延寶二年の吟也」

戸廣小路」

延寶六年印
本不ト撰

若竹やもとは尺八するゑは風

蝶々子」

延寶六年
西鶴撰

竹杖のよはほんのりと明

にけり」小六ついたるかねぞ聞ゆる

遠舟」西鶴

大矢數」

延寶八年吟
九年印本

普請奉行小六突たる竹の杖

西鶴」

附句 尺八つくもおためつくなり

同「ひさ

ご」

元祿元(イ)前
三年印本

移り香の羽織を首にひきまきて

珍

碩」附小六うたひし市のかへるさ

同「因に云ふ

手綱染の事を小六染といふ者今もたま〜あり是は
嵐雛助といふかぶき者初の名を小六といひしかば彼
馬追の小六と我名の同じことなる縁にちなんで常に
手綱染を着たりしよりの名にて市松形の類也無下に
近きことなり又云、元祿の頃三條小六人あだなして
鞠の小六といひし者あり曲鞠に妙を得あるひは足を
もちひずして杖にて打杖に留めこれを見んとて集る

人に香具を賣れり又近年も彼が名を繼ぐもの淺草觀
音の境内へ出でて人の知る所也【中古風俗志】明和元
年略

「流行染物といふ事も上古は吉岡染兼房染の類也」

又小太夫鹿子名物鹿子千彌染それより小六染市松染

龜藏小紋など何れも歌舞妓役者舞臺へ着出し染物の

はやりしより名づけたる染色なり」【二番鶴】元祿十五
年吟寶曆

九年雲雀笛小六が杖は放下かな

貞佐初號丁我」是三

條小六が事をいひしなり馬追の小六と混すべからず

○さるやのやうじ

楊枝屋の看板に猿をいだし、處今も江戸てれふれ町

淺草觀音地内等にありさて此事ふるく見えたり【東

海道名所記】

萬治年
間印本

六の卷に「粟田口といふ町の右

の方に猿屋の楊枝とて名物なる楊枝はみな柳なれど

もことさらに河内の國玉越の里ぞ楊柳はいたりてや

はらかなる、此猿屋は玉越の里のものとかや」とあ

り猿屋といひしより猿の看板をいだし、歟又下に見

えたるごとく猿は齒の白きものなる故猿を看板にい

だし、より猿屋といふ歟また延寶四年印本【増補道

中記】粟田口猿屋の楊枝とて名物のやうじあり楊枝

はみな楊なれども河内國玉の越の里はやなぎの名所

此宮に葬しより小六の宮といひ傳ふ

此書天和三年淨書

【古郷歸

江戸咄】貞享三年印本六の卷永川明神の條に「世に小六の宮

といひふれけるは慶長の頃關東小六とて美男なる馬

追ありけるが此赤坂に住けり小唄無双の上手にてき

く者前後の事を忘れて聞とれけるとかや、さて彼が

所持したる馬のむち杖扇等まで賤女どもは乞うけて

身をはなさずもてはやしける由也生國は西國方のも

のと聞えたり此故にかれが事を作りたる小唄に小六

生れは西の者ぞだちは關東の小六ともうたふたり是

を小六節とて貴賤ともにうたふ事三十年程づゝ中絶

して三度までさえかへりて日本にはやりしゆゑにや

いやしき者なれども今に至る迄其名を残す此小六は

永川明神を深くまにかうして家富榮えける程に折ふ

し宮も大破まければ四間四面に造立またり小六が建

たる宮とて小六の宮といひつたへけるとなり」とい

ふ事を載たり又【西鶴大鑑】貞享四年印本三の卷に目黒より

戻道の事をいふ條に「小六の宮のほとり云々」と見

え又【夕顔利生草】寶永元年印本にも「水無月中の五日は小六

の宮の祭禮とて云々」などいふ事あり【虛栗集】天和三年印本

其角撰 前旬 地女の袂みじかき染の帶 翠紅 附

旬小六に祈る郎よかれよ 才丸 是は小六の宮を

祈ると云句なりさて小六節の小唄は【糸竹初心集】寛文四年印本

「小六ついたる竹の枝、小六もとは尺八中は笛、小

六するは女郎衆の、それ、實に、ほんにさて、筆の

ぢく、うたへ、小六【淋敷座のなぐさめ】延寶四年寫本昔小

六ぶし「小六ついたる竹のつゑ、本は尺八中が笛、

うらはまはたんほんなあよをほん筆の軸竹小六」【松

の葉】元祿十六年印本三の卷に載たる小六と云小唄「小六ば

つくり／＼ついたる竹の枝小六もとは尺八中はひう

やりちやうやり笛小六するぢや一筆啓上せしめ候せ

んどは御狀を被下たれどもつひしかへんじもつかま

つらいでさて／＼ぶさに思ひまゐらせ候べく候と

も書てやれ筆のぢく竹小六【前の【江戸咄】に小六節は

三度はやりしと見えたり其たび／＼に唱歌もかはり

しがこゝに小六生れは西の者となんといふ事は見え

ざれど俳諧の句にも大かた小唄をとれるやうに聞ゆ

【清十郎追善奴俳諧】寛文二年なるべし作者可徳判前旬それ者定興ともに江戸の人なり

「すいた吹尺八や止めらん」附旬 小六ころりと今はな

きあと」又、りうたつといふづくにふがはやり出

判の詞、小六がまかばねとなり申たればりうたつが

く昔よりおもきものにいひなししかさの雪をかるく
作りすみにすいめといふ狂歌を轉じてすみに驚とい

ふが其角が口づき也此句も初鶏と案じたる初念を捨
て鼠と新しくかんがへたるなるべし常には悪かりし

鼠なれどことくと音するに目覺て元目になりたる
はうれしといへるなり夜のほかに明るるとほのか

に音すると兩方へかけて見るがよし去來が【湖東問
答】といふ冊子に姫が君は除夜に人の家の柱に燈を

かゝげて夜もすがら置をいふとは笑ふに堪たる説也
去來が名をかりて後人の僞作なる事論なし姫が君と

は初春のかざし詞といふ事をあらざれば此句に季な
しゆゑにさまざま附會の事どもを記し、俳書あり

【山の井】卷の一五の「都て正月は世のつねにかはる事
のみぞおほき鼠をよめが君とよびなまこをたはら

ごとなづけ、朝夕のねつおきつをもちねつむいねお
さむ、などいひ猶ひらきまめ、いものかみ、などや

うにいひつけたる諺ことごとく、ゑるすもうるさけれ
ばなん」【續桑園集】寶曆八年印
本平砂撰 冬の部もち花の嵐なり

けりよめが君 魚齋「よめが君を鼠とするはよし
冬の部にいれたるはあし、もち花は作るとはいはね

ば冬の季にならずこれはよめが君にひかれて初春の
句なり

さてふるく鼠をよめの夜妻の
子歟といへり夫を初春の
かざし詞にもちひしなるべしよめのこよめ
が君同意也奥州にて今

鼠の事をよめものといふ【和泉式部集】類從本二百七
十五下の四

【定頼卿集】「尼うへの蓮のすゝを鼠のくひたりける
を見て

よめのこのはちすの玉をくひつるはつみうしなはんとや思ふらん
【枕のさうし】三の十
四「よるのもの、にげなきものひげ

がちなる男椎つみたり」たれくも知るごとく和泉
式部は長保寛弘頃の女なり定頼卿は寛徳のはじめに

没し給へばよめの子といひしはいとふるきことなる
をおもふべし

○小六の宮 附、小六節 三條小六

【紫の一本】祭禮の條に「氷川大明神赤坂一ツ木村六
月十五日隔年中略 赤坂氷川大明神は一ツ木村に小六

といひし馬かたあり美男なり京大坂迄追步行し小六
生れは西の者ぞだちは關東武藏野に住むと小唄にま

でうたははれし小六なり、此小六氷川大明神を信
ずる事不淺故に大明神を此所に祝ひ奉りぬ小六死て

ての名目言ひふりて初心にきこゆれば今は玄か／＼
用ひず一あだやき俄にはなくしきやきてといふ心
也、同書異見百首のうち

客はたゞするの身にてもやかると思ひながらもやくをよるこぶ

【鷹筑波集】寛永十五
年西鶴撰山高うして水の遠いに」もえ出

る巖を折て手をやくな 浄久【新竹齋】真享
四年だみ

たる聲を柴屋町、やかるゝたねと知りながら、なほ
もえぐひの燃やすき」

○よめが君

【俳諧五節句】元禄元年即ち
内田順也著に「よめが君、三ケ日の鼠を

いふ」とあり三ケ日には忌ていはざる詞ありそれに

はかざし詞とて名をよびかへていふ也雨をおさが

り、寐るをいねつむ、おきるをいねあぐるといふ類

にて鼠をよめが君といふはかのかざし詞なるゆる俳

諧にては初春の季を持なり、子の年の元日に慶安元
年なる

い佐保姫を待女郎かよめがきみ 喜雲【玉海集】

明暦二年
真室撰よめを取ぬる宿のにぎはひ」小鼠をくはへた

小猫ほめたてゝ 貞徳【續山の井】寛文七年
湖春撰よめが

君も捨て妻乞男猫かな 江戸貞宣【崑山集】慶安四年
印本貞徳

撰よめが君餅をぞけふは初かぶり 貞徳【此句初春

に見えたり【伊勢物語】の詞をとりて句意は聞えし如

しかぶるは喰也今腹痛の事を虫がかぶると云も虫が
喰の意【俳諧合】明暦二年印本祇園
奉納也判者季吟むこ山の鼠茸もやよ

めが君 則常【是は茸狩の句なれどむこ山といふよ

りかざし詞のよめが君をかりもちひたり【夢見草】明
二馬にのつたるなりのをかしさ 繪草紙を見れば鼠

のよめ入に 良任【新續犬筑波集】萬治三
年季吟え方に向

きてよろこびやする」よめが君としとく棚に子をま

うけ 信成【案内者】寛文二年印本
中川喜雲著初春の事をいふ

條に「禮者の進物を年玉とてはやさるゝは實に光

る程みがきたる骨させる扇もあり東海よりたつ春の

土産なれや海鼠をたはらごと名づけ始など心かくる

鼠をよめが君の貝おほひかとははぶれ云々」是等も

證とすべし【玉海追加】寛文七年
貞玉撰年男ひくかひかぬか

よめが君 榮春【新玉海集】真享中印
本貞徳撰戀られな妻よ

ぶ猫によめが君 勝宣【是も猫の戀の句にて初春

にはあらざれど句のつくりがらよめが君といひたて

ねば聞えざる故にかくいへり【へんつく】元禄戊
寅計六

集遣に入る 明る夜もほのかに嬉し娘が君 其角

【へんつく】に鼠の事とするは是 除夜の吟なり前にもいふ如

なれど雜の歳旦と云しむるし

たね、きゝてもおもひのたね、いひてもおもひのたね「やく」といふ事巻中になほあり寛文七年印本【吉原讃嘲記】に【犬枕】と云さうしを引て「みたきもの、のちのあしたの玉づき、ちゐんへ遣すせいし、はなす子どものかへり、よきわかばえのゆくすゑ、むごきおんぼうがなれのはて」再按に寛永元年著慶安二年印本【目覺し草】に曰「俗にもゆるつい松も智ある者のむさぶるは火急なる時は捨おろかなる者は終に捨る事なければ手をやくといへり」此説によれば手を焼といふ詞は火明より出て愚なる者の事なりそれより轉じてあざむかるゝ事をいふ歎考べし【七十一番職人歌合】鹽賣

思ひ初るむれのやきての鹽煙りなびきなひかすせめてとはや是は胸のもゆるをやきてとかけてさきにいふ意とは異なるべけれど詞の似かよひたれば書のせておきつ寛文二年印本【剝野老】といふかぶきの少年の評書の序に「つけざしの露の情にあの松山を波はこすともとちぎるぞむべなるしかはあれども伽羅の烟のやきてにあふてむねのはむらとともにごれ云々」と又同書山中山三郎といふ少年を評する詞に「貌だち見

事なり口中清くうちつけより人をやく事上手なり」明暦年間印本【野良蟲】に「ちがの浦わのもしほ草こがるゝふりのいきごみにてそれゝにやきてをくはせつればかのへうきんのどん太郎殿はうれしがりありがたがりお肴には何をかせんとて一分小判をとらすれば云々」これ野良にだまされるゝ事をいふなり、【都風俗鑑】二一の卷【西鶴手鑑】延寶四年火をともし風の手をやく花もがな紀州和歌山定時四冊の【好色飛鳥川】二々所三のウ三の十四ウ【新玉海】貞享中一度手をやきても出す蔵かな徳窓【比翼集】延寶戊午（イ元祿十三）不角撰影折ば水手を焼ん水の花正勝【色道大鑑】延寶年間一やきて下略してやくとばかりもいふ或人云おきにいといふ縁にてやきてとはいふといへり是本説なるべきや如何おきと云字は嫌とも補とも書き此二字ともにおきとよめり【伊勢物語】百十五段おきにゐて身をやくよりもかなしきはみやこじまへの別れなりけり」此歌は【古今集】にも小町が歌として入たり此歌は炭火を身に置いてやくよりも別のかなしきといふ心なり當道のやきてといふは人のよろこぶやうにいひきかする言談の事なり、やきてのてはよき手をうつ心なりやき

段の注に「みやき野花露に曰此里をみやぎのといふ事淺草にて瓦をやきはしばにて死人をやきさんやにて女郎かひてをやく故みやぎ野といふ たづねきていかなる人もわけまよふ此みやぎのゝ花のいろかに」といふ事あり此【花露】といふさうしも今傳らず【好色智惠袋】元祿十五年印本 二の卷に「お江戸の吉原を三焼野といふ事いはれある事ながらふるき草紙にくはしければ又いふもふるし」とありふるきさうしとは【花の露】をいふか【失墜】をいふ歟又同書失に「おのづからやりてになりぬるにもあれど云々」といふ段の注に「やりて、きやうじやとおんぼうともいへり女郎めにつきまはりておてきに入身をさするゆるやりてといふかひてを見かけ一寸もあとへひかせずさきへ／＼とやりてする故きやうじやともいふ又人をやきてはぎとる故かのはしばのおんぼうをかたどり名とするなり」又【古郷歸江戸咄】貞享三年印本 吉原の事をいふ條に「今一度／＼とおもひてゆくほどにしだいに宿やのかゝもねんごろになりおんぼうが詞もやさしく聞えぎうがあいさつも心やすくなるまゝにわれははや粹になりたりと思ひ云々」とあるにてらしあは

して見るべし此文章は江戸名所記にならひて書るものにて【名所記】には「屋どやのかゝもねんごろに遣手もことばやさしく」とあり又元祿年間印本【好色伊勢物語】一名いくの 三の卷の注に「くわしや好色しのお山に火車と書きひのくるまともめりいふ心はのせてやくと云事とぞ猶尋べし」とあり此【玄のお山】といふ冊子も傳らずのせるとはおだてるといふ俗語とおなじければ此ことば能くかなへる歟又花車と書て花にまはる意なりと書しさうしもあれどやくといふ語釋にかゝはらざればそのことはしばらくいはず今りんきする事をやきもちといふも遊女より出たる詞にてだますことかもちは座持とり持のもちにてとりつくろふほどのことなればだましてとりつくろふ事をいふ歟又氣をもたするのもちか源氏あづまやの巻のやかのかくづれてといふ詞を證として家持のよくなるやうにいふ事にてやかもちなりといふはあまりにいたりすぎたる考なるらん、やきもちをやくといふ下のやくの詞は後にそへたるなるべし

【吉原用文章】一名くぜつ草此さうし失墜の引書の「男、ちに見えたり寛文間の印本なる事論なし」 男、女をやきて遣す事、そもじさまの御事見ても思ひの

町ともあすか岡本下されず 文東」去者ありと兼

て毛雪踏 柯木」注、飛鳥岡本の宮舒明天皇の舊

跡今ある岡本なりイ寺【當世會古佐賀志】明和七年印本洛湯西

一の巻に「中より下の親心五六歳になれば兎角強い

事を好み紺のくつ足袋毛雪踏をはかせちひさき編笠

あるひは杉なりのめせき笠にろくろ縄見るやうな紐

をつけ中略夏は紅綾の下帶冬は大辨慶島の殿中羽織

させるなど只異風なる事をよろこぶ、【さしあひの

句】川柳點 火燒にて毛雪踏をはく面白さ」

○やくといふ俗語 おんぼう、火車、三燒野、やきもち

やくとは賺ダヌことをいふ花街にていひ初し流言なるべ

し今手を燒たなどいふ俗語も是より轉じたる詞歟

【江山子筆記】寫本寛文十年庚戌三月と奥書にあり吉原火事に

吉原は燒野の野邊と成にけり世をすぎかれしくつわ虫哉

傾城イは常にくつわがやけいといのる心になふみやうちん

やけい／＼はだませ／＼なり按に元文三年印本【洞房

語園】中巻、さてう物語に「頃は延寶六年吉原類燒の

砌にて家作もいまだ出來不揃云々」とあり是吉原今

の地に移りて類燒の初めなり【江山子筆記】は是より

九年程以前なれば明暦三年類燒の刻の落首にて此俗

言原吉原の頃よりありし證とすべし寛文二年の印本

【江戸名所記】吉原の事をいふ條に「城傾に思ひつか

れんとひそかに心にたくむ程にわれおぼえずしてか

れに引こまるゝ也されば智慮才覺も藝能も美男も心

のあぢだてもみな是傾城のためわが燒草イとなるなり

云々」燒草とはだまれ種といふ事なり延寶三年印

本【吉原つれ／＼草失墜イ失】に「女郎はかたち心ざまの

すぐれたらむこそ人のめだつべかめれものうちいひ

たる聞にくからずあいさうらしくやきておほからぬ

こそあかずむかはまほしけれ云々」同書の注やき手

とはいつはる事なり【やつこもんだふ】にやくとはお

きに入といふ心なりとあり炭火の事をおきといふそ

れに手をいるゝを御氣に入にかよはせたる隱語歟、

炭火の事をおきといふ事、いかなるゆゑか未考、宗因

が句に「ふしてみつおき一つほし若煙草」此【奴問答】

といふ冊子今つたはらずやき手はだます手なり今け

いせいの手のある手のないなどいふもやくといふを

略たるにやあらん、又同書に「みやぎのゝつゆきゆ

るときなくはしばの煙たちさらでのみ云々」といふ

祭かな蠅の捧ふり子燈心 忠辰「子燈心小判くは

へて歸りけり 春澄【續有磯海】元祿十一年印本浪化【錢龍賦】寶永二年印本

撰屑ひろふねの日かな 浪化【錢龍賦】寶永二年印本

十二支の内子 世の音も細し都の子燈心 甫盛「

【俳諧職人盡】延享二年子燈心片荷は太鞍皮買う 寥

和「是等ふるくありし證とすべし以下はたれも知ることなれば印本のときはは

べい【和名抄】燈心度宇之美とうしんといふは却て俗

なる事は正章がかたことにもあり【和名抄】に燈心音

訛也とあり順がときよりの訛ならばふるきよりとう

しみといふべき歟

○伊勢の與望都

與望都は伊勢の產盲人の卜者なり與或は右に作る延寶の頃よ

りの俳諧に見えたれば寛文の頃より世に流行し者歟

【江戸三吟】延寶五年印本前聞耳や餘所にあやしき萩の聲

徳信附難波の蘆は伊勢のよもいち 桃青【江戸

廣小路】延寶六年不卜撰聲萬歲與も一が曰御代の春 杉風

【江戸辨慶】延寶八年印本よも一も霜をしりけり小夜の鐘

言花【西鶴二代男】貞享元年印本三の巻に曰「神風や

伊勢の右望都といふ座頭五音の占を聞て萬の事を見

通しぞかし云々」是等證とすべし人の五音を聞てう

らなふといふに合せ見れば前の發句も能く聞ゆる也

【役者大鑑合類】元祿六年印本荒木與次兵衛といふかぶき役

者を評する詞に「座頭の坊をまなばせて杖をさぐる

手もと、よも市も竹杖を捨てはだかでにげます云々」

とあり占ひの事は見えざれども是もかの與望都が事を

いふなるべし

○毛雪踏

今小兒の雪踏に毛のあるまゝの皮を表へつけたるが

ありむかしはおとなもはきたる物にてもと寒を防ぐ

料なる故俳諧には冬の季をもてり【俳諧後雙六】延寶九年

印本風撰 冬之部 毛雪踏や狩してえたる爐地の面 重

徳【俳諧雜巾】延寶九年印本冬雜 しもく杖犬木にのぼ

る毛尻分有 和充【竹生島】の謠曲に綠樹影しづ

んで魚木にのぼるけしきありとあるを轉し毛雪踏を

撞木杖にさしたるを犬木に登ると利口せし句なり又

【好色萬金丹】元祿七年印本町奴の男達といふ者の事をいふ

條に「釘抜の眞鍮紋あれたる駒の中形小紋だてのう

すぎやたい一ツ熊の毛雪踏はいたるは云々」とある

を見ればよき人のはきたる物にはあるべからず又西

鶴が【二代男】貞享元年卷の二廿二【後餘花千二百句】享保五年

因餞別 相蚊屋の乳をはなれ鳴別哉 似春【素堂

とくくくの句合】庵崎有無庵を問れしとき 瓢枕宗

祇の蚊屋はありやなしや【素堂がかく吟じたりと祇

空が序に見えたり有無庵則祇空が庵なり

▲宗祇髭 【菊のちり】青柳も宗祇の髭の句ひかな

その女【とくくくの句合】髭宗祇池に蓮ある心

かな【昔の人は髭を貴てよき男の髭のなきは池に蓮

のなきが如しと歌にも詠り宗祇の髭は香を留ん爲と

あればよきとり合せなり【俳枕】手鑑や面影の月髭の

露 捻外【猶上の卷髭の句あまたあり

柳亭筆記四の卷

○子の日の燈心

甲子日に燈心を買へばかならず其家富榮ゆるといふ

事正しき證は知らざれど是大黒へ福を祈るより出し

事なるべしその故に此日燈心の市をたて、棚をかざ

る所あり又賣りにも來れり俳諧の句には子燈心なん

どいひて中むかしより多く見えたり【季吟廿會集】寛文四年前句とうしんくまとまちやあかさん 友光【附句

甲子ををりに幸ねまつりに 季吟【落花集】寛文十一年以

用るや虎のゐをかる子燈心 良賢【花洛六百句】延寶三年まつりにも揃ふ油や子燈心

延寶八 前灯心賣の戀の亂緒 千之【附吉野川子の日

年印本 〓と流行 自悦【東日記】延寶九年印本言 灯心賣

たが手ずさみの初根芹 無鹽【此句は芹の句なれ

どはつねといひかけたるに心をとめてみるべし【俳

諧雜巾】延寶九年 常矩撰 子祭りはどうしみをしてわたりけり

願也【布の馬尾にも住し歟子とうしみ 作者

不知【子燈心袖こそ波をちぎりけり 如生【子燈

心たが影面をつくも髪 重以【空材風葉】天和三年 自悦撰

なしたる句なり【壬生山家】細さうし 思ひ崩さず出ぬく
らがり 土芳「此頃は扇の要仕ならひて 卓袋」

▲万歳扇 【たらけわた】さかもり、二段目 曾我十郎の

「夏のゝにくさ盡しぬふたるひたゝれを梅や濫にて
そめさせて九寸五分のよろひどほしだみたる万歳扇
とうそつさいたりけり」【十二本双蝶々曲輪日記】淨瑠璃

友禪扇、布目地は前に見えたり、猶扇は類多くて悉くあぐるにいとまあらず、追加すべし

○宗祇の蚊屋附、定祇髻 此段【骨董集】に見えたるを補ふ

昔連歌師の自誇りて我は宗祇の蚊屋に三年寝たりといひしが一種の諺となり今俗に見えをいふといふ程の事を宗祇の蚊屋といひつる事は骨董集に見えたり又西鶴が【名ごりの友】に宗祇法師と岡部の宿にて相宿して同じ蚊屋に寐たりといひし商人の話を載たるは三年と云を相宿にとりなしたる西鶴が滑稽なり山集は醒翁が引たれ【前車】貞徳はこゝに載せず【獨吟】同じ蚊屋に寝たるばかりの契りにて「常はそうきもあらぬ我中」貞徳自注 是は世上に宗祇の蚊屋に寝たると云ふ諺なり【新續大筑波集】萬治三年印本 跋に「松永貞徳出自少道遊歌林」者

尚矣兼巧詠「俳諧」寝平宗祇蚊屋「傾平山崎油樽」其技已熟【俳枕】寛文年間幽山撰 桃園定輪寺にて 花に下

戸宗祇の蚊屋のとなへあり 露沾「此句又言水撰

【蛇の鮮】延寶七年印本 にはたとへありとあり 十徳や夢を

殘して蚊屋のきれ 蝶々子「桃園や三年寝ても昔の夢 東風」

近く正徳四年印本【祇空落髮の記】來山が詞書に「宗祇の蚊屋に三年とはふるくもいひ傳

へて是さへをかしきに」といふ事あり前に引し東風

が三年寝ても云々の句に合せ見るべし【東華集】元祿十三年印本 寝ても見ん宗祇の蚊屋にけふの月 野徑「

【物種集】延寶六年西鶴撰 玉霰宗祇心を碎くとき 友吉「幾

夜紙帳の假枕して 千春」【雜巾】延寶九年常矩撰 忍び逢よ

るは宗祇の蚊屋釣て「古今の大事傳へられけん 致也」それはそれ宗因の紙帳難波風 友靜「宗祇

の蚊屋に宗因の紙帳を對したる吟なるべし總て昔の諺にあひ蚊屋あひ膳などはへだてなくむつまじき中

をいふなり【舞正語磨】萬治元年印本 下の卷に「紹巴と一つ

蚊屋の内に寝たりといふとも連歌の下手は下手なる

べし」ちかくは紹巴連歌に名だかりし故かく記し

ゝなるべし意は宗祇の蚊屋に同じ【七百韻】延寶中印本 宗

▲銀要 【雨慶】享保甲辰桃翁撰言水跋媒約のてにをはからや銀

要 鐘山「灰けぬけぬお寺若衆や銀要 秀圃」

▲煮骨 同 しら假名は消る思ひの煮骨かな

當國「いかに染煮骨眞葛が原の風 知章」逢ふ人

にさても煮骨のかざし哉 八木

▲黒骨 同 黒骨や紋は二つの銀と墨 杵角

▲扇車 同 待かねぬ扇車の序破急 泥龜

▲扇占 同 せめてもの待くたびれや扇占 魚

月

▲扇引 同 若衆にはよしや負ても扇引 老貉

▲丁子引 同 惟光に鳥井越たり丁子引 風女

▲二ツ紋扇 同 聲のなき詩あり扇の二ツ紋

沾涼

▲五明扇六角扇摺扇 判の詞大練舎 城殿の摺扇男女

が手馴にして五明扇民を偃し六角扇の百金は姫がよ

ろこび

▲女は年により扇の色のかはる事 【簾中舊記】從類

本四百「女房衆御持候扇の事、一夏はうす地の扇御も

十四ち候ばうたん廿迄めし候程は扇みなくねなる御もち

候紅梅廿八までめし候程は扇つまくれなる御持候紅

ばいをめしとまりてはつま紫の扇御もち候」

柳亭曰源内侍がわか／＼しき扇を持たるを源氏の

笑ひ給ふ事あれば昔より女は年によりて扇のわか

ちありしなるべし此舊記は東山殿時代のさうしな

り

▲要いれ むかしは扇の要金銀象牙鹿角の類にて

表裏よりさしこみたる物にてこれを巢入りといひた

るよし【扇の記】に見えたりゆるにやゝもすれば要は

しりてぬけ損じやすし當時は要いれといふものあり

今のらうのすげかへ瀬戸物焼つぎの類なるべし

【俳諧雜巾】延寶九年印かなめいれ我身ひとつの秋なり

けり 立貞本常矩撰今の鯨要を製し出してより此ものな

き鯨鯨要は元文の頃より製し出したる事【をこた

り草】に見えたり【一代男】天和二八の巻に「此程京

で仕出し人の重寶に成物といふ上書に古釋と記すあ

けて見れば扇の要、目釘竹、釘、きぬの糸、餅粘、

耳搔、うち齒枝、七色ありて代三文」扇の要を賣る

事前の句にてらし合せて見るべし【向の岡】延寶八年

齒固や扇の要あけの春 不求「うらうへよりさし

こみたる要を、齒にてかみしむるを齒がためにとり

柳亭云寶永より昔といへば延寶天和の頃に仕出し
、扇歟又云西鶴が【一代男】さし繪をかきしは吉田
半兵衛なりとぞ此半兵衛と同人か別人か未考

元祿年間に刊行なしたる紋
所帳に此圖ありあるにて摺
しと見えたれば南京焼の染
つけより工風したる物なる
べし



▲江戸扇 【東日記】延寶
七年

九年
言水撰 波淺し石はしる瀧江
戸扇 山夕「柳亭曰、ある

の扇にすみより瀧をかけて
白くあまつけたる扇今もあり是江戸にて仕初し物歟
▲しゆら扇 【犬子】卷一扇の記「懷子」萬治
三年 暑氣をや
時とたゝかふ修羅扇 知榮「

▲袖扇 【犬子】

▲銀の扇 【七百韻】延寶四年吟 さても此繪は僞
か何やら 以仙「うら赤うすれたは銀の扇なり

尾蠅「

▲みな紅キの扇 【七百韻】延寶中吟 空に日の出

のはやり傾城 定祐「なりふりも皆紅キの扇の手

保俊「

▲朝鮮骨の扇 【延寶廿歌仙】五年 うち詠めゆく不

破の關庵 下宅「旅衣朝鮮骨の扇地なり 同「

▲ゆきひら骨の扇 【俳諧合】明曆
二年

つかふものもなき身でこゝにすまの浦

ゆきひら骨の扇はしさよ 康吉「

▲安扇 【商人職人懷日記】正徳
三年 安扇の繪柳にまり

武藏野にはたる松かげに帆かげ船さまぐのもやう
繪具つかうて千枚を三匁五分「

▲連歌扇繪扇、車扇 【伊勢音頭二見眞砂】元文寛保中
の作なり 涼

臺「其繪扇の月に雲かくせばかくすしのび路の車扇
の百夜にもかざし扇のさりきらひ連歌扇のてにはさ
へ「

▲えびす扇 【伊勢音頭二見眞砂】涼臺「今宵ぞう

れし顔と顔笑ふにあふたる掛鯛のえびす扇の千代か
けて「

▲千歳要くら要 【をこたり草】元文の頃京師柳馬

場六角邊に小西八兵衛といへる扇折今の鯨要を工夫
して都鄙の幸となり是を其後千歳要といひしなり「

て 桃青」風國が【泊船集】に桃青の句とするは誤

りなり彼青き頭の道外人形をいへるなり黄なる頭の

事いまだ見いでず【臍をどり】元祿年間 都又平作「京四條河原に

そろまといふ道外人形を廻す人あり本名は七郎兵衛

といふ云々」【産毛】元祿年間 林鴻著「きのふけふとはおもは

ざりし久しぶりで死んだとそろまがいひし」【新平

家物語】寶永中 印本七の巻に「武陽の逗留軒におちつき云

々そろま、九西梵天などさア、何かなしに分吉原

と」あるは太鞍持の名歟

▲布目地 【鹿驚集】明暦三年 印本 布目地の雨やいはい風

袋 成清 【鳥帽子箱】寛文九年 立以撰 布目にも風はもら

さぬ扇かな 友貞 【小町踊】寛文五年 立甫撰 布目地はかた

びら雪よ持扇 勝政 【小夜の中山集】寛文七年 立甫撰 月

布目地の扇や是も肝のごひ 山里 蚊やごしの月

は布目の扇かな 貞由 【古糸屑集】延寶三年 重安撰 布目地

の扇の骨は簇かな 獨笑 【茶杓竹返答蠅打】寛文七年 六七

坪著に「布目地を折るも平骨の扇哉」といふ一雪が句

を貞恕が難じて「布に平は聞えたれど布目地の扇こ

のごろの事なり、新しすぎたる事はいはぬものにて

侍る」とあれば右に引し明暦の成清が句は布目地を

製し初し頃の吟なるべし

▲蒔繪扇 【雛形爲井登草】寛永二年 印本通稱 新七井上茶全子著 下の巻

「予元祿十六年の秋仕出し蒔繪扇といへる持扇をこ

しらへ初たり是人と膝を容るゝに水酒のしづくをふ

せぐ爲なり地扇を漆にて染め蒔繪赤繪をかきたる物

なり」といふ事見えたり予とは作者茶全子なり此人

京都の蒔繪師なりまた茶人なり

▲南京扇 【子孫大黒柱】寶永六年 印本北 京散人月尋堂著 昔都大宮通

りのすゑに繪師半兵衛といへるあり中略 何とぞ一思

案にて世を渡らんと工夫して屏風の押繪圖の極りた

る草花づくし鳥盡仙人唐子など板下の繪にかきひそ

かに板行にはらせ唐紙に摺そこのうは繪をそれゝの

繪の具にて彩色しけるに十日の仕事を一日に仕まひ

てしかも手ぎは一段見事也是を田舎問屋へおろすに

殊の外下直なれば出来次第に買人前後をあらそふ六

枚屏風の押繪十二枚にて六匁とは此細工なり中略 其

後又南京模様とて扇の繪に藍摺を仕出し一ト夏二タ

夏、世間めづらしがりて此扇をもたぬ人なし中略 半

兵衛は三年目に寺町通りへ出て弟子あまたかへ云

々」

の記に左の圖あり

猫間スカシ

▲麝香骨

麝香骨は丁子沈香の類にて骨を煮て香

を留たるものなりといへり【毛吹草】寛永十五
年重頼撰 薫ぬる

風や扇のじやかう骨

勢州玄心【夢見草】明暦二年印
本休安撰

繪の花も匂ふ扇や麝香入

頼廣「麝香入とは扇の

紙のあひだに麝香を入れたるもの歟又團扇にもじや

かう骨といふあり土佐節團扇賣「御代をおさめても

のふは軍配うち女郎はぬりえのうちは色々の

房をかざりしじやかうばね風もこゑある萩の葉や」

【懷子】

萬治三年
重頼撰 じやかう骨は折袖にはふ扇かな

方由【小町踊】

寛文五年立
重頼撰 薫ぬる風はじやかうの扇か

な 立女

【伊勢音頭二見真砂】涼臺「蚊やりもふけ

てあんどんの油扇もかき立るちやうじ骨からしゆび

までは梅が香の骨のひらき戸に」

▲そろま扇井そろ松が事

そろま、のろまは延寶

頃の木偶でくまはしの名なりその木偶の持べきほどのち

いさなる扇をそろま扇と云ふ今歌舞妓の市川家の荒

事の時ちいさなる扇をもちふるは是なりといへり

【美景蒔繪の松】寶永四年印
本市中軒作 二の巻に急に婚禮の用意す

る事をいふ條に「一束一本の紙がそろはぬ是にせ

いと小杉一束是では末廣に負けた幸ひ客さまにもら

うたそろま扇是で見やすいと袖扇一本そへて聳引出

物」と云事あり常の紙にては小杉の紙の小さく見ゆる

がゆるそろま扇を添て見よくなりたりといへるなり

因に云そろまは三郎松なり、のろまは野呂松なり、

ともにをかしげなる木偶まはしの上手なり、のろ

まがまはす木偶は頭青くそろまがまはすは頭黄な

りとぞ

【空林風葉】

天和三年印
本自悅撰 初芝居 風本へやうそろまを笑ふ

初朝け

竹葉【いなか鳥】寶永
年間 疝氣のうへの霜天

に満 里鶏「打笑ふ膝を曾路摩が水かいみ 撰

者秀可「曾路摩と書しは假字歟風葉はそろまの現在

なるべし【いなか鳥】は古き名を取出しての吟なり

【二代男】に「おやま甚左衛門が仕出し人形そろま七

郎兵衛が二王のまね」又正徳中の印本に【三良松東

海道中記】といふをかしきさうじあり【江戸三吟】發

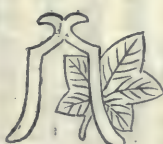
句さぞな都淨瑠璃小歌は爰の花 素堂信章「霞とと

もに道外人形 信徳「青いつら笑ふ山より春見え

が仕出しの古歌もやうかとおもはれ浪もたゝめば風
なくて云々」古歌を声手がきのやうにしたる扇なる
べし半彌は延寶天和の頃名高かゝりしかぶき治郎な
りこゝに抄録したる條に半彌に懸戀したる男舞臺に
て指をきりて半彌におくりし事を載たり是よりして
指切半彌と異名をうけたる歟元祿六年の印本【雨夜



【大鑑】にのせたる半彌が紋



【三益きげん】に載たるは是なり

三益機嫌【に松しま半彌を評する詞に「たいほそく
としたる糸すゝきもつれてねたやいせんの指切半彌
がうつりとしてじんじやうなるげいひやうしあり」と
いふ事見えたり是さきの半彌の名をついで二代目な
るべし

▲猫間骨の扇 猫間扇、猫骨又猫扇ともいふ

【出陣之聞書】應永廿九年三月五日備前守持長入道興元判「扇の事第二可秘骨

十二ねこますかしもの三所にすかさすべし云々【中原
高忠軍陣聞書】頼從本四百十七、奥書 寛正二年四月日とあり「骨は黒骨なり數

は十二ねこまさしぼねたるべし」又同書「扇のねこ
まにすかすもんの事謂尋申度むかしより如斯しきた
るなり何のいはれとは無存知と被仰なり」

右高忠は【齋藤親元日記】に曰文正元年十二月十一日
の條に曰所司代多賀豐後守高忠依山門訴訟逐電すと
見ゆ、もし此人歟

【海人藻芥】類從本四百九十二長享二年「猫間扇は大臣家の物也侍は

瀧口の輩至孫子用之其外家の侍一切不用之然て近年
田舎上下無用の結句世外禪律野僧持之言語道斷の事
也」按に扇の骨のスカシは虫喰より出て家々人々の
所好によりてさまぐの形となり原ねこま家の所
好なるによりてねこますかしといふなるべし【守武

千句】天文九鼠のせなか軍なりけり「猫骨の扇をいる
は八島にて【崑山集】慶安四年長徳舞蝶のはねや猫間の扇な

り 時征「窮鼠かへりくふは猫間の扇哉」小島政
直「蝶ぼたんゑかく猫間のあふぎ哉」吉岡信元【新

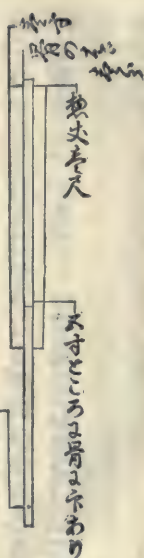
續犬筑波集】萬治三年季吟かざせるや猫間の扇木曾踊
保友【俳諧書拔】萬治二年鼠舞する人ぞおかしき」

猫骨の扇ひらくもふしほにて 作者不知【伊勢
踊】寛文八年印本猫骨は夏さへ寒き扇かな 二休 扇

本加友撰

たる歟

一友人の曰石州扇は茶器の寸尺をとるためにつくら
せ給ひたる物にて尺扇といふ其圖左の如し



は変みか
要よりつれまじ

【扇の記】

寛政五
年印本

「遠州石州利休好寸法など第一として

さまざま作り出せり」柳亭曰、尺につかふ故に寸法

など第一といふなるべし【洗濯物】寛文六年
一雪撰 となる鮎の

たけもや尺の扇網 富長【大井川集】延寶二年
維舟撰 尺の

扇ぬかぬ人なし藤の花 雅仲一傳 夏の夜の寸取る尺

の扇かな 心計【智慧袋】寛文末
祐政撰 夏のあつささし

見る尺の扇哉 可龍 是等石州扇の句なるべし

▲桐油扇あぶら引扇【富士石】延寶七年
調和撰 白雨や桐油扇の

片小鬘 興也【東日記】延寶九年
言水撰 雨帝桐油扇を給

はりけり 言籬【五ヶ津餘情男】元祿「刻たばこ

服部油ひかす大佛ぎせる火繩油引の扇【續桑園集】

寶曆八年印
本平砂撰 水うちて油扇の猶暑し 三壽

▲縫扇【俳諧雨慶】享保甲辰
桃翁撰 過がてに鋏打ゆかし

縫扇 芦錐

▲道中附扇 今專おこなはれて人の知る事なれど

も古くよりありし證をあぐ

【富士石】延寶八
年吟 旅行の道すがら 馬次や江戸の扇を見

ては跡の風 言拙【西鶴後大矢數】延寶八
年吟 次馬も

既に都を出はなれて 行末 道中の扇風に行雲

鶴夕【二代男】天和二年
西鶴撰 七の巻「安部川をわたれば

東の方にびんさゝらにのせて、こすに待たする殿は

恨みとうたひしは、やれ爰の傾城町とは見すにば通

らじと尻からげおろし道中附の扇をかざして兎角は

見ぬさきと沙汰なしにするこそよく／＼おもしろか

らずや京の北むきよりおとりぬ

▲古歌もやうの扇

【男色大鑑】七の巻「道頓堀壘

屋町の西北角井筒屋といへる新見世の扇屋あり涼し

さは生の松島半彌が面影七左衛門と名をかへて惜や

花は盛月は二十日あまりを若衆の最中と見しに無分

別なる元服中略備前の國唐琴の泊り、虫明ヶの瀬戸越

る折ふし彼飛鳥姫の都戀しきと書殘されし扇も半彌

【京拾遺】寶永六年
言水撰民は直なり國に歌人

執筆 幸若

が笛をうつのは七ッ骨

我黒【俳諧雨颺】享保甲辰
桃翁撰

七ッ名は誰まことより打扇所カ 琴松

▲石州骨石珠骨 石州はたれくも知る茶人の所好に

て尺にかふる扇なり石珠は吉原の遊君なり骨の細く
花車なるをいふ木魚ッ的ウの類にて石珠骨をも俗に

石まう骨といひしより文字も遂に石州と書誤りそれ
かれ混じて分ちがたし先石珠の事をいふべし【吉原

丸鑑】享保五
年印本 角町角万字
屋庄三郎内上々せきしゆ

昔せきまゆ

とて名高き女郎ありしが心ばえいうにやさしくして

もてあそび給ふものまでじんじやうを好み、扇の骨
を細くけづらせて持ち給ひしを今の世まで手本にし

てせきしゆ骨とこれをいふ今此君も其名をまたひせ
きまゆと名のり給ふ」按に【寫本吉原つれく草】寶永

年間にむかしの名のきこえたる遊女の事をいふ條に三

浦の石珠とあり扇を一流製し出し、は此三浦屋の石

珠なるべし萬治の頃歟猶考べし【淋敷座の慰】延寶四年
撰寫本

さわざ歌「大門口へぬつと入り茶屋の二階へぐわら

くぐわつとかけあがり石州流の扇をぬき中かの間
三間はらりつとひらいて揚屋がへりのよねたちを云

々」【俳諧坂東太郎】延寶七年印
本才鷹撰石州骨是も女の風なり

けり 和鶴「元祿年間土佐節の淨瑠璃【博多露左

衛門色傳受】に「淺黄どんすの紋袴けまはしゆふに

きこなしてかりにきにしをふてう笠かよふうき名も

高橋屋君にあふ夜はくるゝまをちさとい心せまきう
の扇の繪さへわけすがた」

柳亭云是等は全く石珠と書くを石州と誤りしなるべ

し【俳諧富士石】延寶七年
調和撰石州骨萩に譲るや今朝の秋

調音【今鑑金魚袋】寶永八
年印本一の巻「のりぬきの上ミ

下鮎みる茶ののしめ細作りの大小石まうの扇子えも

んつきのけだかさ」

柳亭曰是はたしかに石珠の事ともさだめがたし細作

りの大小にとりあはせれば彼花車なる扇の事歟か
さねて正すべし

【洞房語園】元文
三年五明軒成子が便面記に「或人子に問し

は新艘の髪風に勝山といふもあればせきまゆ骨と

いふ扇は何屋の君が物好きぞと予は由來をいまだ知

らず利休骨といふもあれば茶人や知りて侍らん」

柳亭曰享保の【丸鑑】の作者は石珠の事を知り元文の
五明軒は石珠の事を知らず、この頃より製作も廢れ

▲二重蚊屋 【冠附江戸雀】正徳年 問印本 冠心よく螢をはなす二重蚊屋

▲蚊帳に鈴をつくる事 【五人女】貞享三年印本 二の巻に

「ゆたかなる蚊帳に入たまへば四つの角の玉の鈴音なして寐入たまふまで番手に團扇の風まづかなり」

▲釣初 【御湯殿記】

【都曲】元祿三年言水撰 ねたましや伽羅たかぬわが蚊帳始

水狐 【五元集】中日にて 蚊屋まゐりたり 夜はや寐

ん紙帳に風をいるゝ音 其角 【十三歌仙】芭蕉翁十三年 三回忌寶

永三 南天に強飯のふたのはね返り 孟遠 蚊屋の祝

ひに村のはめ言 越闌 【草梅集】元祿八年刻一品撰 雁がねや

三隅釣たる蚊屋の縁 賞花

○扇の名稱々

▲目近扇籠骨 【運歩色葉集】 天文免行目近扇 柳亭云、

目はかなめなり扇のえへ要を近くよせてうちたるを

いふと見えたり 【俳諧埋木】寛文七年 この骨は涼さわかる

扇かな 顯成 【續山の井】寛文七年 年玉は千世こめ骨

の扇かな 信言 【續狂言記目近大名】又目近籠骨 大

名の詞に「目近といふは尤其様な扇の事なれどもそ

れは常の持扇此要を目近うつたを目近といふ中略こ

め骨といふは此扇の骨を常のは十本あれども十二本歟十五本こめたをこめ骨といふ」とあり是にて製作を知るべし

柳亭按に昔は扇の骨の數十本なるものなるべし故に其度をさかするを籠骨といひ骨數のすくなきを、ばさ

ら扇といひし事こゝに録す

▲ばさら扇五本骨 【建武年一條川原落書】類從 此頃

都にはやる物云々鉛作の太刀太刀大にこしらへて前

さがりにぞ指はさすばさら扇の五本骨ひろごしやせ

馬薄小袖云々 【橋南】沾徳撰 蘇武が足手前療治に月を

經て 秋色 ばさら扇の裏は葛の葉 專吟 類

柑子 みな皺面のお皮切りなり 昌貢 花は此加

賀に傳はる五本骨 琴風

▲七本骨 【小竹集】貞享二年西鶴撰 「宇治加賀掾一流を

かたるに謠にかはる處なく人のなぐさみ業となりて

七本骨の拍子扇を貴人の手毎にふれられし事云々

【俳諧鼻昏袋】延寶五年印本 中ひら扇、平骨扇、七本骨、小

川扇」とならべて出せり七本骨の扇はいとふるくよ

りあり 【永久四年百首和歌】 常陸

すゐひろく七のほねにてはる扇やつれにけりなものとはか姿を」

間川 撰者不角【枉のかつら】享保十七年壽角撰年寄へ入間

詞や明の春 寸角 能の狂言【入間川】も此入間詞

によりてつくれるものなり此狂言寛正五年紀河原勸

進能の番組に見えたれば入間詞はいとふるき俗言な

り、入間は武藏の郡名なり、其郷のことは歟又昔は

入間川の水逆流したりし故にその名をおふせたる歟

入間川の水を湧かへると詠たる歌は【鉢かつぎ】の

さうしに二うたまで見えたれど逆流する歌いまだ

見いでず（そらおぼえにてかきたるゆゑに朱にて

記しおく、原本を見て後墨にて書直すべき事）

仙果云【鉢かつぎ】君おもふ心の中はわきかへる岩間の水にたぐ

つてもみよ 我がおもふ心の中はわきかへる岩間の水をみるに

は此事のいるま、いはまのおぼえたがへ歟

【橋南】元祿の末名月や女中の用は入間川 青峨 是

はわきかへる程用のあるといふ句歟【名所歌枕】俊

成卿 「さりとともとのむの雁をたのみにて入間の

里にけふぞ入ぬる」

○蚊帳に匂袋を掛る事並蚊屋釣初 用捨箱下にあり、それを省きたる

昔は蚊帳の四角に匂袋を掛たりゆゑに【毛吹草】寛永十五年

【初元結】萬治元年【便船集】寛文等附やうの指南の部に

匂袋の下に蚊帳を出せり今も高貴人にはある事歟不

知【玉海集】明暦二年かをとむる蚊帳はにほひ袋哉

正重 此句はたし【鹿驚集】明暦三年印つく花は匂袋か蚊

帳草 かに聞えず春清【落花集】寛文十一年印本以仙撰おく露も匂ひの玉

か蚊帳草 但行【信親千句】明暦元年印本信親は江

れぬ匂袋か夏の風釣し蚊帳の外くらき夜【懷子】

萬治三年印床近み目に掛物を心にて 匂袋は蚊屋のす

みく 重頼【二代男】貞享元年二の巻に「八疊釣の

紋紗の蚊屋乳縁ひどんす四角の唐房に匂ひの玉靡か

せ和國美人揃の枕屏風云々【俗つれぐ草】元祿八年印本

二の巻に「匂ひの玉を大房にかざりつけたる蚊帳を

つり」近き【娘かたぎ】と云冊子に蚊帳へ繻をなす事

見えたり二代男には紋紗とあり蚊帳に模様をかざり

とする事百年前よりの風俗歟予が家に正徳中の蚊帳

の残りてありしが地は萌黄にて白く千なり瓢を染た

り【吐綬鶏】元祿三年印本忙然と覺蚊屋あさがほの繻せり

撰者秋風當時はぬひものをせし蚊屋の流行し故にさ

もなき蚊帳もふと目覺てうちより朝顔を見れば彼ぬ

ひものをせしやにおもはるゝといふ吟歟【續誰が家】

寶永七年面ざしの繪を釣る蚊屋は誰が家 序令

ぬと」

○入間様 入間詞

入間様又入間詞といふも同じ逆詞なり是に二種あり
一は意を逆に言なり一は詞を逆にえたるなり意を逆
にいふとは花散れ月くもれなどの類なり、詞を逆に
するとは花の雲といふべきを雲の花といひ月の鏡を
鏡の月といふ類なり餘は准じて知るべし正章が著の
【かたこと】慶安三年印本「山崎の宗鑑法師といひしえせ者の
かしまや此里すぎと郭公都のうつけさこそ待らめ
と詠しはいとことさめてにくきやうなれど是はい
まやうとて狂歌狂句の本體とこそ承はれ云々」とあ
り是花もれといふ意に同じ【一幅半】元禄十三年二人つれ
だつ初瀬の日歸り 蘆本「時鳥啼や都のうつけども
空牙」【大悟物狂】元禄三年印本鬼貫の家集 長者物乞ふ山崎の
祖母 鬼貫「うかれ女に都のうつけだまされな
同」【卜養狂歌集】ある人のもとより鴨をたまはり
て歌よみておこせる歌
料理こそまゐり給はうれしけんあしかもといへば味はよからじ
といひておこされければ返しに
此とりはもとより水に入間川あしかもといへばあぢやよからん

【俳諧破邪顯正】延寶七年印本 附合の句、佛はからへて借金
の秋」といふ高政の句を隨流が難する詞に「さても佛
に無實を申かくる曲者かな佛は衆生に福田をこそを
しゆれ借錢の秋にあへとをしへたかとかくいるまや
うさへいへばよしと思へり」【崑山集】慶安四年十の卷
晝出て夜は三日月の入間やう 作者不知【懷子】
萬治三年重頼撰 花の頃みよしの、雁や入間やう 錐言【慕
紫集】萬治三年常辰撰 若やぐは入間言 葉か今朝の春 正
盛【小町踊】寛文五年立圃撰 夏の日を涼しといふや入間や
う 宗雅「名も知らぬ月は雲にや入間やう 立
圃」【今様姿】寛文十二年維舟撰 若葉のぬれ色を 白雨に老曾の
杜や入間やう 維舟【六日飛脚】延寶七年あまりあぢ
やらでふかい篠竹 友雪「見たうもない是も入間
で蘭の花 遠舟」【物種集】延寶六年西鶴撰 大矢數入間の里
にかくれなし」千石とるがうれしうもござらぬ
保友【宗因句集】此月になこそこの關や入間やう【紀
子大矢數】延寶五年諸士何十萬騎か入間川「さかさまにな
る幔幕の紋」【俳枕】延寶八年印本木蘭山撰 福は外鬼うち豆や入間
やう 是心【不角歳旦帳】寶永八年若イとは入間の人の御
慶也 仙風【蘆分船】元禄熱寶星合に雨を手向ん入

の内へ舞込九頭巾 武旻【男色十寸鏡】貞享年間 撞木杖に九頭巾おとろへはてたる云々

▲みそこし頭巾 【好色旅日記】貞享四年印本 二の巻上鹽

町の隠家の事をいふ條に「此所はよろづ仕まふたやの樂隠居後家の獨住ならずもの、俄道心名物の引がら賣有藏無盡のけだものつねは舍利寺のみそこし頭巾の行かよひを見るのみ云々」【正月摘】貞享五年 僧依は法被打敷云々帽子味噌瀧頭巾

▲紫頭巾 【落花集】寛文十一年印本以仙撰 赤うらもうばふ紫頭巾かな 言捨【晴小袖】露置や紫頭巾かはよばな

一雪 是は杜若の句なり、女子の紫頭巾をかぶりしにたとへていへるなり【大井川集】延寶二年 寒さをもうばふ紫頭巾哉 廣寧

▲むかく頭巾 【新竹齋】貞享四年 黄蘗山隱元の禪院あり京にて知る人の此山にのがれしあり見しにもあら

すさらくと瘦おとろへ無角の頭巾髭ながく世を見じかう見かぎり

▲もつこ頭巾 【雀子集】寛文二年印本 もつこ頭巾か

ぶるあたまやになひ辻 慰聽【大井川集】をさなきや持籠頭巾をかぶりく 千春【藤枝】延寶二年 山

更に幽なもつこ頭巾かな 維舟【よだれかけ】應承二年梅枝軒著

「一包のかねごとなどある棧敷などへは寛文五年刻

歌舞妓を須磨の浦づたひにてかのかりゆくを見ればもつこ頭巾にて百會をかくしける少年のもろともになさけをくみかはさんなど云々」これはかぶきの少年の帽子の事をもつこづきんといへるなり

▲紅頭巾 【空林風葉】てつへいに風のかけたる紅頭巾 柳言

▲をくす頭巾 【毛吹草】諸國名産越前の條「割織布、嶋布、苧屑頭巾、蒲脚巾」

▲をかざき頭巾 【智惠袋】寛文末祐政撰 色は吉田岡崎ちやいら頭巾哉 疎元【俳諧富士石】延寶七年印本 ねつみ

寒し岡崎頭巾糸鹿山 一因 考ふべき句【空林風葉】頭巾 品こそあれ出家金もち野良風 可久

（拾遺）ともこも頭巾【醒醉笑】廣本一の巻「大晦日に六つになるむすこを近づけ元日の朝わが此頭巾を手

に持たらばとくのあれともかうも頭巾をもたれたは

といへとをしへおき明朝頭巾を手にかぶりたきを

こらへてあちこちし見せければむすこ、てははとも

かくもせうとおほせあつたがともかくもえおしやら

難波づきん哉

空存

【落花集】難波頭にかぶるは

蘆のほわたかな

無友

是は綿子の句なれどまづ

こゝろみに書つけおきつ

▲はうろく頭巾

【落花集】

はうろくは八丈ぎぬの

頭巾かな

重安

【俗つれぐ草】

元祿八年印 一の巻

に「たしかなる親の跡をふまへ俵の類藏に積て金袋

をかたげさせいふ事に槌のきくも土釜頭巾を被りて

意見だら／＼いはれし親仁の御影云々」といふ事見

えたり近くは【無間の鐘】の淨瑠璃にはうろく頭巾紫

のと云事あり【五ヶ津餘情男】元祿十五年花風著 三の巻「死れば

何の苦もない事小塚原の石の主となりて土くさい土

器の水飲ばかり肌自まん寶祿頭巾も着ては生れず」

▲花染頭巾

【古糸屑】

延寶三年 重安撰 花染の頭巾の山はよ

し野かな

顯成

▲人丸頭巾

【懷子】

萬治三年 うら赤しだてな人丸づき

んかな

玄札

▲ひも頭巾

【續山の井】

寛文七年印 春寒みとかぬや

花のひも頭巾

如貞

【古糸屑集】 風の手にとくな

むすびし紐頭巾

重春

▲はあて頭巾

【寶藏】

二ッ前に出 されば略

▲ほくそ頭巾

【行脚文集】

元祿三年 關山峠を行は

くそ頭巾おもく襟より高き雪をわけて」柳亭云關山

は奥か羽か【吉原よぶこ鳥】元禄八年印本 序に曰「われも昔

はさいなみや志賀のうらわのより／＼に此きんかの

蠅すべり糸鬢にこりこかしほくそ頭巾を引込て土手

をてゝめが出すなといはれ」【正章千句】正保 槇の葉

の露や獵師の袖の上」ほくそ頭巾にかよふ松風【團

袋】元祿四年 刻蘭水撰

山と山ひとつになつて雪の山 洲瀬

ほくそ頭巾の糸のむすばれ

團水

▲細頭巾

製作 未考

【空林風葉】きまゝ姿いづこへ老の

細頭巾

春澄

▲丸頭巾

【古糸屑】

延寶三年 うば玉の黒髪山か丸頭巾

良賢

【早梅集】

俗かばんか知らぬで着丸頭巾

正業

【落花集】

法體やこゝろにまかす丸頭巾

愛世【當世男】前句不知丸頭巾二兩重てざつくと着

作者不知

【一字幽蘭集】

いかめしや我影法師の

丸頭巾

白椿

【枯尾花】

元禄七年 芭蕉追善の句 借着

つる夜着もありけり丸頭巾

万牛

このかたみ往

來に見せん丸頭巾

判巫

【十三歌仙】

寶永三年 許六撰 芭蕉

十三回忌 あらればらつく朔日の朝

魚路 櫻田

秋の條に「をどりとなれば常はくすみたる顔してゐる人までも心をうからかし生^{ナマ}知りなる小歌もしどろにうたひなしひか／＼光る投頭巾だてなる麻衣着てをどれば木曾をどりともしいふべき歟」【大佛物語】寛永廿一年著上の卷に「醫師と見えて年頃六十ばかりの人のけんのはをりになげづきんあとに乗物つらせてきたりけり」【續山の井】寛文七年相摸ならで取やかちんの投頭巾 正次【空林風葉】天和三年酒袋世はみな酔り投頭巾 松扇【水比羅免】元禄十一年松法隆寺この秋ぞとも 岩翁 露時雨駕籠ぬつと投頭巾 虚谷

▲夏頭巾 夏頭巾といふもの安永天明の頃までは花街にかよふものななどがかぶりし事ありとぞ當時は紹又は紗を用ひたり昔は麻にてありしなるべしゆるに麻頭巾といふ則夏頭巾なり

【晴小袖】寛文十二年富士に雲薄くかぶるや夏頭巾一雪【當世男】延寶四年耳にかゝりうしや蚊の聲夏

頭巾 柴女【蛇之鮓】延寶七年わらはなり淺る十筋も夏頭巾 泰徳【洛陽集】延寶八年夏頭巾耳はかくさじ時鳥 友靜【男色大鑑】貞享四年八の卷に

「若衆みな／＼九袖の羽織をかし／＼夏頭巾の山はさ

ながら錦を夜ルかぶりて云々」若衆とはかぶき治郎の事をいふなり是はうすものにて製しさま／＼の色に染たるをいふなるべし、【武家義理物語】貞享五年印二の卷に御堂參りの事をいふ條に「おさんだんなかばにあまたの人を見わけしに佛前のおそれもなく柿の夏頭巾をきたるあたま云々」これは麻のしぶ染なるべし

▲麻頭巾 【麻頭巾】元禄七年半櫃を葭簾にかこふ市の花 柞英 麻の頭巾のかろきはる風 委均

【瓜作】元禄四眉の白毛まで着し麻頭巾 一桃【己が光】元禄五麻頭巾吹落しけり青嵐 巴流【五元集拾遺】晝よりいねて うたゝ寝やかぶりつめたる麻頭巾 其角【向の岡】延寶八年行ぞ川御秘に捨る麻

頭巾 露言【一字幽蘭集】元禄十六蛸とる澤邊に麻の頭巾哉 望月

▲なまり頭巾 【糸瓜草】寛文元年關東ではやるはあまり頭巾かな 幸俊

▲なんば頭巾 【慶長千句】寛永十二年吟寛文はけつまづきけり露の暮 難波づきんに風寒

き頃 此句又毛 吹草に入 【夢見草】明暦二年印 蘆の穂わたいれなん

えたり【書本金龍山千本櫻】芳月堂丹鳥齋奥村文角、梅翁政信畫

此冊子に年號は見え

ざれども【櫻鏡】と同

時なる事は標題に明

也享保年間より此頭

巾あり



【風俗陀羅尼】寶曆十年印本尺龍點前句附

巾」前にいふ如く當時は男もかぶりしゆゑに此吟あ

り又明和八年の【黛山點前句附】に「うつぶいてゐる

ぼたんには鼻を用る袖頭巾」今は腮まで出るやうに

縫ども明和の頃までは眼の下わづかにいづるやうに

製す當時の書を見て考べし

▲そら頭巾

【空林風葉】はのゝかぶるたそがれ

人のそら頭巾

自悦

のけさまにかぶることはいふか又そらづきんといふものあるか考べし

▲大黒頭巾

【破枕集】鼠色に染る大黒頭巾かな

桂子

▲大明頭巾

▲唐頭巾

【續誰が家】

寶永七年百里撰

うどんやまでのし

るべ頼ん

「百里」唐頭巾樽木の間を噓して

琴

風」

▲だて頭巾 赤裏頭巾に入る

▲旅頭巾 【大井川集】延寶二年維舟撰 山の姿波のながめ

や旅頭巾 春澄

▲長半頭巾 【雍州府志】天和二年道祐著 七の卷に曰「頗蒙

又奇特頭巾或長半頭巾處々製之」とあり又元祿辛未

年淺見安正の跋文を書たる【喪祭小記】に長半頭巾の

名見えたり

▲縮緬頭巾

【境海草】萬治三年印本盛之撰顯成次撰 山寺の坊主や

頭巾かぶるらむ」入逢の鐘に花ぞちりめむ 作者

不知【古糸屑集】延寶三年重安撰 高き山も麓のちり緬頭巾か

な 初知

▲長頭巾

【新竹齋】貞享四年印本「くだらぬ理屈あはう口

引ぶり羽をり長づきん暮るればそる鼻歌の云々」

【好色伊勢物語】元祿始の印本なるべし初段に「男のきたりける長

づきんのうらをととりて歌かきてやるその男忍び編笠

のかいきぬをなんきたりける かいきぬのうらむら

さきのすゐごろもしのびのぞめきかざりしられず」

同書の注に「長づきん小そでふくさ扇などに歌かく

事わけて色里のわざなり」

▲投頭巾

【ひそめ草】

正保元年著

上の卷四季の事を云

らや火におこすてふすみ頭巾 成近【今様姿】寛

十二年重頼撰朝夕に着ればこそあれ角頭巾 守昌【落花集】延花

集【髪そりて我入山や角頭巾 季愚】【隱蓑】五年

似船撰迎も時宜背とならば角頭巾 貞之【常矩獨吟

蛇之助延寶五年春の日影をたゝむ懷中【すみ頭巾ぬぎ

つる山の雪消て【江戸辨慶】延寶八年片隠れ座頭の眞

似や角頭巾 調賦【空林風葉】山寒しその御姿角

頭巾 琴風柳亭曰、原本につのとななをつけた

り【江戸新道】延寶六年言水撰山深し時宜をのがれて角頭巾

松意【俳枕】松翁當國佐賀にありと聞いていひ遣しけ

る柳亭云當國とは肥前をさす引入やうき世のさがの角頭巾 正成

【軒端獨話】延寶八年印角頭巾山や音羽の耳おろし 黄

口【西山千句】寛文中の吟よひし醫師の耳の遠さよ

宗因角頭巾ぼんのくばまで花に着て 同【智

惠袋寛文末 祐政撰いざめせよもはや御時宜は角頭巾

一斑【刀桑美山】元祿八年かくれ家や片耳かけて角頭巾

專吟【皮籠摺】元祿十二年年國友撰赤人の顔して見せん角頭巾

乙掉【山中集】元祿十七年支考撰下向の杖の橋にはらゝ

季覽角立てかふる頭巾に山おろし 蘭少

【類柑子】享保木具にたまゝ空のえり物 貞佐角

頭巾へだつる雲の身をかへて 青流【續桑園集】

寶曆角頭巾烏帽子にねぢよ年男 碩鼠

▲袖頭巾 用捨箱に出▲おこそ頭巾同たれゝも知

る如く此二品同じ【櫻鏡】享保十九年印本吉原より淺草觀音

へ櫻を植しときの吉原の遊女の發句集なり 花盛り

それかあらぬか袖頭巾 江戸町二丁目平野屋平左衛門内 みちのく

これよりふるく袖頭巾の名を見ず、古老の聞書【我

心】に曰「寶曆元年大坂より中村富十郎といふ若女方

下る寒風を防ぐため紫縮緬にて帽子をこしらへたり

時の若き女是をかぶりたり男もかぶる者あり其時の

人はを大明頭巾といふ甚見苦しき物也」と記して袖

頭巾やうのものをかぶりし圖あり又寶曆八年の寫本

【愚痴拾遺物語】に一兩年以前をかしき頭巾はやる袖

頭巾といふ以外の外の惡風其原は池上本門寺の所化に

順光院といふ坊主あり品川の遊女に馴染て通ふに高

祖日蓮上人のかぶり物より思ひつきしなり中略始に

は順光頭巾といひけるとなり」といふ事を載たれど

袖頭巾の名寶曆享保の【櫻鏡】に見えたれば、富十郎

順光に起りしといふ説は信すべからず明和元年印本

【當世不問語】といふ冊子のうちに御高祖頭巾の字見

くむも女子氣のきどくばうしに顔つゝみはづれを
それと餘所めには人の見えりも嵐吹やなぎが枝も
もつれ合かちをひろいもお身こなし外めづらしく
云々」 出雲が作の【忠臣藏】浄瑠璃

▲氣儘頭巾

【軒端の獨話】

延寶八年印
本松意撰

花ぞ雲氣儘頭

巾の天乙女

皆古」

【風俗陀羅尼】

寶曆十年印
本尺童點 腰掛に

氣まゝ頭巾の太平記」

【柞原集】

元祿五年
自空撰

目ばかりを氣

まゝ頭巾のうき世かな

其角」

五元集、七車集は

骨董集に引けり

▲くゝり頭巾

【續山の井】

寛文七年

かざす梅のつぼみ

はくゝり頭巾哉

重昌」

【玉海集追加】

寛文七年

人心か

どのなきこそゑたはるれ」くゝり頭巾にそへる玉章

喜雲」

【空林風葉】

天和三年印
本自悅撰

くゝり頭巾風のあけ

たるひだもなし

如風」

▲毛頭巾

【蛇の鉢】

延寶七年印
本言水撰

横霞道外は幕に立か

へる 言水」

小髻に雪を残す毛頭巾

同

【阿蘭

陀九二番船】

延寶八年印
本寶圓撰

風あらくして毛頭巾を吹」夫遙

梢に物まね叫ぶなり

賀子」

▲まこころ頭巾

【智惠袋】

寛文末
祐政撰

甲かやまこころ頭巾

をはちびたる

久光」

▲忍頭巾

【吉原伊勢物語】

寛文初印
本なるべし

初段に曰「男

のきたりけるふるかみこのすそをきりて歌を書てや
る其男忍びづきんをなんきたりける

かすならはわれが旦那はすりきると忍びてかはんかすはしられず

▲順光頭巾

用捨箱に出す

▲角頭巾

すみ頭巾又たま／＼つの頭巾とよませ

たる書あり製はかはるべからず醫者老人法師などの

かふる頭巾なり【藥師通夜物語】醫者の事をいふ條に

「脈の事すこしもぞんせす候えかたにてこばし長胴

服に角頭巾わざとおほへいにして云々【阿蘭陀丸二

番船】

延寶八年
宗因撰

「武家の町風法師の腕だて赤烏帽子、

角頭巾伊達の薄着六方の意氣云々」右は延寶二年に

宗因が獨吟の前文也【崑山集】

慶安四年
貞徳撰

冬のきたかど

を見せけりすみ頭巾

政次」

【新續犬筑波集】

萬治三年

をさびしくぞ角頭巾

友聲」

【破枕集】

寛文三年
長保撰

ぬぎ

てまたきるや一禮すみ頭巾

豊實」

ひつかぶる鼎

の足か角頭巾

良保」

【洗濯物】

寛文六年
雪撰

すみ頭巾か

ぶるか鹿のふくろ角

一折」

【續山の井】

寛文七年

赤う

巾をだすも今はかつがす」ともかうもせし昔こそ戀

しけれ」永正年間の吟なり、されば此名三百餘年前

よりあり【大和順禮】寛文十年印 正文辰撰 初瀬 頭巾きるやとも

こもりくの初瀬風 貞伸【大井川集】延寶二年 維舟撰 武

藏野はともこも頭巾山もなし 野夫【後餘花千句】

享保 六年 天神の二疊半より立初て 安土「手まへども

こも頭巾出すざる 夜霜」此頭巾再々元文寛保の

頃流行し事【衣食住の記】といふ老人の隨筆に見えた

り、今の出羽越後すべて北國には雪中の寒風をまの

ぐに此頭巾を用るなりとぞ

▲奇特頭巾 今の袖頭巾なき前は婦女子此頭巾を

用ひたりさて奇特とは不思議と云程の詞にてともこ

も頭巾の條にいへる如く目ばかり頭巾ともなりさも

なき頭巾ともなる頭巾といふ事なり、【一休杉楊枝】

延寶七 年印本「おまろいところまだらににちりひちげつき白

の如くなる腰を百へんばかりもなでつけはいひろ帶

紫てぼそきどく頭巾についら笠もみのふと緒にかさ

ねえり白むく黄むくあさぎむく云々」【花洛六百句】

延寶八 年印本 中將うなづくおとがひの雨 千春「天女の

姫きどく頭巾でくだりの時 友吉」【歳旦帳】天和 二イ

三「お山たちきどく頭巾か春霞 忠長」【雍州府志】

天和二年 道祐著 七の巻に曰「頼蒙又奇特頭巾或長半頭巾等處

々制之」とあり、【一代男】天和二年 西鶴著 四の巻に四條五條

の人通り云々といふ條に「下には水鹿子の白むく上

へには紫絞りに青海浪紋所は銀にてほの字切ぬかせ

帶は紫のつゝれたり巻結びめ後〇に絆目のすみに鉛

のまづをいれ髪は水引かけて黒繻子のきどく頭巾云

々」【一代女】貞享三年 西鶴著 四の巻茶の間女の風俗をいふ

條に「黄むくに紋嶋をひとつ前にかさね紺地の今織

後帶をれがうへをこどりまはしに紫の抱帶して髪は

引下げてん元結を掛け額ぎはを火塔に取ッてきは墨

こききどく頭巾より目ばかりあらはし」【誰袖海】元 祿十七年印本

由之軒著「目の内利發に見えすき白きかたびらの

上に地黒金糸鹿子の菊流し花色じゆすの二ツ割紫縮

緬のかへ帶取まはしぬからず懷に袖刀のかくしざ

しふかく人目を忍ぶと見えきどく頭巾に顔隠し云

々」とあり

因に云、きどくぼうしもこの類歟、近松門左衛門作

【津國女夫池】淨瑠璃 本 に義輝將軍御臺所加茂詣の條に

「御伽は君のお手かけの梅がえ白きく初雪を妬に

るほど下へ持つてゆきてん髻の目にたつ程に折掛け
御所染のおもりづきん淺く火燈びたひをとりひろげ
風儀世の常に皆替りて東山時代の高蒔繪のみ箱云
々」こゝにおもりづきんといふ、おもり帽子の古文
なるべし

【好色盛衰記】元祿元年印本 三の巻「今の世の女昔なかつた

事を仕出し中略 首筋より上ばかりに入物十六品あり

中略 まづ髪のお、鬢付、長かもじ、小枕、平髻、忍

び髻、かうがい、さし櫛、前髪立、紅粉、白粉、齒

黒、黛、きは墨、おもり頭巾、留針、浮世つゝら笠」

【糸瓜草】寛文元年道甘撰 關東ではやるはなまり頭巾哉 幸

俊「こゝになまり頭巾といふはおもり頭巾の事なる

べし

▲かは頭巾 【空林風葉】かは頭巾古郷に母あり風

の泪 不可 【知恵袋】額にも波のたてばぞかは頭

巾 水元 【向の岡】鍬形や男鹿の角の皮頭巾

ト丸 【俳枕】革頭巾きなれの山や本の鹿 照龍

【十三歌仙】大豆燈籠に跡の大和路 武

旻 旅なれる一本ざしの皮頭巾 日良

▲かます頭巾 【古糸屑】山はあれどなかなぬは鹿の

かは頭巾 友也 【犬子集】寛永十年重頼撰 このわたつみて

雪をしのがん 年寄はかます頭巾を引かぶり 徳

元 【俳枕】寛文年間幽山撰 かます頭巾二村山やゆく嵐

交扇 二村山、三河の名所なり 【早梅集】萬治三年刻梅盛撰 米かみもはひ

るはかます頭巾かな 良庵 【新竹齋】貞享元年 謎禁好物

一づきん銀 カス

▲紙頭巾 【鷹筑波集】寛永十五年印本西武撰 かさぬるや破れか

みに紙頭巾 不辨するがの安部川に住 正康

【雪千句】寛文五年印本 霧に濕氣もつよき所化部屋 秋より

も出すかみに昏頭巾 作者不知 【向の岡】社の

煤夜叉神はらへ昏頭巾 不卜

ともこも頭巾、奇特頭巾、氣儘頭巾、此三種時代に

よりて製作のたがひはあるべけれど名義は同じ

▲ともこも頭巾 【世話盡】承應三年皆虛著 一の巻戀の詞

寄に「御座なほし、てゝなし子、ともこも頭巾、さ

ゝめ言」と並べ出せり忍ぶにたよりよき頭巾なれば

なるべしさてともこもとは【萬葉集】に「左毛右毛將

爲乎」とあるともかなり目ばかり頭巾ともなりさ

もなき頭巾ともなる、ともなりかうもなる頭巾とい

ふ事にて氣儘頭巾といふにおなじ【犬筑波集】宗鑑撰 頭

くそ頭巾思ひの淵にあこがれてはかなく身をもなげ
頭巾こそいと哀れには侍るものなればが頭巾は戀
か寒さか

花の顔のはあてがかくす八重霞

寒風防得一團絹、若輩任心被無由、

病氣狂言躍場外、貴人頭上不曾尤三の卷十二葉より十三へわたる

以上全文なり三の卷十二葉より十三へわたる 此【寶藏】後年【幸藏】と標
題を改めし本あり

▲赤頭巾

【古糸屑】延寶三年 赤頭巾人などがめそはげ
あたま 成林

▲赤裏頭巾

【當世男】見渡せば山も霞の酔まざれ
赤裏頭巾ひくり返して 重治寛文十一年印本 【落花集】寛文十一年印本 以伯撰

赤裏や頭巾の山の下紅葉

昨夜夢 【大井川集】延寶二年撰

維舟だて頭巾さて又うらは赤いぞの 千之の

▲隠元頭巾

【好色飛鳥川】元禄十一年印本 序に「昔日きのふの浮
世姿を今日の黒染になしていんげん頭巾のさとりれ
ぬ隙から云々」延寶六年撰 隠元頭巾山や淺黄と
かくれがの 黄吻

▲置頭巾

【向之岡】延寶八年撰 木枯や老曾森に置頭巾
二葉 山高く雲井にまがふ置頭巾 不門

【落花集】けふよりや風は心を置頭巾 正村【空林
風葉】天和三年自悦撰 おき頭巾たかまの嵐みねの風 友靜

【芝肴】お宿老には白髭の神 桃青 おき頭巾額に
たゝむさゝ波や 似春

▲おとがひ頭巾

【藥師通夜物語】寛永十六年印本 富るもの
ゝ事をいふ條に「りんすやさやにはぶたへをけんば
う染に數をえて、うらに紅梅もみをつけ、花かいらぎ
の絞ざやに金罽大小うち違へ高麗ざしの木綿足袋お
とがひ頭巾で顔かくし刑部梨地の印籠に枝のさご樹
に丸砂瑚樹ササグさげたる事を云々」因に曰刑部梨地は【俳
枕】相撲 ちる花は刑部梨地か山の内 忘十い【天
和三歳旦帳】暴雨の刑部が蓬箔春榮て 一品【紅
梅千句】承應中吟 鎗の先より録る秋風 正章 冬近し
をとがひ頭巾こしらへて 安靜

▲おぼろ頭巾

【後砂金袋】めす笠はさながらおぼ
ろ頭巾哉 作者不知 【俳諧三部抄】延寶五年撰 霞こそ
おぼろ頭巾のゆふば山 朴之

▲おもり頭巾

【四季ばなし】貞享年間印本 二の巻に「出
立常めかぬ末づかひの女菊唐草の地なし小袖に薄紫
の中幅帶うしろむすびゆたかに髪はかうがい髻をな

【むかし】物語「むかし武家の奥方息女かちにて

ありく事なし近所へも乗物にて行なり、遊山等に出

て先にて乗物よりおるゝ時はふく面かぶり物して眼

ばかり出せり召仕の針妙までも外へいづるにはふく

面又は綿にて面をつゝむもあり、顔をあらはに出し

てあるく女明暦の頃迄は一人もなかりし萬治のころ

よりかちにてあるく女はふくめんのうへに玉縁とい

ふ編笠をかぶれり、以上摘要【俳諧懷子】萬治三年立かへ

り見るぬり笠のうちゝふくめんを誰とも知れぬ姿に

て 保友【新續犬筑波集】萬治三年季吟花の顔ふく

めんたるゝ霞かな 勝政【智恵袋】寛文末菱川書本

十二月三月花見の書讀 ふくめんや花に忍ぶのおか

ただち 作者不知【江戸辨慶】延寶言草隠れふくめ

んにくし女雉子 昌夏【俳諧錦繡綴】元祿十五前句略

楊貴妃の顔をつゝめる山かづら 溪石「顔の白き

にふくめんの跡 普船」振袖を刀のそりに打かけ

て 其角【燕歌仙】袖冊子美しかれとのぞく覆面

北枝「つぎ小袖薫物賣の古風なり はせを」

【土師梅】寛永覆面に目ばかり見るや櫻狩 撰者八虹

【伊勢宮司】延寶男のふくめん 大宮人のつかふ鼻紙

曲言「覆面で仕舞たやめが暇あれや 露言」

○頭巾の名稱々

【俳諧鼻紙袋】「頭巾 丸……大黒……く……り……す

み……投……まへ……おとがひ……」【下學集】元安或

山臥頭服謂之頭巾也是はトキ

【寶藏】寛文中印本季吟門

頭巾

甚しき哉わが衰へたる事そのかみはかくしゝにか

ぶりてもわが身もあるまじき事のやうに思ひ人も諫

めつるに此頃は人もゆるしわれもおしはれてかぶる

ぞいとかなしき冬編笠に夏頭巾は世におこがましき

事にいへどやゝもすれば夏もかぶりて持病まじなふ

ぞせんかたなき此わが述懐はともこも頭巾のともが

らもせよ浮世狂ひの若とのばらの寒さの外にかぶる

こそ一かたならずをかしけれ世を忍路のはあて頭巾

ひしぎ物には袖をして葎の宿にもすみ頭巾逢夜や心

丸頭巾別れを急ぐ鳥の聲こそつらくけれ露は袂に

おかざき頭巾情になふもつこう頭巾今やうの事な

がら縁につるれば唐の物くふ隠元頭巾不思議にあふ

や奇特頭巾まづ山がつのむくつけきも心をみだす芋

平は大小の狂言のうたあまり多くてまぬるに詞たらずしはれる花の染衣の色ならで舞ににほひ残れるがごとし

おほかたはがぶきもめでじこれぞこのつもれば人の戀となるもの

正徳四年印本【役者目利講】大坂の巻「上上高」竹嶋

幸十郎、此人の祖父はかぶき傳助どのといひ御親父

幸左衛門どのはをさなかりし時日本左衛門と申せしが實に日の本に實事の名人と名を著して果られぬ

とあるにて又かぶき傳助も同人なる事を知るべし

或人云、黄なるものをうこんといふは源左衛門に初

るといふ説は尤笑べし【布衣記】にあり猶ふるくもあるべし

黄黄金金の字字をふるく用ひきたれりさもあるべし

【紅梅千句】承應の吟明前句見れば右近を馳走する體

貞徳附句まづ黄なる小袖を今ははやらかし

政信」是は右近を鬱金にとりなしたるまでにて源左

衛門が事にはあらず同時代故思ひまがふる人もあら

んかとかきつけおきつ【尾陽戲場事始】天明二「明暦三

年酉八月二十四日より熱田龜井の道場にて舞道若衆

歌舞妓といふ者を興行せり太夫右近源左衛門海道下

りといふ事を久しくいたせしとなり

柳亭云、若衆かぶきは承應元年に停止なり明暦の頃ははや此制禁やぶれし歟又三都の外にて當時も若衆かぶきありし歟

同書明暦四年改元萬治元年「春井郡兒玉村大日如來開帳によつて

かぶき興行太夫右近源左衛門おびただしく繁昌此節

源左衛門年三十七歳のよし」

柳亭云、此説によれば源左衛門は元和八年の生なり、

再按に、源左衛門寛文元年江戸へ下るといふは非なるべし、玉川千之丞が河内通ひのかぶき等にくらぶ

れば海道くだりは最古風なるやうにおもはる千之丞

江戸へ來りてのちに名護屋へおもむきし事【還魂紙

料】に記するが如し源左衛門明暦三年八月尾張へお

もむくとあれば明暦のはじめ江戸へ下り明暦三年六

月の火に江戸の芝居焼てしばらく止ゆゑにそれより

尾州へゆきしなるべし

【後餘花千二百句】享保六年傘返し又さして「行

手を打てあれが昔の右近とは」壺月「自注、右近

源左衛門昔の役者延寶六年「古今役者物語」源左衛門が事あり、

源左衛門昔の役者延寶六年「古今役者物語」源左衛門が事あり、

源左衛門昔の役者延寶六年「古今役者物語」源左衛門が事あり、

源左衛門昔の役者延寶六年「古今役者物語」源左衛門が事あり、

○女の覆面

て過にし事をかしかりき【男色十寸鑑】貞享四年印本上の巻

に曰「三十年以前まではかぶき若衆も今の風俗とは

かはり申畧都にては糸より權三郎がむかし吉郎兵衛

が若ざかり大坂にては千の小曝岩井雅樂寺田小傳次

などと分きてときめけり右近左近がつれまひ名左衛

門が造花を鉤かぎにゑたる姿世こそつてもて興じ其頃は

狂言の女形が今のかづらとてもあらず三尺許りの絹

をはちまきのやうに額にあてゝ其はしを長頭巾の如

く後ロへ下げたり【舞曲扇林】元禄頃の印本河原崎權之助作中頃右近

源左衛門と云ふあり若き時分は外にめづらかなる折

からにて名をとれり其後古傳内芝居へ出けれどはや

其時は上手どもあまたありける故さはいはざりき源

左衛門舞はうつくしきばかりにて曲ふりはづむ事な

くいつも平なる舞にて見る所不足【むかしく物

語】享保十八年老人筆記昔右近源左衛門といふ役者京都より下

り三絃彈一人地謠一人にて右の源左衛門藝をする時

今のかづらなどいふ物はななくこんのふくさ物に細

き糸をつけて額にかぶりそのふくさ物を月代へ打か

ぶるにより此ふくさにて月代をかくす面體奇麗の若

衆なれば女のごとく見ゆる諸藝とは海道下り山崎

下りなどといふ道行を地うたひ諷ふ夫を小舞にまひ

又は業平あづま下りの節餅を買給ふ處を獨狂言に舞

ふ是を諸人面白がりて見物する」長歌の始は福宜町

に歌舞妓役者右近源左衛門といふ者隠れなき若男に

て諸人見物す見ぬ人の爲にもやと、此源左衛門を木

にて作り又紙にて張貫に作りうこんのふくさをかぶ

りし體なりおびただしく賣るト養狂歌に又と世にし

前に見えたり名譽の事なり源左衛門長歌に海道下りといふ

事を作りて唄ふ殊の外はやる後には仕方して海道下

りを舞ふ

柳亭云按に寫本【吉原つれぐ草】寶永「小舞の振は京

四條大和屋傳助が弟子右近源左衛門海道下りを赤手

ぬぐひをかつぎ小舞をまけり」赤手ぬぐひとは戯れ

ていふか又うこんのみにあらず赤てぬぐひをもかぶ

りし歟まへに引し【舞曲扇林】お郡ぐんかぶき云々といふ

條に「其後大坂に餅業平大小の上手といひし日本傳

助といふ狂言師是は竹島幸左衛門の親なり」といふ

事あり大和屋傳助日本傳助又かぶき傳助ともいふは同人にて源左

衛門が業平餅買の狂言は源左衛門の師傳助よりつた

へし狂言なるべし【吾吟我集】慶安二年未得序に「あり原の業

柳亭筆記三の巻

○右近源左衛門

【ト養狂歌集】「女かと思れば男なりけり業平の面影はむかし男なれば今見る事は更になし當世はやりしうこん源左衛門おもしろの海道下りや何とかなるとつきせじとおもへば歌によみけり

又とよにあるものでない過去未來源左衛門が舞のなりふり

柳亭云、近年刊行なし、さうしに寛文元年市村竹之丞座へ右近源左衛門の下りし事を記せどたしかなる證なし此年中村座へ玉川千之丞下りしかば市村座へは此源左衛門が下りし歟

【ト養狂歌集】の奥書に寛文九年とあればそれより前に源左衛門が下りしは論なし此狂歌は江戸にて詠るものもあるものでないは當時流言なり今の俗言にタマツタモノデナイ又ドウモイ（女、などいふ類なり）【天水抄】寛文十年印本貞徳獨吟鎌倉の海道遠きさがゐに「おとす尺八何としてまし」自注に曰、尺八の手に海道下りといふあり

柳亭云、貞徳は承應年に歿す其前の吟なる事論なし

【古今役者物語】（延寶六）源左衛門が事ありケビキ本に抄録したる【續つれとく】みるべき事【大坂獨吟集】延寶三由平が巻の奥

に記し、判者宗因の俳文「傳へ聞、天寶の唐がらしは鼻より入て口より出る色あひは立賣の紅紅梅一句

く」のこまやかなるはお今が芥子鹿子後藤が彫姿うつくしくやすらかなるは柳に櫻にあさぎにうこん源

左衛門が海道下り筆にかくとも手點合おそれながらも候べく候」【難波鑑】延寶八年「承應元年初秋の頃か

ぶき若衆のひたひ髪をとらせ中略 其後能狂言と品を

かへ右近左近が海道下りを舞しより人又二人りゑづかまひぶりもかくやとめてはやして群集しぬ」柳亭云

れば若衆かぶき止て後源左衛門はおこなはれしなるべし【故郷歸江戸咄】貞享二「女方と

いふは右近源左衛門よりぞ初りける其後まんの助といふぞ女には似たりける、さるあいた堺町ト養狂歌

に

女かと思れば男のまんの助ふたりひらのこれも面かげ

とよまれしとなり」柳亭云、万之助の傳未考【男色

大鑑】貞享四年印本西鶴作六の巻「女方も昔右近左近が時は面

影まざらはしく頭は置手拭にして大かたは色作りし

に諸見物もそのなりけりに請取仕組も今に見くらべ

々」とあれば専らいやしき者うたひし歌ならん【糸竹初心集】
 玄ばがきぶし「柴垣／＼玄ば垣こしに雪のふりそでちらと見たふりそでへ雪のふり袖ちらと見た」
原本にはうたふ如くかきたり、今こはのみえりいだして記す
 ト養の狂歌にあはせ見るべし、のちにはさま／＼のかへ唱歌あれどもこれが本歌なる故に柴垣ぶしとはいふなり【獨鈞鎌論】
圖本此頃丹前の振袖ちらと柴垣をうたんは時を知らずといはんはに豈拒む事を得ん云々」是も當時柴垣をうつことのすたりしといふ證とすべし

【吉原つれ／＼草矢墜】

延寶二年印本

に「ながき夜をひとりあかしとほきあなたをおもひはりはしばのけぶりを

忍ぶこそいろこのむとはいはめ云々」同書の注にはしばの煙、しば垣集の中に「あはれに見ゆるはしばのけぶりつひにやかるゝ身とはゑらすや」とあれば延寶の頃玄ば垣集といふ冊子のありゑなるべし、【句兄弟】
其角撰元祿七年附合句に 柴垣うつも老の酔狂 神叔

【二代男】

天和

三の巻越後寺泊の遊女屋の事をいふ條に

「此頃上方よりざゝんざと申小歌が時花りきたり爰元の若衆いろ／＼稽古致せども聲がそろはぬと申侍る、さても世は廣い事を今おもひ合、柴垣踊はゑつ

てかと尋ねけるに夢にもゑらすと申、何をいふてもこれじやもの云々」とあるにて當時天和を難波にてはうたひふるせし小歌なるをおもふべし

柳亭筆記二の巻終

岡崎女郎衆のよいも幾度も同じ色に座をくみめ云々」此冊子は近きものなれど古老のいひつたへしを書けるものと見え此文柳町のさまを眼前に見るが如し二百年にちかき小歌の今に残りしは岡崎のみなるべし、或人の曰此小歌は賣女の事にてはあらず、岡崎御城内の女中の事をいひし童謡なりとさもあらんか衆の字に眼をつけて見るべし、【ト養狂歌集】寛文九年撰原本印本「ある人奴のゑばがきをうつ所を繪にかきて歌よめとありければ

やつ衆の名もおきな名もしば垣とゆひたてられてうついなのもや

ある人のもとへ行きけるにあるじいひけるはみな人の馳走にめいよのけだ物を見せんといふ、何ぞと思ひ侍れば、うば髻つり髻天神髻かひらぎの大小さしたるむくつけたるなりにてまかり出ですいさんゑける、いづくの人ぞととへば奴子するがゑばがきをうつやの者と聲にくげにいふ、さぞや上手ならんと皆人所望ゑければ天下一の不拍子者なりあまりおかしさにひそかに歌よみてあるじのかたへつかはし侍りける

しば垣をうつの山邊のうつけ者夢にもひとつあはぬ手拍子ある人の方へ行給ひけるに芝のかきをりやうりしてこせうをふりて出しければ

小歌ならばりやうりにはよきしだが、ひこせうふりぢぢらと見そめた

明暦三年酉江戸大火の時の落首

しば垣衆奉公やめてはかせせようき世の夢とよつくうたふた

同時の短歌、めもくれ竹のもがり竹、ゆひたてらるゝ芝垣とうたひし事も是とかや

さて柴垣も種々の冊子に見えたり【異本ト養狂歌集】

小歌節でうちぞながむる芝の海菜垣ごしにちらと見たとの

是は寛文十一年十月十六日の詠なりうちぞといふに【舞正語磨】を合見るべし又【江戸廣小路】寛延附合の句

に 胸を扣て志賀の山風」柴垣と大津うち出濱よりも ト尺」胸を扣てといふ條に柴垣と附たりてん

てツとんのたぐひなることを知るべし、ト尺は江戸

伊勢崎町の人なり延寶の頃までは江戸にておこなは

れし事か【東海道名所記】萬治年問印本 比丘尼の小歌をうた

ふことをいふ條に「つぎに柴垣とやらんもとは山の

手奴どもの踊歌なるを比丘尼あまにのせてうたふ云

なおよすけたるさまにつくりなし前髪をとり額にかざ入させられたる事にはなりぬ諺にも子ども奴とぞいひける奴柴がきのはじめとぞ聞えし、あまりにこびたるかたちにて小人島などいふ島ものを見るが如くなれば奴柴垣をうつ子を

奴にもわかしうしんを柴がきのうつけとなすは手とりものかな

などいひあざるもあり又拍子うつ柴がきあみをうつら／＼と見なれつゝやころせ／＼とうめくもあり」因に云、むかし三線をはじめてならふもののおほくよし野山といふ小歌なり吉野山の事は下にいふべし岡崎をひきたる事おほくは見えず【一代男】天和五の巻筑前の柳町の事をいふ條に「女郎は浴衣染の帷子に中紅の脚布をわざと見せかくる其初心さ何程、やう／＼此程岡崎を覺えたる手づきして只やかましき撥おと云々」又【姥櫻】元祿二の巻吉原の事をいふ條に「まがき／＼に居ならび、したん、こくたん、くわりん、たがやさんのさみせん、金銀の三所かな物、薄繪かいたるに駒かけてんじゆしめ、岡崎すがゝき、獅子をどり聲よき君はらうさい、かたばち、なげぶし、加賀ぶし、淨瑠璃説經、時のはやり小歌、それのかはり、これのやつし

云々」天和に初心なることにいひ却て元祿にさもなきやうにいひしはいぶかし若シ一端すたれたるを彼【大麻】に記し、都をかざき、二上り等のかはりを弾きいだしふたゝび行なはれしこともありしか猶考ふべし【從慶安至明曆筆記】明曆三年の條「此頃北國下の部の米搗とやらんに柴垣と云ふこと流布して河原者の業となる大名高家歴々會合にも絶て翫ぶ酒宴遊興の座の見物の上は柴垣といふ唄を謠ふに拍子を取形はむくつけき田舎夷が薇繩をもつて口。被たる如くに似り髭し座席へ罷出て蓬膚を脱蔽きえもいはれぬ輔して肩を打胸をたゝき癩癩病の狂せる形勢にて右様左様に覆り息も繼敢ずあがき俯き仰きに音を助け手を鳴らして興す云々」同書大火の刻落首 江戸は町人の命は酉の年なだがこぼれて（衍）柴垣となる」正徳六年寫「此くるわして云 柳町にありし頃は客の心すなは本にして女郎も氣をはらず、小歌はらうさいの一節にきはめ、淨瑠璃は十二段を半分づつ覺えてかたる、客も感涙を流し、琴三味線も二上り三下りのつやなく、本調子のすがゝきもひとつかへして獅子をどり

田樂の遺風などにや其獅子頭の角に菊の御紋ありて御免天下一角兵衛作之と彫ありといへりかゝれば角兵衛は古代の獅子頭の名工と見えたり、さて今の角兵衛獅子の詞に「しちやかたばち小桶でもてこひすつてんでんつく庄助さんなんばいくつても辛くもねへ」などいふこと何のわけともわからぬは定めてふるき詞をつたへたるなるべし此銘にある天下一といふ號は天の下にならびなきよしの意なるべし昔は器物にも食物にも負ふせし事にて【信長記】に天下一どのの藝者をそろへといふ事など見えたりその後いくほどもなく天下一の號をば禁じたまふときけばかの獅子頭はそのかみの作にてふるきものなるべし今に其號を改めざるものはわづかに鏡の銘にのこれるを見るのみ

○岡崎 柴垣

岡崎、柴垣は寛永の頃ならびおこなはれし小唄なり、岡崎は足にて拍子をふみ柴垣は手にて拍子をうつものにて近き頃流行せしてんでんとんの類ひなるべし【ひそめ草】正徳元年作
同二年板上の巻に「琴は太唐最初の皇帝の時作り始め給へり中略 いつぞの頃より筑紫樂とい

ふことありてひきけるそれに隨ひてあひさの興に小歌などをのせ侍るにより賤の耳にいたりやすく町かたにとりあつかふと見えたり、此頃猶しも筑紫やうにても樂ばかりもてはやさばすこしはおかしからんに小歌のをかざきをどりなどのみにてひきまはれば琴のみちははやすたれたるやうになんありける云々」又【舞正語磨】寛治三年に「まづあしくてもはやる證據には岡ざきをふみ柴がきをうつ事はいやしき藝ぶりの頂上なれどもはやりぬれば大かたわかき者の人なみにこれをすけり云々」こゝに岡崎をふむといひ【ひそめ草】に踊りとあるをてらしあはせて見るべし或人今の六拍子の類ひなりといへり、さて岡崎の小歌は【糸竹初心集】寛文四年印本をはじめ糸竹の書におほかた載せざるはなし今うたふところにおなじければ抄出するにおよばず又按に【大麻】貞享二年板に「都をかざき、ざいご岡崎、二上り岡崎とてあり」といふ事見えたり歌は一樣にてひきやうのたがひたるがありしなるべし今残りは此うち何づれかしらす【よだれかけ】承應二年梅條軒
著寛文五年刻かぶきの少年の事をいふ條に「ところどころに法の掟つよくなりいはけなき子どもをもみ

事見えたり是等を以て寛永の頃は専らいひし事なる
をおもひやるべし【小夜中山集】寛文四年 前句略付ざしの

たばこの煙空にきえて」同 　　たばこをば今一ぶくと

付ざしに」【俳諧今様姿】寛文十二年 刻維舟撰維舟獨吟のうち

付ざしも戀の烟か若たばこ 　　保之前句略付ざしの

たばこも戀の煙にて」是寛文二年の獨吟也ちかくは

天和四年に刊行せし菱川師宣が繪本【團扇繪づくし】

の頭書に「夏の夕涼に吉原へ行て見ればはりのつよ

き傾城は湯あみなどして身をきよめ床机に腰うちか

け往來の人にあふ、おてきなどを見かけては小手ま

ねきしてよびよせ煙草の付ざしなどにてだましつゝ

もん日／＼の無心をば遣手のかゝにいはせける」と

あれば吉原にてもむかしはいひたる詞なるべし

○角兵衛獅子

角兵衛獅子、越後よりいづる故に越後獅子とも云ふ

いづれの巻か忘れたり川柳が撰し【柳樽】に 角兵衛

といふ人獅子をまひはじめ」是は戯れて作りし句な

れど暗合して實に角兵衛といふ獅子舞ありし故の名

なるべし享保七年印本【繪文書】に角兵衛獅子 世

の機嫌菊にも名ありくるひ獅子 立其」といふ句

あり書圖は今の姿にかはらず此冊子は和漢の名高き
人物を百人あつめたる物にて近くは右に出せる千年
飴、遊女高尾、水木辰之助、小野のお通等あれば角
兵衛といふものも元祿頃の人にやあらむ、さて今彼
獅子を見るに鶏の尾をあたまた頭のかざりにつく此圖
もまたしかり

按に菱川師宣の書に鶏の頭をかぶり其他胸へ太鼓を
かけしさまなどは彼獅子にかはらざるものあり又
蝶が畫に萬治元年の印本【舞正語磨】に云「元和のはじ
めの頃やらん近江國の乞食二人編笠のうへに山鳥の

尾をさし中がへりしけるや云々」といふこと見えた

り是等彼獅子の起りにて笠へ山鳥の尾をさしたるが

いつか鶏の頭となりそれが又獅子に變じたれど鶏の

尾をかざりとする事は今に残りたるもおかし今越後

にては月潟獅子といふ月潟よりいづるゆゑなり【三

養雜記】山崎美成著三の巻角兵衛獅子の條に「越後國よ

りいづる獅子舞あり世に越後獅子といひまた角兵衛

獅子ともいへり角兵衛の名其故をしらざりしに或人

云武藏國氷川神社に古獅子頭ありそのあたりの村々

にて獅子舞をするにはかの獅子頭をかりて舞はし蓋

ふ一説あり猶考ふべし【洞房語園】にいふ多門庄左衛門初代は明暦萬治の頃を盛にしたるかぶき役者也歌舞妓に丹前風のうつりきたりし事は追考にいふべし【關東血氣物語】にも丹前の事見えたれど後人の作なればこゝに抄出せず

○きねにつる

ふるき諺に杵に弦といふことあり【毛吹草】正保三年刻世

話の部に杓子定木といふに並出し、俗にそれは無理
なといふ程の事なり簀に馬鋏の類【他我身の上】明暦三年

元禄山作 三の卷に「馬鹿氣なる町人、子を一人もたれしがたしなむ藝もあまたあるべきを隠し藝なりとてその子に兵法をならはせらるゝほどにやう／＼おもてを習ひあぐるほどにいつともなく陽氣者になりてあそこの喧嘩こゝの辻ぎりの手がらとてまことしか

いふをあらはしいふくにも染しものか、いまだ古畫には見あたらねど手杵に弦をかけし形なるべしさて俳諧に見えたるは

【年中日發句】慶安元年日吉祭り見し人歸來てかの神輿に

もあふひかつらをかけ侍りなどいひければそも又
加茂よりやまゐりけんなどいひて 宮人のかくるや

きねにつるあふひ
季吟
【新續犬筑波集】
萬治三年季吟撰寛

文七年「或人俳諧には望月をも弓といふべきにや」と
印本はれ侍りしにかく書きてやり侍りける　もち月を弓

といはんやきねにつる 大津順忠「かゝる發句もある
れば萬治の頃は専らいひたる諺なるべし」【次韻】延寶九年

楊水」附句 つきうすの陰より杵に弦引 桃春青イ

○煙草の付ざし

付ざしといふ事今は酒にのみいへど昔は煙草の付ざしといふ事あり【鷹筑波集】寛永十五年四月十九日 前句 戀こそ胸

の煙とはなれ」附句 忍べるか吞し煙草の付ざしに

「一滴」又承應三年撰明曆二年刻【俳諧世話盡】一名
燒草土佐 付ごゝろに、思ひの煙たばこの付ざしといふ
の皆虚著

ざし熊谷編笠丸ぐけの帶せみをれいてう五たいづけ
たんせんもとゆひ四角まげ長刀ぞりの長がたないき
ちをみがく長わきざしそりをかへし鐙をくつろげさ
はらばひやしてめにもの見せんとかしこ顔におのれ
くが異名をなのり云々」

○丹前帶 【天和笑委集】八の卷上野の花見にいで
たちし女の事をいふ條に「その品ことなるだて染に
一尺五寸の大振袖ゆきみじかくつまたく當世やう
のみせばにしたて^{略中}小づまをそろへてきるもありこ
しにあまれるたんせん帶うしろにきりゝと引まはし

吉彌やうにむすぶもあり云々」同書十一の卷世に知
らるゝ八百屋の娘七がよそほひを云條に「もやうよ
き小袖二ツ三ツとりいだし着たる衣装をあらため横
幅ひろき丹前帶うしろにまはして吉彌結もすそ小づ
まをそろへえりぎはくわらりとおしくつろげ云々」
とあればはゝのひろきを丹前帶といふなるべし腰に
あまれるといふにてらしあはせ見るべし

○丹前結びの帶

【姥櫻】

元禄年間印
本江戸作

「八丈ぐんない
りきんけんたいのはでじま羅綾の留袖雪のふり袖帶
は丹前吉彌結び古流當流しやらはとけ云々」とあれ

ば丹前結びといふ帶のむすびやうもありしなり

○丹前雪踏

【團扇曾我座鋪狂言】

元禄十四年印
本作者不知

町家

の婦女の事をいふ條に「下に淺黄八丈上に黄八丈紫
顔にすあしあさぎをの丹前せきだ紫の水木帽子きて
云々」是風流なる雪踏をも丹前と名づけしなり【つ
ねく草】に「萬に丹前風とてはやりける」とある
にあはせ見るべし【三代男】に見えたる紅の糸を組
て鼻緒にせしよりいでたる名にて淺黄緒なるをもし
かいふ歟

○丹前あたま

【男色木芽漬】

元禄十
六年

浪人なれば氣

隨の病氣分中がりなでの丹前あたま茶小紋の飛紗綾
の上下【むかしく物語】享保「昔松平丹後守上屋敷
前に町風呂屋夥有て結局美麗を盡し風呂女とて遊女
多有しがば貴賤となく諸人入込度々喧嘩口論有し故
御法度に成しとかや其時此風呂屋へ通ふ者の風俗を
うつしたるが丹前とて歌舞妓者の異名になれり丹前
にくる人といふにて丹後殿前といふ心なりなにゝて
も伊達道具を丹前といふ是よりの事なるべし」とあ
り、こゝにいふ如く丹前は勝山が姿より起りしには
あらず丹後殿前へ通ふすべての人の風俗をいふとい

○丹前編笠 【よたれかけ】【承應二年梅條軒】歌ぶき芝

居へ行人の事をいふ條に「みな人心あはたしく近【著寛文五年印本】

着をこすられ脇差のこじりをあてゝ入みだれ袖をつ

らぬる芝居のありさま我をみやこの花とかざる女も

ありしぶくりたる夜叉の紙子着たるもあり丹前笠に

まるぐけの紐つけてかぶるもありお山笠にくれなる

の緒しめやかなる後達【ゴタツ】もあり

○丹前節 【東海道名所記】【萬治年】歌比丘尼の事を

いふ條に「比丘尼ども一二人で來て歌をうたふ唱

歌は聞もわけられずたんせんとかやいふ曲節なりと

てたゝあゝと長たらしくひきづりたるばかりな

り次にしばがきとやらんもとは山の手奴どもの踊歌

なるを比丘尼ども能【サウラ】にのせてうたふ云々」又同書に

馬士の事を云條に「此頃はたんせんぶしを道中にも

うたひつれ横ぎる雨をもいとはず云々」と見えたり

又【好色三代男】【真享三年印本】二の巻すぎし遊女の事をいふ

條に「これは昔のかつ山芝がきといふ小歌にうたひ

し頃紅の糸を組ではな緒にせし云々」とあるに合せ

見れば芝がき節【芝がきの事】にありの唱歌に勝山が事を作りい

れしゆゑ丹前ぶしといふにやあらん

【山の端千句】【延寶八年印本】前彼の町やむかしは風呂屋の花

たりしが 四友 附小うたにしのぶ丹前の春

似春 此句をあはせ見れば、丹前節といふ小歌は、

萬治より延寶の末までも流行せしなるべし

○丹前島 【正月揃】【元禄三年印本東】五の卷商人の正

朔の條に「龜屋島、丹前島、金時羽織云々」

○丹前もやう、丹前紋 【天和笑委集】ふきや町の

事を云條に「いつくしき野良ともいゝなまめきた

る姿にかづらの前髪おもてに白粉くれなるの色ど

こんがうが得手物ゆふたりくたくましく元結大い

てうなべてかはらぬせきれいやうしかもしやうぞく

當世丹前はでもやう色香ことなる都染桃色もみ裏大

振袖女まさりのふたへ帶云々」又寶永九年の印本に

【丹前雛形】といふもやうの本あり畫人は洛下染物師

井村勝吉と見えたり丹前もやうの百年のむかしは流

行せしを思ふべし此雛形に丹前紋と云あり戀といふ

字に櫻の折枝袖といふ字に菊の花の類にて今加賀紋

といふ物に似たり

○丹前元結 【按に當よりふとぎ元印ひをいふか】【天和笑委集】八の卷

上野の花見の事をいふ條に「よしやふうぞくつかみ

り髪^の結やうは長き黒髪を白き元結にて片鬘の伊達に結ひしなり、勝山風とてすたらす揚屋は大門口の太右衛門にて初て勤に出る日は五町中の太夫格子の名とりども勝山を見んとて中ノ町の兩側に並居たり勝山は今日初ての揚屋づきの道中なれど少もわろびれたる氣しきもなく八文字を踏んで通ひし粧ひ器量押立雙びなく見えしとなり全盛は其頃第一と聞えたり手跡も女筆にはめづらしき能書なり勝山が詠し歌に 妹春山ながるゝ川の薄氷とけてぞいと袖はぬれける、つき出しの日黒じゆすの小袖に此歌を縫せしとぞ^{略中}又一日半井ト養酒盛のうへにて勝山を狂歌す 御佛が三國一ちや得申まい美女勝山は借せんのたね、勝山は原神田丹後殿前攝津國風呂の市郎兵衛といひし風呂屋の女也一年風呂屋女御詮議の時分に市郎兵衛風呂屋をしまひ勝山を親元へ渡し遣したるに勝山親と相對にて芳潤方へ身を賣て又遊女の勤をしたり彼風呂屋にありし時は物詣でなどするに玉縁^{たまぎ}の編笠に裏つけの袴を着し木刀の大小をさしたる風情ゆゑしき武士の如く見えたりしとなり多門庄左衛門などいふ芝居者彼が風俗を真似たりと丹前の名は

勝山より起りしといふ神田丹後守殿前なれば丹前の勝山といひたるよし」とあり

按にさきに引用せし【理非鑑】は日州の住とありて作者の名を載ざれど【身の鑑】國疑兵庫記等の書を著し、爲信といふ人にて日向國より京都に移りて住せし時の作なり寛文四年は吉原今の三谷にうつりて僅に八年の後なり當時京都より丹前風、勝山風といふことのおこなはれしを思へば、勝山が風呂屋にありしは原吉原頃なるべし、さすれば【一言艶談】にいふところによぐ合へり

【京四條於國歌舞妓】^{江戸土佐條正勝浄}「昔男のかぶき風しかへてえもんいしやうづき、大小さしたふりまでも、都、難波津、むさし野の、三ヶの色にをいてぶつ彼丹州の御門前、丹前風と世の人の、姿をまなぶしなしぶり、女心のだいだんに、ふるや奴が長刀云々」是は於國が男でたちになまをかへて江戸吉原へきたるところに見えたり、【色道大鑑】^{延寶六年浄書}「近年は傾城中に奴風といふあり^{略中}近世まのあたり見およびたる奴には江戸の勝山京には三笠藏人大坂には八千代御階大隅等なり」

色一代男

天和二年印
本西鶴著

一の巻、抑々丹前風と申は江戸に

て丹後殿前に風呂ありし時勝山といへる女すぐれて情もふかく髪かたちとりなり袖口廣くつま高く萬づに付て世の人に替りて一流是よりはじめて後はもてはやして吉原に出世して不思議の御方にまでそひぶしためしなき女也【菱川書本岩木づくし】天和三年板中昔の事なるに武江の城下によしはらといへるけいせい町あり此所にかつ山といへる御の字の太夫異名をたんせんといへりかく名づくる事此太夫前は神田丹後殿屋敷の前にふろやあり其所に住たまへばたんごどのまへを略してたんせんと名づく略中ものすき女らうのふうぞく何につけてもたんせんふうとて今の世の上々吉の手ほんとせり略中此頃京にかつ山といへるけいせいのあれば あづまには世にかつ山のあるなれば其名をかへてまけ山となれ

【新吉原つねぐさ】

貞享年間の作にておのれが見「勝山がきよげに藤がえがおもはくなきさましたる以上本文にて以下注也

此勝山丹後殿前に風呂屋勤せし女なり風流常にかはり髪切して太髻トモツヒを掛なりふりかくべつなれば是をうづして萬に丹前風とてはやりける、此女後は色里

にまねかれ太夫職になりてひぢりめんの內衣ユヅに柿かたびらすそほつしをきたる面影今もきよくおぼえける」こゝにいふ如く何によらず丹前と名づくる事、風流、浮世などいふが如し下に抄出せし丹前雪踏の類なり又延寶天和の頃印行せし繪本【岩木盡】といふ菱川が書本の頭書にも此勝山が事を載せたりしが抄録をうしなひたり再抄録して上にあり【好色盛衰記】元禄元年印本

「柳風呂に入て此所の瀑女に左門といへる風俗戀の奴にして江戸の勝山が仕出しに替ることなし」古郷歸江戸吐原板貞に享三年「此吉原にて世々の名取おほき中にも丹前、高雄、小紫、とて本朝にかくれなかりし遊女もありつるなり云々」此冊子に遊女の名とするは誤なるべし

【吉原一言艶談】

寛永の頃印本三の巻原吉原の事をいふ條に「其頃は風呂屋風呂屋ノ家カもの多く、ことに丹後殿前に勝山と

て名とりの呂列、髪髪カの結ぶり、小袖のしたてまで風流なるとりなり、是より丹前といふ事おこりて今はかぶき役者を丹前といへり云々」とあれば當時はかぶきにのみいふことゝなりしなるべし【異本洞房語園】享保五年寫本「新町山本芳潤が家に勝山といひし太夫あ

享保十八年印本【二十六、聲の塵】といふ三絃の書あり其序に加賀節の名は見えたれど當時おこなはれしことはなし、【昔々物語】に千之丞等がうたひいだしといふ加賀節は寛文の末延寶天和の頃迄もおこなはれ元祿の頃廢れしか、その後のさうしには見えず又云京都にて延寶天和の頃を盛に經たる加太夫といふ淨瑠璃かたりあり延寶五年十二月十一日受領して宇治加賀掾好澄と名乗る故に彼が風の淨瑠璃を加太夫節とも又加賀節とも云江戸にておこなはれし小唄の加賀節と混することなかれ加太夫が傳は享保十二年印本【今昔操年代記】に見えたり


○丹前 丹前風 勝山風 附、丹前を名とする種々

丹前といふ事は神田に住給ひし丹後守殿前の風呂屋の遊女勝山よりいひはじめしとはたれ／＼も知ることなれど詳ならず此一條は唯おのれが視たる冊子より抄出して後人の考證を待也【理非鑑】寛文四年印本 下の卷に「當世の若き人々の、衣紋つくるひ身をかざる事禮儀にはあらでみな好色の爲ならずや、みたてまつればおの／＼もたんせん風とやらん勝山風とやらん云て刀脇差さかやきまでも古にちがひてせらるゝと見え

たり此かつ山とやらんは江戸風呂屋の傾城と聞ゆしからば刀脇差などのかつ風とは心得がたし云々」本印
如此かつ風は山の落字歟又勝風とはぶきていひたる歟とあり下に抄出せる冊子によ

くあへば寛文の頃かつ山丹前風のおこなはれし證とすべし【吉原雀】寛文七年印本 物かき文したゝむる事云々山

本のときはゝすゑの代までもかゝみとなすほどのやさしき文を書きのこし又かつ山はせうそくをまなびて今もそのかくれなし

【吉原大雜書】延寶三年印本  山もと かつ山 めはなだち

じんじやうにびれいなるかたぎなりされど目もとしほらしすぎて八まんげびたり中勝山と名をまいらせ

しはいにしへたんせんのかつ山が名を付て山もとの

家につたふあたらし名を付たり【雨吟一日千句】延寶七年印本 薄

霞白かね吸キセル吸持たとて 友雪 丹前風呂もさわぐ

夕ぐれ 西鶴 【慶安より明暦に至る筆記】「承應

二年癸巳の七月十六日堀丹後守屋鋪前の風呂屋にて

御旗本の面々其外御家人無沙汰あり其一門へ御預に

なる」【好色二代男】貞享二年 一の卷「傾城の姿繪を八幅か

けて繪ときする條に「二番は江戸の勝山がト風か

はる男髪」とかけるも丹前勝山がことなるべし【好

興踊歌百番第十にさんがらか踊二上りあらい風に
もようややよあてまいさまをやるかしなの、雪
國へさアさんながらか川ちやざんざら柳のよいや
さしろねがくよい手はくこまのひざぶしんが
らかくしなのへやろかやるかしなの、雪國へさ
アさんくがらか」とあり是をいふか寶永より
古來といへば延寶天和の頃の小唄なるべし

按にさんがらといふ小唄の節の流行りける時ふるき
小唄をとりいでてかの節にうたひしものなるべし此
小うたのふるき事は 君にくしやらんしなの、雪の
國 玄心」といふ句の古短冊を藏する人あり玄心
は□□頃の連歌師なり俳諧の句は最めづらし天和三
年寶井其角が撰みし【虛栗集】に三谷吟行 詩を加賀
にやはらぐ蛙哉 楓興」とあるは是なり三千風が
【文集】に加賀節のはやりいでしことを書しも同じ天
和三年なれば當時おこなはれし證とすべし貞享の頃
つくりたる【新吉原つねぐさ草】に【かぶしつきぶ
しの小歌を色糸にひきうたふを聞て云々加賀節うた
ひながらすてぼうくととなへけるとなり云々」と
見え又元祿年中の印本【姥櫻】にもよし原の遊女が加

賀節をうたひし事を載たり【洞房語園】元文三
年印本 吉原に
て一藝に名ありし者云々座頭九都市川流三味線の上
手延寶年中京町二丁目に住同高市同じ流三味線下手
也高市の弟子の中には朗細加賀節に名取の遊女多く
ありし九都弟子にてはなし延寶より元祿迄の間京町
に住 同書名月二目酔のうた「揚屋／＼に琴の音さ
え二階く」に三絃かまびすし加賀節の隣は伊勢踊り
松阪こえて治る御代ちやへ」【虛栗】に三谷の吟行と
あるに合せ見れば專吉原にておこなはれし小唄なる
べし【姥櫻】の文をかき【鹿の子咄】元祿三
年印本「今夜は十五夜の
月にてまづ盃というてとりいだしえだ豆芽はこよひ
のあるじなれとてかぶしをうたひつれけるをりふ
し」などあり【京大阪茶屋雀】元祿六
年印本「およそお山のう
たふしなぐ小うたにては、なほぶし、古今ぶし、
ひこそぶし、かぶし、さぶさぶし、つたのはぶし、
やりふりぶし」、元祿十六年印本【松の葉】に加賀節六
うたを載す其うち道歌めきて古雅なるが「トうたあ
り【續松の葉】にも「よしやわざくれ身は朝顔の光まつま
かぶしあり」」の花の色うらみられしもうらみし人もともにきえゆ
く野べのつゆ」あとの五うたも野鄙なる詞にはあら

り【綾錦】には本町に住し後總州行徳の社職になる
とあり此【芝肴】のほか撰集未^レ見

按に社職となりて似春の文字を自準と改む、元祿五
年沾徳撰【一字幽蘭集】に神職となりける翌年試筆に
鳥帽子着る心になりぬ今朝の春」自準とあるは似
春と同人なり

○加賀節 さんがら節

【むかしく物語】「六十年前以前<sup>享保より寛文の末
延寶の初をさす</sup> 禰宜

町狂言座に多門庄右衛門、櫓に出来嶋小ざらし、花
井才三郎、玉村吉彌、玉川千之丞、山川内記、玉川
主膳、これ等は禰宜町にてかくれなき美男、拍子ぎ
の聲よき者なり是等寄合て加賀節といふ歌をうたひ
出す」

【國町の沙汰】<sup>延寶二
年印本</sup>角田川の船遊びの事をいふ條に

「此頃きこえある猶都といふ座頭をどりのせ古近江
がうちし紫檀の三味線に金の曙目あるかなきかに忍
ばせ蘆間の船のさはりがちなるねじみに銀のかせ掛
誰憚る氣色もなく撥音けだかく大どうにひきならし
其空蟬の身をかへて猶人がらのなつかしやとうたふ
加賀ぶしはさしも清川の流の水を酌しかとあやまた

る」^{同書注} かゝ節はことふりたるといへども今にすたらすおと
その名をあらはす【紫の一本】<sup>天和三
年淨書</sup>高田時鳥聞の條に「ぎ
はといふ^{ゴゼ}か

んといふ盲女を出したり^中 當世はやるといふ加賀節
とやらんをととは思へども告わたる鳥もつとめの身ち
やものを何をしのぶの山時鳥、よしやわざくれねに
たてよとは思へどもとても又忍ぶわけならすゑとげ
よとうたひをさむ」【京大阪茶屋雀】<sup>元祿六
年印本</sup>「凡そお山
のうたふしなぐ小うたにては、なげぶし、古今ぶ
し、ひこそぶし、かゝぶし、さんさぶし、つとのほ
ぶし、やりふりぶし」又三千風が【行脚文集】一の卷
加州金澤の文に「燕樂の加賀節も此時にはやり出悲
哀の柴垣早歌は遠く廢れて吟人更になし云々」是天
和三年にかける文なり一代男に云處と合せ見るべし
<sup>かゝ節の
事前に出</sup>【天和笑委集】<sup>天和
の記</sup>堺町の事をいふ條に「法師
沙門此道になづみさぶらへば正に才智學智をうしな
ひ^中 諸經どくじゆの音聲をひきかへ、らうさい、加
賀ぶし、さんがらやうのとはうもなきはやり小歌を
うたひ云々」

因に云らうさいは琴唄にあればいよくふるし、
さんがらといふは【松の落葉】<sup>寶永七
年印本</sup>四の卷、古來中

居をはられたり」とありこゝにいふ芝居は今の劇場のことにあらず只大路にて彼四ツ竹をうち錢を乞しをいふなり書圖にも乞食の四ツ竹をうつさまを載せたり此二書とも長崎よりはじまりしと書きたり按に漢土より傳へしもの歟清朝よりわたりし印行の繪に美人の四ツ竹を拍つさまを畫たるを亡友大浪が家にをさむそのかたち本朝にもちふる物におなじ西鶴が記し、如く承應の頃よりはじまりしや古き冊子には見えず

【江戸三吟】延寶六年の春の吟なり 音樂の鼓弓三味線あひの山

信德 四ツ竹躁ぐ竹の都路 桃青 姉そへて御伽

比丘尼の行事も 信章 是延寶六年の春の吟なり

桃青は相の山をうたふ三線に四ツ竹を附け信章は四

ツ竹に歌比丘尼を附けたり【好色一代女】貞享三年印本西鶴撰 三

の巻に「比丘尼は大かた棉布子に龍門の中幅帶前結

びにして黒羽二重の頭かくし深江のお七ざしの加賀

笠うねたびはかぬといふ事なし絹の二布のすそみじ

かくとりなり一つにこしらへ文臺にいれしは熊野の

牛王、酢貝、耳かしましき四ツ竹に比丘尼にさだまり

ての一升びしやく云々」かくあれば昔は比丘尼も四

ツ竹をうちしなるべし四ツ竹をさゝらにとりなしてつけたるにてはあるべからず【四五百森】元祿七年示周撰 早

稻わらにはふ風のまに／＼ 梅中 秋毎に四ツ竹

うちのうたひ來て 宜仙 又おなじ頃延寶 小西似

春が撰し【俳諧芝肴】樊蠡と見しは乞食なりけり 集和 印本如新樊ハ 美女獨四ツ竹うちに出たゝせ

仙風 錦の手覆ひ見初たる保 安昌 延寶七年吟

古寫本袖草紙にあり、今の袖前 園生の末葉ならす四つ竹

草紙には見えず、出所不考 千春 附馴てやさし乞食の妹春花に蝶 信德 江

戸辨慶 延寶八年言水撰 四ツ竹や軒端の聲の雪下風 異風

【打曇砥】天和二年秋風撰 雪の春薄前垂の脊中子や 秋風

門さへづりの歌の四つ竹 常矩 三吟 芝肴 江

戸辨慶 三書は江戸の俳書なり四ツ竹を拍て物乞

ふもの當時もありしなるべし

再按に【好色二代男】貞享元年印本西鶴作 大阪新町の事をいへる

條に「女郎交りの枕踊、四ツ竹の拍子に合て其頃の

花遣歌唐人の戀するは、きつくりきつちやななどと

分もなき事にのみ云々」とあり是に大鑑を合せ見れ

ば昔は乞食ばかりの拍ちしものにはあるべからず

因に云、小西似春は北村季吟門人にて江戸の人な

れなぬくゝりて三ッ尾はたらき泳ぐなり、中にも尺にあまりて鱗の照たるを金子五兩、七兩に買もてゆくを見て又遠國にない事なり云々」西鶴は大阪の人なれ門ときいあやまりたる歟、また市右衛門といひし事もありしか未考 再按に貞享印本【江戸鹿子】に地張きせる屋下谷池の端しんちうや市郎右衛門とあり同所にて家號もおなじければ西鶴はあやまりてかく書けるなり重左衛門も原はきせる屋歟是等證とすべし又一柳軒不トが撰みし【俳諧向の岡】延寶八年即納涼 影涼し金魚の光り鎮鏹屋 調桧子」かゝる句もあれば延寶の頃より名だかき金魚屋にてありしなるべし因に云一柳軒岡村不トは俗稱一郎右衛門といひ未得門人にて江戸の人なり貞享四年【總鹿子】には舟町とあり元祿二年の【總鹿子】には伊勢町とあり沾涼が【綾錦】には堀江町とあり是等は轉宅の所歟さて撰集に他國の句をまじへざる故に【江戸廣小路】寶六と名づく此向の岡は【廣小路】の後集也又是より後【つゞきが原】貞享四年をえらみ元祿四年四月九日卒たる事琴風が【瓜作】に見えたり墓は平河山法恩寺にある

再按に右に引用せし【置土産】の目次に「金魚が狂言

もふるし」といふ事あり此狂言とは金魚が水中にて尾をふり鰭を動しさまぐに宛轉するをいふなり今菊を作る者菊の狂咲して花形の變するを藝があるといふに似たり貞享五年印本【好色盛衰記】貞享五年改三元祿元年の卷に「又の日は金魚を生舟にあつめ狂言をさせけるが是もつひ水になして云々」又【新續犬筑波集】萬治三年季吟撰覽をどれるや狂言金魚秋の水 松滴萬治文七年印本に撰し俳諧の句に見えたれば古くよりいひしことなるべし【題林一句】天和三年調和撰 綾金魚水分山の稻妻や」ぶち金魚の句はこゝに見えたるがはじめ歟

○四ッ竹

貞享四年刊行せし西鶴が【男色大鑑】四の卷に「承應元年秋の夜の曇影をうしなひ物のさびしきをりふしある御所方の南おもてに宵の程は筆をふかせられけるが更て御なぐさみかはりぬ、其頃長崎より一平次といへる男きたりて四ッ竹といふ事を初めて手拍子犬うつ童まで世に是をはやらし云々」又元祿三年印本【人倫訓蒙圖彙】七の卷に「四ッ竹長崎一平次といふ者しはじめ有得なる者にてありしが藝は身をたすく籠の鶉とやらんにて四ッ竹ゆゑに大阪へのぼり芝

て樹木つるべもたせたる柳まで帳にしるし一本もき
らせず皆相應に年貢をいひ付百性とぬれ手拭はしば
る程出るものと氣をつけて井戸にまで年貢とられけ
るが、有もの南詰にまどひとつ明けるを是にも二升
とりあげんとあればしからばふさぎ申さんといへば
ふさぐにも二升出せと有、元服、よめいり、子をう
むまでも運上をとられける」

○蛭之助

【田中常矩獨吟二百韻】【蛭の助馬下駄三百韻】とあり書目録に
は【蛭之助五百韻】と見えたり予が見た
るは二延寶五年二月獨吟卷頭の句 蛭のすけがうら
見の鐘や花の暮」許六が【歷代滑稽傳】に常矩此句を
なしてより蛭之助といふ異名をとりたる事を載せた
り、蛭之助は今いふ底ぬけ上戸のことなり殘口が【艶
道通鑑】正徳五
年印本四季の段に「鬼と呼れし坊主も來り節
分の大豆を喰はで穴入し蛭之助と聞えし男も内損の
薬せんさくに春の若水を吞得ず」とあるにて知るべ
しさて句意はいまだ花見酒ものみあかざるにはやく
も日のくるゝことかなと晚鐘を恨し作なり、又【俳諧
隱蓑】延寶五年印本
萩田似空撰三月三日の句に 蛭之助に下戸馬繫
ぐ桃の酒 自休」是等の句もあれば延寶の頃より

専ら云し異名なるべし京師には今もいふ歟【物種集】
延寶六年印本 井原西鶴撰 雲にうつりて消る蛭の息 大酒の座には
たまらずふく嵐 三昌 美王寺名所【俳諧彼岸樓】
貞享二年 蛭之助こそ執心のつて花に酒 下也【俳
諧といふ物】元祿年間
季梅撰土臺から馬の合たる笛鼓 行
迷」蛭之助撰つて饅頭の香 季梅」

○鎮鋤屋の金魚井、不卜が傳 金魚の狂言

延寶五年の印本【江戸雀】等を見れば下谷池の端仲町
といふあたりは兩がは町とはあれど今の如く家居た
ちつゝきたる所にはあらず植木屋などありしさま也
元祿三年印本【人倫訓蒙圖彙】四の卷に「植木屋 江
戸は下谷、本郷、麻布にあり」と記しゝも此あたり
をさしていふ歟、さて此所に鎮鋤屋といふ金魚屋あ
り是金魚屋とよぶ初めなるべし貞享四年印本の【江
戸總鹿子】六の卷に「金魚屋、下谷池の端しんちう
や重左衛門」元祿二年印本總鹿子
には七の卷にありと見えたり又西鶴が
没後元祿
六年に刊行せし【西鶴置土産】二の卷に上野の櫻
しかんゝといふ條に「黒門より池の端をあゆむにし
んちうや市右衛門とてかくれなき金魚銀魚を賣もの
あり庭には生舟七八十もならべて洧水清く浮藻をく

ふは志賀寺の上人の事なるべしとたれもくいへど
たしかにしる者なし【新增犬筑波集】寛永廿年印本一名
集へ貞徳が句をついて
自注をそへたる書なり地蔵がしらの飯をくはいや

まいれたでひや汁のからだせん」此二句は宗鑑が犬
つくば 琴のしやうがであそぶ夏の日」貞徳がつぎ
たる句なり貞徳が自注に「琴のしやうがにからだせ
んの地蔵がこひにこしをそらいたといふ事なり」按
にこれふるき童謡なるべし、それが琴唄に残りしを
からだせんの地蔵とはあまりにつたなき詞のやうに
きこゆればかの志賀寺の上人の事のやうにおぼめか
して後人のうたひしものなるべし、からだせんは地
蔵の淨土なり戀に腰をそらいたとはいかなる事か考
がたし原ゆゑもなき童謡なるべし【義經記】實方中
將のあだちの野邊のしらまゆみおしはかりすひきし
かたにかけなれぬほどは何れをそれんなれての後は
そるぞくやしきとながめけんあたちの野邊を見て過
ぬ」からだせんの地蔵といふこと、そのかみはこと
わざにもいひけると見えたり【東海道名所記】にばけ
地蔵のことをいひて「地蔵ぼさつ神通をうしなひく
びをきられてからだせんばかりはのこりたまふな

り」【瑟琳音義】に「河羅帝那山梵語山名也或譯爲驪
林山二十寶山之一山也云々」

○窓錢

窓錢のうき世をはなす雪見かな 其角此句【焦尾

琴】又【五元集】にも見えたり窓錢は宿錢の誤りなる

べしと注釋せし人あれど【焦尾琴】は其角が自筆なり

【五元集】は其角が自ら書おけるをすきうつしにして

刊行なし、書にてしかも文字にて窓錢とあれば寫誤

ともいひがたし按るに窓錢は窓運上の事なり今いふ

小間割の類にて窓一つにつき何ほどといふ運上錢を

いだすを窓錢といふ也此事江戸にはなしさればかく

難有所に住故におもふさまのころへ窓を明け雪を

心よく見る事かなと浮世がたりをせしといふ句意也

【諸家大秘錄】前集十
二の卷松平越中守所替野村増右衛門私

欲の事をいふ條に「野村はいよく主人の氣にいり

て千石の分限となり心の儘に計らひ主人借金返済の

爲なりとて桑名領内の松原へ松葉をかきに來る者に

一人前六錢宛いださせ此金過半私欲となし又此外窓

錢或は婚禮又は種々の儀に錢を取ける云々」是窓錢

の證とすべし【百性盛衰記】正徳三
年印本三二の卷「梅桃柿惣じ

又それをわかつて予におくりしなり京順禮といふは

さきにいふ如く此事江戶及大阪にもあり衣裳にだてを作り笈摺をまとひ胸札

を掛け實の順禮の如くいであち洛陽の觀音の靈場を

うちめぐりしなり寛文六年印本【年代記】に曰「萬治

三年洛陽の三十三所の觀音此頃より初り老少あゆみ

をはこぶ」と見え寶永の印本【年代皇記】には「寛文

五年詔して洛陽三十三所の觀音を定らる」とあり事此

【玉瀟隱見】に萬治三年寛文五年いづれか是か考得ざれ

ども寛文四年の印本に【老婆物語】と題する洛陽三十

三所觀音の緣起をあつめし冊子あれば此事寛文のは

じめよりおこり寶永正徳の頃までもありしなるべし

【俳諧蠹集】其角京五吟前 呪に京の女の顔はゆく 只丸

附三十三所に戀しあはゝや 其角【同花見辨慶】

元祿前 秋の野遠き都順禮 信徳附艶女脱さげ袖の

たにやかに 同【同萩の露】元祿五年 假屋形千部過れば

麥畑 神叔 京順禮のつるゝ腰元 其角

○おろせ

上方にて駕籠かく者をおろせといふ或人の曰昔駕籠

かく者がおもくばおほせと云歌をうたひてかきたり

しが中昔より歌をばうたはずたゝおほせゝとかけ

聲にしたるよりおろせとはいふなりとぞ寛文年間に
刊行せし【獨吟集】に前麓への道にて連れも一休み

安靜 附おもへばおろせゝゝしばらく 同 此

句は駕籠といふ事なければたしかには聞えがたけれ

ど是よりさき明暦年間印本【野良虫】の序に「野良虫

といふ者は年の程十五六の人の大きさはかりにて手

足口鼻耳眼をそなへ頭に黒き頭巾をかつぎて祇園、

圓山、靈山リウウセンあたりへ飛めぐりて人のきんちやくをね

らうなりといふ、それは四條川原のかぶき子の事に

ては侍らぬかといへば大手を打て笑ひてさればとよ

そのかぶき子といふ者去年今年就中はびこりて略か

のやつばらのとろゝゝ眼にたられされて芝居終れば東

山にとまなひあんだ乗物にのせられてはいゝおろ

せゝといさみすゝむ云々」とあるにてらしあはせ

て考ればそのことのやうに思はる、此事引書も見い

です考もたらざれどまづ心おぼえに書のせておきつ

るなり【色里案内】貞享五辰 嶋原の條に「卸せとは此里

の籠かき也揚屋茶屋など銀拂の請合するものなり」

○八十の翁も戀に腰をそらいた

琴唄の梅々枝に八十の翁も戀に腰をそらいたとうた

て其人は 正察「桐の木履や敷島の道 遠舟」【熱

田三歌集】真享元年公家に宿かす竹の中みち 芭蕉「月

曇る雪の夜桐の下踏すげて 叩端」【大橋】元禄八年

行先の空に納る光り物 調夕」はきごころよき桐

の木の下踏 同」【一代男】天和二年三の巻蓮葉女の事

をいふ條に「かちん染の布子島繻子の二ッ割左の方

に結び赤前だれして桐の引下駄をはきて云々」

○竹下駄 【うたゝ寐】前句 己が氣を割つて見せた

る竹の下駄 蟻角」

○數寄屋下駄 【糸瓜草】寛文元年 返田の句 すきや

下駄ふみかへするや庭田つみ 一雲」

○露路下駄 【藤花蔓】爐路履の裾に開け石落の花

無倫」

○草履下駄 【江戸八百韻】延寶六年 一日にも廻り盡さ

じ庭の春 如流」山あり川あり草履下駄あり

一鐵」是は草履もあり下駄も有といふ句か考ふべし

○ぐりはま 芋の山

【俳諧破邪顯正】松月庵隨流著 延寶七年印本 に曰「清水の瀧を瀧の清

水などゝいはゞ作意にもなるべし、祇園林を林ぎお

んとはいはれまじ中これを連歌にては芋の山とて大

きにきらふ、俳諧にてはぐりはまといふ」とあり山

の芋といふべきを芋の山といひ蛤といふべきをぐり

はまといへるにて今物の齟齬する事をぐりはまとい

ふ是なり或は詠りてぐ【俳諧良材】元禄十年に、人はみな松

にひかるゝ子の日哉といふ行舊が句をひき云々とい

ふ條に「歌には老楓病といひ詩には客情なりとて嫌

ふ連歌には此格ありしを兼載は芋の山とかや笑ひ給

ひつるとなり」【慕紫集】萬治三年 住吉にて 蛤のぐり

はまところそ水の月 立圃」【佐夜中山集】寛文四年

りかひも何くれはまの生身玉 宗因」此句又小町【宗

因句集】出所ぐりはまの貝子霞む眼の樂」【向の岡】資延

八年不上を下へふむやぐりはまけふ干渴 不卜」宗

因の吟は二句とも老後のじゆつくわいなるべし【俳

枕】寛文年間幽山撰 延寶八年印本 駿州宗祇の舊跡 芋の山宗祇のつる

葉茂りけり 不卜」柳云、つる葉になりて連歌の下

手になりしをいふなり

○順禮がるた考證

このかるたは元禄年間のかぶき役者の姿繪にて京順

禮、江戸順禮などいふ事のおこなはれし頃の洒落な

り難波梅園子の藏なりしを花笠文京におくられ文京

元祿十四竹の夕日のわたる長縁 北枝 駒下駄の音を覗けば小性衆 浪化

○塗木履 塗足駄 【毛吹草】寛永十五 諸國名産の部

和泉の條に、中濱の塗木履とあり【堺鑑】天和三 塗木

履 女の著ける履なり諸國に多しといへども當津今

市町の木履を吉とす」といふ事見えたり昔は泉州に

ておほくつくりし物なるべし【一代男】天和二 一の卷

中居女の事をいふ條に「そこくにして塗下駄をは

きもあへず」又六の卷大阪新町の遊女の事をいふ條

に「内儀女房どもにもうれしがるほどの暇乞塗下駄

のおと靜にさしかけからかさもれてふる雪袖をいと

はず大やうなる道中【富士石】延寶七年江 鹿の聲刷毛

や物さし塗足駄 調幸 句意を考るにはけや物さ

し塗下駄と聲ながくよびくる商人の江戸にありしな

るべし延寶六年江戸露言【歲旦帳】全琴が第三の句に

「はけや物さし海士のよび聲東風過て」とあるにてら

しあはせて考べしそれを足駄にて鹿笛をつくる古事

におもひよせての吟なり【一時隨筆】天和三年印 妻の追

善 つひに行雪の夢路や塗木履 惟中【入船】元

年問幸 一時雨あはれ野良のぬり木履 榮道【隱簾】

延寶五年刻似 いざとりて鹿の音きかん塗履あした 信徳

【浮世の北】元祿九年 門のなき家には戀のみだらなり

黙不四年 ぬり木履より浮名たつらん 路半【南

無俳諧】寶永四年 眠るが如くつひに往生 許丹ぬ

り木履はいて戻れば物笑 貫仙

○柳下駄 【智恵袋】寛文末 春風に鼻緒もよるや柳

下駄 常風【坂東太郎】延寶七年 道野邊の朽木の柳

鼻緒もなし 丸石【廣小路】延寶六年 誓の唐網さア

かゝつたは「古下駄の柳は菩薩とあらはれて 言

水【向の岡】延寶八年 春雨や二世の恩得る柳下駄 風

志「時うれし花はくれないなる柳下駄 立些【後雙六】

延寶九年 掃溜や朽木の茂り柳下駄 露宿

○杉下駄 【大井川集】延寶二年 齒のかわく間なく

時雨や梧のげた 之因【俳諧破邪顯正返答】延寶

うしろには硯屏の山高くそびえ 維中 杉下駄の

馬通ひ路ありけり 同【蛇之鮮】延寶七年 柳下駄糸

に玉ぬく鼻緒かな 調和【肝拭五吟】延寶三 佐野

のわたりに行水の露 似春 宿とへば三輪の杉下

駄簀縁 宗因 〇桐の下駄 【六日飛脚】延寶七 雨露のかたぎ残り

柳亭筆記二の卷

○馬下駄 駒の爪 駒下駄 井、下駄名目種々

馬下駄は今いふ駒下駄なり明暦の頃より正徳頃まで種々の冊子に見えたり是は原庭下駄にて昔は他所へはきありきし物にてはあるべからず【砂金袋】明暦三年印本はねあがるけふ馬下駄の足揃 善種 雨ふりければと前書ありて加茂の足揃の句也【早梅集】萬治三年梅盛撰馬下駄は雪ふる道の案内哉 直重【懷子】萬治三年重頼撰ひとはいやな長廬路の内 庭の雪行馬下駄のあと見えて 重供【落花集】寛文十一年以仙撰馬下駄が五月の雨の足揃 重行 馬下駄もいつしかなづむ爐路の雪 以仙【今様姿】寛文十二年印本重頼撰馬下駄の跡もや雪の道しるべ 一二【馬下駄百韵】延寶四年常規獨吟馬下駄やひけどもあがらず厚氷【俳諧三部抄】延寶五年惟中撰馬下駄はあれどすゝまぬ雪の庭 丁春馬下駄で海をわたすや五月雨 不琢【向の岡】延寶八年不卜撰焼印をするを見て 馬下駄やむかしは南鏡春の雨 不卜【西鶴後大矢數】延寶八年吟三尾の谷が譽て通すや雪の笠 寸松 適大しやう馬下駄の霜 西鶴【後雙工】延寶九年清風撰馬下駄

や水のさかまく五月雨 西通 寶曆七年集小歌本【糸の節】に駒下駄といふ小歌ありその文章に駒あしだとあるがめづらし、寛文六七年の頃刊行なし、【蠅打追加】に「尻げたもはねのあがるや五月雨」といふ一雪が句を貞恕が難する詞に「俗過たり蘭履といへる物は昔よりあり尻きれを當時しきれといふ古風の物也駒の爪と云ぼくりを今は馬げたといふいやしと古老の申されしなり尻げたとはいいかい」といふ事あれば駒の爪といふが馬下駄の古き名なるべけれどさまでふるきさうしにては未見駒の爪を馬下駄とよびかへ又昔にかへりて駒下駄といふなるべけれど駒の爪の名は却て古き冊子にてはいまだ見えず云々【俳諧玉手箱】延寶七年蝶々子撰駒の爪やつばの名ぶみ庭の雪 泰徳 今北越には駒の爪牛の爪といふ木屐ありと雪譜に見えたり【分外集】艶土撰序に元禄十五年卷中に寶永と云句あり不審ひやうし木は駒の爪なり牡丹畑 雪凍 庭下駄の音を拍子木にとりなしたる句なり【俳諧うたゝね】寶永年間不角撰手拭かくる雪折の竹 將基 講庭の下駄まで駒の爪 柏葉 將基といふより詰に爪をかよはせてふるき名をいひしなるべし又駒下駄の名は天和中より見えたり【俳諧題林一句】天和三年調和撰庭芝に駒下駄いさめつくし狩 笑蛙【曾古の花】

をあや竹にとりなしたり是難波の集なり何國にも此
事あり【天和笑委集】天和二年筆記堺町の條に「爰に出來山、

長ひしやく、曲鞠、曲ばち、あや八ッばち、麥豆あ

づきを取くはへ鎌くわ刀の手づまと云々」出來山放

家師なるべけれど名を知らず長ひしやくといふ事又

解しがたし【杜撰集】元祿十三朝熊にて綾織の白刃の

うへの櫻かな年嵐雪撰濟通」朝熊は伊勢なり彼地に此放

家のありしなるべし

【風流伊勢物語】年號不知元祿の初也四の卷に「昔色ごのみの男

伊勢參宮にまゐりければかのおひの山にだてすきし

ける女はり札して錢なくば糸のはり網こえぬべし

わが曲あやの見まくほしさに、同書注、あひの山伊

勢にあり中略さいつ頃より糸の網を張て、其うちに

歌うたひゐたるお杉お玉といひし此所の美女なりし

も、いつしか老木と花もちりかたになりてあとを隠

し今はお鶴お龜とかや其あとにぬれの姿をつぐと

ぞ、曲あや、此女綾の曲をなす」前の句是にてあき

らかなりあやに「ハを投しゆる白刃のうへといひしな

り【西花集】元祿己卯風吹かへす早稻の畔蒔

連山」盆
に出る村の乞食はあや織りて
支考」支考自注里は

畔かりの米にとりつきてかゝる物もらひも門にたゝ
せたる盆のこゝちさゝめきならん

以下は是にたとへて別の事をいひたてたるなり

【かはこ摺】元祿十二生壁のにはひに朝日さし入て

空牙」あや織やうに木の小割する 乙由」薪を割

に木のさきを割かけ又かたゝをわらんとする時片

手にてもちかへすさまをかの綾織にたとへし也

又心おぼえに書きのせておく、たしかに聞えがた

き句【富士石】延寶山賤やあや竹ならす落葉の軒

調管」涇川集にも又聞とれがたき附合の句あり

り出たる物歟コギリコノ事 古くは三線の拍子に拍合せしものなり」【竹齋物語】寛永花見の事云條に「又ある方

をみてあれば遊女遊君あつまりて若き人々打交り、しやみせん胡弓にあや竹や、調べそへたるその中に云々」とありさて此あや竹といふ小竹を以て三弦へ拍子をうちあはする物にて其原はコギリコより出、今踊りの手具足にあや竹といふ物あるは是なるべしこぎりこは小竹の管なりむかし放家師など左右の手に二ツの竹管をもちあるひは拍子てどりあるひはうちまはしなどして興をとりしものなり【錢龍賦】寶永二年こゝの欄間も竹も見ふるす 才九「相口

を綾になぶつて納けり 嵐雪」小脇差を戯れに抜うちかへし／＼柄をにぎる事をいへる也後には拍子を取る事をば要とせず彼玉とり刀玉のさまにいくつも／＼うちあげて手に取る曲を専とするより放家師の業となり綾織とも又略て綾とのみいひしなり刀にもあれ笠にもあれすべて是等の業をあやといふはさきにも記す如くあや竹より出しゆゑなり【人倫訓蒙圖彙】元禄三年印本に放家師の圖を載て「綾織 かれが名をいふにはあらず二ツ三ツ四ツの竹を以て上下へあ

げおろす手品をいふ也、其意は機を織るには横糸を通す時堅糸上下をなすなり、今此業よく似たるをもつてあや織といふなりとあり當時はなべて此業をなす者をあや織といひしゆゑかれが名をいふにはあらずと理なるなり此説によればあや竹は手玉にとる故の名なり此冊子元禄三年印本にてさまでに古からねど語釋の見えたるゆゑまづこゝにあぐ、以下は放家師また袖乞の類がかの綾竹の曲をなし、種々【江戸八百韻】延寶六年印本乞食して月の桂をうたひ行 言水「綾竹空に嵐吹秋 信徳」延寶の頃あや竹を取物ごひ

のありしなるべし按に、はじめにもいふ如く綾竹はコギリコの類なりコギリコは小き竹管、是も放家師などが手に弄し拍子を取うちあげなんどしたる物也【七十一番職人歌合】に其圖を載て「月見つゝうたふはうかのこぎりこの竹の夜ごゑのすみわたるかなといふ歌あり是によりての句なる事明なり書にもかのコギリコを手まさぐるところをかきたり自然居士の謠にこぎりこは放家にもまるゝといへる是なり 自然居士は放家僧の書損なるべし【二番船】延寶八年印本小太刀を抜て希代な早業」あや竹の一尺二寸候ひし 繁榮」前の太刀

見るに是も賣來りしものなるべし

○しりくらしい観音

薬師の前地藏の後といふ諺ふるくよりあり、是はくらき夜の事なり、薬師の縁日八日その前は七日まで地藏の縁日は廿四日その後は廿五日よりなり【南花ばなし】貞享年二の巻に曰「昔八月十五夜の頃さる寺の上人同宿を連れ野はづれを御とほりなされしに此所はそうじて日くるれば盗人いでて人をなやますよし申程にひらに此道は御通りなされなといふ上人の曰いにしへよりも薬師の前に地藏のうしろといふほどに今は盗人出まじくるしからじとおほせらるゝ同宿又曰薬師の前と地藏のうしろならでは盗人はあまじきかといへば上人あざ笑ひ給ふ」といふ事あり十五夜は薬師の縁日の後地藏の縁日の前にて月夜なるゆゑに盗人は出まじといひしを同宿のこゝろえたがひしたる輕口ばなし也又雄長老の【新撰狂言集】下の卷に「さる寺に地藏院薬師院とてありぢさうゐんは女をすく、やくしゐんは若衆をすきければ門外に札を立て

すきんくは地藏やくしの前うしろへだつところは蟻のとわたり

此二院の名實にありしにはあらず前うしろの趣向をまうけそれはいはんとて作りしなべるし是慶長元和の頃の詠なり暗夜のといふ考へには用なけれど此諺のふるくよりありし證にあぐさてしりくらしい観音のしりは後べなりくらしいは暗きにて是と同じ諺なり六観音の縁日を十八より配當して廿三日にをはる七観音のときは十七日を加ふ観音の縁日の後は暗きと轉じて解すべし是も古き諺なるべけれど尻ときこえて耳だつ故にや【毛吹草】世話づくしの類にも載す唯【東海道名所記】萬治年一の巻に曰「茶屋に女あり茶を後むきてたて侍りお姿を見れば如意輪観音ほど美しうおはしますがうしろ向き給ふこそ心得ねといへは樂あみがいふやうこれもいはれあり三十三身の外に昔より尻くらゐ観音とてこれ有といふ」と見えたりはや當時後を尻と誤りしか又は狂言にわざと書きたる歟

○あや竹綾織

【和名抄】オトリ弄玉注弄鈴【新申樂記】品玉八ツ玉【文安申樂記】刀玉、などあるは田樂、放家師の類の者が刀にもあれ鈴にもあれうちあげて手玉にとりしなり是等に類してちかくは綾竹といふものありコギリコよ

らざらし

川柳

【寶船】元禄十六年
印本露月點高々と聲がまう

けるさらし賣

【南部餅祭】

正徳五年吟享
保元年印本屏越の松に蟬

啼夏の木々

乃斥

晒の聲に節句近よる

【卜台】

心おぼえ此兩人の名原本にて見へし



【寫本とくくくの句合】一名三口一舌印
本句合とは異本かつをく島商
官は聲もなし
素堂」柳亭曰鯉賣のいさましき呼

聲にけおされしをいふ【上京染】享保乙
巳露月月並題浪人

一聲のひやくや生平ならざらし 夫山【三部の句に

見えなければいづくにもありしなるべけれど他國は知

らず今江戸には絶たり蚊屋賣のみはあれどもたまた

まならでは聲をきかず因に云昔は何事も質素にて下

人は多く紙帳を釣たり故に紙帳を賣きたりし事あり

【富士石】延寶七年印
本調和撰雨晴て聲いや高し紙帳賣 宗也

【向の岡】延寶八年印
本不ト撰夕立やあるが中にも紙帳賣 立

澤子」文化十二年九十三歳なる老人の筆記【飛鳥川】

といふ寫本に「昔夏近くなれば紙帳賣冬になればて

んとくじ紙金なりといふ物を商ひたるが今は少なし」とあ

りこゝに記されしごとく今も棚にては商へどもその

家おほからずましてやふり賣に來りしことはふるき

冊子にも見えざれども二句まで證あれば延寶の頃は

もはら賣きたりし事必せり飛鳥川といふ同名の書多くあり
故にかく初めにことわりしなり

【誘心集】寛文十三年
印本種寛撰冬雜 引しぶやもみちの錦紙子賣

千之」【隱蓑】延寶五年
刻以仙撰時なるを紙子うる聲初時雨

重政【夕紅】元禄十年印
本調和撰仙臺の淨瑠璃聞ん紙子賣

花畝」彼地は今も紙布の名産也むかしより紙子

の類は他國に勝れしなるべし此三句をてらし合せて

【むかし】物語

享保十八年筆記

昔は四月頃より伊勢津線

聲時鳥

立松

【前後園】

元祿二年印
本言水撰

編笠に蟬のやど

とて挟み賣あるく事おびたし面々は是を調へ着す貳

らむさらし賣

吉井水流

元祿三年
其角撰

柳亭云聲長々と呼びゆる

きもやうは帷子に着又夏袴に仕立一反五六匁なりし

やかにあるくを云

【花つみ】

元祿三年
其角撰

我物とよき島着

近年は奈良半晒のし縮も何れも高直袴は郡内平精好

たり生平賣

巴山【秋津島】

元祿三年印
本蘭水撰

初秋 一葉

平などいづれも高價なる袴を着す緞は絹緞になり云

散て聲おそろしやさらし賣

團水

【夕くれなる】

々々又【中古風俗志】

明和元年
年筆記

享保の頃迄は初夏に至り

臨江

柳亭云、呼聲

奈良晒蚊屋荷といふ事はやりて聲うるはしくよばせ

の長きゆゑその間にいく足かあるくならむといひし

なり、【柳の水】

元祿十三年
雪踏しやら

後より吳服屋の手代勿體らしくついて通りしがいつ

名

寒聲に菖蒲を含む生平賣

同

【輕口臍をどり】

しか止んで少しばかりの荷を持せたまさかに歩行事

【或屋敷の内より中間はしり出て呼けるうつくしき

女中二三人立出て此さらしやに問給ふはのゝとあ

かしちゝみはないかといふ島がくれ行てゐらぬと答

ふ彼中間身も買申さん與作丹波布はないかと問ひけ

る冊子をもて考るに津線賣は享保の頃はやく絶、帷

子賣は明和の頃までもありしなりこの帷子賣いつの

頃よりありし歟、俳諧の句に見えたるくさぐさ

【洛陽集】

延寶八年印
本自悅撰

をしめ春井出の山吹生平賣

自

悦

【江戸辨慶】

延寶九年印
本言水撰

呼聲や御代にひかれて奈良

思ひ出ぬ生平賣

【花見車】

元祿十五年
年印本

おもくくと平安城をな

がらし

【花見車】

元祿十五年
年印本

おもくくと平安城をな

がらし

【江戸辨慶】

延寶九年印
本言水撰

呼聲や御代にひかれて奈良

思ひ出ぬ生平賣

がらし

【洛陽集】

延寶八年印
本自悅撰

をしめ春井出の山吹生平賣

自

悦

【江戸辨慶】

延寶九年印
本言水撰

呼聲や御代にひかれて奈良

思ひ出ぬ生平賣

がらし

【洛陽集】

延寶八年印
本自悅撰

をしめ春井出の山吹生平賣

自

悦

【江戸辨慶】

延寶九年印
本言水撰

呼聲や御代にひかれて奈良

思ひ出ぬ生平賣

がらし

【洛陽集】

延寶八年印
本自悅撰

をしめ春井出の山吹生平賣

自

悦

俗に島物といふ漢書に似て非なる物を島繪といひ島
ひよどり茶入の島物の類也織條オリを今島といふも是に
同じいづれの際にかベンガラ、サントメ、チャンバ、
カントウ等の織物をあまた外國より持渡りしが當時
は目馴ざる故になべて是を島織物となへその物お
ほくは織染なれば遂に條の事を島とはいひきたりし
なりおしはかり思に天正後の俗言歟室町家頃島とい
ふはかならず島の形にて條の事にあらず【平治物語】
暗記にて記す若し保元物語がかされて正すべしに島摺のひたゝれといふ事見え
又【まひのさうしたかだち】鈴木重家がいでたちをい
ふ條に「ぎよりやうしますりのひたゝれいか物づく
りのたちはいて云々」なほふるくもあるべし前に引
し【親元日記】おなじ犬追物の條に「御すはう地かち
ん越後布御もん島におもだかぬひめつけ通りにひが
き二寸あまりのすぢ一ト通りあり」とあり御紋は模
様なり島は鷗の形に地紋をとりそれへおもだかを染
るをいふ二寸あまりの條といふが今の島なり、今の
島を條といひし事は諸書に見え今も千條萬條子持條
だんだら條の類の名は残りてあれば古書を引すこゝ
にはたゞ島の形なる事のみをあぐ【簾中舊記】女ばう

いしやうの事をいふ條に「はくぬひ物の掻切かいきりと
片洲片洲はかたすの事にて候しまには候はで押通おしとほしたる
事にて候これはうへく島にめし候たゞの人はき候は
ぬものにて候云々」私に圖を作りて按に



此處をかき切て
きめのはしまで
おし通したる物
といへるなり



此處を切らざれば片洲にあ
らず兩洲にて島になるなり

小舞の謠【宇治の晒】に嶋に洲崎に立つ浪を附けて」
とあるにてらしあはせて見べし、今の如く條を島
といはんにはいかで洲と島と混すべき、「かたすの
事にて候しまには候はで」とことわりいへるにて昔
島といひしは島の形の事なるを思ふべし島と洲の形のあい似たること
いふにてしるべし【黃白問答】に島摺未考とある今條を
島といふにふと思ひまどはれしにて此島の形に摺た
る事論なし【異本人穴冊子】に「此霞流しのひたゝれ」
とあるは霞のかたちをすりたるにて島摺の類なるべ
し

○綴賣　さらし賣附、紙帳賣

【黛山評前句附】

寅八月とあり延享三年なるべし

むすびけり衣看板しや

んと帶

【川柳評同】

安永年間

衣屋は子供の着物出してお

き

○つちが花

貞徳の【御傘】に「つじが花もつゝじが花といふ事を
中略したる名なれども赤きかたびらの名になりたれ
ば春の季にならずかたびらにひかれて夏の句になる
なり」とあり按に躑躅が花の中略ならばつゝじ花と
こそいふべかれてにをはのかの字をおきて牀のつの
字を略く例ありともおぼえず、別に名義あるなるべ
し【三十二番職人歌合】五番桂の女

春風にわかゆの桶をいたゞきて袂もつちが花を折かな

【親元日記】

寛政六年八月廿二日

犬追物の射手の装束を記し、條

に「御すはう地白地紋にひがきかちんに葛の葉亂紋
に蒔黄御小袴例式御かたびらべにいらすの辻が花」
と見えたり又【河村誓真聞書】天文永祿中の書に「つちが花又

はくの事 女房衆兒などの被着候男衆も着候はん歟

十二三まで男も着す成人の程らいによるべし」と記

し又同書に「犬追物の時はいかやうにも若く出立れ

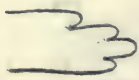
候てくるしからぬ由」とあり前に引し【親元日記】は

男子なれども犬追物故に着したるはこゝにいふ處と
合す且べにいらすところをとおもへばつちが花は
赤きが本にて貞徳の説もよりどころなきにはあらね
ど春の歌にも詠たればかたびらにもかぎらざる歟
按に衣服に模様を摺りもし染もするは天地のことに
もとづくが多し天とは雲形霞の類なり地とは

島

山路

上に同



洲崎又洲濱にはま
まぐの形あり

是等に對へ見ればつちは十字街の形なるべし

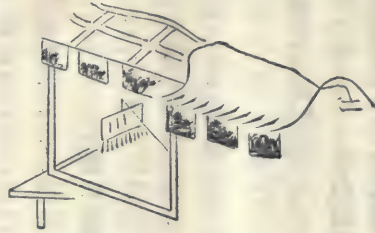


此形に花をつなぎて染たるをつちが花と
いひ茶屋染に染たるを茶屋つち桔梗色に
染たるをきやうつちと云なるべし今つ

ちつまのあはざるといふも衣を縫たる事より出てつ
ちは縫めの十字になるところをいふ、馬の毛のつち、
笠のつちなどいふはつち風のふきめぐるより出て十
字のつちとは異なり

因に云、異國より渡りて其出所さだかならざる物を

享保年間影江戸八景の満品川の歸帆に見えたる圖



芋川をひも川とあやましりもふるし

【富士石】延寶七年刻調和撰ひもかは鯢鮓

捨水碎く氷かな 調川【一

代男】天和二年著二の巻に二川とい

ふ所に旅寢して云々の條に

「芋川といふ里に若松昔の馴

染し有て人の住あらしたる笹

葺をつくりて所の名物ひら

鯢鮓を手馴て往來の駒とめて

云々」ひら鯢鮓を今紐革と心

うるはあし地名の遠州芋川を

訛しなり其形の似たるをいは

ハ革紐とこそいはめ紐革とい

ふべきいはれなし【誰袖の海】

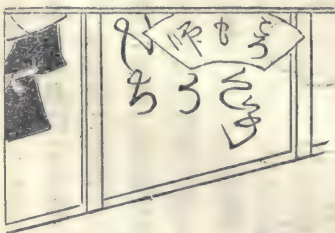
四卷「ちりふ云々あしやいも

川爰うどん名物なり今岡村三

州尾張境也」とあれば芋川は

參州のうち也

法衣屋の看板是も今絶て無し



【京雀】寛文五年印本衣棚通に見えたる圖

【しよく人百人一首】

享保年間印本近藤清春書

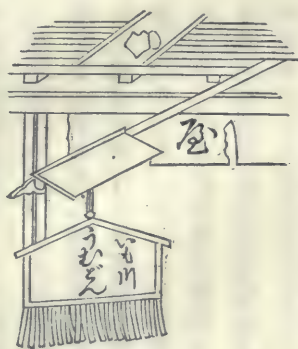
かたちよき女房なりともその女の父母けんどん邪心の
 とうよく人歟又はかぶきものにていんよくにふける
 人歟或はなんぞわるき病あるか中略 右の分をしん
 しやくすべし」とありこゝにいふかぶき者とはかの
 いしやうにだてをつくし好色にふける者の事なり又
 同書に「さるがくあやつりかぶき」とあるはきこえし
 ごとく今もいふかぶきなり原は二ツにわかれたる證
 とすべし、【慶安元年日發句】腰をふる門の柳やかぶ
 き者 季吟」是は彼テンガフ者太刀イナガをふるさまを
 いふ【御傘】六の巻「俳には小歌かぶきさへ付合に用
 云々」此かぶきは舞をいふなるべし

○餛飩の看板附、法衣屋の看板

食類にも時好ありて昔は餛飩を喰者おほかりし故か
 蕎麥屋といふ名目なし餛飩屋にてかたはら蕎麥を
 賣りしなりさてその餛飩屋の看板に楡形にきりさき
 たる紙をつけて軒へ掛おきしが今江戸には絶たり寛
 政のはじめまで、うんどのかんばん出しゝ家たま
 くありし歟【桃の實】元禄六年印 打かまねくか餛飩屋
 の幣シデ 元峯」吉原はわざともほどと茶洗髪 嵐
 雪」といふ附合あれば此看板吉原あたりにもありし

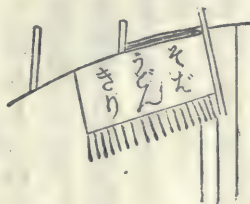
なるべし

【西鶴一代男】此圖のせたり



【人倫訓蒙圖彙】元禄三年印本

旅籠屋の軒につりてあり



ウ一十



【道戯興】元禄十一年印本

看板に記シテ麵類ヲ朝
 早漣カ花鯉ニと記して
 此圖あり

にて同書に隠語やうなる事をつくり人を惑するをもかぶきといへり今もする茶かぶきといふも茶の銘を隠しこれはなぞ是はなぞと人にあてさする茶のテンガフなりお國が舞を當時かぶきと名づけたるもテンガフ舞といふ程の事なるを時の學者漢文につけるにカブキの語釋さだかならざるにより歌舞妓の字は和漢に古くあればそれを頓て當てられたる也或説にお國は出雲の神子なり神樂の變風ゆゑ歌舞妓といふと見えたり出雲の御子なる事はさもあらんお國かぶきの古書を見るに首に念珠を掛け鉦鼓うちて念佛踊りの姿なり更に神樂の變風ともおもはれず

茶のカブキは享保年間如心齋がはじめて近き事のやうに思ふはわろしカブキ、花月、一二三、廻り炭、廻り花、旦座、散茶、此七事の式の絶ん事を歎き古老にたづね舊書をさぐり如心齋がふるきをこし門人に傳へしなり【鴉鷺俳諧】正保三年印本 かぶきこそ思ひの種と成ぬらめ 満直「あらしひ負けてうたて茶の味 立圃」【徳元獨吟千句】寛永五年十一月吟 月の的あたりはそこと定めかね「すゐりやうにのむ秋のかぶき茶」さて歌舞妓の字よくかなひければ狂言舞は夫より此

字に定まりて又一種かぶき者となふるものありそれは彼のふるき意を知らざれば解しがたし武士にもあれ町人にもあれ圖にはづれたる長刀をさし衣類のだてを盡しすべて異形なるをかぶきものといへり是テンガフ者なり、今大小の鞘の常に異なるをテンガフ鞘といふ昔のことばにていはくかぶき鞘なり、或書に、元和の頃大鳥逸平イに大鳥居とありといふ者罪せらるゝ條にかぶき者大鳥逸平とあり賊にもあらず人を殺さず只あばれあるきたるが咎なるゆゑテンガフ者と記されしにて原來歌舞妓にかゝはりしものにあらず正保四年五月十三日松平和泉守殿々小性衆へ達書「先年被仰出候下々衣類刀脇差御定之外着用仕候者惣てかぶきものゝ事彌堅御法度之事に候見合に捕申筈に御座候間下々堅可被仰付候

慶安三年二月二十日「先年被仰出候通若黨仲間小者かぶきもの着類刀脇差彌御定之外御法度に御座候則とらへ候間其心得可有候以上 内藤式部少輔 大久保丹波守」

再按に寛永十九年印本【可笑記】三の卷に曰「女房をむかへるか又嬾をとるに分別あるべしいかほどみめ

り鬼は龜の假字【總見院殿追善記】天正十年「沈水の煙は雲の如く燈火の光りは星に似たり供物盛物龜足造り花に至る迄云々」後世の製彼木にてきざみし物なる故に造り花と並べて記したり盛物へさしたるなるべし

【玉海集追加】寛文七年印本立ものゝ箔はかたはしはげやせん膳のきそくに露はそゝぐな 貞室俳諧にきそくといふ句多く見えず前に引【庖丁書】に「高立のひだ又瓶子の蝶形のひだなどかいさまなり、其を如何にとあれば參らせむかふを本として賞翫の心に折の内又は瓶子の内を生じてかいさまにも不構」とあるにて考れば長柄加への蝶がたも彼龜足の如く長柄加へに蓋うちおほふ料の紙なるがそれがかいさまになりたるなるべし又蝶形にひだをとるは瓶子の口がはじめにて長柄をおほふ紙にもそのひだをとりさてこゝにいふごとくそれが逆になり只かざりとなりしもの歟瓶子の口を蝶花形に包みし事見出るにしたがひこゝに記す【舞のさうし夢あはせ】大場平太夫かげよりしろきへいじにてふ形に口つゝませさかなに九穴のあはびをもつて【鳥帽子折】瓶子いちゃてふ花がたに口つゝみ又【八島】にも蝶花がたとあり【平家

物がたり】鹿ヶ谷の條に「瓶子の首をとつたりとしゆくす」は瓶子に平氏の通ひはもとよりなれど蝶は平家の紋なればその事をもふくみて書し物歟【守武千句】天文九年麓の里へせちする頃へいじをば野べのこてふにつゝませて」

○カブキ

カブキといふは天正前後よりいひそめし俗語なり語釋は考へ得ざれども【かげろふ日記】枕のさうし【等に見えたるさるがうといふ詞に略同じ】さるがうの詞はがはん、なんどはたらく詞なるべけれどその例は見えずと先達の説也かぶきもすでに其如くかぶく、かぶかんとはいはるべけれどこれ又例今の俗語にていはゞテンゴウといふに當るべきか【童蒙先習】慶長十七年小瀬園庵著に「青侍のかぶきまはりつゝつかはれぬ、暗の夜の犬」と並べ出せりテンカブしまはりつゝつかはれぬ也【寒川入道筆記】慶長十八年寫本に「此五六日以前かぶきの大將が死し申した、何としてはてたぞ、此春から夏秋かけてさんざん煩うて五四日さきに頓死した」といふ事あり此話は事あるやうにかたり出し春秋かけてわづらひて頓死と詞の首尾あはず、はては何の事もなきテンガフなり故に發語にかぶきの大將といへるが當時の洒落

るべし

○きそく

【尺八笛考】に曰「キンクとは木をけづり肴などにさすをいふ色々の形あり金銀の紙にてキンクを巻くもあり燕とんばう水玉などあり」と記されたり柳亭按に是は後の製作なり

【四條流庖丁書】

長享二年撰類從
本三百六拾五 龜足の事前にも大概申

よの常の紙にはく_レにても又べにても_レ紅花敷又べにても_レ引

て龜足に用る事常の儀なるべし禁中などへ可_レ參_ス

御折は角も多く又少_シ足も高_ク有_レべし然_ル間龜足の紙

は薄やうなるべし」とあるを見ればふるく龜足とい

ひしは紙なり今蓋なき重箱やうの物に紙をおほひ其

紙のとれざるために紙の四角_{（すみ）}を捻_{（ひね）}る事あり龜足とい

ふ則是なり捻_{（ひね）}たる四すみの紙の形龜の足に似たる故

の名なる事論なしさてその紙へ薄をおき或は紅の類

にて色どりたるが花鳥などの畫となりつひには木

にて蝶鳥の形をつくる事となりしなるべし今を見ん

九月十五日に本所_{（うめ堀）}牛_{（うし）}【吞海味】天文廿三年一編_{（軒）}とおもは

の御前の神酒所へゆくべし_{（書也）}或は大

名或は御家門などの御茶の湯にもてなしもけつかう

に木具、土器、金銀の鬼足ふちだかなど然るべきな

るがなどといひあへり聞おとりすればそれも廢り人形つかひにならばやと思へどそれも今時のおやま五郎右衛門が風ぞ、手づま善右衛門が流などとさまざまの身振をうつしなかく生きたる人の如し今はせん方なく人形をも火にくべ雪の夜の寒さをしのぎおやま人形ひとつ残して地藏の道行などやうくとうたひあるき袖乞してゐけるが今はくらしかね其人形も火にくべさんく罵り汝故にかくかんなをなすなどいひけるがばちくと鳴りてもえくる飛つき、ふるひ落せどもおちず井戸へかけ行き水かけんとすれば遂に井戸側崩れ井戸へ落て死ける夫人形の思ひならんと人々いひあへり「おやま五郎右衛門、手づま善右衛門、地藏の道行【むかしく物語】いなばの淨瑠璃の段【さびしきさざのなぐさみ】に此章あり又云、此ことを書をはりて後【寫本醒睡笑】を見るに是に似たる歌あり」勅によりて和泉式部が雨請

日の本の名におふとてや照すらむふらざらば又あめが下かは

元和中の話を寛永五年に安樂庵が書あつめし書なり印本に脱したりされば當時の人口に傳へて歌も作者も異同ありしが後には遂に小町が歌と思ひ過りしな

雄長老元和年間の撰なり同書に善光寺如來東山へう

つされ云々京童ども粟田口にてと書て歌あり其歌を

【寒川入道筆記】慶長十八年著

に載て雄長老の詠とすされば

京童としるし、さる人とかけるも實は撰者の歌にて

ことわりやの歌も雄長老の詠歟此集自詠のみにあらず、なはいひは古きもあればたしかに

【醒睡笑】に見えたり建仁寺の長老にて如是院に住給ひし

が漢和連歌の高手なり又紹巴の判したる木食上人の

俳諧の巻に綴そへて發句を書あつめし古寫本のうち

に「はやくふれ名はいつはり歟あめが下、作者不知」

と書てあり此發句集おほむれ天正頃より寛永のはじ又寛文二

年の印本【俳諧雀子集】撰者光方の序に「いそのかみ

ふるくもいひつたへけるはひととせ天の下おほ日で

りせしかばある人の歌に

日の本の名にはたがはじ天津空ふらずはいかに天が下とは

狂歌集と又異なり、とまれかくまれ天正文祿頃の狂

歌なるべし、心おぼえ貞徳載【和歌の威徳】印本は元祿也予

慶安頃かけ思記見べき事【和歌の威徳】が見たるは正保

に見えたることわりやの歌に作る是俗に小町が歌と

あやまりきたるのはじめなるべし又山本角太夫上方土佐

といふが淨瑠璃【七小町】といふさうしにちいさき船を

つくり色紙を帆に掛けて小町が雨乞をする事ありその

歌又狂歌集の如し此淨瑠璃おこなはれてよりかぶき

狂言にもかならず此歌を用ひきたり婦女子は實に小

町が歌とおもひ誤りしなるべし

以下は不用の事ながら七小町のおこなはれし證也

【近代因果物語】「寛文の頃迄世にもてはやされける

説經太夫に日暮といひし者は世に類なきほまれを殘

し今も片田舎の者は折ふしとに物忘れの種にじん徳

丸さんしやう太夫などいひ出ける元祿十一年の頃迄

日暮小太夫といふ者あり美濃尾張國々をめぐり説經

をかたり辻打の芝居に傀儡を舞して渡世しけるそれ

より世くだり人さかしくなりて如何なる國のはてひ

なの長路の口すさびにもあひごの若などいふふるび

たる事はいはず只わつさりと時行はやち歌角太夫節こそよ

けれと行くもかへるも耳をとらへて顔をかたぶけ七

小町杉山兵衛などいふ物をしほりあげ又は上方への

ぼり僅の讀賣して歌びく尼などの口眞似をはしく

覺えて日待の家にてうたへど何か聞わく方もな

く老人の噂にも昔の小太夫は袖袂を聞人もぬらしけ

るを罫けし子くゝり、しのくゝりなどいひ或は鯨の鰭を
いれ或は針鐵をいれたるもありしが今はそれ等の事
は絶えたり【俳諧三部抄】延寶五年 惟中撰 露白し是や尾花の
袖ぐるみ

▲くゝり袖

【糸屑集】

延寶三年重安撰、元祿の糸屑とは別本

ゆひそへる

垣の尾花くゝり袖

元民

【俳諧時津風】

延享二年 印本果然

撰當時江戸の流行物を集し冊子也

大名の縊袖口

風呂の外に脱捨置や

雪の富士

井光

【糸の節】

寶曆七年集

に、けしくゝりといふ小歌あり文句に

も「さらにむなしきちぎりさへかわかぬ袖のけしぐ
くり」と見えたり、柳亭云延寶にはくゝり袖とのみ
となへしなり

▲鯨袖口

【山の端千句】

延寶八年 年印本

漣波や鯨の髭に打

よせて

四友

尾花亂るゝくゝり袖ゆく

似

春【花あふこ】

享保十四年 印本常陽撰

悋氣にて六角堂を狭むらむ

風葉「此御宇よりぞ鯨袖口

沾山」

▲紅絹の袖べり

【己が光】

元祿五年 東廬撰

若菜摘手や袖

縁の紅の色 盤子

【八夕ぐれ】

正徳四年 乃露撰

七夕の願ひ

はうはの空なれや

宇中

西瓜にまける紅の袖べ

り 樂弓「按に寶永二年沾徳が催したる【餘花千

句】に試しら樂にも夜食は兼て出すつもり

琴風「風も

治るくゝり袖口

菜花」とあれば元祿頃より江戸

にては袖口といひしなるべし

▲針鐵をいるゝ事

【前句附花紋日】

享保十四年 印本書石點

姫住

で氣を針鐵のしめくゝり」袖といふ事見えざれどく

ゝり袖の句なるべし、しのぐゝり、けしぐゝりの名

發句にてはいまだ見いす【傾城あやめ草】【傾城む

げんのかね】

▲ササツベリ

西洋人の語なりといへりもと白き

へりをととりたるより出て「篠へり」歟くま篠たけに似たれ

ばなり猶考べし、篠の覆論といふ事百年前の物に見

えたれどたしかに聞えねば抄録せず

○小町雨乞の歌

天の川苗代水に云々の歌は家集にも見えてたれく

も知ることなりさて今の俗小町の雨乞の歌といひつ

たふるはさまで古きさうしに見えず【新撰狂歌集】下

の巻 ひでりの年さる人のよめる

ことわりや日のもとなればりもしつかりとは又あめのしたと

は

柳亭曰、今の俗は「ならばてりもせよ」といへり

【辨慶物語】足利家末の頃
の作なるべし「七歳の春の頃比叡山の西塔

は、さきのりつしけいしん坊へのぼせられけるが云

々」大衆ことごとく同心にせしやうをこそはいたさ

れけれそもく當山は一ちご二山王のことなればこ

とさらちようあい申べきに云々」【狸狀】一名少人申狀
萬治年印本

【怪談諸國物語】正徳二印
本國水著に長嘯子の事をいひて「狸の

ことばといふ一小冊をつくられるとかや」とあれ

ば木下氏の作歟比叡山の内竹林寺と申山寺は鎮護國

家之道場眞言止觀之靈地也而猶於當山者一兒二山

王與云々」【男色木芽漬】元禄十六
年印本「假に二大師と顯れ

て難有も衆生門に降り衆道を興立し給ふされば顯に

は一兒と弄び密には若僧と詠む」【木影の落葉】寶永
印本

「名高き山は都の富士實佛法の鷲の峰女人をみだり

にあがらせぬといふもたゞに王城の鬼門を守るとい

ふにあらず若道鎮護の山たる事其いはれある所なり

さるによつて古へより天台大師の御釋にも一兒二山

王とはとかれたる」【崑山集】慶安
四年見事さや一兒ざく

ら二山王 友勝【師走の月夜】慶安二
年印本山の景や一

兒櫻にほの海 撰者季吟【新岑相記】【播州名所記】作
者不知天和の頃

の作なるべし寫本也印 書寫山の條「麓に山王權現あます

本峯相記とは別本也

さかりなるさくらの見えけるも折からめづらしくて
神木の一兒櫻二山王」

○袖ふくりん

袖ふくりん後に袖ぐるみ又袖縁と云今の袖口なり其

はじまりを記したる冊子あれどもかゝる事は誰しは

じめたりといふ事もなく自然とうつりゆくものなれ

ば信用しがたしされどもまづ其一ツ二ツを抄録す【永

代藏】元禄元年
刻西鶴作に「藤市と申す人云々じゆばん一ツに

大ぬのこ綿三百目いれて一ツより外に着る事なし袖

ふくりんといふ事取はじめて當世の風俗みよげに」

とあるは一時の戯文也又或書に袖縁は細川三齋はじ

められしといふ事見えなれども是も信用なしがたし

【心學知理東】にありし【尤の冊子】寛永十
一年「すそのまくつぎ

袖ふくりん」とあり是より古くもあるか猶可尋

【毛吹草】雲の袖にふくりんかくる霞かな 定重」

【落花集】寛文十一
年似仙撰ふくりんをかけ浪涼し袖の浦

長治」

▲袖ぐるみ 【砂金袋】明暦三年
長徳撰立はづれ霞や雲の袖

ぐるみ 善種 後には袖縁へ綿を入れてふくらか

にぬひたるをくくり袖といひ、それを細かにぬひた

山市丸川武の船ばたをたゝいていかなる秀歌うたふにや【向の岡】延寶八年印本不ト撰冬枯や山一丸を先として不求」

▲川武丸 【紫一本】田舎句合は前に見えたり又前に引【續浮世繪】及【古今好色男】天和四年印本等の畫にあり

▲關東丸 【むかしく物がたり】は前にも見えたり【廣小路】延寶六年印本不ト撰盛久浪にあらはれにけり」扇の手關東丸にかくれなし 不ト」

(是は踊船の句なるべし前へ加ふべし)

▲定家丸 【富士石】に河岸さびしわけて時雨の定家丸 濯心」

俳枕に大黒丸、えびす丸、【廣小路】に高砂丸、【春駒狂歌集】に糸柳丸等の名見えたり、校正して書加ふべし

○柳に鞠 雪に衝千鳥さし

【料理物語】寛永廿年印本汁之部「柳に鞠 つまみ菜に里いもいる、也」齋藤徳元獨吟千句寛永五年寫本四百韻目ありくとのべて數ぞふ鞠の音」ぬきなに芋の汁のさいしん」

【女重寶記】貞享年一の卷大和詞の條、小菜にいの汁

は柳にまり、ほし大根によめ菜は山ぶき」とならべ出し此前に「いもの葉にあづきの汁は藤おつけ」など見えたり聞えし如くいづれも其色そのかたちを見たてし名なり近年是等に似たる名は豆腐のからに貝の剝實の汁を雪に千鳥といふ是は剝實の形、衣もやうにつくる光琳風の千鳥に似たる故縫簿仕紺搔などのいひ出し、なり蛤の田樂を千鳥焼といふも是より出たり【新撰類聚往來】中の巻料理方の名の條に「衛差、蠅差」といふあれど千鳥焼は五十年ばかり前よりの名、此往來は慶安元年印本、作は永祿九年なるべしとおもはるゝ事あればいと古し若暗合してこれも貝類の串差歟も知るべからず【料理物語】同じ條に「ばくち汁」とうふさいの目にきる事」とあり是も【貞佐獨吟百韻】に 今はばくちのすたる世の中」菜ばかりの汁をこのごろもてなして」自注、同じ見たてながら其名不雅

○一兒二山王

いちちご二山王とは叡山にて兒を尊むよりいひそめし諺なり【七十番職人歌合】六十八番左 山法師 ひえあがるわが獨寐のことはにいちごならぬ人ぞ戀しき

かひ町しはるにてさまぐげいづくして見物をまねく。頃日世にをどりはやりて上下萬民ちようあいの子にしやうぞくをあらため拍子揃へつゝみ、たいこ、ふえ、しやみせん、にてはやしたてをどりければ海上にやかた船をうかめてその内にてをどる入日かゝ見物の船數千ざうとりまさぐんじゆをなす」

【未得點古懷紙】寛文年間うたふも舞も何ぞへだてん屋形をばおつとりはらひ船遊び 作者不知【焦尾琴】

其角撰唐音を船へうつして踊かな 紫紅【文蓬萊】

沾德撰露森々と新錢の音 仙鶴【花笠下船をまねけ

ばどよむなり 香山【誰が家】其角撰素波に出て朝

かへる月 嵐雪【船頭もひとつにをどる踊り船

舉白】元禄十一年印本【水比良目】元禄十一年印本【山城名所有磯海】五の巻に

露宿【立羽不角の著】原本にて改むべし

島原の踊りの事をいふ條に「予が十四五歳の時分江戸踊り繁昌の折は我もをどりに出たり其頃九間一丸八間一丸といふ船あり九間一は幅三間に長十一間、八間一丸は十間に幅は是も三間なり、八間一を樂屋にして九間一を踊り船となす八間一より九間一へ厚板を渡し左右を幕にかこふ、九間一には揚幕をして

踊り出る、凡踊りの數は十五番、一番々々に裝束をかへる踊り一番過て獨狂言藝を盡して入る又踊り有て囃子三番予は踊りにもはやしをもつとめたり夫より淺草藤屋といふ大茶屋へあがり踊り、獨狂言、はやし、此三品の遊興濟て二の膳までの料理を出す、をどりにには三味線三挺小きう小鼓二挺拍子この一日の費いくばくなりくれぐより又船に乗て兩國にて踊る小田原町の踊りの出たる日といへば船のかりちん常に倍せり」とあり是は享保十五年の印本にてさまでふるき書にはあらねど最くはしければまづこゝに出す

按るに作者不角は寛文二年の生なり十四五歳の時は延寶三四年なり當時もつはら踊り船の流行し證とすべし

以下船の名稱々

▲山一丸【紫の一本】むかし物語は前に見えたり【延寶廿歌仙】桃青撰赤壁の麓淺草の茶屋 木

鶏【山一の筈もる雲暮近し 同【田舎句合】延寶八年判者

桃青其角月其角のさそふ詩の舟は山市か川武か 農夫其角の

名也」公任卿歌の舟に乗て秀歌を詠たまふよし、是は

の初なり承應の頃涼船盛んにてありしが中略 是に依て三四年の間は船遊びすきと止しに萬治の頃又右の船を作り出し中略 しだいに大きく七八間の屋形を拵へ後は石川丸、關東丸、山一丸、熊一丸、十間あり十間一丸は十一間あり大船に乗て辨當種々善美を盡す也」

柳亭云【紫の一本】に見えたるは元祿の頃までおこなはれし踊り船なりまづ伊勢をどりの事をいふべし【ト養狂歌集】印本「八月十五夜の月を三ッ股の波に船をうかべて酒のみうたひ遊ぶ中略 又世の人も酒盛をすだれ船などにて小倉をどりといふ事をうたふその頃の歌にさすやうでさん／＼さゝぬはしのぶよのつま戸おたまこがれて秋こがれつゝといふを聞て是にて歌よめとありければ

さすやうでさん／＼さゝぬ月の影あきこがれつゝにくの雨夜や
伊勢をどりはやりければ

わが君をこゝで松坂伊勢をどりそこらでふめるまかせ腹帯

【異本ト養集】寫本「延寶五年巳の春云々江戸中をどりはやり其歌の言葉を取て、腹帯をそこらでしめよはるは君やつこのこの伊勢の袖がきわが君をたれも松

坂いせをどりそこらでしめろはつか腹帯」印本の集には年號なき故古寫本をこゝに録す、延寶巳の年とありて、【紫の一本】に記したると合す伊勢踊りといふ事は古くありてこゝにはじまりしにはあらず延寶より専らおこなはれたるなり、さすやうでさゝぬ腹おびをしめろなどいふが唱歌にてありしなるべし

【尤のさうし】

寛永十一年印本

さすものゝ段唱歌のうたに「さ

すやうでさゝぬは人待よひのからきど、さゝぬやうでさすはおもふ中の盃」かくあればふるき小歌にてありしならむ歟【俳諧玉手箱】延寶七年印本 江戸蝶々子撰 さすやうでさゝぬは夏の扇かな 泰徳」一本にいふ如く此

小歌のはやりし頃の吟也

▲踊り船の事種々

【俳諧江戸新道】

延寶六年印本 永水撰

踊船

にはま萩や江戸に袖ふる船の聲

貞清」按に

難波の蘆は伊勢の濱萩の古歌をとりて船にて伊勢踊ををどるをいひし句なるべし【大和續浮世繪】天和四年子正

月離形屋三右衛門板菱川畫

「ともどちやかた船にうちりつゝ淺草

川のながれをしたひかちよりたればまつち山なりひら橋にさしかゝりすみだ川へうかれ出るとこゝにさ

の牡丹かな 其角【獨笑】に「奈良より出しは千貫屋東大寺紅咲出青乙子白と名づけしは秘藏したるこゝろにや」とあり是等の名【三月記】【地錦】にも見えなれど出所を記されば「獨笑」をこゝに載す【三月記】春日 葩細くちやみあり色本紅なり大和奈良より出る故一名奈良紅」又【地錦】に奈良狸々等の名あれどもそれをさして奈良の都の牡丹といひては句の手がら更になし、

按に【三月記】に「九重葩つき揃ふさき少し色うきやかに白し光ありさしく中花の内位あり」とあり其角の句は此九重といふ牡丹を見ての即吟などにはあらざる歟

▲ぬり牡丹 未考
【東日記】延寶九年言水撰 蠅ぞ今笠にはらはぬ塗牡丹 無鹽

▲五ッばたん 未考
【錢龍の賦】寶永二年百里撰 發句 春風や笠を追かけ追廻し 舟竹 脇五ッ牡丹の花は細腰

嵐雪」

ばたんと云はこはせの句か、春季なり

○涼船 踊船の事 樓船の名

【紫の一本】にいふ「船は東國丸淺草橋の船、大船の

はじめなり、山市丸、日本橋の船なり屋形八間にしきることによつて山市丸といふ、熊丸、屋形を九間にしきりし故にいふ、神田丸、神田にて一番の大船也一トとせみな月炎暑の頃ふか川ちかくこぎよせたるに川邊涼しくよる波のよるとも知らず月の影熊丸にはやり染ども着流したる女十二三人許當世はやる伊勢をどり、さすやうでさゝぬは人待よいのから木戸までもさすものは追手の風に水馴棹さすや汐時川一丸にうちのり云々、やがて遺佚が詠

淺草の川の面の船遊び、びになりつゝ身も踊るなり

延寶巳年より伊勢踊りはやり老たるも若きもよきもあしきも坊主も女もうきたつて踊る、ひきしほにまかせて流し船にて踊るもあり此やかた船のほかにをどり見物とて出る船もあり川武丸、川丸、大屋形舟也」以上摘要

【正應二年熱田俳諧】團拍子をならす踊子 一甫」
艦をたてゝいさむや月の船遊び 自笑」【むかし

／＼物語】慶長の頃、夏日照暑氣強故、諸人納涼のためひらだ船に屋根を作り掛け是を貸して人をのせる此船に乗淺草川を乗まはし暑を忘れ慰むこれ船遊び

▲夏衣 【分外】夏衣先ッ面くはす通りかな 湖

梅 【地錦】筑前牡丹名寄、白牡丹の部に、夏衣の名を載たり

▲薩摩白 【分外】後見や明るわびしきさつま白 未考 寸竹

▲とち白 【分外】西本願寺にて とち白のお八ツからはやどろくと 洛陽金色柳亭曰茅白、茅は

花ぐき也其白きをいふべし【三月記】口紅粉、葩大平に短し色青みありて白し重^ネ一重二重、此木西本願寺

より出る珍花までなり」是等を茅白ともいひしか

▲女三紅^{ニョウコウ} 【分外】女三紅なしや牡丹のかよひ櫃 未考 一露

▲飛入 【分外】漢句 飛入、花王、酒 梅葉【さゝ

れ石】寛文七年 飛入も葉色やおなじふかみ草 元

武 【地錦】白牡丹の部「飛入 大りん大きにたちの

ぼり火えんの形指にて押たる如くつくも自然のよ

し」又「飛入二重 薄色にて赤とび入あり」【三月記】

に飛入といふ名目は別にあげざれど花の色をいへる

うちには飛入といふ事見えたり

▲十三紅 【一本草】寛文九年 未琢撰 かほ^{牡丹}よ草やげにそれ

よりは十三紅未考 得有

▲底無 【三月記】平戸葩細く薄し色光りあり重^ネ

三四重輪五六寸此木博多の商人伊藤小左衛門庭に生

ず一名鳴戸、一名庭なし【浮世の北】元禄九年 美人の

賛 白むくの微塵底なし白牡丹 文鳥 【東花集】

元禄十三年支考撰 底なしの白や牡丹の又はなし 斜嶺

▲筑前紅 【五元集】筑前紅を しらぬ火の鏡にう

つる牡丹かな 其角【三月記】霞關 實黒く樞形

葉短くつゝまやかなり葩細長く薄く蓮華形、色咲出

しには紫にして次第に色をあげちりぎはまで紅を殘

す重^ネ五六重花三ツに割れ心ありかこひ咲のうちに

亂る、也又は平咲菊重の事あり輪四五寸或は六寸極

上の紅なり此木黒田右衛門佐光の庭に生ず持國筑前

ゆゑ一名筑前紅、居住霞ヶ關ゆゑ是又名とす【地

錦】筑前出來たるは七八重色うちぬきかはりなしあ

たかも蠟紙に紅をぬるが如く光りあり落花まで色か

はりなし【寶の井】といふ寫本の其角句集には「筑紫

紅をおくりける人に」と前書ありつくし紅ともいひ

しなるべし

▲牡丹の雜考種々 【五元集】いにしへのならの都

かく 千川「薄色の奥は紀の國茂庵白 荊口」

【三月記】に玉津島といふ薄色の牡丹紀の國とは是等をいふ歟 【分外集】は李子傑が一種天香分外奇なりの句を取て標題に號たる事序に見えて牡丹の詩歌俳諧の集なりそのうち考へとなるべき句左に抄出す

▲佐用姫 【地錦】筑前紅牡丹の類「佐與姫」【獨笑】

筑紫より出しには、袖の浦、あめがした、つばきや紅黒田白、佐用姫、染川、白まし紅、云々【分外】さよ姫がひれふる風の牡丹かな 仙鶴」

▲桐壺白 【三月記】に桐壺の名は見えざれど帚木

といふ牡丹を載て色青みだち白しさしなし中略 禁庭の御花を上て桐壺の次といふ心にやとあれば桐壺といふ牡丹は大内にありし歟【獨笑】に見えたるは前に抄出【分外】花の名や桐壺白を夕日かげ 闇幽」桐

壺に物あはれなり紅僧正 松因「柳亭云、松因の

句意を考るに【三月記】に「淺草葩大びらにしてひね

る色すはう出なり出來花は紅をあげ随分見事なり中略此木武州王治村^{治は子の誤か昔はかくも書しか}百性の庭に生、桑山前

修理亮方へ來るを松平作十郎乞請、其節は松作紅といふ作十郎淺草福壽院地を借住す死後福壽院へ遣す

又福壽院紅といふ淺草觀音別當智樂院へ來る其時は淺草紅、又一名僧正紅といふとあり、さて桐壺の白くうるはしきには此僧正紅の色もけおされたりといふを紀僧正の古事につくりたるなるべし

因に云【獨笑】江戸より出しを智樂院淺草べにとも申す也【地錦】には淺草紅とあり

▲出雲白 【分外】黄昏や手紙よまるゝ出雲白

楓子【葶生浦梨】^{享保十三年印本泰角撰}八重垣や庭の牡丹の出雲白 桂風【三月記】出雲葩さき切廻したるやう也

色うきやかに白し花形松笠重ね輪四五寸或は六寸白至極、此木松平出雲守綱近庭に生ず、持國雲州取て名とす【地錦】「出雲中りん六七重うちみじかく平花けしみ白くちひさく花びらあつく白しつやすぐれてよく云々」柳亭曰紅牡丹にも又出雲といへるあり

▲朝日山 【分外】借り牡丹月こそいづれ朝日山

東潮【地錦】紅牡丹部「朝日山 大輪かさねよく咲ぶり行事官に似て云々」頼政の謠曲をとりたるは聞えつれど、句意未考

▲山口 【分外】山口もしるし牡丹の外がまへ 梅枝【地錦】「山口、中りん四重、なるほど白し」

はん内にこまかなる葩多し色咲出し薄色にて紅をあ
げ終り又黒みて惡敷成るさしなし自然少許ちら／＼
見ゆる事もあり重ね六七重花形かこひ咲き輪五六寸
芽大赤く木平む、此木布施孫兵衛重良庭に生ず故に
一名布施紅、重良重頼 後水尾院へ獻じければ松の
葉の歌を拜領す改名松の葉と呼號【一字御抄】松の
葉も秋やは知らぬ下紅葉よその千入は淺き色かな
後柏原院」同書「臘月、實瓶子形平めに太く色紫黒葉
多し色おもく見ゆるさしうつりともに年によりあり
又なし花形のびやかに平浮咲なりちいみある事もあ
り輪六七寸或は八九寸花かさありて位あり芽青く少
し赤みあり此木京大膳亮茂庵庭に生ず故に一名茂庵
鍋島信濃守家來京都に差置者乞請て信濃守へ遺すそ
れより松平越前守方へ來る信濃守城本肥前佐賀故一
名とす上花なり、新古今大江千里

照もせず曇りもやらぬ春の夜の

おぼろ月夜にしくものぞなき」

又同書に「白實茂庵實白大瓶子形臘月の風なり云々」
といふ事あり茂庵といひし牡丹にも種類のありしな
るべし文政の今茂庵といふは白にしてトキ色を帶び

たる牡丹をいへり【雨夜三盃機嫌】元禄六
年印本 玉川半太夫
といふかぶき治郎を評する詞に「御色牡丹の花ふ
きとは内しようまでの事をいへりきめこまかなるは
もあんはく云々【西鶴夢中獨笑】名をかりたるのみ、西鶴
作にあらず、鶴没して後
實永中牡丹の園を見る條に「ちしほ桐壺白妙や、おぼ
ろ月とはもあん白、松の葉とは布施紅なり、はつ花
ぞめ、浪枕、千年紅、小松紅、遠山鳥と名づけしは
なが／＼し日もあかねとの古歌のこゝろのふかみ艸
云々【地錦抄】實永七
年印本 白牡丹の部「茂庵大りん五六重
平花咲出し少しうつろひありけしみ赤くうすがきの
實もあり花光り白し上々、臘月茂庵同斷」紅牡丹の條
に「松の葉中りん七八重丸咲きべにの色先をろひけ
し赤し一名布施紅是は千染紅にまさると云ふ古歌
の心にて松の葉といふとぞ【千鳥掛】芭蕉後七部に
入る 見た事ははなしにもなる花の宿 路通「夏
をこなたに布施紅の咲く 同【類柑子】其角
文集檜原
ふまへに 臥紅粉の色綻て春日影
の辛夷諸白を吸ふ 廿巳」
其角【分外集】序に元禄十五年
卷中に實永中の句あり つり臺は四枚
肩なり茂庵白 破琴」月に君眉毛やなでし茂庵白
幽獨【冬かづら】芭蕉七回忌
追善杉風撰 衣張かせばこちに事

此橋元祿のはじめに絶え冬より春迄土橋をかけ夏秋は洪水の憂ひある故にかの土橋をもとりたりとぞ今も此川上武藏の府中六社の裏、是政といふ所には冬より春三月の頃迄は土橋をかくる所あり【貞佐筑波紀行櫻の實】享保五年前 蜀黍や思ひのたけを葉にさがれ

五株附六郷とれてかさゝぎのはし 貞佐

七夕のころは六郷の土橋なきといふ意なるべし、全く絶えたるにては此句の手がら見えす、六郷に土橋のかゝりし事は【誰が袖の海】に見えたり曲亭翁隨筆に引たれば爰にのせず【東海道名所記】萬治元年淺井了意著 海道より右の方二里計りに法花宗の源、池上見ゆ堂塔大にしてはるかに見え侍る、六郷の橋長さ百二十間あり橋のつめを右の方へ池上へ行く道あり因に云

【五元集】神の旅酒匂は橋となりにけり【千尋日本橋】寶永四年印本 相州佐川に橋ある事は霜月十日より明

る三月十日迄なり此日土橋を引崩して歩行わたりする也」柳云、かくあれば佐川にも寶永の頃迄は土橋

のかゝりし事必せり【江府紀行】寛文十二年印本 波六郷橋

疑は麻姑書信潮、海東涉渡六郷橋、武陵人面桃

花色、永々逐テ四時終不凋【笠の蠅】元祿十四年不角紀行 六郷

の條「此橋先年大水に落て今は長柄の橋のかげなしとなりぬ此渡りの船賃武士の外は二文キ」柳云、五月の紀行なり、はや橋のとれしのちなるべし【三養雜記】卷の一「六郷橋をかけそめしはいつのころにか定かにもに見えねば【小田原記】永祿九年武田信玄小田原に人數少き隙をうかひおもひよらざる方より小田原へ押寄るといふ條に「橋を燒落して甲州勢を通さず信玄品川の宇多河石見守鈴木等を追散して六郷の橋落ければ池上へかゝり」とありこの時橋を燒すてし事のあれば北條家の盛りなりし頃掛そめしにや其後長く船わたしにてありしが六郷新橋とて慶長五年より近ごろの橋はかゝりしなり、その事くはしく快運上人の【六郷橋修繕記】といふものに見えたりこの後橋の事の見えたるは羅山の【丙辰紀行】

鷺峯の【癸未紀行】にあり寛文延寶の道中記の類にはみなこの橋あり貞享の洪水に流亡せしがその後假橋にてしばらくありて後ながく船渡しとなりぬとぞ

○布施紅茂庵白牡丹の名種々

牡丹の名なり布施紅一名松の葉、茂庵白一名臙月と云ふ【紫陽二月記】牡丹の書元祿十三年寫本 松の葉 實赤黒く瓶子形り先割葉短くしまる、葩花に合せては短しとやい

になぞらへて性理の事を論するなり此さうし正保四年の刊行なれば寛永中よりありしかづきにて寛文の頃迄もおこなはれしとおぼしく俳諧の句にも見えた

り【崑山集】

慶安四年印
本良徳撰

まとはるゝ雞は蛇くまなはたらしかな

作者不知【俳諧洗濯物】

寛文六年印
本一雪撰

鶉つかひの吞せぬ

魚や繩たらし

重因【俳諧落花集】

寛文十一年
印本以仙撰

方引

に勝や盗人繩たらし

永親

とけて行く垣の永柱

や繩たらし

悦春

鶉つかひの繩に比し解け行く

永柱によそへしなどよく聞えたり、さて此繩たらし

の類に繩切といふがあり、是は長き繩をたぐりて尺

餘りに束ねもち、刀をもていく筋にか切り、その切

口と切り口をむすび合せさて繩を向うへ投ればむす

びめは失せて原の長き繩となる放下なり、【糸瓜草】

寛文元年
道甘撰

切てつぐや放下のやうな糸櫻

良誤

【江

戸鹿子】貞享年に曰「堺町ふきや町の二丁は古へより

操見世物又は狂言盡し或は放下の品玉繩切りの曲を

業とする者ども寄集まり云々」是等の放下今はその

名をいふものもなき歟【俳諧空林風葉】

天和三年印
本自悦撰

懸鯛

や繩切曲あり場のけさ

次郎

○六郷の橋

六郷の橋の事は曲亭翁の隨筆に見えたれば今いはんは二の舞なれど俳諧の句に見えたるはめづらしければそれを抄出なすついでに一ツ二ツ書きのせおきつ

【倭子丙辰紀行】

元禄二十年十
一月道春

吉田の條に「江戸ヨリ京迄

ノ間ニ大橋四ツアリ、武藏ノ六郷、三河ノ吉田、矢

矯、近江ノ勢多ナリ、ヒトリ矢矯ノミ土橋ナレバ洪

水ニヨリテ絶ル事モアリ此頃新ニ板ノ橋トナリケル

ニヤ爰ニシモ誰カ周處ガ三害ヲヤメテ留侯ガ一編ヲ

傳ヘンヤ」深津某【志州鳥羽紀行】

延寶八
年八月

六郷の橋左

の方中程より少し末廿七八間程破損す【好色旅日

記】

貞享四年
年印本

川崎より品川へ二里半、六郷の橋百九間

橋の左の方より池上へ行く道あり【古記】慶安元子

七月十三日風雨に付六郷橋柱三本押流れ往還の輩滯

候之由伊奈半十郎より注進之【一目玉鉞】

元禄二年六
月六日

「爰に大橋かゝれり長さ百二十間【俳諧江戸辨慶】

延寶八年
言水撰

太箸や六郷のはし兩國橋

材種【同丙寅紀

行】

享保三年
風澤撰

互にかたりくて行く玉川の橋わたりて

春風やさむしと残る鳥おどし

琴藏【是れ江戸

より伊勢への紀行なり鈴の森にて云々」といひさて

此句あり玉川の橋といふは是則六郷の橋なり、さて

▲世間雀 【京七百五十韵】延寶九年道戲舞鳥の細脛踏

ならし 如泉世間雀は友にもまるゝ 信徳前

に引し【行脚文集】六の卷「隅田川邊の都鳥口紅赤き

茶屋鷗はねをかはせる塘通ひかれぬ眞色の穂にいづ

る吉原雀の囀りもおどろかぬ世こそめでたけれ」吉

原雀に對して茶屋女を鷗と戯れたり【誰袖の海】寶永元年即本

に「さん茶はふらぬゆゑの名なり中略此まへ吉原雀の

うち三鳥といへる男、さん茶にふられたり」吉原雀

今もまれ／＼にいふものあり古き流行なり

寶永の頃流行し【歌祭文】近江八景のうちに島原雀と

いふ事あり又難波にて新町をぞめく者をあわさ鳥と

いふとぞ出所未考今吉原のぞめき歌にはんでん鳥といふ

事あり

因に云雀鳥の名をおはせたる草はその品のくだり

たるをいふか、鳥瓜、からすあふぎ、鳥萩、雀瓜、

すいめの小麦の類なり、又女青は和名加波禰久佐、

俗にいふヘクリカヅラなり、本草に一名を雀瓢と

あり、今童は鳥灸いぶといふ、雀と鳥のおのづから通

ふ、和漢暗合といふべし、

鳥萩は江戸徳元が著【俳諧初學抄】六月の條にあり

柳亭按にこまつなぎといふ草の事なるべし今方言

に草萩といふ所ありと聞けり漢名狼牙又金剛草

再按にからおぎにて射干からあぎのあやまり歟寛永十八年、此説おしかる

い

▲吉原雀 【古糸屑集】延寶三年即本重安撰千話詞吉原雀の遊

女かな 春重 柳亭云、是はきやう／＼じの句な

れど、かの吉原雀の事にとりなしたるは、句體にあ

きらかなり

○繩たらし

繩たらしといふ最いとふるき眼くらましのカブキあり、

一人は盜賊に打扮、一人はこれを縛め、カブキをはれ

ばかの縛し繩おのづから解る放下なり、故に盜人繩

たらしともいふ、たらしは欺あやなり子供たらしのたらし

におなじ、【不可徳物語】四條河原の事をいふ條に

「幼壯男女群集にて誠に此川の水のごとく引もちぎ

らす無止事」扱聲々に名乗ける是は操あやつり、是は虎、爰は

蜘蛛、是ぞ長崎七郎右衛門が娘なり錢もてござれと

てきたな聲をあげて呼はる中略隣は繩たらし自業自

縛の過去の惡因まぬかれがたし朝より暮におよび高

手こてに度々いましめられ」といふ事あり是は放下

家の竹の酢筒に陰分て 正辰【餘花千句】寶永二年
沽徳今

のぼる月はさながら茶うの肌 百里【秋の酢筒の

敷津まで来る 沽風】敷津つの又醬酒筒の句かとお

もはるゝありこゝろみにあぐ【錢龍の賦】寶永二年
百里撰睚

鳩の宿に翳とまる 玉此句虫喰にてたしかに
わからず類本未得 渭北【一節に

醬油こめたる竹なれば 才磨】

○雀 鳥

雀といひ鳥といふはその郷に馴又其道に馴たる者を

いふ旅鳥は旅行になれたる者なり吉原雀は遊廓の吉

原に馴し者なり他はおして知るべし書名に【吉原雀】

寛文七年
印本【京雀】寛文【宮雀】延寶【茶屋雀】元祿な

どあるも其意によりて題けしなり

▲宮雀 宮鳥 【人倫訓蒙圖彙】に「事觸毎年鹿島

の神前にして行ひの事あり中略 吉凶をしめし給ふと

かや其を告しらせける事此神官の役也末世は是を以

て宮雀のすぎはいとなして云々【狂言記拾遺】三卷

貞徳【御傘】宮は云々の條に「宮雀神祇なり宮に住雀

をいふ又物もらひをもいふ句體に依て生類にあら

ず」こゝにいふ如くたまゝは生類かとおぼしき句

もあれど多くは人倫なり三千風が【行脚文集】元祿二
三年

の巻に「扇笠波風宮祝圍摺和宮雀」又嵐雪が【その

はまゆふ】寶永二年の序に伊勢の事をいふ條に「物ほしが

りの宮雀も散錢をせたけず」とあるもみやつこの事

をいへるなり【前後園】元祿二年
言水撰としの夜を寝ぬる木

間の宮雀 仙庵【一字幽蘭集】元祿五年
沽徳撰宮雀いつ野

心ぞ神無月 春耕【玉海集追加】寛文七年
貞寶撰巢立し

てさぞ住吉の宮雀 弘誓【軒に巢をかけてやたの

む宮雀 正武】

▲旅鳥 【泊船集】元祿十一
年風國撰旅鳥古巢は梅になりに

けり 芭蕉【もとのしづく】重厚
撰嵐雪が四國にわた

る時 旅鳥二百十日も船支度 同】

▲京雀 京鳥 【藤花蔓】元祿十五
年稻丸撰とひよる寺は

五山十刹【世渡りに辻駕籠かきの京雀】秀和點、作

者の名をしるさず、撰者稻丸の獨吟なるべし、【古寫

本節用集】き行人倫の部に、京鳥注、京の
商人を云とあるはよ

し【古印本節用集】け行人倫に京鳥とあるは誤り

▲踊鳥 【其袋】元祿三年
風雪撰祇園にて 舞子更て踊鳥

の聲白し 京千之

▲藝鳥 【富士石】延寶七年
調和撰待夜の星しのばし文や

藝鳥 調由】

と聞て 水油つけてやのぶる柳がみ お辨女【俳諧

職人盡】延享二年 夢和撰かはからの聲秋深し油筒 沾涼【冬

がれや禰宜の提たる油筒 落梧【鶯爲の句は聞え

し如く椿の油をいひそのほかはともし油の句なるべ

し以下は髪油の句也【望一千句】慶安二年の吟竹の筒ふり

ふられぬる中はうし【髪をあぶらに洩たりそふ】犬

子集】寛永十年 重頼撰竹の筒も數寄道具とて賣まはり【髪油

や櫛のいろく】 正信【花の雲】元禄十五年 年千山撰出かは

りか妹も先へ油筒 貞義【能の狂言】【えぼし折】

に【此筒の中にびなんせきがござりますところでお

まへのおつぷりへつけねばゆはれませぬ】とあれば

髪をゆふびなんせきをも竹筒へ入おきしなるべし、

さて今の髪つけ油などいふかたき物は野沽風ヤツコフウを好む

男子ならでは昔はもちひすつねの女は今のすき油な

どいふものよりはやはらかなるを用ひけるとぞ故に

竹筒へいれしものなるべし貞義のしらしぼりなど云

油筒ならん歟【俳諧是天道】延寶八年印本追 加高政定之兩吟女道の枕す

て、このかた【しらしぼり句ひはかりの物なると】是

しらしぼりの名の見えたるはじめ歟又貞享四年印本

【咄大全】元禄三年印本【鹿の子ばなし】等にしらしぼ

りの名見えたり

さて酒筒とてさゝえの事はいよくめづらしからね

ど筆の序に一二左にあぐ【舞のさうし】たかだちに

「かみへ申して御酒たまはりさいごの名ごりををし

むべし、もつともしかるべしとしてしゆくの大へい、

おほづつを御でゐへ申いだし」といふ事見えたり大

へいは大なる瓶子也大づつは大なる酒筒なり【年中

日々發句】慶安元年 長徳撰花筒はさながら菊のさゝえかな

季吟【此句崑山集に入作者を欠】小町踊】寛文五年 立圃撰酒入

に竹やもちひて一よ酒 有哉【續山の井】寛文七年 季吟撰

世の中を小竹筒となせる霞哉 祐元【一本草】寛文七年 未琢撰

撰 豆州大平寺の花見にまかりて 花見酒くめや大

づつたいへい寺 光舟【柳亭云、前の舞のさうし

に合せ見るべし】河内鑑】延寶七年 淨久撰高安郡大竹村の内

に業平通ひ道とてあり あられ酒ふる大竹のさゝえ

哉 良賢【伊勢家の隨筆【武藏鏡】の巻にさゝえは

篠枝なりと古圖を載てくはしく辨じられたればこゝ

にいはず又能の狂言、酔はじかみに酔筒の事あり俳

諧の句にはおほく見えす

【七百五十韻】延寶九年名主先生鱸つるらん 如泉【隠れ

さらにもちひざればまづ油筒の事よりいふ

能の狂言【二人大名】に下人に太刀を持たする事をいふ條に「油筒をさげたよふになんとしたもちやうをするぞ」といふとあり、是はふらめかして太刀をさげ

たるをとがむる詞なり【古節用集】阿行器財門に油筒といふ字見わたり【犬筑波集】永正十一年宗鑑撰薬師の前で筒をこそふれ「みあかしの油やみなになりつらむ」【續

獨吟集】承應二年吟寛文年間印本竹の筒波に流れて伊豆の海

正章「あぶら賣ぬる船やいるらん 同【新續犬筑

波集】萬治三年季吟撰寛文七年印本花生けやいる、椿のあぶら筒

鶯爲「柳云花筒を油筒にとりなしたる句也【晝網】

延寶四年印本元清撰人言は裏屋の妙西跡ものにて「髪の油をう

ろとはせいで」【空林風葉】天和三年印本油筒あかでや下女

の袖わかれ 宗親【夕顔歌】原本未見袖草より抄出這かゝる子

の飯つかむなり 芭蕉「いそがしとさがしかねた

る油筒 尙白【枯尾花】元禄七年印本藪におまりて雀よ

る家 這華「鹽賣のことづかりぬる油筒 許六【

【三上吟】元禄十三年印本夕霧や堅田へ通ふ油筒 沽州【渡

鳥集】元禄十五年印本干鮭となるく行くやあぶら筒

雪三

上總にてうたふ小唄「君を待夜は夜が長き髪の油を

【いなみ六法】延寶中四本にのせたる圖

△君はまつ夜い

あふくとあふとあふ

のあふらひんあふ

もかあと思へとも

どてもを身

のあふて

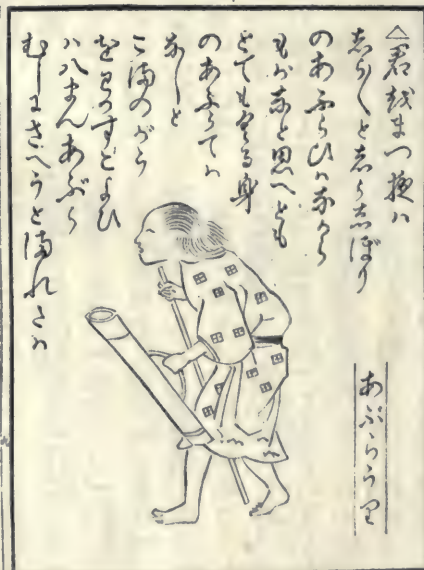
あふと

こほのぐら

をさすともい

ハハハあふ

むはさへうとほれと



油筒の圖好色智恵袋にあり

八皿たてた【三番續】寶永二年印本前句附たくましい事く

はこえたる竹は岩戸の油筒 不台【七五月雨】

正徳四年印本里冬撰また山崎は見えぬ薄霧 乙甫「赤土のす

べるにつけて油筒 貝紫【類柑子】八町はよるも

さはるも油筒 貞佐「柳云大津の句也これは車に

さす油づつか【玉海追加】寛文七水油といふもある

くささかうがいわけに云々」

▲吹かへし 【砂金袋】明暦三年丁酉印本西武撰 風でわくる柳の

髪やふきかへし 清貞」むかしは髪張といふもの

なく髪をたぶくといだしたるを吹びんといひしと

ぞ其鬢を髷へかきあげたるをふきかへしといふなる

べし【漢和續連珠】寛文四年印本 薩摩好三柳相」 周令」

螺歟吹曲髪 同【俗つれぐ】元禄八年印本「うちかけの

ゐ姿是はと思へど立てて各別の違あり、兎角は道を

ありかせて其身振をあらため、貌は日のうつりに向

はせて影より見すかし、ふきびんのしづみやうにし

て地髪のすくなきは知るゝものぞかし」

▲太夫鬢 【破枕集】寛文三年印本 松にそふは太夫鬢か

よ柳がみ 信之」

▲丸島田 ▲高島田 ▲とりあげ島田 【好色伊

勢物語】二の巻「つゝゐづつ井筒や娘丸島田ゆひに

けらしな我が見ざるまに」といふ歌に注して「丸島

田、たか島田、とりあげ島田、など風流の髪のゆひや

うなり」

▲ねちわけ髪 【知恵袋】寛文末年 下女ならでねち

わけ髪や柳垣 豊亂」

▲いでうわけ ▲おさんりう 明暦の落書、畝

足袋の條々

▲むさうりう 【天和笑委集】「御所の女中のむさ

う流おつとりかうがい蒔繪櫛」

按に夢想といふ詞は二様に物の變するをいふなりこ

なたへも出ゝむかひへもぬけるを夢想ひきだし、裏

かとおもへばかへせば表にもなるをむさう羽織、此

類あまたありくはしくは夢想枕の條に記す此むさう

流といふは今いふ下ケしたくなるべしかうがいわけ

かとおもへばすぐに變じて下ケ髪となるゆゑにし

名づけしならん

▲ふきあげ 【懷子】萬治三年 下風のふきあげ髪柳か

な 助音」【中山集】三小歌 秋風のふきあげにゆふ

髪かゝり」

○油筒 酒筒 酢筒

昔は陶器今の如く自由ならざる故に酒にもあれ油に

もあれおほくは竹筒をもちひたり小竹こたけの名是より起

りたる事はたれゝも知ることにして今も他國には

用る物なればめづらしからざることながら江戸には

代八車の軸へさす油のみ竹筒へいれそのよのものに

▲鷗髻

元文中前句
附萬國點

うつふいて櫛で羽をのす鷗髻たふ

【江戸菅笠】

元文元年
木角撰

そゝけたは翫ははたきをや鷗髻

殘角

【紫山點前句附】

あとへなりけりく鷗髻中の鳥が

御箱入

享保十九
年來川撰

養父入と見立上手の挾箱

立梅

風にも負すようだした髻

了固 紀の海

音作の淨瑠璃傾城無間鐘

▲鎌倉やう

【晴小袖】年號前
にあり

みじかきは鎌倉やう

の柳髪

文三人友里未考

是より種々つけこみ

▲片手髻

【野傾咲分色狩】享保三年
自笑作

一の巻「年頃は

二十有餘にも有なん今様の片手わけといふ物に中ひ
らの元ゆひすきとほる玳瑁かうがい云々」

▲唐輪

【分外集】

序に元祿十五年艶士撰
卷中に寶永の年號あり

輪の牡丹かな

竹意

是は牡丹の花をからわとい

ふ女の髻になぞらへし句なり

【老蠹集】安永六年
冬映著

わり

髻、長髻、丸髻、細髻、鷗尾髻、島田髻、かつ山、

片はづし、かうがい髻、のんこ、もみち髻、吹よせ、

島田くづし、出し髻、柳亭云のんこは男の髪の名な

れど又古くも女にあり【産毛】元祿年中
林鴻作

「白浮鼈甲さし

櫛筭にかざりのんこ髻の細島田小つぶしがしらの丸
髻」按に近年銀杏わけの名女にもあり其類なるべし

吹よせは吹あげの誤り歟、又吹よせといふもあるか
未考

▲かうがい髻

【物種集】延寶六年
西鶴撰

くしに指したる

浦のひな鶴君が代は筭わけのかみ代より

竹鷺

【吐綬鷄】

元祿三年
清風撰

筭のなかや住みよきかくれ羽根

新女

書に髻のなかにはごの子のとまりしかた

ちをかけり

【橋南】元祿の末
沾徳撰

十年朽たる翫矢なるらむ

渭北

鶉づかひがかうがい髻をながし目に

沾

洲【四季ばなし】

貞享二年
年間

の巻「出たちはつねめかぬす

ゑづかひの女、菊から草の地なしの小袖に薄紫の中
幅帯うしろむすびにゆたかに髪はかうがい曲をなる

ほど下へもつてゆきてん髻の目にたつほどに折か

け【女用訓蒙圖彙】貞享四年
年著

三の巻「かうがいわけは下ッ

髪せし奉公人など其つとめしまひうちくの局など

に入りくつろぎ又はおのがじしうら寄る頃下髪は身

もちむづかしきゆゑにくるくるとまはしでかうがい

にて假にしめおきたるなりそのさまおもしろしとて

いつしか常のゆひ振になりたるなりする世には下

髪せぬ人がらもなべてかうがいわけにする也むかし
は遊女が下髪したるとかや【男色十寸鏡】貞享序「油

柳亭筆記一の巻

柳亭種彦

○婦人の髪の名種々

【姥櫻】元禄年
間印本

二の巻遊女の粧ひをいふ條に「髪はひやうこ、かつ山流、ぬれ髪、しやれ髪、つのくりわけ、

かうがい、御所風、なげしまだ、國々のいたり風」

【婦人事始響瀧】寶曆三年
西川畫本

「むすび髪、かつわ、かた手わけ、しまだ、かつ山、かうがいわけ、ひやうごわけ、

其外さまゝのゆひやう今はこと多くなりぬ」【糸の節】寶曆七
印本

かみすきといふ歌に「心もそいろに茶筌髪

所ふうなるかごしまをまことにするがののんこわけ

わしも心のたけ折にみぢんじよさいはなげ嶋田水に

ゑをかくかもめづとゆいたいことじや京びんになに

のばちびんそりさげは四方がみからいひたてゝたと

へつばねへさげがみのひつこき髪のつとなくとせみを
をりゝのあはせづと【二見真砂】おくし揃ひかは
らぬ色のながかもじ鶴かうがい千代萬代といひたて
髪真享四
年印本のふとおもひ云々以上要をつむ【女用訓蒙圖彙】
髪は島田かうがい最トよし今様のつと無しや

つし島田は似あふ人と似あはぬ人あり年盛りにして
色きよらに目もと愛きやうある顔にはよし髪をいた
くしめびんをひつこくゆるに顔にかどあるやうにす
げなく見ゆるこれ遊女の風なり遊女の中にも破者風
なりとかや云々又同書に「鬢はおしだいす事すぎた
るは鳥かぶどきたるがごとし第一びんははやくかわ
き侍るゆるに出すぎたるは品あしゝびんのはえさが
りきりそろへたるは古風なり」

▲ぐるゝ鬢又ぐるわけ亦ぐ
るりわけとも云【晴小袖】寛文十二年
印本一雪撰

風

にもまれぐるゝわけか柳髪

友静

【俳諧錦繡綴】

神鳴のならざる年は端居して

遠水

行水の後ぐ

るにゆふ髪

岩翁

【日本國】元禄十六年前
句附、一禮點

わけへだ

なしゝ」

【代男】三の巻、越後寺泊の遊女の事をいふ條に「額

重道【一

は只丸くきは鬢こく髪はぐるまげに高く前髪すくな

くわけて水引にて結添【餘情男】元禄十五
年印本

五の巻【か

もんも過し局姿はうるさしと姑に針のみちならうて

綿もちとつみうねざしの足袋さす事は生つきて上手

に美し大坂染の前だれ島田わけをやめ髪はぐるゝ

わけを一風あちにゆひなし」

柳亭筆記目次

○一の巻

女の髪の名くさく

油筒酒筒 酢筒

雀京雀、旅雀 烏京鳥、旅鳥

縄たらし

六郷の橋

布施紅茂庵白、牡丹の各種々

踊り船船の名

柳に鞠、雪に衛

一兒二山王

袖ふくりん

小町雨乞の歌

きそく

かぶき

饅飩屋

法衣屋の看板

辻が花

晒賣、紙帳うり

しり暗い観音

あや竹の清書綾織

○二の巻

馬下駄井下駄の各種々

ぐりはま、芋の山

順禮かるた考證

おろせ

八十の翁 琴唄

窓錢

蛇之助

鎮鑰屋の金魚

四ツ竹

加賀節さんから節

丹前勝山

きねにつる

煙草の付ざし

角兵衛獅子

岡崎柴垣

○三の巻

右近源左衛門

頭巾種々女ふくめん

入間様

蚊帳匂袋

扇の各種々

宗祇蚊屋

○四の巻

子の日燈心

興望都

毛雪踏

やくといふ語

よめが君

小六が宮

猿屋の楊子

男の髪

けちぎり

局おり、鳩部屋

笠の各種々

露月點月並集、上京染享保十年題船頭 丸にやの字帆に足はやし袖の行 龜之助」又斷機燕語正徳三年の生なる老尼の話に

「大傳馬町三丁目に丸屋何がしとてゆたかなる町人あり廻船などをも持て沖に見ゆるは丸屋が船かとうたはれし者なりしがおごりに長じたる餘りその妻常憲院様御成の節見世へ拜見に出て居て名香を炷たりしを御答ありて遠島仰付られ家斷絶せしとぞ」といふ事見えたり丸にやの字の帆が見ゆるの小歌は今も人口にあり此説の如くなれば元祿寶永のはやり小唄なりたしかなる事は知らず、諸國萬句承應元年刻立圃撰五の卷千句第五 うかれめや去年よりもなほはやるらん友正」入こみにけり見なら江の船 立圃」つたへ聞兵庫は風呂の名所にて 可均」發句帳寛永十年刻親重撰柳髮吹かへしにや夕嵐 正尹」懷子伽萬治三年刻重頼撰下風の吹あげ髪の柳かな 助音」中山集附合 秋風の吹あげにゆふ髪かゝり 宗甫」築子千句承應明暦の頃かおかしげに結ふ唐人の鬘」名にしおふ兵庫あたりの女子ども 立圃」續連珠延寶四年刻季吟撰丸鬘が渦まく影の柳髪ども ト琴」藤かづらしてや丸曲やなぎ髪 可道」

橋にたちてをれり、此者町の見世棚さきへ來りすた
すた坊主の來る年は世の中よいとやまうしやすとい
ひ物乞てありきしが寛政の頃より絶たり鐫木圓志三
回忌追善、俳諧散柳^{享保十}_{五年撰}に秀翠といふ俳仕圓志が
世に在しときのおこなひをいふ文に「酒宴の竹節は
聲あしけれど拍子とり持の上手歌連俳恭基に御座
をにごし寒のうちの丸裸すた／＼坊主のいきごみ吸
物の饅頭とんだ了簡に人を笑はせ」といふ事あれば
享保中よりすた／＼坊主の名はありしなり安永四
年、戀娘昔八丈の淨瑠璃初て興行なし、頃とりわけ
此すた／＼坊主おこなはれたるにより白木屋の段丈
八が詞「これ／＼まうしおこまさん云々」と拍子に
かゝりていふ條は彼よの中よいとや申しやすの調子
にて三線の手をつけたるなりとぞ手遊びにつくりた
るも當時の事なるべしその圖□□□年印本、江戸二
色にあり

○青ざし

青ざしは熟せざる程にとり煎て臼にて挽くなり／＼
と捻^{コレ}菜虫の形したる物なり米に焼米、麥に青ざし、昔
は對の物にて田舎人が土産に持來しとぞ寶曆頃の落

し噺に田舎の女さる武家の奥方となり供多く連れ王
子稻荷へ參詣のかへるさ駕籠のうちより麥畑をうち
詠めわが田舎者をかくさんと思ひさても見事なる草
やあれば何ぞととひければ侍女麥なりと答ふ奥方よ
い青ざし頃ぢやとついお里をあらはした今江戸にて
は青ざしを見たる者もまれ也、當時^{寶曆}までは前に
いひし如く田舎より土産にもゝて來、焼米の如く賣
もしたるゆゑに此話のありしなるべし、徳元獨吟千
句^{寛永}_{五年撰}麥をもはたく坊の臼杵「青ざしや旦那の方へ送
るらん」^{虚栗}_{天和三年}青ざしや草餅の穂に出つらん
芭蕉」^{柳亭}_{其角撰}白麥の句六句あり枕の草紙九の卷「三條の
宮におはします頃五日の菖蒲の輿などもちてまゐり
くす玉まゐらせなど若き人々御櫛笥殿など、いとを
かしき藥玉ほかよりもまゐらせたるに、あをざしと
いふものを人のもてきたるを青きうすやうを艶^ンな
る硯のふたにしきてこれませこしにさふらへばとて
まゐらせたれば」五月五日の時節といひ彼麥の青ざ
しなる事論なけれど予が管見ゆゑにや是より寛永ま
で百年の間の物の本に見えず

○丸にやの字

著 似船 上の卷二月初午の日は諸人當社に參詣をなしかへさには土狐つぼく、地黄煎、染團子やうの物略中

家産にし侍る

○四分の袴

文化十二年九十三翁の筆記、飛鳥川に「昔四分の座頭は袴を着し腰板へ白き紙を張たり」といふ事を載られたり是は白き袴を着すべき官なればそれを略して腰板ばかり白くしたるなりとぞ諸貞享前後の古書を見るに彼腰板の白きがをり／＼あり今はたゞ年始なんどに白き袴を着のみなるべし、智恵袋延寶初歟 祐政撰座頭のあいさつに 袴腰や白きを見れば霜の花

政孝」糸瓜草寛文元年 刻道甘撰六の巻 座頭坊はかまこし路か雪の山 重尙室咲百韻 純寶七年 吟立さわぐ草履と杖と岑の雲 西吟」袴のこし路白妙の月 似春」

杖といふに附たり是も四分の事をいひたるなり

○針妙

物縫女の事を針妙といふは寺の隠し語の在家にうつりこは寺にて人しれすかふ女をめうといふがいふ意は妙の字を二ツにわくれれば少女となれり物ぬふためにおくがゆゑに針の字を上にてそへたるやうにおもは

る、醒睡笑廣本 三の卷自墮落といふ話のうちに「或檀那寺に參りしばらく難談したちさるに明日無菜の齋を申さんといへば庫裡からめうが楚忽に出ていひける幸の事やあすはお坊様の精進の日ぢや」此めうといふは女の事ときこゆ

○千彌染

近代世事談享保十八年 藥岡沾涼著一の卷「千彌染 寶永の頃中村千彌といふ芝居者はじめて此染を着たり紫色にして大紋りに染たる也」寶永八年不角歳旦帳 千彌染名にめでてこそ着衣初 其螢こいに模したるは寶永年間 京都かぶき座狂言本の標題

なり、此とき中村千彌大藏の虎に扮す祐成は坂田藤十郎也

土佐椽正勝淨瑠璃、佐月十二段のうち新染色上そまぬ人にもあゐ見る茶をひふし染の川竹の心をわけて木目染アイといふさへいさましき禿名によるせん彌ぞめから染京べにくち葉色云々」安永年間川柳點厝摺 祖母はあさまの袖つゝておく千彌染」廢れたるを知らず孫女にゆづらんと思ふ老女の情をいひしなり

○すた／＼坊主

寒垢離の僧は卜養狂歌集に見え裸躰にて繩を帯にしめたるなど古印本に書けるさま今に異ならず見附の

諸白の酒あり片白は今いふ中汲の類のものなるべし
今諸白とのみいひ
源氏物語に、まだむすめともいひがた
て片白をいはず

き少女を片なりといふ片の義も是なり、醒睡笑廣本に
今年うまれしかた子といふ事あり今水子といふ程の

事を元和の頃は如此いひしなるべし是もまだ子とい
ふ程にも不熟の義なり

おきのすさびは出雲の國の神職風水といふ人の著
寶永〇年に彼國へおもむきし紀行なり

○卯杖 射分の錢 碁手の錢

木工權頭爲忠朝臣家百首 群書類從百七十四、爲忠朝臣は盛
衰記十六兵庫頭仲忠散位賴政同時

の卯杖、ひかげ草花の色々むすびもて初卯の杖をい
はひつけつる」いかにして日かげの糸をとりそへて

千年に卯杖たて初にけん」とあるは實の日かげのか
づらを卯杖にむすびそへし事にはあらず今の削り掛

の如くちり／＼となりたるが日かげのかづらにも似
花とも見ゆるゆゑに如此詠給ひしなるべし今鬼魂木おにき

を柳にて作り數多く門へたつる家ありたて初にけん
とあれば卯杖も門へ立るなるべし又同集射場始 け

ふやさば雲の上人もろ矢していはけのせにを心がく
らん」諸矢は今いふ皆中、射分の錢はかけ物なるべ

し、同集圍碁「白浪は眞砂うつ也浦々によする玉藻
をかけ物にして」とあれば碁にも弓にもかけ物のあ

りしなり又同集庚申「夜もすがらごてのせにをば思
ひやるそのつらならぬまゝひなれども」ごては碁手

にて是も掛ヶ碁なり著聞集十二の卷博奕の部「承平
七年正月十一日右大臣家の饗に中務卿宮おはしまし

たりけるに中務卿と右大臣と圍碁の事ありけり碁手
は錢にてぞありける昔はかやうのはれの儀にも懸物

にいでけるにこそ」下略同じ爲忠集同じ庚申の題「ゆ
で遊ぶみつめたならでそのほかのみざるがうらはせ

ぬとしらん」此みつめたも掛事なるべし未考

○つばく

毛吹草 寛永十五
年重頼撰 三の卷諸國名産山城の部「稻荷、染圍

子、山の黃土乃士 諸國
行 壺々火桶」案内者 寛文二年印本
中川喜雲著

の卷初午稻荷まうでの事をいふ條に「大小土器の茶
碗の勢したる物を田炮と名づけ底平に懷ふくれ口せ

ばく李の勢したる物をつばく」と名つけて聲々に賣
ける」俳諧懷子 萬治三年
刻重頼撰 立別れいなりの山の朝びら
き」つばく程の涙たる中 重頼「坂東太郎 延寶
七年
元禄
五年

きしてわづらはしければ云々」見るべき事ありては用の事ありて后宮へまゐるあひだそこにておんめにかゝらんといひてつぼねの戸はひきあけ給はんかと心ときめきしてわづらはしとなり俗語にていはあけられはせまいかと氣が氣ではなくびく／＼するといふ程の事なり雀の子がひも人にかくして物くふ事とすれば心ときめきする物といふ意によく合へりされどこれはあまりに異説なり

○辨當

辨當を飯袋の音便なりといふ説はいかゝあるべき愚考ふるに貧なる事を不辨といふいつの頃よりの俗語歟宗長の記におほくあり、柴屋軒の記享祿三年の條「折ふし中國邊の人にや富士一見のついでとて立よりてことつて文などあり物いひかはす程に打つける落涙いかにぞやといへば不辨の躰わびまゐるするにはあらず何となく冷然なる様悲しく且は殊勝にながめ入まゝ覺えず狂忽の事とて袖を拂ひ云々」とあるはたちよりたる人宗長が貧なる躰をわぶるにはあらずといひし也又去年のにや歳暮の不辨につきて欲心の淺ましきを 天の下ありとある物なくもがなほ

しやをしやのつくとおもへば」その晴しの辨へなくてまづしくなるが故に不辨とはいふなるべし辨當はこれに反して辨へてその用に當るなりされば辨當の飯といふべき飯の字を略きたるは茶辨當といふにて知るべし、醒睡笑^廣二の卷に「利根をよそにあづけたる亭主なまじひにこ便當にてつかふ者あまたあれどもうつとりにして朝起などする者なし」こ便當今聞なれざる俗説なり愚にはあれど用にあつる辨への少しはありてといふ事にて小辨當の假字歟可考

○片つき

おきのすさびに後鳥羽院の御製なりとて隱岐國にていひ傳へし歌を載たるそのうちに「賤の女が片つき麥を干わびてにうにやすらんさみだれの頃」此片つきは今もいふ詞なり武藏の國足立郡早瀬村の者の物語に麥を水にひたしかくはじめつくを片搗といふそれを日に干しかわかしさら／＼と又水をかけてふたゝび搗を眞搗^{まつき}といふ、是にて片搗の事はしらるれどにうといふはいかなる事か考へ得ずにふない雀の事などいへど當らず昔の方言なりしなるべし諸此片といふはまだ不^レ熟半なるの義なり室町家の書に片白

る友なひには、あかぬよはひの萬歳樂、うたひてま
はす人形の、手くゝつめける、手工の坊主のすゑす
ゑは、欲あかづける木綿わんぼうに引かへ、紗の紗
のごろもを、茶のくゝ衣にきかへ、或は赤のくゝ髪
を、あたまにはやし、ちいさき櫓をせおひ、銅鉢も
中にありやなしやと、あやしき奥島のおほひをうち
かぶせ、正面に二つの人形をあやづり云々」又同條
のすゑ傀儡師と手工の坊の争ひを放家師のとゝむる
詞に「座の衆も本末のあきらかなるにあらず芥川と
大井川とはそこばくのちがひなり又木工の坊にも非
あり、紗の紗の衣をめつ茶くちやのからかいにし
たるも智識のいたらざるが故なるべし」洗濯物大盥寛文
六年刻歌でやる蟬はしやのくゝ衣かな 宗利塵取
延寶七下手のうたひも數の眞砂地 撰者常矩 君が
代はしやのくゝ衣すゑひさに 同

○雀の子飼

吉原鑑萬治三 雀の子飼、或人間て曰いづれの傾城も
初對面には飯くはぬ也それにて夜食までは無食か是
いかん、初山の云雀の子飼と申事なり日暮方に揚屋
の居間にて髪ゆひおほす、其時にあげやのかゝか又

やりてか茶碗に湯づけいだしぬるみと是を名づけ食
すると見えたりされば飯のほどいたるにてそだつゆ
ゑ雀の子がひと申侍り」初山は新町三浦芳順かゝへ
の太夫なり、五ヶ津餘情男元祿十五 二の巻に「廓のよ
ね酒も餘程しめやかに、なじみの客の物語、夕飯の
膳するるにも箸はとらず、此事ばかりは能く神代よ
りの古風勝れてよろしき事なり、誰とても食なくて
は命の切賣、用事とゝのへに勝手へ立に花車が働の
納戸飯、雀の子飼などは智恵のかたまりばかし」と
あるは京の物語なり、されば此隱語元祿の頃までは
何國の遊里にてもいひしなるべし

枕草紙卷二「心ときめきする物、雀の子がひ」とあ
り同書にねす鳴して雀の子をよぶ事もあれども是を
實の雀の子としては心ときめきするといふにうちあ
はず、とりもてる物の續の筆すさびにとのもりづか
さきたりて頭の殿の聞えさせ給ふ也以下頭中將の使の詞なり た
いまかりいづるを聞ゆべき事なんあるといへば今殿
上より退出、清少納言にいふべき事ありとなり以下清少の答
見るべき事ありて上になんのぼりはんべるそにて
といひてつばねはひきもあけ給はんとこゝろときめ

郎、市字賀羅、御羅の油、ふるければ藤の丸のかうやく、林清か歌念佛、肩を裾よとむすびたる能芝居太平記讀、謠の講釋、露の五郎兵衛が夜談義大的小的揚弓の射場因記、花千句延寶三年とうろくに戸をあげや町

季吟

是は歌念佛なる事句體に明なり

湖春ぬめりたる節もよねぶつ物やりて

都曲元祿三晝は寐て夜念佛

涼し草の庵

尙白柳亭曰是は歌念佛にはあるべからず

▲夜念佛

▲夏念佛 五元集

○そもく着にけり

謠曲又舞の草紙にそもく是はなどあるより發語とおもひあやまり今常の物語するにも初よりといふ事をそもくよりといふ人あり、又昔は何事にもあれ、をはり、是ざり、などいふ程の事を着にけりといへり是も謠曲淨瑠璃節などに何の浦何の里へ着にけりとうたふより出し詞なり順禮物語慶長十三年三浦淨心著上の巻在原寺大和の條老僧の詞に「此井のもとに業平紀のありつねの息子ふうふ互に影を水鏡おもてを並べ袖をかけ歌詠み給ひぬ扱又一村薄はふる塚のまことなるかな

いにしへの跡なつかしきけしきかなとくねりぶしに抑よりさめにけり迄うたひなりとあるは老僧が業平の故事をかたるがはじめよりをはりまで謠のとりなるを作者淨心の笑はれしにてさめにけりも着にけりといふ同じれぶりのゆめはさめけりといふことすべて謠曲におほくあり花千句延寶三年何書んとて懷硯 正立旅の道着にけりまで馬眠り湖春元祿百人一句四年刻星佛賣聲寒し盡にけり 都水是は着にけりを年の盡にけりと取なしたり、二番鶏元祿十五年了我撰すはしれものよ月影の君了我つれなさの着にけりには冷火燧ごたつ 怪石芭蕉句撰寛治なり本にけりなりにけり迄年の暮是は着にけりを轉じていはれたるなるべし、或時集元祿七年刻神叔撰大名の手に觸る尺杖 水花神垣やそもくよりの古狐 百里

○しやのく衣

しやのく衣といふは傀儡師のうたふ小歌歟未考よだれかけ此草紙四の巻まで慶安二年の作 作者梅條軒五六の巻承應二年頃の作刊行は寛文三年也一の巻に「世の過はひはをかしきものかな、山又山に山めぐりし、しつたんくと鶏旦の内祝ひして、出たつ紗の衣手も、はるくきぬる京の町、うるはしげな

者普し」寛濶念佛も歌念佛の類なるべし、吾吟我集
慶安二年序「宇治山の貴賤群集すれば茶つみの歌のか
未得集
すかにしてはじめをはりたるならすいは秋の月に
ありく歌念佛のあかつきの雨にあへるが如し」

照や日乃

ちりり

風を

念佛

俳諧吐綾雞
元禄三年
秋風撰



秋風

▲歌念佛の發句

續山の井寛文七
季吟撰

後砂金袋延寶三

空林風葉天和三
浮世念佛
自悦撰

同集もおなじ

都曲元禄三
言水撰

瓜作元禄四
琴風撰

▲歌念佛附合の句

廣小路延寶六年
不卜撰

えらびける歌念佛の聲添て

千代見草寶永印
不角撰

小袖ほのめく出格子の間あひ

紙蠶享保十四
年貞佐撰

羽根切り雀縁の下出る

塵取延寶七

後世よりも今を樂む歌念佛

▲歌念佛に名ありし人

難波鶴延寶

歌念佛

上町

存道「京羽二 たづ

ぬべし心おほえ江戸狂言 産毛元禄年間印
本林鴻著 三の巻四條川原の

涼の事をいふ條に「色事藥賣中村玄角、齒ぬきの喜三

未覺

作者不知

申照

可不

同

不角

流也

一意

貞佐

長虹

常矩

同

同

同

同

同

同

同

同

いふに似たり

▲夕夷 五元集

○日暮の歌念佛

日本永代藏西鶴作元祿元年印本一の巻「歌念佛の日暮といふは

昔伏見の御城代の時諸大名の御成門軒を並べてかゝやき金銀珠玉をちりばめいづれのたくみかさんごをけづりなして紅梅の枝に春をうつし五色の浮雲しづかに龍はさながら動き虎は其儘かける勢ひ見ぬ唐土の廿四孝を越前殿の御門にありく」と美景の彫物に此きよなる事詞にのべ難し五十五萬石三年の物なり是に入けるとなり彼京都の鉦たゝきうら盆の頃勸進にまゐりしが朝日影御成門にうつろひしに是に氣をとられてながめけるにまづ大しゆんの耕作のところまだら牛のいかな事作り物とは思はれず淀鳥羽にかへる事とていめおのが友かと道連をこひける是にめをよろこばしげに秋の目のならひにてはや暮れて驚き願ひし功德あき袋かたげて都に歸るを見て人申ならはし日暮坊と其すゑく今に名高き云々」日暮の名義見えたるゆゑ後のさうしながらまづ初に抄出、西鶴一代男天和二年三の巻「交野牧方葛葉にさしか

かり橋本にとまれば大和の猿引西の宮の戎まはし日暮の歌念佛かやうの類の宿として同じ穴の狐川身をさまぐに化るばかり」日暮の名ふるくこに見えたり按に人倫訓蒙圖彙元祿三年印本七の巻に歌念佛、丈念佛といふは萬徳圓滿の佛號なりそれに節をつけてうたふべきやうはなけれども末世愚鈍の者を道引きせめて耳になりとふれさせべきとの權者の方便者ならんそれを猶あやまつていろくの唱歌を作り是を鉦に合せてはやし淨瑠璃說經のせずといふ事なし末世法滅の表じなり悲しむべし」と見え又餘情男元祿十五年刻「物いはす互の泪山莊太夫の歌念佛船と船との押別れ」といふ事あれば元祿の頃は念佛にうちませさまぐの事を歌ひしなるべしされば日暮小太夫は歌念佛より出たるか又小太夫が說經に似たる念佛ゆゑに如此いふか知らず

▲歌念佛ふるく見えたるに抄録、鷹筑波集寛永十五年小

歌ぶしにも申す念佛「尺八の短き身をば打捨て、

政明」寛永中よりあり又不可徳物語慶安元年印本上の巻「當

世都にはやりし貧窮飢寒に及びて我道心はなたやが

風を是としくわんくわつ念佛を申洛陽をはひぬめる

る口説いひ出しかへらんとするをよき手うちかくれば中なほりしてあとよりまよひあがりなまづとなりぬ」朱雀遠目鏡延寶九の序に「あと先の首尾そろはぬわらうは夏の虫の飛で火に入るが如し其盛なる内こそ全盛にかゝやくべけれ只夏の田の稻のとのちらちらとしてあがり鯰になる事は是大きなるはかりなり」島原の事を書しさうしなりされば京にも江戸にも此詞あり按に魚の死すをあがるといふは浮上るより出し歟

都風俗鑑延寶九の卷「血氣さかんにして前後のまきたゝすかるがゆるゑに太鼓などにそゝのかされ中略笑ひものにしてほめそやせばかのかうきげんに乗じてかれらが馬鹿いんぎんをうれしがりてめつたと遣ひすてゝ程なくあがり鯰となるなり」團扇曾我

○朝観音に夕薬師

観音には朝の参詣おほく薬師には夕のまわりあるゆゑに朝観音に夕薬師といふ諺ふるくよりあり其おに聖徳皇太子の御撰宿曜經を引どもたしかならず京難波には宵の庚申といふ事あり是も庚申は日くれて後参詣あるをいふ近松門左衛門作おちよ半兵衛の淨瑠璃の標題は其諺をもちひしなり江戸にてはいふものを聞かす

▲朝観音 河内鑑延寶七住地村慈現寺正観音 朝観音参りや露の道すんぢ 俊榮「西花集元祿十二傾城の世

帶奇麗に持なして 撰者支考「朝観音にまゐる朔日

紫道」宇陀法師 尻に名とりの金平が来る

許六」なまぐさき朝観音に夕薬師 李由「こいには

へ東花集元祿十三雪雲や朝納豆に夕とろゝ 碧川」

▲夕薬師 望一後千句 月は東と心がけぬる」信

じつゝ参らば秋の夕薬師」浮世の北元祿元盆より前

に匂ふ早稻の香 好水」夕月にはやる薬師の人

崩れ 碧川」五元集拾遺 夕薬師涼しき風の誓か

な 其角」續桑岡集寶曆八道くさのしばらく涼し夕

薬師 故郡」鶯宿梅享保十五辰附 枕引いざまゐらう

か夕薬師」

▲宵薬師 夢見草明暦二年涼まばやまだ宵薬師堂の

内 令」宵薬師といひしは珍し、京雀寛文五年かまの

座つきぬけ通りえびす川さがる大こく町西側中程の

家に薬師を安置せしを其町のしめたしの染物や多く

鹿子ゆふ子ども日ぐれよりつどひて参詣す此ゆゑに

鹿子薬師と名づけ今おほかた繁昌す鹿子やくしをか

しき名なりゆふぐれよりつどひてとあるも宵薬師と

おくり嵐山の戀風にはきんちやくといかのぼりにあ
 げ玉川の流れにものしてはちよろりとあがり鯨とな
 り」古郷飯江戸咄^{享六}の卷吉原の條「なんとわざく
 れ一寸さきは闇、白骨の樂みたるためしなしあすは
 ともあれかくもあれ今日のらくこそうれしけれと
 心はいさみにいさめども巾着は春風に吹ちるばか
 りなれば旅の男の袖をひきいざかへらんといふ」春
 風といひていかのぼりといはざるが文の曲なり、又
 かるくち躰踊り^{元禄四年}の卷「一人は鼠が蝙蝠になる
 といふ一人はいかでか蝙蝠に變すべきの争ひを傍者
 おしといめいふ詞に「二疋ながら性ある物なれば鼠
 が蝙蝠になるまじき物にてもなしまん更性のなき巾
 着がいかのぼりにさへなる程にと了簡いふて中をな
 ほした」といふおとしの話あり、又道戯興^{元禄十一年刻}「巾
 着不^レ入^レ金如^ニ風前紙鳶^一」

○あがり鯨

あがり鯨も金銀を遣ひうしなひしをいふ昔は衣裳な
 んどだてを盡し遊所にたちいる者の類をぬめりのな
 くなるゆるその如くぬめる事のならざる意なり、吉
 原失墜^{延寶二年印本}下の卷「酒のみちけいしてはては大きな

菱川師宣畫本戀の釣引、頭書 此草紙に年號は見えずれ
 目録に載たれ
 ば延寶中也

も尾菜さんばす
 一若菜さんばす
 ちよふねあそび
 みるもはことよ
 うりそめにあひ
 初めいともく
 あるをつねとた
 のをさうけてや
 ねよりとさう
 のよりよふきと
 わたりあふと
 るりていもさや
 むありをくは
 んらふくやうお
 かさのわくを
 ちんきてこふか
 かりきたる
 けちをくへあさ

ちりりりりり
 ちとこくわの
 あそれようは
 あいよと柳ば
 あいとあひそ
 よりさあんと
 ねにりりりり
 まれるる
 はまりと
 くりさあやう
 ちるやとさ
 ちりさあやう
 かりれよと柳付
 るねをくは
 さささささ
 のませ
 ああ

河念佛元祿十「明暮かよふ色里のたよりまもなきみ紙帳四年刻一間にさげて」又「に載せたる伊勢音頭の唱歌に「四方から目さます伽やみ紙帳」といふ事あり

は何人歟の句を書いたるなるべけれど出所考へず

○大小の丸 えとの丸

昔の花美なりし事印本にはいかるべしこれは唯おのれが心おぼえなり寛文より元祿中まで女の衣裳の花美なりし事今よりもはるかにこえたり地無小袖は色糸にて縫つめ摺箔は地を金泥にてぬりつふしたるやうなるあり、さる故に天和三年正月の御觸書に

一金紗 一縫 一惣鹿子

右之品向後女の衣類に制禁之惣て珍敷物染物新規仕出候事可爲無用小袖の表一端に付直段二百匁より高直に賣買仕間敷もの也

とあり一反にて三兩一分五匁まで御免なるを見れば一反十兩二十兩に賣し物のありし事必せり、紫の一本上野の花見の條に「花見小袖とてなるほど手をこめ結構にだてなる物すきに好みたるを着て出るなり花より猶見事なり花の頃は空くもりてやゝともすれば晝過より雨ふるしかれども傘をさゝすよき小袖を

すきぬらしてかへるを遊山にも手がらにもするなり」とあるは今にまさりし奢りなり又昔の小袖雛形に大小の丸えとの丸といふあり寛文六年の新撰雛形に見えたるは骨董集に出したり是は肩より裾へ十二の丸をつけその内へその年の大小を染て一年ぎりの小袖なる事を知らするにて花の雨にぬれながらへる意に似たり、えとの丸もその年の月々の朔日の十二支を染たるにて大小の丸におなじ

○巾着のいかのぼり

巾着のいかのぼりとは金銀をつかひ失ひし事をいふ巾着のかろくなりて風にも舞あがる譬なり

野郎虫萬治年問印本



こんぼ庄左衛門内村山糸之助

心だてむくくとして人の氣にいるなり座敷つきは吾妻におとれるなるべし柳の枝に咲せてしがなどいひし如く吾妻が座敷つきを此人にあたへたらば洛中のひやうきんの巾着はみないかのぼりなるべし」とあり糸之助はかぶきの少年吾妻とあるもおなじかぶき子松本吾妻の事なり又役者丸裸延寶二年印本の序に「双六ならぬ六三郎にめでては身のまはりまで一六屋へ

らしからねどふるくもありしといふ證をたゞ二ツ三ツ録す廣小路、延寶六年酒藏の白鼠なり上野の花撰者不

ト花咲くゆゑに酒賣るをいふ上野の花は酒屋の福の神といふ意なり、吉原三茶三幅一對延寶九年江戸町二

丁目菱や吉左衛門内小ざらしといふ遊女を評する詞

「全盛最中なりいにしへ松葉の新ざうにておはせしときより取りはやせし君なり今此家の白鼠となり給ふ」又同書に福鼠といふ事ところへにあり白鼠といふ同意、難波昔語貞享三年印本荒本與次兵衛座役者の評書に山村勘三郎を評する詞「今年與次兵衛方へ縁にしありてなり給金四十兩にてくだられ候荒木ほり出しのやうに見えま

する略中此君在京の内かいろう同穴の君ぞす天王のあたり近き初音ゆかしき君とやいはんつぼやの何がし白鼠と如此定さだある勤の女中よりぬあづかりて來り云云」西鶴一代女貞享三年四の巻越後やといへる呉服屋の事をいふ條に「年がまへなる男戀も情もわきまへず夢にも十露盤現にも掛硯を忘れず京の旦那の爲に白鼠といはれて大黒柱によりそひて云々」などあり此詞商人のめしつかひより出て遊女にもかぶきにも移りしなるべし忠臣藏の淨瑠璃に桁をはづさぬ白鼠と

本藏の事をいひしは誤り忠臣を白鼠といひし例なし

○内鼠

内鼠は家にのみ籠り居て世間知らずの人をいふ此詞は白鼠より古く見えたり、他我身のうへ明曆三年刻山岡元隣者

の卷「たのしき庄屋殿一番子を一人まうけられ朝夕是をかしづかれけるにてうちかぶりの程も過ぎはや十六七にもなりにけるされども此太郎、内鼠にてありしかば庄屋殿是をなげきある人に我れ一人の子を

持たりといへども此内鼠にて我内より外を知らずさればいかにして人つきあひをもさせ公儀をも見ならはしたく思へど云々」とあるにて明なり、砂金袋明曆三年

外に見る月や世界の内鼠 春元「破枕集寛文三年刻寛文十年春は出よか暮る年の内鼠 性觀「大和順禮刻正辰撰山

外に見る月や世界の内鼠 春元「破枕集寛文三年刻寛文十年春は出よか暮る年の内鼠 性觀「大和順禮刻正辰撰山

外に見る月や世界の内鼠 春元「破枕集寛文三年刻寛文十年春は出よか暮る年の内鼠 性觀「大和順禮刻正辰撰山

外に見る月や世界の内鼠 春元「破枕集寛文三年刻寛文十年春は出よか暮る年の内鼠 性觀「大和順禮刻正辰撰山

外に見る月や世界の内鼠 春元「破枕集寛文三年刻寛文十年春は出よか暮る年の内鼠 性觀「大和順禮刻正辰撰山

外に見る月や世界の内鼠 春元「破枕集寛文三年刻寛文十年春は出よか暮る年の内鼠 性觀「大和順禮刻正辰撰山

外に見る月や世界の内鼠 春元「破枕集寛文三年刻寛文十年春は出よか暮る年の内鼠 性觀「大和順禮刻正辰撰山

○紙帳

紙帳といふ名は今も人しりて紙帳といふ事はいはざる歟、是天道延寶九年刻追加高政兩吟 なぶらるゝ月は昔の入ばくろ」ぬを紙帳の寐所へ秋前に兩吟とありて

は昔の入ばくろ」ぬを紙帳の寐所へ秋前に兩吟とありて

は昔の入ばくろ」ぬを紙帳の寐所へ秋前に兩吟とありて

そなはり三ッ割菊の定紋も一きは目だつ程衣装よく着こなし一風あつて胸高なる帶づき道中ゆたかに付添ふ禿しのお、ゆかりも是を見ならへばかれらが行末もたのもしく^{略中}うちやうたれし枕の床も今は思ひの泪川といふなげ節の唱歌も此太夫の作なりとぞ一ふしに聲よく三味線は鈴木平左が妹ほどやりはりつよくいやと思へばきはめてふる」などいふ事あり

○市野屋十郎兵衛

市野や重郎兵衛^{或は重を十に作る}傳末^{屋を谷に作る}考新著聞集玉滴隱見の類にある歟見出て書加ふべし、西鶴後大矢數^{實延}

^{八年吟}九年刻今はやるたい一ふしに雅樂之助

西鶴^{じゆ}

んく十郎兵衛が鬼の形も

全「梶久一世物語^{真享}

^{年間}印本三の卷「高野や生嶋新太郎鳴野といへる里の邊りより四挺三線引かけ一のやの十郎兵衛節にて大踊り、春色旅日記^{真享}五の卷「うつの山つたのはぞ道夢

にも人に逢ぬと詠る所なり、たいうつ谷ともいへり、じゆんく十郎兵衛がさのあんへともよめり」

人倫訓蒙圖彙^{元祿三年}七の卷代神樂の舞の條「獅子が立て扇の手をつかひ一の谷節で舞いとめづらしき事也」

西鶴俗つれく^{元祿八年}二の卷大阪八軒屋の事云々あり

て「川舟に紫の帽子かけたる野郎あまた乗て大和屋座のはやし方ども二階にあがり四挺三味線引きかけ一の屋の十郎兵衛節を聲揃へてうたひ」市野や十郎兵衛三番續^{元祿十四年辛巳二月作者宮崎傳吉}座元^{孫田勘彌坂東又九郎}

此狂言繪本卷中「勸進比丘尼の歌、一のやのじゆんじゆん十郎兵衛はさアへおかたは鬼ぢやとさアへと節をこめてぞうたひける」とありされば此歌延寶より元祿のするまではやり代神樂も比丘尼も歌ひしなるべし元祿曾我物語三の卷に「連引の三筋がけに市野屋十郎兵衛ぶしを聲揃へてうたひ」男月比翼鳥^{色カ寶永四年}

刻に曰「近代には一谷十郎兵衛が妻、梅野與四兵衛が二人の内儀ありまの藤がおんりやう姿、皆女の鼻の先なる思案ゆゑあさましき諸分々末代までの名をり也」松の落葉^{寶永七年印本}三の卷中興當流丹前歌の部に市野や生嶋新五郎として二上りの歌あり前に記したる森田座の狂言の刻の歌か、おかたは鬼ぢやなどいふ事は見えす

○白鼠

白鼠は福の神といふ程の事にて主人によくつかふる手代をあの内白鼠ぢやなどは今もいふ事にてめづ

柳亭記卷之下

とんてきは、頓的、頓敵など書ど唯假リ字なり又取出來の音便ともいへり、東海道名所記に瓢金の飛あがりといふ事ありへうきん者飛あがり者は今もいふ詞なりとんてきも飛あがり者の事なり

剝野老寛文二年序に「前髪文の昔をしたふ初元結、振袖のかをりゆかしき若紫これに染るとんてきの魂は油虫

となりておもひにもえ」又吉原矢墜延寶二年の注に「堀又、

高木、荒井、新田、本庄下谷の住人どもなりすぐれたる勇氣のとんてきどもなり」又「本の三ぶあざなは

三郎兵衛といふ丹後節の淨瑠璃かたりのとんてきものなり、天和笑文集六の卷「元來此男心あくまでか

ろくしかもとんてきにして憂きしらぬ者にてあれば云々」又同卷にとんてきの鼻毛といふ事あり、延寶

廿歌仙前句略とんてきな薩摩も爰に天降り 縁糸」

大夫櫻須磨寺奉納集也頓的が風に花の木延寶八年遠舟撰の又五郎 林

閑「白圭堂詩記元祿十七年印本 吉原八景のうち封堀落鴈、

「封堀夜寂思難堪、析木送人一二三、天佛生廻斯里

鴈、往來頓敵聞虚談」陸奥衛元祿十一年桃隣撰の行脚の

連レもとんてき 己應「江戸菅笠元文元年不角撰 ぬ取落す

とんてきに僕 牛角」是又おほく見えてうるさけ

れば見出たる半を記す是は原ト江戸の流言なるがゆゑこゝに引たる太夫櫻のみ大坂、その他はみな江戸の書なりとんてきといふ事江戸鹿子にもあり

○鈴木平左衛門の三線延寶六年古今役者物がたり鈴木平左衛門が名なり

鈴木平左衛門は延寶より元祿の頃までもおこなはれたる江戸のかぶき役者にて京大坂へも度々のぼれり

三線の上手なる事當時三都に隠れなし元祿二年京都

萬太夫の狂言摩耶山の開帳といふ繪草子に載せたる

役者名寄唄おんどに「道外傳八あの顔つきはいふも

とぶるいふ見ぶり鑢子ふるいだいには金とりてたれ

も金津五平次、今はまけじ踊りの拍子に合す三味線

の名人鈴木の平だなにものしはやいやもしほ様」と

見え又役者大鑑合類元祿六年立役

鈴木平左衛門江戸にて壹人當



千ふり出しやくの元祖なる

故にや上手なるところおほし中三味線彈事古今無双

の名人立ッてなりと居てなりともいづれも様ののぞ

み次第自由自在なり」と記し萩野澤之丞が女雷神の

狂言元祿十二年、一心女なるかみといふにも三味線を平左衛門が彈事あり

此ほか當時の評判におほく見えたれど同じ事なれば略、又、誰袖の海寶永元年印本に曰「三浦屋の小紫太夫に位

五年云々尾頭町西側にて説經操芝居興行 太夫日暮小太夫 こすひでん、山樹太夫、愛護若、かるかや、

小栗判官、俊徳丸、松浦長者、いけにえ、小さらし物語」と記し又寛文八年云々の次に「日暮市九郎同

小九郎右兩人若衆にて出語 どんらん記、誓願寺本地」又天和二年の條日暮卯源次などあるは小太夫が

子歟小太夫が芝居は久しくつゞく代々名を續ぎしにて一人にはあらず江戸八百韻延寶六年ある時は愛宕高雄

の粹おこし 安昌 説經芝居日暮のたき 來雪 俗つれ西鶴作一の巻門に禁酒の札を石に彫りて立

てべし此いひ置より外なく昨日も日くらし小太夫が説經を聞けばあれ程力も強く利發なる小栗殿も横山

にもりころされ給ふ」とあり、説經者山緒書に「正徳二年云々日暮小太夫唯重」其後宿所書上に宮川筋

七丁目とあり小太夫が孫子世におちふれし事近代因果物語に見えたり、小町が雨乞の歌の條に抄出京羽重にあるべけれど今本をうしなひたり重て書入べし

○丹波越

丹波越は京の謠亡命かけもちする事をいふ按にはじめは嶋原にての流言なるべし此事種々のさうしに見えてうる

さければ三ツ四ツを記す

野良虫萬治年開印本「町人の子どもは親のたくはへおきし金銀を盗み出してひた物にかゝる程に後には親にかん

どうせられたんばごえにおもむくかさらずは心よりおこらぬなま同心をおこして流浪の身となりしもの

まのあたりにあまたはんべるなり」都風俗鑑延寶九年三の巻「女の身として芝居もとをするとおほきなる

はまりにあひてわが物は是非なし人の物までおひちらし女の丹波越いんめつ最珍かなり」大坂雪千句寛文五年借錢を

すまさし様の謀 作者不知 所をさりて行丹波ごえ 全 七百韻 春の月山の端にげてどちへやら

宗因 かりの行方も先丹波越 全 江戸八百韻 別路や浮雲をまく御座一枚 來雪 昨日の富貴

けふ丹波越 幽山 わたし船延寶七年先性わるの軍大將 益翁 弓張の月の行方や丹波越 西鶴 春

色旅日記貞享四年二の巻に京より大津へ三里の條「山科藪の下たばこの名物此きざみを呑んで輪にふけばち

やつときえずして大きになり丹波の方へ飛なり」丹波越ををかしく書なしたり西鶴の作の類に丹波越といふ事多く見えたり

○とんてき

書あみだの胸割に八太夫正本と與書したるあり風俗

陀羅尼寶曆十年尺龍撰いたはしや浮世のすみに天満ぶし

甲州長澤組附考寶曆の頃廢れたる證とすべし、天和

笑委集二年三六の巻堺町の事をいふ條「くるゝ日かげ

を思ひ忘るゝ是ぞ大坂七太夫おなじく天満小糸が地

黄煎あまいもからいもよきもあしきも云々」とある

は天満八太夫とつゞけていふべきを天満小糸當時名

高かりし故それにひきかへてかく狂言に書しものな

るべし天満小糸の家今淺草八幡町大護院門前にありて水

飴を賣れり今は菊屋といふ同書此つゞきに云々ありて「おし

やれば尤かれ則八太夫古今無双の名太夫おとにのみ

聞くなりやうびんがも舌ふるひしてかちはじなり、

じをり裏聲いつくしく」とあれば天満八太夫の事な

れど中へ小糸の名をいれて書しゆる考へざれば聞え

がたし

小糸如此のいと古き看板ありながら今はしるこ餅ざ

ふにもちをうれり

前に引し尾陽戲場事始に寛文八年云々尾頭町以下前

の如し「太夫天満十太夫脇都右京小歌宮屋四郎左衛門
横笛瀧口 善光寺開帳」

御名物志煉薬のめ

淺草御藏前八幡町
御藥水飴所
菊屋小糸

淺草 御藏前八幡町
大菊 菊屋製

又元祿八年云々の次にも天満十太夫
の名見えたり同時に十太夫とよびし
もあり又説經者由緒書正徳二年の條
に「日暮八太夫」其後の宿所書上に
京猪熊通り四條下ル町 説經名代日暮
八太夫とあるは別の家なるべし

○日暮小太夫

日暮小太夫、説經淨瑠璃の太夫也、寛文五年刻京雀の
畫に四條川原にしばるあり紋所だ尾陽戲場事始「寛文

必せり

文和元年壬辰十月十九日毫攝寺乘專記」最須敬重繪

詞五、古最勝園寺相州禪川^{貞時}朝臣政務ノハジメツカタ

ナリケルニオリフシ守ノ殿ノ御濱出トテヒンメキサ

ワダヲ見給ケレハ塔ノ辻ヨリ濱際マデ數多ノ勢ミチ

モヨケヤラズツバキタリソノ爲體僧尼士女アヒマジ

ハリ帳ヲタレテミナ騎馬ナルガ二三百騎モアルラン

トミエタリ」觀應二年辛卯初冬三十日大和尚位慈俊

記」慕歸繪詞四、今度東關下向ノトキ法印常陸ニ村

田トイフアタリヲ折節ユキスギケルニタバイマ大殿

ノ御濱イデトテ男法師尼女タナビキテムシトイフモ

ノヲタレテ二三百騎ニテ鹿島ヘマキラセタマフトテ

オビダタシク^{ヒシ}メク所ヲトホリアヒケリ

○あまり茶

今はあまり茶には福があるといひ昔はあまり茶を吞

ば年がよるといふ、砂金袋^{明曆三年}大ぶくのあまり茶

のまでや若夷 勝直」南花ばなし^{貞享年}「昔さる人

の曰あまり茶を吞ば年がよるものぢやといふ事を聞

てさる者がいふやう是はうそであらうしさいは茶と

いふ文字は^ハたちの人は十八と書た程にといふされ

ば歌にもかくこそはかゝれけり

茶を好キてのまば廿の人なりと十八ほどのよはひ

にぞみゆ」

○天滿節

天滿八太夫は説經潘瑠璃の大夫なり貞享元年の印本

野良三座記に載たる堺町の圖を見れば芝居は北側に

あり、江戸鹿子貞享五の卷に

説經座

堺町 天滿八太夫

權太夫

重太夫

と見えたり八太夫の傳系及芝居起立の初未^レ考、尾陽

戲場事始寫本寛文五年云々の條に「尾頭町東側、説經

操芝居興行 太夫天滿八太夫」と見えたり、はや當時江

戸に芝居をかまへし事江戸名所記の書にあり、元祿

曾我物語^{十五年}二の卷「あるときは中村が芝居にて坊

主小兵衛がやつし藝花井才三が長口上端息しながら

見物、十文字さつまが景清門破り、天滿八太夫がか

るかや道心をば心ならず聞てやる」などいふ事あり、

按に八太夫は古き潘瑠璃をかたりしとおぼしく予藏

好色萬金丹元錄七に男だての出たちをいふ條に「釘抜の眞鍮紋あれたる駒の中形小紋」といふ事あり前に白綸子足踏の條に引たる一代男に「紋所は銀にてほの字切りぬかせ五所の光り」と見えれば女は銀の薄がね男は眞鍮の薄金にて紋所をつけし事ありしなるべし今もたま／＼小兒の羽をりなどにあり・

○むしのたれぎぬ

むしのたれぎぬを虫を除るためなりといふ説はいかゞあるべき、按ずるにむしは今いふからむし、苧麻、紙苧など書く麻の類にて今縮ミを織が則からむし也されば麻のたれぬぎといふ程の事なるべし厚き絹にては向ひの見えざるゆゑにうすきものを用ひしかとおもはるゝ七十一番職人歌合「六十一番山伏 せんだちのさんぎざんげは我やせんいたか目につくむしのしたかな」此歌戀なり、むしのたれぎぬの下が目につくといひしやうに聞ゆむしとのみいひてたれぎぬの事と當時は聞えしなるべしれども是も経を讀流れがんにやうなどおこなひ山伏の類なるゆゑ山伏の歌にもいたかめにつくといひたる歟八雲抄、ムシ笠とあるは彼むしをたれたる笠か又むしにて張りたる笠か西鶴大鑑貞享四年刻「灯もなき大書院歩みて又板敷の縁に出

てたれむしの數くゝりて絹張の障子引あけて紅の房つきし綱うごかせば玉の鈴音なして」といふ事見えたり絹張の障子とあるに照しあはせて見るにたれむしは麻の布つる簾なる事必せりむしのたれぎぬも笠の端へむしをたれし事と見るがおだやかならんか

漢土にて何にもあれ其物ありてそれに類し異なる物には胡の字をかうむらしむ胡椒くわ胡栗のたぐひ多しくはしくいはゞ栗ありてそれに似たるくるみなれば胡國の栗といふなるべし本朝にては唐の字をからと訓じ、からなでしこ、から葵、これ又かぞへなばいくつもあるべし苧をからむしと訓ずるも此例にてあるべけれどムシとのみいふ物はあらず、按ずるに蘿、古はからあさといひたるを何國の片言にか麻てムシなどいふ所ありてふとかくよびしが諸國へ渡り二つの名になりしにはあらずや今草の名をも麻といひ布に織しも麻といふが如く昔はムシとのみいひても布のこことになりしなるべし是今いふち古歌にむしたるゝと詠しは麻たるゝといふ程の事にて女のかぶる笠の端へたれたる事なり是おのれが顔をかくれしながらあつき布にては向の見えざるゆゑ此ものを用ひしこと

んとして考へ「これよりよするといがで手をつく」と

東日記延寶九年
刻言水撰いが栗の仕形咄しや月の幅 勝信

とあれば此語延寶以前にありしなるべけれどはじめにいふ如く出所不_レ知

▲越前信濃すべて塞國にて冬壁越_シに隣家へはなしをするに其はなし壁に氷りつきて隣へ聞えずさて春あたゝかになると彼のはなしが解けてしきりに壁がべちやくちやものいふと、江戸蛇の鮓延寶七年
刻言水撰 信濃路や壁のはなしの呼子鳥 如申

▲うつけたる者他のふるまひによばれ膳の赤く見事なるを是は何ぞと人に問ければ朱椀朱をしきなりとをしふ、その後内の下人木より落、頭をうちわり血の流るゝに驚き醫者をよびにやるとて紙に誰事木より落、頭をうちわり朱椀朱折敷おびだしくいで申候と書ことは何にても赤きものは朱椀朱折敷とおもふて、山の端千句延寶八年
年刻 たわけにはうそを丸うてのませけり 似春「何をいふても餘所の朱折敷 梅翁」

今又此話に前をながくと添へて木より落馬いたし天窓が破船などともいへり

▲ある大名伽衆に向ひ汝やゝともすれば尻しりといふ癖ありて聞苦し以來いは料足十貫いだすべしといふ伽衆かしこ若_シ御前_ンのおほせあらばおれともそのとほりいは過料をとらせんとこたふ、さて四五日ありて彼伽衆御前へまかりいで今木の鑊子を見ましたがことのほか見事なさいく湯のたまりもよいといふ大名きゝてそれは尻がこげはせぬかへ、ハイおやくそくの料足十貫」江戸三吟 物のかげ振舞にする大津鴈 信徳「木鑊子の尻山の端の雲 桃青」

○竹のきり節のたまり水
半太夫節の淨瑠璃灸するに「心のそこのたまり水すまずにごらす出すいらす」とあるは竹のきり節のたまり水といふ古き小歌の前のところを心のそことかへたるなり此小歌人口にあれども出所未_レ考、境海草萬治三
年刻 水ばや竹のきりよのたまり水 安政「古糸屑延寶三
集重安撰 大筒は竹の切よのたまり水 良賢「柳亭元禄十三年に古短
冊を集し物なり 云此大筒はさゝえの事なり舞のさうしに大筒大瓶と並べいへり」佐倉笑種手鑑池田佐伯氏の女小弁のきりよのたまり水

○薄金の紋所

る程の大臣は肌着に隠し緋むく上には卯色の縮緬に思入の數紋、帯は藤鼠のまがひ織中略扇も十二本祐善が浮世繪こぎくの鼻紙運齋織の袋足踏中ぬきの細緒をはき云々」斯あれば天和頃は流行せし物なるべし

○桑染足袋 一代男五の巻「様子を見すまして本大臣様へ盃をまゐらせける此首尾いづれもほめて儼かに尋ねければ三人ながら桑染の木綿足袋はかれしに獨はなをすれなき御方あり地を踏給はぬ御方様いかさまにもと思ひざしせしとなり、都の枝折元禄五年越の興六が老樂の月 立吟」漸寒き紅紅の下着に桑の足袋 撰者立志」

○足袋雜考 玉海集明曆三冬澤に枯たる蘆は筒みじか」たれ水上に流す古足袋 可頼」古糸屑集延寶三年たびの雪やあし高山の白なめし 秀綱」人倫訓蒙圖彙元禄三足袋師「木綿足袋の地別に是を織てそれぞれにさして出す女の業として是をさして出すなり」

○ちらしふくさ

予が著したる還魂紙料に、祭禮及踊りの傘にふくさをつる事を記したるが當時は何といひしか名を知らず近曾ちらしふくさといひたりし事を知れり、遊女

源氏全盛競土佐條正勝淨瑠璃に、嶋原の夕霧といふ遊女に長崎丸山金山が許へ禿踏りをかけんとする條に夕霧の詞「そもく丸山とまうすは花をかざりし色里にてたておほやうの風々と聞、よのつねにてはかなふまじ、すぐれしきやうの禿ども皆一チ様りに出た、せ、音頭どは歌のきこえある、ちとせ、きんや、と定むべし日傘には家々の紋をつけおかせてしやうぞくは金銀の糸まじへ綾杉かけにろくろまき軒糸赤く軒つけは綾や錦の水引に、ちらしふくさは墨繪の源氏又秋の野に虫盡五色の糸にて縫せつゝ乳母のかはりに女郎達思ひく物のすきに嶋田三ッ櫛一とうに出たち給へやいかにといふ」

○昔の輕口話

昔の輕口ばなしの今に人口にありて出所を知らざるが二ッ三ッあり

▲丹波の國人栗の大きな物語にて此くらゐありと左右の手にて仕形して見するを傍の人笑ひて「いかにそれほど大きな栗のあらんとなじりければ「實は此くらゐなりとひろげし手を少しす「イナまだちいさかるべしとふたゝびいはれ彼人又手をせばめ

は紅の紐の廢りし事一代男に證あり、うねざし足袋の條に引けりてらしあはせて見るべし

○織足袋 毛吹草 寛永十五年重頼著 原版正保二年刻 諸國名産の條「攝

津國村木綿同織足袋注指足袋ノゴトクオル」今は絶たるか未_レ見

○兜羅綿足袋 難波鶴 延寶七とろめん足袋 日本橋北へ入高津や五郎兵衛 男色十寸鏡 貞享四年刻 美少年の事をいふ條「足袋

はとろめんすきや足袋よし、ふすべ革はげひたり匂ひ侍るもうるさし」

○染分足袋 紫紐 目覺しぐさ 寛永二年著 慶安二年刻 上の卷「此頃

頃のうき世わたり若法師受戒のさたはさもあらでうら紫の小袖きてこつまうしろへ引まはし依文金砂

の平帶してきぬもぢ衣身にまとひ染わけたびの紫紐、紅うらの丸頭巾」

○紺足袋 花田 尤のさうし 原板寛永十一年刻 上卷、黒き物

の品々の條「黒澤九郎兵衛といふ人くらままうでの初寅の一天はまだやみの夜にからす丸通りをたもち

づる中略むりやうの小袖かさねきてらしやのはをりにちやまるの袴しゆすのきやはんにこんのたび黒さ

や卷の太刀をはき云々」空林風葉 天和三年刻 白檢撰 下卷 かう

じかはや花田にうつる木綿たび 宗親 今の花色千種 などの類也 錢龍賦 寶永二年 前句略摺レめの白き藍染の襪 刻百里撰 執筆

○水踏皮 世話盡 一名世話燒草、承應三年一の卷、旅の土佐國皆處撰明曆二年

話の條「矢立、かるさん、札はさみ、水踏皮、干飯袋」

と並べ出せり水踏皮いかなる物歟知らず

○袋足袋 福神通夜物語 元禄十四年不角撰 弓は尤節 せだ にはく

べし袋足袋」都女品定 元禄十五年刻 上の卷「先上京は心ゆた

かに云々下女腰元にいたるまで帶のむすびめちひさ

くして袋足袋に藁こんがう一ッ前にきなさねばさん

りも見せず」花おふこ享保」五ヶの津餘情男 元禄十一年刻

の卷に「腰元のお今も葛籠の底に入ておいた千種染

の細模様臙染の明ぼのがた菅原の芥子絞り緋むく黄

むくの一ッ前に漬はしの白梅香をたきかけ、葉染の

後帶水木辰之助がかりに結びさげおもひの襟つ

きは十二ひとへを三ッ割にしたほどかさね淡竹の皮

草履に黒びろうどの轆轤繩ほどなふくみ鼻緒、南京

金巾の袋足袋白綸子の引かけ紐につま高くかゝけ」

引かけ紐は今いふ片紐なるべし

○かへ足袋 風流四季咄二の卷

○運齋足袋 或は作雲 一代男七の卷に「人の見知

に紙の徳をあげて「髪はめでたけれども平んひらはなの元結なくばいかいせん、奉書のもみ足袋も利感なる事なり」とあり寛政の頃七十歳ばかりの老人の話にわが父の若き頃吉原へかよふ者は奉書足袋といふをはきたり夏秋の暑き頃路の埃をさけんがための餘情にてたゞ一夜ざりにてとりすつる事なり是は足袋屋にて

は賣らず吉原

へのみ賣來り

しと語れり

されば餘情者

も利感者も奉

書足袋を用ひ

しなるべし、



輕口男三の卷吉原の圖に此商人あり是奉書足袋賣な

らんと或人いへり扇の地紙とひとつらにあきなふさ

まなれば紙足袋ならんかも知るべからず節供まへのさ

つは書出しなるべし○此草紙の巻中に「吉原堺町の頃まにて手にも

云廿六七年此方此山野村へ移りて」とあれば貞享元年頃の印本也

○白綸子の足袋 一代男天和二年 四の卷「下には水

鹿子の白むく上には紫絞りに青海浪、紋所は銀にて

き結びめ後に締めすみに鉛のしづを入れ中略 木地のつゝら笠白き紐を上にもすばせ足踏は白綸子しろじゆすに紅を付ばたん懸にしてばら緒の藁草履はきつれて「文字綸子とありてしゆすとかなをつけたり紅をつけとは紅裏の事なるべし

○絹足袋 紅裏 彌郎組 俗つれん元禄八年 四の卷

「吉彌仕出しのうしろ結びくけめの角にしづをかけ

て白りんすの二重内具紅裏の絹たびに片糸の彌郎紐

をつけ彌郎紐考五人女貞享三年印本 三の卷「年の程三十四

五と見えて首筋立のび目のはりりんとして額の生ぎ

は自然とうるはしく中略 帯は敷瓦の織びろうと御前

かつぎの取まはし藤色の絹足袋に三筋緒の雪踏音も

せずありきて」大振袖元禄十六年印本 「血氣さかんと角前

髪ばら緒の雪踏をはづして何足かわらざうりも常な

らぬ紅裏の絹足袋淺ざちりめん脚半衣装も一きは太

模様紫の鉢巻加賀笠を青地のかた色はりて」とある

は美少年の事か又角前髪は鯨の心ををいれたる吹前

髪の事にて是も女歎

○紅の紐 塵取延寶七年 上卷 柿の皮や女のはける

足袋の紐 宗俊「紅の紐に見たてしなり、天和に

き事おほしとなん又友人中田氏某云、源賴政集流布の印本

引わたす大原山の横霞すぐにのぼるや煙なるらん

とあるをすこし引なほし定家の歌なりと偽作せしも

のなるべしとぞ其角は實に定家卿の歌と思ひあやま

りしか又前の一友人の説の如く向ひ火やの書たがへ

か不_レ知

○足袋の名稱々附、足袋雜考

○數奇屋足袋

昔は草足袋おこなはれしゆる唯た

びとのみいふが草足袋なり數奇屋足袋は則今の木綿

足袋なり草足袋は數奇屋へはく事なし木綿足袋は數

奇屋へもはくゆるに如此名づけしなり、吞海味廿三年

草袴、草タビ、二重ダウプク着スベカラズ」とあ

り草タビとことわりしを見れば天文の頃も木綿足袋

は茶席へはきたるなるべし、貞徳獨吟夢想俳諧自注 前かり

してすぐに數奇にあふ春附たちつけやぬぎぬる踏

皮の目もながし自注、たちつけは狩裝束たびをぬぐ

にてすきやへいる心あるべし今の如く木綿足袋の

みおこなはれてはたびをぬぐにてはすきやへいると

は聞えがたし、

寛永十九年金銀拂帳

一 銀八匁四分は御すきやたび二足の代わりひとともに

練紐を用ひ高價を見ればはやく寛永の頃數奇屋足袋

は別に上品に製したるなるべし

○沓足袋

八水隨筆に「沓足袋の後をこはせかけ

にする事は子が又大坂に在し時に拵させてよりその

足袋屋の作のやうに云なしおびだたく仕こみ江戸

へ廻せしより一流にはやりしなり」とあり此書享保

の頃かけるものなればこはせをつけそめしといふは

萬治寛文の頃にてもあるべし、都風俗鑑延寶九年刻 一の卷

に、大臣の風俗云々とありて「是をにせそこなひた

るは中略 天鵝絨のえりかけたる草履取に編笠竹杖を

もたせ或は羽をり肩にかけさせすそみじかなる着物

をこづま高く着なし足袋はつゝみじかに沓たびせち

べんなり」とあるは大臣を似せそこなひていやしき

風俗をいひしなれば當時沓たびはおこなはれざりし

なり延寶四年 至來集 二の卷 口わきにぼたんしめたり

沓手鳥 三禮是も足袋の句歎、紺の沓足袋は紺足

袋の條に抄出、五元集 沓足袋やこはせにのこる初

櫻 其角

○奉書足袋

正月元祿元年印本 五の卷、紙屋の正月の條

でさゝぬは人待よひのからきどさゝぬやうでさすは
又思ふ中の盃」ト養狂歌集に「八月十五日の月をみ
つまたの波に船をうかべ酒のみうたひ遊ぶ中略又其
外古寫本世の人も酒もりをすだれ船などにて小倉踊り
といふ事をうたひ遊ぶその歌にやうでさんくさゝ
ぬは忍ぶ夜のつま戸おたまこがれて秋こがれつゝと
いふてをどるを聞て「さすやうでさんくさゝぬ月
の影あきこがれつゝにくのあま夜や」至來集前に同じ
さすやうでさゝぬや月の鵜飼舟 三禧」玉手箱延寶
六年刻蝶々子撰 さすやうでさゝぬは夏の扇かな 泰徳」紫
の一本船遊びの條「當世はやる伊勢踊りさすやうで
さゝぬは人待宵のから木戸またもさすものは追手の
風に水馴棹」と見えたれば唱歌をすこしづつうたひ
かへ此小歌寛永中より天和年間まで流行せしなるべ
し

○華藏院豆腐

華藏院は下谷三線堀の北の門前町を七軒町といふこ
こに間口六七間にもあらん大家の豆腐屋ありて名高
かりし事文化の頃七十歳許りなる老人はよくおぼえ
て物がたる者ありしがいぶかしき事は江戸鹿子貞享に

「豆腐屋、車坂じざうゐんどうふ」とあり此寺車坂
にありて此所へ後に移りしかとおもへば花藏寺の舊
記に寛永中より當所なりとあり若此豆腐屋の車坂に
ありし歟不_レ知、續江戸砂子享保二年華藏院豆腐、形まん
ぢうの如し味常に勝れたり淺草華藏院門前七軒町」
と記したるは下谷淺草の堺にて向ひ側小嶋町は淺草
なる故に誤りしなり、橋南元祿末か寶永初めたしかなる事を
不知、撰者沾徳或云佐州是又くは
得ず前松がえ臨む池の恰好 序令」花盛こゝも
豆腐は華藏院 嵐雪」前句を忍が岡と見なし上野
の花のこゝろにて附しやうにおもはるされば車坂に
見世のありしかかさねて可_レ考

○定家煙

虚栗集天和三年おくり火や定家の煙十文字 其角「此句
予不_レ解、一友人云原版は其角自筆の清書ながら例の
醉後などの刻書誤りしを其儘に捨おきしとおぼし
向ひ火やといはされば聞えず定家の煙とはこぬ人を
待といふ隱語なるべしといへり、又一友人云定家難
題十首のうち、煙十文字「大原やをしほの山の横霞
立は柴屋が煙なりけり」といふ歌ありされど此難題
十首は後人の僞作せるものとおぼしくこゝろえがた

すあしなり」とあるにてはだし、素足、おなじ事なるを思ふべし、砂金袋明暦三年其徳撰沓手鳥聞に出る身やかち裸足 定勝 雪千句寛文五年附句月かげに貴布禰参りは歩行裸足 瓜作元禄四年其徳撰足袋はきて素足うつくし今日干潟 不卜 不卜が句にて素足もはき物をはかざるをいふ事あきらかなり又、至來集前同に足袋おしぞ思ふ霜夜のす足かな 清定 是は足袋をはかざるを素足といひしに似たり延寶の頃はや思ひあやまりし者もありしか

○浦辻の筆附、小法師

京寛文五蓮池町、此町に筆の上手裏辻が家あり 雍州府志天和二年著七の卷「筆工小法師造大筆小筆」獻禁裏院中、其外河原町祐仁京極南裏辻等爲巧手 正月貞享五年印本摘改元禄紀年也六の卷「誓願寺前打がへす袋雪踏丈皮、踏皮、浦辻の筆」柳亭云、此書は京羽二重、人倫訓蒙圖彙元禄三年印本筆師寺町通り松原上ル町裏辻和泉 以上、京師の裏辻なり大坂にもまたあり難波鶴延寶七年印本筆師天下一びんご町浦辻河内守と並べ出せり、京は裏辻大坂は裏辻と書く、晝網延寶四年刻寺町邊に萩の上風 浦土の筆つ虫まで聲そへて 貞因 至來集前

に同じ一の卷 漢鹽草かくや浦辻の筆始 撰者胡兮 俳諧三部抄延寶五年刻惟中著書初や此浦辻が筆の海 正辰 俳枕寛文年間刻下巻、播磨 人丸や明石のうら辻筆はじめ 嘉辰 紀伊 うら辻が筆捨松や鹿の聲

梅翁 柳亭云梅翁は宗因也、此句高野紀行にもあり

○小法師 京三吟延寶六年刻白蓮華盧山の小法師が筆也

けり 信徳 向之岡上巻、小法師 河内片野の原や土筆 調幸 難波鶴に浦辻河内あり、此句は小法師

句刻調和撰對筆人 文字洗濯綴させとや小法師鳴 天和三年 題林一

水軒 昔は何の職によらず天下一と名の事多し筆工の天下一も既に難波鶴に見えたり、鷹筑波集寛永十五年西

武三の卷「笠をとりてはびつくりとする」といふ前句に「念を入ゆふたる筆は天下一 清政」といふ

句もあれば寛永中より天下一と號せる筆工ありしなるべし、隱義延寶五年刻題泉 天下御涼所いづみ哉

信徳 前に引し人倫訓蒙圖彙に裏辻和泉あり又鏡師の類にも同名あるべし此句は何職とさしたるには

あらず清泉を人名にかりていひたてたるなり

○さすやうでさゝぬの小歌

尤の草紙原版寛永十一年刻さす物の段唱歌のうたに「さすやう

とは他より預りしななどをいふなるべしさてそれには腕の足らざるなり、因に云江戸辨慶延寶重陽 まゝ、事や貝から咲しけふの菊 水流」延寶には京都にも秋の雛はなし江戸にはこと更なり當時菊の繪櫃は京にはありしかども予が著す用捨箱にくはし 是も江戸には無きなるべし、されば雛のみにもあらず五節の日などには貝へ赤飯やうの物を盛て童の遊ぶが昔のならばはしかさなくては此句聞えず

○平九節

江戸辨慶、年忘 平九節や古風ながらも年忘 松陰」ひらく節と續て小歌なる事は下に錄せる宗因の判の詞にて知らるゝも平九も何國の人なる事未_レ考延寶中に古風とあれば明暦萬治の頃おこなはれし小歌節なるべし宗因選七百延寶年閏印行 韻はらく鳥も皆ばらり立つ 定祐」旅人の笠に木葉の雨合羽 保俊」宗因判の詞、ひらく流の小歌きく様に候」

○よござんといふ流言

藥師通夜物語寛永廿一年印本に「この頃は又よござりませうなうといふ事はやりければ頓て目出度よき事のあるべし」といふ事あり又百物語正保年間作歌大小二枚あり下の卷に「世

の中の時勢詞はやを俳諧にしたるとて百韻人の見せける其中にをかしき句ありとてかたるを聞けば「おしるにはよござんせうのからみにて」あへ物によきあのみさまのうど」又ト養狂歌集半紙本卷上に名月の夜其頃世にはやりし小歌にさせゝよござんしよてんとよござんしよといふ歌をうたひて遊びけるに歌よめと所望にて「金鰐に似たるこよひの月の影させゝよござんしよてんとよござんしよ」又古寫本に此歌「金鰐の刀歟月のさやけきはさせゝ云々とあり寛永の流言小歌となり長くつゝきて延寶の頃までも人口にありしとおぼしき事あり至來集延寶四年印本豊前國中津住坂部胡今撰卷三、殘暑 吹たらばよござんしよなり秋の風豊後府内高屋清文」流言なくては此句の手がらうすきに似たり

○素足はだし

はだしは裸足なり素足といふも同じはき物をはかざる事なれど近くは足袋をはかざる事をも又素足といふ故に混じてまぎらはし布衣記永正三年の記「馬にははだか足にて乗るなりかちにてはあさ沓をはく或はげけもはくなり山坂にてはすべわらじなり」又同書に「馬の拵やうは衛府の時に不_レ替乗りやう同前沓を不_レ用

此事延寶よりありしは友面が句にて明なれどそのはじめを知らず昔は實に狐の集りし事もありしなるべけれど今は松をともして狐火のまなびをなすなりとぞ

○ちいら糖

鱗形延寶六年刻江
戸什雪柴撰に曰「俳諧といつば世話をもとゝし

て新しき句合を尋て一句をはなぐと仕立るより外の習なしといへり扱はござんなりそれ程の事なればをさゝ人におとるまじものを高くおもひて彼者とつれだちさる席に出るに江戸橋の風痰を吹きるといふ前句の吟聲を聞き不斗思ふとひよりしかば是は此度長崎より下るちいらとうと付け侍れる尤名所をならべあきなふ所よりもよく侍れどちいらたう此ほどの仕出しあたらし過ぎ候ともどされたり」とあればちいら糖は痰切といふ物の類歟、國町の沙汰延寶二年寫本に「日本橋第一番高砂やがちりめん饅頭、桃町の惣惣のふのやき、兩國橋のちいらとう、芝のさんくわんあめ云々注にちいらとうは風味甚甘美なり風邪をさり氣を散じ諸病に宜しとて今専ら賞翫」とあれば延寶中よりおこなはれし菓子なれど今は絶たる歟、江

戸鹿子貞享六の巻「ちいらたふ花町鎌倉屋

○きりくすといふ小舟

前段引し鱗形に「今獨はいまだ美若にしてぬれ色かわかぬ柳裏鶯袖口とく今めきて頃日世に俳諧といふ物はやりて是をせねば人の交りもならぬやうになりゆく、もと和かの一體と聞けばやさしき道にこそ我舉ぐ屋の朝げ土手の夕を忍ぶ心づかひに袖より外の草葉の露あはれふかくいざりすとかやいふ小舟に籠たれこめはれやかならぬ心地すれど三つ股をめぐる汐先よりなほ涼風は通ひ來にけり」紫の一本天和に船はの段「きりくす 是は二ちやう立の舟にちひさきおほひしたる舟をいふ吉原通ひの舟なり」とあるに合せ見れば鱗形のいざりすは名を聞あやまりしか或は書あやまりしなるべし、きりくすをかふ籠の如くせばきより名づけし事は論なし此草紙のほかに此舟の名を載たるものを未見

○貝をもてあそぶ事

雛へ蛤貝にて物供へし事予が先年著したる還魂紙料にあり近年も又考證を見いでたり、句雲寶享保年間も
露月撰てなしは貝であるらし出居衆雛

文欣「出居衆雛

事あきらかなり、瓜作元祿四年刻琴風撰下卷、みじかくてあり
だきもの柳亭云枕のさうし實のるまで何せん稗の遊び
蔣 舉白」是等全く今の稗蔣の句なり

○茶筌賣

俳諧合祇園奉納判者季二の卷附合の句、茶筌をかざす鷹
の羽の袖作者不知柳亭曰鷹の羽の事下に見え

たり、案内者中川喜雲著寛文二年刻六の卷「十一月十二日空也忌
四條坊門西洞院のあひだに鉢たゝきの寺あり鉢たゝ

きは常に茶筌をけづりていとなみとす山科はたえだ
にも流れありて衣の紋に鷹の羽と千鳥と二派ありと
や今日は開山空也上人の御忌にて云々」

京童明暦四年刻四の巻に載
せたる圖、作者喜雲、畫は立圖
と云



山城國四季物語延寶二年刻
山雲子著六の巻に載たる圖
是鷹の羽と千鳥也
是は三昧をかざるさまなれば
衣の紋の考證に換す

檀虛栗貞享四年
乞食に馴て安き世
を知る 蚊足」
町くりだ二聲うち
ね茶筌賣 撰者其
角」是江戸の茶筌
賣をいひし也
又茶袋賣元祿十
三年刻調和撰夕
紅 夕栢や茶袋賣
の二聲目 柳繁」



人倫訓蒙圖彙七
の卷元祿三年刻



出來 齊京土産一
の卷延寶五年
刻

○王子の狐火

江戸鹿子貞享三の卷「王子稻荷云々毎年十二月晦日夜
は關八州の狐此社の前に集り狐火をともし所の人は
此日のとぼりやうよろしきをもつて田畠のよろしき
を考へ知よしなり」江戸辨慶延寶八年歲暮 明松や關
東狐年のくれ 友而」としくの句合享保二十年刻
詞しとも三三十六番左 和布刈遠し王子の狐見にゆか
ん 判詞めかりの神事は大晦日の夜半ばかりのよし
逢の西國に侍れば當國の狐見にゆかんとにや

へさす赤鯛焼かゝしといふ所あり鬼の肉に誰か鹽鯛を當はめけん、近松門左衛門作の川中島の淨瑠璃にはかいせの蓑笠とありかゝしむるの義なればせといふかたよき歟

○手無し

御湯殿上ノ日記「慶長三年二月十二日はるゝ、女中御手なしにて御ばいせんに三條さねえだめす」とあり大裡にて月水ある女を手なしといふ供御は更なり御調度にも手ふるゝ事ならざれば手ありても手なきが如くなれば如此いへりとぞ俳諧漢和牛刀木毎公編寛文十一年忍山人獨吟同十二年刻今宵逢約束ながら碍さへり有て身煩さばり無し手ノ辰」近年刊行なしたる小窓閑語寛政二年鈴木忠侯著にも禁中にて月水になりたる女を手無しといふ事見えたり

○玄様

花街の流言に僧を玄様げんといふは原ト醫者の事をいひしより起りしなり醫者には玄といふ名のおほきがゆるなる事下に引しつねゝ草に見えたり、延寶廿歌仙五年吟前句略花にいぎ貴妃のお敵の玄様と北鯤八年刻延寶中より此流言ありし故に玄宗の事をかくいひしなるべしお敵とはあそびがたきふるくもいひし詞

より出で客の事をいふ吉原つねゝ草貞享年間著元禄二年刻下巻「淺草あたりの玄色里にうかれゆき以下注坊主の事を玄といへるは彼里の言葉なり是は近年醫者坊主おほかたくろげんを付るなればかくいふなるべし」

○待乳山の常燈

紫の一本天和待乳山云々の條「此山の常燈明神奈川向より乗夜舟目じるしに乗ゆる又待地とも世の人のいへり」此書異本ありて一本には此事見えす昔は彼山に高くかゝげし常燈のありし歟又彼地の家のまばらなりし故に遠方まで軒の灯の見えたる歟不知、三上吟元禄十三年刻其角編常灯の待乳山から時雨かな 毎閑

○稗蒔

稗蒔といふ戯れいつの頃よりありし歟予がをさなき頃人にをしへられ大きな松笠を日に干てひらかせたるに稗の種を蒔きさて水にひたせば原トの如くすばみ彼種を間にとむるを暖き所に釣りおくと程なく生えてをかしき釣を作りし事ありしが近年はさる戯れをする童を見ず上に引し延寶廿歌仙に ちひさき宮の薨落イラカては 嵐亭治助嵐雪初名松笠の稗の實ばえの森深く 同」かくあれば延寶中より此物のありし

○唐かねの飯鉢

唐かねの飯鉢（鉢）今は更におこなはれず其形鐵鉢に似てくちちいさく蓋につまみといふ物あり予が知りし家に傳へもちたるが三軒ありし、一軒は予が軍學の師木下春次郎（後）平五郎（平）是木下順庵の家にて順庵の頃よりありとぞ一軒は大岡源右衛門慶安中御中間頭を勤し刻組の大縄地へ丸橋忠彌を置たる罪にて佐渡國へ流罪のときも此飯鉢は彼島へもち渡り再歸郷して家には愛度實（めでたき）なりとぞ一軒は吉原の娼家玉屋彌八に三つ四つありし、江戸三吟 小蒲團に大蛇の恨鱗形桃青かねの飯繼湯となりし中 信章

○大坂土

文政年間より大坂土といふ物にて壁を塗る事おこなはる黄に赤色のすこし柴たるものなり大坂にておこなはれしゆゑに如し此よぶか土は紀州より出るとぞ其前は名だにも知らざりしが京畿には昔よりありしとおぼし、隱簀（延寶五年）似船（撰）焉 上塗の大坂つちやつたもみち 内海守定

柳亭記卷之下

○立かやし

團水が俳諧獨鉤鎌論に云「初秋の一葉散と云は桐にであるを一葉の舟といふにいて柳に紛らはしたる句昔よりありけるよしさもあるべし惣じて是のみにかざらず案山子を鳥驚（かたち）シと一つして弓をもたせ編笠を着せさまぐ人形のある物のやうに句作りたる句あまた見えたり」といふ意はかやしは獸の肉を焼き串につらぬきて田畑へさしおき其にはひを嗅しめて獸をさくる名なり（鹿をさくるには鹿の肉、猪をさくるには猪の肉ならではしるしなしと） ゆゑにかやしといひては獸の肉に焼たる事にて人形の事にはならず人形は鳥おどしなり故に人形をかやしといふときは立（た）かやしと上に立の字をつけていへり、都曲（元禄三）前（年刻）侍がほの黒き（い）く秋 撰者言水附さむきともいはぬは野邊の立鹿驚（カシノ） 同大橋集 誰（ガ）うつゝ朱雀にちかき立案山子 如泉 鳥原のちかきあたりに編笠きてたてる鳥驚（シ）をいひしなり誰（ガ）現なき姿ぞやと詞をそへてきくべし今かやしを清音にいふはいよくその元をうしなひしなり今節分に門

柳亭記卷之上終

すでに「おのね つらの」とのみ
「巳」^イ「巳」^イ「巳」^イ樂樂樂慕慕慕墓墓墓墓

なり」とあり彫あしくて字體わかり難し毛吹草にかなはつけざれどもイコミキと讀むこと此草紙にて明なり彼歌字盡しといふ俗書は是等をよりどころとして作りしなるべし近年或人「すでにかみの歌」を「巳」^イ「巳」^イ「巳」^イみしは上^{カミ}おのれきの字は下につきをはるいの字は中よりぞひく」今は四聲字引にさへ再刻の校合わろく己と巳を誤りたるがあり又曰新續犬筑波集

春はさせ冬こそ移たまつばき 清茂「晴小袖」^{文寛}

十二年刻 水暮ふ苗代の虫や墓 政孝「此句も歌字盡

し出來てそれを取りしにはあらず前よりは等の歌はありしなるべし慕は水にあらずふなり笑ふべし、類柑子其角文集 前句略うつゝや柿に椒皮 甫盛「享保四年の印本なり當時の字體今書くに同じ此句も竹串へゆきなりに辛皮をさしたるをいひしなり又云寛永十九年印本可笑記にあるべく候を「あうく」如此書たり

○別當

神宮寺の類を總て別當と稱するは誰々も知る如くその神を守りかしく事なりそれより移りて何にもあ

れ預りて我まゝほしいまゝに取あつかふをも別當といふなるべし、今童の背神などに菓子やうの物を供しそれを取おろして喰をお別當をするといふ是なり夏の夕ぐれに飛きたる青き虫を夕顔別當と云ふは此虫秋は土にり化して夕顔の花のうちへくゝりいり我も顔にふるまふ故の名なり蝶を北越にてさかべつとうといふ所ありと近年刊行なしたる雪譜に見えたり蝶がほしいまゝに花の露を吸ふさまの酒をのむに似たる故の名ならんか又蝗を實盛といふも初は稻別當といひしを追へども去ざる長井の別當なりなどの戯れより遂に實盛の名をおほせしにはあらずや今の馬屋の別當昔の遊女の別當も此意に近かるべし守りかしくの義にてはすこしく聞えがたし、再按に才麿伊丹發句合 菜の花の世界に足ルや蛇の醉 月尋「才麿翁判の詞に「蕪菁、黃世界といふ句より出で菜の花に足る蛇の胡蝶と共に花の衢に酔てよしこれ眠りて春の富貴をおぼゆるおのが世界蕎麥の花は蜂の酒といふ詞にもかよひ云々」是享保十九年の句合翁七十九歳ばかりのときなるべし蕎麥の花は蜂の酒とは古き諺歟、蝶を酒別當といふも此類なるべし

丹羽長秀の事なり此人は米と同じ事にてなくてかな
はぬ人にて上下にいたりて奇妙の人なり柴田とは

鏡字 なり軍にかゝりやうが上手なり佐久間とは

右衛門尉信盛なりのきやうが上手にてありしといふ
事なり、義殘後覺に「信長公の旗本に矢部善七郎と
云士あり久敷仕へて諸方の働に其譽れを取り何れに
劣らぬ名高き人にておはしけるが唯心卑劣なる人に
て不斷所帯の始末を肝要とせしなり聊も隙有れば自
ら竹を破りて釘を夜晝削れり内の侍どもにも一日に
何合とて役に懸て削らせ賣程に善七釘とて世に隠れ
なく方々より買取事限りなかりけり、人々はいひけ
るは侍は侍の役ありて其高名をばげめ皆々身の上の
取上げ給ふとも此人は能職人かな、とても細工をす
る程ならば見事いみじき細工は習給はず竹釘づれを
削り給ふ事のア、かなしさ、と沙汰しけりされば京
童も是を歌に作りて

矢部の善七大名にならば竹の二股世は不思議

とうたひける善七是にも不_七止_七混_七もの削りしなり去

るに因ッて一世の間小身にて暮されしなり此書文祿の
奥書あれど
不_七善_七寛永の後に
書集し物なるべし 前の木綿藤吉の同じ語路也隆達の小

歌は此二十六字なるとさもなきとありなげ節といふ
小歌はみな二十六字なり枕のさうし七の卷に載たる
田植歌

ほとゝぎすよ、おれよかやつよ、おれなきてそ、
われは田にたつ、

是も二十六字なり語路大きにたがへり

○歌字盡

童のもて遊ぶ歌字つくしと號草紙は何人の作りしか
寛又より古き年號のある物を見ず按に昔より俗にと
なへきたりし是等の歌ありてそれへ新に歌を詠添へ
明暦萬治の頃に作りし草紙なるべし古板には第一の歌木
とあり後の板には
春椿と云々とあり 巳巳巳の三字を巳巳巳の四字と誤
りし事はやく寛永にあり「巳に上の歌」當時寛永を
正保二年刻 巳巳
りありしやうに思はる、俳諧毛吹草寛永十五年撰 巳巳
巳巳の文字が雲波雪と花 撰者重頼 同じ重頼が撰み
萬治三年に彫たる俳諧懷子九の卷に又此句を載て作
者不知とあり重頼寛永には三字なる事を知らず萬治
に至て後悔なし毛吹草に我が名を書しは誤りなりと
非をおほはんといふ仕業にやあらん、尤草紙寛永十一
年刻本
下の卷、似たる物の品々

ん「高野山おろす嵐のはげしく」と此は、も残れ後の世までも」三曉庵談話薩州山人號靜翁著に曰「高野山へ骨納の事、

弘法大師にも御山へ人骨又は齒など納置候て彌勒出世の砌皆々の手をひかれ候て御目にかくべきとの誓願に候よし

此話曲亭の隨筆にありと予はそれをおぼえずして書たり

熊坂長範事、かく

れなき惡徒盜賊の張本にて高野山には金銀澤山持候寺家多く有之と相見えさふらふ間押込財寶を奪取

べくと企てさし越候寺家皆門を鎖居候に付方々巡見致し候處幽かに火の見え候處有之是こそと駈つき候

へば老僧一人罷在候故此僧は何をいたし候やと長範問候へば拙僧は骨を守候番人なりと長範其邊を見候

へば山々は人骨又は齒の類谷を埋め候程有之故驚き何の爲にかくはおびだたしき事かなと申候へば彌

勒の出世の時大師手を御ひきなされ候て御目につかれべきためにかやうに人々納め置候由左候はいと

長範にも齒を一枚納め置くとて石を以向齒を打缺き

「高野山法の嵐のはげしく」とのははおつる後の世の爲」と一首を詠み候由惡に強き者は善にも強く候」

柳亭云三曉庵の説非なり普光院殿の御歌なるべし將軍と盜賊、時代もはるかにへだたりしを誤り記しは

何事ぞや長範は、舞のさうし、謠曲に見えたるのみ義經記にもなしまして古書には名だにも載せず詠歌の傳はるべきいはれは無きに似たり

○小歌の字數

小歌の字數は七七七五にて廿六字なるがおほし天正頃の童謠より今に至るまでおなじ又ふるくは七五四にて廿三字なり、七十一番職人歌合曲舞々に載たる白拍子の小歌「所どころにひく水は山田の井どの苗代」又曲舞々「月にはつらき小倉山その名はかくれざりけり」又十九字なるあり宗長が老のひがこと永正十四年の記に「田樂の歌に戀しの昔やたちかへらぬ老の波」是はやノ字を次の句の首につけて七七五となるべし廿六字なるは二川隨筆細川宗春著山川素石補享保十年乙巳の寫本に曰く「信長公時代作者二人とも京の醫者なりに小歌に作り諷ひしとて古老の士語りしは

木綿藤吉米五郎左衛門かくれ柴田にのけ佐久間

藤吉は秀吉の若名なり木綿といふ物は美麗なる物にはあらねど何に用ひても調法なる物にてなくてかなはざる物なり其如く藤吉は何につかひてもつかはれ自由を得て調法なる人といふ事なり米五郎左衛門は

此石像を彫し此所にすゑたるなり故にうへに着たるは上下にはあらず袖無シ羽織なり

又因果地藏の地は西の宮稻荷の玉垣の前なれどそれをもはゝからず往來の人小便をしていとむさきにより奥山の草むらのうちよりふるき石地藏をたづねいだし此所にすゑ折にふれては花など供しおきたり近きあたりの人は是を見て小便をさせじとの番人になり給ふは因果なる地藏なりとて遂には名をおほせけるが何事にもあれ因果なりとて願がけすれば利益をかうぶるなりといひ出し白木屋お駒の淨瑠璃とともにやり出たりと寛政の頃淺草に年久しく住し老人の手に語れり

○夕顔の觀音

葛西新宿渡しを越え川に添て左の方へ堤を行こと八町飯塚といふ所に夕顔の觀音といふあり今は知る人さへまれなれど元祿寶永の頃は江戸より參詣おびだたしく群集なしけるとぞ元祿十四年七月堺町中村座にて夕顔の觀音方便信徳丸といふ名題の狂言をなしし事役者金の揮ぎん印本十三に見ゆ、又寶永元年の印本夕顔利生草といふ冊子あり此觀音の利益によつて父の

仇を討し事を記せり原來の作り物語なるべけれど觀音のはやらせ給ひし證とはすべし又寶永四年印本男色比翼鳥に「毎日夕顔の觀音へ參詣す」と見え同じ頃の印本吉原一言艶談古夢羅三の卷に遊女の詞に「此頃はやらしやる夕顔の觀音さまへ米つきの六助をたのんで御園をとりにやりましたしかも十六番に當つて書つけがきました」といふ事あり則今の堂も元祿年間に建たるよしをこそ守る僧のかたれり

○歌のぬし二人

狂歌咄寛文十二三の卷「普光院彌生なかば高野山にまうで給ひ、奥の院に大師入定の室の扇を拜み給ふにも當來彌勒の出世三會の曉をや待給ふらんといいたうとく骨堂に移りてふかく無常を觀じかうがいを抜てみづからの御齒をおこして納め給ふとてかくな

のものなれど急就篇はやく渡りて高野大師の書せ給ふもありと歎されば往古は彼蒼艾色を本朝にても綴となへしのお草にて摺り蒼艾色にするの義にてしのおもぢ摺となへしにはあらずや石にて摺は則礎也かさねて學者にたづぬべし

しのおといふ字惹、如此かきて通用す漢字にも無きにはあらねどこゝにいふしのお草の義にはあらず是れ例のそれとこれとは別なる和字なるべし

○慶長の童謡

薬師通夜物語寛永二十年印本

に「昔より京童のいふ事後に思

ひあたると聞く略中慶長十八年の秋の頃より京童の門や木戸や矢倉やといひはやりければ十九年の暮秀頼公むほんくはだて俄に門木戸矢倉を作りける是も後に思ひあはせける」淋敷座の慰古今小歌集延寶四年寫本の頭書に

「慶長中頃門や櫓といふ歌はやる口傳、寛永中頃天と落し水といふ歌はやる口傳、寛永の末青いといふ事はやる飢饉口傳、慶安末柴垣はやる口傳」とあり按に柴垣の事はよだれかけ六の巻に見えたり此巻承應二年の作なり予還魂紙料を編たるころはよだれかけを見ずして誤れりこゝにいふ如く慶安のするより

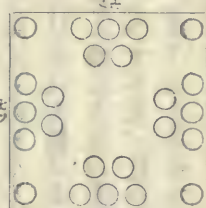
のはやり小歌なるべし、閑際筆記伊藤子著正徳五年印本上の巻「慶長中事あらんとするときは兒童の謡にいふ門城戸櫓といへり、漢の王充が童謡を論じて曰是童のなす處にあらず氣これを導くと信なる哉」

○さても其後

昔の淨瑠璃はさても其後と書出す事つねなり是、前に事ありて又其後の事を説出すやうに書けるうたひ物のみにもあらず物がたりぶみの體にもあるなるべしかげろふの日記の發語に「かくありしとき過て」とあるは則さても其後と同意なりされば舞のさうしの類にそもゝと書出すがそもゝを發語とおもひ誤りしにはあらず前にありし事をうちかへしていひ出るにて古今にたがふべからず

○平内の石像并因果地藏

たれゝも知る久米の平内の石像は後。に平内の石塔のありし故に後人の押當に名づけたるなり實は三谷あたりに住みし石屋おやぢの像なり、存生のうちやかましきおやぢにて常に袖無羽織を着、片膝たててこゝとをいふ事毎日なりその子孝心いとあつくそれをうるさき事とおもはずよくつかへ父歿して後



角ミは兩方へかぞへるその數をへらし
て一方にかぞふる中の石をふやすがゆ
ゑ四面の七ツの數はふえず何のたくみ
もなき重の載れなり

○茶の湯 たばこの煙

茶の湯と古くいひしは手業の事にはあらず茶を煎じ
たる湯の事なり今茶をのむ、茶をまゐらせよなどい
ふは湯の字を略きたるなり茶の湯をのむ茶の湯をま
ゐらせよといはざれば本來は聞えず麥を煎じたるを
麥湯といふに同じそれが茶式の名となりてより常に
のむを茶の湯といはざるもをかし、榮西僧正の著喫
茶養生記に茶及桑葉の徳をあげて「唯可^ミ喫^レ茶飲^ミ桑
湯^ニ勿^レ飲^ミ他湯^ニ桑湯茶湯不^レ飲則生^ミ三種々病^{コト}とある
にて知るべし此書建保二甲戌春正月とあり茶の湯と
つづけいひたる事はより古くもあるかたづぬべし友
人指山云、今佛に供ふるのみ茶たうといふ是なりの
ノ字を略きたるが故に湯を音によぶなり
因に云淨心入道の見聞集慶長中記にいふ「たばこの煙のむ

事、見しは今たばこといふ草近年異國より渡り老若
男女此草に火を付け煙をのみ給ひぬ云々」とあり茶
をのむは湯を略きたるなりたばこをのむは煙を略た
るなり

○かくやの香の物

或老人の話に高野山に隔夜堂といふあり二人の僧一
夜おきに守るが故の名なり此所を守るは老僧の役
にて多くは齒のわろきが故隔夜料とて香の物を坊より
きざみておくるきざみたる香の物をかくやといふは
こゝにおこれりと、按に和州長谷寺に隔夜堂あり大
和名所圖會に見ゆ彼老人の高野といひしはおぼえた
がひか又高野にもあるか知らず

○しのぶもぢ摺

急就篇 縹、緋、緑、緑、紬、皐、紫、^{ヘウライ}縹、^{リヨウクワン}緋、^{サウシ}緑、^{セセ}縹、^綴數語反、^綴音展、^{（註）}
縹青白色也、緋蒼艾色也東海有草其名曰^ニ縹以染^ニ此
色^ニ因名^レ緋云、綠青黃色也、紬即素之輕細者、皐黑色、
紫青赤也、^{（註）}縹以^レ石^ニ縹^ニ縹色^ニ尤光澤也^{（註）}縹女展反、黃氏
曰^ニ并^ニ縹石也^{（註）}

并、字典にて正すべし唐本に誤たるなるべし

柳亭云此縹と縹の註を一つに合せ見れば本朝のしの
ぶもぢ摺りによく似たり暗合歟、又案るに此註は後

五の石あそび四十二ばんにくらからず云々」姫百合のさうし正保慶安頃の作歟「まづ盤のうへの遊びにはらんだ、

むさし、こいりかね、ありやなしやの十たらず、ぬ

す人かくし、まゝ子だて、とさの入江の船ちがへ、

ひやうごわたしさがへり、さゝだて、しまだて、

目つけ石、數をつくしてぞ遊び給ひける」とあり當

時迄は是等の遊び實に傳はりてありしとおぼしく異

制庭訓に載ざるも見ゆ又男重寶記元禄年問印本に曰「毗沙門

雙六、七雙六、一二五六雙六、雙六石ハジキ拵、柳下端

無木ササキなどあり、又手なぐさみには十六目石、十不

足、百五減グシ、郎等打、盗人隠、有哉立、島立、左々

立、下半打、投壺タウナゲ、虎ノ子渡シ、三十二十のまゝ子

立などいふことあり」と載たり男重寶記に二板あり當時一本にはこの事なし當時

元禄をさす傳はらざるもありしかど前に引し二書により

て記しもあるなるべしさてかくおし並べ見るに今傳

るは少しし繼子立はつれぐ草にも見えたれぐも

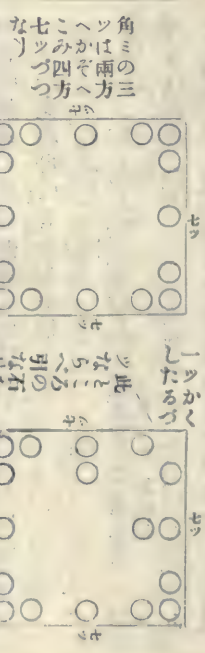
知る事なり虎の子渡シ十六むさしは童の今もする戯

なり十不足、佐々立、嶋立、百五減は勘者御伽草紙

に載てあり其ほか此草紙には種々戯れの算法あれば

前の書に見えたるもあるべけれど名の違ひたるはそ

れと知り難し、重寶記の柳下端、柳といふ事解せず
さて庭訓以下二種の草紙に見えたる盗人隠しを予を
さなき時或老人にならひおきたりをかしからぬ事ゆ
ゑ今さる遊びをする童を見ず



まづ石數十六を左の如くならべ唐と日本の國ざかひ
ちくらてくらの沖中に船あらための番所あり七人づ
つにて四方を見するゆゑ七人番所といふ此所へ盗人
八人來りわれぐ日本にをりがたし隠しおきて給は
れといふ四方七人見はりにて人數定まりておきがた
しといふ番人のうちに才覺の者ありて七人見はりを
ふやさず我隠しおかんとてまづ一人を隠す、圖上の
如し、かくの如く中へ一ッいれ角を一ッその次の中
へ引き八ッいれをばれば左の如くなるなり

り天明の頃の盲人にて寛政のはじめまで存命なりその門人川嶋歌遊赤坂一ツ木町に住す師にまさりておこなはれ寄となふる座敷へ出るに一日に金一匁當時木戸錢一人前百文づつを取りしは此歌遊と竹本政太夫ばかりなりし、其後に牛嶋登山盲人にあらすこれは又一流にて川嶋とは趣かはれり

○むてつばうイモ

むてつばうとは關東下世話にて今もいふ者あり今様踊くどきといふ小歌本に載たる諸國角力の名よせに略「うきゝのおひなげ御用木きかん十五郎むて八はよわいやうでつよいへ」といふ事あり卷中に元祿寶永の事見えたりされば當時無手八といふ角力ありて我より強きものもおそれずこれよりいでし詞なるべく思ひしがさにはあらず元祿よりはるか古き冊子に無天罰者と書たるがありむてつばうは無天罰の詠り天罰知らずといふに同じ、はや元祿の頃はいひ誤りそれを名につきたるなるべし

○梅若丸の像

木母寺にある梅若丸の木像は古く寺に傳はりしにはあらず近代彼寺の住僧諸用ありて京都へ上りし刻佛

師屋に梅若ともいふべき古き木像のありしを買來りしと或人に聞けり亡友山本晴山故ありて彼木像を親しく見たりしがかり衣ともいふべき物を着てその衣に猿を彫りたるがおぼろげに見えしと語りぬ、按に十二段のさうし古印本正保三年古寫本には異同あり牛若丸のよそほひをいふ條に「めしたるいしやうのけつかうには縫物心ことばもおよばれず中略せいかうの大ぐちにけんもんしやのひたゝれ中略菊とちには日本めいよの花むすびたるとおぼしくてさうの菊とちには梅と櫻をむすびれたりうしろの縫物にはたうどの猿をぬはせたり云云」此ことまひのさうしにもあれば彼木像は牛若丸なるべし今山王にいひしも猿の彫りてあるゆゑにやあらん

○碁石にてする遊び

昔は碁石にてする遊び種々あり異制庭訓往來に曰「然而十不足、百五減、盜人隱、郎等打、繼子立、石抓、入金、要金、重噉、小童敷、婆羅門、雙六、一居去、島立、左々立、有哉立、是於三局上之遊、尤容易者也」又寫本十二段の草紙上卷「三段盤の上の遊びには石たて、さくだて、ありやなしやのまゝ子だて、とうざい十

俳諧崑山集慶安四年印本

田のさい目しゝの角ふるや追

まはし 三徳俳諧天水抄慶安五年寫本 前句まづはき

れたり附句打續きよ目の出たる追まはし 貞

徳夢見草明曆二年 暮て行年や雙六追廻し 義陳

昔はおこなはれしとおぼしく是等の句多くあり、又

五ヶの津餘情男元禄十五年印本に「芝居の時このはやり歌二

上りの三味線にのせて拍子もかまはずわめきはお

もしろうないと追まはしのおりは雙六」などいふ事

あり

下端はいつの頃よりありしか未考、尺素往來に圍碁、

將碁、雙六、下貽オリコ、揚弓オリコ此下貽が下端の事か、もしさ

にてあらば天文申よりありしなり

下貽はオリオクレと訓するがよきやうに思はるれ

ど印本のまゝ私に改めず 雙六をうつとき互に作りはんじ

じめよりおりのみうつ おこりを知らざるなり

西名寺殿百首ちこのきやう 盤の上同じ遊びといひなが

らおりは雙六さして好まず」とあれども是は僞書な

ればとりがたし下端といふ句貞徳油かす又前に引し

崑山集等そのほかにもおほく見えてめづらしからね

ば抄せず

○八人藝

八人藝といふに似たる事漢土にては五雜俎にありと

先達の隨筆に見えたり本朝にては迄に古き事には

あらざるべし寛文八年の頃江戸の流行物を寄たる短

歌引上は還魂紙料に「よねまんぢう 大六天のかうか山

圖法師たて、かうやくやはり過たる 江戸順禮 東

ゑい山の 萬日に 窄人猿を 退治して 八人座頭

の 見せ物に 仁王之助が大力、見に来る人は 布

引の 瀧井山三が 女がた しばゐくは盛りなり

代々も豊に をさまれば申 寛文文 ぐわんぶんくゝとたの

しめり」とありこゝにいふ八人座頭は八人藝なるべ

し、西鶴一代女貞享三年印本一の巻に「萬治年中駿河國あべ

川のあたりに酒樂といふ座頭江戸にくだり屋敷方の

おなぐさみに紙帳のうちに入て鳴物八人の役を獨し

て手を合せける」といふ事見えたり萬治寛文とつ

いきたれば前に八人座頭とあるは此酒樂が事なるべ

し又近く文化某年に此業をする盲人うちつどひ八人

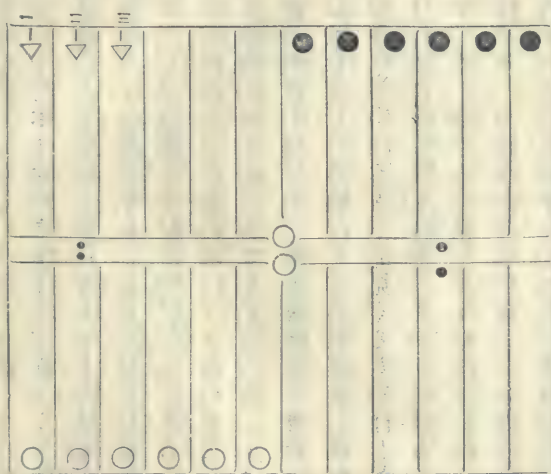
藝の祖長崎聖理といふ者の百年忌なりとて法事をな

し、事ありさばれ正徳の頃聖理といふ者のありしな

るべし近く此業のくはしくなりしは川嶋歌命よりな

とありさつとちれ山櫻のみ予がおぼえし如くなりぐ
 にん夏の虫といふは予もいひたるを忘れ此冊子を見
 て思ひ出したり此ほか此書に鰻之目、手打、かどや、
 棒さし、おりは、追曲」など雙六にかゝつらひし詞
 を寄たり此手打といふ事源氏常夏の巻にあふみの君
 が「手うたぬ心ちし侍れ」とあるこれなりおなじ條

に同じ君がせうさい／＼とのたまふもはやく絶たる
 彼口遊にはあらずや小采にては聞えがたきやうなり
 近き承應の口遊すら今しれざるが多しましてや源氏
 の頃の俗語者へうる事かたかるべし予雙六はたゞ並
 べるのみをおぼえし故にや世話焼草に記し詞解せざ
 るうちに追まはしといふ事は重のときならひたり



これば下り端だにまだふりえぬ重のするたはむれなりをかしから
 ぬ遊びゆゑ今はうつものなしついに絶べきなり
 白黒の石六ツづつ圖の如くならべ雙六の如くふるなりたとへば三
 をふれば

此石を一ツ

二ツ

三ツとくりこして△のさきへいづる

いつくにもあれ采の目の數ほどくりこして追つげばさきの石を切
 る、切り盡したるを勝とす、はじめはさきに切られたとへ一ツ二
 ツのこりてもすゑに大目なふりつづけてさきの石をきりつくせば
 勝なり

女に戯れあそびありく事をいふ故に俳諧にては戀とするなり寛永十三年印本親重撰はなび草「うき世狂ひなどは述懐にあらず戀の世になるべし」俳諧に是より古きは見えす醒翁は引おくれたりはなび草多板ありこゝに引しは原板平安紀行文明十二年太田持資みるたび

におもしろければふじの根の雪はうき世の姿なりけり」うきよの姿是則今様の姿なり文明の頃よりはたしかに一方の浮世の詞なり、散木奇歌集「皇后宮の弘徽殿におはしましける頃はそどのにて人に物申けるに女房のうへへのぼるとて道見ぐるしおはしてと女官の申ければたちて殿上の方へまかりにけるを後にまゐりやすると待けるに見えざりければかれよりおくりて侍ける おぼつかかな春の夜ふかきはなれ駒跡を尋ねんかたもしられず」かへし とりつなげみかきの原のはなれ駒浮世にあれて跡も定めず」是はたしかにはいひがたけれどあるは則狂ふなり浮世に狂ひて跡も定めずにてよく聞える歟

○雙六をうつ時の口遊並追まはし

廢れし遊びは雙六なり予をさなき頃も雙六をうつ者百人に一人なりされど下り端を知らざる童はなかり

しが近年はそれも又廢れたり、さて雙六をふるとき口遊にいふことありし五四をふれば五四と啼くは深山の時鳥、三六なれば三六さつて猿眼、又重五をよするときさつとちれ山櫻、五は櫻の花に似たりそれが二ツ並びていづるは櫻のちるさまなればなり是等は父にならひて予が童のときいひつゝ雙六をうちしなり今おもへば此口遊びはふるき事なり、三六さつて猿眼は飯をたく法「どうく火にちよろちよろ火親が死ぬとも蓋とるな三尺さがつて猿ねぶり」といふ諺のもちり口なるべし

俳諧世話焼草一名世話盡し、承應三年土佐國圓満寺の僧皆虛撰、明暦二年刻雙六の話「二

くい坊主の布施好、さつとちれ山櫻、しゝめせ坊主聲の藥に、ぐつと呑んで實をはけ、六尺をどれ沖のこのしろ、いちにほうきはうりかひの升、ぐいちかす酒髭につく、しらぐは馬にめす、十人ざりは曾我兄弟、いちちんいふぞ和田のよしもり、さい波や志賀の都、下作りは船が速い、ぐにん夏の虫、ぐしぐ腹のたつばかり、ぐにくま太郎てゝは藤四郎、その間に月はぶらぐ」

至來集延寶四年胡分撰さつとちれの雙六盤山櫻 冷笑子し

えず

昔の障子は今いふからかみなり大内のあら海の御障子となふるものなど書からかみなるはたれくも知る事なりその障子の骨にたい一重紙を張るは明をとらんが爲なれば明り障子といひしが今の障子なり俗に障子の板を腰といふその板の無きを明障子といふとはたがへり、からかみといふは唐紙に張りたる障子といふ事なるべけれどふすまといふ意更に考へえず十訓抄二卷「御使を縁にすえあかり障子をへだて、こゝに謁す」古事談三の卷美作守顯能の許に云云の條に「難色相具シテ遺タリケレバ明障子ノ内ニ讀經シテアリ云々」明障子といひし事はより古くありしが意をとめず見すごして何の書なりしか忘れたり見出して書加ふべし

○大佛をいひし諺 千度小路

梅花無盡藏文明十八年丙午冬 萬里居士鎌倉に遊び深澤へ赴く條に「見長谷觀音之古道場相去數百步而兩山間逢銅大佛一佛長七八丈腹中空洞容數百人背後有穴脫鞋入腹命云此中往々博奕者白晝呼五白之處也無堂宇而露坐突兀云々

兄在三南都一弟東福 可憐佛亦去年貧
寶趺塵蝕無堂宇 腹瘦纔容數百人

銅大佛、洛之諺云南都之半佛雲狐々々之半佛東福居士柳亭曰、南都の大佛の半ぶんなるが雲狐、雲狐の佛の半ぶんなるが東福寺の佛といふなり、三百五十餘年前の諺おのづから古雅にて前に引し口遊、三關三大橋の類をいひし口調に似たり

さて雲狐とは此深澤をいふ歟又別所なるを此大佛に比して作りし歟又同書同じ條に號此濱爲七里透千度小路謁鶴岡之八幡宮云々

千度壇連七里濱 崢嶸華表奪龍鱗

回廊六十間靈地 風不鳴條宗廟神

柳亭曰壇がつらを千度小路といひし事鎌倉志に無きやうにおぼえし故に抄出あらば闕べし

○浮世

浮世といふに二ツあり一ツは憂世の中これは誰々も知る如く歌にも詠て古き詞なり、一ツの浮世は今様といふに通へり浮世繪は今様繪なり浮世人の人みな是なり、此事醒翁の浮世袋の考にあればくはしくはいはず浮世狂といふは遊女藝子にもかぎらずすべて

の道場として諸人此寺にまうでて昔の事を聞つたへ
みなあはれをもよほし歌を詠み詩を作り侍り中略梅若
丸の墓所を見て「梅若と聞から口はすみだ川つをひ
くほどによき子成けん」是より古く廻國雜記にも見
えたれどたしかに梅若の名をば記さず名所記より後
のさうしにはあまたあれども人の知るところなれば
抄出せずさて今人口に膾炙する梅若松若の事をする
したる冊子は明暦二年の印本すみだ川物語三冊よりふ
るきは未^レ見當時あらたに作たるさうし歟或は又慶
長元和の頃の作を明暦に刻したる歟さまでにふるき
書きざまにはあらず木母寺秋の夜長物語も梅若丸の
事なれども同名異人なり鏡池妙龜庵の事も此冊子に
出づ、塚はふるくありて寺を建たるは後年の事なる
べし

○疊 障子

昔疊といひしは今の薄縁なり源氏須磨へたゝせ給は
んとし給ふ條に疊ところゝ引かへしてと見え、お
ちくば物語に三條の殿へわたり給ふ條に「げにしん
でんはみなしつらひたり屏風几帳などみなたゝみし
きたり」とあり今の如くならば疊しきたりとことわ

るべきいはれなし・人住ざるときはひきかへしたゝみ
おくがゆゑに疊といひしなり、宇治拾遺に初瀬まう
でする女の馬につけて疊もちゆくは道にそれを敷せ
て休ふるためなり今の薄縁なる事これ等をもて知る
べし、さて散木奇歌集、長明方丈記等に見えたるつ
かなみといふ物今の疊の床といふ物の類と見ゆその
らざれど此考へは先達のはやくいはれし事のよし聞
けりそれ故に唯その一ツ二ツを記し引書もおほかた
略けり、今物語「或殿上人さるべき所へ参りたりけ
るにをりしも雪ふりて月おぼろなりけるに中門のい
たにさぶらいて寢殿なる女房にあひしらひけるが此
おぼろ月はいかいし候べきといひたりければ女房返
事はなくてとりあへずうちよりたゝみをおしだし
たりける心はやさいみじかりけり」今のたゝみなら
ざるは女の力にておしだすとしるべし

古菟玖波集俳諧の部「たゝみにふな虫といふ虫の有
けるを見て、よみ人しらす 舟むしはたゝみのうら
を渡りけり、と侍るに かうらいよりやさして來つ
らん」今の如く敷つめしたゝみにてはうらの虫は見

葉の汁にて青鬼灯を赤く染るといふそれらの他用ひやうを人更に知らず、和名抄染色具鴨頭草の次に「赤莧、本草注云莧又有赤莧和名阿加比由莖葉純紫、不堪食之」とあれば此汁にて昔は物を染しなり

前にいふべきを忘れたり類聚往來は慶安元年の印本作はふるく永祿九年ならんとおもはるゝ事あり再按に越智久爲がほうご染に云「二藍とは青花と赤花にて染るなり赤花とは落葵と書てつるむらさきと和訓するなり青花ばかりにて染るは縹なり赤花を加へて染るを二藍と申なり私云青花は露草也是も根紫に對して蔓紫といふなり此説によれば落葵をもちふる事いよくふるし

○梅若丸の塚

梅花無盡藏、漆桶萬里居士詩集

木戸公號罷鉤翁、得保和歌之正脉、余在洛而聳聲譽久之矣、今也共寓武野之佳境隅田之上流、往還無虛月、豈非天之至幸乎、昨賜詠歌三篇可謂叔假恐授字上脱暗字也、聊奉攀末篇之韵脚云

二十六日私云文明十七年乙巳十月二十六日也

雪月寧非老年伴 一吟聊答數篇韻

隅田春色浪如花 鳥若知都我細問

自注都鳥隅田之故事也、河邊有柳樹蓋吉田之子梅若丸墓處也其母北白川人此前に十月を小春と記してあり故に春色と作られたるか

柳亭按に梅若丸の事は原來空談謠曲に作りしがはじめにて其謠曲によりて好事の人此所に墓をきづきしなるべし京五條に夕顔の宿の古跡あり是源氏物語によりてのつくり事なるは論なしそれとおなじ類ながらはやく文明の頃より梅若塚ありし事はこゝに見えたり

淨心入道見聞集慶長十一年記「角田川一見の事 扱又角田河

の寺の庭に謠に作りたる梅若丸の塚としてしるしの柳あり見物衆は塚のあたりの芝の上に圓居して歌を詠じ詩を作り酒もりする云々」色音論寛永廿一年即本「何とうきよにすみだ川梅若丸の墓じるし柳櫻をこきませて今に絶せぬ念佛の耳にそびえてあはれさにこゝろなけれど梅若のあととぶらへるししかと六字をおきてかくばかり なばかりはむめ若丸とあとにのみはさきだちてふるつかとなる」

江戸名所記寛文二年即本「角田川 此川の岸近く梅若丸の墓ありしるしの木は柳なり三月十五日緣日也不斷念佛

ど庖丁とのみ書てふるくより又物とするがゆゑに今更に庖丁刀とも書がたく鉋の字を作りしなり又延寶八年西鶴獨吟後の大矢數に塋、にんじんとよめり人參と書ては藥とまがふがゆゑ食料のにんじんの字を製したるなり柳亭按に瓜に紳を加へたるにはあるべからず、藤字を略て藤に作りしなるべし、其例をいはず糸はかたといふ字なれど、絲を略ていととの字に通じ用ふるなり



如此なる燈臺それ

かれに見ゆその名をアゴタといふとぞ今京師の或卿（殿）
の御家に古き物傳はりてありそれにてはじめて名を
聞しと友人柳庵の話なり彼あごた瓜を剝（む）たる形に似
たるゆゑの名なり

○舞樂の不審

和名抄、曲調類高麗樂の曲の條阿夜岐理の次に、
波、韃切ハサキリの柳亭曰二曲の名に記す 口遊天祿元年爲憲著 阿志波阿也岐理あやぎ
みいふ曲別にあれば阿志波はついでよみて一曲の名なり 阿夜岐理、阿志波阿也岐理に
て二曲の名なるを下のあやぎりを韃切と寫し誤り阿
志波を一曲の名にしたるにはあらずや爲憲は順同時
の人ながら和名抄より口遊は少し後の作なるべし今
幸に六百年に近き古寫本の傳はりしかば和名抄程は

亂れざるやうにおもはる又和名抄啄木の條、保曾路

久勢利是又二曲
の名とす

口遊に保曾呂久世利一曲の名とす

案摩と陵王の下に有囀といふ事、和名、口遊、ともにありさへづる、くせる、同じ詞也、久勢利とつゞけ讀て一曲の名とする方、是なるべき歟、拾芥抄は此口遊より書拔せ給ひしものとおもはるれど、はや當時是等の樂は絶たるもありて讀むづらひ給ひしか、唯安夜岐利とのみ記されそのほかははぶかれたり

○紫水
赤莧

紫水といふは蔓草の實の汁なり、凡巾燈籠の類の書を
いろどるに色よくしてさめやすし露草の花を藍に似
する類なり草の色は落葵ラッキといふ本草の葵部にありと
ぞ今の俗は草をも紫といへり此紫水文化のはじめの
頃より商ふその前は更に知らざりしが昔は繪の具に
用ひし物にて中頃絶て人知らずなりしなり、新撰類
聚往來書の具の條に實紫と記し露草もその下にあり
根紫に對してかくいひしなれば彼の草の實なる事明
なり、又近年赤莧セウを植る者あり雁來紅に似て人丈ば
かりに生のび常の莧より葉形も大なり梅の實を漬る
とき紫蘇にこれを加ふれば色をよく出すといひ莧は

かげろふの日記古寫本上の卷「さて又野わけのやうなることとして二日許ありてきたりひと日の風はいかにともれいの人はとひてましといへばげにとやおもひけんことなしびに「こののは、ちりもやすると、めおきてけふはみからもとふにやはあらぬ」といへば「ちりきてもとひぞしてましとのをはをこちはさばかりふきしたよりに」かくいふ「こちといへばおほぞふなりし風にいでつけてはとはんあたになたてに」いて、印本いかでとあるがよき歟まけじ心にて又「ちらさじとをしみおきけることのはをきながらだにぞけさはとはまし」かくありおしならべて見るに寫誤ともおもはれずおほぞふなりし風に、ばつとした風につけてとは、あだし名もちらんそれゆゑとはずといふ歌の意も聞えしやうなり源氏の大ぞうはたれ／＼も知る事なればいはずさて此詞寛永の頃まではつねにいひて語譯にも不_レ及聞えしとおほしくをり／＼俗書に見えたり、貞徳著御傘の序に「俳諧の新式なんと申書もや侍らん似あひたる名も代ばやと思ひめぐらすに心に適ふ名なしだゝそなた次第と外題にかゝむといへばかたへの小性すゝみ出て曰それはげにもながらさりきら

ゐの事にあたねばあまりにおほぞうにや候べき云云」貞徳の意は我が定めたるさりきらゐを用ふる人は用ふ給ひ捨る人は捨給へとてそなた次第と書名をよばんといふなりそれを小性がそれはあまりにばつとしたことにや候べきとゝがめたるなり是のみにあらず當時までの冊子にはそれかれに見えたり

○瓜の字 庖丁刀

嘉祿三年山口祭記に「以_二阿古太能_一作_二壹能_一居_レ之_中朱懸盤酒肴菰鯉也」と群書類從六卷にあり原本かな無し予此頃まで此能の字不讀、筆耕を書し人も讀がたかりしとおほしく書改めて入木なし菰能二様に作れり靈異記改正に「菰即貳字茭瓜俗字見_二于祿字書_一按瓜與_レ瓜字體相近易_レ混故加_レ艸以_レ分_レ之世說文雕菰非_二此義_一又按本草和名作_レ菰、新猿樂記作_レ低皆筆迹小異耳醫心方亦瓜作_レ低菰能_レ字の誤なる事明也近く俳諧につかふ字に此類いとおほし其一ツ二ツをいふべし寛永五年徳元千句の自筆の寫に匏丁、誰々も知る如く庖はクリヤなり丁はヨボロと訓して下男なり庖丁とは臺所をはたらく男の事にて刃物の義に非ず故に四條流庖丁書_{長享三}等には庖丁刀とありされ

りて數をさだめ此趣向をまうけたりと或人の隨筆にありと」されば古く物の數に鑑目を用ひし事のありしなるべし

○髮の油

日本靈異記中の卷「故京元興寺之村々嚴脩法會奉請行基大德七日說法、于時道俗皆集聞法、聽衆之中有二人、髮塗猪油居中間法、大德見之噴言我甚異哉、彼頭蒙血女遠引棄、女大耻出罷、凡夫肉眼是油色、聖人明眼見視完血云々」是話今昔物語にあり語にありはやく千年の昔より草木の實の油は生平に髮に塗りしなるべし故に凡夫はその油と見てあやしまざりしなり

和名抄容飾具澤アブラワタ釋名云人髮恒枯悴以此令濡澤也

俗用脂縣二字阿布良和太按に水油を綿にしめし置て其

を髮へぬりたるなり故に俗に脂縣の字を用ふ、その

證菟玖波集文和五年撰俳諧の部 あぶらわたをさしあぶ

らにしたりけるいとかうばしく匂ひければ、上西門

院兵衛「ともし火はたき物にこそ似たりけれ」待賢

門院堀川「ちやうしがしらのかやにほふらん」とあ

り、さし油はともし油へさしそへしをいふ歟あぶら

わたしは水油なる事これにて明なり髮につくる物ゆゑにほひをつけしものなるべし今いふ梅花の油に似たりされど水油を髮につける事中昔は絶たりその事は別にいふべし

因に云、天明の頃上總國市原郡の女がうたひし唄・君を待夜は夜がながき髮の油を八皿たてた」八は例の彌にて古調なる小歌なりたてつとうたひなばよかるべしと父の笑はせ給ひしを此ごろのやうにおぼえしがはや五十年の昔にて予が七ツ八ツの頃なり

○大ぞう

大ぞうといふ詞は字音なる事論なしその字はさまざまの説先達にあればその是とおもふにより給へ俗語のぼつとしたといふ程の事なり是は和學者の考へ給ふことにておのれがいふべき事にはあらねどかげろふ日記の歌にあるを今の本にあやまりてしるしたりそれと契沖が古寫本によりてなほしたるを契沖が私になほしたるところえ學者のとりあはぬがなげかはしく予が得たる古寫本を左に抄出す契沖が見たる本とも又異同ありてらしあはせて見給ふべし

はざる事なりしが承應元年若衆かぶき法度となり小
年の前髪を剃おとし、刻彼方言によりたるや是を野
郎と名づけしより遂に前髪なき男子をばかぶきもの
ならざるをも如此よびならはせり字はたゞ假りたる
のみにてやらうの語釋未考、寛永五年齋藤徳元獨吟
千句 前島津がものは喧嘩このめり 附さつまが

たやろふは人といさかひて 是若衆かぶき法度に二
十五年程前の句なりさればはじめにもいふ如くやら
うといふ名かぶきにはじめて起りしにはあらず、よ
だれかけ六の卷^{承應二年刊行}に曰「いつぞや若き公家衆の

仰られし詞にしろうるりのなつりにてなどのたまひ
し事のおぼつかなくて或人にたづねければ奈利とい
ふは地獄の事なれば野老の住家を地獄谷といふなり
しろうるりと仰られしも野老の事なるべし代をもと
めて商ひにするなれば代にて賣るといふ和訓にや侍
らん又學徒のいひしらふ詞に洛川といふなり地獄に
落入ぬる者はうかぶ事なければとて彼のしろうるり
が柄の淫肆を地獄谷とはつけたるなるべし云々」又
同卷に「ところ／＼に法の掟つよくなりいはけなき
子をもみなおよすけたるさまにつくりなしまへ髪を

とり額に角入させられたる事にはなりぬ略中販き若衆
をしろうるりといふ名は御所方よりいで、洛川とい
ふは所化方より出で、やらうといふは町かたよりい
ひ出したる略名にぞ侍る、やらうには源氏に屋廊と
いふ事のあればみちも細殿のやらうに似たればとて
屋廊と書くとかたる人もあれど若道は人の老をやぶ
るといふ故事をふまへいやく老をなすの心にて野
老と書くをよしといふなり、又或人のかたりしはや
らうとはいやくしきをさのいの心にて野良と書くとい
へり云々」如此當時は白うるり洛川などいふ異名も
ありしなれどたゞ野良の名のみ今に残れり

○白魚をいくちよばといふ事

白魚を一ト樗蒲といふは廿一筋なりしが故なり廿一
は簗の目の數なり川柳點の前句に「佃島女房は廿筋
かぞへ」女は吝きがゆゑ一筋すくなくかぞへたる人
情をいひしなり此句安永の頃の吟なれば當時までは
廿一筋なりし證とすべし今はおしなべて廿筋となり
て樗蒲の義聞えず友人美成云「四十二の物あらそひ
といふたれ／＼も知る冊子あり四十二は雙六の簗の
目の數にて双六は勝負を爭ふ物なるが故にそれによ

じ朝びらく朝びらかんなどはたらく詞なるべけれど
朝びらきとのみいふやうなりとてかの人^は又江戸に
ていはざることをはじめて知りしとめづらしがり
ぬ、是によりて思ふに船は夜は泊り夜あけにいづる
けしきのよきがゆゑあさびらきといふことを船にの
み詠み此義にはあらざれどひらきに乘るといふ詞の
船にあればふとそれにおもひまどひ眞淵^{まづみ}ほなる國
學者もあさびらきはあさ船を乗りいだすことなりと
いはれしはわろし夜^よのあくることにてあさばらけも
此轉語なること必せり冠辭考に合せて見給ふべし證
歌はかの書にゆづりてこゝに載せず

○ひちちか つちゝか

源氏みをつくしの卷秋好の中宮の事をいふ條「かし
らつきあてにけだかきものからひちちかにあいぎや
うつき給へり」細流に「ひちちかは人近^{ひぢ}かなるやう
なる體」とあるはあしゝ又とこなつの卷近江の君の
事をいふ條に「かたちはひちちかにさすがにあいぎ
やうつきたる方にて」細流に「泥土^{ひぢちか}近也」とあるは
よし、如此同じ細流に二様に注をされしは近江の君
をばそしる詞ゆゑひちちかの詞はやく聞え秋好の中

宮をばほむる詞ゆゑにきこえかねしなるべし、俗語
にていははやくしらつき髪のかゝりあてやかにけだか
きものながらつんとばかりはしてあらず泥土^{ひぢちか}近に地
下の女に近くごじよさいがあらつしやらぬあいきや
うものだと^ひ中宮をほめたるにて同じ詞なり、近江の
田舎娘なるゆゑかたちはひちちかに、姿は泥土^{ひぢちか}近か
にいやしけれどさすがにあいぎやうはあるはうだと
いひしなり今土百姓、土町人、遊女のことを泥水など
みないやしめていふ詞なり、そのいやしきへ近きが
ひちちかなり、中宮をひちちかといひしは下情に通
じ給ひしをほめたるなり、鴉鷺合戰文明八年一條禪
閣御作と云ふは
鳥を人に比へし物語にて法勝寺の塔鳩僧都俊觀が詞
に我等が一名字中略つちくれ鳩の藤太豐業おもくれて
は候へども打見には莫大かはりてかへくしく羽飛
候中略近年田舎のすまひにて農業を事として世間のや
うはばつくくん心やすくなりて候生得の風情土ちかに
して塊つくれ今一本作斑鳩いふ土鳩といはれ云々」土ちかびち近同
じ意なり

○野郎

男子の事を野郎といふ薩摩國の方言にて他國にはい

裏へ押すを裏判といふ意に同じ袖判は前のところへ押すものとぞ此事は先達の隨筆にありてめづらしからねど右に引し庭訓の注にて室町家の法式の明なるがゆる童の見ん料に左に抄出す

「御下文自_シ將軍_ニ給_ニ所帶_一時先肩下云字書其次如何様之依_ニ忠節_一何地如何程出書_ニ分限_一判袖陶給也、又御教書將軍管領奉行衆談合遣狀也、自_ニ本馬殿_一出狀也、摠自_ニ將軍_一出狀_ニ也、御教書奉書内書也、此内御教書賞_ル統也、奉書將軍得_ニ御意_一奉行人我名判居我則與方小奉一字書出也、内書奉行不_ニ談合_一將軍意計遣也、御下文御下文云三字書其下御判有、自_ニ國司_一出云_ニ奉書_一自_ニ守護_一出云_ニ導行_一自_ニ代官_一出云_ニ打渡_一者也」

こゝにいふ奉行人は今の頭支配なり御意のおもむきを云書判をすゑて組の者へあたふるとき奉といふ字をちいさく書くなり是は私用にあらず御意をかうぶり奉りしといふしるしなるべしその事たえれば御奉書といふ意是によらでは聞えがたし

按に打わたしは
今いふさし紙歟

因に手紙の事をいふべし
字を書く事を書くといふより思ひゝがめて手紙

は字を書く紙の事と思ふものもたまゝはあるめり、手とはそばまはりへ常におく形のちいさき物といふ手箱手擔子の類くさゝあり手紙もかたはらへおき萬事につかひ捨るの雜紙字をかきて他へおくべき物にあらず心やすき方へ乍略義以手紙あるひは取あへず以手紙などいひやりしにおこりしなるべし妾を手かけといふも常に傍にをらしむるゆゑにやあらん

○朝びらき

奥州會津の産_ニ二瓶酒造_一といふ人天保九年はじめて江戸へ出たりしが其主人の館近きあたりに火の事あり十日ばかりありて予が家へかの二瓶が來りしとき予問ていふ「いつぞやの火事此邊へは夜ありに近くなりて知れましたがはじまりはまだくらいうちてござりましたか」といひければかの人答て「お江戸のあけ六ツはけしからずはやうござりますがちやうど在所の六ツ頃でもござりませうしたくをば_{大事へいづる}ちやうちんでいたしたがもうそのうちに朝びらき_{したくなり}した」といひしがめづらしくよく聞しに會津にてはつねにいふことばにて夜があけたといふにおな

國にても常に調したるがその事絶てたや稻荷に供るのみその古風の残りしなり（見榮（ヒエ）も今は喰はずだ蟻祭のみに用る此類なり） 酢みづかりは酢むつかりの訛なるべし

宇治拾遺物語に「是も今は昔慈惠僧正は近江國淺井郡の人也叡山の戒壇を人夫かなはざりければえつかざりける頃淺井の郡司はしたしき上に師壇にて佛事を修する間此僧正を請じ奉りて僧膳の料に前にて大豆をいりて酢をかけておく、何しに酢をかくるぞと問ければ郡司曰あたゝかなる時酢をかけつればすむつかりとてにがみてよくはさまるゝなりしからざればすべりてはさまれぬなりといふ、僧正の曰いかなりともなじかはゝさまれぬやうあるべき投げやるともはさみくひてんとありければ、いかでさることあるべきとあらがひけり僧正勝申なばことゝくはあるべからず戒壇を築てたまへとありければやすき事とて煎豆を投げやるに一間ばかりのきて居給ひて一度もおとさすはさまれれば見るものあさまずといふ事なし柚のさねのたい今しぼりいだしたるをませて投げやりたるをぞはさみすべらかしたまひたりけれどおとしもたてずやがて又はさみといめ給ひけ

る郡司一家ひろきものなれば人數をおこして不日に戒壇をつきけりとぞ」とある是なり今も片田舎にては柚の汁にて鰯を調し長崎にては橙の酢のうすにがきをよろこび物にかけて喰ふと聞けり昔大豆にかけしも人の氣むづかしがりあるひは泣などするをむつかるといふも顔のしかむゆゑならんといふは友人北村氏の考にて此すむつかりの事瓦礫雜考に細はし、にがいといふもしかむことゝ聞ゆ俗にゝがみばしりしといふも皺面の事なるべし

○醫の門を開おく事

庭訓往來寫本古注「藥醫門は左右に二ツの柱を立て上を重く地伏（フツ）の木に銅をくるみ地に埋るなり屏無きなり、言は醫者の所へは往來限り無き其義を以て屏無きなり」今も醫者は常に大門を開けおくは此謂なり此注猿樂の條に今の世の宮王といふ事あり此宮王は千、利休の外父なり是にておほよその時代を知るべし次に寫本庭訓と記すもの則此書なり

○袖判 奉書 附、手紙

文書の紙の前後白く書殘したるを袖といふ門の左右を袖塀といふ類なりそこへ印を押たるを袖判といふ

らするよしはまづわかとのゝ小者ちうげんともおぼしめせあしくは又庭のちりとりともなされ候へや云

云」按に日本今昔物語に行基菩薩學佛法導人語に「行

基菩薩は前の世に和泉國大島の郡に住ける人の娘に

て御口口けり幼稚也祖父母是を悲みこの間する事か

ざりなしと云かるに其家に仕ふ下童有り庭の糞取棄し

むる者也福田丸といふ云々」とありこゝに見えたる

糞取則ちりとりと訓する歟淨瑠璃は慶長元和頃の作

なり當時までは古書の残りしにやあらん心おぼえ此書尾陽石井氏の蔵書より抄出他本にて校合すべき事

べし眞淵雜錄に「あをだてふ物は今の四ツ手かごて

ふ物の類にや今昔物語に侍し又あるものに將門の軍

事書たるに權頭興世が半死半生に成たるを箆に乗て

將て來ると書たりし」あをだは原編板アキイタなるべしを

はぶき音便にてあんといふ元祿の頃まではをりく

かなそうしに見えたり、あをだもその音の訛たるに

て同物なる事論なしかの溜洲にていたくわづらふ者

を籠にて作りたる長櫃のやうなる物に寝ながら乗せ

て昇ゆくその注を今にあんだといへり、和名抄刑罰

具「篋フイ與漢書注云篋與上乃音賴和名阿美以太編二竹木一爲ノ輿也」と

あるを思ふに罪人乗するが原トなるゆゑ前にいふ如く今に留寶より出る籠にのみあんだの名は残りしなるべし、左に抄出するは常の山駕籠やうの物をあんだといひし證なり

(慶安より萬治中迄の雜記)「朽木民部殿へ山田勘左

衛門參候とて路次にてあんだの底ぬけゝれば民部殿

當世の小歌に似たる乗物や底つんぬげてあんだ辨

慶」野郎の虫明曆年中印本の序に「それは四條川原のかぶ

き子の事にては候はぬかといへば大手を拍て笑ひて

中畧彼やうぼうのどろくまなこにたらされて芝居

をはれば東山にともなひあんだのり物にのせられて

云々」一字幽蘭集元祿五年印本治徳撰 錢龍賦寛永二年印本百里撰

○酔むつかり

我外母の生れし家は永正年の系圖を藏していとふる

き家なり山本何某とて下谷に住す俗にいふ鴈組の興力なり此家に

て二月初午に煎豆に酢をかけたるを稻荷に供すその

名を酢みづかりといふ此こと江戸にはめづらしけれ

ど近くは大川戸越ヶ谷の東下總野田の邊りにもあり上州

にてとさら多く寺院にては酢に醬油を加へ大根おろ

しをかけて平日の食料にもするとぞ是昔はいづれの

忠信と妻をはむるは字義にあたれどもいふ人なく
女房孝行と夫をそしるは字義にあたらざれどいふ
人多し笑ふべし

○牢溜

獄につながるゝ者病あれば別所にうつさるその牢を
溜といふ是は溜簀の簀を略ていひ來りしなり溜簀は
食料の魚を養ひおく所なりされば牢を溜といふは人
の生洲イヌといふ程の事なり庭訓往來古印本抄、淀鯉の
條に「是又誰も知るなり簀を連ねて河に立て鯉を放
つなり淀のつなぎ鯉是なりタメスにせよといふ詞是
なり人の科を免すにはあらねども時刻を遷すを云な
り」この抄寛永八年と明暦元年と二板あり作は天正
の頃のものの歟未詳い印本とことわりしは寫本に
て傳はるは是と別本なればなり

○ちりと

軍書讀の古老燕普子に問、軍物語に連歌師紹巴ちり
に乗て來るといふ事あり駕籠の事とは聞ゆれど四十
年來たしかなる證を得ずと、予答、寫本にて傳はりし
書なればちり取の落字かあるひはちりとのみいひて
當時は聞えたる歟ちりとりは山駕籠又皿駕籠などい
ふ物の類なりし今ボロ箕といふ馬糞をとる物昔の塵

取なりその形に似たりし故の名なるべし、印本三人
法師に「ちりとりいつちやうとすばかりるやかに出
たちて」とあるは駕籠かく男のりゝしく出たちしを
いひし也此冊子室町家の頃の作といふ寫本にて傳
はる異本二種ありこゝに引しは印本なり又師門物語

寛永の物歟寫本
作は天正頃

上卷に奥州のあづかりもちするといふ

長者鹽釜明神へ夫婦連だちまうづる條に「然ば其日
にもなりぬれば御輿をつま戸の口へたてならし女房
だちのちりとり付て十六ちやうこそかきするたり」又
娶むかへの條に「さる程にこしかきの物どもつま戸
へめぐりつま戸へちりとりの輿をかきするゝたて
ならべ云々」こゝには手輿といふを略きて書きたり又前にも引し
り下巻にも又ちりとりのみあり庭訓往來の抄に手輿てうり可給御迎也の條に「手輿は輦
ちりとりなんどの類なり」とあるをもて證とすべ
し或人の曰昔は尿をちりといふ塵取則馬屎さらへ
の義なり今廁をくみに來る男を掃除といふもちりを
除く故なり此説よしやあしやは知らず前に引し無名
字書、尿アチリとあり尿はクソの字なりチリと訓じ
たるは或人の話に合へり又六字南無右衛門が作なり
といふ淨瑠璃あみだの胸割に「心にかゝることゝて
はあのをさなき者ばかりなりあれを長者さまにまゐ

ふべし往昔の箸の製作は今の如く精しからず木にもあれ萩にもあれ折りてもちしものなりされど長短なく對に折り二本にかざるものゆゑに唯兄弟二人なるを箸折といふなりかゝみを屈とおもふはわろし鏡なりその面の鏡にうつりしが似たるをいふ、源氏物語常夏の巻に内の大臣が御女の近江の君を見給ふ條に「とりたてゝよしとはなけれどこと人とあらがふべくもあらずかゝみあはせられ給ふに云々」こゝぞといふよきところはなけれどおれが子ではないとあらそふべくもあらず、おれに似てゐるとおぼしなり

是によりて思ふに鏡の御影といふも圓窓のうちに畫たるがその名にひかれて後の世のさかしらにてよく似たる御影をしかいひしなるべし今の俗に兄弟なんどの同じやうなる衣を着たるを見て神酒徳利のやうなりといふ事なり箸折りといふに同じ意なり

○まめといふ詞二ツ

雅言のまめ／＼しく、まめだちてなどいふは誰々も知る如く忠、あるひは信の字の意也是より轉して俗言のまめ／＼しきは何事もうちおかすくれ／＼とは

たらく事にて筆まめ口まめなどの類夫よりうつりたる詞いと多し無住雜談集に「昔或山里ニマメ祖物グサ祖トテ隣家ニテ栖ケリ、マメ祖ハ朝夕田畠作り大豆小豆粟ナドマデタノシク持タリケリ、或時畠作り草臥レテ居眠リシタルヲ猿ドモ見テ佛ノオハシマス供養セントテ薯蕷^{ヤノイモ}野老栗椎ナド多ク持來リテ山塚ノ前ニ取オキテ去ニケリ、フス／＼負テ歸リ又物クサ祖ガ姥セガミテイフ、ヒタ、レ裝束カリテキテ行ヌ、猿來リテイザゴノ佛河向ヘ具シテ行テ供養セントテ手車ニノセテ山河ノ早ク深キヲ渡リケルガヤレ袴カキアゲヨトテ尻毛ヲカキアゲケルヲカシサニフト笑ヒタリケレバヤ、人ニテアリケリトテ河ニナグ入テケリ、衣裳ヌラシテ水一ト腹ノミテ死ナヌバカリニテ歸リテケリ婆イヨ／＼ニクミ腹立ケリヨシナキ物ノマネスベカラズ」とあり

まめぢ／＼かのはたらくをいひし事物ぐさ祖に反對したるにて明なり五百餘年前の昔ばなしなれば俗語のまめもいとふるし

因にいふ忠を主につかふる事とのみ思ふがわろし妻の夫にまめ／＼しくつかふるも忠也されば亭主

りあげてくれのあしだはきてさい杖つきて布の直垂きて立たまへり馬車にいさほくつみてもてきたりあづかりどもよみとりて棚にすへてうる」とあり此く

れといひし木末^レ考例の癖案をまづ記して人に問なり、皮も削らざる雑木の切餘り剥屑木端などの類をおしなべてくれといひしやうにおもはる、くれのあしだは俗語にいはなんだかしれぬ木ッ切^レのあしだ、屋根板の事をくれといへばはぐりくづなどの意薪をくれといひしもおして知るべし、下學集に「樽日本俗爲^三葺屋之板^二不^レ知^三本據^一」字書曰樽桑神木日所出也」とありこゝに字書と記したるは説文なるべし、山海經東望^三樽木^二淮南子朝發^三樽桑^二などあれども此の木の義にはあらず樽^クと訓するは全くの假字なり又古寫本におほく樽に作る樽に似たる和字歟、菟玖波集^{文和五年撰}俳諧の部 前句いそやの庭はくれになりぬる」附句 浦に又ほす薪をもとり入れて」前の暮を樽にとりなして薪とつけ給ひしなり、今材木の切餘りを鼻くれといふ則是なり^{黒といふは誤}くれ縁も雜木にて張し縁をいひしなるべし屋根板をくれといひしは諸書にあれば抄出せず又くれといふ事を歌に詠

たるもいとおほし^{いづれの集に見えたるかはじめなるよし考へて後しらすべし}あしだはあししたの略といふが先達の説なり又新撰字鏡に屐鼓の字を阿志加太、木久豆と訓するは足形にて沓の事なり足したの訓とは別なり

○ひらかけ

辨慶物語^{室町家のしゑに作りに}辨慶が酔て寝たるところへ大衆よりあひ辨慶の顔に落書する條「左^ミのつちにひらかけをかきて 辨慶はひらかけにこそ似たりけれ目よりはなさばすけてはかばや」ひらは平なるべしこれげたの類の物か此書のほかにひらかけの名を見ず、同書辨慶のいでたちをいふ條に「ちやうけんの衣にせいかうのけさをかけぬりあしだをはき長刀杖につき云々」^{十一卷}塗あしだも又ふるくよりあり

○箸折り鏡の兄弟

箸折り鏡の兄弟とは今もいふ諺なりこれは唯二人ある兄弟にてよく顔かたちの似たるをいふ也、倭訓栞に萬葉集を引て「父母ノ成シノマニ」箸向フ弟ノ命と見えたり箸は一對なる物ゆゑにしかいへり」とあるはよしのみといへる考のたらざれば細しくい

に茶席に忌む革をいかでか利休がつけはじむべきさ
て百年前のかなさうしにせちだとかきしがあり／＼
あり今の田舎にてはしかいふ所ありと聞けりせきだの訛りならんとおもひし
が今考ふればせきだのかたがせちだの音便にて革を
はくるは世智辨者の仕業ゆゑせちだといふが正しか
るべしそれをせつたといひならはし遂に名義を失ひ
しかば好事の人雪踏の字をもちひそれが通用となり
その字義によりて雪中に着く料なりといふ附會の説
はおこりしなり

雪踏の熟字は下學集に踏雪、桂川地藏記弘治二年に雪踏と
あり是は四ッ白と訓じて四足の白き馬の名なりこの

義には非ざれど此字を假用したるやうにおもはる、

異制庭訓往來、踏雪類從本百四十八和名抄屬唐韻に云音丁
今按二下賤ノ人以牛皮補著補履下一也とあればたちばな
屬下云太知波女宜用此字乎

といひし皮をつけし履物もありしなれば中昔は絶た

る歟物の本にて見ず茶席に用ひし事をさらに見る事

なし踏雪馬和名抄中卷ノ十一贈馬の注再按に貞室の著かた言なほし

印本慶安三年四卷に、雪駄をせきだといふはわろしといへど苦

しかるまじき歟せちだせつたなどいふは耳に立てあ

しく是はまた無下に近き頃京の者が作らせてはき侍

りしを利休と云し茶の湯者世にひろめてはやり出侍
りしとかや竹の皮には自然と般若の文字の侍るとい
ひ傳へて笠などにはせしかど足にはく物には昔チツの用
意ざりしを未の代にはいろ／＼のこと改りて古風を
うしなふことは是にかぎらず」といへり

柳亭曰是には革をつけし事見えす名は今にひとしけ
れど竹の皮草履なりされば茶湯のときはくまじきも
のにもあらず此説に今までもちひざりし竹の皮にて
つくりしは世智辨者の仕初しなるべければせちだの
かたよかるべし貞室も苦しかるまじき歟とうたがひ
てたしかに定めかねたり

枕のさうし九の卷人の家につき／＼しき物の段「又
きよげなる童女などの袖いとあざやかにはあらずな
えばみたるけいしのつやゝかなるが革に土おほくつ
いたるをはき云々」けいしの文字は知らざれども革
のつきたる草履の類なる事はよく知らる下賤の人の
みにもあらねば童のはき物には革のつきたるがあり
しなるべし春曙抄廿四ウ

○樽の足下

うつは物語第二「さむらゐども畠つくるおとゝくゝ

晝破子といふ今云晝辨當なり」古事談三の卷無動寺
仙命上人の事をいふ條に「智得と云ける法師に往來
一部を預て一日三度時をして指入ければ食して不斷
念佛をのみ給けり、無住著難談集三の卷「泉涌寺ノ
申ス歟印本如此シハ舍利佛ノ一搏食ノ事ヲ律ニ一傳食水
以足レ之ト云ヘリ五穀水味殊勝ニシテ人ノ器強キ昔

ハ尤可レ然末世ニハ人弱ク五穀又氣味ナシ持齋シガ
タカルベシ四五度モ食スベシ此義耳ヨリ也鑒眞和尚
日本へ渡給ヒタリシ昔ハ寺々只一食ニテ朝食一度シ
ケリ次第ニ器量弱クシテ非時ト名ケテ日中ニ食シ後
ニハ山モ奈良モ三度食スタノヲバ事ト山ニハ云ヘリ
未申ノ時バカリニ非時シテ法師原坂本へ下リヌレバ
夕方寄合テ事ト名ケテ我レ我レ世事シテ食スト云ヘ
リ」とあり、是書嘉元二年三年の昔にて今より五百
三十餘年前なり當時はまだをしなべて三度は食せざ
りしゆゑにかく記しものなるべし

こゝろおぼえ 誰人歟の説に「五節供といふは俗なり五節と歟又
上巳端午なんどいふべし供はその式日によくる食物の事なり」
とありしやうにおぼえたり、お事はじめ、事納めの事も食物のこと
にかあらざるやいと煮はその日に調する物ゆゑにお事煮歟

又同書四の卷に醫書のうちに云々とある條に「旦ヨ

リ午時マデハ恣ニ食スベシ未申ノ後ハ食ヲ減スベシ
夜食尤脚氣等ノ諸病ニ不調事也然ルニ世ニ有テ大ナ
ル人ハ終日ニ出仕シテ晩ニ及ンテ歸リテ種々ノ美物
ニテ飽食シ云々」とあり夜食といふ事なきはあらず
朝飯の後に仕出しに及んで歸り飽食はすれども
晝は喰はざりしやうなり此醫書の標題をば記さず

○雪踏

今旅行する者などが刀に柄袋を掛け又その頭にち
ひさき革袋を掛くる者たまあり其名をセチベン
といへり下學集安文に「世智辨、世俗憐惜之義也」とあ
り又宗長手記大永三年の條俳諧、前句般若寺坂の大乞
食ども」心みなせちべん坊や文珠院」乞食にせち
べとん附たり憐惜なる者を乞食と嘲ること今も常言
にあり柄をいとひて袋をかけ又袋を損ふをおそれて
用ふる物なれば世智辨袋の名よくかなひたり
袋をば
ひし是によりておもふに雪踏は利休が初て製し雪中
に露路を着しハキにおこれりといふ説は信じがたし一編
軒著吞海味天文廿三年といふ茶の書に「革ハカマ革タビ
二重ダウブク着スベカラズ」とありいかに庭のみを
着く物なればとて當時など革をつけし事のなき草履

字なるべし其例を左にあぐ

無名字書此書和玉篇の類にて標題不知古寫本和字を多く載て無下に近き書にはあらず 第一百三門部

閨シナタリ 門ヒナサキ 閨セツ 同 閨ヒナサキ 舌ヒナサキ、ミル

柳亭云閣の下に舌歟とあるは閨は閨の誤歟と此書を寫し、人のうたがひて記たるなるべしウルメク

はウゴメク歟

はおほよそ漢字にて門は門カッの横關、閨は城門、閨は

和字歟もし閨カッならば門をひらくの貌なれば吉舌の吉

に門を冠ケツせたる類の義理によりて制したる和字な

る事訓にてあきらかなり 類聚名義抄、閨 以呂波

字類抄、閨並にシナタリと訓、閨は閨の誤り閨は別に

かゝる俗字のありしなるべし開は閨字ならんと前に

いひしは是等の俗字を見てよりの推考なり

○近く和字を漢字に改めし事 甲比反國の比反の字

は如此比に从る和字なり康熙字典比部に載せ朝鮮の

書平壤銘を引て日本有甲比反州と記したればその儘

にてもありなんをいつか斐に書あらためて通じ用ふ

る事ひさしかりしが斐も又字書に見えざるが故斐の

字にあらためしは近き事なるべし

昔も是等の類にて閨も漢字なれど見なれざるが故に

開字の誤りと思ひたがへてのさかしらにてやあらん

○晝飯の事

朝飯ダ夕飯が三度となりしは田舎よりおこりし事なる

べし農民はことに骨をればなり今は小中飯コチュハンといふへ

日の長き頃は四度喰ふ田舎あり中飯又晝飯といふも

則田舎詞なり今もこゝろあるものは晝に喰ふを夕飯

といふへ夕に喰ふを夜食といひ晝飯といふことをい

はず日本靈異記上の卷「於二月三月頃二年米春時其

家室於三稻春女著三將充三間食三入三於碓屋云々」改證

に曰「造酒式云酒部二人官人云々仕丁二人云々釀酒

日給三間食三稻春女丁亦同」といふは是なり間食の熟字漢にもあり

改證を
見べし

柳亭曰間食則中飯、延喜式に見えたるは給ふなり

靈異記なるは私に喰ふなり酒を釀し稻を春くとも

に骨折る者なり

字治拾遺物語「是も今は昔南京の永超僧都は魚なき

限りは時非時もすべてくはざりける人なり公請つと

めて在京の間久しく成て魚くはでくづをれてくだる

なし本の丈六堂の邊にてひるわりこくふに弟子一人

近邊の在家にて魚をこひてすゝめたり云々」非時を

絶てなし無下に近き事ならんと或人いへり予佛學に

くらければしかるや否やは知らずされども無下に近

き事にもあらず堪囊抄十七卷摩添本三十九丁「數萬人結縁と

て善の綱に取付て渡し奉る云々」又穴太記にも棺に

善の綱をつけし事見えたり又ふるく日本靈異記中の

卷卅四條に「觀音菩薩は願ふ所を能あたふると聞て

其銅像の手に繩を繫て之を牽て花香燈を供し用福分

を願ふ云々堂の内に參入像に繋る繩を引き涕泣して

白這」といふ事見えたり善の繩とはあらざれど今い

ふ御手糸善の繩なる事明なり佛經にあるやなしやは

知らず本朝には九百餘年前よりこの事のありし證と

すべし同書下の卷にも又あり友人曰曾我物語時致が

からめられし條にもあり

又足の綱は古事談第三僧行の條「奈良京平城宮の時

東山麓大櫓木下に良辨僧正重行者にて草庵を結て土

にて造たる執金剛神の像を安置して其本尊の足に綱

を付て毎日禮拜引動して云々」又妙空大德惠心御房

奉問云々の條「三寸小佛を脇息の上に立て脇息の足

に付緒を引寄引よせて涕給けり云々」是は佛像の小

なるゆる佛の足にかたどり脇息の足に緒を付しなる

べし

○開字を女陰とする事

和名抄玉門云々の次に「吉舌楊氏漢語抄曰吉舌和名比奈

佐又同書玉莖云々の條に「以開字爲女陰其說未

詳」とあり

柳亭曰今傳はる漢語抄の殘闕は僞書なりともいひ

てたしかならざる書ながら又とるべき事の無きに

もあらずその書に「陰門、比奈登可書姫戸、姫者

女子之通稱也云々」此説によれば吉舌をひなささ

といふは女門先の略なり和名抄のみにては訓譯聞

えがたし

日本靈異記に閻字シナタリクボと訓しを女陰に用ふ

致證に閻也の俗字、説文に云也、女陰也象形後世假

爲三語助字、遂爲借義、所奪、俗制此字、以別之也、

然諸字書不載、唯以呂波字類抄載之訓ツビ」とあ

り日本靈異記は和名抄よりふるし當時既に閻の俗字

ありされば開は女門ヒメカドを合せて閻如此制したる俗字な

りしがはやく和名抄の頃は開の字に書改し故に未詳

と記されしにやあらん其字形相似たればしか思へる

也閻も漢字ながら音趣、門より出入義によりての和

入不讀と記ていりやますとかなをつけたり算ふるを讀といふは古言なり計も又筭ふる意なりさればいりやますはいれよますの音便、かぞへいるゝ程にもなき小村といふ義なり伊庭氏曰和名抄に餘戸とある則是なり戸は家なり一村に筭へいれべき程にもあらず餘りし家ある所をいひしなり

○今一所 今一方

源氏乙女の巻に「うちならしに御前をわたらせてと定め給ふすつべうもあらずとりゝなるわらはべやうだいかたちをおぼしわづらひて今一ト所の料をこれより奉らばやなど笑ひ給ふ」五節の舞處のうちならし下ざらひに御前をわたらせて見給ふどれといへど捨るやうなるはなくとりゝなる童のすがたといへるなり童といへどさまでにをさなきにはあらずそれをきかせんとて此するに「例の舞姫どもよりはみな少しおとなびつゝ」とあり川柳點に 盆踊音頭とりはもういける」といふをも此ところは解すべし今ひとゝころの料とはおめかけにあげたらよからうとて笑ふ也七十一番職人歌合枕賣の詞に「今一ト方カタももちてひそかにめし候へ」とあり、此ひそかである

にこゝろつけて見るにあひ寝する長枕か、さなくとも交臥に用ある枕なる事必せり今一ト所今一ト方事をふくみてあらはにいはざる詞なり

○整の大字

奉納富々岡八幡宮於寶壽

七間六間文字

整

山城國京

寶永四丁亥歲九月吉日

井上氏孝次謹書之

この大字を書たる刻板に彫りて人にあたへたるなるべし如此ちいさき紙に摺たるが今たまゝ傳る、此大字今も神庫に納てある歟、安永四年に上覽ありしとぞ此字を鳳巾にうつしたるが昔深川にておこなはれ後は江戸中にうつり天保の今に至りてなほあり童は誤て東文正となへ鳳巾賣もその誤りを知らず、整如此書たるも見ゆ昔より童の口ずさび蘭の字を詠たる歌に「さうこうやはたちがかどにもんたてゝとうやひがしやらんやあらゝき、おなじことをかさねていひしなりこれも束を束とあやまる束を束に作るに同じ

○善の綱附、足の綱

佛を開帳するとき善の綱といふ物を掛る事佛説には

れや、いよ人にひかれて又すてらるゝいよすてらるゝさて又これを箕といふ物にいでて風にまかせて糠を飛せ麥はしのむしろにいでて目に干すさしもいとなみはくるしけれど俵にいでてつみたるはいとにぎやかにおぼゆ

右小野於通の筆、洛東知恩院にありとぞ

○三浦淨心卒年附、三浦爲春の事

三浦五郎左衛門茂正法名淨心正保元年甲申三月十二日卒法號稱陽院定譽淨心居士葬所東叡山内普門院柳享
日法號淨土宗葬所天吉宗、故ある事なるべし

淨心著述目錄

北條五代記十卷寛永板書無し萬治板書入萬治板は脱文あり

見聞軍抄 八卷

そゝる物語見聞集の抄録 一卷寛永板書加ふ又名所和歌物語と標題をあらため六冊に綴分けたるあり

順禮物語

三卷はじめに書なし後に

以上四種印本 以下寫本

見聞集一名江戸物語十卷

狸々舞 一卷

武德全書

一卷

茶吞語茶の湯の 二卷

鳥獸鱗集

二卷

周曰

三浦長門守爲春著大笑記寫本 一冊 慶長十五年九州

の紀行にて法橋昌瑤の跋あり同時の人にて名も相似たりことに順禮物語は書名のひとしければ同作ともひあやまりしが別人なり兩家とも今連綿

○芋の定價

天明寛政の頃童の趨つく歌に「いもくいもく芋屋さんお芋は一升いくらちやへ二十四孝でござります十六羅漢に負さんせ」と歌ひしはおふよそ二十四文が一升の定價にて時としては十六文にも賣る事ありし故なり文化の頃になりては二十四文でござりますとのみうたふは十六文に買事なければなり天保のはじめより三十二文でござりますと歌ひ天保九年の春より六十四文でござりますと歌ふ一升の價百餘錢になりたれども語路のわるきゆゑかそれをばうたひしを聞かず菱川師宣の書本月並の遊び、八月の條に 月千金芋一升や十五文」といふ發句を載たり此冊子貞享元年の印本なり元禄の年號あるは後年に改めたるなり當時は十五文が芋一升の定價にてありしなるべし

○不入計

武州荏原郡不入計村他國にも此村名ありて或は計を斗に作ると云々 村とよめり、按に惠空編節用大全、以行姓氏の部に

柳亭記卷之上

柳亭種彥

○田植うた

苗代にかゝり早苗をひきて篠簣あしかになふ禾擔おこしをさして
 になひつゝ田づらにゆきてくばりいだす早乙女のう
 けとりて植る田歌ぞおもしろき、雨降ねども日でり
 笠雨ふる時はひち笠やかつぐ袖笠いとせはし世わた
 る業とすげの笠すそは田水におりひたりぬれにぞぬ
 るゝばかりなる、歌は國によりことばは所によると
 かや近江の國風に、「雨は降ともなよいそゝ簀笠も
 なよいそゝいはぬなよ戀し君にだにあふといふな
 らばいそゝ手にとる早苗もすてゝゆかましいそい
 そ穂に穂かさなれいそゝ目出たしゝ千歳樂や萬
 歳樂」とうたふて田うゑわたしよろこぶとかや、丹
 波の國風の歌に、「春の頃より我をやに通ふとのご
 のあれどなよ人に忍べばかくしかくしてかたらぬ
 よ」などさてうゑわたしてあがるとき手ごとに持た
 る早苗うちふりて「早苗もおくてもしげるくら田に
 さかえて秋のみのりは穂に穂なびきて心のまゝにを

さめてつくもかさねて一りふや萬倍二粒や萬倍」日
 はてりにてらしてあつさはたへがたきに蛭といふ虫
 の田の中において人の足にとりつき血をすひくろふ
 その形ち覆盆子の如くあかくなりて簀毛せもうの如く見ゆ
 るなりこのくるしみのなかよりもおもしろき歌うた
 ふ事籠の鳥のいろ音おもしろくさえづるにたとふべ
 しあまりにことのくるしきにせめて歌になぐさむら
 ん「春の小田に生し蛭蚪かきそだちあがりてながき草葉
 になかくれそよ、蛇のはむかもしらぬ草葉にかくれ
 そよ」などうたひつれて田草をとるもくるしや麥の
 穂をこきしきむしろへいれわかき女房あまたいでた
 るがかしらうへうつくしう赤き前だれ紐ながく唐
 棹といふ物にて歌をあはせてこれをうつ所もあり」
 君をまつ夜は夏の夜なれどいとねられもせぬは物
 うしいよあけかねて」これのとのごはやれ目出たい
 とのご松の縁の末ながくいよさかえひさしやいよ久
 しかれ」など歌ひ連れたる聲うるはしうして歌のこ
 とばはあづま歌にてひなびたりければ催馬樂にもあ
 らで又おもしろし麥のつき白といふ物にいでて臼つ
 き歌をうたふてつくも又おかし「我は田面に夏草な

一 王子狐火	一一八
一 ちいら糖	一一九
一 きりくすと云小舟	一一九
一 貝をもてあそぶ事	一二九
一 平九郎	一二〇
一 よこざんといふ流言	一二〇
一 素足はだし	一二〇
一 浦辻の筆附、小法師	一二一
一 さすやうでさゝぬの小歌	一二一
一 華藏院豆腐	一二二
一 定家煙	一二二
一 足袋の名稱々附、足袋雜考	一二三
一 ちらしふくさ	一二六
一 昔の輕口話	一二六
一 竹の切節のたまり水	一二七
一 薄金紋處	一二七
一 虫のたれ衣	一二八
一 あまり茶	一二九
一 天満ぶし	一二九
一 日暮小太夫	一三〇

一 丹波越	一三一
一 とむてき	一三一
一 鈴木平左衛門の三弦	一三二
一 市野屋十郎兵衛	一三三
一 白鼠	一三三
一 内ねすみ	一三四
一 文紙帳	一三四
一 大小の風えとの丸	一三五
一 巾着いかのぼり	一三五
一 あがり鯨	一三六
一 朝觀音夕樂師	一三七
一 日暮の歌念佛	一三八
一 そもく着にけり	一四〇
一 しやのく衣	一四〇
一 すゝめの子飼	一四一
一 辨當	一四二
一 片つき	一四二
一 卯杖射分の錢基手の錢	一四三
一 つばく	一四三
一 四分の袴	一四四

一 針妙	一四四
一 千彌染	一四四
一 すたく坊主	一四四
一 青ざし	一四五
一 丸にやの字	一四五

柳亭記目錄終

柳亭記目錄

卷之上

一 田植うた	八四	一 醫の門を開置く事	九五	一 茶の湯	一一〇
一 三浦淨心翁卒年	八五	一 袖判 奉書 手紙	九五	一 かくやの香の物	一一〇
一 芋の定價	八五	一 朝びらき	九六	一 忍もち摺	一一〇
一 不入計	八五	一 ひちつか つちちか	九七	一 慶長頃の童謡	一一一
一 今一所 今一方	八六	一 野郎	九七	一 扱も其後	一一一
一 整ノ大字	八六	一 白魚いくちよぼと云	九八	一 平内石像並因果地藏	一一一
一 善の綱 足の綱	八六	一 髪の油	九九	一 夕顔觀音	一一二
一 開ノ字	八七	一 大ぞう	九九	一 歌主二人	一一二
一 晝飯	八八	一 爪ノ字 庖丁刀	一〇〇	一 小歌の字數	一一三
一 雪踏	八九	一 舞樂の名不審	一〇一	一 歌字盡し	一一四
一 樽の足下	九〇	一 紫木 赤菟	一〇一	一 別當	一一五
一 ひらかけ	九一	一 梅若塚	一〇二	一 唐かねの飯鉢	一一六
一 箸折鏡の兄弟	九一	一 壘 障子	一〇三	一 大阪土	一一六
一 豆と云詞	九二	一 大佛を云し諺	一〇四	一 卷之下	
一 牢溜	九三	一 浮世	一〇四	一 立かゝし	一一六
一 ちりとり	九三	一 双六の詞	一〇五	一 手なし	一一七
一 酢むつかり	九四	一 八人藝	一〇七	一 玄様	一一七
		一 むてつぱう	一〇八	一 待乳山常燈	一一七
		一 梅若像	一〇八	一 稗まき	一一七
		一 基石にてする遊び	一〇八	一 茶筌賣	一一八

【俳諧芝肴】延寶年同印
木似春撰にはひの花 花は根に利休和尚

ののたまはく」つけ句立たつの小歌今の鶯」延寶四年丙辰立

志歳旦帳」りう辰の年に小歌やうたひ初 市村氏」

【物種集】延寶六年
西鶴撰 堺を出て西海の浪」りうたつへ歌

の望をなげきしに 保友」【うたゝ寐】寛永頃
不角撰 ふし

似せて見ん隆達がゆり落し 言海」【吾吟我集】慶安二年

印本未得序」さいれ石のいはとなりて苔のむすめ子ども

りうたつを吟じつくば山の七ツ石にかけてひやうし

をとり云々りうたつなくなりたれど歌のこととい

まれるかな云々」隆達が事は其角が【蕉尾琴】沾涼が

【世事談】にも見えたり、又或人の雑記に「大内へ召て

小歌を仰つけられ候節御簾の内にも小歌の聲しけれ

ば隆達がよみける おろせ松風簾をあげよ今の小歌

の顔見たやとうたひし」といふ事載たり

此雑記は寛保年間にてちかきものなれどゆるなき事

はかき載せざる筆記なれば此小歌をその刻作りしと

いふは附會の説にもせよ大内へ召されしことはあり

しなるべし

足薪翁記卷之三終

【吉原小歌惣まくり】天和二年印行(寛かはりぬめり歌文と云は誤也)

「君がこぬとて枕をなげそなげる枕にとがもなや」とあるも此唱歌を引直したるにやあらん

「花が見たくは吉野へおりやれの吉野の花は今がさかりちや

「帯をやりたれば玄ならしの帯とてひなんをお玄やるおびが玄ならしならばそなたのはだも寝ならし

はれ衣を俗に寝ならしといふなるべし【俳諧金臺錄】

享保十九年來川撰八瀬の鹽氣を舐るちんころ 如阜 歸るさにまた寝ならしもかりられず 馳立

猶俗にいは寝まきもかりられずといふ句なり

「夢の浮世の露の命のわざくれなり次第よの身はなりしだいよの

又【うらみの助のさうし】古寫本年號なし明曆二年寛四年とも再刻「頃は

つぞの事なるに、慶長九年の夏の末云々」當世はやりけるりうだつぶしとおぼしくきんじたまひけるは

「君が代は千代に八千代をかさねつゝいははとなりて昔のむすまで、といふ事ある古歌をすこしばかり

ひき直して隆達節にうたへるをばいふ歟、それかれ合せ考るに慶長の頃よりもつはら流行しなるべし又

隆達が小歌を書し短尺を見しがそれにも節章をさしてあり寛文の書目録りうたつのうた一冊とあれば印本もありしならんが未見

又ある人の話に寛文延寶の頃おこなはれし菅笠節といふが彼隆達節なりといふ、さて其小唄は【糸竹初心集】寛文四すげ笠ぶし「やぶれ菅笠しめをがきれて

さらにきもせず捨てもせず【行脚文集】元禄年間印本三千風撰主もこらへかねて其頃のはやりぶしを 菅笠節あんぎ

やあの袖夏來にけり 幽間 是天和三年の發句なり行脚をあんぎやあとひきたるはかの小唄の節なる

べしこれらに隆達の名は見えざれども英一蝶が朝妻船の賛に「隆達がやぶれ菅笠しめ緒のかづら長く傳

はりぬ」とあれば老人の話の如く是隆達ぶしにやあらむ俳諧の集どもにあまた見えたれば其二ツ三ツを

左に抄出す

【清十郎追善奴俳諧】定興判作者可徳古寫本なり 前 小六ころりと今はなきあと」附 りうたつといふづくにふが

はやり出」判詞、小六がしかばねとなり申たれば、りうたつがはやるとな爰はかうより外つくまいか【洗濯物】寛文六年雪撰雨をふらす龍たつ節の田植歌 長重

かの右近が名を繼しものなるべし天和三年に淨書せし【紫の一本】に興作節よ鞠の曲よといふはかれをまなぶなるべし

因に云【節用集大全】延寶八年印本止行に「透頂香注日本俗

曰ス外良チ即此藥也」と注せし如く外良を藥名とお

ぼえし者もたま／＼ある歟外良は藥及香具の類を

調合する者の役名也漢土にも外良といふ官名あり

【長祿二年以來申次記】正月七日の條「公家、大名、

國持、外様の内、御供衆、申次衆、番頭、節朔衆、外

良、田樂等參也

一御藥進上 外良毎年今日如斯なり

外良今日進上仕候御藥を申次衆持參申てお對面所之

さいのきはにて外良進上と申入てそと御目にかくる

様にして云々」又同書十二月廿七日の條に「御藥ちん香五

進上外良毎年今日如斯也とあり又【殿中申次記】永正七年

正月七日の條「御藥色々外良進上之外良へ御太刀申出

同書六月二日の條に「薰衣香十袋例年御太刀被下外良」此外

もところ／＼に外良が事あれども長祿の記におなじ

事なるべければもらしつ【年中定例記】にも正月七日

の條にあり此はみな室町家古記なり

○隆達が小歌

【堺鑑】天和三年著曰「高三隆達元は日蓮宗の僧當津顯本寺

の寺内に住す、故ありて還俗し高三氏の家に往て樂

種を商ふ事を繼て小歌の節を一流謳ひ出すより世俗

隆達流として謳ひ賞翫す」と見えたり當津とは泉州堺

を云也【浮世物語】まきものに紹鷗小歌に立達云々」

これは堺の事をいふ條にあり又【攝陽群談】に顯本寺

の條下にも此事を載たり、ちかくは沾涼の【世事談】

新見氏の【むかし／＼物語】にも小歌本あり謠曲の如

く章をさしたるものなり是は門人にあたへしものと

おぼしく奥に誰殿隆達として慶長元和などの年號

あり、二三本を合せ見るに大同小異あり五うた六歌

こゝにあぐ

「吹よ松風ふかねば山居のさびしきに

此ひと歌はかた書に早歌とあり

「豊後やさつまの殿だちに／＼一夜二夜とよなれそ

めてあすは舟いづるなとせうぞうらめしや

「梅はにほひよこだちはいらぬ人は心よ姿はいらぬ

「りんき心に枕ななげそなげそ枕にとがはよもあら

じ

く見えたり【阿蘭陀丸二番船】延寶八年柳亭云、古老傳曰遠島へ赴く時船の舳先にて鞠をけたり すこくと舟

の舳板に立上り身は外野が蹴たる曲鞠 淡水江戸大坂通シ馬延寶八年印本 前に松に残りて高足の露 梅朝附

公儀より流されにけり秋の波 同「此句高足とばかりにて鞠の字なく右近が名も見えざれどかれが事

なるは句意にて知らる【洛陽集】延寶八年印本 右近が時とばざけりな庭柳 元好「此句意は飛梅の如くかゝり

の柳は島へとばざりけりなどとがめしにて鞠の字なくて能く意は聞えたり

【芝肴】延寶八年印本 漢和、悲秋配所通 靜軒「外良が花も紅葉もなかりけり 似春「是等は皆流罪せられし事をいひし句なり猶外良が鞠の事は古く見えたり【き

のふはけふの物語】寶永年間の作「西の洞院外良の所に鞠をける何としてかかゝりより外へついとこえ大道へ落

るをりふし遠國の侍人あまたつれて通られけるが此人の道具持が心えたるといふまゝに鎗の石づきにて

つとんといはせた主がこれを見て心がけはよけれども人の飼鳥と見えて鳥屋までしてあるに殺すまいもの

のをといはれた」此輕口ばなしは右近が流罪せられ

ざる前なり西の洞院に住し證とすべし【卜養狂歌集】「外良右近といふ者曲鞠を得たる人なり、ある所にて

興行ありしに色々曲をつくし侍ければ歌鞠といへば歌にも曲をよめと所望せられて詠侍りける

楊貴妃のときにはじまりけるもの歟

そよやがいしやう外良のきよく」

これもそのむかし外良が江戸へきたりし刻の狂歌なるべし此集の彫なりたるは外良が罪せられし後なれどふかく詠おきしをそれかれとりあつめて印行せし

なるべし、又【世間用心記】といふ冊子にも「折から外良が曲鞠國中のもて遊び大守ことに此ゆふべのし

づかき云々」なんどいふことを載たり俳諧の集に鞠といふ句に外良と附たるはあまた見えたり【俳諧蒙

求】延寶三年印本 前 さてものゝがいらうの曲 惟中「附 八九間又うへもなき鞠の庭 同「これはさき

に出し、俳諧の集どもよりはさきなれど流罪の事なればこゝに記しおきつ【増補むかし物語】明和元年

記「八九十年以前に今外良と云者ありて鞠を遣ひ人立多き辻々にて膏藥を賣しが一代にて絶、其跡は鞠

の小六なり今の小六は二代目なり」柳亭云今外良は

ばたしかにはいひがたけれど煙を横雲と見なしきせるのさをなぐるまとつゝけたるやうにもおもはる

【山の端千句】延寶八
年印本 前たゝみて是を作る繼竿 宗

因附 荑荈たはこ盆ほんかるうちいさき我住居 似春き

せるといふ事は見えざれど前の繼竿を繼ラウの事にして附たるべし繼ぎせるの事の見えたるは【男色大鑑】貞享年
印本

「此芝居に入誕は堀の水かさをまし鼻毛はいかのほりをあげ狂言の繼簀きせを湯になして云々」又

【好色河念佛】元祿十四
年印本 旅だつ人の事をいふ條に「まくらだんす次きせる伊勢骨折に何かうちいれ云々」又

【今様都をどりくどき】貞享元祿の頃
の小唄本也 もろこし心中とい

小唄に「ふかき思ひのうつる香をいまひときとすすむればせうまうだきにつぎいせるすいつけたばこ

たつ煙り云々」猶ふるくもある歎尋べし、焼亡きりだきとは奇蘿きらを法料ほりょうもなくうちくべる事をいふ其煙の火

事に似たりといふ意なるべし【一代男】六の卷に「次第に奢の煙くらべ後は焼亡だきにして林彌に酒の爛

をさする事云々」とあるは奇蘿にて酒をあたゝめさ

する事なり、小唄はきやらにてたばこをすひつける

事にて奇蘿をつぎいせるといひかけたるなり

【水馴稗】寶永年間印
本不角撰 多書く女口への字形「こちらむく間に留伽羅の焼亡きり焚」附ていふ今きせるへやにのつまりてとほらざるをつんぼうといふ聾の事より出た

るは論なし延寶の頃より此詞あり聾の事をつんぼうといふ語釋下のべらぼうのところ【俳諧雜巾】延寶九年印
本常矩撰 つんばざせる甲斐やなからん若煙草加州
小松 宗好宗好【鷹筑波集】寛永十五
年西武撰 次第一につまる世の中」たばこをばのめどさらへぬきせる竹 玄康【道歌紅葉傘】寛文四
年録 ほのくくと匂ふ心はおくゆかしするどなる火はけふるたき物たき物 自注、あまりにふかくとめんとて焼猛焚にすれば必ふすばり臭くなるものなり 稻葉岫雲齋様

○外良右近蹴鞠

【玉滴隠見】延寶中
寫本 十の卷「正保年中に外良右近といひける蹴鞠に妙を得たる人京大阪江戸等を徘徊してお

のれが家職をば次にして二六時中鞠にかゝつて飛鳥

井家もはいからず我意にまかせし故飛鳥井家より咎

深うして外良が儀を江戸へ訴られければ御僉儀と成

て遂に豆州大島へ遠流せられをはんぬ」といふ事あり

此事今は知る人まれなれどふるき俳諧の句には多

古風をうしなはず元祿正徳の頃までも六段なり和泉太夫

土佐掾がたぐひの本を見るべし それゆゑに何にもあれこれぎりといふ

程の事を六段目ぢやなどいふ諺今もまれくにいふ

人ありてかの梵天國をうたふといふに略おなじ【江

戸八百韻】延寶六前句年印本 對決の場かたへ涼しき 來雪

附 六段目日も西山に傾きて 青雲【俳諧富士石】

延寶七年印本調和撰 人形や末一段の夏はらへ 素白【足薪云

是は御祓の句なりかたしるを木偶にとりなし六月を

末一段にて聞せし利口なり【吉原三茶三幅一對】延寶九年

印津國屋内藤枝といふ遊女を評する詞に「貌顔すゐ

ぶんよし御年もはや五六段目までにかたり付給へば

嫁入の御やうだいあるべし云々」又ちかく俳諧に見

えたるは、【前句附歌がるた】元祿十三年印本一名馬たらし不卜の高點なり 編笠脱て

休むしほの 毘六阿彌陀末一段に廻り詰 作者不知

○きせるの竿、繼きせる、へんはうきせる

今田舎にてラウ竹の事をきせるの竿といふ所ありこ

れふるき詞なり俳諧【犬子集】寛永十年重頼撰同二十一年正保元年也刻 棹に

なりてわたるがん首はきせる哉 貞徳【俳諧之拔

書】萬治二年玄札撰 此書は江戸の吟なり、前 夜も長かりしに

が竹のさを」附 月にのむきせるの掃除おこたりて」

前 吸物のとほらぬさきに月出て」附 つまるきせ

るのさをも長き夜【至來集】延寶四年胡吟撰 冬難 吹からに

これやこがらしきせる竿 居卜」又【老婆物語】寛

四年草堂行願寺の事をいふ條に「春霞たつを見捨て行

と詠しその翼にはあらねども北に向てゆく」もき

せるのさをの雁くびをひねくり廻し云々」とあり

【畫網】延寶四年薄の穂にも煙たつなり 名月にきせるの棹

のあなめく 玉親【西山千句】延寶年間宗因獨吟 前 高野

の奥もつまるよの中」附 墨染の袖枕にもきせるざ

を【後 雙六】延寶九年清風撰 雁首や渡るきせるの棹の川

南部包元【日本行脚文集】元祿三年印本三千風撰天和三年吟 卷一 旅煙竿

梢ぞかすむ時鳥 水泡 同集六の卷貞享三年寅浦島

ねざめの床の吟 煙皿棹や咲ぬ花釣る寢覺の床 三

千風」さてこゝに煙竿の字をきせるにあてたるも猶

證とすべし、又同書に節竿きせとかけるところあり寛永

十五年撰の【毛吹草】にラウ竹とあればラウ竹といひ

しがさき歎前に見えたる同じ寛永の【犬子集】に棹と

いふ句あればさをといふがさき歎猶考べし【江戸節

炙すゑ】きせるとる手によこ雲わたりさをなぐるま

もやるせなや云々」これは近き享保年の淨瑠璃なれ

といはひたてまつるとくどををさめぶつくわをまもり給ふとかやさればにやてんしとはてんのつかひとかくとかやそのうち中なごんの丹後たじまは本國なればあんどのごはんをたまはりてありがたしと三度てうだいなされつゝやかたのかへりとも人あまためしつれ本國さしてかへらるゝ國にもなればみねにみね門に門を立ならべふつきの家と榮え給ふためしすくなきしだいなりそのうち中なごんのをばされとのもんじゆといはひ大女ごせんをばなれあひのくわんおんとくわんじやうしたてまつる今のよまでもしゆじやうさいどしこくどをまもり給ふなりまことに上古もしゑのよにもためしすくなき御事と上下ばんみんおしなべてたつとかりとも中々に申ばかりはなかりけり」とあるが彼祝言にかたりし文章なり梵天國とめでたき詞あるが一變して忌々しき詞となりしもをかし此淨瑠璃百年前まではおこなはれしかぶき狂言にもせしことあり元祿十四年森田座にて

天女隱篋
婆羅門打出小隨

梵天國寶船

五番續

の也【俗つれぐ】に江戸ふきや町のところを書ける處に今日よりぼん天國市むら宇右衛門玉川吉彌市川團十郎といふ看板をかけし圖あり此書は元祿八年の印本なりされば森田座よりさきに市村座にて此狂言ありしなるべけれどその繪ざうしは未見まことに上古も末の代もといふ事むかし淨瑠璃のくちつきなり

【俳諧富士石】

延寶七年印
本調和撰

歳旦の發句に 君が春や上古

も今も末の代も

調口

【花草紙】

寛

稀なる物の品々

の段「昔からはしの中將とて古來ふ雙の美男の公家ありあまつさへ笛の上手たり天道に通じて梵天のあるじ智にとり給はんとの勅使あまくだりぬ今の京五條天神の宮是なり云々」とあればあまねく人口につたへしことなるべけれど社傳及諸書を考へつれどいまだ正しき證を知らずちかき寶永元年の印本【俳諧三疋猿】の附合に、前 とりませて亥の子にあたるえびす講 涼菫 附 五條の天使松でおぼゆる支考」とあるもかの天使の宮をいふなるべし因に云むかしの淨瑠璃は六段なり 十二段をニツに上がたにては井上播磨より五段つゝめたりといふ江戸は

傾城の詞に「くせつといふものはするなどのするこ
 とではござんせぬみな／＼ぼんてんぐくの下地ぢや
 とおもはんせ云々」これはその傾城のもとへうち絶
 て客のきたらぬやうになる下地といふことなり、【も
 えくゐ】は京師の作なり【浪花どら】は大坂なり西鶴作
 かいぶさて此詞の江戸に見えたるは【吉原三茶三幅一
 對】延寶九江戸町二丁目東屋うち定家といふ遊女を評
 する詞に「貌顔なる程よし御年ふけ給へども諸事難
 いふべき處なくむまき風俗なり床のうちしつほりと
 してぬるゝときはかへるさを忘れぼんてん國と出る
 ものゝみ云々」【古郷歸江戸咄】貞享三六卷に借錢の淵
 に首たけつかり主親をたふし一世きをたゝきあげて
 桶ぶせになりやう／＼友だちのかげにて退れ歸りて
 も主のかたへはかへりえずぐにぼんてんこくをう
 たふ云々」これは亡命のことをいへり按にその原は
 淨瑠璃より起り専ら花街の流言にてありしなるべし
 【松の葉】元祿十六三卷、一夜かゝみ、といふ小唄に「げ
 にさま／＼のたはむれにつれてくるわののんやはい
 はんやしたふてんとさ、さアしたふてんとさ、かつ
 てかぶとのをじめのきんちやくきん／＼のはたとひ

此みはぼんてんこくになるとてももの日／＼はむに
 せまい／＼云々」元祿は集のなりし梓彫の年號にて
 天和貞享頃の唄なるべし【團扇曾我座敷狂言】元祿
十四年印卜者の詞に「二月三月はやりくりのくせつがあら
 し其節は我ぞんだいもぼんてんこくをうたはうがな
 なんとあふたか云々」此書および江戸咄にぼんてん
 國をうたふとあるを見るべし淨瑠璃をうたふといふ、そ
 と前の宗長が記にあり
 のほかはうたふといふを略ける也近頃ぼんてん國を
 くふといふはその原を知らざる誤なり今たま／＼傳
 はる梵天國の淨瑠璃本は鱗形屋の刊行にて繪入本也
 奥書に太夫直之正本とのみあり是ははじめにいふ永閑
 八太夫等がかたりし本の残りしもの歟むかしいつれの
 太夫とかたりし
 淨瑠璃はたれといふ名を記さず直之正本とばかりあり
 り是はいづれの太夫へも賣べき書肆の計策なるべしさて梵天國
 六段目のむすびに「それよりも人々はあしはらこく
 にかへらせ給ひ五でうのやかたにうつらせ給ひてそ
 れよりも中なごんどののはぼんてん王のまひつのごは
 んをみかどにさしあげたまへばみかどえいらんまし
 く／＼て日本のためしにせんとて父大じんのをくわ
 んじやうおろしたてたてまつりぼんてん王のじひつ
 の御はんを相そへ五條の西のとうゐんにてんしの宮

蛙の子をおたま杓子といふは御多賀杓子の訛なりといふ事或人の隨筆にあり、こはたゞの杓子にてもあり何のゆゑにかくはなづけしならんとおもひをりしがよく／＼考るに多賀の社よりいだす杓子はまがりたる木にて製しもの也されば蛸蛸かへるこの水中にてひるがへるがその形に似たるよりの名なり【尤の冊子】寛永十三年印

ながれるものゝまな／＼といふ段に「大工のかねや、藏のかぎ、ひ物やの仕事、なべのつる、おたかじやくしに、つむのは」とならべいだせり又【俳諧玉海集】明暦二年印本附合の句に、前　ゆがみなりにも壽命長かれ　附　手づよさはお多賀杓子の荒けづり

正式」今もゆがみたる杓子あるか知らず予が見たる御多賀杓子はつねのにかはらざれば是等の物の本を見ざるさはこゝろえぬことにてありしなり、又或人の曰「ゆがみたるが杓子の古製にてそれがちかく多賀の社に残りしなるべし杓子定規といふ謠もそれにてよく聞ゆ今の製の如くにては柄は定規ともすべし又丸きかたにつきていはゞ鍋蓋とも釜の蓋ともいふべし」と笑ふさもあらん歟、此謠寛永の【毛吹草】に見えたり猶ふるくもあるべし

おもふべし人はすりこぎ身は杓子

おもひあはぬはわれゆがむなり

此狂歌今も人口にあり今俗はおもふべしの五文字を世の中のことといふ歟元和九年の著京傳が【醒睡笑】にあればふるき歌なるをおもふべし、かの杓子定規の謠はこれらよりいでたる歟

○梵天國

むかしの淨瑠璃に梵天國といふあり【梵天國】の冊子によりて作れるもの也梵天國は御伽さうしのうちにあはれり是利の末の代にいできし書か此淨瑠璃は慶元の頃河内左内南無右衛門等の語り出し、が傳りてちかく貞享元祿の頃虎や永閑天満八太夫なれども淨瑠璃の祝言にはかならず此梵天國をかたりけるとぞ今長唄をうたふものゝいはりにそのゆゑに何にもあれもはや是ざりといふことを梵天國をうたふといふ謠は今ありてその淨瑠璃は絶たり【たきつけもえくる】延寶五年印本中巻に「人の身をいためくるしめおのれがよろこびとする事人たるものゝじんのみちにはづれたるかゝる男のくせとしてしんだいは風まつそらのいかのぼりよりなほぼんでんをいそぐものなり云云」とあり、風待空のいかのぼりに譬へ身上の滅却するをぼんでんといふなり又【浪花鉦】延寶八年著六の卷

むかし蠅取蜘蛛をもてあそびし事あり漢土にも蜘蛛を闘する戯はありと聞しがそれとは異なりまづ壁虎はいとろこをよく養ひおき小き器にいれ蠅のをるかたへさし向いちはやく取を見て興するなり又二人さし向ひて左右より一時に蠅のをるところへさしむくるにその蜘蛛の弱きはもとの器へ逃かへり強ものはますぐには走らず蠅のをるうしろのかたよりはひめぐりて取を輪をかけるといふとぞ、此戯れ延寶の後盛んに流行、正徳の頃まではまれ／＼にありしと或古老の説なり、さて蜘蛛をたくはへおく器のはじめの程は竹筒なりしが後は唐木を用ひ蒔繪したるもありといへり當時は蜘蛛座敷鷹といひしとぞ

【西鶴一代男】

天和二年著

四の巻、出羽國最上

寒河江といふ所の貧家のことをいふ條に「壁に懸けたる物とては要こよりにてく／＼りし扇、粘篋ねんけつ、唐がらし、鼻ねぢ、さりととは浅ましき世の暮し何をかあそばしてかく年月を送り給ふかと聞ば今江戸にはやるとて蠅取蜘蛛を仕入、或時は一文賣の長刀を削り云云」といふ事あり是證とすべし

【俳諧富士石】

延寶七年印本 江戸住調相撰

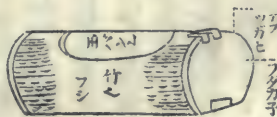
笹の一夜ねぐらや筒の蠅取

蜘蛛 露言」竹筒に養ふを笹の一夜ととりなしたる

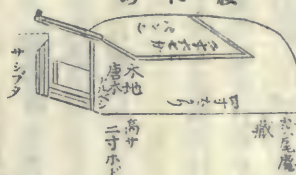
發句なり【花洛六百句】延寶八年印本 前句 召時に竹の筒より
まかりいで 自悦」附句 蠅取蜘蛛にくだすさかづき

千之」此句も竹の筒よりいづるをいふに蠅とり
蜘蛛とつけくだす盃とは愛するさまをいふなるべし

壁虎を飼ふ古器二品



紐をつけて腰へ帶るやうに製したるもありといふ



是等の發句を證とすべし、又其角が撰し【たが家】の
附合に、壁虎に蠅をとらする 嵐雪」前句に左遷
の座敷とばかりあればたしかには聞えねどとらする
といふ詞飼ひおきし蜘蛛のやうにもおもはる
此外延寶のころの發句に蠅取蜘蛛の事あれども證とす
ることなきはもらしつ

○おたまじやくし 杓子定規

しゝものなるべし、印本も此ひき直しゝうちなるべければかの享祿の頃うたひし書の全く傳りしとおもはれねど強て僞書なりしといひ破るもわろし、いづれの本も天正以後に筆を加へしものとは見えす

○淨瑠璃雜考

十二段の冊子の事、十二段の草子正保三年の印本及古寫四五本を照し合せ見るに意はおほよそ齊しけれど書ざまは悉異にして校合の筆をくだし難し、是はかたる者のこゝろゝにひき直しゝ物なるべし、芭蕉翁の「梅咲やしらゝおちくば京太郎」といふ句は此書の草紙揃の段の詞をとられしなれど寫本にてつたはるものにあらざるはなし印本には脱したり寛文の印本も正保と同又友人の藏書に十六段本あり御ざうしひたれ乞の段は他本には見えすかくさまゝの異本あれどみな天正前の添削とおぼしく俗言の内に雅ありいづれか原本ならむ今は考へ難し

因に云蕉翁の句の事隨齋諸語にくはしくゑらゝ京太郎二ツの物語の絶たる事を辨じたり又或人の紀行に和州多武峰の坊中に□□卿のかゝせ給ひし京

太郎物語今傳はりてあるよし見えたり

淨瑠璃の名の起り【よだれかけ】二の巻に「淨瑠璃のもといをたづぬるに奥州やはぎの長者が娘淨瑠璃御前といひし牛若君のおもひものゝ事をつくり十二段にわけふしをつけ語りそめてより起るといへども今は智仁勇の三を第一の主意とせり」とあり此書は全部六卷四の巻までは慶安二年の作なり淨瑠璃は十二段の草紙に始りしといふ事はより古くは未見奥州は誤か或は奥州へくだる時などありし歟脱す又十二段の作者、織田公夫人侍女小野御通作之と黒川道祐が著雍州府志八の巻に見えたり此書天和二年の作是より古くは阿通の作といふ事を未見

淨瑠璃節の古き事は前に予が著したる還魂紙料に記したればこゝにいはず諸萬治寛文の頃江戸に小野の於通といふ手かきあり妙貞尼、澤田お吉、此於通、寛永以後女の三能書といへり今織田家の侍女の書なりとて色紙やうのものゝ傳はるは悉此お通が書しものなり【富士石】延寶又近く【俳諧畫文匣】などにあるもみなかれが事なり日本橋□□□天一方といふ樂の看板も此お通が筆といふ

○蠅取卿

武千句】

天文九
年の吟

いとゞだに座頭まがひの杖つきの「浄

瑠璃かたれともし火のもと」こよひはや時はうし若
ふけはてゝ」座頭に浄瑠璃をかたれとつけ又浄瑠璃
にうし若とつけたり

慶安の印本および守武が現在の世をさること遠からぬ古寫本をもつて校合するにみな此ごとしさて信長は天文元年の生なり此千句は天文九年にて信長僅に九歳のときなり阿通といふ侍女はありもせんが浄瑠璃といふもの十歳にもたらざる人のなぐさみに綴りしものとおもはれず又【柴屋軒宗長日記】享保四年の條「八月十五夜九月十三夜は都鄙いづくも月にめであそび芋豆を手向としてしづのを賤の女も月見といふ爰に八旬有餘の老拙夕までひして目ざめおきてこよひ名月にやと思ひ出て南の縁の柱にとばかりせなかをやすめつゝ侍るをりしも範甫老人豆に徳裏（本）をそへもたせ送らる「こよひ月まめに見よとやことたらぬいもこひしらの一盃としれ、旅宿たすかる一兩輩人を遣し小座頭あるに浄瑠璃をうたはせ興じて一盃におよぶ或所より誘引とておのゝたちあがるにあまりに無下におぼえて兼につけてこと傳てやる

「たづねこそよしやせざらめ哀れなどこよひの月の友よびてとる、その名残さびしさ思ひやるべしやがて老をなぐさむ心かきくらして「くまもなく空も見るゝかきくらしをば拾山のてる月にして」 九月十三日」

享祿四年は信長が生る前年なり此記宇津山にて書るなれば當時はや田舎わたらひする小座頭の謠ふといふにて浄瑠璃はふるきものなるを思ふべし（宗長は天文元年三月六日歿と二招集に見えた）さて信長が侍女の作なりといふ附會の説は貞享元祿の頃よりの雜書にはおほく見えたれど寛永正保の頃の冊子にてはいまだ見いです慶安二年作【よだれかけ】（梓刻は寛文三年なり）に浄瑠璃御前の事より起りし事は見えたれど作者のことは不載、さきにもいふ如く阿通が事を附會せしは慶安より後歟又實に阿通が作にて信長の侍女といふが誤歟

因に云十二段のさうし今つたはるは正保三年の印本又寛文の印本活板もありとぞ印本はさまでの異同なし古寫本にてつたはるもの二三本を見るに大異同ありて更に校合なしがたし、按にふるき十二段のさうしをうたふ人のこゝろゝにてひきなほ

ろくにあり、彼職の古老語て曰縫簿のはじまりは吉備大臣入唐の刻ぬひものする事を學び給ひ歸朝の後松葉を針としてきぬに縫物して見せ給ひしに起れり故に松をもつて縫簿の目じるしとはする也といへり此説の是非は暫くいはす、按にふるくは若松をつけたるがいつか三階松となりしなるべし【俳諧犬子集】寛永十年重頼撰同二前門に小松を立ならべけり

附のうれんにしるしを見する縫物屋 重頼【俳諧

芝肴】延寶年間印本 漢和我看松屋月雁を手ぎはに縫物の雲 似春江戸住似春撰 松やといふは暖簾の松にとりなしたる歟又松やと云者ありしか【桃青杉風

兩吟俳諧】出所 前 縫簿に好んで通る瀧の糸 杉

風】附 音羽嵐の松の姫君 桃青【人倫訓蒙圖彙】

元祿三「縫物師、諸の衣装其外さま」の糸をもて模様をぬひあらはす縫にいろ／＼の名あり暖簾に松を

ゑがきて印とす」などといふ事あれば古くより松をもつて看板とせしことは論なし、予思ふに京師の紺

屋に柳を染たる暖簾をかけしがありとぞ江戸にもある歟 大

諸禮のうち【萬葉の次第】足利家の頃 諸禮なりに春の素襖袴は柳

色に染め柳を大かたにすり夏の上下は水色に染め松

を大かたにするといふ事あれば柳も松も古く式正の

模様なりこれ等が残りて紺屋縫物屋の看板となりしにはあらずや猶考べし

因に云、右に引用ひたる【萬葉の次第】に襖上下の事をいふ條に「きくとちをつくる事雁金を表すなり九ツは九穴の心を表するなり」といふこと見えたり

【延喜式】四十三丁 春宮式曰五月六日騎射射手帶刀十人著三松摺衣 心おほえ帯が摺か【雄長老狂歌百首】足軒

一本天正十七年の典書あり 關 ぬひめ付に雲井の雁をそめたるはたがたぎぬのもじの關守判詞、去々年薩摩陣の後此繪様あまたにあらんかし一首のしたてたくみにしてしかも詞優艶なり殊勝々々【光廣卿職人歌仙】元和

の頃の吟繡士 是る雲をぬひ物にしてきん人はとぶ雁金を紋につけてよ」此等みな雁金の事あれど未考、似春が句に「雁を手ぎはに縫物の雲」とあるもゆゑある事ならんかと抄出しておきつるなり

○淨瑠璃節

淨瑠璃節のはじまりは信長の侍女小野阿通が作れる十二段より起れりとは諸書に載てたれ／＼も知る事なれど此説非なり秀吉の侍女とするは益々誤也【守

かな 正種【新續犬筑波集】萬治三年季吟撰 前つ

けざま十六つらやはりぬらむ附 させるむさしに

助言いひけり 保友

【後砂金袋】延寶三年吟 喰物は十六むさし嘉祥かな

作者不知【西鶴大矢數】延寶八年吟 都についてまはる

鳴瀧 西鶴附 夕詠十六むさしはてしなく

同 是等の句猶あるべし【五ヶ津餘情男】元禄十五年吟 は

やうちくつろぎ六ッむさしにちよつとかけしてそれ

よりおりはもまだなし」といふ事あり六ッむさしめ

づらし又近く元文寛保の頃印行なしたる【繪本船辨

慶】といふざれ繪のさうしの末に十六むさしの圖あ

り、親といふ物に辨慶を畫き子は魚盡しなりその側

へ細字にて「是までありきたりし十六むさしは子を

石なごにてすれば目印なくて慰みすくなし、子ども

だちのつれづしはし一興ならんことを思ひよつて

十六むさしのはじまりたつよこのたすきのけい引は

御存、子は右に圖するところを切ぬき辨慶にかたん

とろくづの計事辨慶も我まゝをたしなみるぐひは

ならぬぞく」といふ事あれば寛保の頃までは今の

如く繪ざうし屋にて賣りたることはなきなるべし此

さしけいびき今とか享保十八年の印本露月撰【俳諧名物

鹿子】といふ江戸の名物を集しうちに鱗形屋の懷中

將基あり「仙となるふところ駒の春遊 素水」と

いふ句を載たり是等より移りて十六むさしをも錦繪

摺として商ふ事とはなりしなるべし、【前句附寶船】

元禄十六年 盤は元祿よりありしやうにおもはるれど賣るといふ

事なければ此みちの好人が手づから作りしも知るべ

からず、されば證となしがたし基盤を紙にて製して

商ひしも鱗形屋が始めなりと聞けり、【男調寶記】に

「又手なぐさみには十六目石、十不足、百五減、郎

等打、盗人隠し、有哉立、嶋立、左々立、下半打、投

壺、虎の子渡し。三十二のまゝ子だて」などいふ

事ありといふ事を載たり、是は悉基石にてなす戯れ

なり此書二板ありて一本には此事なし二本共元祿年

間の印本なり此遊戲に今は絶たるものあるべし若此

目石がやさすがりの類にはあらずや、むかしの事の

くはしき人にあはれ問ふべし

○縫簿屋の松

縫簿屋の障子および暖簾に三階松をつけたるがとこ

して供する食なし殊に今宵歳尾にして新玉の年を迎ふなれば目出度家を求め給へと云、異僧これを聞ずして只主人と寢食を共にせんと終にこゝに宿す、後明旦破椀に薺の糝を盛供するに僧これを嘗味し、夫に草鞋を乞これを着、竈の後なる湛太瓶をめぐりて慈眼視衆生福聚無量と唱へて夫婦に謝し宿を出たるに行方なし、かの桶を開くに變じて麴醬となる近隣の者は聞傳へて乞ふに盡る事なし如此數日にして止すそれより家の軒に其印をかけて商ふ事夥し今世にある匙箸看板の始めなり既にして年月をかさねぬれば家富繁榮す人呼で木下長者といふ、又ある夜の夢にわれはこれ往昔除夜に宿を求めし僧なりとて夢覺ぬ枕上に見れば大悲尊容赫然として現じたまふ云々」是は笠亭仙果の抄

○十六むさし

【和名抄】雜藝の類に見えたる八道行成が今の十六むさしなりといふ事は【安齋隨筆】に辨じられだり予按に十六むさしはやさすがりの類なるべけれどやさすがりはいつか絶て十六むさしは別におこりしものゝやうに思はる是は證とすべき事も見いでざれば予説

のかならず是といふにはあらず、推あてに思ふにやさすがりといふ物は親子などいふ物はなく八方へ碁石の切ざるやうにいつるを相手よりはそれを切らんと制しいづれにもあれつながらりて盤のはしへ納るを勝とするものか【秋夜長物語】に「千人切の荒譜岐かなさいぼうの惡だいふ八方やぶりの武藏坊云々」とあるは三井の衆徒にてもとよりつくり名なり、かのやさすがりの玉さしによりて作る名歟八方やぶるといふにて考べし、【守武千句】前きれんになりぬる事のあはれにて」附むさしをさすと見ゆるなりけり」今の十六むさしのやうにも聞えず猶考べし、さて寛永の頃よりは全く今のむさしあり【毛吹草】寛永十五年俳諧附意に親子、扇骨、十六むさし、とならべいだせり【俳諧鷹筑波集】寛永十五年西武撰二道かくる人のさいかく」附ちはながくさせるむさしは上手にて「正平」ふたみちは今いふ両手なるべし【同書】善惡に二道かけてつよき人」させるむさしを手づめにぞする「重時」

【夢見草】明暦二年印 本休安撰 取て荷ふしは十六むさしかな
一武【玉海集】明暦二年印 本武藏野の月見るころぞ十六夜
正盛【砂金袋】明暦三年印 本西武撰 いざよひの月は十六むさし

ありとぞ駿河國の府中にても此看板を用ひ側へ八月
 酢有りといふ札をそへてかくるといへり、慶安四年
 の印本【萬聞書秘傳抄】によき酢といふべき程の事を
 八月酢云々」とあり中秋は醋をつくるの佳節なるべ
 し、

因に云味噌の看板にせつかいを出し、は江戸にも
 所々にあり 今は精工を盡してたて看板の如く見え心
 をとめればせつかいの形わがかりがたし 田舎は
 何れの地にもありてめづらしからねばふかくはた
 づねず、ふと見いでたる事のみをこゝに記す

是は古畫にあらず友人土州へ旅行の時
 道すがら寫して書狀におこせたるなり
 土佐及信濃もおほかた此ごとき形也と
 そまへ
 の屏風
 の繪に
 よく似
 たり

【日本永代藏】元祿元年印本
 西鶴撰しやうゆの看板も壺
 の形なり此裏に酢と記して
 兩様に用ひしもの歟

○みそありてせつ
 かいへ書つてきたる
 も又ふだにてきけ
 たるもありといふ

【餘情男】

【當世はなしの本】
 貞享年間の印本な
 るべし

此さうしと永代藏に見えたるはせ
 つかいたをさかしまにきげたるなり



【人倫訓蒙圖彙】

元祿三年に「味噌屋簡板に節搔を出す調味

和する能あつて人身の保養とするところ一日も離る
 べからずとありて此書には看板の圖を不^レ載

【大阪獨吟集】

延寶三年印本
 本宗因判

幸行ふりにしせつかい一

ツ

未學

附

看板の跡はありけり山おろし

同【京三吟】

延寶六年

入野の風を背負ふ柴と、

信徳

せつかいをしるしの軒の霜さえて

政定窓の小

笹の竹を秤に

仙庵

【俳諧打墨砥】

天和二年印本
 本秋風撰

今ぞさかえん鋤柄の里と申は

常矩

附

賣味噌

所ゆるされにけり

秋風

未學が句に味噌といふ

事は見えざれど此看板をいふこと論なし、秋風が句

は彼せつかいを大きく作りたるが鋤柄の如く見ゆる

故賣味噌所と附たるなるべし元文二年作上るり大政

兵庫岬二段目はたやかきやのことは「此ああひ刀は

拙者が家のめじるし、酒やのさかばやし、みそやの

せつかい、もちやさるのかんばんも同じこと」攝津

名所圖繪矢田部郡巨故龜山福巖禪寺の條に「むかし

兵庫の西に柳の大樹あり其地を號て柳原といふ、樹

下に木下源太といふ夫婦の者あり常に普門品を誦し

て大悲を信す家窮て貧く草鞋を作りて業とす或時異

僧忽然として來り一夜を乞ふ、夫婦評して曰貧困に

谷邊にはありしが今は絶てなし又酢の看板にこしきを出しおきしが是もいつしか止て古風を失ひしは多し」といふ事を載たり、はじめにあげたる酢徳頌の作者は越後の糸魚川の者なり其他は悉江戸の書なれば専江戸にもありしを思ふべし明和元年いつしか止てとあれば寶暦の頃まではまれにありし歟【生身魂】の句に合せ考べし又按に酢には眼に見えざる蟲の住ことありよくこして喰ふべしなんどいへばよくこしたるといふ印に絹篩を掛おきしが中頃は其輪ばかりとなり遂には絶しなるべし【世話づくし】承應三年皆虛撰明暦二年刻俳諧の附意に「ぶらめく酢賣の印」とあるも此物をいふか

【庭訓往來繪抄】貞享五年（元祿元年也）印本に此圖あり

【俳諧三疋猿】寶永二年印本前句川船にめしする時は漕すて、里白附

句 酢の看板はしらぬがちなり 水甫 此句はいづれも看板をさしてい

ふが聞とれがたけれど、しらぬがちといひ本朝文鑑國の花等撰者の同じければ彼こしきの事をいふなるべし

【高わらひ】享保元年丙申六月序「酒屋の看板に矢はづを出すはどうした譯だ、あれは人のいるやうにとの事さ、そんなら酢屋のかんばんにすいのうの底ないものをするはどうじや、あれはなんぼ射ても酢矢

酢屋



【人倫訓蒙圖彙】元祿三年印本に載る看板如此

こゝに圖したる【人倫訓蒙圖彙】に「和泉の酢名高し或書に酢は聖人も好み給ひしとなり歡喜の事にも酢食して眼を開かしむるとあり、されば老子は西に指さして酢を求、釋迦は二君子の酢を愛し給ふをよんで酢吸と號し給ふ、酢坪に右の三像を畫いて三吸とも酢吸ともいふ」とあり依て壺より酢をはかりて賣る畫あり、古く【七十一番職人歌合】にも酢賣の側に壺をするたり是等より移り來りしをおもへば壺の看板は古くよりありしなるべし他國は知らず江戸にては三河町にあり

又一種は竹を編て小さき簀を作りてさぐるなり是は簀を酢に通はせたる謎なるべし、出羽奥州の地に多く

には往來の人の津をびくらん云々」こゝに酒寄と對にいへるを見るべし

明曆萬治の頃畫ける小屏風に此圖あり



此圖享保十七年壬子千翁が歲旦帳「証のかづら」に見えたり

によつと出る初日や潜る酢看板 菱角

【百人染】寶永年間印 此書俳百人一首にて閑鷗といふ人の獨吟なり

本不角序

「月と見る酢屋の軒端や宵の雨 坂上是則」

【俳諧國の花】寶永元年 神遊の巻 すげなきは

酢の看板と冬の月 支考

此の倉の衆といふ俳諧の書は能の狂言を題にせるものなり

酢はじかみのところに此圖あり下に籠にいれたるはじかみを畫きたり、發句は看板の事にかゝは

らざれば不載

せつかいば味増の看板なり、これに酒ばやんと醉人の曲物なを載し圖を幽の門人探なりとぞ



【俳諧倉の衆】享保十七年 撰者豊島

左衛門、同彌右衛門とあり

又近く俳諧の高點集【生身魂】に「酢屋の輪を拔る氣もなく拔る蝶 巨洲」と云句あり此集巳の年との

みありて年號なし或人寶曆十一年なるべしといへり

【増補むかしく物語】明和元年 仲慶増補に曰「昔は酒屋の軒に

杉の葉にて球のごとく拵へたる酒林といふ物あり尤九月頃新酒のくだる時分には田舎より拵へて賣に來

るそれを買てかけたるよし近年までも本郷の末四ツ

きげたをちやつ／＼とはしりわたるとかたりごととは「櫛子」といふ器の名をおぼえて漸に此話を解し得たり、今も貴人は皿の類をちやつとのたまふが私ごととき賤しきものはさら／＼知らずと獨笑」【夢見草】明暦二年 休安撰 冬がれはちやつよりふかき山もなし重房」【俳諧蒙求】延寶三年 印 本惟中著 つれ／＼なるまゝに添たるからしあへ 惟中」ちやつよりふかき奥の山里同」【毛吹草】寛永十年 五年 世話の部「ちやつよりふかき事もなし云々」

○蛤貝にて雛に飯を備ふる事 町雛、雛賣、大程雛、奴雛

【俳諧毛吹草】寛永十年 五年 土産門和泉國の條に町雛、注に魚相の物也とあり、按に美麗なるを大内雛といひ魚相なるを町雛といふ歟、内裏棕ちんそうなんどいふにてらし合せ見るべし姿より名づけしにはあるべからず

是は予が心覺に書つてをくにて此説かならずよしといふにはあらず 人々花美を好むによりて町雛はすたれて名だに知る人なきやうになりゆきしなるべし、或人曰町雛は今いふ立雛なるべし

【七十一番職人歌合】よろひざいく 此ごろのならひなりけり町かぶと星見えぬまですめる月かげ」

因云明和安永の頃迄は雛賣といふものあり乗物、

行器、雛の道具京雛やに人形だとよびきたりしは今の老人は能知るところなり天明の頃より絶し歟予がものごころおぼえしよりは此商人を見ず

【俳諧何の岡】延寶八年 印 本不撰 振賣や御幸またなん内裏雛

不門」江戸の吟なり延寶の頃雛賣の有し證となすべし 【續の原】元禄元年 印本不撰

雛賣はゆかしき戀のよすがかな 立些」さて京雛、下り雛、后雛、帝雛等の句はあまた見えてうる

さければ抄出せずたま／＼江戸雛の句あり【俳諧題林一句】天和三年 印本 江戸住調和撰 吾國の桃の花とや東木偶

交」【俳諧瓜作】元禄十六年 琴風撰 裸雛如何に手足の支離なる

琴風」頭の大きく手足のふくらかなるゆゑ支離といふなるべし、元禄より以前に裸雛の句未見、【一本草】寛文九年 冠せしならの京雛節句哉 兼豐 【俳諧一幅半】元禄十三年 涼菟撰 廣袖で出るや近所のやつこ雛 乙孝

此書は美濃國の撰なり奴びなの事いかなる物か未考

○酔の看板三種 井味噌の看板

酔の看板に三種あり其一種は壺の形なり是は今江戸にもあり其一種は曲物なり、【本朝武鑑】享保二年 支考撰 七の

巻高野九蟬が醋徳の頰に「さばかりの徳ある醋の看板に篩の底のぬけたるをぶらさげ、又六が門の酒帘

當時迄は人の知りし事なるべし【五ヶ津餘情男】元祿十五年印 卷の五「春の日もさえかへる風に、こたつ蒲團心

ぞさむいはたれぞと手なゝくをりふし清八さんたして旦那およろこび云々」清八はあげやなり是は人の

よろこびてをどりあがるを犬のさんたするにたとへていへるなり【夢見草】明暦二年休安撰 まつすぐにたつはさ

んたか犬櫻 一武【ちりととり】延寶七年常矩撰 それ雪は白犬とんでさんたをす 利次【犬の尾】天和二年歲旦帳 宿の

春禮者さんたのけしきあり」

○鳥籠井標子の事

むかしの諺に興なき事を鳥籠といふ、鳥を籠に飼ひては聲もかしましくうち見も黒きばかりにて面白からねば何にもあれ無興の事をかくはいふなるべし

寛永の末歟正保の頃歟の寫本に【鳥籠物語】といふ書あり其跋に「さる人此草を見て言葉賤しく心ちやつ

に似たり、おもしろき事はさておきぬ、をかくしもなしと申されし依て此物語りの名とす」とあり、草はシタガキと訓か草紙の脱字歟ちやつといふも當時の

流言なるべし

又元祿五年印本【俳諧一字幽蘭集】沾徳撰 戀の部發句に

蚊屋にひとり鳥を籠の夕かな 露傾」てらし合せて考べし

一友人曰、此諺ちかく【繪本茶話鑑】享保十四年印本 にありとて彼書をおこせたるを見れば西川祐信が筆にて鳥を

籠にいたるところをかきて「十月頃の東山の景色と聲のあしき素人淨瑠瑠と錢のない談合とはおもしろからぬもの鳥を籠に入て見るにたぐふべきか」と

いふ詞書を載たり、太田方曰前の【鳥籠物語】の跋に見えたるちやつといふを考るにちやつ皿の類なれば心あさしくしきといふ事なるべし是も一種の諺となりて何にもあれあさきとをちやつといひけんも知るべからず【饅頭屋節用集】財寶標木チャツ椀【古寫

本節用集】財寶標子、椀具とありといへり足薪翁按に此説よし【下學集】にも椀、標子とならべ出したり此

器のあさき物なる事は【塋囊鈔】壓添本つす 豆子、標子の事は大に淺し豆子小に深し云々【又醒睡笑】元和九

に平家をかたる事を集し條の話を友人曰此二物は赤き木盃なりゆゑに尤のさ

うし赤きものをいふ「橋のゆきげたをさらく」と走りわたるをやゝもすればわするゝそちは鈍なり、膳

條に、又淺き物の段に「橋のゆきげたをさらく」と走

にすはる皿にておぼえよといはれ、ある時又橋のゆ

を造りて奉ければ深く感じ給ひ汝が家には別に春のあるこゝちすれば是より別春と名のるべしと仰せごとありてより、しか名乗るとぞ古老の傳へてかたりける其以前の
名未考【延寶廿歌仙】延寶五
年印本 別春や上野歸りの道

すから 縁糸子」句意は聞えし如く上野の花のか

へるさに廣小路の別春が見世の花を見ればべつの春ともいふべしといふ吟なり【江戸廣小路】延寶六年
不卜撰 花

や雲別春が目には吉野紙 吟市」吉野の山の櫻は

人丸が目には雲かとなん云々」とある古今の序の詞

をかりたる句なり當時はや吉野紙を造花に用ひしを

見るべし【江戸惣鹿子】貞享四年
六の巻

作花師京下り

下谷廣小路

淺草並木町

別春
常春

とならべいだせり、又【俳諧江戸雀】正徳年
前句とり合
間印本にけり」別春が花は缺を雨露に咲 作者不知

○犬のさんた

犬にさんたせよといへば前足をあげとびつく事のありしが他國はしらす江戸にてさる戯をする者を見ず、手をくれといふが此餘波ともいはん歟三太は

でつち又小僧などいふ下童の通稱なれば、かのでつちの狂ひまはるまなびをせよと云事なるべし【俳諧慕繁集】萬治三年印本
常辰撰
（常辰は立甫門也） さんたかや今朝たち初る戌

の年 義正」是萬治元年戌年の歳旦なり【異本卜養狂歌集】戌の正月よめる 春たつた霞もたつた日も

たつたこれぞさんたの戌の年哉」此卷中に寛文十一年とあれば寛文十年戌の正月の詠なるべし【俳諧江

戸廣小路】延寶六年印
本不卜撰 犬ざくら花にさんたの役もなし

幽山」以上二部は江戸の書なれば江戸にても此

戯をせしなるべし又、【花洛六百句】延寶八
年印本 さんたす

る獸ほえけん暮淋し 友靜」さんたする獸とばかりいひて犬の事と聞えし故此吟ある歟【西鶴一代男】

天和二の巻「吉田かたより申出して吉田はよし原の
けいせいなり此

中の御仕方總じてよめぬ事のみはじめよりあかる、

までとの御つたへ成程けふ切にあきました、御げん

も今より後はと申捨おもての見世に出、犬にさんた

させてあそぶるゝ事すこし口惜し云々」と、又近松

が淨瑠璃【梔狩劔本地】に「馬はさんたをするごとく」

とあるは馬の驚きて飛あがる犬のさんたするに似た

りといへる事なり、此淨瑠璃は寶永六年の作なれば

願ひもいとかけまくも露をしからぬみちおくの深
 きなさをくみあげて南無やだいの観世音枯たる
 木にも花さかせ今の若いにはきもしやれ風がさそ
 はいなるまいにまだ夜をふかいにさりとてはきぬぎ
 ぬせつく船むかひ箸折くべし酒の爛猫のあらせし坐
 禪豆月は待乳のこがくれにつげてたゞよふ村鳥ひふ
 みよをこめてかへるつらさにまたのごげんと神かけ
 てまだ見ゆる今戸橋しゝむかふ嶋ざきおごりありお
 しきりなだもつゝがなくいそぐ心はなけれども永代
 橋にぞつき給ふ」さて助六、文七、柏崎、松風などと
 と獨樂の名によびたるも故ある事なるべし助六とは
 當時行なはれし一中節助六の道行一段かたるうち舞
 ふゆゑの名歟これも床軍談に合せ見るべし文七とは文錢七文つらぬ
 るゆゑの名か發句に文六とあるもおなじ言なるべし
 六文つらぬを文六といひ七文つらぬを文七といひしか
 柏崎、松風はたれゝも知る
 如く謠曲の名なれば是も彼うたひをうたふうち舞ふ
 といふ意か松風は回轉する音によりて名づけしか猶
 考べし【諸分床軍談】寶永正徳年間印本五の卷に、大阪新町の事
 をいふ條に「勘七太鼓持の名なり紙入よりはした錢を出し金
 入の煙草入きりたちてさつそく錢にて車をこしらへ

奥座敷へもつてまゐりて禿をまねき此車は京では錢
 ごまといひ江戸では錢車といふいまだ爰へは爰は大阪をさす
 今がはじめてぢや女郎さまがたにかうよりをかけて
 からまはしておめにかきや此舞ふうちに三味線なら
 すがゝき三遍引く間淨瑠璃なら道行ひとつかたる間
 たしかにまうてゐるほどにおなぐさみにしてごらう
 じませ」とあり玉くしげにいふところと合せ見るべ
 し一中節助六の道行は人のしるところなればこゝに不載享保三年正月若縁勢曾我に
 二代目市川團十郎外良賣のせりふに「先一チりふあ
 がつてごらうじませい口のうちのすゝしさがかくべ
 つな物くんじうのんどより來り口中ひりやうをしや
 うずさるによつてしたのまはる事が錢ごまがはだし
 でにげる云々」とあるも享保のころまではかの錢ご
 まのおこなはれしゆゑか、今の錢ごまは土にて作り
 浪錢の形をおししんちゆ泥にてはづかに粧ふのみ予
 がおさなき天明の頃よりもかくの如し初にいふごと
 き美しいなるは未見

○別春が造花

造花師別春は京師の者なり、後江戸に來りて上野廣
 小路に住す、寛永の頃とやらんやんごとなき方に花

めんていきのみよきにあらすたち妻はじんじやうなれども何とやらんすげなきやうに見ゆけいたけくおんぎよくしたはしよき女がたのへんげ、いにしへの玉もの前ならんや座はいとこつき水公なるのよしぞであらまし〜

わつさきといつもや見たき伊せおどり」

主膳、是等は禰宜町にてかくれなき美男拍子きゝの聲よき者なり、是等寄合かい節といふ歌をうたひ出す諸人殊の外感にたへ中略その引つゝきに梅がつまきぶねなどといふ長歌も此ものども作り出したり

【一本草】寛文十二
年寫本「是ぞうき世の中村が芝居に並ぬる

輩は清き流の落て來る瀧井山三が舞の手に部羅坊茫となりうかれ【舞曲扇林】に中山さよの助といふものを評して曰「今狂言づくしにいたりては玉川千之亟瀧井山三郎松本さらし此さよの助の外は類なし」

○錢獨樂

錢獨樂といふ物古き冊子に見えず寶永の頃より起りて大に流行し事あり、白梅園鷺水が【新玉櫛筒】寶永六
年印本三の卷に曰「香山梅之助といふ人あり獨樂を翫びて樂とせりある時の暇に文の錢を六錢七錢乃至十錢と繋ぎ貫きとはすに筆の軸をもつてし別に心木を通して糸を巻て回轉の機をまうけ拳に勢をなして急に糸を

挽はなつに其形しほらしく幽にやさしかりければ錢獨樂の爲に自ら記を書て曰新玉くしげの文はたゞ要
なつものみ全文にあらす

獨樂よ〜汝時を得たり、綾錦唐織古金襴の衣服きらびやかに着こなし眞紅紫の組糸を帶とし猩々皮羅紗の蒲團の上に象牙玳瑁の杖をつぎ金錢を鑲つる下駄をはき一曲の舞に錦の袂を翻せば滿座願を解て悦びの聲を發し珍客をもてなすの第一とす此舞日にそひて蔓り洛中の男女貴賤をいはず家業を疎にし公用をかきても汝が舞ぶりの久しからん事を願ひ汝が藝の他に勝ん事を思ふ事色を好むが如く妓女を仕立てが如し五節の舞霓裳の曲すがき永代橋何くれの曲に長じたる物は秘藏し賞美せられて時代詩繪の箱の中に洒打綿羽紵羅縐の茵を敷て豊に眠り青銅鳥目のおさな名を削り助六といひ文七と名乗柏崎と呼ばれ松風と號し云々」とありするに「文六や臍の緒きつて花二寸」といふ發句を載たり、足薪按にすがき永代橋の曲に長じとは、すがきを數遍ひくうちまひやまざる事なり下に載たる床軍談
に合せ見るべし永代橋は小唄の名なりこれも彼小唄をうたふうちまひやまざるをいふなるべし元祿十六年印本【松の葉】三の卷に、永代橋

られし役者なりきえてはかなきとあれば延寶延寶九年印本

【吉原三茶三幅一對】江戸町二丁目大黒屋内初島とい

ふ女郎を評する詞に「面ていよしされども少しおも

てしやみたまふあしきといふ評にてはなし、さる人

のいはく瀧井山三郎によく似たるといふさりととはよ

く見たてたるぞしかし、瀧井ははやくみまかりける

に君はすゑながく全盛し給へ云々」是も延寶のはじ

めに歿たる證とすべし又元祿十三年印本【俳諧三上

吟】附合の句に前手向て笑ふ盛物の褒 其角附

顔見せも瀧井時代のなつかしき 序令「瀧井山

三郎は梅がつまといふ狂言に名ありそのづ役者もの

がたりに見えたり【虚栗】天和三年小袖着せて俣匂へむめ

がつま 其角「元祿の頃までは彼が名の人口にあ

りし證とすべし又【男色大鑑】貞享四年六の巻江戸の事を

いふ條に「野良の花の姿を櫻木に彫りて一冊とせし

を居ながら美形を翫ぶ事重寶にながめくらす牡丹芙

蓉の色を諍ふいづれ愚かならず是まで美しう筆を盡

せし中に惱みたゝならぬとはや戀風は筑波根の峯よ

は病中に衰へ芳體眠るが如し云々」と見えたり是等
を以て昔はおこなはれしかぶきものなるを思ふべし
【都曲】元祿三年院の梅衣かけらし譽かな 都雪【二
代男】天和二年五の巻京師靈山の事をいふ條に瀧井山三
郎の名見えたり是は寛文九年の頃をいふなれば彼は
京師の産にて後江戸にくだりしか可考（梅がつま入用）
【むかしく物語】「六七十年以前の昔福宜町の狂言
座勘三郎座にて多門庄左衛門野良に出来嶋小さらし
花井才三郎、玉村吉彌、玉川千之丞、山川内記、玉川

【垣下徒然草】

瀧音踊拍子、井

愛震聞欣、山可

ヒタガル下高ノ號、三千

雲貌君

ふりまさる雨も

涙もいかばかり

かほくまもなき

袖の色かな

【垣下徒然草】

「瀧井山三郎



みむろの紅葉かさねのたもとをかへす風のたよりを
扇の手になよ／＼とせし舞の姿はながめにあかみ
まくほし、よはひふけすぎておもはしからずたけた
かくほそりてあし、小うたわたりなみなり

【野老歌仙】寛文十三年頃、作者
千之壺が條にあり 車しかけし玉川の水

玉川主膳判の詞卯の花の面影たえぬと詠し玉川の里

が舞の亂曲扇ぐるまにはこりやまはらねばならぬ氣

ざし【延寶廿歌仙】延寶五年
桃青撰 前 若勘三引むすびたる萩

薄 綠京子附 菴淋しき主膳道心 同 足薪

翁云【野老歌仙】は主膳いまた法體なさる以前の吟

にて【廿歌仙】は法體なして後なり、是を以て時代を

考べし又【古今役者物語】延寶六
年印本に曰「さてそれよりも

打つゝき流れも清き玉川のせんのじようづに主膳と

て野良若衆の水上市なりさて又瀧井のあはれともきえ

てはかなき山三郎、玉川主膳は善に入、諸國修行の

身となりぬ是みな昔がたりとなり」とあり、是に二十


歌仙を合て法體なしたる證とすべし、寛文七年印本

【吉原讃嘲記】に京町三浦屋四郎右衛門内吉野といふ

遊女を評する詞に「此君扇おつとりひとさし舞給ふ

姿は古への靜が、しづのおだまき線かへして見るべ

くもなく今ほど境町にて名をよぶ玉川主膳があふぎ
の手も見たくなる云々」此詞に【野老歌仙】の判の詞
を合て舞の上手といふ證とすべし、又近年刊行なし
たる【戲場一覽】に「玉川主膳といふも別て美男すぐ

れて名高し、紋所  三がいびしに 三ツ巴 爪の内に 五三の桐 等

をつくる其頃の狂歌に「にごろじな其玉川の流れこ

そ主膳の君が鏡なりけれといふ事を載たり其頃とは

寛文をさしていふなるべし、主膳が事むかし／＼物

語に見えたるは千之壺の條にあり【舞曲扇林】河原崎
權之助

作元祿年
間印本「玉川主膳法名頼信、主膳は過去りし者なれ

ども六態の鏡なれば申す也主膳は實、景の二ツを得

たり實は其聲雅をよくおもひ入て喜ぶべきをよろこ

びかなしむべきをかなしむなり、さればこそ横笛夕

がほなどせしに哀れに感ありて見物の老若袖をしほ

らすといふ事なし、景はけしきを舞ふ右にいふ風吟、

遠近高低方角よく工夫して舞し、道行猶上手なりそ

の頃迄は道行まふ人まれなりしが今は人ごとにしか

も長き道行を舞ふ如何

因にいふ【役者物語】に見えたる瀧井山三郎も人に愛

【俳諧題林一句】

天和三年印本
江戸住調和撰

遊水」といふ句あればこの名天和前よりあり、按

に昔は汗をいとひ麻の類を裏につけたる夏の帯なるべしこゝにうつしたる畫圖は延享二年の印本果然が撰みし【俳諧時津風】に見えたり是當時江戸にて流行りし物をあつめしなり晝夜帯ともいひし故に此吟あり、又【延享廿歌仙】紀逸が獨吟歌仙に飛鳥川帯にも今はうら表」といふ句あれば中昔廢れて延享の頃より又行れしなり

足薪翁記卷之三

○玉川主膳

玉川主膳は玉川千之丞と時を同じうせし歌舞妓役者にて舞の上手なり何なる事歟若くして出家せしかど千之丞が出家せし事を知て主膳が事を知る者まれなり主膳は原ト京都の産にて寛文三年市村座にくんだり、僧になりたるは寛文の末歟延寶の初なるべし

【垣下徒然草】

玉貌満ニ豐島一

つかさどる河瀾瀾ニ坂東一

主歌舞扇曲

そなはつています膳在 太夫風

にござしなその玉川のながれこそ主膳の君のかゝみなりけれ



足薪翁記卷之二終

【剝野老】

寛文二
年新傳内座
玉川主膳
年印本

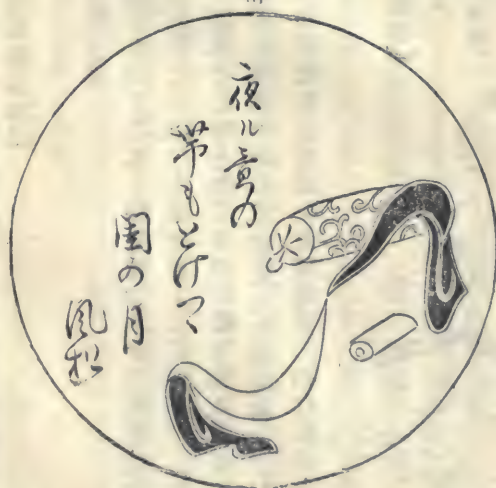
よるの錦と

【日本廿四孝】三の卷に「奈良の都に橘の諸兄といふ者あり一子を市若丸といふ、はじめは時にあひ榮えたりしかど世かはりぬれば莊園も召かへされ、つひには親子三人乞食の如くなり、同國三輪の里に月に六度の市たちければこれをたよりてかのほとりにかたばりの庵をむすび、市若はちいさき箒をもちて市のあとにこぼれたる米穀をはきあつめ兩親をやしなひければ里人はかれをあだなして市守とよびけり諸兄は市若が十二のとしの頃盲となりければなほいたはりつゝかしづくほどに此孝行の徳によつて丹波の國司の娘吉祥姫とふしぎに夫婦のかたらひをなしいにしへの從類けんぞくをあつめ櫻井といふ所に館をつくりむかしにばいしてふうきの身となりければ時の帝此事をきこしめしかしこに御幸ありて橘の萬財長者と名をくだし給ひけれども世の人はたゞ市守長者とぞいひける、又ちかきわたりに堂をたてゝ文珠の尊形をすゑたてまつる、今あべの文珠といふは是なり」以上はたい要をつむのみ全文にあらず、此やまと廿四孝は了意が作にて萬治の頃の印本なれどもまったく了意が其刻作りいでもものがたりにはあるべ

からずふるきさうしによりてかけるか又百餘年のむかしは此事人口にありし歟、なほものしる人にとふべし【天和三年歳旦帳】橘や菓子長者のかざり臺笑白」此句橘の萬財長者をいふ歟
(仙果云、これは常州の長者にて前件と大に異也これをもちりとかしこにてはいふ歟未考、原書にも外人のかきておくりしまゝなとちこみおかれたり)

○鯨帶

兩面帶



すと云【南都名所集】延寶三年印本
村井道弘著 二の巻、東大寺鎮守

八幡宮云々といふ條に「此社南の方なる石塔は聖武皇帝の御剃髪を納め奉りし所なり新造の屋には安阿彌作のあみだ如來おはします、又五却思惟の阿彌陀あり是は春乘坊太唐より得てかへられしとかや善尊大師の作なりといひ傳ふ今一體は五却院にあり側に大黒辨天ありこれは市守長者の持佛といふなり」十の巻「松尾奈良里一里此等は大武天皇の御子舍人親王の御願なり中略弘法大師の御作の大黒あり市守長者の安置佛とかや」【庭訓往來古注】天文弘治頃の寫本「運慶は後鳥羽院の時人なり其弟子淇慶同安阿彌陀佛と云者あり今の佛師は其末流なり」

【宗因釋教百韻】延寶二年
前 歌舞妓ばさちとあそんだがまし」附あんあみの作じや笑顔じや雲の月」かくあればおほく歌舞妓の少年にのみたはぶれていひつる詞か

能の狂言【佛師】すりが佛師になつて田舎者をあざむく詞「うんけいたんけいあんなみというておぢやるそれがしはあんなみでおぢやるあなか」にオケ、か聞おもひました云々【和州舊跡幽考】延寶九年印
本林宗甫作 二の巻、法

華堂又金鐘寺云々といふ條に「此南のほとりに新造の屋といふあり善導大師のつくり給ひし五却思惟の靈像ならびに市守長者の大黒天安阿彌の作りし彌陀などあり云々」こゝに安阿彌の名は見えたれどいづれの時の人か未考又こゝにいふ市守長者も古くは人口にありしとおぼしく、【紅梅千句】承應二年
なるべし 附合に

前 長者の家をつげるゆゝしさ 可頼」附 市守が塀の柱の根はくちて 長頭丸」【懷子】萬治三年
重頼撰 初鯨

つけばいちもちり長者かな 珍也」【玉海集追加】寛文七年

市守は鯨つきてや長者號 重正」【俳諧玉手箱】延寶七年

印本蝶々子撰 下谷長者町といふ所にて 言の葉や茂る一も

り長者町 大阪 宗因【拾芥抄】五の巻十五
大寺の條 興福寺、

一守長者宅云々」文正草紙、鉢かつぎ姫の類にて室

町家の末の頃作りまうけしもの歟、市守長者と標題

をよぶ草紙あり今たまゝ傳はるものは寶永の頃刻

たる本なり、淺井了意が編なりといふ日本二十四孝

三の巻にあり

もし當時、かの新造の屋俗にいふ三月堂
のはとりなりの開帳などあ

りて市守長者安阿彌の名世にしられたるか猶たづ

ぬべし

三右衛門おやにおとらぬきやうな者とたれもゆうせん扇の丸い千代をいはひの半四郎座へ」

幽禪は加賀國の産にて書を無禪に學ぶ、加賀染をよくし後に自分の工夫にて一流の染をいだしゝなりとぞ

○安阿彌の作井市守長者

むかしの諺にかほよき少年をさして安阿彌の作といへり【野良虫】といふかぶき子どもの評判に此さうし明暦萬治頃の

本印



れんとび權之助内

加川 右 近

いまだ少年なればなにはのよしあしだめんもおとなげなしさりながらむまれつきの面體はいかさまあん阿彌の御作にてもあるべきか心だておむくにして殘所なし藝も少年にはめづらしきとの取さたなり云云」野良虫は京都板西鶴が男色大鑑の引書にあり安阿彌の名東鑑たづねべし【古郷歸江戸咄】貞享三年印六の卷に「少し鼠戸もくつろぎたりいざ入て見んと内へ入るに中々聞しは物かはにて天人の影向菩薩もこゝにあまくだり給ふかとうたがふばかりの美少年髪けだかくゆひ薄化粧して小袖の衣紋じんじやう

に着なしかりやうびんの聲をあげて小歌をうたひ楷がかりにねりいで給ふを中略見物の人々中略くちを耳のわきまであきて涎を流し餘りおもしろさに聲をあげて我死はたすけよたへがたやとよばふもあり又はうんけいたんけいあんあみの御作かちよいゝなどとのゝしりてたれさまかれさまと其名をさしてわめきける云々」かぶき座をばいづれさゝす堺町ふきや町の事をいふ條に見えたり

一盛長者屋鋪跡

長者屋鋪は水戸城の西郭袴塚村

にありて今に城郭の跡現に存す、破瓦田畝の内より出づ皆布目あり文字の付たるもあり又其地御藏の前といふところより糶の焼て堅まりたるもの澤山に出るなり、此所民家五六軒あり、土人の傳説に昔堀川院寛治年中八幡太郎源義家公陸奥守と成て常陸を経て任に赴く、長者の宅に宿る時に十万の兵衆に一同なる膳部にて此を饗應しければ義家公謂らく如此の豪富の者他日朝家の憂をなすべしと既にして奥州に至り家衛武衛を撃平げ京に歸るとて又彼長者に宿るべし此所に至り急襲撃平てこれを滅す此時長者金の雞の香爐を抱て那珂川に投て没す其處今に草逆に生

に隠し緋むく、上には卵色の縮緬に思ひ入の數紋、帶は薄鼠のまがひ織、羽織はごろふくれん黒きに嶋天鷲絨の裏をつけ、町人ごしらへ七處の大脇差すこし反らしてあい鯨を懸け鐵の古鏝ちいさく柄長く金の四ツ目貫うつて鼠屋が藤色の糸平印籠に色革の巾着瑪瑙の二ツ玉、唐木細工の根付、扇も十二本祐善が浮世繪、こぎくの鼻紙、運齋織の袋足踏、中ぬきの細緒をはき、大草履取に笠杖もたせて名ある太鞍のつくこそくらがりにても御女郎買とゑるぞかし」とあれば浮世ぐるひする者の専らもてはやしゝ扇なるべし又【好色三代男】貞享三年五の卷に都の名物をならべていへる條に「柳屋が下緒、ゆふせん扇、音羽かるやき、今の世のはやり物云々」又吉田半兵衛が畫ける【好色訓蒙圖彙】貞享三年印本の序に云「宗傳から茶のからき人目をしのびても、由禪扇の折をうかうひ云々」又【人倫訓蒙圖彙】元祿三年五の卷に「舞扇師 小川通上立賣の下にあり近世由禪扇とて一風あり」又西澤一風が作【御前義經記】元祿十三年印本六の卷、大坂新町へ通ふ人のことをいふ條に「戀路の里に行人めんゝがおもはくありやなしやの身つくろひ、さりとば繁昌のと

ころあるひは紙入長命草たはこいね入させるたばこに友禪扇子焼まんちうの串ざし爰にもあるは貸あみ笠」又【傾城色三味線】寶永年中印本四の卷に「爰においた扇が見えぬ我等が持ちしは十一本骨のゆうせんが繪にゆく水に茶筌をかいてながれをたてるといふ古事ぢや」といふことあればいうせん扇といふははんじ物の團扇のたぐひ歟【野傾咲分色卍】享保三年印本一の卷目錄に「ゆうせん扇の要は銀づくり」とあれば天和の頃よりおこなはれ享保のころまではありしものなるべし

いうせんは世にしられたる京都の染物屋にてざれ繪をよくす、今もまれゝにつたはりてよく人の知る處なり、或人の曰いうせんは原友染にてさまざまの色を友に染るといふ染物の名なり、それを後に我名となして由禪、幽禪、祐善などとさまざまに文字を書きかへじといへり

【吾吟我集】元祿年間寫本「骨折りと主君の仰せられければ骨折と御意は扇の要にてつかはるゝ身のはげみゆうせん、」撰者慶葉の歌なるべし【まや山開帳かたおんど】元祿二年「しばゐたいこにうかさるゝうたひほうしものにこゝ笑ふえびす橋角のやぐらを見ればまるに嵐の

もおしはかり思ふに寛永の頃刊行なし、冊子なるべし

かく書る後【長者教】の古印本を得たり果して寛永四年の印本なり、但し近松はかの名をかりたるのみ全くの別本にてさせは傘等の詞はなし【紅梅千句】承應頃前長閑にも千部の經をおもひたち

友仙附長者の家をつげるゆゑしさ 可頼

此句はたしかに聞えざれど、きやうに長者と附たるはそのことのやうかとも思はる

○酒中花

やまぶきの莖の眞しんをもつて花及びさまざまの形を作り酒に浮むれば開くやうにせしものを酒中花といふ此もの古くは見えず延寶頃の俳諧の句に見えたるが初めなり、西鶴が【俗つれぐ】元祿印本五の巻に大坂天満天神の社のほとりの事をいへる條に「同じ横町に作り花の見世をいだし云々」かるい世帯を柳にやつて櫻をある時酒中花にまかけ是にて小錢を取るやうになるも元ひとつなる口よりおもひつきぬ云々」と見えてさし繪に長崎酒中花、つぐり花からくりと書たる看板をいだし、處を畫けり、又延寶六年言水撰

【俳諧江戸新道】春の部に 酒中花やみぬ唐のよし野川 松木青雲 【洛陽集】延寶八年 雪國へ酒中花さそへ

歸雁 計也【俳諧雜巾】延寶九年 鍋の桃いきた酒中花といふべし 一有

此等の句を合せ考ふるにははじめは漢土より渡りしもの歟、又は漢土よりわたりしと云ひ實は長崎にて作りておくりしもの歟、西鶴が文によれば元祿の頃ははや何處にても製せし事なるべし、江戸淺草の名物のやうになりしはいつ頃よりか未考【江戸向の園】

延寶八年 柚の花は是酒中花の盛なり 少羽 是は柚の花

を酒中花にとりなし、句なり【後】延寶九年 酒中

花や彼赤人の詠殘し 一中【東日記】言水撰 酒中花

や今刈萱の身にしあらば 言弓【題林一句】天和三年

撰 薪の能酒中花の精顯めり 青村子 等の句あれ

ば延寶の頃よりもつはら世に流行りしもの歟猶たづぬべし

○いうせん扇

昔いうせん扇といふ物おこなはれたり、風流なる名なれば俳諧の句にもあるべけれど未見西鶴が【好色一代男】天和印本七の巻に曰「人の見える程の大臣は肌着

錦抄】寛文以後わたりし草木のうちに黒船つゝじ、

唐つゝじ、大キリシマ等の名見えたり、是等も彼つ

ゝじのおこなはれし刻もちわたりし物歟【新續犬筑

波】萬治三機りうさう筵まきて待ちぬるゝひさうするつゝ

じの宮やおそからん 山水【夢見舛】明暦二年印本寫繪に

かくは金岡つゝじかな 賴廣【續山の井】寛文七年ち

り敷やりうさうつゝじ花筵 不及【古糸屑集】延寶三年重

安一桐島二番に源氏つゝじかな 意朝【落花集】三

寛文十一年印本以仙機一枝をさゝぐるらんつゝじ哉 寛足」

色好みしたるは源氏つゝじ哉 勝長」

○長者教

近松門左衛門が作の淨瑠璃【博多小女郎波枕】享保三年印本

に長者きやうといふ曲節事あり「なべの墨では細眉

つくり、まべのきればまびりの妙薬、水なき井戸は

はしごの人物、鼠の尾まで錐のさや、させはせ傘、

人にかすな蛸節云々」なんどありて總て吝惜なる事

のみあつめたる文章なり

按に寛文の書目録に長者教一冊とあり天和元年の直

段附書目録に三分とあれば紙敷の僅なるものにて古

く長者教といふ冊子のありてそれにならひて作れる

ものなるべしとたづねもとむれどもいまだ其書を得

ず、元祿元年に刊行なしたる西鶴作の【日本永代藏】

を一名【新長者教】といふも古き長者教に比しての名

なり、此【古長者教】延寶の頃迄は世におこなはれし

か俳諧の發句に見えたり【江戸廣小路】延寶六年前 じた

い京衆はしはいが疵ぢや」附 長者教終に破れて

失せにけり 兼豐【江戸向の岡】延寶八年虫 しばむ

しも撰いるゝや長者教 蝶々子」兼豐が句のごと

く破れてや失せたりけん、さきにもいふ如くいまだ

此さうしを見ず

さて近松がかけるうちにさせはせ傘といふことは今

もまれゝにいふ人あり、鼠の尾は錐のさやといふ

ことも俳諧の句には見えたり【うたゝね】寛永頃（戊午考）

ふべし子供を杖にして立にけり」藁三筋千貫絹の長

者教 憂雲【續獨吟集】寛文年間集刻脇句きりのさきほど

とがる虫の音 珍也」ながき夜や鼠の尾にもたく

らぶらん 同」是は萬治の頃の吟なるべし、彼【長

者教】にならひての句歟、又これ等のことばさきに

ありてそれをあつめて長者教を作りしもの歟、さき

にもいふごとくおのれいまだ此【長者教】は見ざれど

會に順也とあれば寛文八九年の頃改名せし歟萬治の頃は京堺町に住貞享の頃は奈良木辻に住めり五節句に此日俳諧を捨つるとて 菊の後花なし節句なし愚詠なし」とあれば此著述をかざりに俳諧を捨てしなるべし當時繪櫃の注に土佐日記をあげたるはしたはしき作者なれど其名をだに知る人なきは彼が不幸といふべし此節句といふ標題字眼は句の字にある歟【入子枕】正徳二年印本二季の雛まつり【伊丹句合】享保十九年九日の雛を見思ふや染髭籠 徳や」

○躑躅のはやりし事

躑躅の花を愛、さまざまの奇花のいできしは寛文の頃よりはじまり延寶の頃盛んにてありしなり【玉滴隱見】卷十五寛文三年の或記に「無用ノ雜談或ハ鳥獸ヲ養ノ類、躑躅、椿等當時花鳥ヲ翫ブノ様子ノ事總ジテ可爲學問妨事云々」と見え延寶三年季吟、湖春、正立、三吟の【花千句】に 氣に花はひとへなるよし八重は猶 湖春」はやる躑躅のいろ／＼の色季吟「延寶五年印本【秋の夜の友】三の卷に「此ごろ世にはやるものは五月つゞしにて上下もてあそぶ、いたりてまづしき人は蛸貝に植てなりともさつきつ

つじもたねば人でないと思へり、さればもとむるにきたり愛するにひかりをますといふが如く赤き、白き、紫、うす色、八重、千葉、萬葉、咲わけ、いろ／＼ありて何れもおの／＼色をあらそふ、さらば我ももとめて見ばやとおもひ二三種四五種とあつめければ源氏平家ははたじろ、はたあか、白く赤くさだまらぬは兒手柏のふたおもて、名におふ十五葉の名月も有明々の季月、清白はみな白くらかんいふその紫は花のゆかりの名もしるし、かやうのしな／＼おほくなりて餘の草木の花どもは顔色なきが如くなり云云、是れ程はやれども世に白き千葉のさつきつゞしなき故に諸國をあまねくもとむる云々」是等證とすべし、

又天和二年印本【武藏曲】千春撰、江戸の人 錦とる都に賣らん百つゝじ 麋時「一花ざくら二番山吹 千春」【かなめいし】寛文二年印本序文に前文略「千えふ萬えふ梨月名月などいへる五月つゞしもしな／＼ほころび云々」寛永に百種の椿ありしが如く、百つゝじといふがありしなるべし、壹貳番と段をきりて書きたるは櫻と山吹と、つゞじの名にとりなし、句なり【草木地

タルヨリ例トナリタリ右小櫃ヲ京大坂ニテハオダイ
櫃ト云フ彌生ト重陽トニ此小櫃ヲ賣ル京師ニハ重陽
ニモ雛遊ビスル故也、土佐日記ニ山崎ノ小櫃ト書ケ
ルコレニヤト云ヘリ」とあり神明の繪櫃にさま／＼
の説あれども此説おだやかにしてよし是は後の雛の
はじまりてよりそれに賣るために下し、船の遅くな
りたる歟又京師に後の雛ありてその頃江戸に後の雛
なきゆゑ神明にて賣りたる歟此ふたつのうちなるべ
し神明の市は九月十一日より廿一日までなれば三月
の船のおくれたるにはあるべからず藤を蒔きたるを
いまだ見あたらねど紙雛のもやうにもふるくよりあ
れば藤をゑがく縁のなきにもあらず猶たづぬべし
種彦云、臺とは飯の事也室町家の頃の女詞に多く見
えたりオダイ櫃は飯櫃なり五節句にある御臺匙は杓
子の事なり、又延寶九年常矩が撰みし【俳諧雜巾】重
陽の句に 櫃の鶴栗の林にあそぶなり 笑種
とあれば鶴を書きし事もありしなるべし又同書に、
櫃の蓋栗のきせわたなるべしや 一味 けふや櫃
おきあげにかける白菊は 如葉 等の句あり一味
が吟は聞えし如くなり如葉が吟は彼利久妓とかいひ

ておきあげに菊を書きし器物ありそれを今日つかふ
料に調じたる物かとがめし句歟なほ考ふべし【大
阪獨吟集】延寶三年印 附合句 見わたせば花よ紅葉よお
だい櫃 鶴永 おだい櫃はつねの飯櫃の事にて繪
櫃にはあらねど小窓雜志にいふところとあはせ見れ
ば是も繪櫃の句歟花に紅葉よの句つねの飯櫃にては
きこえず【土佐日記附注】萬治四年印本 小櫃の繪或人の曰女
兒のもてあそびものに小櫃に丹青にて繪をかくなり
京都にて三月上巳、九月九日などにわらはべのもて
あそぶなり【其袋】元祿三年 風雪撰 山崎の櫃買てこよ雛遊び
も 因に云、先に引用せし【俳諧五節句】は京
師にてとりおこなふ五節句のさまを片田舎の者に知
らせんとて綴りし俳書なり正月の玉ぶりく、五月
のかぶと、七月のをどりのたぐひ百三十餘年のむか
しのさまをまのあたりに見るが如き事多く予【骨董
集増補ほりかひ】といふ冊子を著さんと其草稿へ書
載せおきたればこゝにはいはず又云、此五節句の作
者内田順也はじめの名は平吉【俳諧作者名寄】を見
れば梅盛が門人なり【玉海集】【新續犬筑波集】【早梅
集】の類に内田平吉とあり【季吟十會集】寛文十年の

の雛にもちふるゆゑ菊を書くにてはなく菊の繪櫃あるゆゑにそれにひかれて後の雛のおこりしなるべし、それよりのち三月三日にも九月九日にもちふるために菊と桃を畫きたるならん【五節句】に見えたる兩度の繪櫃の事を左に抄録するを見て知るべし

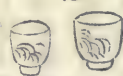
【俳諧五節句】元禄元年印本 内田順也著「三月桃の繪櫃内柳木地の櫃に桃柳を繪かく内に草の餅に赤飯も入る御臺匙といふ物添ふ是には繪なしおつぼ是五器也木地の挽物に繪あり、土佐日記に二月十六日今日ようさつかた都へのぼるついでに見れば山崎の小櫃の繪もまがりのおほちのかたもかはらざりけり賣人の心をぞ知らぬとぞいふなる。是節句前に賣る繪櫃なり再云、土佐日記附注にあり

繪櫃圖



繪物師細工也木
地に桃柳を畫く
ふたにも繪あり
大小寸方不定

おつぼ



大小あり
木地の挽
物あり

縮たる繪櫃に見する柳かな 順也 嫂もきけ繪櫃にかへる古柳 同 九月九日菊の繪櫃 櫃の形三月節句に同じ、其繪に菊をかくなり、内に栗も赤飯も入るなり御臺匙おつぼあり 種彦いふ是にて詳なれ

ば考ふるにおよふべからずかくいへばとて京傳をそしるにあらす世にありふれし冊子を引きもらせるは著者の誤なれど此五節句は友人尙齋が藏書にあるのみ類本を見ざる珍書なれば此書のめくりあはざるは京傳が不運といふべし後の雛に用る故菊を畫しならんとまで此書を見ずして考へたるは感すべきと也

【今様姿】寛文十二 維舟撰 若草の餅もこもれる繪櫃かな 金

貞 眞 大井川 延寶二 維舟撰 小櫃の繪まつりの洞貝や草の餅

千之 俳諧隱叢 延寶五 年印本 三月三日 とりあへず賛

したり繪櫃三日の作 似船 九月九日 柴栗に菊の

花咲繪櫃かな 但安 塵取 延寶七 年印本 櫃のひら

くる日小兒うるほへる柳の陰 如雲 緑青の松に

も聲や繪櫃うり 如葉 見えたりや櫃にふか草伏

見の花 宗雅 大湊 元禄四 年漢和生情始鮎肝、饗雛唐

畫櫃 幸佐 延寶の頃はや菊の繪櫃ある事此句を

もつて知るべし五節句にうちに栗をいゝといふに

合せ句意もよくしらるゝなり 又寶曆三年記 小窓雜

志 芝神明社中ニ賣ル小櫃ヲ社人ハ千箇ト稱ス

原雛ノ貝ナル故藤花ヲ畫ケリ一年上方ヨリ下セシ船

遅々シテ雛ノ節ヲ過ギ着船セシ故此市ニ出シテ賣リ

「昔女の髪のゆひやうは、みな名所の名におふといふまづ兵庫又は島田などいづれも所の名ぢやといふ云々」是は戯れにいふにて證とはなすべからず、もしこのかるくちばなしをきゝひがめて、さきにするす物の本には實事のやうにかけもの歟、又同じ萬治年間の印本【東海道名所記】三の卷に「かなやをさしてゆく男、なにとやらん物あんじ姿なり、何ぞ落し給ふかとへば、島田よりこゝまでかくれどもつひに歌袋の緒がとけぬといふ、馬かた聞て島田の事ならば髪をゆふたる事をよみたまへかしといふこれに心づきて「はたごやの女はちりのつくも髪せめて島田にゆふよしもがな」とよみたり、げに／＼春元の發句に「名にゆふやげにも島田の柳髪」此句萬治二年書あり印本【道中記】にある春元の句こゝに載たるが如しといへる面影侍るとてたどりたどり云々」とありこれも島田といふ髪の名あればそれにとりあはせて詠みたるにてこゝの島田より髪の名の起りしといふ證とはなしがたし、又【小町踊】寛文五年里の名に柳のかみや島田わけ 立圃春元の發句に似たれば書載せておきつるなり

○籠屋の看板 今云ふざるやなり

近年迄籠屋に看板をかけたることあり湯島えんまん寺のくらといふ呉服屋の前へいづる通りの西側なり今もある歟 形は藥玉の如きものを竹にて編みたる物なり、享保年間に刊行せし【じよく人百人一首】近藤助五郎池春盡に載せたるかごや






に此圖あり、又延寶七年の印本

【俳諧富士石】に見えたる初秋の句に 今朝の秋籠屋が軒に知られけり 調泉かゝる吟もあれば延寶のころまでは籠屋ごとにこの看板ありしなるべし

此【富士石】は江戸の俳人調和が撰なり調泉は調和が門人なり、これのみにかぎらず天和の以前の江戸の俳書はむかしのさまを考る事尤多し、悲いかな火災の爲にや失せたりけん今は其得る事かたし

○桃の繪櫃 菊の繪櫃

桃の繪櫃は雛の調度なり、京傳が骨董集にくはしく見えたれどすこし考のたらざる事あり骨董集に今京師にてひさく繪櫃の圖を出し其圖に桃の花と菊の花とふがきてあり 桃と菊を畫きたるは後の雛にもちふるゆゑならんといへり元祿五年の印本【俳諧五節句】を見るに九月九日に菊の繪櫃のことあり當時後の雛といふ事なしされば後

刀の足に付る鎖なり、其製銀の輪を細長く  如斯なるを二ツに折て  如此にして、二ツのわなのところへ  をいれて又二ツに折りて下のわなにしてむすぶが此兵庫鎖の製に似たる故の名にやあらん、貞享四年印本【女用訓蒙圖彙】に兵庫髻の圖あり古畫にあるところあはせ見れば少しはたがひしやうなれどおほかたはおなじ、近年までは遊女にありしが今はそれも絶えたりときけり 近年ゆひたるは古畫にあるかたちとは大に異 此髪の名遊女にのみ残りし故兵庫屋より始まりしといふ附會の説をまうけしなるべし、予がいふもおしあてごとにてかならずよしといふにはあらずさて寛文以後のさうしには兵庫髻の名あまたあり、悉くいふもくだくしければもらしつ、貞享の印本【一代女】三の卷に「當世の下島田總釣といふ事を結びいだし、さる御方へ御梳^{あけ}にみやづかへをつかうまつりける、其時にかはり兵庫曲ふるし五段曲見ぐるし云々」又元祿の印本【西鶴俗つれづ】四の卷に「四十四五なる女むかしを今に兵庫わけをかしげに淺黄うこん裏のしたぎ云々ぬり笠にめつきのくわんをうたせ、

いただきなしに赤いしめ緒、よろづいゆなる采體云云」とあれば此兵庫髻は寛永にはじまり貞享元祿にいたり廢れたるなるべし【中山集】黒髪はゆふにやさしき兵庫髻【京拾遺】寶永六言水撰 小波や頬出す瀬に手束弓言水」兵庫は高く笠も見ぐるし 季可」是もある物の本に島田といふ髪は東海道島田の宿の人、とめ女の風よりはじまりしと記したれど何によりてかくいふ歟其よるところを知らざれば證となしがたし、又あるさうしに島田萬吉といふかぶきもの、髪の風よりおこりしとあり、此島田萬吉の名は【山州名跡志】四の卷に寛永頃の操り芝居の太夫元の女なることは見えたれど一風の髪をゆひいだし、事ふるき冊子に絶て所見なし、按に是はしめたがねる たがねるは俗にいふたは の下略にてめまの通ひにてしまだといふにて島田はもとより假字なるべし、しまりよくたばねることなりと心得るがよし、これにもなげ島田、下々嶋田、かごしまだ、後家島田等の名ありてさまのかたちあり古畫の圖にあはせてくはしくは予が隨筆【還魂紙料】にいふべし 萬治二年に刊行なせし中川喜雲が【しかたばなし】に

うなうといふ事はやりければ頓て目出度よき事のあ
るべし云々」又【百物語】正保(イ徳)年中印本下の卷に「世の中
の時勢詞を俳諧にしたるとて百韵人の見せける其中
におかしき句ありとてかたるをきけば おしるには
よござんせうのからみにてあへものによきあのさま
のうど」ふるくはこゝに見えたり

以上知算が【獨吟百韵】のうちよりえりいだしゝな
り、末に判者作夢が詞書ありそのうちに「我ごとき
なんひんちは助が云々」といふ事あり、ちは助は未
考、なんひんとは愚なるものゝ事なり、元祿の頃の印
本【姥櫻】五の卷、浮世ぐるひをするものを嘲ること
ばに「もくせん十ヶ條の大そんあり先第一はなげ、
うつけ、とりん、とられん、なんびん、のび助、と
んてき、北風、かる小判、さぎからす、たくらだ、
たるい、おもたひ、どろ作、などとけがれたる異名
をさづかる云々」ちは助はのび助の寫誤歟猶考ふべ
しとれん、とられん
の考は別にありさておなじこといはんものうけれ
ば残りし一卷の奴俳諧は此冊子の末にいふべし
【西山千句】やぶしわかねば律儀なるらん」白鷺を鳥
といへどなづきて」

宗因獨吟なり愚なる者をさざからずとは此意なる事
ひつせり、馬鹿といふもおなじ意なり

○兵庫鬘 島田鬘

ある物の本に兵庫鬘といふ髪は慶安の頃、原吉原兵
庫屋の遊女がゆひはじめしと云ふは信じがたし

【今様女中風々俗】浄瑠璃中「はやるうきよのなかすり
につともふつさりいでしほの波のあはぢや島田わけ

筭わけもすんがりと蛇の貝の片かうがよいそがし
ぶりのひやうごわけ元結かけぬしやれ姿」【犬子集】

寛永十
年撰前 兵庫の者よ只御免なれ」附 けがをしてゆ

く女房の髪のをげ 重頼」【世話づくし】一名世話焼
草承應三年

土佐國前
皆虚撰ごめんあれさりながら目もひきはせず」附

兵庫の恨いはるゝぞうき」同 女房の髪のをげにや

さはるらむ 皆力原本如此 虚虚是等【毛吹草】に見えたる兵庫の

ものは御免あるといふ諺此諺はつき島の時いをうけて兵

庫に女房の髪とつけたれば寛永の頃より兵庫鬘と云

ふ名目あるを思ふべし【鷹筑波集】寛永十五
年西武撰 大名や兵

庫あたりにつきぬらん髪をわけつゝお立ゆうくん

長元君の遊を字音にいひてけいせい
の遊程にいひかけたるなるべし 按に【安齋隨筆】まゝなきの卷に「一、兵庫鎖の製、太

やがて死ぬゝひつひげうんのめあすをもしらぬみに
蘭にちほゆる鶯の歌」

柳亭云、ちほゆるの詞いまだ見あたらす、但語の意
はちいさくほゆるのつゝまりなり

しこみぬる酒のかはるはういこんだ男だての氣ちが
ひくわうまん八
と見えだ

種彦云、まん八とは酒の事なり下に見えたる百韵の
末の詞書に「吉田のなにがしがつけ如く筆をひつ
くれば、ものかなじることをおもひ、酒鉢とれば
まんはちをまくらふべき事をなん思ふ云々」とある
に合せ見るべし」

奇麗にもみがく茶碗ぞぶつかな

種彦云、ぶつかな、今も關東にてはいふことばなり
竹にとつつくいなかたつぶり

れんじよりそ首はちよつと見えけらし

おやちが前の竹れんじと付たる首さへ見ればためし
だいほどに大小をぶつかけたぞ【異本洞房語園】に
曰く「庄司甚右衛門吉原開發
の人なりが異名を世間にて親父

くといひければ元和寛永の間の小唄に 親父が前
の竹連子其一ふしのなつかしやく」、おやちがまへ

の竹れんじせめて一夜はちぎらばやく」、親父が前
の竹れんじいくよも千代もちぎろもの千代も八千代
もちぎろもの」とあるに合せ見るべし此小唄寛文の
頃までは人口にありしもの歟

初鹽にひつつりあげし魚にげて

川狩のいきほひあたこそおもくろい

種彦云、面白いを面黒いと轉じいふこと今もあり

壁のすきまに月はてツから

うはさばなしに光りをくれの月だんべい

種彦云、光りをくれと云は小唄の詞歟未解、元禄十六
年印本松の葉を載せたる三谷をどりといふたに「こ
んどはじめてお江戸にすめば、てんがかいやくひか
りをくれてきれよふり袖云々」とあり猶考ふべし、
上に引きたるうんのめも此小唄なり、おほく奴詞に
て作りし小唄なるべし

再按に、光りをくれるとはいきほひを見る事なり
肩で風きるなどいふ類なり

よござんせうよ園基のなぐさみ

種彦云、是は寛永の末よりいひそめし流言なり寛永
廿年印本藥師通夜物語に「此ごろは又よござりませ

事夥敷風行はやしとかや、其後川口善光寺へも右のごとく參詣せしが是は開帳の内ばかりの事にて早速止たるなり」是證とすべし、此冊子は新見老人の【昔々物語】を安永の頃の老人直仲慶といふ人増補して一名を【中古風俗志】といへり扱友人曳尾庵が所藏に遊女勝山が順禮の姿に出たちし古畫あり、笈摺に寛文の年號ありて【増補昔々物語】にいふに能合ひたり是江戸順禮なるべし他日參考して予が隨筆に精しくいふべし

○順禮がるた考證 このかるたは元祿年間かぶき役者姿繪にて京順禮などいふ事のおこなはれし頃の洒落なり、難波梅園子の藏なりしを花笠文京におくられ文京又それをわかちて予におくりしなり、京順禮といふ事江戸及大坂にあり此衣裳にだてを盡くし笈摺をまどひ胸札を掛け實の順禮の如くいであち洛陽の觀音の靈場をうちめぐりしなり

○奴ことば
むかし江戸に奴詞といふことあり又六法ろふことばともいふ、是は山の手奴、町奴などの専らつかひし詞にて關東べいといふは此ことなり、其詞にて俳諧をな

すを奴俳諧といふ、正保年間の作【百物語】廿四段に「近頃奴俳諧とて人のしけるを聞きしに冬の事なりしに 鬢水にあたまかつはる氷かな」といふ句に又付ける しやつらさむき雪の明ぼの」とあれば古き戯れなり印本にもありしとおぼしく【奴俳諧】一冊と書目録にあれども未見、近頃寛文年間の古寫本を得たるが其うちに彼奴俳諧二百韵あり、例のわれおもしろにて其詞をえりいだして見るに今たえて聞かざる詞もあり、今又専らもちふる詞もあり、あるひは發句をあげて注し、あるひは詞のみえりいでたるはおのれが心おぼえにて他に見せんとにもあらず【師走月夜】慶安二年 幸吟著 なまり詞にそれとしらば「ちらば花おつかなからんたをるべい 正章」寛文七年二月【奴俳諧】の詞昨夢 知算獨吟判「ひつひげさねを三味線のいとぎくら三味線に糸轆をひつかけてれじめをかき出すやうな句作り、とてもおてふはきいたりな云々

柳亭云、坊主小兵衛の奴にいでたちし一枚繪を藏す其上に詞書あり「千住なるこつが原にたつ煙かねてめいどのあるときくもの、ひつひげ、うんのめ、さわぐこんだに」元祿十六年印本【松の葉】二の卷、三谷おどりといふ小唄に「だてもうはきも命のうちよ、

家の婦女、又茶屋物、風呂屋物などとなへし賣女の類、衣裝に伊達を盡くし笈摺胸札をかけて實の順禮の如くいでたち洛陽三十三所の觀音へまうづるを京順禮と云なり、江戸順禮も又是におなじ此事亦大坂にもあり按に寶永の印本【年代皇記繪抄】に寛文五年詔して洛陽三十三所の觀音を定められし事を載せ【玉滴隱見】亦寛文四年の印本【老婆物語】と名づけし洛陽三十三所觀音の緣起をあつめし冊子あれば當時より【寛文をさして云ふ下に載せたるはじまり元祿寶永の頃迄も】此事行れけるか近松門左衛門が作の淨瑠璃【曾根崎心中】【元祿十六年】に觀音めぐりの節曲事あり左に見えたる發句に合せて見るべし【花見辨慶】【元祿四印前】秋の野遠き都順禮 信徳 【附】艶女脱さげ袖のたほやかに 同「ぬきさげの事は慶安二年印本【未得吾吟我集】富士山を詠て 富士山の腰より下は白妙の夏の衣をぬきさげと見る【萩の露】【元祿五年前】假屋形千部過ぐれば麥畑 神叔 【附】京順禮のつるゝ腰もと其角【麥林奉納歌仙】【享保十四年獨吟】扇の店に戀風もふく洛陽の三十三所も中休み【蠹集】【貞享元年印本前】曉に京の女の顔はゆく 只丸 【附】三十三所に戀し

あはいや 其角 足薪曰是も京順禮の句なるべし寛文六年印本【年代記】「万治三年洛陽三十三所の觀音此頃より初り老少あゆみをはこぶ寛文六年迄八年になる」元祿十六年印本【大振袖】いつの頃よりか洛陽三十三番に歩みを運び初めて中略今様は四十こえたる者は一人も見えず、みな血氣さかんの角前髪、ばらをの雪踏をはづして何足かわらざうりも常ならぬ紅裏の絹足袋、淺黄ちりめんの脚半、衣裝も一きは大模様染紫の鉢巻、加賀笠を青地のかた色はりて」又「心よりおこらぬ浮氣順禮、その頃參下向十人は戀を祈る爲めの袖群れて一もやうなるはで男は皆觀音廻りかとうたがへり」【難波鑑】【延寶八年印本】新清水の條に「當所にも近曾【ちかごろ】より三十三番の札所ありて人々順禮する事にはなれり云々」是大坂にありし證なり又【好色入子枕】【正徳二年板】三の卷大坂の蜷川の遊女の事をいふ條に「野田の藤、曾根崎の螢見、三軒屋の鰯つり、神明の雪のあけぼの、其外觀音めぐり、親の顔を見に行迄ことごとくたのみ云々」江戸順禮の事俳諧の集にはいまだ見す【増補昔々物語】に云「寛文の頃女順禮と號し笈摺をかけ江戸中の觀音へ參詣せし

きたる物歟ともおもはる、さて【色縮緬】に色せんべい、花せんべい、かなづちせんべい等の名目あり繪にも花形の煎餅に糸を通したるかたちあり、かなづちせんべいの名は貝原が【筑前續風土記】に見えたり花煎餅の名は【玉滴隠見】に載せたる明暦三年メツタ町又九郎云々といふ落書に「德利一ツに蒔繪の盃二ツ、女どもかたへ阿部茶二袋花煎餅一折云々」と見えたるがはじめなるべし

【俳諧晴小袖】

寛文十二
年一雪撰

うす色は花せんべいかもちつ

ゝじ

加慶

【江戸蛇の餅】

延寶七
言水撰

よしの河魚もよる

べし花煎餅

松風

是よりはるか以前正保三年に

刊行せし【毛吹草】和泉の國の産物に海會寺の鬼煎餅

といふとあり是等ふるき名なるべし【堺鑑】に鬼せん

べいの事あり、又貞享五年印本【庭訓往來繪抄】に載

せたるも飯櫃形の煎餅なり、延寶八年印本【節用集

大全】に見えたる小判煎餅といふは是歟、貞享の【江

戸鹿子】にあさがほせんべい、めり安煎餅、葛煎餅等

の名あり、あさがほせんべいは花のかたちに似たる

ゆるの名なりとはたれゝも知ることなり【江戸辨

慶】

延寶八年
言水撰

七夕

槿姫花煎餅や手向草

如船

【富

士石

延寶
七年

日影もちし露の朝貌せんべい屋

曲言

葛煎餅は葛を加へしものなるべし、めりやす煎餅は

めりやすの布の如く紋をなすゆるの名にやあらむ、

なほせんべいの名は種々あるべし、めりやすを手袋の名と

見いだすにいたがつて増補すべし、めりやすは手袋の名な

おもふはわろし、めりやすは手袋をつくる布の名な

り、むかしはめりやすの足袋、めりやすのもゝひき

等あり【道外和田酒器】「樊噲そねむすけもじ殿も我

身の程を觀じつゝ袂を顔におしあてゝあめやおこし

ゆきせんべい、こんべいとうとぞなきたまふ【向の

岡】

延寶八年
不下撰

煎餅や紅葉がさねのうす氷

似水

佐渡の國の産に煎餅石といふあり是煎餅形の無き前

に名づけしものとおぼしく今鹽煎餅といふ物に似た

りかの石を見てむかしのせんべいのかたちを知るべ

し、さてこゝにいはんは木に竹をつぎたるやうなれ

ど【和名鈔】煎餅 楊氏漢語抄に云、煎餅此謂々
云如字以牛油

熬小麥麵之名也」とありされば煎餅の名は古くよ

りありながら其製の次第にかはりしは前にいふとこ

ろとあはせ考ふべし

○京順禮 江戸順禮

昔、京順禮江戸順禮といふことありときけり是は富

昔の事をいへるにて寛文延寶のさまを目前に見るが如し、此一條は京傳が【おうば日傘の考】に合せ見るべし、さて婦人の用ふる青傘は寶曆八年の寫本【愚痴拾遺物語】に右衛門といふ躍子にはじまり其時の町奉行水野備前守制禁したるよしを記し、それよりさき享保十七年の印本【萬金產業袋】に近年青紙をもつて日傘を張るよし見えたれば正徳の末享保のはじめより用ひしものなるべし、躍子は今いふ町藝者なり、此事武野俗談にも見えたり、元祿三年刻【人倫訓蒙圖彙】傘張日隠しのたま繪をかきたるかさ小兒のもてあそびとなす、所にてこれを作る

「寶曆四年板」續下
手談儀五ノ卷」

【千代見草】寶永不
角撰我儘にして育つ獨子「寫繪の松に風呼日傘」青紙張の傘無用と御觸の下から小い紋付けてさしたがる

○煎餅屋の看板井、餅屋 煎餅袋種々

今菓子屋の見世に丸き額へさまゝの繪をかきたる看板をかけおくは昔の煎餅の看板の餘波なるべし、

【江戸廣小路】延寶
六年看板に月こそいづれ煎餅屋 酉

水【宗因獨吟戀百韻】按に延寶の
頃なるべし前のれんにちらと

俤の月 宗因 附 立よりて餅屋の見世に落し文

宗因」是等の句をあはせ見るに延寶の頃は煎餅のかたちしたる丸き看板をいだしゝなるべし、それがいつか書の額となり地紙團扇の形にも變せしもの歟因に云、寛永十一年印本【花のさうし】慶安の年號あ
るは例の入木りなおさるゝ物の品々といふ條に「非はもとより理におさる云々せんべいは竹の筒におさる、うどんはめん棒におさる、そくいひはへらにおさる」といふ事あり、鐵器の焼形なきむかしは竹の筒にておしひらめし物なるべし、元祿三年【人倫訓蒙圖彙】六の卷に「煎餅師六條にあつて名物なり」と記し畫圖には箸をもつて火鉢にかざして焼るところを畫けり煎餅の形は丸きも角なるも飯櫃形なるも見ゆ、又享保三年の印本【後室色縮緬】西澤一
風作の繪に女房とおぼしき女は蕎麥をのすごとくに煎餅をのし、亭主は火箸にはさんで焼きをるさま元祿の【人倫訓蒙圖彙】にかはらず、焼形を用るは享保以後の物歟、又按に元祿八年印本【西鶴俗つれ々】五の卷に「天神御夢想あんやきといふ物を焼くところの繪あり、細畫にてたしかは見えねど、今用る煎餅の焼き形に似たり、是等よりおもひつ

延寶の【廣小路】等にあれども惣右衛門といふ句は近くこゝに見えたるばかり歟【富士石】延寶七年獨寢を夜鷹やすらんけふの月 正章【南無俳諧】寶永四年合爪撰 鬼王は惣嫁と出たる寒かな

又云、近松が淨瑠璃に遊女の粧ひをいふ條に十筋ゑもんといふ事あり是は打かけ二ツ小袖三ツあはせて五ツの衣紋が左右よりかさなるを十すぢ衣紋といふにて髪的事にはあらず彼十筋右衛門と混すべからず

○日傘

日傘ふるくは日でりがさといへり【舞のさうし】さがみ川に「大將殿頼朝をいふなり」其目の御しやうぞくは木賊色の狩衣、風にたほめる立えぼし、足毛の御馬にしろうらかかせ、御身いうにぞめされける、御馬ぞへには五郎丸、もえぎにはひの腹巻、こがね作りの太刀をはき君をしゆごしたてまつる、日でりがさの御役は大膳の大夫のちやくし云々と見えたり【舞のさうし】は室町家の頃の作なれば日でりがさといふ事ふるし、さて是を下々にもちふるは小兒にさしかくるが初にて婦人の青傘は又それより後のものなり青傘の事下にあり 寛永の頃より元祿の頃迄の古畫を見るに彼小兒へさしか

くる日傘に鶴龜松竹のたぐひの繪をかけり紋所をつけたるもまれにあり

【七百五十韵】延寶九年印本 發句 海鬼灯乙姫舌をふりたてたり 政定 脇句 沖に日傘の龜あそぶなり 仙庵

乙姫を少女に取なしてかく附たり【坂東太郎】延寶七年印本 日傘の龜といふに心をつくべし 調機 柳云是は白雨の句なり紅葉一時雨なり 龍田川 調機を誦し日傘をいふなるべし

【西鶴大矢數】延寶八年吟 のぞみは四千里舞鶴の春 西鶴

日傘開けば花の山越えて 西吟

仕立うぶ着の紫の藤 西悅

【京日記】貞享四年言水撰 鼻落て蟬の小川にうつりけん 湖春

「日の傘に鶴鳴のたつ 仙廣【句錢別】 前おろさぬ窓に枝覗く松 沾荷」附 傘の繪をかくかしら傾けて 芭蕉 日傘とはあらざれど繪をかくといふは彼日傘なる事論なし

【風流色芝居】に、むかし女を七夕のかけおどりにいだすさまをいふ條に「どんすのはちまき、ぬめりんすの手す

き髪は頭の辻にたてかけ、縹珍の着物に緋りんすの下着をほのめかせ、毛琉マユの帯に紫ちりめんのかへ

帶、紫足袋に尻切をはかせ、金の太鼓にぬりぶち鶴

龜をかきたる日傘に、布袋かいゝる箔繪の團扇云々」

此冊子は正徳の末享保頃の印本なれどこれははるか

○十筋右衛門并、總右衛門

十筋右衛門は人名にあらず髪^の毛^ののすくなき事をいふなり【新續犬筑波集】萬治撰【六筋右衛門二代男四の卷】ちる頃や十筋衛門の柳髪 家之「貞享三年印本【好色一代女】三

の卷に髪^ののすくなきをかなしむ女の詞に「是見よと引はどき給へばかもじいくッか落ちて地髪は十筋右衛門と恨めしさうに御泪に袖くれて云々」とあり又【好色仕合揃】年號なし元禄なるべし三の卷に「年の頃六十をすぎて七十にちかき白髪あたまの十筋右衛門云々」是は蔵れて人名のやうにいへるなり【江戸蛇之助】延寶七年言水

撰 わらはなり残る十筋も夏頭巾 泰徳「此右衛門とはなけれども是も十筋ばかりの髪をいふなるべし」

【類柑子】小畫の箸は土堤にさゝる、 艶士「百莖^{かう}の笠は嵐^{のけ}の仰右衛門 虎岑【西鶴後大矢數】延寶八年

月は峯きんかの山や光るらん 源八「十筋右衛門が瀧の糸つゆ 正俊【前句附江戸雀】案に正徳頃の印本むづ

かしや十すぢゑもんも玉くしげ」かくあれば百年の昔は江戸にてもいひし詞なるべし、さて右衛門といふには何の意もなく唯十筋ばかりといふに添へたる詞なれど少し嘲る意はあるか今の世にかゝる右衛

門、うんつく太郎右衛門などいふに合せて知るべし、辻君の事を江戸にて夜鷹といひ、上方にて總嫁又總右衛門といふも、總是總嫁の一字を取り右衛門は例の嘲りて添へたる詞なり、黒川道祐が【遠碧軒記】寶問の「世俗にそうゑもんといふ遊女の事は總嫁といふを誤りていふ事なり」と記したるはわろし、今も少女の手毬つく唄に「ひとつゑもんとなんく、二ツゑもんとなんく」といふ數へ唄ありは一ツ二ツといふまでにてゑもんの例の助語なり

因に云、此總右衛門の異名は京師よりいひだし、詞か【吉原つれづれ失墜】の注に「ばいた、ふんばり、みなうかれめの名なり所によりてかべへし、印本如此誤歟」の上がたにてはついでころびそうか、惣右衛門、大坂にて坊まで、本庄にてけまんぢう、越後にてまぐろ、とは下々のくひれうなるゆゑにいふ、ひさぐとは流水をくむといふ心なりといへり」とあれば延寶以前ありし詞なり【太郎河】享保十五年印本午寂散入撰前 猿のすべるは撞鐘の棒 梅宇「附 まする浪傘風呂敷の總右衛門 和專」これは江戸俳書なれど京都の俗言を假りて撞鐘といふに附たるなるべし、夜鷹といふ句は

附句去る間孔雀の舞の長ければ 友靜「此句鶴に孔

雀と附て別に意はなきやうにおもはるれど是は當時

おこなはれし舞々の孔雀太夫の事をふくみたる句な

るべし【難波鶴】延寶七年印本 能太夫 三清寺の前 孔雀太

夫」とあるにて知るべし又元祿十四年印本【百なり瓢

草】といふはなし本の五の卷に「ちかき頃孔雀太夫と

て女を男と偽り御せんさくありて牢にいるさるもの

申やうふびんなことかなといひければ、友達に口か

しこきものありてあれはそのはすぢや男の女に化け

るは野良とておゆるしじや、女の男にばけたるはか

ならず牢屋ぢやといはれた」是延寶におこなはれた

る孔雀太夫が女歟、むかしは街説をおしはれて冊子

につくりしなれば實にかゝる事のありしなるべし

【向の岡】延寶八年印本 前句 菩薩の糸竹樂屋に聞えて 不

至」附句 迦陵頻孔雀はるゝ堺より 不怕」もし

當時は孔雀太夫堺にありて江戸に來りしことのあり

しか考ふべし【棠大門屋鋪】寶永二年 鐫文流傳 卷「五代目與

茂四郎代元息子與茂九郎生年十八歳獨もひとりかく

聰明睿智にして初學徳に入門を出す、能は孔雀がの

し羽を傳へ鞍は何藤が傳受をつぎ」

○盃の魚道を疊の縁へすつる事

【江戸八百韵】延寶六年 前句 疊の縁の塵の世の中 言

水」附句 末の露もとの雪の小盃 幽山【鱗形】延寶六年

雪柴 疊の間幾世つもりて菊の露 瀧水【俳諧富士

石】延寶七年印 重陽、菊の淵末の枝川疊の縁 調和」

【貞徳獨吟自注】寛永年 前句 盃の魚道に櫻が散かゝり」

附句 疊の縁へかよふ春風「貞徳が自注に、盃をば疊

のへりへすつるゆゑなり」とあるにて前句の意もよ

くしらるゝなり又【今川大雙紙】に「大なる盃にたぶ

たぶといれられて吞れぬとてすてんとするによき座

敷にて疊のすき間もなくば持てたち敷居をこゆれば

其盃は用べからず云々」此【今川大草紙】は室町家の

頃かけるものなれば古き禮にてありしなるべし【江

戸節酒中花】紋盡しのことをいふところにて「うけてこ

ぼさぬ盃に云々、ひだり巴に右巴、まはらぬ女郎のか

たいちは、しにせの虎が石だたみ、へりへこぼすをと

があられ、あみの手あはせつなぎ馬云々」石だたみ、

あみの手等紋の名なりこれはなにの意もなくかける

ものなるべければおのづから古例のやうにきこゆる

もをかし

再按に享保十五年印本【俳諧太郎河】附合の句に　む
さしなる紅粉のおまんはいかなれや　逸志　此句
をもつて考ふれば人名なりなほたづぬべし

○獨狂言

昔ひとり狂言とて唯一人にて物真似をせしものあり

【あぶらかす】寶永廿年吟ゆるりと居てはまたかしこまる」

主従者まねする獨狂言に　貞徳【芝看】附合の句に

おき頭巾額にたゝむさい波や　似春　洲崎の松

のひとり狂言　桃春方「さきにもいふごとく此書刻

梓の年號なしといへど延寶の時代なり當時よりおこ

なはれし證とすべし置頭巾などをしたる姿をいふ

なるべし

貞享四年印本【江戸總鹿子】六の卷に、座敷獨狂言

日本橋區南二丁目　杉　村　休　閑

南八丁堀二丁目　道具屋九右衛門

新ばし　ぬしや總兵衛

等の名を載せたり元祿二年の【總鹿子】には七の卷にあり又【諸

家大祕錄】前集九の卷に「綱利元來美童を好し云々弓

馬の道を捨て遊興に日を暮し後は座敷操りひとり狂

言を肴として晝夜大酒を好み云々」といふ事見えた

り此綱利公は正徳に卒給へば是も元祿寶永の頃なる
べし此事其後は絶えたる歟ちかきころの冊子には見
えず【山中集】元祿十七年印本支考撰沙汰なしに夜更の月の晴て居

里日」泣くも恨むもひとり狂言　自笑【世事

談】享保十九年印本獨狂言　神田多町藁屋次郎兵衛といふ者

上手なり寛文延寶の頃なり【増補むかし／＼物語】和明

の記「昔は客の饗應に座敷獨狂言といふ者ありて所々

歴々の御座敷へも出たり杉村休閑といふもの八九十

年以前ありし、そつ喜兵衛、貳朱判吉兵衛などありし

又鶴飼九右衛門といふ者あり

こゝにいふべき事にはあらねど明衡の著したまひ

し【新猿樂記】に「田樂傀儡唐術品玉輪鼓八ッ玉、獨

相撲、獨雙六」といふ事あり獨角力は今も乞食のす

ることなり、獨雙六といふは聞きもおよばず負け

たる者は怒り勝ちたる者ははこるさまを一人にて

まなび笑ひをどるものにてありしなるべし、彼獨

狂言といふものも此類にやあらんとふと思ひよせ

たるまゝ書きのせておきつるなり

孔雀太夫

【花洛六百句】延寶八年前句　群居る鶴の大欠する　千之

月はかくれんばうか桂の葉 作者不知「つちやこ
ぶしかつらの里に擣衣 吉景」此句にてはよくも

聞えねど信田小太郎といふ古淨瑠璃に元祿の頃の作なるべし「そ

なたはじつと目をふさいてゐやそなたとは童さアかく

れんばうにまじらぬものはおふちやこふしやかつら

のは、さうりかくし、かたこま、足のつめたいちよこ

ちよこばしり云々」と見え又寫本【吉原つれぐ草】

寶永年間の作上の巻にあげやの男と大臣の間答を揚屋の男

おさなきより能きゝならひ侍れど其譯しらぬ事侍り

かくれん坊にまじらぬ者はちやゝ子持やかつら葉

と申事はいかなる心に侍らん承はらんと申ける大臣

はたとつまりて是は子どものいふ事なればいふにも

いふぞといはれける【後砂金袋】延寶三年辛夷の句 月う

つるつゝよこぶしよ桂の葉 作者不知【俳枕】延寶八年

印本高節幽山撰 茂りけりかくれんばうに桂山 不恐【俳諧

雜巾】延寶九年大黒のつちやこぶしやをさな夷 石田一

之【貞徳あぶらかす】雲の上にも湯やわかすらん」明暦二年

にやではかわぬあまらが紅葉の色【俳諧玉海集】明暦二年

刻貞室撰下紅葉空にうつすや天が紅粉 朝慶【新續犬

筑波集】萬治三年紅葉せし尾上がたけやあまがべに 重

明【崑山集】慶安四年はなまでも紅粉をつけたかあま柘榴

重吉「尼が紅つけて稻妻待夜かな 道清」是は

紅雲の句なれどかの頬紅の意にとりなしての吟なり

【俳諧佳吉物語】元祿年間印本山ふかみ尼が紅さす龍田雲

重仲【藤枝】延寶二年阿波舟興行下の巻 紅葉とも見ん里

の海士天が紅 維舟【俳諧といふ物】元祿年間金山

の談合倒けて花になる 李梅「捏れた東風にあま

が紅粉さす 行幽【俳諧隱蓑】延寶五年印本あまが紅粉の

末つむ花かめたなばた 似船「延寶八年の印本惠

空が撰みし節用集大全阿集天地の部に「尼が紅粉、注

に倭俗呼赤色之雲一曰「尼紅粉」とあり案に玉海集

にかける如く天が紅粉にて尼の字を用ふるは誤りな

るべけれどさきの童話に混じてかく書けるものなる

べし

又江戸の童話説カに京橋中橋おまんが紅粉とうたひしも

天が紅粉を訛しならんとおもひをりしが是はそのた

ぐひにはあらずいづれの頃か中橋の於滿稻荷のはや

らせ給ひしことあり備物又のぼりの類みな紅粉染に

てありしかば其刻の童話なりと是も或老人のいへり

おまんいなりは日本橋通四丁目西の方の小路にあり

【姥櫻】元祿年
間印本五の卷、さと通ひする者を嘲る詞に「な

にかにそんは多けれど目前十ヶ條の大そんありまづ
第一、鼻毛、うつけ、とりん、とられん、なんびん、のび
助、とんてき、北風、かる小判、さぎからす、たくらだ、
たるい、おもたい、とろ作などつけがれたる異名をさ
づかる」といふ事あれば元祿の頃まではいひたる詞
なるべし【俳諧世話盡】承應年
間印本市の詞よせに「たくら
だ」といふ事あり何のゆゑに市の附意に入れたる歟
未考

足薪翁記卷之二

○尼が紅粉 天が紅粉 おまんが紅粉

【俳諧筑波集】寛永十
五年撰「親にしかられ迷惑やする」尼がほ

に付たるべにをかひぬぐひ 日能」ほは頬のつゝ

まりたる也或古老の云、むかしある尼の頬紅粉をつ

けたるをひそかに其親に告る者ありければ驚きあわ

て、ぬぐひおとしたりといふ童話ありけるが、其話

は絶て唯京師ちかき田舎の童謡に残れりとかたれり

安宅松といふ踊歌のうちちいちやこもちや桂の葉

云々」尼が紅粉つけてとゝやかゝにいはいはしよとうた

ふが彼地に残れる童謡なり既に寛永の俳諧の句に見

えたれば古くよりかたりつたへし事なるべし因に云、
ちいち

やこもちやとは やといふを口りたるなり栲や辛夷や桂

の葉と木の名をよせたる小唄なり、さつまの守忠度

といふ淨瑠璃本の曲節事【今様踊くどき】といふ小

唄本等にありさきにもいふ如く今も京師近き田舎の

童はうたふときけり按に昔はかくれ遊びする時此唄

をうたひしなるべしさて天が紅粉といふは日没の頃

赤き雲のたなびくをいふなり【崑山集】慶安四年
本貞徳撰印 雲に

足薪翁記卷之一終

十づつ十を重ねおき仁勢物語寛永中著「ゆきく」てするがの國うつ山にいたりて云々「するがなるうつ山べの十だんご錢がなければかへぬなりけり、

【酒餅論】異本ト養狂歌集】

○愚なる者の異名

(上)二番又二のきれといふ同じ 紀三井寺 南華

是等みな愚なるものゝ事をいへるなり、智ある者を一にたとへ、愚なるものを二番といひ、紀三井寺は順禮の札所の二番なるにより又其名をおふせしなり、南華の事は色道大鑑延寶六年撰出書「南華 戯れたる者をいふむかしは鈍なる者の異名にはいはず常とかはたる人をいへり其意は南華は莊子が寓言の儒にかはりたるによりていひたる名ならんを今は誤りて鈍なる方にこれをよす」とあり【浮世物語萬治年刊印本】「諸國に傾城町をたていん女多くこめおきて心だての二番なるきみの寺のともがら中頃は南華とやら名づけし、いかなる故ならん莊子は寓言とてなき事あるやうに書きたる道人也けるを南華の篇といふさだめてうそつきといふ心にやたいうつけたるものを今は南花と名づくるなり【醒睡笑】一の卷「二番にかまへられ

たる智殿【置土産寶永四年西鶴撰】「つねくあはうをば紀三井寺ちや二番ちやといふ云々【西川繪本諸遊

芥子鹿子一名遊色緒徒「よくく」の紀三井寺なるべし云々【朱雀遠目鏡延寶九年刊印本】下の卷上、林五郎右衛門

内高崎といふ格子女郎を評する詞に「面體とかう申はおとなげなし御心きみゐでらなりされど笑顔よし云々」同卷に大阪屋太郎兵衛内野瀬といふ格子女郎を評する詞に「面體も姿も大方なり是も御心二のされ廿八夕には高直なり」

(下)たくらだ 是も愚なるものをいふ文字も意も未

考【醒睡笑】大本二の卷に「少したくらだのありしが云々」と記して愚なる者の語あり此冊子元和九年の作なればいと古き流言なり【子孫鑑寛文十二年刊印本】に「一人の文珠より十人のたくらだ」といふ事あり文珠の如

き智をもちたる一人より愚なるものゝ十人の工風がよきといへるなれば意はよく聞えたり【可笑記寛永九年刊印本】「狂亂、する狂、ばか、たくらだ」とならべいだせり

【諸國獨吟集寛文十二年刊印本】前やくわん程なる月のぼる峰

秀雄「付紅葉をたくらだどもが狩くらし 同」もみちをたくにいひかけたり

赤く黄に染め糸につらぬきけるは後の製にてむかし
は一トすくひに十づつすくひしゆゑに十圍子と號す
【宗長手記】大永四年の條に「六月七日尾張國知多郡
大野旅宿中略十五日駿河藤枝鬼巖寺十六日府中折ふ
し夕立して宇津山に雨宿り此茶屋昔よりの名物十だ
んごといふ一杓子に十づつかならずめらうなどにす
くはせ興して夜に入て着府」といふとあり大永四年
は今文政十一年より三百五年前なり當時昔よりの名
物とあるにていと古き事なるを思ふべし又永祿十年
紹巴富士道記に「宇津山にいたりぬ我いらんとする
道といへるは右に谷を見おろして今は峯に付て登り
ぬ中略心細うして里につきぬ關の戸ちかき鳥の子を
十づつ重ねあぐる術よりもあやしき名物なり」「俗に團子と云ふなり」
忘がたきまゝに口内に吟じつゝ行く今の如く
に糸にて貫けるものならざるは、術といへるにて知
るべし又元和九年【宗甫禪入道行記】に「うつこのやの
里にかゝるこの里を見れば白き餅あられのやうなる
をうつわ物にいれてこれめせといふ何ぞととへばと
うだんごとて此所に名物なりといふ扱は唐よりわた
りたる餅にやあんなるといふ、さにはあらず十づつ

すくひ侍るにより十だんごと申すさらばすくひて見
せよといふあるじの女房手づからいひがひととりてこ
ゝろのまゝにすくふ是になぐさみて暮にけれどもう
つの山にかゝる」とあれば元和の頃までは十づつす
くふ術をつたへその色は白くありしを見るべし【俳
諧糸屑】延寶三年印本重安撰元
祿印本糸屑とは別本也蕪楓腹に茂るや十圍子
宗因」はや□□の頃は今の如く圍子をいろ／＼に染
て糸につらぬきたるより蕪楓と宗因は句に作し事ひ
つせりかの十づつすくふ事は寛永より寛文の間に絶
たるものなるべし「再按に元和三年徳永戸右衛門尉種久江戸く
だり」に「さかりと見えし藤枝をたをりて手
なり頃しもときは卯月にてかきれもだんごはつらぬくたまの如く
と見えければ」といふ事ありはや元和のころは糸にてつらぬきし
もありしなるべく、猶種々のさうしに見えたるを抄出しておきつ
【東海道名所記】萬治年
間印本「宇都の山又内の屋ともいへり
中略坂のあがり口に茅屋四五十軒あり家毎に十圍子
をうるその大さ赤小豆ばかりにして麻の緒につなぎ
古へは十粒を一連にしけるに十圍子といふなりし」
とあれば萬治の頃十づつすくふ事は絶えて人も知ら
ずなりしなるべし【毛吹草】寛永十五
年重頼撰うつこの山べに休む
旅人」くはいやな九ツ時に十圍子」【卜養千句】寛永十
二年吟
也寛文三年印本うつこの山べに露ちきるべき」圍子をば
【埋草】に見えたり

ぞやせ法師 季吟「紫の一本下」其坐にありしや
せ法師お梅といふがこらへかねさみせんしらべあは
せつゝ云々」やせ法師好酔の諺なり

▲いたづら法師 【古糸屑集】延寶三年
重安撰 小田の僧都

冬はいづら坊主かな 友也

▲でくる坊 【大井川】延寶二年
維舟撰 まはさるゝ花に心

や出狂ばう 政安 柳云、是はでくるばうにて木

隅のことなり

▲くろ坊 【尤のうし】黒き物の
しなみ「護摩堂を見ればす

ゝけて不動の貌黒坊がにらみける よとうたがはれ」

又聾の事をつんばうといふも物を聞かれぬさまをな

すをつんとするといふそれにばうをそへたるなり、

あつがりばう、さむがりばう、さるばう、見えばうの

類今もいふ俗語に多し見いづるにしたがひ考證を書

加ふべし、べら坊といふも此いやしめしばうなるべ

しといふ考あれどもおなじことに勞れたればかさね

て記すべし

▲瘦ッほち ほちは法師のつゝめ歎あるひは發知

か、獨ぼつち是に同じ、法師のつゝめなるべし

悴はやせるといふ字にて我子と讀むべきいはれなし

是はやせがれの上略にて俗にいはゝみすばらしき子、

なりと親より卑下の詞ならんとは先達の説なり

柳亭按に、能の狂言の詞に我子のとをかな法師とい

ふ法師はこゝにいふ如くいやしむる詞かなとは形の

やせたるとにて是も今俗の詞にいはじこちのやせッ

ばちといふ程のとか我子のとを法師といひしと左に

記す

【御隨身三上記】類從本四百二十三
永正九年の古記 朔日御既御座候、參

り候の處祝言目出度き顔のしたるよし上意にて御笑

ひ、是は小法師廿九日夜半許に誕生候きを御祝出候

御事候

柳云、記者は三上某、廿九日に男子をまうけたるを朔

日に君のかくのたまひしといへるなり、當時は産穢

をはゝからざりしか

同書「十一日依雨不參、季部より弟法師誕生の儀に付

兩種二荷書狀使有之使にあひ二献有之

三上某太郎といふ男子あり、ゆゑに弟法師といふ

なり

○十圍子

うつ山の十圍子はいとふるくよりありし名物なり

卷「挑灯と迷悟 施も」【洗濯物大だらひ】寛文六年 一雪撰 大

和にて 夕立にとちめんばうをふる野哉 江戸松

翁【浮世の北】元祿九年 可吟撰 夕立やとちめんば振る門の麥

黒太

▲どろばう 【蛇之助】延寶五年 鼻紙袋夢は明けり 常

矩泥坊が逆尻をふく松の風 同【盜賊のどろばう

といふも泥と書くは假名にて、取ル坊にて原はとり

ん坊とおなじ詞なるが二様にわかれたるにやあら

ん、賊の事をどろばうといひし事さまでふるくは見

えず延寶五年印本【もえぐひたきつけ】に「寐たるひ

まに鼻紙袋などあくる女ナ女郎にかやうのどろばう

はあるまじけれど」といふ事あり【延寶廿歌仙】延寶五年 神

鳴の火消の面にはつ嵐 嵐蘭 切捨になる阿修羅

泥坊 同【田舍句合】延寶八年 年さゝで柴の戸泥坊にと

がはなし 其角隱名野人【花洛六百句】延寶八年 前左勝

手に霞む巾着 友吉 附泥坊ををむけて向ふ春の風

友靜【句兄弟】元祿七年泥坊の中をいづるや蓮葉者

泥坊の影さへ水の蓮かな 泥坊や花の影にてふまれ

たり 我札【もえぐい】【六百句】共に京師の印本

なり今彼地にて遊里にあそびくらすものをどろばふ

といふは泥田を捧で打しといふ謎のつゝめにて詞は

同じけれど意はたがへり

▲さられん坊 【東海道名所記】萬治二年 印本 神原より山

井まで一里云々世にはむすぶの神さへおはしますに

別れの宮はよろしからぬ御神の名なりもし芦高明神

よりさられん房のもどり神かといへば

▲あはふばふ 【續松の葉】正徳三年 印本 むら田と云小唄

に「よいこのとのごでござるとはちをしらぬはあは

ふばふ村田半兵衛を見たか

▲一寸法師 【洗米】元祿十一年 調和撰 地は厚して天かぎり

なし一寸法師何につかへて長らぬ 芥子【至來集】

延寶四年 胡吟撰 人ならば冬の日脚や一寸坊 龜舞

▲ひとり法師 【晴小袖】寛文十二年 一雪撰 ひとり法師涙心

か春の雨 一雪

▲ぐる／＼法師 【淀川】寛永廿三年 ともかくもせし昔こ

を戀しけれぐる／＼ほうしのちは身すくむ 貞徳

▲めぐる法師 【俳諧合】明暦二年 吟撰 人形はめぐる法

師ぞ舞燈籠 勝房 季吟判の詞、人形はめぐるぼう

▲はだか坊 【向の岡】雖にさけ桃は肥たりはだか坊 不門「柳云、今衣なき物をはだか虫といふそれか

▲三日坊

【誘心集】寛文十三
年種寛撰

ふりとげもせぬ夕立

や三日坊

柳雪「柳亭曰今は三日坊主と云歟

▲うかれん坊

【浮世續繪盡し】天和
四年

ある田舎もの

折々三谷へ行て女郎をかふ、若き者と一座してあそばんとてあげやさしかゝりたれくとありし時花とひとしきたふやかなる君だちあげやのうちへいらせらるゝ、待もうけたるうかれんばふ見るより心もつかれいでむねさはざときめきて云々」

▲掃地坊

【境海草】萬治三
年印本

心から花の雫にや掃地

坊 長治「俳枕」寛文中撰延寶八
年印本

大山や雪道分る箒坊

一雪「柳云、大山は伯耆の名所なりそれをばうき

天和三 煤染に衣はくちぬ掃地坊 是も掃地坊の類なるべし」空林風葉

年印本

可「不」此句煤掃の

條にあり潔癖のすぎたるものをいやしめて掃地坊といへり

いへり

▲つくねん坊

【異本ト養狂歌集】「盃の臺と岩組

につゝじを作り其もとに海老と九年母ときりて肴に出しければ 酒のふでるびをふくめて岩つゝじつく

ねんばふとしてござらすと」つくばふと云ふ詞は地

につきてはいつく這ふなるべし爰にいふはうにらす

【夕顔利生草】寶永元
年印本二の巻「ゆふべの首尾を思ひ出し

胸に大火の もえつきてつくねんばふとあんずれば」

これつくづくと念じをるをいやしめていふなり

▲きいた坊

【續山の井】寛文七
年印本

冬もけふきいた坊

かな神無月

幸以「台廳をつよくこふ者をきいた坊といふ歟可考

▲とちめん坊

按に橡の實にて麵をつくるより出

たる詞也といふは附會説にてとちめく坊なるべしと

ちめくは狼狼なす事也、延寶八年印本惟中が【續無

名抄】世話字に迷臆とあり臆は惱の誤り歟、惱は集韻

に多端又思之切也とあれば思ひまどふ意にて此字を

當たるなるべし此字義によればたしかに狼狼の事と

も定めがたけれど其意略近し、【姥櫻】あとの路銀の

残り少きを俄におどろき、これではならぬととちめ

んばうはたごやどまりをきちにころび」なほ此詞

ふるくあるべし見いだすにしがひてかき加ふべし

今とちめんばうをふるといふは彼癡棒の説におこり

て後にそへたる詞なるべし【行脚文集】元禄三年印
本三千風七の

宮にまゐりて女房だちに物語してあそびけるに俄にくもりて時雨のしければまうしたりける「おほ空はなみだばうしになりにつく しぐれもうやとかほにかゝれる 甲斐」泪法師は泣虫といふにおなじ俄に時雨のしければ大空はなき虫になりたりといふ句なりさきにもいふ如く法師は嘲りてそふる詞にてばうはし文字をばふきたるなるべし今壁人の事を影法師の姿にても黒くのみうつれといふいかにほど麗なれば其形をいやしめていふ歟宗長手記大永三年の前般若寺坂の條俳諧の句大乞食ども「附心みなせちべん坊や文珠院」是四ツ手附なり般若寺坂に文珠院と附、大乞食にせちべん坊と附たり、下學集能藝門に「世智辨 世俗恪惜之義也」とあり坊は前にいふが如しせちべん坊は今いふしわん坊なりされば乞食といふに附けたり、とりん坊のみにあらず總てばうといふ俗語はみな嘲りて添ふるなり其種々

▲つぼろ坊 延寶二年印本【歌舞妓役者評判丸はだか】に坊主百兵衛を評する條の狂歌に「糸による物ならなくに我こびんつぼつぼうづとおもほゆるかな」柳亭曰印本如此つ須磨寺奉納太夫櫻延寶八年印 本遠舟撰熊谷櫻散にほろの誤なるべし跡やツホロ坊 一步「鉦のかねに熊谷櫻やツホ

ロ坊 近由「夕アにや熊谷櫻ツホロ坊 友房」熊谷や花ちる跡はツホロ坊 壽治「風やはらふ熊谷櫻ツホロ坊 重故」

▲しわん坊 【崑山集】慶安四年 貞徳撰花守の見せぬはしわ

んぼたん哉 一宣【二十會集】萬治三 附合の句年の吟物相を猶亦是

そくしわん坊 季吟【雀子集】寛文二年 光方撰やぶれても

きるや紙衣のしわん坊 月潭【玉海追加】寛文七年しわ

ん坊といふともおしめ春のくれ 重春【花千句】

延寶寺を出ても猶しわん坊 季吟「たとひおく彼名

物の柿のさね 湖春」柳云、えわん坊の柿のた 今も童のいも事なり【元祿二年

大三物】しわん坊隣の豆に聲すなり 露重」

▲朝寢坊 【向の岡】延寶八年 不卜撰朝寢坊鶉うらみん草枕

笑夢」

▲晝寢坊 【富士石】延寶七年 調和撰春の日を二日にした

り晝寢坊 見扣」

▲やんちや坊 【江戸廣小路】延寶六年印 附合の句 本不卜撰いら高數珠

西瓜のさねややんちや坊 一益「二火三火蓬がも

とのやんちや坊 言水」

▲長寢坊 【同集】朝顔のさこそ見るらめ長寢坊 不貫」

作、などとしてけがれたる異名をさづかる」【吉原艸摺

引】元禄七
年印本

に京町三浦や四郎右衛門内太夫うす雲を評

する詞に「にしをたかをゐられし頃はいかうおんう

りまけのよししかし今はその人もなければさぞ御

手びかへ帳面墨くろなるべししかし今より名あると

りんばうを戀の糸口にてつなぎ給へ」又同町巴屋三

郎右衛門内かをるといふ格子女郎を評する詞に「今

すゐいちなりいつくしき事あげや通ひのとりんばう

しそくにて寝顔をたび／＼見てこまやかなるはな

し」又新町長崎屋仁兵衛内若松といふ格子女郎を評

する詞に「よくゐにてとりんばうをはださるよし云

々」【日本莊子】元禄十四
年都錦著一の巻に「廿歳の夏の頃より

色に浮名をとられん坊となり山谷の土手の露に身を

ぬらす」二朱判吉兵衛が作也といふ【大盡舞】の小唄

に「新吉原の寶にはから尻にかくれ駕こゝに新町揚

屋町うき橋たむら八ッ橋たちいでて下谷すぢ東叡山

小櫻坊金龍山のとられん坊こゝに名譽しけるは小兵

衛坊さま長ばをり云々」東叡山は花の名所なるに櫻

坊とたはぶれ金龍山は待乳山なるゆる里がよひする

とられん坊を對にとりたるなるべし【松の葉】元禄十
六年印

本に載たる富士まうでといふ小唄に「さんちや通ひ

のやば助がこまをはやめてのつたりやとよりんばう

あふたりやおそまきさつて土手のきはになればはら

りと／＼びおりて云々」【夕顔利生草】寶永元
年印本に「てきと

我がなか吉原の通ひなれにし所ぞとまがき／＼の人

だかりとなりあげやの大さわぎももしやそれかとう

たがはれあげぬうちにととりん坊いそぎてかへるな

りふりの云々【浮世續繪つくし】天和四年印
本菱川書本「日頃通ひ

馴しとりんばうどち内の首尾をつくるひ一ぼくめし

つれ女郎の道中を見にとて行く人あり中略これこそ

ときめく小紫なり御の字なればいづれなんなし此き

みにおそれてかうしさんちやの女らうの道中見ぐる

し第一しやみせん持せて行くごせ所ありてびたり

おなじくはきれいなるふろしきなどに衣類を手がる

くもたせたる女郎は心にくしとりんばうも見物して

その／＼ちはごげんなどとしさいらしくことばをかけ

しは心にくし」さてこの嘲りて添ふるはうといふ語

は虫といふことにかよへりしば虫しわんばうの類也

按に、ばうは法師のつゝめなるべし其證、散木集連

歌の部に「十月ばかりに月のあか／＼りける夜四條の

信德「これも京都にての吟なり、【吉原大雑書】延寶三年印本

三郎右衛門内、小源太を評する詞に「空とぶ竹本氏氏」

とんびかはいたか歟二かいよりとびおり、とりんばうをとらんといたさるゝはいとおかしや云々」山本内ときは評する詞に「古へ白かね町のごげかさやに、お七とてかげまなるひるは人目つゝましく、よたかとなつて五百一分ふんばりつよくうり給ひし事其かくれなし、さいく一分の御げんにあひしものありて、古ぎつねにかき入れよたかのとりんばふがきくによとて御はらだちあつて云々」新町惣兵衛内八ッ橋を評する詞に「八橋さまにてましませば、ことに小袖のちらしにもかきつばたをぬはせつゝ、はりをもつよくとのたちに、おもはせぶりのたち姿、とられんばうが白糸の、よれつもつれつむすぶ縁にしもでからしにとりついて云々」【吉原三茶三幅對】延寶九年印本に江戸町二丁目おもだかや吉左衛門内つや野といふ散茶女郎を評する詞に「此君の一藝には一筆書せらるゝとさきにとりんばうはうちこんでうてきがとれまいぞ」又堺町うづらや内定家といふを評して「床の内にてやさしくあたらるゝ故、やばなとりんばうは家

ざいかざい質くさにあげたてまつるていか」こゝにいふとりんばふはみなとられんばうの事なるべし【天和笑文集】六の卷に「よし原の里通ひ、遊女たはれ女のぬらし辨慶あきなひ口、いつはりおほく實すくなきあだしちぎりのかり枕、みちんけもなきそらせいもん、えばをとらるゝとりんばう傍にゑみをふくんでうかれうかるゝ辻立門立血氣の大よせ」此書天和中の記なり【姥櫻】按に元祿始の印本なるべしに「きそん十七のとしよりとられんばうとなりて色里にうかれ云々」又「心よはき太夫さまや、御かたのごさかんにてあれていのとられん坊五人や十人なくならせ給ふとて云々」又「百人が八九十はみなく金銀をとられんばうのなれのはて也」又浮世の事にうとき者を嘲る詞に「やりてとは道具持、くつわとは馬のはみ物、大臣とは公家衆、たいことはなり物、とりん坊とられん坊とは唐僧の名、桶伏とはどぎうの事とみなくかやうにこゝろえ」又花街に遊ぶものを評して嘲る詞に「目前十ヶ條の大そんあり先第一はなげ、うつけ、とりん、とられん、なんひん、のひ助、とんてき、北風、かる小判、さぎからす、たくらだ、たるい、おもたい、とろ

袖うへはさまぐ物すきの、色ははなだのひたち帶
 中路之を大夫と申しけり、此町なみのならひにて人に
 いみやうをつくるなり、あとに見えける侍のいみや
 うをいへばとられんば、あれに見えける女郎はかう
 しの君とまうしけり」とあり、此詞原吉原の頃よりあ
 りしを見るべし【吉原讃嘲記】寛文七年印本なる
事卷中に識あり 新町彦
 左衛門内よしのといふ遊女を評する詞に「こがれぬ
 思ひに人をせかせて、とりんばふの心をやく云々」く
は謙すことなり、
別記にあり 又同町九兵衛内夕ざりを評する詞に
 「いつも花やかなるおいでたち、しんぎうの如くうつ
 くしくかざりる給へば、あをきとりんばうのばする
 もことわりなり」此さうしより以下、吉原今の地に移
 りて後なり何にもあれ道に熟せざる者をあなきては今もい
ふ詞なり、のぼすとは鼻毛をはぶきてかける也【續
 山の井】寛文七
年印本 兒櫻我ぞ心をとられんば 越前古玄
 季吟京都にての撰也、かの作者は越前也、寛文の頃は
 何國にても此流言の聞えしなるべし、【卜養狂歌集】
 せきれいの岩にとまりたる處も繪にかきて歌よめ
 とあり、その頃世によし原たゝきといふ女郎の名を
 たち入て、小歌をうたひければ、そのこゝろをよめる
 「當世の吉原たゝきちよろたゝき此とりんばも岩た

ゝきかな」柳亭云、寛文中の狂歌なり、たゝきとは小
 歌にもあれ、淨瑠璃にもあれ、物をあつめて口拍子に
 のりてうたふをいふ【吉原つれづれ草失墜】延寶二年印
本竹木氏藏 書に「つばねにて忍びあふたるもおかし」といふ註に
 「つばねにてよこをきらするといふなるべし、よこは
 よこばんなり、なにほどのとられんばうなりともよ
 こをきりたるはありがたうかたじけなまいへり」
 柳亭曰、何程遊女に金銀をとらるゝ客にても、金銀を
 いださず忍びあひたるはかたじけなまいへるなり、
 又同書に「七くさ買役日もつねよりはゆかまほし
 くこそあるべけれ、鳥ばうのはつねもことのほかに
 春めきて註に鳥ばう、とり
んばうの事なり 或人の問て曰、かひてはとら
 れんばう也いかなとてかくいふや、答て曰、女郎の
 方へ金銀をとりんばう也、もつともく」とあり、初
 めに如く延寶の頃ははや自他の混じたるが故に此
 注釋あり、とりばうといへるがふるき詞なれど當時
 専らとりんばうとのみいひしゆゑに、かくはことわる
 なるべし」柳云、鳥は取の假字なり、初音といふより
 鳥の字を用ひたり【俳諧京三吟】延寶六
年印本 大夫の姿隠れ
 失けり 仙庵「とりん坊弔ひたまひといひ捨てゝ

附菅笠の加賀も近江も長閑にて 可笑

▲裏附笠 又菅笠に絹にてうらをうちたる物あり是を裏付笠といふ、是は少女の専らかぶりし物なるべし【一代男】^{天和}五の巻「あれも十二三なる娘の子四ッ替りの大振袖、菅笠に紅裏打てなひませの紐をつけ」【男色大鑑】^{貞享四年}八の巻「十五なるべき美女の黒繻子の大振袖に寶盡しの切付帯は、白綸子につばくらの縫鳥に紫の網をかけ、物ずきなる後ろ結び、水色の絹たびにばらをのわら草履、ひぎやの二幅蹴かへしにはのめき、おとしかけのはね髻、透し形のさし櫛、金銀のべわけのかうがい、淺黄地の金入にてうらをうちし菅笠に、ゑ反古の紐を付たる所の采體、いづれにひとつあしき物好なし」【向の岡】^{延寶八年}裏付笠黒髪山や下紅葉 和直菅といふ字は見えされど、紅絹にて裏をうちたる事は句體にてよく聞えたり」因に云、少年のかぶりし事

【男色子鑑】^{元禄六年}二の巻「きのふの花は今日の芥、去年見し若衆も今年に男になり、加賀笠の勘も今はいやしくかくいへば大人になりては、加賀笠は似合しからざりしなるべし

▲左吉笠 又同書に美少年の事をいふ條に「年の頃芋喰月影の霜より白き首筋、墨繪の秋の野腰替りにしゆすの帶、繪扇の五ッ處紋、左吉笠に一ッ脇差」といふ事あり、左吉といふ者菅笠の上手にてありしか

○とりんばう

昔より吉原の流言にとられんばう、とりんばうといふ事あり、按に遊女に嫌れて金銀をとらるゝ客をさしてとられんばうといひ、却て遊女を賺して金銀をとる客をさしてとりんばうといひし也、ばうは嘲りて添る詞なり、とりんとはぬるは語勢なり、^{しはんばう}といふゆゑに、とりばうともいひしこと下に見えたり、又とられんばうともいふはとらればうの音便なり、又ととりんばうともいふはとりんばうのとの字を引たるなり、又ばうをつめてとりんばともいふ、さればとられんばうは金銀をとらるゝばう、とりんばうは金銀をとるばうにて自他のけじめありつれどいつかそれが混じて金銀をとらるゝ客のことともとりんばうといひならはし、たゞうかれ人の異名とはなれり【色音論】^{一名あづまめぐり}寛永二十年印本 下の巻に「しづが心もよし原に、二八ばかりの女郎のはだには、白きうす小

つゝ菅笠綿ばふし、かはゆらしきかぶろ、くわんくわつな腰元、えぐりわろきおちめのと、そゝろがちなる下女云々」といふことさかる町ふきや町の事をいふ條に見えたり【西鶴二代男】貞享元年印本六の巻に、島原の左門といふ大夫未だ年若くして尼イサセとなりし事をいふ條に「あけぼの、櫻見ることにし」のびて大内山の陰にいそぎて見る人なしと、加賀笠ぬぎ捨、女の童にもたせ云々」又【風流盛衰記】一名西鶴榮花咄 元禄元年印本四の巻に「か

のえ申の日天王寺に參詣せしに、折ふし冬の初め、難波女の仕出しも昔にかはり、加賀笠のうしろづき、御所染のかつぎなどとは各別姿をくろむる處なく、なか／＼居腰すゑにならひありといへり」とありて、晝にもあさぎ笠をかつぎしし女の姿あり寶永年間の印本「夢の浮橋」に此事を少しひき直して書り又【風流注能毒】元禄元年印本「はたとせばかりなる女、下に黄むくの清らかなるに、紋ぐんないの紅裏つよくふかしていとはでなるが、今やう菅笠かたぶけてたどりきたる【人倫訓蒙圖彙】元禄三年に「菅笠、菅を以縫作る、近江伊勢を名物とす」こゝには加賀をもらせ

近江笠の事 元禄二年印本舟也著【江戸貞女小夜衣】元禄二年印本舟也著一の巻に「夢の小蝶のゆふねざめ、見ぬは目黒の玉ばこと、道のあ

ないの女三人、打連れだちての朝まうで、おさんは加賀笠ふかく着て、もすそかゝげのか、へ帶云々」おさんは醫者の女房の名なり【風流伊勢物語】元禄年 閏印本「かむし梅が小路にて雨にぬれて女の行に、かさかしてとやかくぬれかけて「白すげのだてをぬふてふ笠もがなぬれゆく人にきせてかへさん、返し「白菅のだてをぬふてふかさはいな君ぬれかけよはしてかへさん

▲だて笠 同書注、白すげ笠、加賀笠、いせ笠など今のだて笠とあり【俳諧彼岸櫻】貞享二年印本 本雙流撰天王寺名所の發句、加賀笠や櫻にきては無分別 永次「たしかにはきこえねども、さくら見に來る人の、加賀笠をきたる女に心のうつるといふ意か花の見えざる意なるべし

【俳諧貳時】元禄七年印本 前そらおそろしく潜る忌竹 百里「附菅笠に口もとばかり惚させて 嵐雪【入船】元禄實なき戀とうちつける苗 只丸「尋常ナリ加賀笠 幸作「輕薄ナルハ美濃絹 同【浮世の北】元禄九年 可吟撰うつとしき菅笠とれば若葉かな 謹考妻【若葉合】同夕紅の笠の緒に酔ふ」媒も湯水にぬれし縁の上 未陌「紅絹の紐の事をいひて加賀笠の句なるべし

【八夕暮】正徳四年 前御影供の中に稻荷せきあふ 乃露「

と同じやうにあの塗笠は何事ぞ云々」【産毛】元禄年間
林鴻著

「十七八を盛りに、上へには縮緬を黒く片かなのノの字白く立てたる姿に十許りちらし中には紅鹿子の引

かへし、下には白むく一重まへに引合あさぎぬめの

一重帯、紫のくけ帽子、おなじ年並としはな廿ちばかりの女二

人、ひとりとは塗笠に山萩の心よく咲たるに村薄折そ

へて持せ、又の獨りは割蔓の旅丹たは葉粉盆を提て後遠

からずひかへたり」とあり、御所風又御所塗笠ともい

ふ、是御所文庫などいふ風に其美好を讃たる詞なる

べし【正月揃】貞享五
年印本五の巻、紙やの正月の條に「僕こ

ろえて日頃たしなめりとて、たゝみ盃といふ物を

藥袋より出すも又紙子也御所風の塗笠仕出したばこ

入云々」とあれば心しんより紙にて張たてし物歟【夢の浮

橋】寶永年
間印本「そのおよはひも二九にはたらぬ御顔ばせ、

あやめ八丈の大振袖、御所ぬり笠に淺黃紐茶じゆす

の帶ひきしめ云々【山中集】元禄十七年
印本支考撰前是は扱能折

節によもぎ餅 自笑「耐笠にはれての多き御所風

白音」裏繪又塗笠のうらを鳥の子まにあひやうの

紙にて張、花鳥の類をゑがきたるものあり【俳諧根無

草】寶永元年印
本長角撰「何やか物の好きとりませたるこそいと

まめやかなれ、或塗笠に内繪かきたる模様、かゝ笠の

内を緋縮緬にて張り淺黃羽二重のふと緒【大橋】元禄
八年

印本正
武撰「夕月にさても祇園の旅詣 調夕」繪さへなつ

かし塗笠の裏 如泉【水飛羅免】元禄十一年
印本覽士撰茗荷谷

下りて曲りて藤の棚 白絲「花を彩る塗笠の裏

木扨」春や昔印籠さげた女あり 蓬雨「土佐節の

淨瑠理和歌姫道行「對の花籠しほらしき、四季をりを

りの作り花、内繪の塗笠ふかぐ」と、其とりなりもみ

よし野の、お山を雪かと思れば雪にはあらで花のふ

いきと詠じけん、しがの山越朝あらし【談林十百韻】

延寶三
年印本「禪尼の分る苔の細道 一朝」ぬり笠に松の嵐

やめぐるらん 一鐵【八夕暮】正徳四年印
本乃露撰山里の月

にと車引捨て 和什「白い中にも黒い塗笠 衣

人」僧尼のかぶりし句體なる所、此二句は戀にあらず

ゆゑに別に抄出す

○菅笠 加賀笠

上の段にいふ如く、婦人の菅笠をかぶりしは延寶の

頃より起しなるべし、當時の人加賀の國よりいづる

物を好みしゆゑに加賀笠と書るもの多くある歟【天

和笑委集】天和二年三
月の記なり六の巻に「ばさらを好むだて女、

しなるべし、句意未考、予按におつとあやまつたといふ程の事を斯はいひしなるべし、正徳中一中節の淨瑠璃【都犬めぐり】一聲をそろへて讀賣の、笠をかたぶけのこゝの、おつと庄兵衛がせおひ箱【道戯興】元禄十一年^{オット}應庄兵衛婆、煩^テ痰渡^ル三笠^ニ。

○塗笠

婦人の塗笠かぶりしは【骨董集】に記し、如くいと古き事にて、延寶天和の頃よりしだいゝに菅笠に移り、貞享の頃塗笠は廢せり、又元禄の頃世にそむきし女など昔に販りてたまゝかぶりしものありしが遂に菅笠、葛籠笠にけおされぬ【毛吹艸】^{寛永十}五年著諸國產物、越前の部に「戸口の網代籠履、塗笠」と並べ出せり當時は専ら越前にて製りし成べし【懷子】^{萬治三年}重頼撰

立かへり見る塗笠のうち

ふくめんを誰とも知らぬ姿にて

保友

【花洛六百句】^{延寶八}年印本

紅裏に山道摺の狩衣

花の下幕塗笠の宿

自悅
千之

【古糸屑】^{延寶三年}塗笠につもれる雪や白漆の岡^八紅裏やかんぎ山路の花盛

不求^{重行}昔は紅

絹のかくし裏を山みちにはきしことあり【東西夜話】^{元禄十四年}印本支考撰塗笠は城から出たる花見かな 昨囊^是

は古風に見ゆるをいふなるべし【曾古の花】^{同撰}塗笠を松にかけてや木の子狩 是通^{類柑子}はづかしや此かちよりの草履取 其角^{筑摩の祭り世に}

は塗笠 專吟^{寶の市}^{樂山點寶}大きな尻をあぢにふらるゝ塗笠で引こき髪の拜みづと 吟水^{無俳諧}^{寶永四年}塗笠や巴山吹藤の花^{作者の名を記}

さす撰者合爪の句歟【一代男】^{天和二年}石山に詣でけるに、然も其日は四月十七日湖水一際涼しく、水色の

きぬ惟子にとも糸にさいはひ菱をかすかに縫せ、あづち織の中幅前に結び、今はやるふき掛の手拭に塗笠の内只人とも見えす^{以上二の巻に見えたり}【人倫訓蒙圖彙】^{元禄三}年印本「塗笠、檜の薄板をもつて造る張塗なり」とあり【輕口うかれ子僧】^{元禄七}年印本「女一人、當世仕出しの黄八丈に淺黄裏、紋じゆすのはひろ帯、塗笠の

目通り腰すゑての中足云々」又【風流日本鹿子】^{元禄年}間印本下女の事をいふ條に「白にこもまた女が、もさむきの染帶を尻にうちまどひて、ゆさん物參りにも人が

三ノ間ンといへば十間もあとから衣紋つくらうて、人

門「所々に之を造る、其内宜竹が作る所妙となす、近世指田某の造る所亦佳なり」【紙鷺】元祿印本に曰「宗勳より中興して今の世に是齋、宜竹、洞中節、指田、一音、などいふあまたの吹手蜂起せり」【正月揃】前と同卷と「尺八二節切云々」宗佐老人、實相坊教院安田大森宗勳、是齋、宜竹、洞中節、一音、などいへる名人出来せり

一品自畫賛 櫻のもとに宗祇の一節切を吹けるかた

よしの、山邊に咲る櫻花雪かとのみぞあやまたれけると友則の詠しを雪かと思れば

雪吹よの花の宗祇の一節切

【吉原小歌惣まくり】に一節として此小歌を載たるも、昔は専ら笛にのせて吹ける故なり【西鶴置土産】元祿六年「尺八のてをよく浮世を空ふく風のやうに見なし云々」色付の柱にもたれて思ふ人に面をそむけ、かつばつたる聲にてよし野の山をうたひしを、ゆきつき次第に竹にのせたるこそ色もありて聞よけれ

○庄兵衛のばいさま

昔し庄兵衛のばいさまといふ流言あり、其原は庄兵衛といふ物真似するもの、よく老女のおもむきをうつしゝよりいでたりとぞ

【役者丸はだか】延寶二年ばい方坂本源兵衛けんへきひねち兒がおふ六條へんのしにたいばい、しやうづかのばい、にやひこのばい、などとりあはせてたとへんもなか／＼およばぬ中略新評判に若き者を見るやうになく、見ざめがするといひしはことわりなれども、外にたぐひなければひごんはおきやおつとしやうべのばい、【難波鶴】延寶七年印本百三丁ウラ町淨瑠璃並だうけ諸藝の部に「だうけ北新町三丁目ばい、庄兵衛」とあり元祿年間の印本【姥櫻】に世事にうとき物を嘲る條に「詞にはやるは庄兵衛のばいとべら坊ををおぼえ」とあれば元祿よりさきに専ら流行した詞なるべし、又【御前義經記】元祿十三年印本八の卷に「おつと庄兵衛のばいさま、三十の錢をとられて」又【操年代記】上の卷に「三五の十八にてあはぬそるばん、胸ざんありてあはぬは世間なみ、次のかはりの請合一盃、庄兵衛のばいさまさしあひ」といふ事あり、此冊子近くは享保十二年の印本なれば當時まではいひしことなるべけれど、いかなるたとへにかくいふか未考【犬の尾】天和二年西茂庄兵衛まねのばい、笑ひしまへばけさの春

といふ事は、ぶきたれど是もかの物真似の事をいひ

花ぞちる吉野の山はやア是か

旨 怨

【七百韵】延寶年
開刻

此歌朝夕見ればこそあれ

宗 因

ふらい／＼頭をふる花のふいきよの

似 春

柳亭曰、前の詠歌を小歌にとりなしてつけたり、前に引し【初心集】にあふみなどし／＼ふうら／＼ふら／＼ふら／＼といふるづまいとし、われふら／＼づまいといふは、いといふ歌あり、頭をふるといふ冠辭に、ふらいといひしは是なるべし

【家土産】天和二年
養育撰 小座頭や花見ぬまでも吉野山 來

山【句兄弟】元祿七年
其角撰 三絃やよしの、山を五月雨 曲

水此句元祿五年に撰し【己が光り】にあり、其角の詞

に、「きのふもけうも降りこめて、同じ空なるもどか

しさよ、ことにひきならひと聞ゆるが、同じしらべの

ほち／＼と軒の玉水にかよひ、たゞ人物うからまし

と思ひよせたるなり」

【田樂集】寶永六年印
本百丸撰 田樂に音の欲花のふいきよの

至樂【む玉川】紀逸高
其角撰 よしの、山をかちる小坐頭」

【一代男】天和二年
年著 芋川といふ里に云々、所の名物とて

ひく饅頭を手馴て往來の駒留て袖うちはらふ雪かと

見ればとうたひ【二代男】貞享元年
年著 「まだふれ小雪と禿が

襦に請て、獨寐てゐる澤都があたまからかけて、こり

やなんぢやとおもやるといへば、ぬからぬ顔して吉

野の山を雪かと思れば、とうたひながらおきて腹を

もたてず、又三絃の書【大麻】貞享二年の序に「芳野山には

春の花を詠、瀧落しには夏の涼氣を納、云々」又【今様

廿四孝】寶永六年
年印本に「御傘見ぬうちに點者となり、長歌な

らうてよしの、山つひに知らぬ三絃」【落花集】寛文十一年
似

仙吉野紙よ雪かと思れば小杉原 空聲【俳枕】寛文十一年
似

幽山撰
八年印本 延寶中枕や花の雪吹のよしの川 幸順」是等

の句は此小歌をとれりともたしかに聞えねど、まづ

こゝろみに書のせておきつ、さて前にもいふ如く此

小歌を尺八一節切等にのせたる句も又おほく見えた

り【正月揃】貞享五年 三の卷座頭の正月三線の事をいふ條

「本手七組葉手十三あるひはよしの、山すがゝき獅

子をどりをかざき林雪れんはながし云々」【宗因句

集】笛竹や雪の下折ふいきよのう【俳枕】尺八や雪か

と見れば宗祇の髭 如船【奉納二百句】延寶四年
二月吟 空

蟬も吉野山に琴彈て 桃青【青嵐吹た一節切ふく

信章】江戸廣小路【延寶六年
不ト撰 先しるや宜竹が竹に

花の雪 桃青【至來集】延寶四年
胡分撰 花にのぼるよしの

の山や小歌ふし 宜竹【宜竹は當時の一節切をよ

く吹て、又笛を製すの良工なり】雍州府志【天和二年
年著 土産

[illegible]

宗因

太鼓の音にありや／＼三番曳ぢや、頭坊つはうはんかく雲樂ぢや、彌之助をどりぢや、はじまり／＼といふを聞て云々」これは、かぶき狂言のわきをどりの名なるべし、頭坊は原來頭大にて彼甫春のまなびをなす一寸法師のをどりをいふにやあらん、彌之助、角内、百助イサなどは奴の通稱にて、彌之助をどりは奴踊りをいふなり、雲樂未考レ考尤のさうし寛永十一年うるさき物のしな／＼の段に「蛇つかひ、犬のつるみたる云々」蛇つかひは今もありてめづらしからねど、ふるくありし證をあぐ【富士石】延寶七年調和撰霜寒し渡世の枯野蛇つかひ 調幸【向岡】延寶七年題蛇穴山 札錢の穴に出けり蛇つかひ不門【天和笑委集】天和二年記六の巻堺町ふきや町の事をいふ條に「いやようるさや、てんと氣の毒、見るめもうるめし、さし合知らぬ蛇女、こはしあぶなしおそろしき見物、やれやすき物わづか六文、しかも宿みやげとて油一貝つるぎの曲、かれこれ都合十五軒」といふ事あり

○三官館

【山水獨吟十百韻】延寶七年己未示因判唐館を夕の月にねぶらせて【島原朱雀遠目鏡】延寶九年印本上扱めづらしき三官が秋【評判】

の巻に倭國といふ太夫を評する詞に「目もと口もと笑ひ顔よし、さりながら鼻のなりよの諸道具には相應せず申分あり、あいらしき顔色の鼻のおもはく一つにてけおされて見ゆる事、あたらし三官館にすのあるが如し云々」紫の一本天和三年淨書菓子【日本橋一丁目鹽瀬がまんちう、麴町助總がふの焼、池の端のめりやすせんべい、本町馬場の葛せんべい、芝三官の唐館】江戸總鹿子貞四年印本六の巻、唐館芝田町三丁目陳三官【名物往來】芝三官館【好色産毛】元禄年間印本俳諧點者林鴻作（京都の人なり）の巻に「長柄のからかさは太夫の道中、臺傘立がさは釣髭の男にふられける、あるが中に館屋が傘は長崎三貫屋が仕出しかや云々」【風流鏡ヶ池】寛永六年印本梅吟作江戶作一の巻に、護國寺の觀音開帳よりもどりしことをいふ條に「おみやげに大佛屋がかぶらやき、さんくわん館など持て云々」【名物鹿子】享保十三年印本芝三官館竹の皮館イサを後難の肩さむき 文國案に【見聞軍抄】慶長十八年淨書に曰「其頃三官といふ唐人北條氏政の印判をいたゞき諸州にわたり、天正六年戊寅七月二日三崎の港へ唐船着岸す」といふ事あり、若し是等の刻館の製法の傳はりしゆる三官館といふ歟【諸國落首物語】元禄

見世物に出し、事あり、時の人その名をいはずして
大女房といひけるとぞ【續無名抄】延寶八年 上巻に、
「近頃道頓堀に中略頭大甫春といふ者あり、顔色常體
の如くうつくしさ人にこえたり、其たけ一尺二寸足
脛すぐれて細く四五歳にこえず、梅花心易を誦んず
粗書をよみて義に通ず、又年ばかりなる女あり足手
あざなへる繩の如し、足を取て首にまとひ手をまは
すにいたらざる所なし、又大女房あり江州の者なり
白髭大明神の變化なりといひつたふ、たけ七尺二寸
足のながさ一尺三寸、手のながさ一尺、全身すぐれて
たかく力人にこえて、達者究竟の男にも勝れり」と見
えたり、天和三年 松會板【年代記】延寶二年 百五丁ウ「江戸堺町に四つに
なる子力持石臼に錢四貫文のせ持上る、十一月近江
國よりたけ七尺三寸ある大女、名をおよめといふ見
世物に出す、【延寶廿歌仙】五イ 八イ年古足踏猛火となつて
もえあがり 嵐雪「大女房の大蛇いかつて 同」月
の秋一寸法師二道に 同【西鶴大矢數】延寶八年 同九年刻 西鶴「大女房一丈二尺た
つ霞 同」江戸向の岡延寶八年印 本不撰大女房それさへ
あるを富士の雪 如鐵「吉原源氏五十四帖」貞享四年 其角

の「梅がえ、櫻木、大女房およめと聞たるちんちくり
著」が妹小雀とや實よく似たり、大廣袖の中より這出
たると世の人の笑ひ、二木にとゞまるつれだちての
道中無用たるべし、あらきのどく」とあるは梅がえは
身のたけひきく、櫻木はたけたかきをそしりしなり、
是彼が事をいふなるべし、又杉村治信の【繪本古今
男】天和四年 印本にちか頃堺町かぶき見にまかりしついでに
小芝居の前を通りしになのいふなにと保春と、およ
めといふ大女房と、くらべて見たを聞たか、いや知ら
ぬ、腹かゝへた事よ、まづ保春がせいの高サ一尺二寸
およめが大サ八尺中略天井にとゞくほどに高くて色
白ければ鹿子まだらの富士の如し、保春は加僧にて
土人形の西行法師に似たり云々」といふ事見えたり、
こゝに圃を保につくるは誤なるべし【二代男】貞享元年 印本
四の巻に「あるよ又道頓堀の火屋に一寸法師の夏書
して居るを、心を留めて見れば甫春なり」とあり、さ
て【續無名抄】に頭大とあるは彼其體といさく、頭お
はきゆゑにかくはよびしなるべし【元祿曾我物語】元 十五年 印本「次の橋を思案橋といへり、ついでにかゝりし
を親仁橋は若衆の肩辯ぞかし、とうがら／＼となる

がひにいかれる心たけく、山のさわぎことの外なりし、西三條逍遙院殿つたへきこしめされわざと山に御のほりあり、雪に愛られしもとわりなり

花ならば咲ぬ梢もあるべきに何にたとへん雪のあけぼの

花に心をそめられしも尤もゆるあり

雪ならば幾度袖をほらはまし花のふゝきの志賀の山越

自今以後勝劣をあらそはず中をなほりて圓入和合の床に勤學あれとしづめてこそ御歸りありけれ」とあり此事歟【きのふはけふの物語】に「ある鹽賣、寺の前をうりけるに則よび入て先鹽をばかはずして、さてさてそなたは鹽などうりさうな人にてはない、見どころがあるとはむれば、鹽賣申やう、さて／＼よい目やそこな折敷を一枚くだされいとて鹽を三升ばかりはかりて差出す、是はといへば、けふはをち頼朝の日ちやといふた【七百五十酌】延寶九年印本春澄撰又たぐひ虚僧上も夢なれや 信徳」伯父頼朝がこゝろざしとて

政定「此話又【醒睡笑】に載たれど先祖頼朝とありて此句に合す【寒川入道筆記】慶長十八年著「すゞしき道ならば唯心の淨土なるべしといふ程に、極樂は夏知らぬ所にてこそあらめ、されども足がいかがふひゆるとき

こえた、なせに、死するほどのものがあたとぶらいてたびたまへといかなものもたびをほしがる【ト養獨吟千句】寛永十三年の吟なり寛文三年印本【理艸】のうちにありはかんと思ふたび給へかし」諷にもなき跡とひてとばかりに」

○駒形の鯉

【江戸名所記】寛文二三年印本の卷に「駒形堂は淺草寺の門口にあり馬頭觀音を安置せらる、安房の太守平公雅の立られし所なり、梵音海潮のひゞきを淺草川の波にあらはし、定業能轉のちかひは駒形堂の軒にしめす中略諸人こゝにて手水をととり口すゝぎ身をきよめ、心をいさぎよくして淺草の本堂に參る、淺草川の船つきにしてかの吉原へゆく者も猶こゝを船つきと定む前に茶屋あり、此川の鯉は名物にてその風味すべて淀鯉にまされり此川はたにして賣とかや」とあり【向の岡】延寶八年不卜撰駒形町鯉の絶間や放生會 立笹子」又【紫の一もと】天和三年淨書淺草並木の茶やの事を云條に「看は駒形堂の鯉高砂やの味噌にて吸物にし、橋場蛸深川蛸云々」とあり

○大女房 並、圓春 蛸つかひ

延寶の頃江州の産にておよめといふいと大なる女を

いふは此話のむかしおこなはれてそれより出し詞歎
それともいれはがなる考にて附歎、又おなじ【醒睡笑】
五の巻に「東の奥より都にのぼりたる人あり、さる古
寺に立寄院主に參會し物がたりなど時過けるまゝ、菓
子持出て小性をよび、いかにもお茶を紅葉にたてよ
とありしを聞、客何なる子細にやと問、たいこうよう
にといふ事也と、あなをもしろのことはやとおぼ
えつゝ、本國にかへり、わざとちかづきの友をよびふ
るまひ、かねてより小性にいひをしへお茶をもみち
にたて申せとあり、人々さすがに此度上洛のしるし
ありやとかんじ、ことのおもむきをうかいひたれば、
こくよくたて申せといふ事なりと」此話又【きのふは
けふの物語】に載て、そのおもむきは少しくかはれど
も意はおなじ【新續犬筑波集】萬治三年季吟
撰寛文七年刻酒の爛しておこす埋火」林間にこうようたてん茶は持たず
春丸【宗因句集】宇治にて さればこそ大事の御茶
をうす紅葉」うすいと云字のはたらきに目をつくべ
し【醒睡笑】六の巻「比叡山北谷持法坊に兒あまたあ
り、冬の夜、豆腐一二丁を求め田樂にする、老僧いひ
出されけるはおのゝ秀句をいうてくふべしと、大

兒やがて我は佛のつぷりと申さんと、三くしとりて
のゝ、又ひとりとは八日の佛とて、やくしとりたり」下
略、又【きのふはけふの物語】に「ある夜、田樂をして
秀句にて賞翫するに大ちご、清盛の長刀なんぞいつ
くしま、しんぼち、佛のつぷりなぞくみくし、小ち
ご、いしやの本尊なぞくやくし」といふ話あり、此
物語は寛永年間に書きあつめしかる口ばなしにて
【醒睡笑】よりは後なり【二番船】延寶八年印
本宗因撰住吉のすみ
に雀は秀句なり」津守の樂師九串まで 貞因角に
雀のと前に見えたり【虎桑集】天和三年印
本其角撰田樂によす
狂句の法師雪の兒 季下」こゝには狂句とありて
秀句となければ此話によりての句なるべし、さて雪
の兒といふは【醒睡笑】四の巻に「比叡山にて北谷の
兒は雪にすぎたるものやあらんと愛せられし、又南
谷の兒は花にまされる詠やあらんと興せられし、か
かりしほどこそあれ、後にはあなたごなた心になき
雪をつけいさかひになり、花をばあしくいひちらし、
雪をばいなものにいひけし、雪の方よりは花をはむ
る狼籍の類をよせてかたんといふ、又花の方よりは
雪をはむるうつけものをたゝはたいてのけよと、た

のかはらずかけよ雀のす 紫苔「此うたより變じたる歟」

○しめり茶磨 笠の雪

しめり茶磨、笠の雪はおもき事にいへり【尤のさうし】元版寛永十一年おもき物の品々の段に「尤おもきは父母の恩、ためしのかぶとに具足、鍔袴、古布子、年貢俵、商人の海道荷、下手の謠、上手のくすし、しめり茶うすに鮎のおし、おつばねの乗物、ぶしやうものゝたちゐ、笠の雪」とならべていへり、又延寶六年印本【古今役者物語】に載たるおどりくどきに「おもひものにとりては、主の御おんにふばのおんこざる、へたのうたひに上手のいしやどの、しめりちやうすにおちの人ののり物、まだもこざるよぶしやうものゝたちゐ、ちりりゝとつもの雪のからかさ、とかくうき世はかるいこそよけれ、おもいはずぶりしづむおもひはしづむ、やつさ、おゝいつかいな」といふ小唄あり【早梅集】萬治三年印本梅庵撰時雨にもめぐらぬしめり茶磨かな平吉【未得點古懷紙】寛文年中下知するまゝにかろく引石「しめりをばかはかしけりな此茶磨 友可」【惟中獨吟】延寶四年印本判の詞宗因急雨やしめるばかりにあがるら

ん「おもき茶磨は山ほとゝぎす」判詞、たゞ一こゑ上林が初むかしに候【常陸帶】元祿四年印本兒水撰談義くづれし跡のしら露 慶竹「月見月しめり茶磨の重からめ

陽川【慕繁集】明治三年天の恩重くぞ着たる笠の雪

世恥【智惠袋】常辰撰の刻祐政撰おもしろし重しとまゝよ雪

の笠 兼豊【大和順禮】寛文十年印本正辰撰編笠におもからぬ雪や櫻花 遠州【己が光り】元祿五年我雪とおも

へば輕し笠のうへ 其角「おもきものに古くたとへし笠の雪をかるくいひかへたり、前にいふ如く是

其角が口づきなり、此句又五元集にも入たり

○昔のかる口咄しより出たる句

【醒睡笑】元和九年著一の巻「さる人のもとへ客あり振舞に

湯漬出たり、其席へ又客ありそれにも膳をするたり、

又客來り膳を出せとあれどもつひに出かぬる時、物

まかなふものをよび出し、何とてまをいらぬ事のお

そきや、湯をえわかさぬかとはをぬかるゝ時手をつ

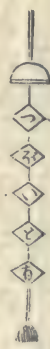
かねて湯はこざるが、つけが御ざないと申たるにぞ

どつとわらひに成にけり【一幅半】元祿十三年印本願友撰三六さ

つて猿の雙六 乙孝「藪寺に茶ばかりのみて漬は

なし 支考「今江戸の遊里にて食類の事をつけと

今年文政十三年庚寅四月廿一日諸用ありて草加宿
を通りしに左の如くの彼切子看板あるを見たり、
裏面にたばこと書きたるなるべし、かゝ
の内より見たれば、くはしくは知らず



大工の墨壺に
つかふ糸なり

又いふ此看板江戸八丁堀にありしが文政十二年三月
廿一日大火類焼の後は見えず、此形の看板は漢土の
畫圖にも見えざれば最もふるきことなるべし

○すみに雀

【酔はじかみ】といふ能の狂言に見えたる狂歌「住吉
のすみに雀がすをかけてさぞや雀は住よかるらむ此
狂歌をとりたる句むかしは多く見えたり、【落花集】
寛文十一年 住吉のすみに雀や酔蛤 正俊【花千句】
印本以仙撰 延寶三 樂な世にこゝは住よし住よやな 正立【酒一
升に酔はまぐりまで 季吟【晝網】延寶 四 年 よろこびも

なほ雀しゝめく「住吉のすみに住ぬる取上ば、 古

箒子【わたし船】延寶七 年印本 梶原が目にかゝる白木綿

旨恕「住吉の角で手を打二度のかけ 宗因【中庸

姿】延寶七年 つかまへる杓の雀轉りて 春澄「遊行の隅

や住よかるらん 高政【一幅半】元禄十三年 住吉の

角に雀や松かざり 專吟【西鶴大矢數】延寶八年 吟

住吉の神のちからを覺えたり 西鶴「片手であげ

る隅に雀が 同【尾州名古屋歲旦帳】元禄十 四年 若衆に

しやれのつきたる朝嵐 一柳「杉に雀の住よしの

社家 田解【耕作】享保年間印 海あつて隅に雀や禰

宜の稻 和椎【田打唄】土佐節「山田のなるこ引つ

なをえいさら／＼さつとたちゆくむらすゝめすみに

すをくふすみよしのおん田をうるさうとめの」雀

といふ字は見えざるもあれど此等の句前の狂歌をと

れる事論なし、又【江戸辨慶】延寶八年 前に抄出せし

正俊の句を載て才九とあり、此を月合に思ひよせ

たる暗合なるべし、【五元集拾遺】千山亭新宅雪舟の

畫に隅に巢を鷺こそねらへ五月雨 其角「雀はいひ

ふるしたるゆゑに鷺といひかへて、池の水のました

るさまをさかするは其角か口づきなり、【不可徳物

語】正徳五 年印本に「兵法は吳孫に越、武略は呂良に越すと

も、臆病にして敵に勝法なし、鷲殿深入なるべし」若

是等の諺をもおもひよせたる歟【一本艸】寛文中 未遂撰 瓦家

るといふこゝろぢやといふた」といふ話あり、それかれおもひわたすにむかしより其意たしかならざりしなるべし又【鎌田兵衛名所盃】元禄八年近松門左衛門作といふ淨瑠瑠に「長田父子逆心して義朝を風呂屋にて害さんとなすところへ、鎮西八郎爲朝弓矢をたづさへ來り、義朝の危急をたすくる條に「長田父子が首ひきぬき、兄弟親子對面は末繁昌の藥の湯屋、末代までの看版と弓取なほし軒口にはたとあたりの手ごたへして」といふ事見えたり、ちかく西川祐信の畫本に左の如き圖あり



享保十四年印本【茶話鑑】に此圖あり西川祐信筆にて側らに見

越入道といふものを書き「鹿を追ふ獵師が山を見ぬ格たとへば見越入道が湯やの看版で目をつくことし」といふ詞書あり享保のころまでは薬湯にてもこの看版をかけたしなるべし

【前句付雲鼓點】戌十月四日とありまぎれない事く

夜る見ても矢の看版はあたゝかい」

或人の云、此看版江戸馬喰町貳丁目の湯やにのみ安永の頃まであり、此邊は諸國の旅人多く集る所なるゆゑに彼矢の看版を出さざれば風呂やと他國の人は知らざればなり、彼湯やは町並より引こみて奥まりたる所なり、その露路口に出し、ならん、初にもいふ如く今も此看版他國には多くあれば旅人の目じるしにせしなりとぞ延寶中の【なぞたてざうし】に風呂でのかかづき何か、晚鐘いりあひととくとあり、昔はいるとのみ云へばやがて風呂の事と聞えしなるべし、ゆゑに矢の看版を出したる歟明和七年印本川柳高點集【柳櫓】可有が序に「弓は袋にをさまり、湯やの看版の矢は軒に跡なし」とあり、明和の頃江戸に此看版の絶たる證とすべし

因に云、前に引し【かる口千葉古の玉】に見えたる切子をくだきたりといふ烟草屋の看版も今江戸になし、ふるくは【好色年八卦】といふさうしに見えたり

らしあはせていふべし

辰之助が猫、澤之亟の帽子、此對【麝柑子】か【焦尾琴】

に見て書べし【わたし船】延寶七年聞立て枕かはさん筈し

き 旨恕「舞臺先のが萩のさまぐ」昌次「新竹

齋」貞享四年四條の處「讃詞のあだ口にとのともい

ぬ左馬之介が上手【小倉生色紙】正徳六年道頓堀は左衛

門橋裏通り云々の條「若い小供は女がたも若衆がた

も、月代なしにしてかつら帯はちまきもせず、何か美し

帽子も澤帽子もかつら帯はちまきもせず、何か美し

い子どもが本髪を女のやうにゆふ

○錢湯風呂の看版

錢湯風呂の看版に軒に矢を出してゆいり弓射とはん

じさせたりといふ洒落はいつの頃よりありしこと歟

今も他國にはあれども江戸には絶てなし、【俳諧五

味紅葉鮎】延寶三年浦風に吹はなされし矢は三文 宗

因「湯屋の軒端はあれ果にけり 藤簷」矢とあるに

湯やの軒とつけたり、【俳諧富士石】延寶七年那須の

篠原湯やが軒端や行霰 調幸子「武士の矢なみつ

くろふこ手のうへに霰たばしる那須の篠原、といふ

古歌をとりて矢といはでそれときかせたるなり、さ

れば延寶前より江戸にもありしこと成べし【鹿、武左

衛門口傳ばなし】湯やの家名に矢の形出す因縁とい

ふ話に「さる者湯やの看版を見ていふやうは、湯屋に

矢を出しておきたるは、いかさまやうすがあらう、其

外紙屋、筆屋などのやにも矢があらう事ぢやが、湯屋

にばかり矢の形を出したはいかさま不思議ぢやとい

ふ、頓作男申けるはもつともよき不思議ぢや、さりな

がら湯やに矢をだしたはよき理屈ぢやといふ、なせ

にといへば、あれはいるほどのものがゆがみにかゝ

るゆゑに、かゝらば矢ぼがあるまいといふた、まづい

るといふこゝろかさりととはよき頓作「射るほどのも

のが弓がみにかゝるといふか、此話たしかに聞とれ

がし、又此さうし梓彫の年號を闕たれども天和中の

作なる事卷中に證あり、又【小柴垣】元禄九年京師の事を

いふ條に「湯屋のしるしに矢筈を作りて軒に出す、是

程合點のゆかぬ事はあらじと見るたびにおもひけ

り」とあり、又【輕口千葉古の玉】正徳六年「ある人の云

やう、烟艸屋の看版に四角な物いだしたるは何とい

ふ事ぢやといへば、あれはきりこをくだきたる物と

いふ又湯やに矢の看版はいかにととへば、あれはい

といふ歌舞妓者此ばうしをかぶりそめたり、左右になまりのおもりをつけたるばうし也、よつておもりばうしともいふ【父の恩】享保十五年
年三升撰寶永元甲申年八月十九日宗順院日耀俗名萩野澤之丞淺草新寺町常林寺、闇ならば帽子の人目澤桔梗 青莪」

柳亭云【父の恩】に淨林寺とあるは誤なり、常につくるべし、此墓今なほ存す、紋五三の桐、井上半左衛門と有、兩脇に元祿中の法號彫りつけてあり、【俳諧藤花蔓】元祿十五年
印本稻丸撰追あげて猫に手をするさくらかな

野良萩野澤之丞【俳聯】素堂遺稿亭
保十二年刻

飽遣江戶風 知幾
萩相顔麗 同
薛女口紅穠 素堂

遊女薄雲の紋、丸に萩なり其事歟

【前句附寶船】元祿十六
年印本あれを見よ後家がよせいの澤

帽子【俳諧根なしかつら】寶永元印
本長角撰娘の花は澤帽子の

願事【中居の芳野は手細の望み】【男色木芽漬】元祿十
六年印本

本「おみつの今小町、風流をあらせてさらさ染の木綿

なれども、小づまをびんとかいとつて出たところは、

京の水木辰之助や、萩野澤之丞かにせた分どから及

ばぬ處がある云々【梅園堂太平記】元祿十四年著
同十五年刻田舎者問「萩の左馬之丞が歸り新參、昔にまさりて都の評判よく、大當りの由承りて候京の者答「さん候、此者江戸勤めの間は、澤之丞と申て數年來の大當り、戀風ふくむ女扇のもやうにも此君の紋所をゑがき、笄さし櫛に桐つけたる女中の物好、かはゆらしき目もとのしほをなめては、三百兩の給金をしからじ、寅の年の冬より休分にて引込、吹矢町に鬢付見世を出し、萩野油香といふ炷物を商ひけるに、卯の年顔見世より袖崎伊呂波いろは市村座へ下りければ澤之丞思ふやう、伊呂波が年厄を越たり、われ又彼にニツおとれり、しかれば若隠居して子孫を愛すべきやうなしと、老て二たび兒心を出し、辰の年より森田座へ出てつとめけるに、此者衆生縁ありてひいきの實入日々にみちく、都より前金うつて辰の冬山下座へ呼のぼせ、巳の正月二日顔見世のうらかけ姿のつしりとして艶顔いよいよ美しく、二の替りに新嫁かがみにしへのゆかりあつて、しかも相手山下にあうて中直り久しぶりちやによつてさあとの詞いとしらし」

此文年號干支、原本書たがへあり、よく／＼前にて

元祿十二卯年森田座當世小國歌舞妓太夫かぶきおくに

萩野澤之丞

顔見世狂言○澤之丞お國の役にて一世一代の看版をかくる事あり

「お國が一世一代の諸藝おびたゞしき見物、筆にも詞にもべられず、ところへお國かごにのり、きれいなるまひ子をつれ、さごといふおとなしき女もつきそひ、澤ばうしと笠杖、得ものゝ長刀をもたせがくやへ入」△さむらひ、お國にむかひてとふ詞に「一世一代と札をうちめさるは、何といたした心のさればとおいたるは、の申されますは、ごとうちへまありまして六年御ひいきにあづかり、身にあまりうれしいあはせ、諸見物さまにあかれませぬさきに、しまうたらよからうと申され升

柳云、かくいへば元祿七年の頃江戸にくだりしなるべし

元祿十三辰年惠方男景政雷問答爲宗は宮崎傳吉正月同座笑初女三宮二統女三宮二統和同柳亭云、此元祿十三年辰冬京に上るべき對談ありしが、さはることありて次の年十四年巳の春京のぼりのこと若えびすを證とすべし

元祿十六未年星會照手小栗十二段五島左衛門澤之丞秋森田座當世源氏都の若えびす京山下半左衛門座江戸上り萩野左馬之丞あつま女郎おきま

太夫萩野左馬之丞、江戸より罷上り候と、冬ごもりより書付、此君の姿見て、年わすれにと悦しに、さはりあつて相のび、初春や若えびすの顔見世、水道の水は若水か、御年はいはまだ二九からぬ、につこりはやりのゑがほにて、ぬれごと武道下女のやつし、其うつることかゝみにむかう女のしつと心みだれてきちがひのしよさ、前かた京にありしとき、かやうの所作は見ざりしが、ざりととはくがををつたひやうしぎの五平次道外金澤五平次なりも、大あせになつての運びやうし、大當りく、それで京中の見物衆、先若えびすやへぐんじゆする、初しばゐの一番がち、御手がらく、げいの品ほうびの評判申さうけれども追付巳の年大評判役者略請狀三國の顔見世評判仍て如件と申本に一々書のせ出しまする間春永にく

【寫本吉原つれく草】寶永年九十一段「澤之丞といふ野良帽子の左右をたれてかつぎけり、小娘踊子などのばうしの最初なり、元祿のはじめの頃よりはじまりけり【世事談】澤之丞帽子、元祿の初め萩の澤之丞

承京にてはさまの巫

夢助此君、去年は何と思召たやら、お休ぶんと承る、しかし當年は森田勘彌方へ出らるゝ事、先以珍重に存候、京都まで名を發せられし程あつて、面體愛きやうのよそほひ、物いゝかはゆらしく、第一目もとすすしく、とかういはれぬ女方の極上、しかし拍子事おんりやうのはたらき、ちとふえてと見えまする御僧一とせ上方にゐられし時、山下半左と嫁かゝみしたまふ身ぶり、遠國までもかくれなし、尤手おひ上手なれども、諸事によくこなれたる藝ゆゑ、あながち手おひばかりではめしにあらず、殊に三ヶ津に名人と萬人評する妙あらはれ、今江戸にての當りかぞふるに詞なし、先何をせられても仕出しが上手なれば、一つとしてわろしといふものさらになし、なかんづく嫁鑑は此人の役ものゆゑ、當地にても大きにあたり今に思ひ出すなり、又此人衆生縁あり、ひいきの花さき實入日々にみちく、商賣は油だな町いづばいに伽羅の香をくゆらし、役の外のはん昌、是ひとへに藝よきしるし手がらとやいはん、扱さりし年一年、役を引ゐられしかば町中のさたに、内證あたゝまつたゆゑ役

をせぬなどわろくちいうによりて、せひなく當顔みせよりつとめ、目見えげいに、先おくにかぶきといふ狂言に傾城の所作さつぱりと出來ました、中に山名左衛門とのくせつのてい、さりとはいよくうつり其後男之助女房となり、古がねかひのあゐさつ、とかう申されぬ大當り、お江戸の春のにきはふ時、わだ右門衛が妻となつて、うれい事のありさま、いとあはれいやまし、切りに敵の計事を兼て知つて、味方のちぢよくをすゝぐ思ひいれ首尾よし、毎日の大入をうらやみ、今一度上方へはしがるも尤なり、古今無類の女方の元祖、是よりうへはをりないぞ、ようかみしめて狂言のあて所を御覽せよ

澤之丞の見えたる江戸狂言本

元禄十丑年春 惠方男 勢梅宿 參會名護屋 かう女、

萩野澤之丞

狂言中村座

同年五月五日 兵根元曾我二の宮

同 人

初日狂言同座

同年十一月 男想女、女想 關東小祿 彌五郎女房

同 人

同年 座僧主想士

同年 座僧主想士 關東小祿 彌五郎女房

同 人

同年 座國忠謙田

同年 座國忠謙田 龍女三十二相 鎌田ひやう

同 人

同年 座秋雲絶間

同年 座秋雲絶間 源平雷傳記 渡邊行綱女房

同 人

柳亭曰、元禄十一年秋より十二年秋まで澤之丞休

てにくからず、しかるときは是飛きりというてくる

しからず、たとへ何ほどつくしきといへども、顔にあいきやうのなき女がたは、酢のかゝらぬ鮎なますにひとし、又諸藝死んだ吉彌が仕出しに似たようにかく、是もつてあやまりなり、ぬれの仕出し袖岡古政之助に似て政之助よりはぼつとりもの、いかにしてもかはゆらしく候、それ女形に上手のいる事家老の女房、又は中人のぬれ事、其外所作事、身をつかふ事にあつてお姫さま役に上手のいる事なし、お姫さま役をつとむるはみすの内にて美しく見え、扇の手すこしありて琴などひきたまへば、其役目つとまりやすきことなるべし、先諸藝かはゆらしき仕出し、さながらくゝんでもつやふに思はれ、しかも何をいたされても思ひいれあちにうつされ、つくろひのなきがいぶり、たつ子、はふ子までにくむものなし、中にも姫かゝみの手おひはさらなり、長刀をもつてかたき役とのつめひらき、非人になつて半左衛門とのせりふ、身のつかいやふ、言語のおよぶところにあらねば、當年より上々貴方に向つて、まづいはひ申候ひをはんぬ、此君猫せねかに見ゆるといふ人あり、それは

ゆるしやをがむぞく

【役者櫻欄等】

元禄十一
年印本

「花評判に曰萩野の下露ぬれた

風ぞく、たゞいつまでも中居こし元をさして、はすわな小うたぶしにて、小いたづらなる目づかひ、見る人鼻毛をのばしてれんぎをつる事類をしらず、もとすみよしやの大夫なれば、さつそく諸藝あがりさうなものなれども、一斗升にはよけいもいらす、しかのみならずものいはるゝにしだるうて氣のどくと云々」新版役者の花評判、見たてにおいてあやまり多し、中居こしもと役のはすわなる事にはよけれども、上びたるお姫さまごとにあしくかくこと、かゝりもく役者のすべしらぬ作者なり、花評判の作者ばかりかしこうて京の者はあはうか、日本ひろしといへども京ほど目だかなるところがなければ京のものはかしこうて上手を上手としれども花評判が何やらである

柳亭曰、此冊子は前の【役者大鑑】を増してところ

どころに入木したるもの也大かゝみに見えたるは

こゝに略、前の上々を入木して上々吉と、佐馬を入

木して澤之、目次に江戸とあり

【江戸役者談合衝】

元禄十三年三
月刻正本局板

上々吉



萩野澤之

彦八も蹴あげ請あげ持はこび 巴人」是は廻文百
韻にてたしかにきこえがたけれどまづこゝろみに書
のせおきぬ

○萩野澤之丞

【諸國落昔咄】元祿十一
年印本「頃は元祿四年末の年の事なり

しが、都四條川原山下半左衛門が座本、其頃萩野さま
之丞といふ女形をかゝへて嫁かゝみといへる狂言を
しける、をりふしことの外はやりていかい座本の仕
合、まづはさまの丞の顔かたち人にすぐれて、物ごし
といひ、げいぶり上手ゆゑに男女ともにをぎぎな
り、しかるに角山といふ俳諧師よめり

萩の風都の内にははせて形さまよしと見るは山下

又露程がよめり

狂言のそのありさまは上手とて都座のものいかいじまだ

【大和莊子】元祿十五年印
本都之錦著五の巻「此春江戸から歸り新

參萩野左馬之丞が山下半左衛門芝居に出て新嫁鏡と
いふ狂言を勤、京女郎の白い顔をくわつと赤くする

事度々なり 錦自注、左馬之丞事、江戸にては澤之丞と申候へども、
京へかへりては昔の名にあらため申候、又十二才に芝

居の畫
あり、

【役者大鑑】元祿五
年印本



今の上々若女がた萩野左馬之

丞」前評に曰、此人大坂荒木座にて久々のつとめ、し
かも大夫號を取て其名高し、しかれども大坂にては
さのみ上手といふ取さたもなかりしが、京にての評
判あたかも山の如く、死んだ吉彌にもまさる近年の
出来役者、面てい飛きりといふにはあらねども、さの
み難をいふ程にもあらず、諸藝身のとりまはし利口
なりと、ひせんかさをあつゆにてたでるにひとし、か
つて興次兵衛に付そひ、手おひのしよさをけいこし
られたるゆゑにや、よめかゝみの手おひのしよさ、さ
りとはできものなり、近年若女形の手おひといふ事
を見たことなければ、諸人めづらしく思ふゆゑ、いよ
いよかんじいりました、ある人の曰興次兵衛が非人
の手おひと見くらぶるに、興次兵衛はあまりうつり
すぎてすさまじく見ゆるゆゑ、女中方がいやがる、そ
れゆゑよめかゝみの大はやり十年此かたの金まうけ
云々

前評に手おひをほめたるはいやといはれねども、面
てい飛きりといふにはあらねども、さのみ難をいふ
程にもあらずと書事はあやまりなり、そのゆゑはい
かにといふに、此人面ていいかにもあいきやうあつ

をかきかはりたる事を見て段々知らせよとのいひつけ、いやながら家主の事なれば此間諸國をまはる云々」前に五郎兵衛といひ後に露休といふを以て露休と五郎兵衛は同人なるを思ふべし【井戸車】元禄十二年印本といふ冊子に露休が辻咄の圖あり近年此さうしを得たり【露休はなし】五冊あり、彼が名を借て後人のつくろしさうしなるべし正徳二年の刊行なり【露の五郎兵衛新ばなし】竹本氏藏本、表紙裏に五郎兵衛の書像あり、かたはらに俗名露の五郎兵衛戒名露休行年六十九歳とあり、元禄十六年歿したれば六十一歳なり横本也、大坂平の町三丁目象牙屋三郎兵衛板寶永五年子正月とあり「彦八は難波の産なり、かの五郎兵衛の類にてかる口咄しに名あり、彦八が著したるかる口ばなしの冊子【御前男】案に元禄末の印本なるべしの序に「此頃京都へのぼりけるに都の若き衆、何んと彦八難波にあたらしき事はないかうけたまはらん、さればゆふべ淀川にて水が物申しました、何と〜といへば、若き衆聞たまへ水が物いふ不思議にあらず、この都には露がはなしをするとおほせらるゝ」案に元禄の頃五郎兵衛は老年、彦八は盛年にて正徳の頃迄は世に

ありしなるべし、又【風流連三味線】寶永元年印本に大坂の事をいへる條に「道頓堀、生玉、天王寺、或は高津、新町、風呂茶や行くさき〜」のあそび所、西口の太平記の講釋彦八が咄しも同じ事ばかり聞あいたと思へば云々【棠大門屋敷】寶永二年印本錦文流著に「此所に生玉を移し芝能、萬歳、彦八、祭文、其外小人形のあやづり、薙舞臺の藝盡をさせ云々【入子枕】正徳二年印本に「當世のはやり物、正法寺の日親上人もよい場所におられて生玉のもどり足、萬歳、彦八についやしたるあまり、錢を十二灯に包み云々」かくあればおほくは生玉にて辻咄しをせしなるべし、今も難波にては辻咄をなすものを惣て彦八といふとぞ、又紀の海音が作の淨瑠璃【傾城國性爺】正徳三年四段目島原の事をいふ條に「きやうらんりうのそゝりのげい、せりつけむしんはあふむりう、ゆるめてとるのはぐわんさいりう、彦八おとし露おとし、やしうあふしう、せきしうも、こでかひてのいきほひつよく」といふ事見えたりきやうらん未考、あふむ、願西は太鞍持なり、彦八はならべいふ、露おとしとは彼五郎兵衛なること論なし【續誰が家】寶永七年印本百里撰むだ藏昔しかむ樂段 卜宅」

足薪翁記卷之一

○露の五郎兵衛 彦八

柳亭種彦

露の五郎兵衛の傳は【奇跡考】に見えたれど法体して露休と名をあらためし事と歿年の事を脱せり、彼書に漏たるをニツ三ツ書載ておきつ

【好色訓蒙圖彙】貞享三年印本 吉田半兵衛著 賤き男の物語に「きのう

もおれは一日茶わかして相借家をようだ、こちらの長家には藝者のあつまりちや、先ツかうなん、丸之助、きね藏、露の五郎兵衛、せつきやうでも放家はうかでも見あき聞あきてあんず」といふ事を載たり、かうなん、丸之助、きね藏は説經、放家の類なるべけれど未考、又

【二休ばなし】

貞享五年の印本

「百貫圓持たる人も色ぐるひする時は露の五郎兵衛が手代となる事遠からず」【産

毛】元禄年間印本 雲風子林鴻著

四條川原の事をいふ條に「林清が歌念佛、肩を裾よとむすびたる能芝居、太平記よみ、謠の

講釋、露の五郎兵衛が夜談義、大的的小的揚弓の射場からくり的に鬼の出るところ云々、

【花の雲】

元禄十五年印本

【産毛】

秋季にもなるかよ露の五郎兵衛

菰沼【類柑子】

この空の碁盤の目もりさだめなき」命にかゝる五郎兵衛の露 其角」これ等五郎兵衛の現在中の句なるべし【輕口置土産】の序に「四條川原の夕涼、萬日

の回向、こゝかしこの開帳場に、場とりし數萬の聴衆に腹筋をよらす都の名物入道露休、過にし元禄の末

の秋、閻浮を去りし追善に露休が一生の咄の控帳をくりひろげ、いまだ世間の人に笑はせぬ話をととりあ

つめ、ふるきは撰り捨て、あたらしきをひろひよせて露休置土産と名付全部五巻とし云々」此冊子寶永四

年の印本なり元禄末の年とあるは元禄十六年なるべし【錢龍賦】寶永二年印 本百里撰 茶俵をむくる後ろのかんこ鳥

序合「露休ととへば近い頃死す 朝叟」野傾今様梓弓】寶永五年印 本如麟著 一の巻あるもの、夢に、世をさりし挽久

が來りて告る詞に「我は聞及び給ふらん難波の挽久なり、色道に身をうる身は横堀の水の泡と消ぬれど

曲三味線にのせたる通り此道の魔界に落入 今は天氣天に住居をなし露の五郎兵衛が借屋を假、平野屋

徳兵衛と相住ひにして世の人の浮氣を見すまし心中をつのらす商賣、さりとはいそがしい身なるが露休

もあの方にてかる口ばなし段々仕盡し、我に此界に

足薪翁記目次

卷之一

一露の五郎兵衛彦八	二
一萩野澤之丞	四
一湯屋の看板	九
一すみに雀	一一
一しめり茶磨 <small>かさ</small> の雪	一二
一かる口ばなし	一二
一駒形の鯉	一四
一大女房 <small>附、蛇つかひ</small>	一四
一三官館	一六
一吉野のお山	一七
一庄兵衛のばいさま	一九
一塗笠	二〇
一菅笠 <small>加賀笠</small>	二一
一とりんばう <small>ばうといふ考種々</small>	二三
一十團子	三〇
一愚なる者の異名	三二
卷之二	

一尼が紅粉	三三
一獨狂言	三五
一孔雀大夫	三五
一盃を疊へしたむ	三六
一十筋右衛門	三七
一日傘	三八
一煎餅屋 <small>もちやか</small>	三九
一京江戸順禮 <small>んげん</small>	四〇
一奴詞	四二
一兵庫 <small>島田</small>	四四
一籠屋看板 <small>鯨袖口</small>	四六
一桃の繪櫃 <small>菊の繪櫃</small>	四六
一つゝじのはやる事	四八
一長者教	五〇
一酒中花	五一
一幽禪扇	五一
一安阿彌の作井市守長者	五三
一鯨帶	五五
卷之三	
一玉川主膳	五六

一錢獨樂	五九
一別春が造花	六〇
一犬のさんた	六一
一鳥籠井 <small>樗子</small>	六二
一雛の腕に蛤を用ふる事 <small>町難</small>	六三
一酢の看板	六三
一十六むさし	六七
一縫簿屋の松	六八
一淨瑠璃節	六九
一蠅取蛛	七一
一おたま杓子	七二
一梵天國	七三
一させるの竿	七六
一外良右近	七七
一隆達が小歌	七九
足薪翁記目次終	



百家說林續編下卷之二

目錄

足薪翁記	一頁
柳亭記	八十二頁
柳亭筆記	百四十七頁
柳菴隨筆初編	二百四十七頁
柳菴隨筆	二百六十七頁
梅窓筆記	五百四頁
以上	

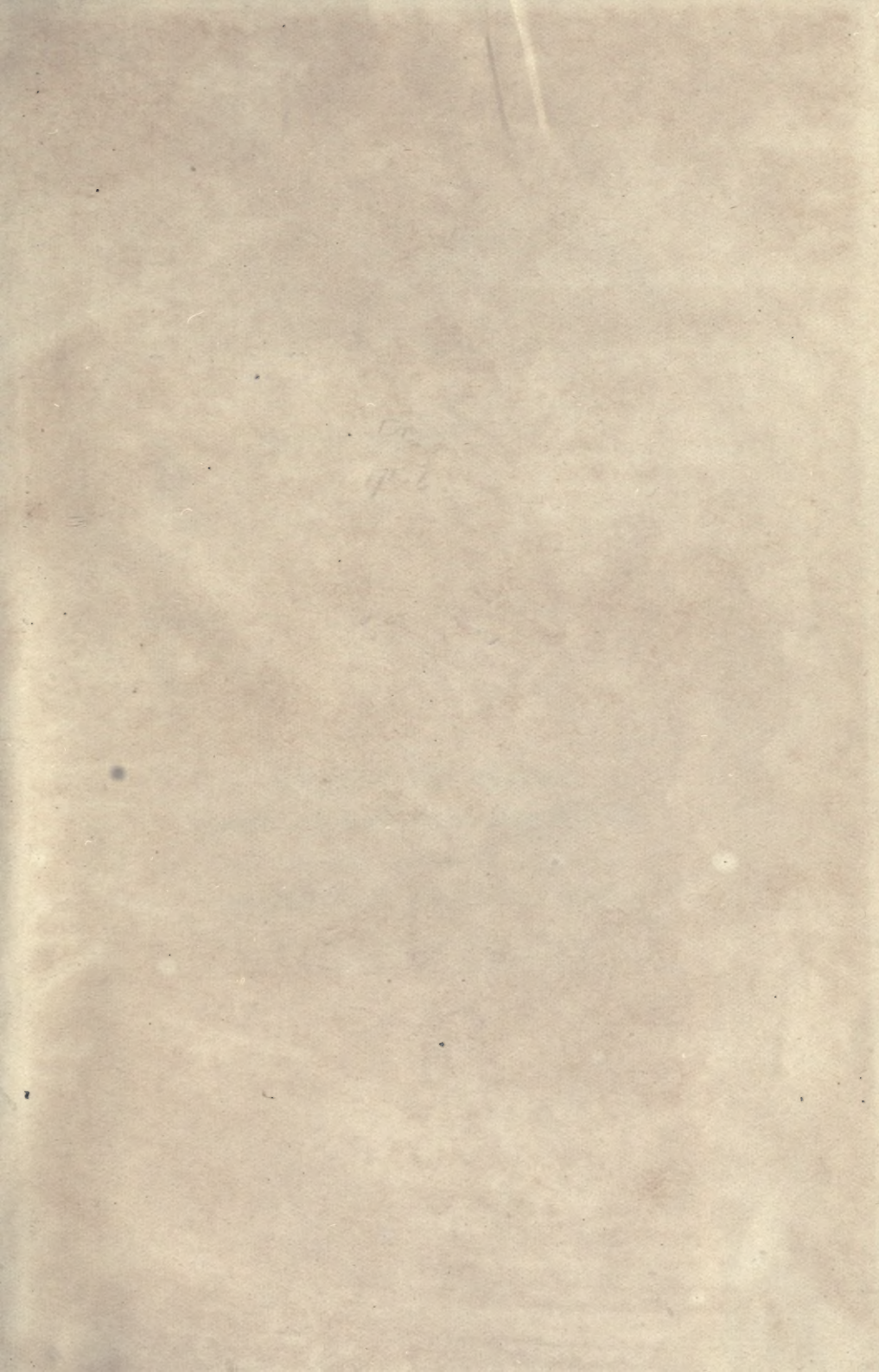


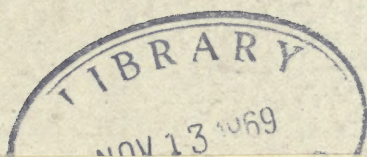
PL
772
H9
1905
v.6



百家說林

續編下二





PL Hyakka zeirin
772
H9
1905
v.6

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
